

主水（もんど）が突く！

寅好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中村主水は、裏の世界でも屈指の仕事人であった。しかし、その最後はあつけないものであった。

痴情の纏れにより、女に刺され、炎上する敵のアジトで最期を迎える。

見知らぬ場で目を覚ました主水も、生前から覚悟をしていたように地獄に訪れたと思っていた、しかし、そこは……………

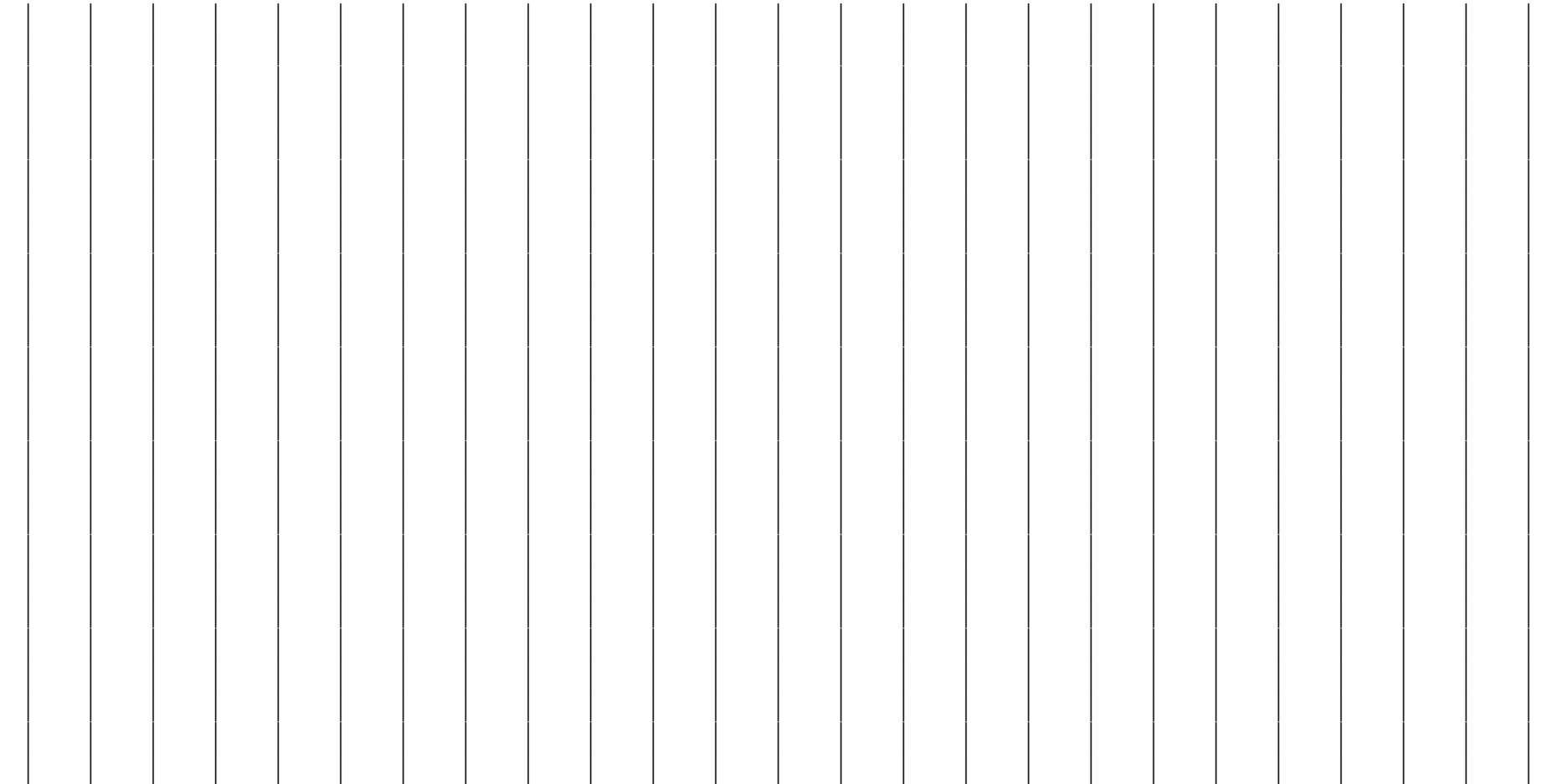
新たな世界で中村主水は何を為すのか。

アカメが斬る！と必殺仕事人中村主水のクロスオーバーです。

目次

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
143	137	130	124	118	111	106	100	94	87	81	74	68	62	55	49	43	37	30	24	16	11	6	1

第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話

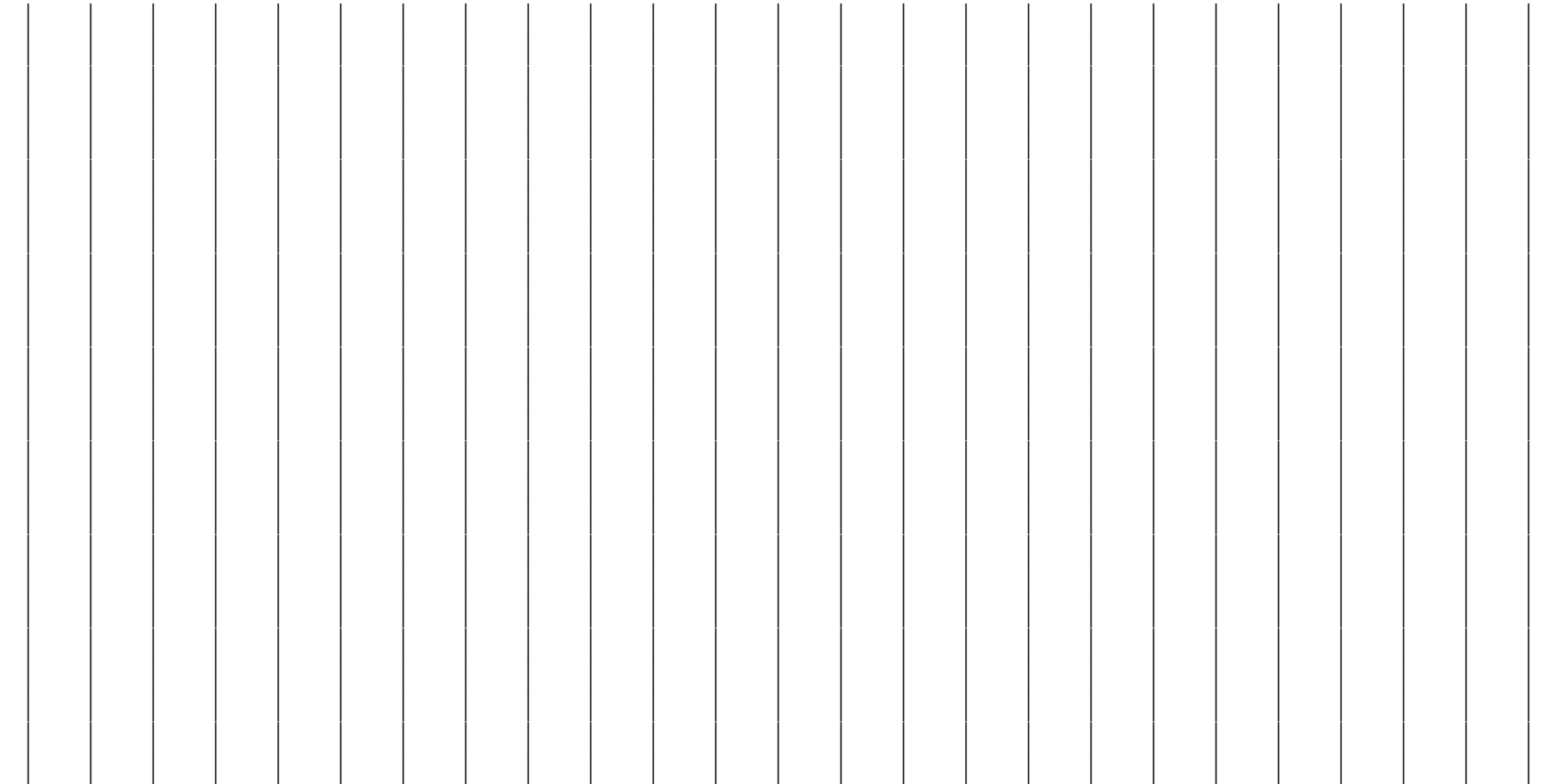


306 299 292 284 278 272 264 256 248 242 235 229 223 218 211 205 198 192 186 180 173 167 160 155 149

第74話 第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話 第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話 第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話 第51話 第50話

474 470 464 454 447 439 432 424 418 412 406 400 394 388 381 375 369 362 355 349 341 335 328 319 312

第99話 第98話 第97話 第96話 第95話 第94話 第93話 第92話 第91話 第90話 第89話 第88話 第87話 第86話 第85話 第84話 第83話 第82話 第81話 第80話 第79話 第78話 第77話 第76話 第75話



656 646 633 624 618 613 607 601 595 588 580 573 565 559 552 543 536 528 520 514 508 501 495 486 480

相見える切り札と切り札	820
姉妹の結末	813
駆け引き無用	809
主水、覚悟を問う	805
第120話	800
第119話	793
第118話	786
第117話	779
第116話	773
第115話	765
第114話	757
第113話	751
第112話	744
第111話	738
第110話	731
第109話	725
第108話	720
第107話	714
第106話	709
第105話	702
第104話	695
第103話	688
第102話	681
第101話	671
第100話	663

剛劍對剛拳
渦卷く陰謀

830 824

第1話

辺り一面が燃え盛り、息をするだけで寿命が縮まるほどの状況が広がっている。

そんな中、中村主水は意識が朦朧とした状態で床に倒れ伏していた。

「ちつまさかお千代に刺されるとはな……」

腹部から流れ出る血液の生温さ、そして、ジワジワと迫り来る炎の熱気。

今まで幾多の悪人に加えてきた『死』が確実に主水にも迫っていた。「焼きが回ったもんだ……しかし仕方ねえな。仕事人になった時にいつ死んでもいいという覚悟はしてきたからな……」

すでに主水の感覚は1つずつ失われ、視覚、痛覚が失われていた。

「目の前は漆黒の闇か……これから俺が行く地獄もこうなのかもな」見えなくなつた瞳を見開くが、何も見えない、このまま意識も途絶えるのだらうと覚悟を決めていた。

しかし、次の瞬間目の前に一陣の光が現れる。

「光か……この世に未練はないが、地獄の沙汰も金しだいって言うしな。貰っていくか」

朦朧とした意識、動かないはずの腕を目一杯伸ばそうとする。

（腕が動いた！）

あと一尺、あと一寸、光に手が届くと同時に小屋はやけ崩れ、主水の命も絶たれた。

◆◆◆

「うっなんだ!？」

主水の頬に感じる冷たい感触、その違和感で目を醒ます。

「ついてねえな、鳥のフンかよ」

頬にかかった鳥のフンを手拭いで拭い辺りを見回す。

「確か俺はお千代に刺されて、爆発炎上する小屋の中で……」

主水はモヤモヤしたままで記憶を探り、今までの流れを呼び起こす。

「その中で光を掴んだような…」

主水が光を掴んだ右手を見ると、黄金に輝く約二尺程の今までの十手より幾分か長い十手が。

今まで自分が使用していたものとはそもそも物が違う。

神々しさを感じさせるその十手をマジマジと見つめ、徐にかじりついた。

「硬っ…こりゃあ金じゃねえな」

江戸時代において、小判が本物かニセモノかを判断する簡易な方法として、よく噛んで判断していた。

主水はその要領で十手が金でできているんじゃないかとかじった訳である。

何の金属かは分からないが、主水は十手特別な力を感じるが、今は何も分からないので保留ということにした。

しばらく黙り込み今の自分の置かれた状況に思案に耽る。そして行き着いた答えは…

「ここは地獄ってことか。仕事人を始めた時から覚悟していたことだが」

だった。主水は小さくため息を吐く、何百人と殺してきた仕事のプロが、最期は元仕事人とはいえ女に殺されたのだ。

地獄に来たという感慨よりも、その不甲斐なさにため息を漏らしたのだ。

「いつまでもこんなところに居てもしょうがねえ。ちと閻魔様にでも会いに行くかな」

主水は立ち上がると、大きな感覚の違いに違和感を抱き、自分の体を見やる。

「どうしたことだ！若返ってるじゃねえか!!」

着ているものは、着流しに黒い同心羽織、裏の仕事をするときのみに巻く年季のいったマフラー。腰には長年仕事で使用してきた二本挿し、と生前と装束は変わらないものである。

しかし、中身である主水は若返っていたのだ。

姑と妻の日頃からのいびりにより、刻まれた深い皺は消え、才

ネエっっぽい筆頭同心の愚痴を聞きながす為に遠くなつた聴覚等々が良くなり、体は幾多の剣術を極め、皆伝にまで至らしめた、若き日の屈強で均整のとれた最盛期の体に戻っていたのだ。

(あの時は正義に燃えた熱い心があったが、心までは戻ってはいないか…)

若き日の体を見て思う所もあつた主水であつたが、過ぎたことはどうしようもない、と前を向いて歩き出した。

歩き出したのはいいが、その世界は主水に大きな衝撃を与えるものばかりであつた。

見渡す限り舗装され整えられた道路、しっかりと区画整備が施された通路、レンガ造りで色鮮やか、そして三階以上の建物。提灯のような物が釣り下がる鉄製の棒状のもの。

珍しいものや建物がそこらじゅうに溢れていたのだ。

(おいおい、地獄ってえのは、長崎の出島みてえな所だつたんだな)

長崎奉行所で働いていた時のことを思いだし、しばらく感傷に浸る。

興味を引かれた主水は辺りを挙動不審にキョロキョロしながら歩みを進めた。

しばらくすると小さな通路から大通りに出る。

すると、そこには大勢の人が。

(おいおい、マジかよ)

主水の前には、さらに目を疑うような光景が拡がっていた。

生前見た南蛮人が身に付けていた服だったり、西洋甲冑を身につけた兵士、髪型も千差万別で、その色さえも黒一色と言うわけでもなく、様々な色に溢れていた。中には目に優しくない色なども。狸に化かされたような気分には陥る主水であつた。

だが、そう思うのは相手も同様である。

物珍しげな奇異の目が主水に注がれる。

月代(さかやき)だったり鬘であつたり、同心羽織、着流し、はたまた草履であろうか、上から下まで見られている。

「珍しい格好してるな…」

「呉服屋のノブナガみたいだ…」

視線だけでなく、何やらヒソヒソと話す声さえも聞こえる。視線を集中的に浴びせられた主水は、居たたまれない思いを抱えていた。

（まあ、ババアやかかあの視線に比べりやあたいたことないな）

昔蔑んだ視線を姑や嫁が向けてきたことを思いだし、幾ばくか心が和らぎ苦笑いをし先を急いだ。どこという目的地もなく。

（閻魔はいつたい何処にいるんだ…なぜあの世なのに腹がすくんだ…）

日もとうに暮れ始め、夜の帳が辺りに降りようとしていた。

江戸から京都まで歩いたこともある主水にとつて、歩き続けることは然程苦にはならなかったが、なぜか迫り来る空腹には悩まされていた。

そしてこういう時に限っていい匂いも漂って来て、さらに空腹を刺激する。

（武士は食わねど高楊枝無理な話だ）

主水の頭の中には、いつも飽き飽きしていたはずのメザシがとても上手そうに巡っていた。

（もうだめだ…）

ついに主水の空腹も限界を迎え、座りこんでいた。

そんな時だった

「見かけねえ姿しているが、どうしたんだそんな所で？」

声ができる方を見上げると、ガツシリとした体型の大男が。

「腹がへって腹がへって」

「なんだ行き倒れか。それに姿からして田舎から出てきたのか」

大男はフツとため息をつく、ホラよと何かを投げて寄越した。

「これは？」

「これで何か食いな。それと仕事ならあそこで探すといい」

大男はある建物を指差し、

「ただ」

大男は付け足す。

「帝都は地獄だぜ。腐ったやつ吹き溜まりのな」

自嘲気味に笑うと、じゃあなとウインクをし笑顔で去っていった。

(なぜ俺は施しなどしたのだ?)

小さなようで、大きな出会いであった。

(まさに地獄に仏だな。いいやつもいたもんだ。感謝、感謝。まあ俺と同じように血の臭いはしたし同業者みたいだったがな、それに相だな手練れ……地獄はそういうやつ集まる所だ気にしたら負けか)

主水はどれくらい価値があるかは分からないが、人の優しさを深く感じながらももらったお金を元手に、食事を取り、一心地ついていた。(地獄も捨てたもんじゃねえな)

腹をさすりながら、先ほど指示された建物に入る。

狭く空気の悪い所あまり柄の良くない店主が、何かイライラした様子でカウンターに座っている。

「仕事が欲しいんだが」

「まずは一兵卒で雑用からだが」

「構わん」

「じゃあこれを書いて持ってこい」

「名前 中村主水 特技 書庫整理——」

「はいはいじゃあまずは雑用からだな」奉行所や家での雑用に慣れていた主水は問題なく仕事にありつけのだった。

第2話

主水が下働きを初め約一年間が経った。

主水は職についたその日から、昔の同心仲間や上司の筆頭同心が見たら

「中村さん、あなたどこか変なんじゃありませんか？真面目に働かなくて！帰宅して家でしつかり養生してください」

と言うのは間違いがないほど真剣に働いていた。

いつもの昼行灯ぶりがどこへ行ったと言わんばかりに。

やはり、何処であろうと先立つものが必要と強く感じたためである。

それにもし、奉行所と同じようにダラダラと働くというかサボっていたら、せつかく得た仕事を失う憂き目にも合いかねないからだ。

そして、一年間なりふり構わず働いたからこそ、この世界が実際のもので、地獄ではないのではと疑念を持ち始めていた。

また、以前会った大男が言っていた「腐ったやつ吹き溜まり」と言っていた理由も体感していた。「どこの世界も汚ねえ悪党はいるもんだ」と。

ただ、変わったのは主水の思考だけではない。

主水の身分もその働きによりあがっていたのである。

下働きだけでなく、主水は危険種の退治なども自分の力を隠しながら行っていたのである。

以前の危険種退治では。

「土竜が出たぞ!!」

「主水どこへ行く?」

「少し廁へ」

「戦闘中だぞ!」

「申し訳…あつと」

主水は石に躓き転がると共に、主水右手の抜き身の刀が土竜に向かい飛び、頭を貫き一閃した。

土竜は脳髓を散らし、噴水のように血液をぶちまけ生き絶えた。

というようなドジを踏んだふりをして、結果を積み上げていったのだ。

そこから主水はかなりの戦績を残しながらも「運が良い」としか思われずに、実際の力を隠すことができ、実際には強いのかもときえ思うものはいなかったのだ。

で、ついに主水は帝都の警備隊の末端に名を連ねることになった。

「正義の為に行くぞーコロちゃん！ついてこい主水君！」

「待ってくださいいセリユーさん」

主水は帝都警備隊のセリユー・ユビキタスの下に配属されていた。

セリユーは年の頃20代前半であり、顔だちは整っているが、その年に見えない幼さを感じさせる容姿である。

性格としては、正義を深く愛する彼女は純粹だが、その純粹さゆえにどこか妄信的に正義を希求しているのでかなり危ない感じはしたが、主水は嫌いにはなれないでいた。

「セリユーさん今日は何処へ行くんですか」

「今日はね、この帝都を荒らす盗賊団を皆殺しにします！」笑顔でピシッとポーズをとり宣言するセリユー。

（いっちゃってるぜこの嬢ちゃん……）

心ではそう思いながらも

（俺も同じようなものだがな……）

とも思っていたのが、主水が彼女を嫌いにはなれない一つの理由かもしれないと主水も薄々気づいていた。

セリユーと主水が少しばかり裕福そうな家の前になると、10人ほどの大きな荷物を抱えた盗賊団が、血の滴る刃物をぎらつかせ、荷物にしがみつき「返してくれこれがないと老後が…頼む」と懇願する老人に無慈悲に振り下ろしている所であった。

咄嗟にセリユーと主水が止めに入ろうとしたが、間に合わなかった。

二人の目の前で、老人の首が空を飛び鮮血が舞う。

老人の大量の返り血を浴びた盗賊は下卑た笑みを浮かべ刃物に付いた血糊をなめとり、こちらにそれを見せつけるような素振りをとっていた。

「ゆ、許せない!!絶対に許さない!!」

セリユートの顔が狂気に歪む。

(はあ、仕方がねえ殺るか)

主水もかなりの悪逆さにヘドが出ていたので、セリユード程ではないが怒りが込み上げていた。

主水は仕事人として感情を表に出すことを極力押さえていた。

しかしながら、老人や子供のような弱者が虐げられているのには我慢がならない性格でもあった。

「トンファガン!」

セリユートのトンファ型の銃が火を吹く。

盗賊団もさるもので、突然の攻撃も怯まず回避する。

(なかなかやるじゃねえか。だが甘いな)

「コロ!捕食!」

盗賊団が回避をすることをセリユードは読んでいた。

セリユードは帝具を有していた。

帝具とは、始皇帝が国を不滅にするために、叡智を結集して作られた兵器である。

伝説と言われた超危険種の素材、神から賜ったオリハルコンやそれ以外のレアメタル、世界の名だたる名工や職人達。

それらを結集し、現代の技術でも到底なしえない48の兵器のことである。

そして彼女は48の兵器の中の一つ、生物型帝具へ〈カトンケイル〉を有していた。

普段の見た目は30センチほどのヌイグルミのように愛らしい姿だが、いざ戦いで主の命を受けると二メートルほどの巨体に膨れ上がり、戦うというものである。

そして、今主であるセリユードから命が出されたのだ。

コロはサメのように二段に生え揃った牙を剥き出しにし、銃弾を回

避け安心しきった盗賊団を食い千切りつくした。

盗賊団10名は断末魔を上げるもの、断末魔をあげることさえ叶わず食い殺されるもの、10名全てが命をたたれた。

辺りに広がる血の海、血の海に浮かぶ、食い散らかされた残骸、それは、おぞましいとしか形容できない地獄の光景であった。

見るもの全てに畏怖を感じさせるその様を、セリユーは満面の笑顔で見つめていた。

(俺はやることなかったか。それはいいが……)

主水は横目で満面の笑顔で惨劇を見守るセリユーを確認すると、そのまま痛々しそうに目を反らした。

セリユーの過去の話を聞いていたからこそ、不憫に思われていた。

「セリユーの尊敬する父親が凶族に殺され殉職した」という。

それから悪人を恨み、悪人を殺し正義を行うことがセリユーの義務となっていた。

「パパ…私凶族を皆殺しにしたよ！正義の名のもとに裁きを加えたよ！」

子供が親に甘えるようにセリユーは天に向かって何度も、何度も話かけていた。

返事は返ることはないのに。

あの一件から月日が立ち、相も変わらず凄惨な事件を凄惨な終わらせ方をしてきた。

そして主水にとって人生を大きく返る大きな事件が迫っていた。

「いつも私がおかする前に事件は終わっているんで私は行かなくてもよいような気がしないでもないですが、一応聞いておきます。今日は何処へ行くんですか？いつもより人員が多いようですが」

「今日はね、手配された殺し屋集団へナイトレイドが襲撃しにくるとたれ込みがあった所の警護の役目よ。一人残らず皆殺しにするわよ」

(ナイトレイドか……)

主水もしばしば聞き及んでいた名前だ。

聞いた所によると、法で裁けない恨むべき相手を、金で殺しを請け

負うという集団であるということだ。

それを聞いた主水は仕事人と同じだという驚きこそあれ、その存在には驚くことはなかった。

主水も何度もこの帝都での闇を見てきたからである。

権力や金をばらまき、悪どいことをする者。

弱者を虐げ快感に酔いしれる者。

仕事人が生まれるのも当然の世界であった。

主水の心うちは複雑な感情に満たされていた。

主水は気持ち晴れないまま、配置されることになった。

「まさか、屋敷の外の堀沿いだとは……まあ気乗りしない仕事だった
しいいか」

主水はまだ警備隊のしたっぱであり、重要な場を護らせられることはなかった。

一番ナイトレイドとは関わりにくい場所であるとも言えた。

(夜は冷えるな)

だからこそ、主水は気が抜けていた。

そんな時だった。

「ナ、ナイトレイドが出た——ガハッ!!」

「奴ら裏へ回ったぞ!!」

「殺——ゲハッ!!」

追う声と悲痛な叫び声が着実に大きくなり、主水の近くに近づいていることが分かる。

(ここなら大丈夫と思ったが、来なすったか…)

スツと主水が立ち上がった刹那、主水の目の前に大小6人の黒い影が現れていた。

第3話

暗闇であろうと、面と向き合い対峙しただけで分かる双方の力。ここで先に動くのは危険。それは双方共に分かっていることである。

しかし、ナイトレイドの6人は今追われている状況だ。

ナイトレイドのピンク髪でツインテールの少女が焦れたように動いた。

「ターゲットじゃないけど、姿見られたし、邪魔だから排除させてもらうわよ」

巨大な銃のような物を向け、言うや否や三つの発砲音、刹那放たれる三つの弾丸。

闇を切り裂く弾丸が主水を襲う。

(ちっいきなりかよ。焦っているから仕方ないか。それに仕事を見られたら、見た者は殺すのが鉄則だ)

腰の帯に挿した黄金の十手を振るう。

闇を振り払う黄金の一閃。

弾いた弾丸が周辺の地面と後方の壁に突き刺さる。

「嘘でしょーこの暗闇とこの至近距離で弾を弾いた!!」

驚きの声と着弾の音が第二次ラウンドの鐘となる。

「私が行く。ターゲットじゃないけど邪魔者は排除する」

一陣の風が吹き付けるように、闇に溶ける黒髪と黒い様相の少女が主水の眼前に現れていた。

(中々のスピードだ)

強烈な踏み込みから そのスピードを乗せ五月雨のような突きの嵐が。

目で捉えることさえ難しいレベルの突きではあるが、幾多の修羅場を切り抜けてきた主水にとって、避けるのだけなら問題はなかった。

必要最小限の動きで身を翻しかわす。

少女は突きからすれ違おうと同時に刃を返し、時計回りに横風ぎの刀が迫る。

(身のこなしも良いだが)

妖艶な紫電の輝きを放ちながら迫る刀を十手の鉤に引っ掛け十手を返す。

テコの原理により、少女の刀が手から落ち宙を舞う。

「!!」

間近に見えた少女の顔に驚きの色が浮かぶ。

岡っ引きや同心、与力が刃物をもった相手を捕縛するために考案された十手術。

不殺の捕縛を成し遂げるための様々な工夫が為されている。

主水が表の仕事で用いていたものである。

追撃を恐れ少女は素早く身を翻し、バックステップを踏み仲間の元に戻る。

「まさかアカメが競り負けるとは……こうなったら皆行くよ」

「待てー!」

このままでは、本当に6人全てを相手しなくてはならなくなる。

今の少女だけでも手こずったのに、同じかもしくはそれ以上の技量を持ちうる者をしかも複数人も相手をするのは、いくら体があってももつはずがない。

それに、主水としてはたしかにナイトレイドの技量を知れたらとは思ってはいたが、それは二の次、今は別の目的があった。

「俺はお前達と戦いたい訳ではない」

「どういうことだい」

顔は見えないが、かなりメリハリが効いた体を持っている女性(主に胸)が、他のメンバーを制し食いついた。

「少しお前達に興味があつてな。まあ話をしたいのには山々なんだが、今はお前たちの状況がそれを許さないだろう。今は俺の横を過ぎて逃げる。俺が後はどうにかする」

「おい信用できるはずないだろ!」

「そうだね私も信用できないね」

小柄な男に続き、スタイルが良い、もとい巨乳の女性もバツサリと切り捨てる。

(仕方ねえか)

主水は頭を掻きながら、最後の手を打った。

「じゃあこれならどうだ。俺はあんたらの仲間の内のそのデカイ鎧の兄ちゃんに借りがあつてな、それを返すためというのは」

主水が鎧で身を固めている男を指差しながら話す。

そう、以前行き倒れていた主水に施しをしてくれた男だと主水は看破していた。

見た目では分からないが、ヒシヒシと感じられるたぐいまれな力量から同一人物であると看破していた。

メンバーの視線が男に向かう。

「ブライトあいつの言っているのは本当なのかい」

「参つたな見抜かれていたか。ああそうだ言っている通りだ」

男は素直に頷いた。そして続ける。

「やつには騙している感じもしないし、悪いやつとも思えねえ。信じてもいいんじゃないかねえか」

男の話で澁々ながらどうやら納得したようだった。

「どうでもいいが。追っ手が迫ってきてるぞ」

耳をすますと、多くの警備隊が鎧を揺らしながら走ってくる音が近づいている。

ものの数秒もすればここに到達するだろう。

「ここはブライトを信じて皆行くよー!」

巨乳の女性の一声でその場のメンバーが一斉に走り出した。

横を過ぎ去る際に、鎧を着こんだ男が鎧の中でウイंकをしてきた感じがして、主水の背中を冷や汗が流れるのを感じていた。

「よし、行ったな。じゃあ俺は」

主水はその場に腰を降ろす。

その直後。多くの轟くような足音が、追手であるのは明らかだった。

「そこにいるのは誰だ」

先頭に行く男が尋ねる。

「はい、私はセリユーさんの元で警備隊をやらせてもらっている中村

主水と言います」

「では中村。ここに賊が来たはずだどこへ行った」

「私を見て向こうに走っていききました」

主水はナイトレイドが走り去った先とは真逆を示す。打ち合わせ通りの行動だった。

「そうか。俺に続け！」

「お待ちください」

「なんだまだ何かあるのか？」

「あまりの恐怖に腰が抜けてしまっていて助けていただけませんか」

「ふざけるな腑抜けが、そこで寝ている！俺に続け！」

怒りが交じった声色で怒号を飛ばすと警備隊は主水により指示された、ナイトレイドと逆方向に走っていった。

「これでいいだろ巨乳の姉ちゃん」

主水は立ち上がり、振り返ることもせず暗闇に語りかけた。

「なんだい気配を消してたのに気づいていたのかい」

物陰からヤレヤレといった感じで巨乳の女性が姿を表す。

「ああ、気配察知は以前の仕事では必要な技術だったんでね。で、もう

安心しただろ。早くお前も逃げた方がいいんじゃないか」

「ああそうだね。あんた大した役者だねえ。私はあんたのこと気に入ったよ。またな」

巨乳の女性は闇に消えた。

「今のこと知れたらお叱りを受けそうだな。構わんか今までどれだけ俺が叱られてきたか。それに比べりゃあ今回ぐらい」

一人ごちた後主水は、闇夜を黄金で照らす十手を、帯から抜きマジマジと見つめた。

（初めて実戦で使ったのに何年も使い込んだ十手のように、まるで自分の体の一部のように使えた）

主水は驚いていた。突然仕掛けられ、普通だったら使いなれた刀を抜くのが一般的であったが、今回は無意識に十手を手にしていた。

確かに傷つける意志がなかったため無意識に判断したのかもしれないが。

しかし、新たな十手は長さ2尺（約60センチ）であり、元の十手は1尺2寸（約36センチ）と扱いなれておらず、無意識であろうとも、危機意識が強い自分ならば、慣れないものは使わないだろうというのが主水自身の考えであった。

故に主水にとつての驚きが大きかったのだ。

（まあいずれ何か分かるだろう）

主水は前向きにそして楽観的に考え、再度この黄金の十手に関しては保留ということに帯に戻した。「どうだった主水君」

突如背後からかけられる明るい声。

予想通りそこにはセリユーがやって来ていた。

主水は今回の一件は伝わっていないことに安堵した。

そして、セリユーは悪に対して苛烈なまでに反応するため、取り逃がした（逃がしたのだが）とは伝えるべきではないと判断し

「このような所にはやはり現れませんでした」

となんとかはぐらかしておいた。

「そうか。また明日からも悪人を皆殺しにしないとイケないから今日はもう上がらせてもらおうか」

「いいんですか？」

「いいよ、いいよ。私が隊長に言っておくから。おやすみー」

セリユーは笑顔で去っていった。

悪人を相手にしていなければ、普通の娘なのだが。悪人に対する憎しみも、人が変わるほどの豹変も少なからずこの腐った世界の影響であり、彼女も被害者ではないのかと主水はセリユーの走り去っていく後ろ姿をぼんやりと見つめながら考えていた。

幾度も仲間に深入りし過ぎて後悔してきた主水が、再びセリユーに無意識にも深入りし始めたのは、後々大きな問題になり得るのだった。

そして、主水の今後の人生の転機となる大きな1日が幕を閉じた。

第4話

あの壮絶な一夜を乗り越えて主水はいつも通り帝都の警備をしていた。

この一年と違いダラダラと、そして少し落ち着かない様子で。

(おいおいどういうことなんだ？なぜあの巨乳の姉ちゃんに見張られないきやならないんだ……)

主水が今日出仕してからずとつけられ、そして見張られていた。付かず離れず。

そうナイトレイドの一人に。

(いつまで、何の目的でこんなこと続けるんだ?)

主水は深いため息をつき、ダラダラと警備という名の市中徘徊を続けていた。

「困っている人はっけーん！正義光を照らすために行くよーコロちゃん！主水君！」

どこからか急に現れたセリユーが走っていく。

主水はさらに深いため息をつきそれに続いた。

離れた所から何やら叫び声に似た男の泣きじやくった声が。面倒くさいことに巻き込まれそうで、本当は放っておきたかった主水であるが、セリユーが既に向かってしまったため嫌々向かう。

主水がセリユーに追い付くと、セリユーはなにやら顔を赤くして目を反らしている。

泣きじやくった男はパンツ一丁の半裸の姿だった。

「も、主水君お願いできるかな？」

セリユーはあまり男の裸に慣れていないようである。

「いいですよ」

主水は渋々男に声をかける。

「おい、お前。こんな所でなに泣いてんだ？」

「ちつオヤジかよ。あの綺麗な姉ちゃんの——」

「三途の川渡るか？」

主水は既に抜き身の刀を男の首に当てがっていた。

「す、すいません」

「次はねえぞ」

主水は刀を鞘に納める。どことなく残念そうな顔で。

「で、何があった」

「博打で——」

「自業自得だ。家へ帰れアホが！」

一刀両断した。

同心として働いていた時もこの手合いの訴えは門前払いしてきた。決して面倒だからではない。

「ま、待ってください。そうは言ってもイカサマなんですよ」

「見抜けねえお前が悪い。帰んな」

「ひどいよ主水君！」

いつの間にか背後に立っていたセリユーが非難の声を上げる。

「そ、そうですよね。お姉さん」

「うん。安心して、私が皆殺しにしてあげるから」

セリユーの発言を聞き、背筋に冷たいものが走る。今まではほとんど口出したことがなかった主水だが、さすがに今回は口出しをしなくてはならなかった。

「セリユーさん。イカサマぐらいで死刑はさすがにないと思います」

「えつなに言ってるの主水君。悪いことしたら死ななくちゃ」

セリユーは真顔で答える。

その姿にはさすがの主水も呆気に取られた。

彼女の観念では重い軽いに関わらず『悪』||『死』であった。

この時主水には、セリユーの観念を正さなくては後々大変な事態を招き兼ねないという強い不安が心に芽生えていた。

「それは駄目だ。いくらなんでも重すぎだ」

主水の口調は無意識の内に強くなっていた。

「えっ!?!じゃあどれくらいならいいの?」

普段見せたことのない主水の一面に気圧されたセリユーが折れた。

「まあ、指の一本か二本が相場ですね」

「軽い気もするけど主水君が言うなら…」

「ちっ」

セリユーは弱々しくもそれを了承をした。

それに呼応するかのように響いた舌打ちは今後の波乱を予言していた。

◆◆◆◆◆

「この賭場です」

男に案内され、主水とセリユーが賭場に至る。

賭場は日本の江戸時代ならば、藩邸や大柵の別邸など役人が立ち入れない場所で開催されていた。

ご多分に漏れず、その場所も貴族の屋敷であった。

(……)

主水の眉間に皺がよる。

何かしら疑問を抱いたらしいが、男もセリユーも主水の変化には気づいてはいなかった。

「セリユーさん少し厠にいきますので待っていてくれます」

「いいよ、ここで待ってるね」

主水は満足げに頷くと、屋敷の中に入っていった。

(いよいよヤツの信憑性が怪しくなってきたな。ここで賭場を開催している組は親父がしっかりしていたから、イカサマなどしないはず)

この世で警備隊に属してから、主水は帝都にある全ての賭場に通い組の性格さえも把握していた。

(だが一応裏を取らんと。しかし、ここに来て俺が自ら裏を取らなくてはならんとはな)

主水の脳裏には裏を取ってくれていた加代の姿が浮かんでいた。

裏とは仕事に掛ける相手が本当に仕事をかけても良いのかを判断するために、証拠を集めることである。

主水も賭場でのイカサマを裏としようとしたのだが、賭場を開催する組を見て疑問を持ち先に入ったのだった。

「こりゃあ旦那今日はどんな御用で？」

「よおフリーいところ。ちよつと聞きたいことがあるんだが」

「セリユー様、主水の旦那は置いて中に入りませんか」

「でも、主水君に待っててって言われたし……」

かれこれ一時間ほど待っても主水が全く戻ってくる気配さえしないので、男は焦れ始めていた。

ただそれ以外にも何かしら焦りを感じているようだがセリユーは全く気づいてはいない。

「悪人達が逃げてしまいます！」

「悪人が逃げる……うん、先に行こう」

悪人というある意味セリユーに取つての禁句が出たため、セリユーは進んで賭場の中に足を踏み入れた。

屋敷内には目を見張る程の豪華な装飾がなされていた。

敷き詰められた赤い絨毯、アンティーク品とも言える部屋を照らすランプ、壁に掛けられた絵画、どれも価値が分からない二人にも高価であり、この賭場がかなりの儲けがあるということ的印象付けるのに十分だった。

「俺たちがイカサマで騙し取られた金で、ここの悪党たちはいい暮らしをしてるんです。金を騙し取られたヤツの中には娘や妻を売ったり、首をくくった者もいるって話です」

「許せない！」

セリユーの表情がわからさまに歪んでいく。悪に対する憎しみがフツフツとセリユーの中で燃え上がっていた。

男はそれを見て、笑みを噛み殺している。

「この先です」

「分かった……」

二人は無言で際奥に位置する賭場の扉を開けた。

部屋の中には多くの客が。

客層的には裕福そうな者が多く、一般的な賭場とは違う雰囲気を感じ出している。

それだけ見れば、分かる者は、ある意味この賭場は裕福な者の社交場的な物と理解できるのだが、セリユーにはその知識がないことと、怒りに燃えているため冷静に考えることができなくなっていた。

「どうなされましたお客様？」

扉の前から動かないセリユーと男に疑問をもった黒服の男が話かけてくる。

「姉さんコイツらです。俺たちをイカサマで嵌めて苦しめているのは」

「悪は絶対に許さない!!コロ皆殺しよ!!」

怒りで歪んだ表情で、『死刑』の断を下す。

コロの体が膨れ上がり、巨大な今まで何百と悪人を食い殺した口を開く。

「ひっ!!」

コロの異様な姿に黒服の男が腰を抜かす。

部屋中の客や胴元も異変に気づき、大騒ぎに陥る。

だが、その喧騒さえもセリユーには聞こえていないのか、静かに顔を歪めて男を睨み付けている。

男は死神に見いられたように動けない。

そして、断罪者たるコロは唾液を散らしながら、男に『死』を運ぶ——はずだった。

食い殺そうとしたコロの顔面が大きくひしゃげ、まるでピンポン玉のように勢いよく吹き飛び、壁をぶち抜き、屋外に吹き飛んだ。

「待っていてくださいといったはずですよセリユーさん」

黄金の十手を右手に携えた主水が、あまりの恐怖に意識を失って倒れている男の前に立っていた。

その表情はいつもの剽軽さも、怒りも、感情さえも伺えない無表情である。

「で、でも主水君が帰ってこなかったから」

主水の顔を見たセリユーからは底知れね本能的に感じる恐怖から怒りさえも失われ、まるで、怒られた子供が親に謝罪するかのよう、うつむきボソボソと呟くように話した。

「確かに私が遅れたのは申し訳ありません。しかし、独断で制裁を加えられては困ります。現行犯ならまだしも、この者たちは犯罪など犯していないのですから」

「えっ!!でも……」

セリユーは主水の言葉に混乱しながらも反論するかのようになり、華美に装飾された部屋内を見る。

これが悪事の証拠だと言わんばかりに。

「この賭場は花会、つまり臨時のもので。貴族や裕福な者に娯楽を提供するために、貴族の屋敷を使ったのです」

「そ、そうだったの……」

セリユーの声が消え入りそうに弱々しくになる。

「ええ。そのためこの賭場では身ぐるみを剥ぐほどのことはありませんし、調べた所イカサマの類いは発見できませんでした」

主水は懐から何かが詰まった袋を取り出すと、中身をぶちまける。

床に転がる裁断された賽子の残骸。

「用意されていたもの全てを調べましたがこの通り細工はありません。そして」

主水は先程まで使われていた賽子を手に取り、宙に投げる。

刹那抜き放たれた主水の刃が煌めく。

あまりにも早い、刹那の閃き。

落ち真つ二つになった賽子もイカサマなどなかった。

「つまり貴女は無実な者を手にかけてしようとしたのですよ」

主水は抑揚のない声で、突き放すようにセリユーに宣言した。

セリユーは青ざめ、床に頭をつけて涙を流した。

正義を重んずる自分が罪を犯しかけたという重たい真実にうちひしがれて。

◆◆◆

「クソッ、あの女に全員ぶち殺させるつもりだったのに」

暗闇を走る男。

セリユーに主水が真実を話していた時に隙をついて逃げ出していた。

「汚ねえ野郎だな」

「!!」

男の進行方向の暗闇から響く声。

「なんでテメエがここに!!」

「少し用事があつてな」

「用事だと?」

暗い闇の中にいる主水に問いかける。

刹那

「お前の命を頂くという用事がな!」

「ガハッ!」

主水のゾクリとするほどの底冷えのする声が耳元で聞こえたその刹那、男の胸から月光を浴び煌めき、鮮血を巻き上げる刃が。

「う…嘘を…ついただけで…この仕打ちかよ…軽い罪は…許すんじゃないかったのかよ」

途切れ途切れに男は呟く。

「それだけじゃねえだろ。謝罪は閻魔様ん所でするんだな」

主水が刃を更につき入れると、男は痙攣したかのようにピクピクした後絶命した。

それは屋敷の中で顔見知りのフリーという男に出会った後の話。

「あいつを見ろフリー。おめえはヤツを知らないか。俺たちをけしかけようとしやがってるんだがよ」

「あ、あいつは…」

フリーは顔を怒りに歪め、ポツリポツリ話すらそうに語り出した。

「あいつは家の組で御法度とされていた、アヘンを捌いてたんで、親父の怒りをもって制裁を加えられた後に簀巻きにされて放り出されたんですよ」

「アヘンか…」

「へい…旦那ついてきてくたせえ」

フリーに招かれ近くの建物に入る。

「こ、こりゃあ…」

主水の目の前にいつか主水が遊廓で目の当たりにした、地獄の様相が広がっていた。

のたうち回る多くの女。涎を滴ながらアヘン、アヘンと呟く者、何

も存在しない所に話かける者、苦しみにもがき苦しむ者、すでに息を引き取った者。あまりにも凄惨で、主水さえも目を背けたくなる状況だった。

「家の組に属していたヤツがしでかしたことなんで、家で面倒を見ようということになりました…」

「…」

主水も返す言葉がなく無言でいると、袖が下から引っ張られる。

主水が視線を下に向けると、足下に女が。

「どうしたんだ？」

主水は腰を下ろし、女の目線に合わせる。

「ん、これで」

女は小さな袋を震える手で主水に渡す。

「これは？」

主水は一目見ただけで中に何が入っているのか、そしてこの女が何を望んでいるのか既に察していた。

「どなたが存じませんが、どうかこれで…私たちの怨みを。…帝都の何処かで金で怨みを張らしてくれる人がいると…聞いたことが…あります…どうか、どうか…」

今まで何度も見てきた光景がそこにあつた。

(どこであろうと俺は殺ることになるんだな)

主水は覚悟を決めたように女に問いかける。いつも言っていたあの台詞を。

「どこの、どいつを殺ってくれとおっしゃるんで？」

女は主水の問いに喜び話すと、痛みと苦しみの中ながら、僅かに微笑んで息を引き取った。

主水は女の瞳を覗かせると、覚悟を決めたように立ち上がる。

この世に仕事人中村主水が生まれた瞬間だった。

第5話

「で、レオーネお前が気になるって言っていたやつだが、どんなやつだった？話してくれ」

とある一室でナイトレイドの巨乳の女性と、片腕が義手となつている女性は椅子に腰掛け、机を挟み話していた。その雰囲気は、重々しいものではなく、和やかなものである。

「素質は完璧です!!」

レオーネは興奮ぎみに話す。

「ほう、お前にそこまで言わせるとな」

義手の女性はレオーネの言葉に微かに笑みを浮かべる。

「それはどのようなことから判断したんだ？」

「凄かったんだよボス。私が朝から見張っていたんだが、終始気づいているみたいいや、気づいていた」

一般的には尾行が気付かれたというのは、恥ずべきものであり、人に話すことではない。しかし、レオーネはさも嬉しそうに、そして、自慢話をするかのように誇らしげに話した。

「ほう、お前の尾行を察しているとはやるな」

ボスと呼ばれた女性もレオーネと同様に嬉しそうな笑みを浮かべ、レオーネに先を話すように促す。

「ああ、気づいていると分かってもついていったんだが、普段はだらけたような感じなんだが、時折見せる洞察力と戦闘力は目を見張る物があったんだ」

「洞察力と戦闘力については前の報告にもあったな」

ボスは机の上にうず高く積まれたレポートの山に手を伸ばし、いくつかのレポートに目を通した後、頷いて一つのレポートを開いた。

「あったあった、これだ。この報告によると、洞察力で言えば、インクルシオを纏ったブライトを看破したというものだな。で、戦闘力については、暗闇でしかも至近距離という中でマインの射撃を的確に弾き、アカメさえ赤子の手を捻るがごとくいなしたというあれか？どちらにも危険種レベルのものだな」

ボスと呼ばれた女性は、感嘆しながらも、義手をキリキリ、キリキリとならしながら、それはもう嬉しそうに話す。

「ああ、それもそうだが、今回もそれ以上の洞察力と戦闘力を見せたんだが、それ以上にナイトレイドにとっての収穫があった」

「それは？」

ボスの口角が自然と上がる。

「やつが悪人を斬ったんだ。躊躇なくね」

「躊躇なくか。私たちに必要なスキルを備えているな」

腕を組み納得したようにボスは頷く。

「そして、今回見た洞察力の凄さは、依頼人の言葉に潜む矛盾を見つけ、自ら真実を導きだしたこと」

「裏を取るのに役立つ能力だな」

「私もそう思う。そして肝心の戦闘力だが」

レオーネは一端区切り、間を置く。早く言いたいのだが、わざわざ溜め、その戦闘を一言で表した。

「見えなかった」

「見えなかった？」

レオーネが自慢気に話すことに訝しげにボスは聞き返す。何を言っているのか分からないという風ではなく、驚き聞き返したという感じだ。

「ターゲットの前にいたと思ったら、いつの間にか後ろを取り、直後ターゲットの心臓を刀で貫いていたんだ」

「お前が見失うとはな、面白い」

ボスは喜び椅子が倒れるほどの勢いで立ち上がると、ポールに掛けているコートを手に取る。

「ボス？」

「少し出掛けてくる。それほどの逸材ならば、自ら会っておきたいからな」

レオーネが見たボスの後ろ姿は、遊園地に向かう子供のようにワクワクして嬉しそうなものだった。



(気が重いな)

主水は警備隊への出仕前から足取りそして気分が重かった。

何故か？それは昨日のことが起因する。

(ついつい熱くなりセリユーさんに厳しめに対応してしまった)

彼女に対しての思い入れが強いからこそ、主水は厳しく突き放したように対応してしまったのだ。

以前仕事人として働いていた時も、甘ったれた考えをしていた若い仕事人には鉄拳制裁をしたこともしばしばあった。しかしながら、その若い仕事人は男であったので良かったが、今回は女性であり、直接的ではないものも、精神的に傷つけてしまったのではないかと考えていた。確かに、どのように対応すれば良いのか、迷ったのも事実ではあるのだが。

(今日から少し間をおくか)

主水がそのような判断を下した時だった。

「おはよー主水君」

「！」

主水が振り返るといつもと変わらず、朗らかな笑顔を浮かべたセリユーが立っていた。

「お、おはようございます」

「うん。ねえ一緒に隊舎に行こ」

「はい」

誘われるままに主水はセリユーと共に隊舎へ向かう。

セリユーは変わりないようには感じるが、二人の間には沈黙が支配していた。

(お、重い…)

姑や嫁、筆頭同心の上司に、どんなに嫌味を言われようが、どんなにいびられようが、どんなに蔑んだ視線を叩きつけられようが、全く動じる気配すらなかったあの主水が、根を上げそうになったのだ。そんな折り

「ね、ねえ主水君」

セリユーが手を組み合わせモジモジしながら主水に話しかけた。

振り返ることはしなかったので、表情をうかがい知ることはできない。

「な、なんででしょうか？」

どもつてしまう主水、それほど主水も緊張していた。多分裏の仕事をするときよりも緊張していたのではないだろうか。

話しかけられ少し間が置かれた後だった。

「昨日はゴメンね」

セリユーが徐に口を開いた。いたって口調は落ち着いたものだった。

「い、いえ」

主水はその一言を返すのが精一杯だった。

「あのね主水君」

セリユーが突如主水に向き直った。その頬は僅かに朱に染まっている。

「私嬉しかったの」

「へ？」

いきなり予想外の答え。ただでさえ四苦八苦している所に投擲された難解な問いかけ。

どのように返そうか考えあぐねている中で、さらにセリユーは続ける。

「あの時はたしかにショックだった。でもね、主水君が本気で叱ってくれたから私は悪人にならなくてすんだ。それに——」

少しの間が置かれる。セリユーは一回、二回と深呼吸をし、覚悟を決めたように続ける。

「今まで、あんなに私を思ってたのは大好きだったパパだけだったの——だからかな。あのときの主水君がパパのように感じたの」

予想の遥か斜め上の告白。先の先のさらに先を読む棋士であつても予想できないであろう答え。

主水も剣を交える時は、何手も先を考え組み上げるが、ことここに至っては思考が手詰まりの状態だった。

「パパが帰ってきたみたいでほんとうに嬉しかった。だから、これからも私が間違いを起こしそうだったら、また昨日みたいに叱ってほしいの。それだけじゃなく甘えさせてもほしいけど……いいかな」
後半はモニョモニョとうつぶさき恥ずかしそうに告げたセリユーだが、話し終わった後は、真つ直ぐに潤んだ瞳で真剣に主水を見つめていた。顔だけでなく、耳まで朱に染めて。

「分かりました。いいですよ」

真剣に話してくれたセリユーに答えない訳にはいかなかった。

(俺も甘くなったもんだ)

と思いつつも、主水も自然と笑顔になっていた。今まで子供がいたことはないのに、手のかかる娘ができてしまった主水であった。

「やったー。じゃあ行こー！」

主水の手を掴み嬉しそうに走り出すセリユー。

ただそれを恨めしそうにコロが見ていたことを二人は知らなかった。

「やつと長かった1日も終わったな」

主水は日が落ち暗くなった街灯すらない脇道を、月光を道標に、肩を揉みながら歩いていた。

あれほど朝は重かった足取りも、今は仕事で疲れてはいるが軽かった。

大きな懸案事項が解決したからだ。

しかし、主水にはもう一つ解決しなくてはならないものがあつた。

「ここには人がいない。姿を現したらどうだ？」

主水は徐に足を止めると、何かに語りだした。

「フツ、レオーネの言っていた通りだね。まさか私の気配も感じるとは」

闇の中からとても愉快そうに、笑いながらレオーネにボスと呼ばれていた女性が音もなく姿を現した。

「昨日は巨乳の姉ちゃん。そして今日はあんた。いったいあんたは何者なんだ」

億劫そうに振り返った主水は、その態度とは違い、鋭い目付きで逃がさんとばかりに問いかけた。

「自己紹介させてもらおうかね。私はナジエンダ。ナイトレイドのボスをしているものだ」

「ナイトレイドのボスがわざわざ俺に何の用があるんだ？」

依然として主水は気を緩めることなく、ナジエンダの一挙手一投足を見守る。

歴戦の将であるはずのナジエンダでさえ、主水の圧倒的で叩きつけられるような、今まで相對したことがない程の威圧感に気圧され、口は渴き、額に汗が流れる。

「家のレオーネがあんたを気に入ったって言ってね。それに私もレオーネの報告であんたに興味を持ったから、自ら会いに来たんだ」

ナジエンダは偽りなく真実を語る。

元々嘘をつくつもりもなかったために、戸惑う様子もなく、淡々と語ったナジエンダに、嘘はないと見切ったため、主水も少しばかり誠意を感じ、警戒心も僅ながら緩和させた。

「でわざわざ自分の目で見てどう感じたんだ？」

「さらに、お前が欲しくなった」

ナジエンダの瞳に力がこもったのを主水は見逃さなかった。

「買いかぶりじゃないか？」

「私はこれでも結構な目利きでね。外したことはないんだ」

ナジエンダは自信満々でそう言うと、手を主水に差しだし

「私たちナイトレイドの仲間に加わらないか」

本題を切り出した。

第6話

「俺は、帝都警備隊の末席に名を連ねる者、言わばお前達の敵だぞ」

主水は冷たく言い放つ。その表情には全く感情がこもってはいない。

「果たしてそうかな。昨日の一件を全てレオーネが見ていてね」

ナジエンダは探るように主水に言葉を送り、見落とすことのないように主水の一挙手一投足を見守る。そんな中、主水は無意識に眉間に皺がよつたのを、ナジエンダは見逃さず、追撃とばかりに続ける。

「あんたがアヘン中毒の女から金をもらって、頼まれてアヘンの売人の男を殺したのもね」

(見られていたか)

主水は自分が気が緩んでいたことを自覚し、恥じた。

仕事人は、依頼人から仕事を受ける場合であっても、絶対に顔を見られてはならない。

何故なら、顔を知られたことにより、自分が捕まり処刑されるだけなら良いのだが、仲間が危機に晒されることは絶対に避けなくてはならないからだ。

これは、仕事を見た者を女、子供でも問答無用で命を奪うこととも同様の理由である。

あの時主水は、女の命があと僅かであること、そして、幻覚で顔を判断できてはいないのでと判断し顔を晒したまま、依頼を受けてしまったが、その様子までもレオーネに見られていたとは、思いもいなかったことであった。

「はあ、そこまで見られていたのなら仕方ねえな」

「私を殺すか？」

ナジエンダは身構えていた。主水が本気で殺しにきたら、歴戦の将たるナジエンダでもただでは済まない、いや生きて帰ることはできないと既に察していた。しかし、ナイトレイドのボスとして、只では殺されるわけにはいかないという信念から、決死の覚悟で臨戦態勢に入っていた。

「安心しろ。そんなことあしねえよ。それより、ナイトレイドの目的を話してくれ」

主水にはナジエンダに危害を加える気など更々なかった。

それは、仕事仲間がいけないということも一つの理由ではあるが、さばさばしたナジエンダに幾分好感を持ち始めていたのも大きな理由の一つであった。

「あ、ああ」

ナジエンダは呆けたように答える。緊張の糸が途切れたのか、地面に腰をつけた。

「大丈夫か？」

「すまないね」

主水が差し出した手を掴み立ち上がる。

「ナイトレイドの目的か」

「ああ、聞かせてくれ」

「ナイトレイドは革命軍の一部で、日の当たらない情報収集や暗殺をこなす部隊だ。そして、今は頼まれた暗殺をこなしながら帝都のダニ退治をしている。最終的な目的は腐敗の根源の——大臣の暗殺だ！」
（俺たちは腐った世の中への憤りから仕事人になった。しかしコイツらは自分で国を変えるところなのか）

国を変える、まるで夢物語を真面目に話すナジエンダを見て主水は苦笑いを浮かべる。

（だが、こういう奴等も嫌いじゃねえな。それに地獄への帯同者ができるのは嬉しいことだ）

今までのことを、考えてみると仲間の死や、顔を見られた仲間が江戸を離れたため解散となり、何度か仕事人を辞めることになりかけた。

しかし、気づくと再び仕事人に戻っていた。そんなことを何度も繰り返してきた。

（これも仕事人をしてきたことの宿業。背負ってきたものを下ろすことは許されねえってことか）

「この世でも逃れられないなら、その流れに乗るまでだ。これからも

背負い続けてやるか」

「なら」

ナジエンダの声に興奮が混じる。主水がから加入の決断を引き出すことができたことに対する喜びからきた興奮だった。

「だが、俺からも条件がある」

ナジエンダの興奮を遮るがとき主水の発言。

だがナジエンダはそんな主水を余裕の表情で見て、条件を言うのを促す。

主水が加入するならば、どんな条件も飲むつもりでいたのだろう。

「二つ目だが、俺は金が出ねえ仕事はしねえ。金なしに殺すのは仕事じゃねえ。ただの殺しだ。俺の仕事人（裏家業）の教示としてそれだけは曲げることはできねえ」

「分かった。で二つ目は？」

笑顔でナジエンダは了承する。さらに笑顔で続きを促す。

「外道仕事はしねえ」

外道仕事とは、怨みなどではなく、私利私欲のために依頼された仕事や、嘘偽りの依頼のことを言い、裏取りをするのもこれらの仕事をしないためである。

「当然だ。聞くまでもないことだ」

ナイトレイドもそのようなことがないよう、しっかりと裏取りをしているため、聞くまでもないことだった。

「最後は、裏の仕事としてナイトレイドに加入するが、表の仕事として警備隊は続けさせてもらう」

主水は奉行所に勤め、幅広い情報を得ることが出来、重宝していたからだ。

決してセリユーが気になるなどの理由ではない。

「…分かった」

最初は渋ったナジエンダだが、最終的に主水と同じ考えに至ったために了承された。

「3つの条件を飲む。これで成立だな。これから頼むぞ主水」

再びナジエンダが手を差し出す。

主水も手を差し出し、主水のナイトレイド入りが決まった。月が雲に隠れ、一点の光もない中で、主水が再び闇の世界に舞い降りた。



次の日、ちようど警備隊が休みだったため、いや、実際は、休みになるのを見計らってナジエンダが勧誘をしたのだが、主水はナジエンダに連れられナイトレイドのアジトにやって来ていた。

「皆集まってくれ。新しいナイトレイドのメンバーだ」

「女の子だといいな」

「あんたはそればっかよね」

ざわつくメンバー、どこか、転入生が発表されたクラスのように。

「中村主水だ」

促されメンバーの前に立つ主水。

「げっ私の射撃を弾いたやつ!」

(ピンク髪のツインテール：マインというやつか)

「私の攻撃を全て見切った男!」

(前に剣を交えた確かアカメといったか)

(あの気迫、やはりいい男だ!)

(俺を助けてくれたブラートだったか)

「男かよ…」

(小柄な男ラバック)

「ボスは上手くやったみたいだな」

(一番関わりがあるレオーネ)

「……」

(眼鏡を掛けているのはシェーレと言っていたな)

主水はアジトに来る道すがら、ナジエンダから仲間の説明を受けていたために、一人一人確かめるように確認していた。

三者三様? いや六者六様といった反応。好意的に受け止める者、加入に懐疑的な者、どうでもいいものと色々である。

(一応ナジエンダに説明された通り名前は区別はついたが……緊張感なさすぎだろ)

主水の右の拳がプルプルと震える。

ただ主水は耐えた。若気の至りで鉄拳制裁をしていた主水は、そこにはいない。

そして『郷に入ったら郷に従え』と言う言葉に従い、こういう仕事人も居るのだと、納得することにした。

「皆は一回会い、マインやアカメは刃まで交えたから分かるだろうが、新たに仲間に加わる中村主水だ。主水は堅苦しい挨拶は苦手らしいので、初仕事を持って挨拶とする」

ナジエンダはそう話ながらニヤリと笑みを溢す。

ナジエンダ自身も主水の力を目の前で見られる機会を得たことを喜んでいるのだろう。

「で、ボス。ターゲットは？」

楽しそうにレオーネが問う。

レオーネもナジエンダ同様主水の仕事を楽しみに行っているようだ。

「下流階級の貴族とそのボディガード、そして奉公人3人の計5人だ」

「罪状は？」

「降ってわいた上流階級との縁談を選び、それまで付き合ひ、妊娠までさせた女を、別れないからといって、暴行を加え流産させた後、奉公人達に襲わせ自殺に追い込んだクズだ。裏は取つてある。主水の名刺がわりの初仕事だ。行くぞー！」

ナジエンダの一声で、皆先ほどどうって変わって表情が引き締まる。

(オンとオフの切り替えはできるみてえだな)

主水も仕事人の表情に変わり、愛用のマフラーを口元まで上げ、ナジエンダや皆に続きアジトを出た。

とある貴族の屋敷では盛大な酒宴が行われていた。

「坊っちゃんあっしらも仕事を果たしたんですから甘い汁吸わせてくだせえよ」

「てめえは一番楽しんでやがったクセになにいつてやがる」

「そうだ一番始めに楽しみやがったくせに」

見るからに醜悪な見た目の三人の奉公人が、酒を飲みながら、くだを撒くように、金髪の童顔の美青年にしゃがれた声で 絡んでいる。

「分かった分かった俺の婚約を祝って褒美をやるよ」

美青年が下卑た笑みを浮かべ、指を鳴らした瞬間、三人の男の首が飛んだ。

辺りに舞う血飛沫を見て、悪魔のような笑顔で、何もなかったかのように血に汚れた手をタオルでぬぐう、首を飛ばしたボディーガードに声をかける。

「いつ見ても手際がいいね。さすがパパが雇ってくれた優秀なボディーガードだよ」

「恐れいります」

ボディーガードは無表情で恭しく礼をする。その鉛色に濁る瞳は空虚で、生きているのか、死んでいるのかさえも判断に苦しむものであった。

だが次の瞬間、瞳に力がこもる。

「坊っちゃんお下がりにください」

一歩前に出る、目の前に音もなく現れた、仕事人中村主水から身を呈して主人を護るように。

「てめえらを三途の川に渡してやるぜ」

主水が左手を鞘に置き、右手を柄にかける。

主水を中心にして空気が変わる。ターゲットの二人はまるで金縛りにあったように動けないでいた。

その刹那、刀の鞘と鍔が触れ合い、甲高い音が室内に響く。

次の瞬間、鈍い音が2つ、目の前のボディーガードとその後ろにいた貴族の青年の首が床に落ちた。

目にも止まらぬ神速の居合いの一閃。八州一と言われた剣の腕が冴え渡った。

その光景を後ろで見守っていた仲間達は驚きにうちひしがれた。

感心する者、闘志を燃やす者、尊敬の眼差しで見つめる者思いは違うが、驚きは一樣だった。

主水のナイトレイドの初仕事は大きな衝撃を残すものとなった。

第7話

あの一件以来セリユートの悪人への態度が少し緩和したように思われていた。

以前であれば、どんな微細な悪事でさえも、死刑の範疇であったはずが、今では四肢の欠損ぐらいですむのだから、相当な進歩である。ただし、その進歩は主水にとっても喜ばしいことではあるが、それとは別に新たな問題が噴出していった。

「主水君、一緒にご飯食べよ」

「主水君、道場で稽古つけて欲しいな」

「主水君、今日もいっぱい悪人捕まえて、正義の光で照らしてきたよ。褒めてほしいな」

等々、セリユートの主水束縛が激しくなっているのだ。

パパは誰にも渡さないと云った所だろうか。

主水の気が休まることはなかった。

だが、それさえも主水は自分の向上に繋がったのはさすがである。セリユートの過度な束縛から逃れる為に隠密スキルを向上させたのである。

しかも、隠密スキルは裏の仕事にもいかすことができるという、正に一石二鳥のことであった。

麗らかな昼下がり、

「はあくあ、息抜きしねえとやってられねえな」

日課の市中警備と言いながら、主水は帝都市中をあてもなくブラブラしていた。

ついに、主水の昼行灯の気がこの世界でも現れたのだ。

(また彼処に行くか)

主水は目的地を決め、歩き始めた。

「よっ、貸し本屋」

主水は声をかけながら、店頭に置かれている本（18禁）を捲り「この世界の春画はすげえなあ」

と唸りながら、読み耽っている。

「おつ主水の旦那どうしたんだよ。今（表の）工作中じゃないのか？」
表の家業で貸本屋を営んでいるラバック、ナイトレイドに加入して以来よく主水は訪れていた。

ちなみに、主水は仲間内では『主水の旦那』や『主水』と呼ばれている。

「ああ、今仕事中だぞ。なにやら禁書の匂いがしてな」

本を読む手を止め、ラバックをニヤニヤしながら見る。

「表の家業じゃ危ない橋渡ってないって」

笑顔で取り繕ってはいるが、視線が泳いでいるのを見逃す主水ではなかった。

（ここか）

「あつそれは!!」

主水の動きは速かった。まるで一陣の風のように。

「なになに……!!」

主水は隠されていた本を見つけ、手に取り見ると、青ざめ、動きが止まった。

何やら見てはいけない物を見てしまったようだ。

「す…素敵な兄貴（18禁）!!」

まさにアツー!!とも言う、見るものにとっては地獄絵図が載っている、ある意味の禁書であった……。

「ラバック、おめえ口では女好きとか言うのは、この趣味を隠すためだったのかまさかおめえがコッチ系だったとは、少し付き合いを考えんといかんな…」

主水は憐れみと軽蔑の混じった視線を送りながら、間合いを取る。まさにいつでも逃げられるように。

主水の頭の中では以前の上司の筆頭同心が『中村さん!』と言っている像が想像されていた。

「ち、違う。それはブラー……いや何でもない」

ラバックは何か言いかけるが、すんでの所で踏み留まった。

客商売は信用第一の職業であるため、商売人としての魂が保身より

も仕事を選んだのだ。

冷や汗が止まらないラバック。自分の身を守りたいのにできないことへのジレンマ、かなり苦しんでいる。

主水準は痛々しく、見るに耐えなくなつたことと、少し憐れに感じた為に、助け船を出すことにする。

「よし、ここはおめえが所有する秘蔵の貸本で手を打とう」

一方的に主水が得をする構造ではあるが。

「そうなるのね」

項垂れたラバックは裏から、禁書ギリギリの本を持ってきて、主水に貸し出すこととなつた。

「まだ俺自身読んでないのにー」

とラバックが悲痛な叫びをあげたのは言うまでもない。

主水はラバックから本を借り受けると、「これは俺の心の中に留めておくぞ。じゃあな」

と、また市中徘徊を再開した。

(次は少し小遣いがほしいな)

主水次の目的を見つけ、ある店を目指し歩いていく。

江戸でもちよくちよくしていた、役人の特権を用いた小遣い稼ぎをしようとしていたのだ。

(いつ見ても、すげえ人だな)

主水は大通りに出ると、その人の多さに辟易しながらも、目的地を目指す。

人込みを掻き分けながら、最高の立地条件にある、大きな米問屋に入っていく。

「よお、店主いるか」

「はいはい、これはこれは中村様、御仕事御苦労様です」

店主があからさまな営業スマイルを浮かべ、低姿勢で主水の元にやって来る。

「お前も上手くやっているみたいだな」

主水は店主に背を向け、後ろ手を差し出す。

「私共が仕事に励めるのも、中村様や警備隊の皆さまのお陰です。こ

これは日頃の感謝の気持ちです」

店主は紙に包んだ何かを、主水の後ろ手に掴ませた。

「ああ、頑張つて稼げよ」

主水は店主に告げると意気揚々と店外に出ていった。

店を出た主水は足早に建物の影に隠れ、渡された紙の包みをとく。

中には金貨が一枚入れられている。完璧な賄賂である。

「やっぱり稼いでやがるな」

悪い笑顔で金貨を撫でていると、

「主水の旦那ー、みーたーぞー、警備隊がそんなことしていいのかなー」

気配も感じさせずに、レオーネが含み笑いを浮かべ背後に立っていた。

「い、いつの間に!!」

「だいたい主水の旦那は金が絡むとガードが弱くなるんだよ。で、いいのか警備隊が賄賂なんかせびつて」

レオーネはニヤニヤしながら、主水の顔を覗き込んでいた。

(こいつ全て見てやがったな)

またもやレオーネに一杯食わされたと、回りを警戒していなかったのを後悔しながらも、手を打つ。

「分かった。そこでなんか奢つてやるからこのことは黙っているよ」

「さすが主水の旦那は分かってるー」

指をパチンと鳴らして、喜び勇んで食堂に入っていくレオーネを見て、過去の仕事仲間加代のことか頭を過っていた。

(あいつも金の匂いに敏感で、俺が大棚から賄賂をもらう度よく現れたな)

主水はため息をつきながら、レオーネを追って食堂に入っていた。

一時間後、

「はあ旨かった。ありがとな主水の旦那」

と満足気なレオーネと渋い顔をした主水が…

主水の大切な賄賂の金貨がたった一時間で僅かな小銭に変わってしまったのは、言うまでもないことである。

主水は今後は絶対にレオーネには奢るものかと強く心に誓ったのである。

精神的に参って主水は警備隊の隊舎に戻ると、待ち構えていたようにセリユーが走ってきた。

「どこ行つてたの主水君。今日は一緒に町中の警備にいくはずだったのに」

頬を膨らませて怒っている。下を見るとコロもそれを真似ている。とても和やかな情景である。

「すいませんでした。用事があつて」

「もう、まあ謝つたから許してあげるけど、明日は一緒に行くよ。約束ね」

「はい」

約束を取り満足気なセリユーと、苦笑いを浮かべる主水。そんな折だった。

「あれ、主水君。なにもっているの?」

セリユーが、首を傾げながら、主水の懐に視線を向ける。

主水の懐にはラバツクに借りた秘蔵の本が。

(しまった。置いてくるんだつた)

本当であれば、賄賂をもらった後に秘蔵の本を置きに帰るはずであつた。

しかし、レオーネに捕まり、それもできずに、後生大事に懐にしまったままにしていたのだ。

「見せてね」

その時のセリユーの動きは機敏であり、主水を持ってしても、止めることができなかつた。

セリユーは本を開き、ページを捲る。

主水は気配を消し、その場を逃げる。

セリユーの動きは完全に止まっていた。顔を真っ赤にし、手はわなわなと震えながら。

(ラバックすまん。俺の命の為に、本は犠牲になるだろう)

心の中でラバックに謝罪しながら、主水が逃げている後方で、

「コロ、食いちぎれ」

という冷たいセリユウの命令が響き、紙がシユレットターにかけられ
裁断されるような音が。

そして直後、主水の襟首が恐ろしい力で引き留められた。

止まらない冷や汗と、頭の中で鳴り響く半鐘の音。

それはけたたましく、主水の危機を報せていた。

逃げようとするのだが、主水の襟首を掴む力は尋常ではなく、動く
ことができない。

本能は絶対に振り向くな！と言っているが、選択肢はそれ以外に存
在しなかった。

主水が恐る恐る振り向くと、悪人を憎悪した時と同じ顔をしたセ
リユウが。

その後の主水の記憶は存在していない。

ただただ、怖かったという刷り込まれた恐怖しか残っていないなかつ
た。

こうして、今日も中村主水のしがない一日は過ぎたのだった。

第8話

のどかな昼下がりがだが、その日は、鉛色の雲が広がり、人の気分も重くなる日、それとは対照的に辺りを後光で照らすかのような、黄金の輝きを纏いし十手を携え、主水はアジトに来ていた。

ナジエンダの急で悪いが来てほしいという繋ぎをラバツクからもらったからだ。

「入っていいか？」

「ああ、入ってくれ」

慣れない手つきで扉をぎこちなく開く。

江戸では見慣れていない扉には、未だに主水は慣れてはいなかった。

ナジエンダの執務室に扉を開けて入ると、ナジエンダは机に向かって、なにやら厚い書物のような物に視線を落としていた。

「急に呼び出してすまん。そこに掛けてくれ」

ナジエンダに促されるまま、主水は椅子に腰かける。

「仕事は大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。また上司の目を盗んで抜けてきた。日常茶飯事のことだしな」

さも当然そうにあっけらかんと話す主水。日頃の仕事具合が垣間見える。

「そ、そうか」

ナジエンダも苦笑いを浮かべるしかなかった。

「で、急な用とはなんなんだ」

主水の表情が真剣になる。

新たな仕事が入ったのではないかと思っていたためだ。

「今日来てもらったのは、主水のその十手についてわかったからだ」

ナジエンダは帯に挿した黄金の十手を指差して答えた。

ナジエンダは以前主水に会った時から、見慣れないその捕縛具に何か惹き付けられるものを感じていたのだ。

「これか。多分俺が、この世界に来ることになった切っ掛けになるも

のぐらいいしか分からないが…」主水は帯から十手を抜き、右手に携える。

あれから何度か主水もその十手について調べたのだが、何も分からなかった。

考えてみると、死に行く主水をこの世界に、迎えに来たということだけは、感覚的に悟っていたが。

「ああ、私も気になってな、革命軍本部にある帝具凶鑑を送ってもらい調べてみた」

先ほど目を通していた、分厚い書物を主水に見せる。

そして、口許を上げ

「漸くその正体が分かった」

ほくそ笑み、話した。いたずらっ子のいたずらが成功したような嬉しそうな表情だ。

「これは帝具だったのか」

主水はセリユーから帝具についての説明を受けていたので、帝具の存在は知っていたが、自分が帝具を知らず知らずのうちに所持していたことに驚いていた。

「では、その帝具について説明する。名称はへ一網打尽〓アレスターだ」
「へ一網打尽〓アレスターか…」

主水は十手を見ながら呟くと、それに呼応するかの如く、十手の光が増す。

天気が悪く、暗い室内が照らしだされる。

「ああ、材質が人間が神から賜りし金属オリハルコンでできている。世界で一番固いと言われる材質だ」

「そっさいやあ確かに固かったな」

この世界に来た瞬間、この十手を噛み味わった、あの感触を思い出し、あの頃の自分を嘲笑うかのように、冷ややかな笑みを浮かべた。

ナジエンダは、主水の表情の変化を不思議に思ったが、先に進める。「次にその帝具の特殊能力だが、私はなかなか使えるとは思うんだが、お前はあまり好まないのではないかと思う」

少し複雑な表情を浮かべ主水を見る。

「教えてくれ」

「ああ、一つ目の能力は、その十手では相手を殺すことはできないと言
うことだ。いくら打撃を加えてもな」

まさに不殺の捕縛具たる能力だった。

しかしながら、主水の心が沈むことはなかった。

今でこそ、主水は人を躊躇なく殺すことができるが、元々は人を殺
すのを恐れていたからだ。昔の自分を十手が見透かすかの能力で
あった。

「二つ目の能力だが」

「二つ目もあるのか？」

殆どの帝具が実質一つの能力と、奥の手ということをセリユーに説
明されていたため、二つの能力があるということに、驚きを覚えたの
だ。

「いや、それだけだったらとんだ木偶の坊だろ…」

「棒だけに木偶の坊か上手いこという」

二人の発言に反発するように十手の光が増す。まるで言葉を理解
しているように。

「で二つ目だが。私はこの能力は優れていると思う。その十手で打た
れた箇所動きを封じるという効果だ。例えば腕を打てば、その腕の
自由を奪い、首を打てば言葉を発することができなく、頭を打てば思
考ができなく、という具合だ」

主水はナジエンダの説明を聞きながら、微かな喜びを覚えていた。

この帝具を使えば、金を貰わなくても、戦闘に参戦できるのだから。

日は浅くとも、仲間と交流をもったことが、主水にも少なからず影
響を与えていた。

「一つ聞きたいのだが、封じられる時間はどれくらいになるんだ？」

「細かいことは言えないが、うち据えた威力で決まると書かれている。
また十手使用者は任意でその封印を解くことができるらしい」

ナジエンダの話聞いて主水は

(誰かに試してみるか)

と良からぬ考えを巡らしていた。

一番始めに頭に浮かんだのは、なぜかラバックだったことは言うまい。

「もう一つ、奥の手はどうだ？」

帝具のもつ切り札。

帝具同士の戦いだと、必ず最も重要になる点だ。

「すまないが、奥の手については分からなくてな」

ナジエンダは申し訳なさげに話す。

主水は主水で気にする素振りもなく、自分で開発すればいいと、どこか嬉しそうであった。

「だが不思議な帝具だ。自ら使い手呼びにいくだけでも規格外なのに。帝具使いと帝具使いがぶつかり合えば、どちらかは必ず死ぬという前提すら無視することになるぞ。主水の相手は死なないのだからな」

ナジエンダがシンミリとしながらポツリと溢す。

「構わんよ。殺る時は、こちらを使うからな」

主水は笑いながら腰の愛用の二本挿しに視線を送る。

「まあそうだな。お前なら、その刀だけでも帝具持ちでも完封しそうだしな」

ナジエンダは盛大に笑った。

実際に先の初仕事を目の当たりにして、絶対の信頼感を主水に持っていたためだ。

「主水、その十手についてだが、人目につかないようにしてくれないか」

主水はナジエンダが言いたいことを即座に理解した。

帝具はそれだけで、絶大な力を秘めている。そして、革命軍だけでなく、帝国も同様に集めており、抜き身の帝具をぶら下げて、国内を歩くのは危険だということをお願いしたいのだと。

「ああ分かった。何か被せる物を検討してみるかな」

主水はナジエンダの要望に頷き、執務室を後にした。

(鞆みたいなのを作るか、もしくは袋にするか)

主水は一応多少の案は浮かんでいた。

主水は十手はいつも抜き身であったが、中には袋に入れて持ち運ぶ同心も多く、その姿をよく見ていたからだ。

主水が思案しながら廊下を歩いている時だった。

「おーい、主水ー！」

掛けられた声の方を見ると、上半身裸のブライトが。

「主水一緒に汗を流さないか」

ウインクを飛ばし、頬を赤らめながら誘ってくるブライトに、貞操の危機を覚える。

しかし、多分ナイトレイドの中でも屈指の戦闘力を持つであろうブライトとは、一度手合わせをしてみたいと、予々思っていたのも事実であるので、細心の注意を払いながら受けることにした。

広さ約40米四方程の、土の練習場で各々の得物を構えて向かい合う。

物音一つしない場に、ピリピリとした緊張感が漂う。

改めて対面してみると、主水もブライトも、どちらも数多くの修羅場を潜り抜け、相当な実力を有していることを、再認識した。

(これほどのやつとやるのは久しぶりだな)

(槍の方がリーチは長い、どうする主水)

共に間合いを取り、動かない。

鉛色の空から、一滴の雨が地面に落ち、弾ける。

その瞬間、主水は木刀を下段に構えたまま摺り足で走り出す。

(懐には入らせん)

槍は間合いを詰められた時点で不利になる、主水の意図を読み取ったブライトは、壮絶な突きと横風ぎを交えて繰り出す。

共に一撃必殺の威力を持ち、轟音をまといながら、放たれる。

主水は突きは必要最小限の動きで避け、横風ぎは、下段から上にかちあげ、軌道を反らす。

一進一退の攻防が続く。

主水はブライトの槍をかすらせもせず、いなし続け、ブライトは主に攻撃させる暇さえ与えない。

体は若いが、経験が豊富な主水は、拮抗しているにも関わらず、冷

静に成り行きを見守り好機を伺う。

ブラートも経験は豊富であったが、完璧な防御力を誇る帝具の特性を生かした戦い方が身に付いている為か、攻撃が大振りになる。

主水は、そのブラートの攻撃の変化を見逃さなかった。

一直線に放たれる突きを木刀で巻き上げ、天に反らし、大きな隙を作る、そして、ブラートの視界の中の主水がぶれたと思ったその時、既に喉元に木刀の鋒が突き付けられていた。

「さすがだな主水。俺の負けだ」

爽やかな晴れ晴れとした笑顔で語るブラート。

悔しきは微塵もないようで、男らしさを感じさせる。正に兄貴である。

「いやブラートの槍さばきも凄かったぞ。全てかわしていたはずなのに、見てみる」

主水は帯を解き着流しをはだける。体には無数に青アザができている。

「これだからな……!!」

主水に戦慄が走る。

顔を真っ赤に染め、ウツトリと主水の体を見つめるブラート。

さすがにブラートにしてはならない、軽卒な行動をとった自分を怨恨だ。

「主水、お互いいい汗をかいた、温泉で男同士、裸の付き合い……主水どこに行った」

主水は既にブラートの前から姿を消していた。

危険察知能力の高さが、幸いした主水であった。

主水がいなくなったことを認知したブラートは呟くように

「淡白だなあ……」

と寂しそうに呟いたという。

第9話

小春日和とも言える、麗らかな陽気、清々しい空気とは対極に位置する世界が大きな倉庫に広がっている。

どんよりと濁った空気、鼻がもげる程の臭気、見るも無惨に転がる死体、鎖によって吊るされ、拷問によって欠損した部位を持つ死体、どの死体の顔も苦痛に歪み、その表情から、この世を呪うように死んでいったのだらうということが容易に伺える。

奥に位置する鉄格子に囲まれる牢屋には、薬物を投与され、生き地獄に落とされうめき声を上げ苦しむ男や、既に死してハエが群がる骸が転がる。

『死』を迎えられた者が幸せにすら見える。

人間がその手で作り上げた、狂った世界がそこに存在した。

「くっ……………」

主水は顔をしかめ、視線を反らす。

あつてはならない光景、人間の醜悪な悪意がまつたような光景、人間がここまで酷いことができるのか、力を持つと、人間はここまで外道になれるのか？

分かつてはいた。

この世界は権力者の横行により腐りきっていると。

しかし、ここまでとは……

仕事の裏付けに感情を持ち込むことなど、言語道断ではある。

しかし、いつになっても慣れるものではなかった。

燃え上がるような怒りを堪え主水は、来るべき日を考えて、その場を足早に立ち去った。

「どうだったの主水。まあその顔を見れば聞くまでもないけどね」

お洒落なカフェの、外に面したテラスでソフトクリームを食べながら、待っていたメインと主水は合流した。

メインはナイトレイドの中でも顔ばれしていない為に、気兼ねなく市内に出ることができていた。

「ああ、真つ黒だ。とんでもねえドブネズミだったぜ」

そう主水が今回の仕事の裏を取る役目を負っていた。

未だに頭から離れない胸糞悪い光景を思い浮かべ、一層に顔をしかめて吐き捨てるように伝える。

「そう。じゃあ私はボスに伝えておくわ。主水にはまたラバックから繋ぎが届くと思うから、準備しておいてね」

「ああ、わかった…」

二人は簡潔かつ手短に、それだけ言葉を交わすとそのまま解散した。

暖かい陽射しが降り注ぐ、快晴な空とは裏腹に、主水の気持ちは中々晴れることはなかった。

（こんなことは慣れたはずだったのにな。しかし、まさかこの世がここまで腐りきってやがるとは。江戸以上だぜ）

悪い雰囲気撒き散らしていたのか、それほどおっかない表情をしていたのか、主水が歩きたびに、進行方向の人波が別れていく。

（気入れ直すか）

頬を叩いて気合いを入れ直すと、警備隊の隊舎に向かった。

主水が警備隊の隊舎につくと、道場の玄関先でタオルで汗をふく胴着姿のセリユーが。子供のような容姿に似合わず、滲む汗を拭うセリユーの姿は色っぽかった。

「あ、主水君どこいったの。今道場でオーガ隊長が皆の指導をしてくれてるんだよ。早く行かないと」

（めんどくせえ時に帰ってきちまった）

主水は手を握り引き摺るようにセリユーにつれていかれ、道場に入った。

道場の中からは、悲鳴に似た声が聞こえてくる。

「ま、参りました」

「それで終わりか！つまらねえ。次！」

「はい！ギヤアアアア!!」

とても稽古とは思えない断末魔が響いていた。

「今日はねオーガ隊長も気合いが入っているみたいなの」

セリユーは嬉しそうに主水に告げる。

それもそのはず、セリユーの武道の師匠がそのオーガであり、純粋に尊敬しているからである。

(どうにかして逃げないと)

しかし、主水が気づいた時には、木刀を携え、稽古の順番を待つ列に連なっていた。

(いつの間にかこんなことに)

辺りを見回すと、

「主水君ガンバってねー」

と手を振るセリユーが。どうやらセリユーのされるがままに従っていた為に、こうなったらしい。

「アタタタタ、腹が、厠に……」

主水の十八番と言える仮病。腹を押さえ列から逃れようとする主水だが、

「中村さん。一人だけこの地獄から逃げるなんて許されませんよ！」

しばしば使っていたために、警備隊仲間からは既にバレていた。そのため、隣に座り、青ざめた隊員に思惑も見抜かれ、退路を塞がれた。

主水は決して稽古が嫌いな訳ではない。実際に、奥山新影流、御嶽新影流、小野派一刀流、一刀無心流、等そうそうたる剣術を会得し、全てを皆伝にまで至らしめている。

しかし、今の警備隊は主水の仮の姿であり、自分の器量は隠さなくてはならない。

したがって、上手く負けなくてはならないのが、めんどくさくてしょうがないのだ。

「ぬがああああ!!」

主水の前の、退路を塞いだ隊員が壁まで吹き飛び、ついに主水の番が迫っていた。

「次、中村来い!!」

「はい、たああああく〜!」

「遅いわ!!」

「どわあああ!」

主水は揉んどりうちなながら、壁に叩きつけられた。起き上がるや否や、

「参りましたー」

頭を床につけてギブアップ宣言。

「ちっ、危険種を狩ってきたというから期待していたんだが、とんだ期待外れだったな」

「運が良かっただけなので」

「ちっ腰抜けが!次!!」

主水は上手く受け身を取っていたので、全く痛くも痒くもないのだが、痛がるふりをしながら立ち上がり、道場をあとにした。

(あーあ、無駄な時間を過ごしたな)

道場から出て、道場内のむき苦しく、濁った空気から解放され、外の綺麗な空気で深呼吸する。

「主水君大丈夫?」

心配そうに声をかけてくるセリユー。

自分が連れてきたから、主水は痛い目にあってしまったと責任を感じているようだ。

「いつも私と稽古してくれるときは強いのに」

悲しげかつ、残念そうに呟く。

主水は、セリユーにはこのような死がつきまとう世界でも、死んで欲しくはないと思っっているため、セリユーとの稽古では少し力を出して、稽古していた。

「オーガ隊長が強すぎるんですよ」

「それもそうか。隊長強いもんね」

セリユーは嬉しそうに繰り返す。

コロコロと変わる表情を見ているだけでも、心が安らいだ。

「皆限界みたいでしたし、もう一回オーガ隊長に稽古をつけてもらったらどうですか?」

「うん、そうするね。じゃあね主水君」

セリユーは道場内に消えていった。

「じゃあ帰るか」

主水は警備隊隊舎を後にした。

焼けるような夕焼け、夕日が傾き、城に掛かり、長く大きな影が市内にかかる。

そこから生まれた闇が、夜を呼ぶように広がっていく。

(おっありゃあレオーネじゃねえか)

満面の笑みで、スキップをするような足取りで、食堂から出てくるレオーネの姿が。

その手には、何かぎつしりと詰まったような袋が。

「よっ！レオーネ！」

「ひゃう!!なんだ主水の旦那脅かすなよ！」

レオーネは不自然に驚き、急ぎ手に持つ袋を後ろに隠す、あからさまに。

「何隠してんだ、見せてみる」

「や、やめろよ、主水の旦那！」

端から見たら、若い女性にまわりつくように絡む男という構図だが、警備隊に口を出せるほど勇気がある者がいるはずもない。

ある意味悲しい現実でもある。

すったもんだであり、主水はレオーネの持つ物を取り上げた。

「レオーネいったいこんな大金どうしたんだ」

「い、いやあ、この帝都の厳しさを教えた授業料にな」

目を反らし、辿々しく説明するレオーネ。

自分が悪いことをしたということは、どうやら自覚しているらしい。

(こいつ、俺だけじゃなく他のヤツにも)

そうは思うが不良役人主水である。

「まあ、帝都の厳しさを教えてやったのなら、その謝礼として貰っておけばいいな」

「そうそう、さすが旦那、よく分かってるな」

笑顔で肩をバシバシ叩くレオーネ。

揺れる主水の体。かなりの腕力である。

だが、それだけで済ます主水ではない。

「なあレオーネ、前に俺はお前に奢ってやったよな」

「あ、ああ」

以前主水が貰った袖の下を、レオーネに大いに食い散らかされたあの一件を持ち出す。

レオーネはぼつが悪そうな表情を浮かべる。この後の流れを悟ったかのように。

「じゃあ今回はその金で、奢ってもらおう」

主水は悪い笑みを浮かべ強気に要求する。前の借りは今返せと
いった所か。

「あくあ、しょうがねえか、じゃあ行きつけの店で酒でも飲むか」

レオーネはため息をつきながらも、諦めたように肩を下ろして、主水と共に夜の町に消えた。

第10話

雲一つない、爽やかな朝、主水は朝特有の綺麗な空気を肺一杯にすい、浴びる陽射しを眩しそうに目を細めながら歩いていた。

「おはよう主水の旦那。いい本入荷してるよ。中入って見てっよ」
「おう、じゃあ少し邪魔するぜ」

ラバツクの目配せを受け、主水は貸本屋の中に入り、外を一瞥した後にラバツクも続いた。

ラバツクの貸本屋は、帝都内でのアジトとして活用され、仲間が良く休憩したり、情報を集める拠点として使われていた。

「で、ボスからもう話は来ているか？」

主水の表情から緩みは消え、仕事人特有の真剣さが表れていた。

「ああ、ナジエンダさんから繋ぎは来てるよ。じゃあ読むぜ。『今回ののは偽善者を気取った外道貴族一家三人と、それを黙認し護っているガードマン六人の計九人。罪状は——』」

「罪状はいい、実際にこの目で見ているからな」

無表情で呟くように告げる主水。

ラバツクも主水の表情から、触れるべきではないと察し、小さく頷き淡々と続ける。

『結構は今夜の8時、夜の闇に隠れて忍び込む。主水はそのまま的の屋敷に向かい。目に入ったヤツを殺ってくれればいい』ということだ」

「分かった」

主水は変わらず無表情で了承すると

「邪魔したな」

という一言を残し、ラバツクの貸本屋を後にした。

主水はこれまた日課の見回りをしていると四人の護衛を伴い、シヨップピングを満喫する貴族の娘が。

(いい気なもんだぜ)

傍目に見ながら通りすぎる、その壁際には、ナイトレイドの手配書

が貼られている。

(たいしたもんだな。俺たちだったら顔が知れた瞬間、江戸から身を隠し、解散なんだがな)

少し苦笑いを浮かべるが、

(それが目標がある者のとなない者の違いか…)

と結論をつけた。

その日は、隊舎でお茶汲みをしたり、書庫で調べものをするふりをして昼寝したり、机に向かって久しぶりに書類に向かっていたので、警備隊仲間に

「雨でも降るんじゃないか」

と茶化され、セリユーにさえ、

「今日の主水君変だよ。帰って休んだほうがいいよ」

と言われる始末であった。

そして時間が過ぎ、血のように真っ赤な、今日の夜の仕事を予兆するような夕日が、地面に沈み、漆黒の夜の帳が辺りに満ちていた。

「行くか」

主水は、二本挿しを腰に挿し隊舎を後にする。

時刻は夜の7時、街灯一つない道を、マフラーを口元まで上げ、目的地に向かって歩く。

主水が的の屋敷に着いた頃には、既に仕事は始まっていた。

屋敷の中から発砲音、人の叫び声、破壊音などが辺りに響き渡っている。

ここまでの大音量が辺りに響けば、他の人に知られそうではあるが、見渡す限りの辺り一面が、的の貴族の所有地になるので、邪魔が入ったり、援軍が来ることもない。

権力を示す、広い所有地が自分の首を絞めることになるとは、皮肉なものである。

締め切られた門まで来ると近くにいる門番に声を掛ける。

「警備隊の中村と言います、何かあったみたいですが開けてくれませんか？」

「これはいいところに、お入りください」

躊躇することもなく、即座に開かれる門。

門番はパニックに陥り、さらには、指揮系統も混乱しているらしい。「賊が、ナイトレイドが現れたようです。お助けください」

その一言を残した、その刹那、門番は朱に染まり、崩れ落ちた。何の感情も感じさせない無表情で主水は、物言わぬ事切れた死体に吐き捨てた。

「お前はお前のように助けを求めた者にどういう対応をしたんだ」
いつの間にか抜き放たれ、血に濡れた刀を振り、血を払う。

(次へ行くか)

主水は更に奥へ向かう。

辺りには既に無数の死体が転がり、血の海が広がっている。

体を両断された死体、何かに貫かれた死体、更には眉間を撃ち抜かれた死体と千差万別である。

(俺が一人、ここに三人。残りは殺られてなけりや六人か。だがやつらの腕だ、もう終わってるかもしれない)

主水はそのように思いながらも先を進む。一人でも逃すわけにはいかないのだから。

しばらく歩くと闇の中から、荒い息遣いと足音が聞こえてくる。

主水は足を止め、待ち構える。

現れたのは、的となる衛兵の一人だった。

「その姿は警備隊か、いいところに」

平常時ならば、なぜこんなところにと疑問に思うシチュエーションだが、人間危機的状态になると、自分に都合の良い方向に考える。

そのため、この衛兵も何の警戒心も持たず主水に駆け寄り、すがり付くように、懇願する。

「お嬢様の所に急いでくれ。この先にいる」

「分かりました」

主水は音もなく、鞘から刀を抜き放つと、心臓を穿つ。

血に染まり月に煌めく刃は、怪しい美しさを醸し出す。

「先に地獄で待ってな。じきにお嬢様も送ってやるからよ」

刀から血を払い、鞘に収めながら主水は告げた。

(この先と言っていたか)

先から感じる気配は全部で四つ、その内一つからは、以前身を持つて体験した殺気を感じる。

(研ぎ澄まされた殺気…アカメか。手こずっているようだな)

戦っているのはアカメだと察知した時には、もう大丈夫だと考えた。しかし、戦いが続いていることを示す殺気が、消えないことから、まだ片付いていないことを理解した主水は、戦闘が行われている場に急いだ。

目的地に近づく度に剣撃の音と、濃密な殺気が強くなる。

(二つの家がなんでここまで広いんだ)

主がブツブツ文句を言いながら、茂みを抜けると、月下の元で、帝具(村雨)を振るうアカメと、辛うじてアカメの斬撃を必死の形相で、剣で捌く少年の姿が。

背後には、その少年に護られるように佇む、金髪の癖毛の少女。

「アカメ、手こずってるようだな」

声を掛ける主水。すると隣に現れたレオーネが、アカメの変わりに答える。

「ああ、あの少年やるぜ。アカメと戦ってまだ死んでないんだからな」
レオーネはどこか嬉しそうに話す。

(剣の軌道、動きにはまだ粗さや無駄はあるが、素質はありそうだ)

主水も静かに二人の剣舞を見守る。

「頼む、この子だけは助けてくれ。罪もない女の子なんだぞ」

少年の言葉を聞いた主水の眉間にシワがよる。

表情を消し、主水は黙って大きな倉庫に歩みより、刀を抜き、一閃した。

大きな音をたてて鋼鉄の分厚い扉は真つ二つに両断され、砂ぼこりを巻き起こし崩れ落ちた。

「おい、小僧中を見てみる。そこにある真実を見てから自身で判断しろ」

主は背中を向けて、離れ、中を見るように促す。

少年は最初呆気にとられていたが、立ち直ると、主水に促されるま

ま倉庫を覗きみる。

「な、なんなんだよコレ!!!」

偽善によって隠された中（真実）を見て、少年は顔を真っ青にする。何がなんだか分からないといった感じだ。

「これが、この家族のしてきた所業だ。地方出身の身元不明者を甘い換言をもって誘いこみ、自分の欲望を充たす玩具として拷問にかけて弄ぶ。これが真実だ」

冷やかな声で主水はいい放つ。

呆然と佇む少年が何かに気づいたように、幽鬼のようにフラフラとした足取りで倉庫に足を踏み入れる。

「サヨ?おいサヨ・サヨなんだろー!」

鎖に吊るされて無惨な姿に変わり果てた、死体に手を伸ばして、悲痛な声をあげる。

アカメやレオーネ、主水は冷静に見ているが、やはり込み上げてくる何かがある。

「おっと、逃がさないよお嬢ちゃん」

そつと逃げ出そうとした、少女をレオーネが捕まえる。

「わ、私は屋敷内にこんな場所があるなんて全く知らなかったわ。タツミは、貴方を助けた私と、この殺し屋のどちらを信じるのよ!!」

タツミと呼ばれた少年は微動だにしない。

あまりにも受けた衝撃が大きすぎ、頭の整理がつかない状態にあるのであろう。

次にタツミが動いたのは、格子に囲まれた牢屋の中の人物から、声を掛けられた時だった。

「タ…ツ…ミ。タツミなんだろー!俺だ…」

「い…イエヤス!!」

タツミは更に悲痛の色が濃くなった声色で慟哭をあげる。

聞いているこちらさえも、悲痛な気分になる声である。

「俺とサヨはこの女に誘われて、飯を食ったら意識を失い、気がついたらこんな目にあっていたんだ。その…その女が…サヨを拷問にかけて殺しやがったんだ!!」

イエヤスは訴えるように、涙まじりの声で叫んだ。
自分の目で見えた真実を。

嘘偽りのない。

「何が悪いのよ!!」

闇に怒号が響く。

醜悪に歪んだ、悪意に満ちた醜い様相で少女が開き直って、叫んだのだ。

「役立たずの地方の田舎者なんて、家畜と同じよ。それを自由に扱って何が悪いのよ!! だいたいその女はムカつくのよ。私がこんなに癖毛で悩んでいるのに、家畜の分際でサラサラの髪しやがって。だから私が念入りに遊んであげたのよ! 感謝こそされ怨まれる理由なんて一つもないわ」

歪みきった自己中心的な考え、自分勝手な論理、耳に入れることさえ憚られるとんだ戯れ言。

この腐りきった世界をそのまま形にした人間がそこにいた。「とんだクソツたれだな」

「ああ善人の皮を被ったサド家族だ」

主水とレオーネが胸くそ悪そうに吐き捨てるように言うと、それまで全く動かなかったタツミが、少女に向かって歩き出した。

そして、剣を握り締め、振りおろす——所で主水が割って入った。「小僧、こいつを斬るのには文句を言わねえが。もしここで、お前が、その手で、斬ったら、もう戻ることはできねえぞ。一生重荷を背負うことになる。お前にはその覚悟はあるのか」

主水の冷たく底冷えする声が、タツミに覚悟を問う。

人を斬った瞬間、斬った者は業という名の重荷を一生背負うことになる。

さらには、今まで何人か仕事仲間でも、足を踏み入れた仕事に疑問を持ち、それが災いして果ては殉職するものもいた。

そのため、怒りに任せて斬った後に後悔させないためにも、主水は問い質したのだ。

「イエヤスやサヨの無念を張らせるなら覚悟ぐらい決めてやらあ!!」

タツミの覚悟を聞き、主水は手を離す。
直後、タツミは躊躇なく少女を切り裂いた。

第11話

仕事を終えた後に、レオーネがタツミを気に入り、アジトに連れて帰ったようだ。

貴族の少女を斬った時に、こちらに来ることを覚悟していたために、仲間入りはスムーズに進むのではないだろうか。

そして、そんな中で、主水は、川辺で釣りをたしなんでいた。

主水自身釣りが趣味でもあり、釣った魚は食べれるという実益つきなのだから、ある意味一石二鳥だ。

「見たことねえ魚ばつかだな」

主水は釣った魚を入れている、魚籠を覗いて呟く。

川釣りということで、アユやイワナ、アマゴ等を期待していたのだが、化け物の様にデカイ魚やら、どう見ても海水魚だろと思える魚ばかりであった。

そうであっても、釣り自体が好きな主水は静かに釣りを満喫していた。

鳥の囀りや、川のせせらぎを聞き、しばらく、長閑で、和やかな時間を過ごしていると、誰かが川原にやって来る。

「その足音と気配は……アカメか」

主水は振り向かず茶目つ気たつぷりに言い当てようとする。

「正解。……いいい？」

「ああ、いいぞ。ってなんだそれ!!」

近づいてきたアカメの影があまりにも大きい為に、振り向くと、驚くべき光景が。

小柄なアカメが、自分の大きさを遥かに越える鳥を担いでいた。

「エビルバード」

アカメは質問に簡潔に一言で答え、集めた薪に火をつけ始める。

「エビルバードと言えば、村一つ潰すっていう特級危険種じゃなかったか」

主水は以前警備隊の書庫で見た、危険種図鑑に掲載されていたのを思いだし、記憶を掘り起こすように声に出して呟いた。

ちなみに特級危険種とは、危険種の区分上、上から二番目に危険とされる危険種で、一番危険な超級の次に危険なものとされている。

「そう。美味しいよ。主水も食べる？」

食に煩いアカメがまさかくれるというとは思っていなかったの、少し面食らった主水であるが、こちらも返さなくてはと思う。

「じゃありがたいと頂くな。でお返しに、今日釣った魚やるよ」

主水が提案すると、アカメは本当に嬉しそうに、目を輝かせていた。仕事の時とのギャップに、主水は、驚きながらも、和み自然と笑みを浮かべていた。

「この魚なんだが」魚籠から体長1メートル程の魚を取り出す。

「これはコウガマグロ。警戒心が強くて、美味しい魚」

嬉しそうに眺めている。本当に食べるのが好きなようだ。

「悪いが、お前が調理してくれ。俺は料理はからつきしでな。メザシを焼くぐらいしかできん」

「メザシ？」

話の流れから料理名だと悟ったアカメが聞き返す。

食べ物には本当に貪欲である。

「この世界にはなかったな。まあ似たようなもんがあったら食わせてやるよ」

「うん！」

さらに目を輝かせるアカメを見て、期待させてしまったが、実物を見たら落ち込むだろうなど、少し罪悪感を感じる主水であった。

パチパチと火にくべられた薪が音を立て燃えていく。

脇には一本の棒で串刺しにされたコウガマグロと、エビルバードが。

火で焼くだけというあまりにもシンプルな調理。料理と呼べる類いではないのは確かだ。

薪が燃える音だけが鳴り、静寂が訪れる中で、アカメが唐突に口を開いた。

「主水はどうしてこの稼業を始めたの？」

アカメの表情はいたって真面目なので、いきなりな質問ではある

が、何かあるのだろうかと考え、主水もはぐらかすことなく答えることにする。

「俺が奉行所、ここでいやあ警備隊に配属された時は、今と違って正義感に燃えていた。しかし、社会の真実を知つちまったんだ。金や権力にものをいわせて、あこぎで汚ねえことをするつてな。で、俺はどこにもぶつけようがねえ怒りを覚えやる気を失った。そんな時だった。俺が以前勤めていた所で知り合った、念仏の鉄、想像しやすく言うとな版のレオーネみてえなやつ、それと棺桶の錠、ブラートみてえなやつとの二人と悪人を斬る、この稼業に足を踏み入れたんだ。最初は、今までぶつける場がなかった怒りを悪人にぶつけることが主な始まりだった。それが始まりで、何度か解散や解体を味わいながらも、何故か気がつくところの稼業に戻っているつて感じで、今回もナイトレイドに加入したつてとこだ。だからお前たちみてえな大層な目標などはなかった」

主水は昔を懐かしむように、遠くを見ながら話した。

その表情はどこか寂しげな、哀愁を秘めたものだった。

その主水の話の話を静かに聞いていたアカメは、どこか言いにくそうに再び口を開く。

「主水は……仲間を……失ったことはあるの？」

主水は問いかけるアカメを見て、この問いこそがアカメが一番知りたがっていることだと理解した。

故に、主水にとつても話しやすいものではなく、そして、あまり触れられたくないことだが、仕事人の先輩として話すことにする。言葉を選びながら、慎重に。

「ああ、この稼業をやつてりやあ当然経験することだ」

主水が発した『当然』という言葉に少々反応をしながら、アカメは伏し目がちに聞いている。

「俺の仲間も今まで何人も死んできた。この稼業をやつてりやあいつ死んでもおかしくねえと、覚悟はしていたが、誰かが死ぬたびに、やりきれねえ思いをいつも抱えていた」

「主水でもそうだったの」

「ああ」

アカメは自分をどんな冷血漢と見ていたんだと、少しショックを受けた主水である。

「で続きだが、そんな思いをしたくなくて、仲間との距離を置いた時もあったな。また、俺はこの稼業を甘く見てるやつや、実を見ずに理想論ばかり語るやつには厳しく接するようになった。まあ死んで欲しくねえからな」

主水は少し照れながら最後の方は話す。

アカメも少し微笑んだ。僅かでも心が安らいだなら良かったと思いながら、更に続ける。

「つてことで、俺は、恨まれようが、疎まれようが、うざがられようが、仲間入りしたからには新入りには厳しく接していく。お前は新入りには優しくしてやってくれ」

「ありがと主水……」

顔を伏せたまま、アカメはポツリと呟いた、しばらく余韻に浸るのかと思っていた矢先に。

「主水って何歳なの？若く見えるのに、話からしたら結構な歳みたいだけど」

適切な突っ込みに主水はすぐには返せない。

実際の年齢は、見た目とは違いかなりの高齢。

だが、若返っているとは言えない。若返ったなどという非科学的なことなど信じられるはずはないからだ。

「まあ若くはねえな、多分ボスよりは若いと思うが、30歳前後ぐらいだ」

自分の歳すら断言できない情けなさを耐え苦笑いを浮かべ困ったように語る。

その刹那、言い様のない、威圧感と圧迫感が背後から主水に襲いかかる。

「私は20代だ!!」

頭に訪れる衝撃。

突如背後に訪れていたナジエンダが、ひきつった笑顔を浮かべ、主

水の脳天に、鋼の鉄拳を降り下ろしていた。

そんな微笑ましいい？やりとりをしていると、タツミを引き連れたレオーネが。

「ここに皆固まっていたのか。でも珍しいな主水の旦那とアカメが一緒にいるなんて」

「ん」

「ありがとう」

アカメから手渡されたエビルバードの肉を頬張るレオーネ。こちらもアカメと同様に食には貪欲だ。

「まあこんなこともあるだろ」

主水もアカメから肉を受け取り頬張りながらレオーネに答える。

「で、レオーネ。タツミに全メンバーの面通しはさせたのか」

「道中説明したし、ここで全員に会ったことになるよ」

「そうか。もう覚悟は決めているようだが、形だけはとつとかなくはないな。レオーネ全員集めてくれ」

ということ、ナイトレイド全員の前で入隊の意識確認が形なりに行われることとなった。

しんと静まり返る執務室に、ナイトレイドのメンバーが一同に集まった。

タツミは緊張した顔をしているが、仲間達は然程気にしてはいない。

「ではタツミよ。我らナイトレイドに加わるか？」

問い掛けられたタツミは一回、二回と深呼吸をすると、大きな声で宣言した。

「ああ加入する。話を聞いたらなんか正義の味方みたいだからな」

一瞬の静寂の後に笑い出す仲間達。

しかし、主水はあからさまに不機嫌な顔をして、大きく舌打ちをする。

「小僧勘違いすんじゃないやねえ。どんな御大層な理由や大義名分であろうと、殺しは、殺しだ。それが正義になるはずがねえだろうが」

主水は荒々しい口調で、タツミの発言を一刀両断する。

タツミは主水のただならぬ威圧感に気圧され黙りこくっている。

皆は一様に主水の言う正論に頷いている。

「そうですね。勘違いしてました。すいません。俺をナイトレイドに加入させてください」

素直に自分の非を認め、めげずに頭を下げるタツミにナジエンダも笑顔で頷き。

「ようこそナイトレイドへ」

と迎え入れた。

第12話

沈黙の中、室内にはペンや筆が走る音、そして、書類が捲られる音のみが、リズムカルに響いている。しかし、中にはいつこうに動かない筆もあるが、それには敢えて降れはしない。

そんな静寂が一声で壊される。

「中村！またお前の書類間違っているぞ！直してやったから見っておけ！」

「申し訳ありません、オーガ隊長」

主水は平伏しながらオーガから書類を受けとると、またペコペコしながら自分の机に戻った。

「つたく、昨日今日で何度目だ！てめえは茶汲みしかできねえのか！」不機嫌なオーガを迸らせるオーガの言葉に、どこからともなく笑いが漏れる。

「疲れてるの。昨日からなんか間違い多いみたいだけど」

主水が自分の机に書類を置き見ていると、隣の席に座るセリユーが心配そうに声を掛けてくる。

「この所、提出した書類で間違いを連発している主水を、氣遣ってのことである。」

「書類仕事が苦手なんで…」

苦笑いを浮かべ、疲れた顔をしている主水。

今主水は重要案件を抱えているためこのような状態なのである。

それは、約3日前のことだった。

体を伸ばし、大きな欠伸をしながら市内を徘徊していると

「おう主水の旦那！」

爽やかな笑顔で手を振る見覚えのない男が。

流れるようにサラサラな髪、目を見張るほど整った目鼻立ちをした、かなりのイケメンである。

「誰だ？」

「そりゃあねえぜ主水の旦那。ちよつと待ってくれよ」

櫛を用意して前髪を整え始める男。

みるみるうちに、よく見覚えのある、フランスパンのような髪型が形成される。

「おおつ、ブラートじゃねえか」

「やつと気づいてくれたか」

切な気な笑顔を浮かべるリーゼントのブラート。

主水に気づかれなかったのがショックだったらしい。

「すまんすまん。お前がここまでいい男だとは思わなくてよ」

「いい男!!……旦那今から鰻屋行かねえか、俺奢るぜ」

頬を染めたブラートが主水の手を握り、危ない方面へ向かいそうになる。

以前の失敗を繰り返す主水。

主水の血の気がとんでもない勢いで引いていく。

(なんとかしなくては俺の大事なものが)

主水は頭をフル回転させ、逃げ道を探す。

「今日はなんでいつもと違う髪型でこんな場所にいたんだ?」

捻り出した答え。

ブラートはそうだったと残念そうな表情に。

「そうだった。今日急に遠征することになってな。準備をするために買い物してたんだよ。ただ顔ばれしてるから変装してな」

「一人か?」

主水は話を変えることに成功し、気を落ち着けて話す。

先程まで新境地が開けそうで、恐怖で顔面がひきつっていたぐらいだが。

「俺とマインとシェーレとラバックでな。で人員が足りないから少し顔出してやってくれねえか」

面倒見がいいブラートだからこそその頼み。その気遣いに感心し、主水も二つ返事で了承する。

「旦那が行ってくれるなら安心だ。じゃあな。今度一緒に鰻食いに行こうぜ」

ウインクを残しブラートは颯爽と去っていった。

この性癖さえなければ、本当にいいやつなのにと残念に思う主水であつた。

「よっー！」

主水はブラートに頼まれたので、警備隊の仕事を早々に切り上げ、ナイトレイドのアジトに顔を出していた。

「主水さんこんにちは」

「おつ主水の旦那いいところに」

室内にいたタツミが丁寧挨拶をし、レオーネはちよつと来てみというふうの手招きをしている。

「新たな仕事か？」

主水が部屋に入りナジエンダの近くに歩みよる。

「ああ、新たな依頼だ。ちようどお前に来てほしいところだったんだ」
ナジエンダはそう言うと、二枚の写真を取りだし、机に主水に見えるように提示した。

その写真を見た主水に衝撃が走り、顔が無意識にひきつる。

(マジかよ…)

今まで築いてきたものが、バラバラと瓦解していくのではという強烈な不安に襲われる。

「今回の的はお前が属している警備隊の隊長オーガと油屋のガマルだ！」

(こんな日が来ようとは…)

主水が恐れていたことだった。

確かに警備隊長オーガには後ろ暗い噂が、どこからともなく伝わっていた。

警備隊内でもタブーになってはいたが、それでも伝わって来るほどだった。

主水にとってオーガを斬るのは別段問題はない。

しかし、オーガを殺したその後に大きな問題がある。

セリユード。

セリユードは純粋にオーガを尊敬し、またオーガが裏で悪どいことを

しているということを全く知らなかった。

そのため、オーガが殺されたとなると、殺したナイトレイドへの、そして悪人への強烈な怨みから、また歪んだ正義にたち戻りかねないということが、主水にとって大きな問題であった。

「どうしたの主水。大丈夫？」

何も耳に入らず、呆然と動かなくなった主水を心配し、アカメが主水の前で手を振る。

「すまん。大丈夫だ」

「よし、では主水も含めて作戦を——」

「皆すまないが。今回の仕事は俺に全て任せてくれないか」

ナジエンダが本題に入ろうとした矢先に、主水が真剣な表情で要求した。

「どういうことだ主水」

ナジエンダの視線が自然と厳しくなる。信用している主水だからこそ、きちんと説明してほしいという思いが表れてのことだ。

「ちよつと事情があつてな」

主水も仕事に私情を挟むなどもつての他だということは、重々理解していた。

私情を持ち込んだゆえに、命を散らした仕事人をも見てきた。だからこそ、仕事人として、あつてはならないと、深く自覚している。

しかし、それを持ってしても、自分を律することはできなかった。今までの関わりから。

主水も熱の通った人間であつたからだ。

「皆すまん。すっかり二人は殺す。今回だけは譲ってほしい」

主水は深々と頭を下げた。

主水の今までに見たことがない姿に、困惑を覚えるが、主水が頭をあげるころには、皆笑顔だった。

「しょうがねえな。今回だけは譲ってやるか」

「主水さんにそこまで言われたら譲るしかないですよ」

「主水なら大丈夫だとは思うけど、気を付けてね」

レオーネ、タツミ、アカメの言葉に心が熱くなる。

「すまねえな」

たった一言で礼を言った。主水の照れ隠しである。

「はあ、仕方がない、皆がそこまでいうならな。じゃあ今回は主水に任せる。ただし、これは仕事だ。主水に限ってないとは思いますが、必ず殺せよ」

ナジエンダが折れた形となり、オーガ・ガマル暗殺の仕事は主水に一任される運びとなった。

月明かりのみが光源の薄暗い道を、主水は、険しい思案顔で歩いていた。

主水は仕事を任されるまではこぎ着けたが、まだ明確にどのようなしようという案ができていなかったからだ。

今主水がアジトから帰宅の途についている、暗い道同様、五里霧中、暗中模索の状態である。

確かにこの世界では仕事の期限はない。仕事を引き延ばしても、仕事人最強の死神が現れて始末されるような恐れはない。

しかし、信用して譲ってくれた皆の体面を考えても、長々と仕事を引き延ばす訳にはいかない。

まさに主水は追い詰められていた。

この世界に来て初めてのことである。

ゴールも、さらにはスタートラインすら見えない中、主水はもがき苦しんでいた。

頭の中では、ナイトレイドだと分からないように殺してしまえ、という妥協案が浮かんでいるほどである。

「もーんど君！」

いきなり背後から飛び付かれよろける主水。

一体なんだと振り返ると、いつもと変わらぬ笑顔のセリユーが。

僅かだが柔らかい物が背中にあたるような気がする。

「せ、セリユーさん。どうしたんですか？」

「今ね、盗賊を捕まえて警備隊の隊舎に連れていったんだよ」

「殺さなかったんですね」

「うん。倉に忍び込む時にジャンプして入ったって言ってたから、足

はもらったけど、命は取らなかつたよ」

セリユーはあの頃から本当に成長していた。

前までであれば、悪であれば、容赦なく殺してきた。

しかし、今では、罪の重さを判断して対応するようになっていたのだ。

このセリユーをあの時に絶対に戻してはならない。

主水は強く心に誓った。

主水は帰宅してからも、考え抜いた。

そして、ついに答えに辿り着いた。

前の世界でもしたことのある殺しかたであり。

いくつか手順を踏まなくてはならないものもあるため、決行は下調べした後に行うこととなった。

そして、次の日から準備を始めることにした主水であった。

第13話

外から鳥の囀りが聞こえ、清々しい朝日が射し込んでいる。

普段であれば、出仕時間ギリギリに目を覚まし、急いで家を出る主水であるが、今日はするべきことがあるため、朝早くから起きていた。

(一応持つていくか…)

主水は掛け軸の裏から金貨を取り出す。

この世界についてから、コツコツと貯めていたものである。

(使わなくて済めばいいが…)

切ない顔をして、主水は家を後にした。

今日すべきことは二点。

一点目は、警備隊長オーガと油屋ガマルが顔を会わせる料亭を探すことだ。

オーガ暗殺の依頼をした女性は、オーガとガマルが牢屋で話をしているのを聞いたと言っていたが、伝え聞いていた噂だと料亭で会っているという話があったり、儲けの何割かを上納する場があつて然るべきであるからこそ、必ずそのような場を設けるはずと考えてのことである。

二点目は、代筆屋を探すこととだけ言っておこう。

主水はピックアップしておいた帝都の高級料亭を一軒、一軒巡っていた。

帝都と言っても、高級料亭であれば、数は限られてくるのでそこまでの苦労はなかった。

さすがに高級料亭となると、朝早くから準備を始めている。

下女が料亭の玄関の掃き掃除をしている。

(あの女にするか)

主水はそう考えると、下女に歩みより、話しかけた。

「少し聞きたいことがあるんだが。聞かせてくれねえか？」

「はい…」

下女は訝しげに主水を見る。

いきなり話しかけられれば警戒するのも無理はないことである。

「この料亭には、警備隊隊長のオーガと油屋ガマルが来ることはないか?」

「個人的な情報は答えかねます」

当然の答え。

高級料亭であるからこそ、客の情報は漏らさない。しっかりとしていた。

江戸であれば、同心の権威の証である十手をちらつかせれば、大抵のことは聞き出すことはできるが、この世界ではそれはできなかった。

(一軒目からか…)

主水は渋々懐から財布を取りだし、崩してきた銀貨を取りだし、見えないように下女に握らせた。

「いいのかい?」

「ああ、取つといてくれ」

あからさまに機嫌が良くなった下女は辺りを見回し、誰もいないのを確認すると、「私が言つたつて言わないでくれよ」と釘を打つた後、主水の耳元でこそこそと囁いた。

「隊長は妙に羽振りがいいみたいだね、週に一回うちに来るんだよ。いつも油屋のガマルを従えてだけだね。今週で言えば明明後日になるね」

(一軒目で引き当てるとは幸先いいぜ)

主水は話を聞くと、

「ありがとな」

と一言残し去っていった。

(次は代筆屋か…この帝都じゃ見たことねえな。藪から棒に探すよりその筋のやつに聞くか)

主水は踵を返しある所に向かった。

ちなみに代筆屋とは、恋文等を依頼人の代わりに書くという仕事である。

貴族の屋敷と見紛う程の屋敷に主水はやって来ていた。

「フリーは居るか？」

「これはこれは中村様。お待ち下さい」

主水がやって来たのは帝都に存在するとある組であった。

そして、フリーとはその馴染みの構成員で、主水と親しくしている者である。

「お疲れ様です主水の旦那。何か御用でしょうか」

「ああ、実はな——」

主水の話聞き、フリーは腕を組み考え込む。

「旦那の言う代筆屋はありませんが、偽せ証文をでっち上げるプロなら知っていますぜ。いやいやうちは健全ですから使ってませんよ。裏で活躍してるつつうんで知っているだけでして」

「いいじゃねえか。案内してくれねえか」

その後、主水は話をつけることができた。とある条件は出されたが。



いくつかの手筈を整え、遂にオーガ暗殺決行の日が訪れた。

主水はオーガとガマルが顔を会わせるといふ高級料亭に向かった。

料亭に着いた主水は奉公人が使用する裏口から人目を避け入り込んだ。

高級料亭内は、純和風の内装で、廊下には一定の距離ごとに提灯が掲げられ、廊下から見渡せる庭には、季節ごとの花が植えられ、庭に作られた池には蓮の花が浮かび、錦鯉のような魚が泳いでいる。また庭の端には、音で時間を刻む鹿威しが置かれている。

目にも耳にも楽しめる趣向がなされている。

(広いなまずは部屋を探さなくちやならん)

主水はオーガを探さなくてはならないが、それでも人に見られてはならないので、屋根の上に飛び上がり、天井裏に忍び込んだ。

気配を消し、物音もたてずに天井裏を渡りながら、部屋をしらみ潰しに探っていく。

(ちつ、こゝも違うか)

天井裏から覗いていくが、どこも外れで、貴族風な男が呑んでいた、身分の高そうな役人風の男が女性に酌をさせるなど、いいご身分だなどと思える光景ばかりが垣間見えた。

渡り廊下を渡り離れに向かう。

(ここが最後か)

天盤を外し、覗くと、遂に警備隊長オーガを発見した。

二つの膳が置かれていることから、そこで二人が会っていることが伺える。

ただ、二人が揃っていないと上手く事が運べない為、様子を伺っていると。

「ガマルのやつなににしてやがる。便所にいったまま帰ってこやがらねえ！」

酒で酔っているのか、はたまた、苛立ちを隠しきれないのか徳利を壁に投げつけ、辺りに破片と中身の酒が飛び散る。

(殺るか)

主水は天井裏からスルリと廊下へ降り、障子を隔てた廊下から声を掛けた。

「オーガ隊長、お耳に入れておきたいことがございました。中村主水参上つかまつりました」

「ああ？中村だと。急ぎのようか？」

「はい…」

「入れ」

酔っているため、思考が鈍っているらしく、何故誰も知らないこの場所に主水が現れたのかという疑問にさえ気づくこともなく、平然と中に招き入れる。

「失礼します」

主水は頭を下げオーガの前に腰をおろす。

「で、急ぎのようとは何だ？」

「あなた様の命を」

「ああ聞こえんぞ」

「もらい受けに来ました」

主水は中腰になり、そのまま帝具アレスターを一閃した。
いや、端から見れば一振りと見えるが、実際は一瞬の内に、5発の打撃を加えていた。

首、四肢という五ヶ所を。アレスターにうち据えられたオーガは、四肢を封印され座ったまま動けず、首にも入れられたため、声を発することも出来なくなっている。

「……………」

殺意に満ちた瞳で主水を睨み付ける。

「少し待っていてくれますか」

主水はオーガに歩みよると、隣に置かれているオーガの剣を手に取り、抜いた。

「さすが隊長、手入れもしっかりなされていますね」

主水が、オーガの剣を抜いて、軽く素振りをしていると、障子に影が射す。

どうやらガマルが帰ってきたらしい。

主水はしゃがみ込み、オーガに告げる。

「実は、今夜男が二人死ぬことになりました。一人目はあなた。二人目は……………」

主水は振り向き様に、障子を開けて入ってきたガマルを逆袈裟に切り上げ、斜めに両断した。

「やはりこの剣は斬るといふより、叩き潰すと言ったほうがあっていな」

ガマルの返り血で部屋中が血に染まる。

なぜだか、一番浴びているはずの主水は一滴も返り血を浴びてはいなかった。

「次は隊長の番です」

「……………」

歩みよる主水を見るオーガは何か気づいたような素振りを見せた。

今の一部始終を見て、主水が噂されているナイトレイドであり、自分とガマルを殺しに来たのだと気づいたのだ。

思い当たることも多分にあつたためであろうが。

「あんたの思った通りだよ、オーガ隊長」

主水は剣でオーガを貫いた。

吹き出す血液、苦悶に顔は歪むが、声一つ出すことができない。

しばらくたち、血液の流れが緩くなると、オーガの瞳孔が開ききり、その生命活動を停止した。

主水はオーガの手を取り、刺さったままの剣の柄を握らせ、一通の手紙を置いた。

その手紙こそ、主水が、偽せ証文をでつち上げる男に書かせたオーガの遺言書である。

遺言書を書くにしても、偽物として字を似せないといけない。

そのオーガの字の特徴を知るために、この二日間、主水は書類で間違いを繰り返し、几帳面なオーガに手直しをさせ、資料を手に入れたのだった。

主水はそのままその場を立ち去った。

次の日、警備隊隊舎は震撼していた。

「オーガ隊長が自害したんだってよ」

「なんでも、遺言書に自分の罪を全て記してあり、良心の呵責に耐えられなくなったってあつたらしい」

「一緒に悪事を働いていたガマルを斬った後に自害したらしい」

以上の事が真しやかに隊舎中で囁かれていた。

「も……主水君……」

セリユーがフラフラと危なげな足取りで、主水の前につくと、崩れ落ち、床に腰をつけて、鳴き始めた。

「オーガ隊長が……オーガ隊長が……死んじやったよ。また大事な人が……私を残して……」

主水は号泣するセリユーの元に歩みより、静かに抱き締めた。

「オーガ隊長は自分の罪を悔いて、自害なされたようです。その際、悪人のガマルを斬り正義をまっとうなされました。御立派な最後じゃないですか」

セリユーに慰めるように語りかける際、主水の心は僅かに痛んでいた。

「そうだよね…オーガ隊長は…立派だよね…」

嗚咽を漏らしながら反芻し、続けて

「主水君は…絶対に…私を残して消えないでね…」

懇願するように呟いた。

しかし、いつ死んでもおかしくない稼業に身をおく主水は、それに答えることはできなかった。

第14話

『オーガ自害事件』が世間を一時騒がせたが、やっとその混乱も終結し、警備隊も新たな旅立ちを迎えていた。

(なんでこんな朝早くから出仕しなくちやならないんだ)

主水は心の中で愚痴を垂れながら、場所もわきまえず、大あくびをしていた。

主水達警備隊は、通常時とは違い、朝早く出仕させられていたのだ。「なにがあるのかな」

あの事件以来沈みがちだったセリユードだが、以前と変わらないように明るく努めている。

しかし、回りから見ると、無理に明るくしていると手取るように分かり、やはり痛々しく、皆心を痛めていた。こればかりは時間が経過するのを待つしかない。

「皆静まれ！」

室内に入ってきた、警備隊副隊長が皆の前に立つと、私語を慎むように、指摘する。

「今日は、新しい警備隊隊長を紹介する」

ざわつく室内。

あんなことがあったのだから、新しい隊長が来るのは当然である。

しかし、皆は副隊長がそのまま昇進するものと思っていたため、ざわついたので。

「御越しくださいタカナ隊長」

「ええ」

(どこかで聞いたような名前、そして声だ)

主水は嫌な予感がヒシヒシと感じていた。なにやら生温い居心地の悪さ。

つかつかと室内に入ってくる新警備隊長タカナ。

主水は、心臓をわしづかみにされるような衝撃を受けた。

(なんでこの世界に、筆頭同心田中様が!!)

皆の前にたったのは、江戸南町奉行所での主水の上司筆頭同心田中

と瓜二つの人物であったのだ。

ナヨナヨした感じの優男、青白くほつそりしたモヤシのような見た目である。そして、生き写しのようになり、まさにオカマという、武闘派揃いの警備隊に似つかわしくない人物である。

「皆さん。私がいから貴方方の隊長となるタカナと言います。ちよつとその貴方！」

自己紹介の途中で、不機嫌そうな表情で主水を指差すタカナ。

「中村と申します」

「中村さん、私が話をしているときは、呆けてないで、真剣に聞きなさい！」

（まんまじゃねえか…）

澁々主水は頭を下げた。

「私が来たからにはこの警備隊を素晴らしいものにしていくので、皆さんも手を貸してくださいね」

一斉に警備隊員は拍手をする。タカナもまんざらではない表情だ。

（厄介なヤツが来ちまつたぜ。これならオーガのほうがまだましだったぜ）

主水は澁い顔で深いため息を吐くのであった。

そのように、主水は嫌がつてはいるが、南町奉行所の筆頭同心田中とは、そこまで険悪な関係ではなかった。見下されてはいたが。

田中の見合いを主水

と妻のりつとで取り計らったこともあるぐらいだ。

結果は、見合い相手に「こんなオカマみたいな人はいや」と言われて上手くいかなかったが。

「中村主水市中の見回りに行つて参ります」

「ちよつと待つてください中村さん」

颯爽と居づらい警備隊隊舎から脱け出そうと試みた主水であったが、タカナに待ったをかけられた。

「なんででしょうか田中様」

タカナの眉間に皺がより、視線が一層厳しくなる。

「中村さん！私の名前はタカナです。田中なんていなか臭い名前じゃありません。気高き菜の花です。全く田んぼの中なんて汚ならしい名前と間違うなんて。失礼ですよ」

烈火の如く憤るタカナに、主水はめんどくさいと感じながらも、話を進ませたいので、誤り先を促した。

「オホン！話を戻しますと、貴方一人で行かせるのは不安があります」
主水を一刀両断。まさに主水の行動を見抜いているようだった。

「いやですねタカナ様。私でも市中の見回りぐらいできますよ」

「いいえ心配です。セリユースさん中村さんの監視お願いしますよ」
「分かりました」

タカナはセリユースの返事に満足そうに頷くと、主水になんらかの目配せをしてそのまま去って行った。

（まさかセリユースが落ち込んでいるのの気分転換に連れていけつてことか）

ターナカの真意は読み取れないが、警備隊一人一人に目を配っていることが伺え、ほんの僅かだが、好感度が上がった。

「行こうか」

コロを連れたセリユースが弱々しい笑みを浮かべて、主水の元に寄り添っていた。

隊舎から出ても二人共に黙り込み、会話をすることすらなかった。

主水も心配ではあるが、こればかりはどうすることもできなかった。

帝具であるコロも、セリユースを心配しながらも、何もできないのもどかしく思っているようだった。

そんな折り

「ねえ主水君。私ね今回隊長が死んじゃって、学んだんだ」

「何をですか？」

雲一つない青空を物思いに沈んだような表情で眺めながら呟く。

主水も急かすことなく、優しく相づちをうつ。

「人の命は大事だなんて。だから、私はこれから帝都の人を護っていきたい。悲しい思いをさせたくないから。でも悪人も命を持っているから、少し裁きも考えてあげようと私は学んだの」

セリユートの瞳には、先ほどまでの、弱さは感じられず、意思の籠った力強さすら感じられた。

主水はセリユートの強さに感心し、命の大切さを知った今のセリユートならば、これからは、以前のような悪鬼になることはないと確信した。(結果的にオーガ隊長が命を掛けてセリユートに大事なことを教えたことになったのか)

主水は皮肉を感じながらも、温かい眼差しでセリユートを見詰めていた。その眼差しは自分の娘の成長を喜ぶ、父親のものであった。

「セリユートさん、ここの近くに美味しい甘味所があるんですが行きませんか？奢りますよ」

主水は甘い物が好きで、ちよくちよく市内巡回をサボり食べに行っていたので、全て把握し、その知識量は誰にも負けることはないほどであった。

「でも、今は警備中だよ。ダメだよ悪いことは。主水君の指一本貰わなくちやいけなくなっちゃうよ」

晴れ渡るような笑顔で話すセリユート。いまいち罪の重さの判断には危ういものがあるが、いつものセリユートに戻っているのは喜ばしいものだった。

「分かりました。では巡回を終えたら行きませんか」

「そうだね。じゃあ巡回しちやおうね。楽しみだな」

主水とセリユートはまるで親子のように仲良く市内を巡回しようと、歩き始めた時だった。

目の前を警備隊の一団を引き付けられて、慌ただしく走っていくタカナの姿が。

「タカナ様どうかされましたか？」

「中村さんとセリユートさん。いいところに、大きな問題が起こりました。続きなさい」

タカナは早口で主水とセリユーに説明し、指示すると、再び真剣な表情で走り出した。

主水とセリユーも切迫した雰囲気を感じ取り、後に続いて走り出した。

裏通りに面した現場に着くと、その場は、血の海が広がり、その中に、首が切断された警備隊員の死体が浸っていた。

「うっ……！」

タカナはハンカチで口を押さえ、嗚咽を漏らし、涙目になりながら、目を反らす。

「な、中村さん、死体を調べといて下さい。私はすることがありますので」

タカナは逃げるように走り去った。

(逃げやがったな)

主水は呆れながらも、言われた通り死体を調べる。

(かなりの腕だな)

首の切断面を見ると、乱れのない綺麗な切断面のため、主水は犯人は、かなり腕がたつ者と判断した。

「主水君。これ首斬りザンクかも」

「首斬りザンク？」

聞いたことがないと言った感じで、首を傾げていると。

「元々首斬り役人をしていた男だ。多くの人間の首を斬ってきたことで、狂気に取りつかれて、辻斬りになったという男だ。腕がたつだけでも厄介なんだが、さらに厄介なのが帝具を奪い、使っているという所だ」

近くで死体を観察していた、副隊長が説明する。

副隊長の険しい表情からも、かなりの危険人物だと言うことが判断できる。

ただ、主水の頭の中には、以前の仲間の〈首斬り朝〉(首斬り役人であり、公儀御試御用の山田朝右衛門)が浮かんでいた。

そのことから、

「厄介だな」

と主水は無意識に呟いていた。

更に深く調べようとした時だった。

「ヒイイイイー!!」

辺りに絹を引き裂くような悲鳴が。

「あれはタカナ様の悲鳴だよ！」

悲鳴の聞こえた場に向かうと、腰が抜けたのか、地面に腰をついて、尻を刷りながら後退りし、刀を左右に振るタカナと、コートを纏い、額に腫のような物を付け、血が滴る二降りの剣を持ち、「愉快、愉快」と呟く男の姿が。

「新警備隊長の首いただく」

タカナに向かい振り下ろされる凶刃。

タカナ自身も諦めたのか、目を瞑った。

しかし、何時になっても凶刃がタカナの首を落とすことはなかった。

タカナが目を開け、前を向くと、大きな姿のコロが立ちほだかり、その身をもって斬激を受け止める姿が視線に入った。

「もう誰も殺させない。お前はそのまま放っておいたら死ぬ人が増える。だから殺す!!」

新たな正義を心に秘めたセリユウがザンクに立ち向かった。

第15話

日が落ち、辺りの外灯に火が灯る。

明かりに照らされた幾多の血を吸ったザンクの刃は、妖艶なオーラを醸し出している。

「愉快、愉快。まさか帝具使いと戦えるなんてな」

ザンクはまるでこれからの戦いを楽しむかのように、セリユーに話しかける。

セリユーはザンクの話に答えることない。

だが、視線はザンクから一瞬も外すことなく、駆けつけた副隊長や警備隊員に

「タカナ隊長を連れて逃げてください。私とコロでザンクを倒しますから」

と頼んだ。

これから、ザンクと帝具を使用した戦いとなる。

帝具使い同士が戦えば、どちらか一人は必ず死ぬ。それほどの戦いに帝具を持たない者が巻き込まれば、まず助かることはない、と判断したためである。

「……分かった。ザンクは君に頼むしかないか……すまない。頼んだよ……」

「はい、任せてください」

副隊長としたら苦渋の判断ではあった。

しかし、自分たちが残ることで、セリユーの足を引つ張りかねないと言うのが、セリユーの頼みに従う一番の理由であった。

「私は残りますよ。そして、危なくなったら迷わず手を出させてもらいますから」

主水の言葉に笑顔でセリユーは頷くと、

「行くよコロ！悲しみを止めるため、食いちぎれ！」

コロは体勢を低くし、そのまま、地面が抉れる程の踏み込みでザンクに肉薄する。

「素晴らしい。楽しい戦いになりそうだ」

ザンクはにやけながら、コロの怒涛の攻撃を、避けたり、剣でいなし、隙が生じると斬激を繰り出す、この繰り返しである。

しかし、生物型の帝具の強み、痛みを感じることもなく、しかも、再生するので、攻撃を恐れることなく、猛攻を仕掛ける。

「厄介だな」

ザンクが下がった瞬間、

「トンファガンー」セリユーがザンクの死角となっていた、コロの影から飛び出し、トンファガンを放つ。

「愉快、愉快、中々のコンビネーション」

しかし、余裕の笑みを浮かべながら、二本の剣で飛び交う弾を漏らすことなく、切り落とす。

「今よコロー」

弾を切ることに集中しているザンクにコロは鋭い牙が並ぶ口を開けて、食いちぎるように襲いかかった。抜群のコンビネーション。相手の動きを片方が止め、残る片方が仕留める。長い間相棒として共に戦ってきた、セリユーとコロだからこそできる戦いだっただ。

そして、これで決まったとセリユーは思った。

しかし、ザンクは予期していたかのように、体を半身にして反らしコロの突撃を避け、頭上を通過するコロに剣を突き上げた。

飛びかかった勢いが合わさることにより、コロの腹部は深く抉られ倒れる。

深傷のため即座の再生とはいかず、動きが止まる。

「嘘でしょー」

セリユーの表情に驚愕の色が滲む。

今までこのコンビネーションで死ななかった敵はいなかったからだ。

「そう言えば言っつてなかったな。この俺の帝具スペクテッドは、未来視ができてな、ほとんどの攻撃が俺の前には無意味なんだ」

「未来視ができて私とコロのコンビネーションがあれば」

セリユーは悔しげに答えるが、ザンクは嘲笑うかのように口角を上げる。

「愉快、愉快。お前は、俺がこの生物帝具を倒せないと思っ
ていると思
うが、甘いぞ。スペクテッドには、透視能力もある…つまり」

ザンクの言いたいことを悟り、セリユートの表情が青ざめる。

「生物型帝具の唯一の弱点、コアの位置も一目瞭然だ」

ザンクはコロを凝視すると下卑た笑みを浮かべる。

「そこにあるのか」

「コロ逃げて!!」

セリユートが叫んだ。

今のままでは、コロまで私の元からいなくなってしまう。もうこ
な思いはしたくない。

セリユートの本音が出た時だった。

「安心していいぞ」

ザンクはいつの間にか、コロではなく、セリユートの眼前に迫っ
た。

セリユートの気がコロに向いている隙に間合いをつめたのだ。

「!!」

「俺は帝具のコアなんかより、人間の首が欲しくてな。つまり、その恐
怖に歪んだ首をコレクションに加えたいんだ!!」

交差に構えた凶刃が闇とセリユートの首を切り裂く——寸前のこ
とだった。

一つの影が、ザンクとセリユートの間割り込んだ。

「いいかげんにしとけよドブネズミ！」

ドスの効いた、冷めきった声で、割り込んだ主水は、縦に構えたア
レスターで剣を受け止めながら、射抜くような視線を向け呟いた。

ザンクは主水の突然の出現と、身も凍る程の圧力に狼狽する。

しかし、底知れない恐怖に体が金縛りにあつたように、動かず相対
しながら冷や汗を流すしかない。

主水は鏢迫り合いの状態から、アレスターを振りきると、ザンクの
巨体が後方に飛んだ。

「後は私に任せてください。セリユートさんもよく頑張りましたが、な
にぶん今回は帝具の相性が悪かった。落ち込む必要はありませんよ」

先ほどとはうってかわって優しい声、優しい視線で慰めるように、話す主水。

(いつからここまで甘くなったんだ俺は…)

そうは思うが、あまり嫌な気分ではなかった。

今まで子供がいなかった主水にも、手のかかる大きな娘ができ、父性が出てきたのかもしれない。

主水は前を向くと、一転して、眼光が鋭くなる。

「安心しなザンク、これが裏(の仕事)なら、いたぶって、刃の痛みを味わわせて殺すが、これは表(の仕事)だ、プライドを砕いて、捕縛してやるぜ」

主水はセリユーには聞こえないように、静かにザンクに宣言する。

「お前からは、俺と同じ臭いがする。たくさんの血の臭いだ。お前にも聞こえるのではないか、この手で始末してきた人間の、怨嗟の声…」

どこか焦点が定まっていないう瞳で馴れ馴れしく話しかける。

「はっ、聞こえねえよそんなもん。ただな、聞こえたとしても、俺達はそれをも背負う覚悟をもってこの稼業に足突っ込んだんだ。お前も同じ道に踏みこんでんだ、最後まで責任もって背負っていくんだな。あと僅かな命だろうが」

主水はアレスターを晴眼に構える。

「あああああああ！俺の悩みを分かち合える者が現れたと思ったんだが!!悲しいねえ!」

形振り構わず突っ込んで来るザンク、そこから熾烈な攻防戦に入る。

二人の武器が闇に煌めき、武器通しが触れあう度に火花が飛び、高い金属音が幾重にも、鳴り響く。

ザンクが攻撃を加えていたかと思えば、いつの間にか主水が攻撃を繰り返している。

どちらも、一步も引かない拮抗した戦いだど、背後で見ていたセリユーは、手に汗握って祈るような気持ちで戦いの成り行きを見守った。

「俺には未来視がある絶対に負けん!!」

計り知れないスピードで繰り出される斬激と共に叫ぶザンク。

主水は依然として涼しい顔で攻防をこなす。

一瞬のようでありながら、長くも感じる熾烈な攻防戦。のはずだった——その時、主水は疲れたような顔をしてザンクに問いかけた。

「てめえが今後取れる選択肢は三つだ。一つ!」

「ぬうっ!」

「このまま温い戦いを繰り広げて、おめえの武器が破壊されて、俺に捕縛されるか。二つ!」

「ぐっ!!」

「少しペースを上げて、未来視でも対応できないスピードで蹴散らされ、捕縛されるか。三つ!」

「がっ!」

「俺の避けようがねえ奥の手を身をもってくらうか」

鋭かった眼光がさらに鋭さを増し、それと共に、のし掛かるような威圧感に苛まれる。

「ヒッ!!」

ザンクは今までに感じたことのない、底知れぬ恐怖を味わい、バツクステップを踏み、間合いを取る。

(なんなんだ今の感覚は。今まで感じたことがないものだったぞ。ここはこれで戦うしかない)

ザンクは、目を見開き、帝具の最後の能力を使用する。

主水の視野が揺らぎ、目の前のザンクの姿が変わった。

(なんだ俺は夢でも見ているのか)

主水は目の前に現れた姿に呆気に取られた。

「帝具スペクテッドの能力。幻視だ。見るものの一番大事なものを見せる。対象者は一人だが、その効果は絶大だ。お前に大事な者を攻撃できるか!!」

幻視にかかった瞬間、ザンクは勝ちを確信した。

今まで幻視にかかり、それを振り払い攻撃してきたものは一人もいなく、皆首だけになったからだ。

「つたく、まだ俺には未練があつたつてのかよ。我ながら女々しいぜ」
主水は呆れたように呟くと、刀から、小柄を抜き、振り上げ、左足に突き刺した。

「!!」

「!!」

ザンクとセリユーは息を飲んだ。

小柄が突き刺さった部分から、血液が舞い、足元に血溜まりを作る。
「へへっ、てめえのお陰でまだ俺には未練があつたことを知ることができたぜ。感謝する。感謝ついでに、俺の奥の手を見せてやるよ」

主水は右足で地面を踏み込み、瞬時に間合いをつめる。

「奥の手——」

◆◆◆◆◆

「大丈夫主水君」

ザンクが大の字に地に横たわる傍ら、主水は足をセリユーに治療さ
れていた。

「こんなものは、睡つけときやなんとかなりますよ」

笑い飛ばすように、主水は話す。

「ダメだよ。怪我を甘くみたら。後で大変なことになっても知らないよ！」

「い、痛いです」

力いっぱい閉められた包帯に顔を歪ませる主水。

それを見て、セリユーは笑うが、次には目を落として、懺悔するかの
ように呟いた。

「私がザンクを倒していれば、主水君は怪我をしなかったんだよね」

「いえ、それは——」

「違わないよね。私はまだまだ力が足りない。大事な人を護っていく
力が……」

悔しそうに、拳を握り締めるセリユーに掛ける言葉が見つからず、
迷っていると。

「主水君！私を強くしてください。今日の主水君の戦いを見て、主水
君がとんでもなく強いということが分かったの。お願いします」

セリユーは頭を下げた。

大事なものを傷つけない、護りたい、真剣な思いが伝わってくる。

実際上主水は裏の仕事仲間以外には力を見せることを、自分の中で戒めていた。

しかし、今の真剣なセリユーを見て、心が揺らいだ。

そして、条件付きでセリユーを教えることとした。

主水がセリユーの熱意に折れた形だ。

「分かりました。セリユーさんが大事な者を護れるようになるぐらいまでは、稽古をつけてあげますよ。ただ」

セリユーは一旦は喜んだが、続きがあることに、緊張した面持ちで聞いている。

「私の強さについては誰にも言わないと約束してください」

セリユーは安心してため息をつく。

もつと無理難題を言われるのでは、と心配していたのだ。

「そんなことなら絶対に守るよ。エヘヘ、二人だけの秘密だね」

顔を赤らめ、照れながらセリユーは話すが、

(裏の仲間は皆知っているんだがな)

と思いつつも、

「そうですね」

と主水は笑い返すのであった。

第16話

主水は焦っていた。朝寝坊をしてしまい、また上司のタカナにグチグチと嫌味を言われるのは必定であったためだ。

ネチネチとオカマ口調で、今まで幾度も嫌味を言われた。すでに、慣れていると言えなくもないが、朝一番に言われるのは、さすがに勘弁してほしいと主水が思っていた。

警備隊隊舎に足音を忍ばせ入ると、入ってすぐの、広い集会場に多くの影が。

主水がそつと覗くと、勤めている全ての隊員が集められ、臨時の朝礼が行われているようであった。

主水さらに足音を忍ばせ、気配も消し、そつと隊員の中に紛れ込む。

注目されている方を見ると、壇上にタカナに表彰されるセリユーが。

セリユーは、微妙な顔をして、苦笑いを浮かべながら表彰状をもらっていた。

この表彰は、首斬りザンクを捕らえただけでなく、帝具スペクテツドを無傷で取り返したことに對するものである。

これも、ザンクを捕縛したのは、主水ではなく、セリユーとコロが二人で捕まえたということに、主水とセリユーが話合い、決め、そのように報告したためである。

表彰状をセリユーに渡し終えた後、タカナは振り返り、指を指し言放った。

「遅れてきた中村さんも、セリユーさんを見習ってくださいね！」

(俺の隠密行動は完璧だったはず)

驚くべきことに、タカナは主水が隊員に紛れ込んでいるのを、察知していたらしい。

したり顔で指を指すタカナに対し、主水は驚きが隠せなかった。

その二人をよそに、事実を知っているセリユーは居づらそうな表情をしているが、冷静さを取り戻した主水は、気にしなくていいですよ、

と目配せをした後、タカナに

「はい。この中村主水もセリユーさんを見習いたいと思います」

と言う、だが、それだけで終わらせる主水ではない。

「怯えたタカナ様を、助けられるように精進したいと思います」

タカナは、顔色を変え、たじろぐ。どうにかポーカーフェイスをしようとするができていなかった。

「な、な、中村さん。何を言っているのです。私はびびってなんかいませんよ。靴ひもがほどけていたので、結んだ後にザンクを捕まえようと思っていたのですよ！」

タカナは一方的にいい放つと、咳払いをしながら壇上を足早に去っていった。

(ざまあ見やがれ)

してやったりと思っている主水の所にセリユーがやって来る。

「本当に良かったの？」

タカナと主水のやり取りを見ていたために、再びこれで良かったのか疑問に思ったらしい。

「これでいいんですよ。昼行灯の警備隊員中村主水でね」

セリユーの頭に手を当てながら、笑顔で諭す。

小さな子供を大人が諭すように。

「分かった。で主水君……」

キョロキョロと、周りの目を気にしていることから、言いたいことに気づく。

「中村主水とセリユー・ユビキタス、二人で市中の巡回に言って参ります」

主水はセリユーの手を握ると、警備隊隊舎を後にした。

ついてくるコロは不満顔であったのは言うまでもない。

「どこに行くの？」

警備隊隊舎を出てから、かれこれ一時間ほど経っていた。

すでに帝都の大門を通り、外に出ていた。

巡回と称しながら、帝都外であるため、セリユーがどこに行くのか

聞きたくなくても仕方がない。

「一緒に修行をしつつ、人助けをしようと思ひまして」

「修行だけじゃなく、人助けもできるの」

セリユートの目が輝いた。まさにセリユーにしたら、したいことを二つもできる、一石二鳥の、願ってもない提案である。

「ええできますよ。今回は実践で鍛え、セリユーさんがもう少し強くなったら私がつけてあげますよ」

主水の言葉に少し、肩を落としガツカリするセリユー。

主水に直接手取り足取り指導してもらえるところでいいらしい。

なんやかんや話ながら歩いていると、帝都から遠く離れた、薄暗く、不気味な広大な森の中に二人はいた。

まだ昼間のはずなのに、大きな木々に日の光は遮られ、薄暗く、ジメジメと湿度の高めな森である。

「この森には危険レベルが高い危険種が数多く潜んでいます。今でもたまに、帝都への行商に、仕方なくここを通る商人がいるのですが、ほぼこの危険種に襲われ命を落とします。あれを見てください」

主水が指を指した先には、白骨化した遺体が幾つか転がっている。「危険種に襲われ喰われたのです。この森の危険種は強いので、修行にはもってこいなんですよ、ほら修行相手があちらからやって来ました」

主水の鋭くなった視線の先には、二メートルを遥かに超える、巨大な大猿が。

太い毛に覆われ、筋骨隆々で、涎が垂れる口許には、鋭い牙がところ狭しと並んでいる。

「いきなり特級危険種のエイプマンか、あの貫禄からいくとボスか……」
主水がどうしようかと思案していると、

「コロ!!」

というセリユートの呼び掛けに呼応するかのようには、コロの体が膨れ上がる。

しかし、それでも目の前のエイプマンよりも大きさは劣っている。

主水は思考の海から脱すると、セリユートの元に歩みよる。

「主水君、私とコロはいつでも行けるよ」

二人とも既に臨戦体勢に入っている。

「セリユールさん、コロは使わず一人でエイプマンを倒してください」
「!!」

無理難題である。

特級危険種というだけでも、危険なのに、そのボス格、確実にセリユールには荷が重い話である。

「大丈夫です。以前オーガ隊長との組み手を見せてもらいましたが、大変すばらしいものでした。ただ一点目についたのは、力が入りすぎていることです。力が入りすぎると、全く力が伝わりません。剣術でも同じですが、打撃を撃ち込むその一瞬に全力を込めてください」

以前セリユールの組み手を見た時に感じたこと。

全力で悪を潰すという、ある意味オーガなどの刷り込みによって、いつも力がガチガチに入ったまま、攻撃を繰り出していた。

あれでは、消費が激しいだけでなく、力が全く伝わらず、威力がないのだ。

剣術でも基本なのだが、ゆったりと力を入れず構えて、打ち込む際に、手の内を絞って力を入れる、全てに於て同じだと考えたのである。

「あともう一つ。重火器は牽制のみに使ってください。トンファアーンであれば、打撃を主に、射撃は牽制で」

「なんか、今日の主水君厳しい。でも、私は強くなりたいから頑張るよ」

セリユールは弱気になるどころか、やる気が出たようだ。

セリユールは地面を蹴り、飛び出した。

意表をつかれた、エイプマンは迎撃することができず、まともにセリユールの拳を受けた。

しかし、衝撃を弱める緩衝材となる剛毛と、厚い筋肉にダメージは通らない。

(長い間してきたことを、いきなり止めろといっても無理か)

セリユールは頭では分かっている、体はいつもの癖と、エイプマンを見て、全力で打ち込まないと打撃が通らないと、脳が判断した結果、

力が入ったまま攻撃にいつていた。

エイプマンはセリユートの攻撃が効かないことを、喜び、

「キキーー！」

という奇声と共に丸太のような腕を降り下ろした。

セリユートは踊るような身のこなしで避ける。

セリユートの横を通過した拳が、地面を抉る。

(これを一発でもくらったら)

危機意識が、更にセリユートに力を入れさせる。

避けた流れで、地面に刺さったままの腕に回し蹴りを入れるが、やはり、微動だにしない。

喜色満面でエイプマンは腕を地面から引き抜くと、体格に似合わぬスピードで、木に登ったかと思うと、木から木へ飛び移り、そのまま木を蹴る。蹴られた木はへし折れ、エイプマンはついた勢いのままセリユートに体当たりを仕掛ける。

セリユートも負けず劣らず動きを読み、見事にかわすが、砲弾のようにエイプマンは着弾すると、まるで爆風のような衝撃波が巻き起こり、近くにいた身軽なセリユートは吹き飛ばされた。

勢いよく吹き飛ばされたセリユートが大木に叩きつけられる寸前、何かがセリユートを抱き止める。

「ありがとう、コロ」

安心したように感謝を述べるセリユートに、コロも満足げに頷く。

コロは主水に制止させられていたとはいえ、セリユートを助けたくてウズウズしていたのだ。

「セリユートさん。まだ肩に力が入っていますよ」

歩みよってきた主水が、セリユートの両肩に手を置く。

「でも、あのエイプマンには私の攻撃じゃ……」

自身喪失といった感じで俯くセリユート。

「今まで鍛練してきた自分を信じて、打ち込む際に全力を込めて一発入れてください。あのエイプマンは体全体で地面につきささった際に、その衝撃で今は動けませんから」

「分かったよ」

セリユーは立ち上がると、動きが鈍っているエイプマンに突っ込む。

一瞬で懐に潜り込んだセリユーは、ゆったりした構えから、鳩尾に、正拳突きを繰り出した。

剛毛もかき分け、筋肉さえも、セリユーの拳を止めることはできず、深々とめり込んだ。

「グオッー」

断末魔を残し、くの字に折れ曲がった体は、音をたてて地面に倒れた。

(今まで攻撃が効いてなく、エイプマンが油断していたとはいえ、良く頑張りました)

主水は心の中で称賛した。

「やったよ主水君、コロ」

ピョンピョンと跳ねながらコロと踊るように喜ぶセリユー。

「よく頑張りました。では帰りましょうか」

「えっ!?まだあのエイプマンは生きてるよ」

事前の話では、エイプマンを倒すという話だったはず、と聞き返すセリユー。

「今他のエイプマンたちは遠巻きにボスがやられる所を見ていました。しばらくは静かになるでしょう。それと、あのエイプマンにはこれからもセリユーさんの訓練相手になってほしいので、今回は放っておきましょう」

エイプマンは賢い種族なので、今日の負けを糧に、より強くなっていくと、主水は考えていた。

それに、今日の勝利はあくまでエイプマンの油断が招いた、運のよいものであった。

完全に勝てるようになるまで続けようと考えていたのだ。

セリユーも頷くと、三人は走って帝都に戻っていった。

タカナに、主水がどこに行っていたのかと、叱られたのはまた別の話である。

第17話

この頃の主水は、充実した日々を送っていた。

変わらず警備隊長のタカナには、ネチネチと嫌味や、愚痴を言われるのは、変わりない警備隊のお馴染みの光景となっていた。

まあ主水にとっては日常茶飯事のことなので、右から左へといった具合にスルーして日々を過ごしていた。

そして、勤務時間であろうと、時間があれば、セリユーと共に森に行き、修行をしていた。

ナイトレイドの敵となるであろうセリユーを鍛えるのには、問題はあるが、それでも主水はどんどん強くなっていく、セリユーの成長を喜んでいた。

修行相手となるエイプマンとの切磋琢磨により、セリユーは、今では、ザンク程度なら帝具を使用されなければ、片手で捻られるぐらいにまで成長していた。

そんな中で今日は貴重な休日であり、またナジエンダに呼び出されたので、ナイトレイドのアジトに顔を出していた。

入ってすぐの広間に、真剣な表情で本を読み込むシェーレの姿が。

「主水さん。おはようございます」

主水が現れたことに気づいたシェーレは、本から顔をあげると、いつも通りのノンビリした口調で挨拶する。

「おう、おはようございます。ってそんな時間じゃねえよな。さつき昼飯食ったじゃねえか」

「そうでしたっけ」

シェーレのノンビリというか、独自のペースに乗せられる（巻き込まれる）主水、中々の難敵である。

「何真剣に読んでんだ」

「え〜と何でしたっけ?」

こちらまで釣られて笑顔になってしまいそうな、朗らかな笑顔。

殺伐とした稼業に属している人間には、到底見えない。

「『天然を直す100の方法』か、天然を気にしてんのか?」

「はい。私、殺し以外じゃ役にたたないので…」

シエーレの顔に影がさす。どうやら彼女が抱えている一番の悩みらしい。

「シエーレはナイトレイドで十分役にたってるぜ。誰よりもな。この裏稼業は殺伐とした世界でよ、精神病んだり、悩みを抱えて苦しんだ後に、死んじまうやつもたくさんいる。だがな、このナイトレイドには、そんな暗い感じねえよな。お前は無意識かも知れねえが、皆の癒しになってんだよ。一抹の清涼剤みたいにな。自信を持っていいぜ。」

「主水さん…」

暗かったシエーレの表情に明るさが戻る。目頭は潤んでいるが、悩みが吹っ切れたように、清々しい笑顔にまでなっている。

「それによ、天然も悪くねえよ。演技で昼行灯装っているやつなんかより、よっぽど信頼できるからな」

主水は自虐めいた言葉に苦笑する。

「主水さん……」

シエーレは掛ける言葉が見つからなかった。

主水にも影がさす。主水が見せた初めてのの本音だったのかもしれない。ない。

「悪い邪魔したな。じゃあな」

「主水さんありがとうございます」

後ろ手に手を上げて去っていく主水に、シエーレは深く頭を下げていた。

(早くナジエンダの所に行かないとな)

主水が廊下を歩いていると修練場から、勇ましい声が聞こえてくる。

稽古でもしてるのかと、廊下から主水が覗いてみると、見てはいけない光景が。

半裸の男(ブラート)と、半裸の少年(タツミ)が、手取り足取り絡みあっていた。流れる汗、荒い息遣いがまた生々しい。

(やべえもん見ちまった)

主水は気づかれる前に、その場を離脱しようと試みる。が

三人は瞬間的に目があってしまった。

時が凍りつき、時間が停止する。(誰かさんの奥の手のように)

三人の間に微妙にいやくな空気が流れる。

「邪魔してすまねえ。俺は消えるから仲良く楽しんでくれ」

主水は走り去る。

「主水さん、誤解なんだよー！ー！」

「主水の旦那、焼きもち妬かせちまったかな。モテる男は辛いぜ」

地面に手をつけて叫ぶタツミと、頬を染めて爽やかな笑顔を浮かべるブライトがそこに残された。

三人の関係がおかしくなった時だった。

(やべえ世界見せられたぜ。あの二人ができていたとはな)

誤解しまくった主水が、ナジエンダの部屋に向かって更に廊下を歩いてみると、前から機嫌がよさそうなアカメが歩いてくる。

「おうアカメ。なんか嬉しそうだな」

「うん。とつてもいい肉がたくさん手に入った」

喜色満面、至福の笑みを浮かべるアカメ。

「そうか良かったな」

「うん。今日は主水も肉付くし食べて行ってね」

「ああ、アカメの飯は旨いからな。楽しみにしてるぜ」

主水はアカメと別れると、ナジエンダの部屋の前に辿り着いた。

「入るぜ」

「ああ」

ほぼツアーカーである。

ナジエンダの部屋に入ると、いつみても、綺麗に整理整頓されている。ナジエンダの几帳面な一面が見て取れる。

「よく来てくれたな主水」

笑顔で出迎えるナジエンダ。

こりゃあ何かあるなと考える主水。

「で、今日は何のようだ？」

「用がなくては呼んではならないのか？」

悪戯っ子のような笑みを浮かべるナジエンダ。シエーレと違って、こちらもまた強敵である。

「冗談はさておき。我らナイトレイドに大きな依頼が入ってな」

「それに出ればいいのか？」

「いや違う」

首を横に振るナジエンダ。訝しがる主水にナジエンダは続ける。

「今度のターゲットは大物のチブルというやつなんだが。得た情報によると、その日は、お前たち帝都警備隊が護りを固めるらしい」

そこまでナジエンダが言った時、主水は全て悟った。

南町奉行所に勤めていた時にもよくしていたことを。

「護りの配置を探りやあいいいんだな」

「話が早くて助かるよ」

ナジエンダは不適な笑みを浮かべる。

主水にしかできないことである。

「じゃあ、分かり次第、陣容、配置、人数、危険箇所まとめて知らせる。またラバックに渡しゃあいいか？」

「ああ。ただできれば、その情報を持ってアジトに来てほしい。詳しい内容までは、レポートだけでは把握しづらいしな」

ナジエンダのもっともな、意見ではあるが、主水はすぐには即答できなかつた。

「そうしたいのは山々なんだが、最近は、警備隊を抜けるのが難しくなっちまったんだよ。新しい警備隊長に目をつけられててな……」

顔をしかめる主水。

頭の中では、つい先日、主水の隠密行動を見事に察知し、ドヤ顔を浮かべているタカナの姿が浮かんでいた。

「そうか。分かった無理はするな。重要な情報を得られるだけでも、被害を減らすことができる。では通常通りラバックにつなぎを取ってくれ」

「分かった」

主水とナジエンダは、作戦を話終えると、茶を飲みながら、何気ない雑談を楽しんだ。

(結構長くなっちゃったな。いい匂いも漂ってくるし、飯か)

主水が廊下に差し掛かると、足が自然と止まる。

修練場に美しい虫の音が静かに響き、見るものを魅了する見事な満月が輝いていた。

(久しぶりにゆったりと月を見たな)

主水にも備わっている、日本人特有の風流心が充たされかけていると、

「主水ー！ー！」

というかましい声が。

(風流が分からねえやつだな)

主水はため息を吐きながら振り向いた。

「なんだピンク」

「ピンクって言うな！」

走ってきたのは、ピンク色のツイントールを揺らすマインであった。

「飯か？」

「違うわよ！あんたシェーレに何したのよ。泣いてたわよ」

話はしたが、泣くような話かと首を傾げていると、

「何かが吹っ切れたような顔をして、嬉しそうに泣いてたの。話を聞くにあんたの名前が出たから、少し話を聞きたくてね」

「大したことじゃねえよ」

「あんたには大したことなくても、シェーレにとっては重要なことだったのよ」

マインはそう言うと、主水に背を向ける。

「大事な親友のシェーレの悩みを解消してくれて、ありがとね」

と小さな声で呟いた。面と向かって言うのが照れくさかったのだろう、僅かに見えた、満月に照らされた頬がうつすらと赤らんでいた。「プツ、お前らしくもねえな。飯いくぞ」

去り際に、マインの頭をグシヤグシヤと撫でる主水。

「笑うなー！それと子供扱いするなー！」

声では怒りながらも、満更ではない表情で、主水を追いかけるマイン。

一時期の平穏で、平和な時が流れていた。

しかし、その平和も、僅な一時でしかないのを、主水も薄々と感じ取っていた。

第18話

警備隊隊舎の会議室に於いて、チブル警護のための、綿密な計画が、たてられていた。

ホワイトボードに、描かれた地図にタカナが、警備隊のメンバー名をつらつらと書き込んでいく。どうやら今夜の配置のようだ。

そこで、主水は目を疑った。

「た、タカナ様。なぜ私はセリユーさんと一緒じゃなくて、タカナ様と一緒になのですか？」

主水は不満顔というか、不安顔で質問する。

その僅な差に気づくものはいない。

ただ単に、タカナと組むのが嫌という風にしか、皆には聞こえなかった。

「そんなの当然ですよ。貴方を一人にしたら、絶対サボりますからね。私の目の届く所に置いておきたいのですよ。あとセリユーさんは、以前挙げた功績から、遊撃隊として決まった場に配置するのではなく、動き回って警戒してもらいます」

ザンクを倒したということから、警備隊屈指の戦闘力を持っていると、判断された上でのセリユーの扱いである。

タカナの言いたいことは、主水を含め、皆理解できた。

しかし、この作戦により、既に主水の作戦に、大きな狂いが生じ始めている。

抗うことができない。

(ちっ、どうするか。セリユーは大分分別はついてきたが、ナイトレイドならば構わず殺しにいくだろう。絶対に会わせちゃならねえ)

主水はセリユーとナイトレイドの面々が会わずに済むように、とりはかり、もし、会ってしまっても、主水がなんとかその戦いを、最低でも死者が出ないよう阻止しようと思っていた。

しかし、それはセリユーと共に、主水が配置されることを前提としての考えである。

事態は最悪な方面へ向かっていた。

その後は、何も問題なく、粛々と作戦が伝えられ、作戦会議は終了した。

(後は皆とセリユールが会わないことを祈るだけか……この俺が神頼みとはな……)

主水は険しい表情で会議室を出た。

夕刻の作戦時間まで自由時間ということなので、それまでに、仲間今回の作戦を伝えるべく、警備隊隊舎を後にした。

「待つてたぜ主水の旦那」

「悪いな。少し時間が押しちまってるな。ここに内訳全てが書いてある。ナジエンダに渡してくれ」

主水は回りから見えないように、作戦内容を書き記した紙を、ラバックにそつと手渡した。

「ありがとよ。旦那」

「ちよつと待て」

今にも走り出そうとするラバックに主水は待つたを掛ける。

「どうしたんだ旦那？」

「一番重要なことがあってな、今回の障害になるのは、この女だ」

呼び止めたラバックに、主水は懐から、以前セリユールと共に撮った写真を手渡す。

「へえ、かなり可愛い娘だな。で、この娘がどうしたんだ」

ラバックは真剣な表情の主水を見て、茶化すことなく問う。

「出会ってしまったら絶対に逃げろーブラートには及ばんが、帝具抜きのアカメ並の力を有している」

「アカメ並つてマジかよ……」

主水の口調は静かではあるが、重みがあるため、信憑性がまし、ラバックはこの重大さを知った。

「でもよ。配置が分かってるならそこを避ければ」

「そう考えるのが普通だが、この女は、今回の作戦上固定せず、動きながら警戒することになっている。だからこそ会ってしまったら逃げろというんだ」

有無を言わせぬ主水の忠告に、ラバックは黙つて頷くしかなかつ

た。

「…ナジエンダさんにも、皆にも伝えておくよ」

「頼んだ」

ラバツクは、店をすぐに畳んで、走り去った。

（後は、運任せか。いざとなったらタカナ様を眠らせてでも介入せんとな）

主水は、帝具アレスターの柄を握り締めて、そう考えていた。

焼けるような真つ赤な夕日が、山の裾野にかかり、じわじわと闇が辺りに忍び寄って来ている。

定刻となり、チブルの邸宅の近くに、警備隊の面々が集まっていた。

「では皆さん、先ほど伝えた位置に移動してください。あとセリューさんは配置など気にせず、警戒にあたってくださいね」

「はい、タカナ警備隊長」

ビシツとコロと共に、姿勢を正し、敬礼する。

「主水君行ってくるね」

「気をつけてな…」

薄暗く表情は伺えないが、主水の口調が暗いのに気づいたのか、セリューはとびきりの明るい声で、主水を勇気づけ、安心させるように返す。

「うん。今回の賊は相当悪いやつみたいだから、必ず葬ってくるね」

以前とは違い、顔は悪鬼のそれではなかった。

しかし、意志と覚悟の強さは、以前以上のものを主水は感じ取っていた。

セリューは踵を返し、コロを率いて、薄暗くなった夜の闇に消えた。

主水はそれを静かに見送った。

「さあ中村さんも、ぼうつとしてないでついてきなさい」

颯爽と、姿勢を正して歩くタカナの後に、主水は不安げな表情で後を追った。

主水とタカナの配置は、チブルの邸宅の近くであった。

ただし、帝都警備隊を信用していないチブルは、周りをボディー

ガードに任せ、警備隊は邸宅内に入ることさえ、禁じていた。

すでに月は中天に差し掛かり、辺りを緩やかに照らし、辺りには、虫の音色と風が、草花を靡かせる音のみが静かになっていた。

主水とタカナも警戒を怠らず、回りに視線を送っていた。

しかし、主水の頭の中はそれどころではなかった。

更に時が流れ、気が緩みかけたその時だった。

主水は殺気を感じとり、視線を向けた。

主水は気づいてはいなかったが、主水と同時に、タカナも鋭い視線を、同じ所に向けていた。

辺りの静寂を撃ち破る一発の銃声が辺りに響き渡り、夜闇を切り裂く一筋の閃光が。

ガラスの割れる音、何かが倒れる音と共に、邸宅内から

「チブル様、チブル様!!」

「早く医者を呼べ!!」

と慌てふためく声や、叫び声が聞こえてくる。

「やられました。中村さん行きますよ!」つて中村さんどこへ行きました?」

タカナが振り向いた時には、そこに主水の姿は跡形もなかった。

(今の銃声からして殺つたのはマインだろうな。そしていつもの通りなら護衛はシエーレ。殺すことに成功したことから、まだ出会ってないのはなによりだが、今の銃声を聞き付けたセリユーは、今まさに向かっているだろうから、一刻の猶予もないだろう)

主水は銃弾の飛来してきた方向と入射角、頭に入れておいた警備隊の配置から、マインとシエーレの逃亡ルートを割り出し、先回りし、セリユーと出会わないように、手配りをするために走って向かっていた。

障害物などあつてないかの如く、主水は夜道を駆け抜け、出会うであろう、位置にやって来ていた。

しかし、いつまで経ってもマインやシエーレのやって来る気配すらない。

辺りが暗くなることに、主水の不安も増してくる。

(もしや予想が間違ったか。別のルートを探るべきか。いや、今の時間ならとつくに逃げ去っているはず)

主水が幾つかのパターンを想定し、考えを巡らしていたその時だった。

夜空に大きな呼び子が鳴り響いた。

警備隊全員に配られる呼び子は、敵を発見した時に、仲間を呼び集めるために鳴らされるものである。

つまり、メインとシェーレが発見されたということである。

そして、それと同時に分かることは、メインとシェーレは配置を知っているのだから、見つけたのは必然的に、セリユーということになる。

主水は呼び子が響いた瞬間、形振り構わず走り出していた。

一つだけ幸いなことは、意外と近い場所から聞こえていたということだった。

主水の頭の中には、爽やかな無垢な笑顔で手を振るセリユー。朗らかな笑顔を浮かべ、優しい瞳で皆を見守るシェーレ。悪態をつきながらも照れるメイン。

この三者が頭を巡っていた。

主水の中でも、皆が大きな存在になっていた。

木立を抜け、最初に見えた光景に、主水は絶句した。

10メートルほど先に、朱に伏したメインと、それを慈悲に満ちた表情で見下ろす所々怪我をしたセリユー。

そんなメインを助けようと、血にまみれながらも地を這うシェーレ。

そのシェーレをひと飲みにするべく、口を開け、寸での所まで迫っている巨大化したコロ。

勝敗は既に決していた。

そして、二人には、逃れようのない『死』が目前にまで迫っていた。

第19話

主水がセリユーとコロン、マインとシエーレが戦う場にたどり着く約10分前に話は戻る。

夜の闇を走り抜ける二つの影。

マインとシエーレが、チブル暗殺を成功させ、帰路についていた。だが、ある意味二人にとってこれからが正念場であった。

チブル暗殺はマインの射撃能力からしたら大した問題ではない。

しかしながら、その後、その射撃音を追って、主水が警戒しろといったセリユーが来る前に、逃げきらなくてはならないということに、大きな問題があつたのだ。

「あと少しね」

「そうですね。ここを抜ければ」

あと少しという所で二人に迫る影が。

「見つけたわよ」

突如現れた人影が、二人に襲い掛かる。

「マイン、私の後ろに」

シエーレが見事な反射神経で反転し、〈万物両断〉エクスタスを掲げ、防御体勢に入る。

直後、シエーレの手にとつともない衝撃が。

「ぐっ…」

殺しきれない衝撃に、シエーレの体は浮き、後方まで吹き飛ばされる。

「シエーレ！」

「よそ見している暇はありませんよ」

「！」

マインがシエーレに気をとられた僅かな隙に、セリユーはすでに、マインの懐に飛び込んでいた。

(ヤバイ。まともにあの攻撃を受けたら)

セリユーは拳を腰まで引き、溜めた力を爆発させるように拳をつき

出す。つき出された拳は螺旋を描きながらマインに迫る。

刹那、マインの〈浪漫砲台〉パンプキンが網膜を焼き尽くす程の目映い閃光を放ち、火を吹いた、最大限まで引き上げられた威力の射撃の反動で、マインはセリユールの拳を回避し、飛ぶように後退し、難を逃れた。

「大丈夫シエーレ？」

「ええ大丈夫。でもあの敵は話に出た」

普段であれば忘れているかもしれないことだが、今回に限っては覚えていた。

それほど、作戦ないでも、強調されていたのだった。

「多分ね。でもあの様子じゃあ逃げられそうにないわね」

視線の先のセリユールは構えをとり、軽くステップを踏み、コロもすでに巨大化し、筋肉質の腕も生やし、臨戦体勢に入っている。

「殺るしかないでしょー！」

シエーレが前衛に立ち、マインが後衛になる。

「私は帝都警備隊セリユール・ユビキタス。あなたたちに殺され悲しむ人を減らすためにも、ここで死んでもらいます」

主水が一番危惧していた、戦いの幕が切って落とされた。

何人も食い殺した口を開き突っ込むコロ。

マインの射撃により足が止まった所で、シエーレがエクスタスを掲げ交錯する。

月夜に舞う巨大な腕、しかし、切り抜けた先にセリユールはいなかった。

セリユールは既に、マインに肉薄していた。

コロを盾にして進み、シエーレとコロが交錯した際に、コロを踏み台とし、飛び立ち、羽のように宙を舞い、マインに迫っていた。

「私のバンプキンは危機になるほど威力が増すのよー！」

威力が増した、射撃が放たれるが、セリユールは舞いを舞うかのようなステップを左右に踏み、紙一重に避けながら前進する。

「マイン！」

シエーレが援護に向かおうとするが、超速再生により、傷がいった

コロの怒涛の攻撃により足止めをくらっていた。

「正義の鉄拳!!」

振りかぶった拳が放たれるその刹那を狙い、カウンター気味にメインがパンプキンを横風ぎに振るう。

「!」

まさかの反撃。

近接戦闘ができないと思われていたメインの、斬激。

頬に切り傷がつき、血が頬を伝う。

しかし、それだけだった。

「嘘でしょ?!完全に不意をついたはず!」

「エイプマンに比べると、攻撃が緩いよ」

バックステップで横風ぎを避け、転じて踏み込んで、眼前に迫った。そして螺旋を描きながら放たれたコークスクリューブローがメインに叩き込まれる。

本能的に上げたメインの腕を破壊するだけに留まらず、さらには胸を抉った。

「」

吐血し、肺に圧がかかり、空気を吐き出したために、声をあげることもできず、メインは吹き飛び、地を何度かバウンドして、動かなくなった。

「メイン!!」

コロの怒涛のラッシュを果敢にかわしていたシェーレだが、メインが吹き飛ぶ姿を見て、気がそれ隙が出来る。

コロがそれを見逃す弾もない。

大振りだった打撃を、小さくし、スピードを上げラッシュを放った。

シェーレであれば、それぐらいの差など、ものともせず普段なら対応できたであろう。

しかし、メインに気を取られたために、対応しきれなかった。

五月雨のように降り注ぐ打撃が一発、二発とエクスタスの防御をすり抜ける。

威力は下がったとはいえ、コロの豪腕から放たれる打撃に、シェー

レが何発も耐えられるわけもなかった。

(私が殺られたら、マインも)

崩れ落ちそうになりながらも、踏みとどまる。強靱な精神力のなせる業である。

シエーレは倒れる訳にはいかなかった。親友が危機に陥っているのだから。

倒れて当然の怪我を負っている筈なのに、エクスタスを杖のように地面に突き立て、辛うじて立っている。

「コロ、終わらせてあげなさい」

コロが襲い掛かる、

(この一撃に賭ける！)

立っていることさえやつとであるはずのシエーレ、しかし、火事場のバカ力とでも言うのだろうか、あらん限りの力で踏み込み、エクスタスの刃が月下で輝いた。

コロは口を起点として、頭部を横に分かたれた。

「殺った！」

「殺ってないわよ」

冷えきったセリユートの言葉が、シエーレの希望を打ち砕いた。

生物型帝具はコアを破壊されない限り、倒すことはできない。

シエーレは焦るあまり、そのことを忘れていた。

コロは頭の上部が無いまま、背後にいるシエーレに裏拳を放つ。

すでに防御をする力もないシエーレは、まともに裏拳を受け、華奢な体は宙を舞い、地に伏した。

もうシエーレは意識がないはずでありながらも、マインを求めて地を這う。

這った跡には、流れた血の道が出来上がる。

「皆に伝えなくちゃ」

セリユートは懐から呼び子を取り出すと天に向かって、吹いた。呼び子の音はセリユート達の勝ちを宣言するかの如く、夜空に響き渡った。

セリユートは呼び子のこだまが止むと、

「安心していいわよ。あなたたちは同時に殺してあげるから、悲しむ

こともないし、あの世にも一緒に行けるわよ」

と慈悲に満ちた顔で呟くと、拳を振り上げ、コロは再生された、鋭い牙が幾重にも並ぶ口を裂けんばかりに開いた。

ここまでは、主水が訪れるまでの10分間に起こった出来事である。

◆◆◆◆◆

「セリュー!!」

主水は叫んだが、その叫びは届かなかった。

(俺は二人を救えないのか! 駄目だ目の前で殺されそうな仲間を放っておいていいはずがない!!)

もうすでに手遅れであるのは、誰の目にも明らかである。

しかし、主水は諦めなかった。

その強い意思に呼応するように、〈一網打尽〉アレスターが輝いた。

(俺に活路を導き出してくれるってえのか)

腰に挿したアレスターの柄を掴む、

(なんだこれは)

主水の頭に直接的に情報が流れ込んでくる。

(分かったぜ)

主水はアレスターで空を一閃した。

振りきられるはずのアレスターの鋒が空間に亀裂を刻む。

「奥の手〈空間封印〉」

亀裂が広がった範囲の全てが止まる。

そこに存在していたはずの、鼓動、息吹き、自然の営み、全てが停止し、訪れる真の静寂。

『無』の世界が広がっている。

「クツ…早くしねえと…」

奥の手の副作用、全身に走る痛みと、倦怠感を無理に抑え込み、主水はマインとシェーレに駆け寄り、二人を抱え、走り出した。

(長くは続かねえ行けるとここまで行くぞ)

主水は二人をギリギリで救えた安堵を覚えながら、夜の闇を駆け抜けた。

主水の表情に明らかに苦悶の色が表れていた。

額には脂汗が滲み、呼吸も荒くなっている。さらには全身に走る痛みも強度を増していた。

「限界か……封印解除」

それまで辺りの闇を振り払うかのように、照らしていたアレスターの神々しい輝きが失われた。

それと同時に、体に走っていた痛みも、嘘のように、無くなっていた。

しかし、体を襲う倦怠感は、依然として残り続けた。

「貸本屋…開けてくれ」

壁に寄りかかるように、身を預け、戸を叩いた。

帝都のラバックの住まいの貸本屋に、主水はなんとか辿り着いたのだ。

「誰だよ」

鍵を開ける音が聞こえ、戸が開かれる。

すでにラバックが仕事から戻っていたことに、主水は気が安らいだ。

「主水の旦那と……マインとシエーレじゃねえか!!しかもひでえ怪我を負って!」

「貸本屋、二人を頼む。俺は戻らなくちゃならねえ……」

主水は二人を驚き目を丸くしているラバックに託すと、ふらついた足取りで、来た道に戻っていった。

「奥の手の代償は、寿命だけじゃなかったのかよ……」

月光を頼りに、来た道に戻りながら、主水は恨めしそうに呟く。

主水がアレスターに伝えられた奥の手の代償とは、一秒ごとに一日分の寿命が短くなるというものだった。

主水の寿命は、江戸で亡くなった時の年齢。

それだけで、これほどの負担が、体に降りかかるとは考えていなかったのだ。

目の前が次第にぼやけてくる。
主水は二人を運びきったことによる、安心感から、緊張の糸が切れ、
その場に倒れ込み、意識を失った。

第20話

「うっ、ここは？」

始めに視界に入ったのは、どこまでも広がる広大な青空ではなく、無機質な白い天井であった。

（俺は確かマインとシェーレを貸本屋に運んだ後の、帰路で意識を失い）

思い出すことができたのは、警備隊の面々に怪しまれずに合流するために、急いで帰っていたが、初めての奥の手の反動で、意識を失い倒れたという所までだった。

しかしながら、今の主水の状況は違う。

どこかの一室で、しかも寝ているのは、地べたではなく、弾力があるベッドのうえだった。

主水は寝たまま、状況判断をすべく、回りを見回す。

備え付けの棚には、多くの瓶が整頓して並べられ、その前の机には、山のように積まれた紙の束。

逆の方を見ると、心配そうな顔をして、静かに寝息をたてて眠っているセリユウが。

（そうか、セリユウが俺をここまで）

主水は得心がいった。昨夜声が届かずマインの命を奪おうとしていた時には、正直あの頃の、セリユウに戻ってしまったのではと、危惧したが、自分を助けてくれたことから考えてもまだ大丈夫だと思えた。

「あつ、主水君目を覚ましたんだ。良かった心配したんだよ」

目を覚ましたセリユウが、目を擦りながら起き、屈託ない笑顔を浮かべると、曇らせていた表情が一変して晴れ渡る。

「セリユウさんが私を助けてくれたんですね。ありがとうございますいます」

主水が礼を言うと、セリユウは照れくさそうにしながらも、嬉しそうに話す。

「私とタカナ様が見つけたんだよ」

「タカナ様も…」

「うん。物凄く心配そうな顔をしてたよ」

いつも嫌味つたらしく愚痴を言ってくる、タカナにも部下思いな一面があった。

「でもよかったよ。暗闇で倒れていた主水君を見つけた時は、心臓が止まるかと思ったよ」

心底安心した風な感じで話すセリユードが、次の瞬間雰囲気が変わっていた。

「もしも、主水君がナイトレイドに襲われていたら、私は、どんなことをしてもやつらを——」

「セリユードさん」

瞳のハイライトが消え、あからさまに不味い雰囲気の流れ始めたので、主水は焦り、呼び掛けた。

「あつえくと。うん元気そうだよかったよ」

(まだ完全に呪縛から解き放たれてはいないのか…)

主水はセリユードの中に残る、歪んだ正義の残滓を垣間見た気がした。

そして、まだ自分の警備隊での使命も残っている気がした。

「気がついたようですね。中村さん」

扉が開かれ、入ってきたタカナは、主水の元気そうな姿を見て、僅か一瞬安心し、嬉しそうな表情を浮かべながらも、すぐにそれを消し、いつもの口調でやって来た。

「タカナ様心配かけたようではありません」

「私が中村さんの心配をするなんてありませんよ。それより早く復帰してくださいね。猫の手を借りたいほど忙しいんですからね」

早口で捲し立てるように話すと、タカナはつかつかと部屋を後にした。

「あの賊はどうなったんですか？」

主水がセリユードに聞くと、僅かにセリユードの表情は曇る。

「うん。昨夜追い詰めたんだけどね。いつの間にか逃げられちゃって。今もまだ見つかってないんだ……」

(大丈夫だったみたいだな)

セリユーはえへへといった感じで苦笑いを浮かべ、主水は表面上は同情するような、瞳で見つめたが、心の中では安堵していた。

「じゃあ、行くね。昨夜チブルさん以外にも殺されていて忙しいんだ。主水君はしっかり体を休めてね」

セリユーは手を振ると、部屋を出ていった。

「よっと」

主水は立ち上がると、帯を閉め直し、横に立て掛けられた、二本挿しと布で覆われた帝具アレスターを腰に挿し、畳まれている、黒い同心羽織りを羽織ると部屋を後にした。

どうやら主水が寝ていたのは、警備隊隊舎の医務室であったようで、主水は養生してよいと言われたことと、マインとシエーレのその後が心配なので警備隊を後にした。

警備隊隊舎を出ると、眩しいほどに燦々と輝く太陽が中天に位置していた。

主水は、自分が長い間眠っていたことを実感した。

(貸本屋に行くか)

主水はラバツクの貸本屋に行くことにし、歩み出そうとした時だった。

突如、背筋が凍る程の、底知れぬ恐怖、威圧感、そして直に心臓を鷲掴みにされたような感覚に襲われる。体は金縛りにかかったかのように、動かなくなっている。

(なんなんだこの感覚は……まるで全覚にいくめられたような感覚じゃねえか!!)

江戸でも似たような感覚を、以前主水は味わっていた。それは主水の兄弟子全覚の時で、その時のことが、鮮明にフィードバックされていた。

感覚の主は、主水の視線の先にいた。

腰にかかる程の流れる川のせせらぎのような青髪、雪のように白い肌、整った美貌の中でも、目を惹き付けられるのは、切れ長の目。その眼孔は、見たもの全てを凍死させられると、錯覚させられるほどの

凄みと、絶対零度の冷たさを秘めている。

装束は、軍隊の帽子のようなものを被り、白を基調にし、胸元が強調された、制服のようなものを身に付け、長細い剣を腰に挿している。
(女が放つような気配じゃねえぞ)

主水の危機察知能力が全力で、警鐘を鳴らす。

この女は危険だ、近づくな、逃げろ、と。

体が動かない中、その女性は一歩一歩近づいてくる。

その桁外れの存在感から、自分とその女しかその場にいないという、錯覚に陥る。

意識せず、気にせず通り過ぎればいいんだ、と思っている内に、女性が高い髪を風に靡かせて、横切った。

(行っただか)

主水は一息つこうとした、しかし、その直後。

「その警備隊、お前の名前はなんだ？」

鋭い瞳をさらに鋭くし、流し目を送るようにこちらに視線を送る。

予想だにしていけない問いかけ。

生きた心地がしない。

主水は、冷静になるように、自分に言い聞かせ、なんと答えるべきかに悩んでいると。

「答えたくないならそれでもいい。軽く拷問にかければいいだけの話だからな」

愉悦を感じたウツトリとした艶のある声で話す。

全ての予想の遙か斜め上に行く答え。

下手に誤魔化すことはできないと主水は悟り、正直に告げた。

「帝都警備隊に所属する中村主水でございます」

「中村主水か」

女性は口許を上げ、愉快そうに呟いた。

「何か御用で？」

主水は意を決して問いかける。

「お前から秘めた力のような物を感じたことが一つ。その哀愁の漂う背に私の心(ドS)が反応したのが一つ。そして、お前の腰の帝具に

惹き付けられたのが、最後の一つだ」

「!!」

女性の全てを見透かすような鋭い視線に、そら恐ろしさを感じる。帝具スペクテツドさえ、子供のお遊戯のように感じさせるほどの眼力。

「帝具ですか?」

まるで知らなかったという体で問いかける。知っていたとばれると不味い気がしたからだ。

「気づいていなかったのか。まあいい。またお前とは会うことになるだろう。その時を楽しみにしているぞ」

女性は愉快そうな笑みを浮かべ、踵を返すと、雑踏の中に消えていった。

(とんでもねえやつだな。俺の力を見抜いただけでなく、布で覆った帝具アレスターまで見抜くとはな。やりあいたくねえ相手だな。やりあつたらどちらでも無事じゃあすまねえ)

いつの間にか強く握っていた手は汗でベタベタになっている。

自然と頬を伝う汗を拭い、主水は疲れきった顔でしみじみと考えていた。

天気は晴れやかであるが、今までの経緯で、気持ちはいまいち晴れないなか、ラバツクの貸本屋にたどり着いた。

「主水の旦那、体は大丈夫なのか?昨夜合った時は、あまりよくなさそうだったけど」

「ああ、なんとかな。それより、マインとシエーレはどうだ?」

「二人とも命に別状はない。だけど、マインは腕と肋骨何本かが、シエーレは骨は大丈夫だが全身打撲だ」

主水は命に別状はない、ということ聞き、胸を撫で下ろした。

「あと主水の旦那にナジエンダさんから伝言だ。今帝都にエスデスという女将軍が北方を征伐して帰ってきている。危険な相手だから気を付けてくれ、ということだ」

主水はまさかなと思いなながらも、先程の女性が脳裏を掠める。

「ラバックわりいとそのエスデスとやらの詳しい説明と容姿を頼む」
「ああそうだな。名前だけじゃ分からねえもんな。北方で40万人を
生き埋めにし、蹂躪したとんでもない強さをした將軍だ。革命軍のだ
れもが恐れている。容姿は……」

ラバックは何かを探すように辺りをキョロキョロすると、一冊の本
を持つてくる。

「この女に似ている美女だ」

(18禁) 本に載った美女は、市中であったあの女を思い出させた。

(つたく…やはりかよ……)

主水はこの世界が自分に優しくないのを痛感した。

「どうやらその女性がエスデスであるという結論に至ったのだ。」

「どうしたんだ旦那。顔色悪くなったぞ?」

「…どうやら、そのエスデスとやらに、既に合つて…しかも目をつけら
れたようだ…」

「マジかよ……」

「ああ……」

「またもや主水は大きな問題を抱えることとなった。」

後の波乱を予想させる出来事だった。

第21話

「中村主水、復帰いたします」

主水は警備隊隊舎の詰所の扉を開けると、声を張り上げ、頭を下げた。

皆に迷惑をかけたという、思いも相まっつての行動だ。

一日ゆっくり養生した主水の体は、すっかり癒えていた。

精神的な疲労は全く癒えてはいないばかりでなく、悪化しているぐらいだが：

(いつも通り茶でも飲むか)

周りの警備隊員に、挨拶されたり、体を気遣われ、一言二言言葉を交わし、茶が備え付けられた所定の場に至り湯飲み茶を注ぐ。

(これを飲まねえと一日は始まらねえな)

芳ばしく、自然の息吹を感じさせる、仄かな匂いが鼻腔を擽る。

一時の安らぎを得ようと湯飲みを携え、口をつけようとした直後、

「中村さん。少々お時間いいですか？」

肩を軽く叩かれ、声を掛けられる。

邪魔をされて、少し不機嫌になった主水が見上げると、神妙な顔をした、タカナがそこにいた。

普段とは違う印象に、主水は違和感を覚え、不機嫌さを消し、普段と変わらぬ調子で

「いいですよ」

と言うと、茶を一杯口にして、部屋を出ていくタカナの後を追った。

難しい顔をして無言で歩くタカナに、やはり主水も幾ばくかの違和感を感じるが、自分から聞くのもなんなので、黙って後ろに続いた。

依然として難しい顔で、黙ったまま、タカナの警備隊隊長の私室に通された。

タカナは主水を招き入れると、外に誰も居ないことを再三確認したのちに、慎重に私室に鍵を締める。

「中村さん」

密室にいい年した男が二人。不気味な雰囲気主水は嫌な汗が頬

を伝う。すると、タカナが動いた。

詰め寄るタカナ。後退りをする主水。

タカナは電光石火の動きで、主水の手を握り締める。

(はっはええ!?)

なにやらアツーーー!な雰囲気にならざる主水。

この世界に来て何度目のことだろう。この世界で、主水は、女性より男性にモテている気がする。おぞましいことである。

「中村さん!」

「は、はい」

「頼みがあります」

「なんでもお申し付けください」

声が裏返りながらも、この状況を脱したく、必死で答える。

意を決したような、張りつめた表情のタカナに安堵の微笑みが溢れる。

タカナは、手を放し、主水から少し離れ、話を始める。

「実は、私の懇意にしているチョウリという人物がいるのですが。中村さんに護衛をしてほしいのです」

「なぜ私に?」

当然の疑問。演技?ではあるが、普段からだらけたり、サボったり、失敗したり、真面目にできなかったり、勤務状態に大きな問題があり、且つその事について、上司として、日々愚痴を溢すタカナが、主水に、このような大事な役目を任すというのだから、聞き返して当然である。

タカナは主水の疑問を聞くと、うつすらと微笑を浮かべて、参ったなどという感じで答える。

「そうですね。中村さんには日頃から迷惑をかけられていますし、勤務態度をみてもまず重要な役目を任せてはならない人物であるのは確かです」

「仰る通りです」

怒る素振りすら見せず、主水はうんうんと頷く。

「ですが」

それまでとは違い力強く、逆接を繋げる。

「何故だか分からないのですが、私の本能が中村さんに任せれば大丈夫といっているのです。さらに付け加えれば、警備隊一の強さを持つ、あのセリューさんさえ尊敬と敬愛の眼差しで見ているという事実からも目を反らせないものがあります。以上の二点まあ、一点目は確証がありませんが、そこから考えて中村さんに任せようと思った次第なんです」

真剣な眼差しで主水を見詰めるタカナ。今まで見せたことがないほどの、信頼を寄せるような眼差しで、目をそらすことなく、主水を見詰める。

(はあ、仕方ねえな)

なんだかんだで、主水はタカナのことは嫌いではなかったために、ため息を吐きながらも、護衛を了承することにした。

「感謝しますよ中村さん」

「タカナ様から感謝なんて言葉でるとは思いませんでしたよ」

二人は心から笑いあった。そこには上司と部下の垣根を超えた関係が生まれていた。

「で仕事内容を詳しく教えてほしいのですが」

「分かりました」

タカナは言いにくそうに重い口を開いた。

「チョウリさんは、元大臣の大職を与る身でした。そして今は隠居しておられたのですが、この世の中の腐敗に心を痛め、立ち上がることを決意したのです。しかし、今の上層部はチョウリさんのような目の上のたんこぶが出てくるのが、我慢になりません。したがって、チョウリさんは帝都に出てくるまでに必ず――」

「命を狙われると」

主水が重い口調で、言いにくそうなタカナに変わって言葉を繋ぐ。タカナは静かに頷く。

「ええ、中村さんのいう通り。腐りきった上層部は暗殺者を向けるでしょう。それを本当に申し訳ないのですが、中村さんにお任せしたいのです。本当は私が行かなくてはならないのですが、なにぶん警備隊を空けるわけにはいかなくて……」

苦肉の決断だったのだろう、自分が行かなくてはならない任であるのに、それが出来ないジレンマ。

部下である主水に命を賭けてくれという、ある意味理不尽な要望をしている自分への憤り。

その二点がタカナを苦しめていた。

「分かりました。今までの失態を取り返す為に、この中村主水やり遂げて見せます」

タカナとこの室内に流れる暗い雰囲気吹き飛ばすべく、明るく主水は宣言した。

主水としても、いつものように嫌味つたらしく、愚痴を溢すタカナの方が、良かったらしい。

「すみません中村さん」

タカナは深々と頭を下げた。あの傲慢なタカナがだ。

「では、これをチョウウリさんに渡してください。私から詳細を書いておきました」

「分かりました」

主水は黄色い油紙で包まれた、手紙を受けとると、懐に納めた。

「中村主水いつて参ります」

「頼みましたよ中村さん」

タカナは、主水の背中を見守っていた。

そして出ていき、室内に一人きりになると、寂しそうに呟いた。「最後の仕事頑張ってくださいね中村さん……」

誰にも聞かれることなく、そして誰にも真意を知られることはない。

全てを知るのはタカナのみであった。

（今回は話からすると危険そうだが、表の仕事だ。頼りにしてるぜ相棒）

主水が帝具アレスターを掴むと、アレスターも答えを返すように布越しにも分かるほど、神々しい黄金の光を放っていた。

主水は一端自分の部屋に戻り、準備を整えた。

タカナの話では、帝都近郊の村まで行き、そこから帝都まで護衛す

ればいいという話だが、地図を見ると中々の距離があり、往復となると、まる一日かかるのではないかと予想され、そして、必ず暗殺者との戦闘が起ることも容易に想像できた。故に入念に支度をしたのだ。

着流しでは歩き難いということで、以前帝都の呉服屋で購入した、袴を着て、腰に愛刀の二本挿し、帝具アレスターを携え、愛用の同心羽織り、頭には雨が降っても大丈夫なように黒い塗り笠を被り、背に風呂敷で包んだ荷物を担ぐ。

この世界ではほとんど見かけない純和風の様相である。しかし、旅路には慣れた様相の方がよい、と主水は判断していたのだ。

(いくかー)

主水は気合いを入れ、部屋をあとにした。

主水が歩き続け、帝都近郊の約束の場に着いたのは、黄昏時であった。約束の場には、少数の護衛と、初老の男性、それに寄り添うように長い槍を携えた若い女性がいた。

(お偉いさんにしては、護衛が少ないな)

隠居していた『元』大臣だからだろうか、はたまた命懸けの仕事だからだろうか、あまりにも少ない護衛に少々不安を主水は覚える。

だからといってすることは変わらないので、主水は気を入れ直し、チヨウリであろう初老の男性に挨拶をするべく歩み寄った。

「タカナ様から派遣された中村主水と申します」

主水は頭を下げた後、タカナから受け取り、渡してくれと言われていた手紙を渡した。

「これはこれはタカナ君が言っていた頼りになるという中村君か。私はチヨウリ、こちらに居るのが私の娘のスパアだ」

チヨウリは柔和な表情で主水を見ると、手紙を受け取りながら、これこれとスパアに合図を送る。

スパアと呼ばれた女性は軽く会釈した。

「では護衛頼みましたよ中村さん」

元大臣ということなのに、偉ぶることもなく、低姿勢な態度である。

またチヨウリ本人からは威厳と堅実さを感じられた。

(元大臣とは思えないほどの清廉な男だ。こりやあ今の腐敗しきつた上層部は嫌うはずだ…)

主水は初めてこの国で立派な男に出会うと同時に、深い失望を帝都に覚えた。

チヨウリと娘のスピアは寄り添うように馬車に乗り込むと、馬車は帝都に向けて走り出した。

主水も馬を借り、後続く。

しばらく走り続けると、主水は殺気を感じた。幾多の修羅場を乗り越えた者の発する、鋭い殺気。

(来なすったか)

主水は馬車を止め、前が出る。

地に沈みかけた夕焼けが、三つの長い影を描き出す。

黒ずくめの三人の暗殺者が主水の前に立ち塞がった。

第22話

魔の手が延びるかの如く、三人の黒い影が主水の足ともまで迫っていた。

「怪しいヤツだ。チョウリ様を護れ行くぞ！」

「止めろ。お前らじゃ敵わねえ！」

護衛を止めようとするが、その責任感からか、足を止めることはなかった。

(バカ野郎)

力の差も測れず、無下に、命を捨てにいく行動、決して誉められた行動ではない。しかしながら、主を護ろうとする強い想いは、古来の武士を彷彿とさせる姿で、主水の心も揺り動かされた。

「ダイダラ」

「おう。奴等の経験値は俺が貰う！」

紳士のような細身の男が、ダイダラと呼ばれた大柄の男に声を掛けると、ダイダラは巨大な斧を抜いた。

(帝具か！)

巨大な斧へ二挺大斧ベルヴアークを振りかぶり、轟音をあげながら横風ぎに振るわれた。

全ての護衛の胴が両断されるかと思った。

しかし、胴を切り離す前に、全ての護衛は倒れ、ベルヴアークは一髪頭上を掠めて、空を切った。

「何！」

手応えや目の前に舞うはずの血飛沫が舞わないことに、疑問符を浮かべるダイダラ。

今までであればこの一振りですべてが終わっていたのに、何故だ？という疑問。その疑問の答えを持った男、主水がダイダラの前に立った。

「間一髪だったぜ」

主水が全ての護衛の意識を奪い眠らせたのだった。

主水とダイダラでは、身の丈一回り以上違うはずだが、ダイダラに

は、逆に主水が見上げる程の大きさに感じていた。

「お前らなにもんだ」

「俺たちはエスデス様配下の三獣士だ」

（またエスデスか…）

主水は辟易していた。ただでさえ目につけられているのに、今回こいつらを倒したら、より目をつけられるのは、火を見るより明らかだったからだ。

右手で黄金の輝きを放つアレスターを持つ主水に、ダイダラは気圧されていた。

自分の主エスデスから感じた威圧感と同等のものであるからだ。

しかし、ダイダラは認める訳にはいかなかった。

自分の主以外に俺を恐れさせる者がいるはずはない！いや居てはならない！！

そのプライドが体に力を蘇らせた。

「俺は負け——」

ベルヴァークを高々と振り上げた。

しかし、それが振り下ろされることはなかった。

夜の帳に一筋の光が、夜空を駆ける流れ星の如く線を描いた。

刹那、全て言い終わる前に、ダイダラの手からベルヴァークがスルリと落ち、地にめり込んだ。

「あっちで寝てな」

崩れ落ちかけるダイダラに対し、まるで虫を払うかのようにアレスターを振るう。

アレスターが腹部にめり込み、ダイダラはくの字に折れ曲がり、そのまま闇の中に吹き飛んでいった。

「ねえリヴァア何があつたの？」

「あの男が瞬く間にダイダラに幾多の打撃を打ち込んだのだ。侮れんぞ。我らも本気で行くぞ！ニヤウ、スクリームを使い」

リヴァアという紳士のような男がニヤウという小柄で少女かと思ふ程の容姿を持つ少年に、指示を出す。

ニヤウは後ろに位置取り、笛の帝具スクリームを口に添え、リヴァ

は前に立ち、手袋を外し、指輪型の帝具、ブラックマリンを構えた。
(尺八のような帝具と指輪のような帝具か。力を見極めるか。いやそんな余裕もない。速攻で行く)

主水がアレスターを下段に構えた刹那、辺りに澄んだ、清らかな音色が響き渡る。

心安らぎ、戦意を貶め、力を奪う魔性の音色。

(体から力が…)

主水は何とか踏みとどまるが、立っているのがやつとの状態である。

笛の帝具スクリームの持つ、奏でた音色を聴いた者の感情を、自在に操作する力が発動していた。

「ニヤウそのまま続けろ！」

リヴァはどこからか、樽を出し、その場に置いた。

「行くぞ水塊弾!!」

リヴァが主水を指し示すと、樽から浮き出た水が小さな刃と化し、まるで生き物のように主水に襲い掛かる。

帝具ブラックマリンは、水棲危険種が持つ、水を操作する為の器官を素材とし、装備者はその力を得ることができるといいうものである。

(捌ききれねえ)

ナイフ代の幾多の水塊が降り注ぐように襲い掛かる。

アレスターで弾き落とすが、弱った体では限界があり、捌ききれない水塊が主水の体を傷つけた。

至るところから出血するが、急所に降り注ぐ水塊は完全に捌いていため、見た目ほどのダメージは負ってはいなかった。

(くっ、このままじゃじり貧だ。どうにかしてあの笛の音を止めねえと)

絶えず降り注ぐ水塊を弾きながら対策を考えると、以前暇潰しに警備隊の書庫で見た書物を思い出した。

(やってみるか)

残り少ない体力を振り絞り、小柄を鞘から抜き、倒れ込みながら放つ。

「こんなもの」

リヴァは水塊を避け向かってくる小柄を、余裕綽々といった感じで手刀で振り払う。

「悪あがきも終わりかな」

紳士然とはしているが、歪んだ狂気が見栄隠れする。

「本命はそちらじゃねえよ」

キンという金属音と共に、辺りを支配していた音色が止んだ。

(第一段階は上手くいったな)

主水の第一の目的は、音色を止めること。

小柄をニヤウだけに放てば、前衛のリヴァに落とされるので、一投目をリヴァにフェイクとして投げ、時間差でニヤウに本命の小柄を放っていた。

「ニヤウどうした？」

唯一主水の動きを拘束できる音色が、止んだことに焦りを見せる。

「小さなナイフみたいなのが飛んできて、大丈夫続けるよ」

主水はアレスターを地面に突き立て、右手を刀の柄に、左手を鞘に、腰を下ろして居合いの構えを取る。

そして、鋭い目付きで、ニヤウの一挙手一投足を見つめる。指ひとつの動きさえも見逃さないように。

そんなことも露知らず、ニヤウは再び帝具スクリームに手を掛け、そして、口をつけ、音色が奏でられ、辺りに美しい音色が響く——その刹那、砂煙を巻き上げながら、地を裂く斬撃が飛んだ。

「ちっ！ニヤウが帝具を使用する事への妨害か。しかし音色は既に奏でられている」

リヴァとニヤウは斬撃を横っ飛びしてかわす。ニヤウはかわしながらも音色を奏でるのを止めてはいなかった。

「上手くいったぜ」

リヴァとニヤウは目を見張った。

間近に主水が立っていたのだ。

「何故動ける!?!」

「敵にベラベラネタを喋るやつがいるかよ」

主水はアレスターを翻し、神速の打撃を放った。まるで、神が後光を放ちながら舞を舞うように。

主水がアレスターを腰に挿し、砂煙が収まる頃には、リヴァとニャウが呻き声を上げながら地に伏していた。封じられ身動き一つせず（手こずらせやがってまああれを読んでなけりやヤバかったかもな）

主水は以前読んだ書物で音とは振動だということを知った。そして、振動であるならば、物理的に斬ればいいと解釈し、実行に移した。難しかったことと言えば、振動が自身の体にかかるコンマ何秒（間合いが30メートルに音速が毎秒343メートルのため、到達まで0.087秒）に合わせることであった。斬撃が振動を斬りながら突き進むのに続き主水はリヴァとニャウに肉薄したのだ。

主水は一瞥すると、踵を返し、馬車に向かった。主水としては、三人の帝具を確保すべきか悩んだのだが、表の仕事の護衛の最中ということと、所持できる空気がないということとで断念した。

しかし、この主水の判断が後の悲劇を産み出すことになろうとは、誰が予想出来たであろうか。

「主水君ありがとう。君は命の恩人だ！」

馬車から飛び出してきた、チョウリは深々と感謝の意を示し、

「ありがとうございます。中村様。貴方が居られなければ私達は皆やられてました」

娘のスピアもチョーリと共に頭を下げた。

「頭を上げてください。これも任務ですから」

主水はむず痒く感じていた。

「お父様この者達はどのようにならしたのでしょうか？」

スピアは目を覚ました護衛達が運んできた三獣士を見て、チョウリに判断を求める。

「主水君はどうするべきだと考えるかな？」

「わ、私ですか？」

いきなり話を振られ驚く主水。

「君が捕らえたのだから君に任せるよ」

主水は三獣士を見て考えた。

一般的に言えば当然だがここで殺したほうが良い。しかし

「殺さずに警備隊に差し出しましょう」

「!!」

「その心は？」

スピアは主水の言葉に驚きが隠せない。

しかし、チョーリは楽しむように主水に尋ねた。その真意を。

「この三人はエスデスの側近らしいです。ならばここで命を断ち怨みを買うより、殺さずにエスデスに恩を売ったほうがチョーリ様にも良いと思ひまして」

「確かにな」

チョウウリの頭の中では、損得勘定を算盤を弾き計算していた。

数秒後、

「エスデスは大臣の言いなりだが、恩を売つといて損はないな。主水君の言う通りにしよう」

チョウウリの顔は汚い世間を歩んできた、海千山千の策士のものになつていた。

その後、動けない三獣士を縛り上げ、馬で引き摺りながら帝都に連れ帰った。

帝都に着いた時には、日が顔を出し、空が白み始めていた。

「主水君、本当に感謝するよ。君のお陰で生きて帝都にたどり着くことができた」

チョウウリに両手を握られ再び感謝を述べられる。

「中村さん。よくやってくれました!!報告は明日聞きますので、今日はいはゆつくり体を休めてください」

気配を感じさせずに、背後を取っていたタカナも主水に深く感謝を示しており、主水も満更ではなかった。

「では、失礼します」

主水が頭を下げ、家路に着いた。

◆◆◆

「君が主水君を手配してくれたお陰で助かったよ」

「いえ、頑張ったのは中村さんですから」

チヨウリの言葉に、タカナの中での主水の株が急上昇し、我がことのように嬉しさが込み上げていた。

無意識ながらに笑みが溢れる。

「君の要請に関してだが、私は内部からこの国を直していきたくらいと思
うよ」

真剣な表情で思いを語るチヨウリに、タカナは頷くしかなかった。

「チヨウリ様がそのように仰るならば。しかし、何かあったら我々を
お頼りください。チヨウリ様は、この帝都の将来に、必要な人なので
すから」

「分かった。その時にはまた頼むよ」

「はい」

チヨウリとタカナは笑顔でお互いの健闘を称えて、握手をして別れ
た。

第23話

その日、眠っていた主水が目を覚ましたのは、夕方であった。
チョウリを護衛しながら、帝都にたどり着いたのが早朝、そしてタカナの配慮により、その日は警備隊を休むことが許されていた。

その後、家路についてから、布団に倒れ込み、泥のように眠りこんでいた。

「疲れと怪我はもういいな」

主水は起き上がると、体を動かし確認する。

しみじみと若い肉体の回復の早さの、ありがたみを感じた主水であった。

(タカナ様への報告は明日として。まずはナジエンダに伝えておくか)

今回戦った三獣士とその帝具について、伝えておこうと、思いたつと、主水は用意を整えて、ナイトレイドのアジトに向かうべく、家を後にした。

外は既に日は傾き、日の掛かる城郭は茜色に染まり、帝都の街並みは黄昏れ始め、空を見上げた主水の瞳には、暮れなずむ董色の空が映っていた。

(こんな時間まで寝ていたのか…)

自分が今回どれだけ気を張り、疲労していたのかを、時間の経過から垣間見れた。

帰宅する子供や、夕飯の準備のために、買い出しに出かけている女性の姿を横目に見ながら、主水は大門から帝都を出て、ナイトレイドのアジトに向かった。

アジトは帝都から離れているため、たどり着いた頃には、刻々と忍びよる夕闇が、辺りを支配していた。

ナイトレイドのアジトに入るが、普段誰かしら居るはずの広間には誰もいなかった。

それは、時間からしてアカメやタツミが料理しているはずの台所でも、同様である。

(どこにいるんだ?)

修練場などにもいず、幾つかの部屋を巡ると、ナジエンダの執務室から光と声が漏れてくる。

「レオーネお前は帝都へ行きエスデスの動向を探ってきてくれ」

「とんでもねえやつだ気を付けろよレオーネ」

「了解って、主水の旦那!」

何の前触れもなく扉が開かれ、入ってきた主水に皆が注目する。

「重役出勤だな主水」

「うるせえ、色々あつたんだよ」

ナジエンダと主水は言葉を交わしあいながら、笑い会う。

「主水」

「主水さん」

手をギブスで固められ、胸部にはコルセットのようなものを着けた、痛々しい姿のマインと、頭に包帯を巻いたシエーレが主水の前に来て、

「ありがとね」

「ありがとうございました」

マインは、頬を朱に染め、そっぽを向きながら、シエーレはしっかりと主水を見つめ、感謝を述べた。

全く感謝の仕方は違うが、二人らしい対応でもあり、二人の感謝の意は伝わってくる。

主水は

「構わねえよ」

と素っ気なく返しながらも、二人を救うことができ、本当に良かったと、しみじみと感じていた。

「私からも二人を救ってくれたことには感謝する」

皆を代表してだろう、ナジエンダも頭を下げた。

少し、主水の胸が痛んだのは、セリユーを直接鍛えたのが、主水であるということがあったからかもしれない。

「じゃあ話を戻すが、主水はエスデスに会い、しかも目をつけられたとラバックから報告を受けているが。どうなんだ?」

「ああ、そのままだ。見ただけでゾツとしたぜ。今まで、とんでもねえヤツには何人も合ってきたが、女の身であれほどのやつにあったのは初めてだ……」

「主水さんがそこまで言うなんて……」

タツミは主水の言葉に驚き、皆は沈黙に包まれ、ナジエンダの義手はギシリと軋んだ音をたてた。

「さらに、面倒なことに、やつにどこまでか分からんが、力を見抜かれ、このアレスターが帝具であることさえも見抜かれた」

主水がアレスターの柄を握り、顔をしかめて呟いた。

「やはり、ただ者ではないな。レオーネは慎重に行動してくれ」

ナジエンダはしきりに義手を押さえている。

何かがあつたのだらうと、主水は思ったが、誰しも語りたくない過去はあると、詮索すべきではないと黙っていた。

「オーライ、オーライ」

（主水の旦那にここまで言わせる帝国最強のドS將軍……隙あらば殺つちやお。大臣並みに、仕留め甲斐がある）

レオーネは今までの二人の言葉を聞いていたはずなのに、どこか嬉しそうにしたなめずりし、ワクワクしているようだ。

（百聞は一見に如かず。レオーネも実物見りやあ分かるだろ）

主水はチラリとレオーネの様子を見て、そう思った。
身をもって知るのがよいと。

「最後の一つだが。帝都で文官の連続殺人事件が起きている。今まで殺されたのは文官三名とその警護の者40名だ。しかも問題は殺しの現場に『ナイトレイド』と紙が残っていることだ」

ナジエンダは、ナイトレイドの紋が描かれている紙を取りだし、皆に見せた。

「ちよつといいかナジエンダ」

「お前が言いたいのは元大臣チヨウリのことか？」
「！」

主水ハツとした表情を見て、ナジエンダは不敵な笑みを浮かべる。
本当に嬉しそうに。

「良識派の文官は能力も高く、真に国を憂う者だ。そんな文官こそ新しい国に必要なだと、我々革命軍もチエツクをしていた。そのため情報が入ってきたんだ。お前が、チョウリを護り、エスデス配下の三獣士を倒したとな」

「はあ、さすがナジエンダだな。そこまで知っていたとは」
「当然だ」

ナジエンダは得意気にドヤ顔をしている。
(腹立つな)

「まあ主水の件は後で報告を受けるとして、そんな貴重な人材を大臣の思惑だけで、これ以上失う訳にはいかない。こちらから偽物を潰しに行くべきだと思う。お前たちの意見を聞こう」

ナジエンダは視線を皆に一巡させる。

「俺は、政治については分からねえけど……ナイトレイドの名前を外道に利用されているだけで、腹が立つ!!」

タツミが皆の気持ちを代弁するかのようには、口火を切った。

その顔には僅ながら、成長の兆しが垣間見えた。

「そうだな。その通りだタツミ!」

呼応するようにブラートが答えると、皆も大きく頷いた。

その皆の様子をナジエンダは満足気に見送り、意思を確認し、言を発した。

「よし、決まりだ!勝手に名前を使ったらどうなるか、殺し屋の掟を教えてやれ!!今狙われている文官は五名だ。そこからさらに絞りこみ、宮殿外に出る予定があるものに限定すると、二名に絞られる。アカメとラバツク。タツミとブラートがそれぞれ護衛に当たれ」

話し合いは終了し、仲間達は主水とナジエンダを残し、執務室を後にした。

「まさか革命軍の情報網がここまで広いとはな、驚いたぜ」
「フッフ、見直したか」

主水も情報の重要性はよくよく分かっていたので、素直に称賛すると同時に、自分も独自に情報屋が必要かもなと考えていた。

「報告といっても、ナジエンダが言っていたことがほとんどだ。それ

以外と言うと、三獣士は殺さず警備隊に引き渡したことと、やつらの帝具を回収できなかったってことぐらいだ。すまなかった」

「いやそういう任務だったのだから気にするな。良識派の元大臣チョウリが助かっただけでも大きい」

主水は幾分救われた気がした。裏だが、ナイトレイドに属する者として、後ろ髪を引かれる思いがあったのも事実だったからだ。

「話は変わるが、チョウリは今回は大丈夫だったが、まだ用心したほうがいいと思うんだが、護衛はどうなる？」

「それなら大丈夫だ。宮殿内ならブドーがいるから、大臣も下手には動かんぞ。外では護衛がつくことになってるしな」

ナジエンダが自信を持って言うので、主水も信用しているので、納得することにした。

報告はそれで終了し、広間に戻ると、レオーネとブラートが差しで酒を酌み交わしていた。

「珍しい組み合わせだな」

「ボスには報告終わったのか」

「ああ」

「じゃあ旦那も呑んでけ、呑んでけ」

酒が入っているためか、レオーネは幾分ハイになっており、主水を引っ張ると、席につけた。

主水自身は酒は好きでもなく、また嫌いでもないため、二人の好意を無下にするわけにもいかないの、チビチビと飲み始めた。

「ブラート結構しごいてるようだな。いい顔になってきたぜ。まだ青いところもあるが」

「そうだろ。タツミの前じゃ言わねえが、やつは素質があるぜ、いつかは俺を抜くんじゃねえか」

だはははと豪快に笑い、我がことのように喜ぶブラート。饒舌になりながら、次々と酒を煽っていく。

二人の関係が良好なのが見て取れる。

「レオーネはいいのか？このままじゃ、タツミをブラートに奪われちゃうぞ。貞操までな」

最後は小声ではあるが、主水は笑いながら、冗談めかして、レオーネに振った。

「ん？大丈夫、大丈夫。もう睡はつけてあるから」

「な、なんだと!!」

レオーネの言葉にブラートは即座に反応し、血相を変えて立ち上がった。

酒で火照っているはずなのに、顔は青ざめワナワナと震えている。

「俺のかわいいタツミが…しまった出遅れたか…いや、まだ間に合
うはず…」

この後もブラートはブツブツと、何か言っていたが、相当危ない発言が入っていたため、主水もレオーネも聞かなかったことにした。

師弟関係とは別の関係にステップアップするのも時間の問題である。

シリアスに行くのかと思われたが、この面子なので、いつも通りの変わらない夜だった。

第24話

爽やかな空気、麗らかな陽光、薄く棚引く雲、鳥の囀り、五感に感じる全てが、清々しさを感じさせる朝を迎えてはいた。

しかしながら、主水の気分は良いものではなかった。

酒豪の二人、レオーネとブライトにあの後もしこたま吞まされたために、あまり酒に強くない主水は、二日酔いに悩まされていたからだ。(まさか朝まで吞まされるとは思わなかったぜ)

今頃、レオーネは、酒瓶を抱え、アジトで深い眠りについており、ブライトは、タツミと護衛対象の乗る竜船につき乗り込んでいる所だろう。

あれだけブライトも酒を呑んだのに、ピンピンとしていたことは驚きであ。

主水もふらつく足取りで警備隊隊舎にやっとの思いでたどり着いた。

「中村主水……出仕します……」

「どうしたんですか中村さん？顔が真っ青…酒臭い。中村さん朝から酒を呑んできたのですか！」

「耳元で声を出さないください。頭がアタタタ」

高い声で耳元でギャアギャア騒ぐタカナに、主水は頭を押さえながら懇願する。

「はあ、まったく先が思いやられますよ」

タカナも主水同様頭痛を覚え、頭を抱えた。主水の頭痛とは、全く正反対のものではあるが。

「そういうえば中村さん。チョウリ様からお手紙と贈り物を頂いていますよ」

話題を変えたタカナは、持っていた手紙を主水に手渡すと、部屋を出ていった。

タカナは去っていったが、渡してくれたならば、見ていいのだなと解釈し、手紙を開く。

チョウリの人柄を表すべく、手紙の字は、達筆な字であり、お礼と

今後について書かれていた。

『此度は本当に御世話になりました、感謝に耐えませんが、今の命は私だけのものではないと思います、国を良くすることに全力を注ぐのはもちろんだが、清濁会わせ飲み、柔軟に対応し、命を大切にしようと思う。生きていてこそ、国を変えられるのでね。それと、私の命を助けてくれたお礼をタカナ君に預けてあるのでもらってほしい。僅ではあるが私の気持ちなのでね。それではまた宮殿で合えることを楽しみにしている。』
チヨウリ』

(清濁会わせ飲むか……国を良くしたいが、死ぬわけにはいかないから、大臣に睨まれないように汚ねえことにも目をつぶり、対応するってえことか。綺麗なだけじゃ、宮殿では生きていけねえってことだな。ん？それより宮殿でまたってえのはどういうことだ?)

チヨウリの手紙を読み、少し考えていると、なにやら大きな菓子折りを、重そうに抱えたタカナが戻ってきた。

「手紙に書いてあった贈り物ですよ」

タカナに渡された菓子折りを開くと、主水は驚きで動きが止まった。

(マジかよ。いきなり清濁会わせ飲んでるじゃねえか!!)

よく裏の仕事の現場で見たものがそこにあつた。

簡単な菓子の下に山吹色の菓子が……

「タカナ様……これは?」

困惑してタカナに意見を求める主水。さすがに額が額なので、街で巻き上げる袖の下とは違い対応に困つたのだ。

「私は何も見ていませんよ。ただのお菓子でしょ。チヨウリ様の気持ちというので、もらっておいたらいいのではないですか」

タカナも中身を知っていたのだろう、苦笑いを浮かべている。警備隊長という身分と、チヨウリとの友人関係の板挟みに、悩まされているみたいだ。不憫である。

「ありがたく頂戴します」

菓子折りを天に掲げ、主水は頭を下げた。

これがあれば働く必要ないんじゃないかと真面目に主水が考え始

めた時だった。

「中村さん。大事なお話があります」

タカナの声色が一変し、表情も真剣なものに変わる。

「一体なんでしょう」

「中村さんは明日から配置転換になります」

「配置転換：!!左遷ですか……」

主水の頭の中を『左遷』の二文字が駆け巡る。

何度か主水は左遷を経験していた。

中でも一番厳しかったのは、『山流し』と恐れ呼ばれた、甲府勤番であつた。

何故『山流し』と呼ばれたかという点、遠島の『島流し』にかけてもので、甲府勤番に飛ばされたら華やかな江戸に、生きて返ることは出来なくなると恐れられていた。今では任期ができていたが、すぐに戻るなら、裏口として、賄賂を送るという方法しかなかった。地獄の沙汰も金次第、それ故、相当な高額で、実家が金持ちしかできない方法である。

飛ばされるのは江戸で素行の悪い者や、仕事が出来ないものである。

そのことから、主水は異常に配置転換を左遷と思い、恐れたのだ。

「いいえ左遷ではありませんよ。言つてしまえば昇進です」
「!?!」

主水は想像だにしない返答に疑問符を浮かべる。

左遷なら思い当たることが様々あるが、昇進は思い当たることは更々ない。

チヨウリの件もタカナから頼まれただけで、公の正規の仕事ではないからだ。

「私だつて耳を疑いましたよ。あの中村さんが昇進だと言うんですから。全くどうなっているんでしょうね」

ボソツと愚痴を溢すと、懐から一枚の紙を取り出す。

主水が受け取った辞令と表に書かれた紙には、

『某月某日特別警察会議室に集合すること』

と書かれている。

主水の頭の中には、妖艶な笑みを浮かべるエスデスと、何かを企んでいるような笑みを浮かべるチョウリの姿が浮かぶ。

このような差配を出来るのは、主水の知る者の中ではこの二人だけであつたからだ。

「あと、これは中村さんにとって朗報だと思いますが、セリユーさんも一緒に昇進ですのぞ」

（腐れ縁か…だがまだ面倒を見てやらねえといけねえから、一安心だな）

自然と主水の頬も緩んでいた。

その様子を見たタカナはやれやれといった感じで、主水を温かい眼差しで見つめていた。

主水にとってセリユーがそうであるように、年齢に違いはあるが、タカナにとっては主水が『手のかかる子（部下）ほどかわいい』に当てはまっていたのだ。

「ということ、今日で中村さんは警備隊を脱退しますが、今はまだ警備隊の一員です。しっかり働いてくださいよ」

「はい！中村主水市中の見回りに行つて参ります！」

敬礼して、主水は去つていった。

「面倒を散々かけられました、嫌ではありませんでしたよ」

タカナは今までのことを感慨深く思い返し、嘯くようにボソツと溢した。

これが最後の見回りかと思うと、散々行ってきた市中の見回りも、別の見え方がしていた。なんとも言えない感覚である。

「？」

警備隊隊舎を一步出た時だった。

主水の足が自然と止まる。

違和感を感じ、目線を下にそらすと、草履の鼻緒が両足ともに切れていた。

（縁起がわりいな…）

嫌な予感を感じつつ、主水晴天の空を見上げるのだった：



巨大豪華客船『竜船』にゆったりとした癒しを与えられるであろう音色が奏でられている。

しかし、それは乗船者を楽しませるための、船側の趣向ではない。その音色が流れるごとに、甲板場に出ている、乗船客が次々と倒れ、眠りについていく。

その場にいた、タツミはなんとか精神力で持ちこたえてはいるが、足さえもふらついた状態である。

(なんなんだよこの音色は？耳を塞いでいるのに聞こえてくる)

耳を押さえながら周りに視線を向ける。

突如流れ始めた音色。

次々と眠りにつく乗船客。

あり得ない状況が目の前に広がっていた。

「隠れているのはダルかったぜ。おつ、まだ起きているやつがいたとはな」

突如甲板に響く声。

タツミが振り返ると、黒づくめの大柄な男、ダイダラが具合を確かめるように腕を回しながら歩みよってくる。

「催眠にかかってりや記憶は曖昧、生かしておいてやったものを…」

タツミは即座に敵であり、今回のターゲットと認識する。

「お前がナイトレイドの偽物か」

「そつちは本物さんかい！こりゃあついている！」

敵つい顔が歪み笑みを浮かべる。

何かを期待するかのよう。

ダイダラはおもむろに懐から何かを取り出すと、タツミに投げ渡した。

タツミに投げ渡された物は、一本の剣であり、タツミは困惑する。敵であり丸腰のタツミに態々武器を寄越したのだから。

「なんのつもりだ？」

問い掛けられたダイダラは僅かに間をおくと、何かを思い出すよう

に、語りだした。

「俺はさ、戦って経験値が欲しいんだよ。もうどんなやつが相手でも負けないように、最強になるためにな!!」

ダイダラは帝具ベルヴアークを背中から抜き放つ。

「かかって来いよ、この位置なら人も倒れてないしやりやすいだろ?」

タツミの形相が、殺し屋のそれになる。

「じゃあいい経験をさせてやる」

全力で床を蹴り、持ち前のスピードで、ダイダラに斬りかかった。

第25話

竜船を舞台に、タツミとダイダラが命を賭けたやり取りを開始していた時に、別動隊として護衛の任にあたる、アカメとラバツクの組にも、新たな動きが現れていた。

一筋の陽の光も通さない雲に覆われた鉛色の空、ハラハラと舞い落ちる雪の結晶、見渡す限りの白い世界、極寒の世界がそこに広がっていた。

そんな人が生きていく上で過酷な環境の中に、存在する小さな集落に、大きな荷台を伴った良識派の文官が訪れていた。

文官は伴ってきた騎士に指示を出し終えると、自らも精力的に働き始める。

荷台から幾つかの米俵を下ろし、その米を集まっている集落の人々に配り始めた。

集落の人々は皆一様に感謝の眼差しを向け、中には涙を流す者もあり、文官に深く頭を下げていた。

文官も人の良さそうな優しい笑みを浮かべ、米を皆に配り続けている。

そんな様子を離れた木の上で二人の人物が感動の面持ちで見つめていた。

「備蓄米かあ……さすが良識派だぜ。ナイス施し！」

「うん、あれだけあれば当分大丈夫」

良識派の文官を護衛するために、影ながらついてきたラバツクとアカメである。

ナイトレイドも良識派の文官と同じく民の味方をする組織であるからだ。

そんな和やかな様子を見ながらも、二人は一切警戒を怠らない。護衛は一瞬でも気を抜いたら取り返しのないことになる。それを重々承知の上であったからだ。

「糸はどいつ？」

ラバツクは辺りに張り巡らせた糸の動きを敏感に感じとる。

「相変わらず、反応無し——と言いたいところだけど、来なさったみたいだぜ」

ラバックは険しい表情で糸の反応のあった、遙か彼方を指差す。

白い世界と対になる黒いコートを纏った大柄の男が、目に見えるほどの殺気を放ちながら、此方に向かって歩いていく。視線の先には施しを続ける良識派の文官が。誰一人として、全く気づいていない。

「ラバック、護衛は頼む。私はやつを葬る！」

「任せませー！」

木から飛び降りると、アカメはその男に、ラバックは文官を護衛に向かった。

アカメは雪に足を取られることもなく、雪の上を滑るように走り、一直線に男に向かい、男の前におどり出た。

「帝国の刺客か！」

アカメは帝具村雨を何時でも抜ける状態で答えを待つ。

「その通り。俺は刺客のザンク。世間で言われていた名前だと、首斬りザンクだ」

「えっ!？」

アカメはその答えに困惑する。以前ザンクは主水に捕らえられ、連行され、死刑になることは免れないだろうと話をしていたためだ。

「お前が言いたいことは分かるぞ！」

額に付けた帝具（ヘスペクテッド）が怪しい光を放つ。

「何故捕まった筈の俺がここにいるかだろ。簡単な話だ。牢屋で死刑の執行を待っていた俺に、大臣（悪魔）からの囁きがあつてな。命令通りに働けば、命を助け、さらには殺人許可書をくれると言つてな。俺は喜び勇んで大臣（悪魔）と契約したんだ。首を斬りたくてしようがなくてな」

口は饒舌に、また滑らかに動き続け、表情には歪んだ愉悦が浮かんでいる。

つまりは、良識派の文官を殺すことを条件として司法取引をしたのだ。

法などあつて無いようなものだが。

アカメは無表情に村雨を鞘から抜き、晴眼に構えた。

鞘から抜き放たれた村雨は、白い大地に紫電の輝きを放つ。また圧倒的な存在感を持ち、相手に畏怖を与える。

「愉快、愉快、しゃばに出て、すぐに帝具遣いと戦えるとは、ヤツとの前哨戦にもってこいだ！」

口が避けるのではないかと思えるほど、口角が上がり、下卑た笑みを浮かべる。

「葬る！」

アカメは一瞬で間合いを詰めると、横風ぎに一閃する。

「ほう、少しでも傷かできたらおしまいか。面白い」

ザンクは体を少し後ろに反らし、アカメの一閃を避け、そこから反動をつけて、突きを繰り出す。

アカメも身を屈め、突きをかわした後に、返す刀で切り上げる。体を切り裂くと思つた時だった。

キンと甲高い金属音が鳴り響き、村雨が弾かれた。

「残念。俺の体はオカマの博士に弄くられていてな、頭以外は全て機械になっているんだ」

突きを繰り出した腕の逆の腕に持つ剣でアカメを切り付けた。

「うっ！」

村雨は弾かれ防御に間に合わず、またザンクの懐深くまで入り込んでいたために。バックステップによる回避も遅れ、ザンクの一撃がアカメを襲う。

服が縦に裂け、ネクタイがハラリと落ちる。

アカメの雪のように白い肌に一筋の刀傷が走り、傷口から流れ落ちた血液が白い雪を朱に染めた。

「浅かったか、愉快、愉快。だがな、お前に勝ち目はない。スペクテツドによる未来視、機械化により帝具の効果が効かない肉体。全てにおいて俺が優位にたっている」

「喋り過ぎ」

「趣味でね」

アカメは再びザンクに飛び込んだ。

帝具の名前通り、村雨の如く、降りかかる数えきれない斬撃の嵐。ザンクは顔に当たる物のみを的確に、両手の双剣で弾く。

刀と剣、そして機械化したザンクの体との交錯により、けたたましい金属音と、白い世界に、まるでスパークが迸るかのようになり、幾重にも火花が散る。

それでも構わず、アカメは刀を振り続ける。

「無駄なことをいつまで続けるつもりだ？」

依然として生身の頭部のみを護り続けるザンク。

相手を嘲笑うように、バカにした声色でアカメに問いかける。

アカメは鋭い目付きで睨み付け、

「無駄じゃない。こうなるからね」

下から上にアカメが切り上げる。

村雨が天を指すと同時に、機械化した腕が宙を舞う。

オイルであろうか、切断部から漏れた液体が、白い雪を汚す。

「な、何故俺の腕が」

全く理解不能だといった感じで、驚愕の表情を浮かべ体勢が崩れる。

「簡単なこと。機械化して痛みが無くなっているから、攻撃を受けても気にしないし、同じ所に集中して斬撃を加えられても気づかなかつた。そしてそれによって、脆くなっていることにも」

返す刃で、刀を返し、斜めに振り下ろした。

体勢が崩れたザンクは防ぐことも、避けることも叶わない。

さらに無事であった片方の腕が地に落ちた。

「ちっー！」

両腕を失い、攻撃の方法を無くしたザンクは、バックステップを踏み、後方に下がるが、足を雪に取られたことから間合いを取りきれない。アカメは追撃の手を緩めず、再び容易に間合いを詰め、村雨を横風ぎに振るう。生身の顔面に一太刀入るかと思われた瞬間だった。

「なんで!?!クロメ!!」

村雨がザンクの僅か数センチ出前で止まり、アカメの表情に影が射

す。

ザンクの頬には冷や汗が伝うが、それ以上に愉悦を帯びた笑みが浮かぶ。

「どうだへスペクテッドの力幻視だ。見るものの一番大事な相手が見える催眠能力で、どんな手練れでも最愛——」

止まっていた村雨が、再び横一閃に軌道を示し、饒舌に話すザンクを切り裂いた。

アカメの先ほど表れていた影は消え、表情は平静時のものに戻っていた。ただ、なにかやりきれない思いは、表情の深層に込められているが。

「なぜ幻視が…!?!」

「最愛の妹だからこそ救済（殺）してあげたい」

ザンクはアカメの真意が分からぬままに、言葉を残すことなく、傷口から呪毒が周り、生き絶えた。

アカメが村雨を振るうと、水が舞うように、刀身についていたオイルやら血液が綺麗に落とされ、白い雪の上に、鮮やかなグラデーションを描いた。

アカメはザンクの額に残る帝具スペクテッドを回収する。そんな中、アカメは勝利の余韻に浸ることもなく、また護衛の任を果たした安堵もなく、表情には笑顔はなかった。

帝具を回収した後は、ザンクの死体を一瞥することもなく、踵を返し、ラバツクと合流するために、戻っていった。

アカメとザンクの戦いを一望できる、小高い丘で、白衣を着、バツチリメイクが施された男が、腕組みをして、全ての戦いを見ていた。「あらあら負けちゃったわね。中々素材は良かったのにもつたいないわ。まあ代わりはいくらでもあるけれどね」

誰もいない所であるのに、手を広げ、大袈裟にポーズを取る。まさにスタイリッシュに。

再び落ち着きを取り返すと、

「あの帝具村雨の特性に負けちゃったみたいね。次回の課題にしま

しよう」

今度は、何の感慨も無さそうに、頬に手を添え、ポツリと溢すと、白衣を翻し、クネクネと腰を揺らしながら、男？は去っていった。

第26話

タツミは体勢を低くし、右手で剣を逆手に持ち、強い踏み込みから、最高速でダイダラに向かつて走り出した。

相手のダイダラは、重量級の武器ベルヴァークを扱う為、このス皮ードで斬り込めば、避けることは出来ない。タツミは踏んでいた。しかし、ダイダラは少しも怯むことなく、余裕の笑みを浮かべている。

「地獄を巡らせてやるぜ!!」

後一步でタツミの剣の間合いに入るといふ所だった。

それまで微動だにできなかったダイダラが、ゆったりとベルヴァークを担いだ。

「その威勢のよさ。すっげえぶっ壊しがいがある!!」

叩きつけられるような気当たり。

一般人であれば、それだけで、気を失う程のものだ。

即座に、タツミは本能的に危険を感じとる。

このまま進むと斬られる。

タツミは瞬時に床に手をつけ、急停止する。

刹那、タツミの前髪を掠り、ベルヴァークがもし急停止していなければ、タツミが踏み込んでいただろう場に、深々と突き刺さっていた。吹き荒れる爆風のような衝撃波でタツミの小柄な体は吹き飛び、元の位置に戻される。

「音で弱った体でよく避けたじゃねえか」

自分の攻撃を避けられたというのに、不快感を表すどころか、寧ろ嬉しそうに、笑みを浮かべる。

「そりゃどうも」

平然と言つてのけるタツミだが、頭の中は混乱状態だ。今のたった一瞬の攻防で、相手の強さを思い知らされた。

今まで戦った相手を遥かに越えた力を有していると。

タツミが仕掛けるか、はたまた仕掛けないか、ダイダラの様子を伺いながら、間合いを取る。

何も展開が動くこともなく、刻一刻と時間が過ぎていく。

タツミの頬を大粒の汗が伝い、顎から床に落ちる。体感としては、その緊張感から、一瞬一瞬がかなりの長さを感じられるが、実際は然程時間は経ってはいない。

全く動く素振りのないタツミに対し、焦れたのはダイダラであった。

「来ないならこっちから行くぞー！」

ダイダラはベルヴァークを掲げ、左右に分かれる柄を両手で掴み、左右に引っ張る。

すると、1つのベルヴァークが二挺に分かたれた。

一挺の両刃の斧が、二挺の片刃の斧になったのだ。

(マジかよ、一挺でもかなりの速度の振りだったのに、二挺になったことで、さらに速度アップかよ)

タツミの緊張感が増した直後、ダイダラは大きく右手を振り上げ、一挺のベルヴァークを投擲した。

空気を切り裂きながら、轟音を轟かせ、タツミに襲いかかるベルヴァーク。

「おっとー！」

必死に体を反らす。

顔の前を通貨するベルヴァークが巻き起こす風がタツミを打つ。

「ただだぜ」

ニヤリと笑うダイダラに、嫌な感じを受け、振り返ると、半円軌道を描き、再びベルヴァークが迫っていた。

「くっ！」

持ち前の反射神経で屈んでベルヴァークをかわすが、僅かに対処が遅れ、かすった。しかし、ベルヴァーク自体の攻撃力の高さから、深い傷が。

「無駄だぜ。投擲されたベルヴァークは飛び交っている間は捕捉した相手を追尾するからな」

ダイダラの言う通り、ベルヴァークは何度となく、タツミを襲う。腰を捻りかわし、後方へ飛んでいく様を見た直後タツミは一考し

て、ダイダラに向けて走り出した。

自分に向けて追いつがるならば、相手の目の前で、かわし、相手にぶつければいい。

追尾型の攻撃攻略の常套手段である。

しかし、タツミは二つのことを失念していた。

1つ、飛び交うベルヴァークには柄があり、自分にぶつかる前に止めることが出来ること。

2つ、ベルヴァークは今追尾しているものだけではないということ
を…

タツミは気づいていないが、2つ目が大きく起因し、ダイダラは嬉しきで、おぞましい笑みを浮かべ、溢した。

「経験値いらっしやい」

気づいた時には遅かった。

獲物を補食する肉食獣の眼差し。

絶対的な強者である熊が、川を泳ぐ鮭を豪腕の一振りですまめるように、ダイダラは徐にベルヴァークのもう一挺を振り上げ——振り下ろした。

タツミは、後方に大きく吹き飛んだ。

「バカかてめえはああ！」

ベルヴァークによってではなく、突如現れたブラートの鉄拳によって。

「相手は手慣れたようすで待ち構えていただろうが！どう見ても必勝体勢！そこに突っ込んでいってどうする!!」

「あ、兄貴…」

垂れる鼻血を押さえながら、タツミが顔をあげると、頼りになる兄貴、ブラートが陽光に照らされ、まるで後光が射すようにそこに立っていた。

「なに呆けているんだタツミ」

今まで保っていた極度の緊張感は、ブラートが現れた安心感で、切れていた。

それだけ、タツミはブラートを信用し、その強さを身をもって知っ

ていたのだ。

「てめえ、やけに元気だな…スクリームは効いてねえのか」

スクリームの音色によってタツミはふらついてはいたが、ブラートにはその様が全く見えないので、ダイダラは違和感を覚える。

何度となく音色を聞くと、耐性ができ効果は薄くなるが、ブラートは初めて聞いたはずであるはずだと。

ブラートは小さい笑みを浮かべる

「そういう演奏だったのか、なら効かないはずだぜ」

ブラートの纏う雰囲気が一変する。

辺り一帯がブラートの支配領域と化していく。

「俺の体に流れる熱い血はよ……他人に鎮められるモンじゃねえんだよ!!」

目視できる程のオーラがブラートを中心に吹き荒れる。

気圧されたダイダラだが、スクリームの音色に対抗したカラクリがわかったのか、フンと鼻を鳴らしてブラートに話しかける。

「自分の体を抉ってまでしてスクリームの洗脳に対抗しやがるとは」

ブラートの右足に血が滲む。

例えブラートであっても、帝具であるスクリームの力に対抗するにはこうするしかなかったのだ。「ナイトレイドのブラートだ。ハンサムって呼んでいいぜ」

「エスデス様の僕、三獣士ダイダラだ」

ダイダラは隙なく、二挺のベルヴァークを構える。

「タツミ、お前は俺の戦いをしっかり目に焼き付けておけ」

ブラートは振り返ることはせず、その大きな背中で語る。

タツミは声を上げることすらできず、ただただ静かに首を縦に振るのだった。

ブラートもそれを察知したのか、床に手を当ててありったけの声で叫ぶ。

「インクルシオオオオ!!」

ブラートの背後に鎧が現れ、ブラートの体が包まれる。穢れのない白一色の鎧。

タツミの目にはそれが眩しく見えたであろう。

ブラートが鎧を纏うと同時に、

「経験値がたっぷりもらえそうだぜえええ!!」興奮しきったダイダラ。ただダイダラ一人ではない。どこから現れたか、リヴァとニヤウも警戒していたからか、即座に現れ三方向から襲いかかる。

ダイダラ以外に仲間がいたことに気づいていなかったタツミが叫ぶ。

「兄——」

瞬間、ブラートが消える。

直後ニヤウの腹部にラリアットがもろに入り、吹き飛び積み荷に突っ込み、ニヤウに打撃が入ったと思われた時には、リヴァの背に強烈な蹴りがめり込み、壁に叩きつけられる。

二人が吹き飛び、轟音を奏でると同時に、ダイダラが真つ二つに分かたれた。

「——貴」

タツミが兄貴と言い終わると同時に戦闘は決していた。

「タツミ…見ていたか？これが前に言った周囲に気を配るってやつだぜ」

ダイダラだけでなく、気配を消したまま突如現れたりヴァとニヤウにも対応し一瞬で終わらせた。ブラートの強さが示された戦いである。

戦場に立つのはインクルシオを纏ったブラートだけであった。

インクルシオとは凶暴な危険種を素材として造られた鎧の帝具。呼び出すと鉄壁の鎧が自動的に飛んでくる。纏った者の能力を増幅させる。

突出した力を持つブラートが纏うことで、計り知れない力を持つ戦士が生まれのである。

第27話

暖かい筈なのに、体の芯から寒く感じられる程の禍々しい殺意、抜き身の刃を首筋に押し付けられるような威圧感。

それが甘味処へ甘えん坊から溢れている。

(幸先よく見つけることはできたが、まさかこんな所で見つけるとはな…)

主水が市中の巡回中に探していた、帝都一の危険人物エスデスが、いつものドSの性格からは考えられない甘味処に座っていたのだ。

一般人が見ると、綺麗で、氷のような透き通る美しさを持った女性。しかし、見るものが見れば、彼女は、鬼にも悪魔にも、死神にさえ見えてくる。それほど底知れぬ恐ろしさを秘めている。

(あからさまに誘ってやがるな。わざと隙を作り、レオーネを釣るために。にしてもスゲエ殺気だ。本人はあれでも抑えているんだろうが)

主水は辺りの気配を辿る。必ず近くにいるはずだと。そして見つけた。

(これでレオーネもやつの危険性が分かったんじゃねえか)

エスデスの死角の建物の屋根に隠れ、様子を見ているレオーネに視線を向ける。

以前の作戦会議の際レオーネから危うい感じがしたため、気になってレオーネが偵察に来るだろうエスデスを探していたのだ。

無茶をさせないために。

しばらく経つと、獣化したレオーネが大粒の汗を流し、青ざめた表情で退散したので、主水も安堵し気を抜いた。

しかし、それが災いした。

「おい、そこにいるんだろ中村。出てきて一緒に菓子でも食わんか」
にこやかな笑顔を浮かべエスデスは主水に声をかけてきた。

(気づかれたか。まあいい、ナイトレイドとバレてるわけでもねえ。それに下手に逃げるとそれこそ疑われる)

「ご馳走になります」

主水は意を決して、そして偶然を装い、エスデスの誘いに乗った。

主水とエスデスのもとに、目に金貨の跡をつけた店主が、ソフトクリームを二つと、二つの茶を持ってきた。

既に冷えきっている体をさらに冷たく冷やすソフトクリーム。しかし、甘党の主水を満足させるだけの美味しさはあった。

「美味しいですな」

「ああ、ここが旨いと聞いてここに来たんだ」

和やかに会話は続いていた。素振りは見せないが、警戒心はなくさずに。しかし、直後雰囲気ガラリと変わる。

「中村には感謝している。私の部下を捕らえるだけで殺さずにおいてくれたのだからな。お前の力ならあの三人を殺すなど雑作もないことだろうからな」

顔にはうつつすらと笑みを浮かべてはいるが、目は決して笑わず、主水の答えを待っている。

主水は気にすることもなく、平静を保ち答える。

「私は人殺しはしませんから」

3人を雑作もなく殺せるということに対し、否定はしない。

そして、主水は偽りのない真実を話す。表の仕事では殺しはしない。仕事人としてのきょう持である。

「そうか…」

雰囲気と表情が再び和やかなものに変わる。

「旨いな。この菓子任務が終わったら三獣士にも食わせてやるかな」
(ブライトとの差しでの鰻屋は勘弁して欲しいが、ここなら皆で食いに来てもいいな)

奇遇にも同じ考えを二人は持っていた。

再びまつたりとした和やかな雰囲気が流れる。警戒心も幾分か薄れ。

主水が茶を啜っていると、

「ところで中村」

「なんでしよう」

主水は雰囲気通り、何気なく聞く。

「拷問させてくれないか」

「!!」

和やかな雰囲気にとぐわなない『拷問』という言葉に、主水は啜っていた茶を吹き出した。

「流れがまったく読めないんですが」

主水が問うと、エスデスはうつとりと恍惚の表情で

「お前の哀愁漂う背中を見ていると私の心が疼いてしようがないんだ。頼む」

ととんでもない頼みをしてきたのだ。

(勘弁してくれ…)

主水は深いため息を吐き、その後時間をかけてエスデスを説得したのだった。

◆◆◆

同じ空の下、竜船の甲板上で、三人を瞬殺したブライトにタツミが興奮しきった様子で称賛していた。

「すつげえよ兄貴。あの三人を一瞬で倒すなんて!」

タツミの称賛を満更でもない様子でブライトは受けている。

「まあな。軍でも100人斬りのブライトと呼ばれたぐらいだからな」

「実際斬ったのは128人だがな。あの時は、特殊作業員を相手に、大活躍だった」

突如甲板に響く重低音の効いた声。

二人が振り返ると、何もなかったかのように颯爽と歩いてくる人影が。

日に照らされ見えた顔は、ブライトに蹴りを入れられ吹き飛んだりヴァアである。

「その帝具に、その強さ、やはりブライトだったか…」

感慨深げに呟くりヴァア。

タツミはまだ息があることに驚いていた。

しかし、それ以上にブライトは困惑し、当惑していた。

先ほど蹴りをいれたのは自然と敵に対して体が反応したため、顔まで把握はしていなかった。

今になって把握した顔がブラートにとって馴染み深いものであったのだ。

「リヴァ將軍…」

ブラートの無意識の呟きに、タツミの顔にも驚きが広がる。

以前ブラートに話してもらった話で、自分の尊敬する將軍の話をしてもらったことがあった。

その將軍の名前がリヴァであったからだ。

「今では將軍ではなく、エスデス様の僕だがな」

リヴァの顔には、將軍時代よりも今のほうが誇りに思っているという様子が伺えた。

ブラートは一旦視線を床に反らした。

タツミには表情こそインクルシオを着ているため伺えないが、悲痛な思いを抱いているのだろうと、切に思われた。

ブラートは視線を戻すと

「味方なら再会を祝して酒を酌み交わしただろうが…」

槍を構え

「敵として現れたなら…斬るのみ!!任務は完遂する!!」

臨戦態勢に入った。

対するリヴァも、白い手袋をスルリと外し、帝具ブラックマリンを解放した。

リヴァの周辺に用意周到に準備されていた樽から水が吹き上がる。

「エスデス様は、無から氷を作り出すが、私は水がないと無力だね。しかし、この場ならば私が有利だ!水塊弾!!」

四方から襲い掛かる水の槍。

だがブラートは全てを見事な槍さばきで粉碎していく。

それを尻目に、目を覚ましたニヤウがリヴァを援護するべく、帝具スクリームを手に取り、口につける。

ニヤウは川という無限の水が存在する場なら、リヴァは勝てるどころではないが、先ほどの圧倒的な力を見せられた以上、念には念を入

れて、援護が必要と判断し、必ずブラートにも効果がある、スクリームの音色を奏でようとしたのだ。

「させるか!!」

ニヤウの頭上から、タツミが肉薄していた。

「俺だっていつまでも兄貴の足手まといではいられないからな」

タツミの剣とニヤウのスクリームが交錯する。

タツミは一振りに体重と重力による勢いを乗せていたため、ニヤウは押し負け、吹き飛ぶが、スクリームを床に突き立て、勢いを殺す。

「ゴイツ…邪魔だ!」

ニヤウは苦虫を噛み潰したような表情で、床を蹴る。

まずタツミを排除することに決め、スクリームで打撃戦を挑む。

スピードに特化したタツミには、音色を奏でる暇はないと判断したためだ。

スピード対スピード、タツミとニヤウは甲板上を駆け巡りながら、熾烈な攻防を繰り広げる。

ニヤウが即座に無数の打撃を繰り出し、タツミは見事に裁くが、それは目眩まし、体勢を低くし、後ろに回り込んだニヤウから、小柄な体格にみあわない強力な蹴りが、タツミの背中にヒットする。

タツミは地面に倒れるすんでの所で、腕を突き、側転し、体勢を立て直し、踏み込む。

(めちやくちや速いが、アカメほどじゃねえ)

普段から稽古をつけてくれている、アカメの速さを思い出す。

そして、反転して攻勢に入る。

リヴァとブラートの戦闘の場は移っていた。

リヴァは川の水から生成された大蛇の上に、ブラートはそれに対するために、船の側面に来ていた。

「水圧で潰れるがいいブラート! 深淵の蛇!!」

巨大な蛇がブラートに襲い掛かる。

しかし、ブラートは避ける素振りも見せず、飛び上がり様に、槍で切り上げる。

蛇が真つ二つに両断しながら、ブラートがリヴァに迫る。

しかし、リヴァにはそれも予想の範疇であつた。ブライトならそれぐらいするだろうと。

「宙に浮いた状態でどう対処する？濁流槍!!」

水塊弾を強力にした、柱のような、水の槍が無数にブライトを襲う。ブライトは腕を交錯し、耐えしのぐ。

「水をかけられたぐらいじゃ俺の情熱は消えねえ!!」

全ての攻撃を耐えきつたブライトが看板に着地すると、何体もの水竜を従えたリヴァが。

「お前がこれぐらいでやられないことぐらい分かつていた」

リヴァの脳裏には、昔共にブライトと戦場を歩んできた想い出が、鮮明に浮かんでいた。

あの強さが。その経験から、これぐらいではブライトは倒せないと理解していたのだ。

リヴァはうっすらと笑みを浮かべ、勢いよく腕をつきだした。

「私の最大最強の奥義を味わうがいい！水龍天征!!」

四方八方から水龍が襲い掛かる。まるでヤマタノオロチのように。逃げ道がなかったブライトは、水龍に飲み込まれた。

「ハアハア……やったか……」

不意に溢れた一言。

いや願望だったのかもしれない。

しかし、

「そういう台詞を吐いた時にはな、たいてい殺つてねえんだよ!」

水の渦が弾けとび、槍を構えた鬼の形相のブライトがリヴァの眼前に迫っていた。

「耐え抜いたのか!」

奥義を使用したため、リヴァは動くことができない。

観念した表情で突っ込んでくるブライトを迎え入れようとした、その刹那。

ブライトの側面から、先ほどのまでタツミと戦闘を繰り広げていたニヤウが迫っていた。

「チツ」

ブラートは舌打ちをすると、槍でニヤウを振り払った。

「あはははは……残念だったね……リヴァを倒すチャンスだったのに……」

尻餅を着きながらしてやったりといった表情を浮かべるニヤウ。

「兄貴すまない。足止めすらできなかつた……」

対したタツミはボロボロになりながら、悔しさに、そして自分の不甲斐なさに、顔を歪めて、ブラートに謝罪した。

「気にすんなタツミ。帝具無しで生き残っているだけでも、上等だ」

ブラートはすでにインクルシオが解除された、生身の姿でタツミの前に立っていた。

インクルシオを着けていた筈なのに、体は至るところが傷つきボロボロの状態であった。

第28話

朝から快晴と言えるほど晴れ渡っていた空が、増えてきた雲により鉛色に濁った空になっていた。

それは、ナイトレイドの二人と三獣士との混沌の戦いを示しているかのようなのである。

既にブラートはインクルシオを解除しなくてはならないほどの怪我をしていたが、リヴァとニャウはそれ以上の怪我を負っていた。

しかし、

「一定以上のダメージで解除されるようだな。もう勝負は見えたぞ」

リヴァはまるで自分はまだまだ戦えるといった口振りである。

しかしその場に居るもの、仲間のニャウさえもリヴァが限界に達しているのには気付いていた。

「強がるなよ。耳から血が垂れているぜ」

ブラートは僅かに微笑みながら指摘する。

「奥義までだしたんだ。体はポロボロで帝具を使うことすらできねえんじゃねえか？」

「バレては仕方ない。交渉を有利に進めたかったんだが」

リヴァもブラート同様僅かに微笑んだ。

リヴァは柔和な表情でブラートに手を差し出した。

「ブラートよ戻ってくる気はないか。私とエスデス様の元に」

その表情は敵に向けたものではなく、以前の仲間の時に見せていた表情であった。

ブラートの動きが止まる。

タツミはブラートを信じてはいるが、漠然とした不安感に襲われる。

タツミとリヴァではブラートと過ごした時間、乗り越えてきた場数が違う。もしかしたら昔のことが蘇り…と、その事から不安が拭えなかったのだ。

しかし、ブラートはそんなタツミの心配を他所に、

「この国に支える気はもう一切ねえよ」

リヴァアの誘いを一刀両断した。

しかし、リヴァアは諦めきれない。

「国に使えるとは言っていない。現に私も国に使っている気など更々ない。エスデス様に支ええると考える。私はエスデス様に救われたのだ」

リヴァアは遠くを見つめ、何かを邂逅するように話始める。

「あの日、投獄され全てに嫌気がさし、自暴自棄になっていた私に、エスデス様が手を差し伸べてくれたのだ。まるで地獄に現れた女神のように。全ての憂いを払いのけてくれ、私を求めてくれたのだ」

エスデスとの出会いを語るリヴァアは、どこか陶醉したかのように話す。

リヴァアにとつての人生の分岐点。

「さあ来るのだブラートよ。エスデス様の元に居れば、私達を強いたげてきた官僚たちですら媚を売るほどの力を得られるぞ」

「断る」

ブラートは一言で拒絶した。呆然としたリヴァアに対して続ける。

「官僚たちに絶望したあんたには今の立ち位置は心地いいかもしれないねえ……」

フツと息をつくくと、徐に櫛を出し、水で乱れた髪を整え始める。

「だがな、俺は民の味方のつもりだ。大臣と組しているエスデスの元じゃソイツが気取れなくなるからな」

トレードマークのリーゼントを作りあげると、髪と共にナイトレイドのブラートに戻っていた。

「殺し屋がはく台詞ではないな……交渉決裂か……」

雰囲気はピリピリとした緊迫したものに変わる。

お互いに剣を構える。二人とも帝具を使う余裕などないからだ。

そんな中、リヴァアは懐から薬物入りの注射器を取りだし、腕に射し、薬を注入した。

直後服の中でも分かるほど筋肉が膨れあがる。

「お前が相手だから悪いがドーピングさせて貰うぞ」

リヴァアは注射器を投げ棄てるとブラートに向かい走り出した。

呼応するかのようにブラートも走り出す。

龍船の甲板の中心で剣を交える二人。剣が交わる度に辺りを火花が舞い、衝撃波が吹き荒れる。

怪我をしているとは到底思われぬ、熾烈な戦いが繰り広げられる。

何十合と剣を交え、拮抗していた戦いだが次第に、ブラートが押し始める。

焦りと苦悶の色がリヴァアに浮かぶ。

リヴァアの焦りが、剣の振りを大きくする。それと同時に僅かな隙が生まれる。

ブラートがそのようなチャンスを見逃すはずがない。

「終わりだ！」

「がはっっ!!」

ブラートの剣がリヴァアを一閃する。

血液が舞い、リヴァアの体が傾く。

(エスデス様のために……せめて相談ちに)

「奥の手血刀殺!!」

リヴァアの体から赤き血の刃が幾重にもブラートに飛ぶ。

(やはり何か隠してやがったか！)

気づき直ぐに剣で叩き落とそうとするが、遅かった。

捌ききれない刃がブラートを貫いた。

見届けたリヴァアも

「命を振り絞った攻撃を……対処するとは……見事」

崩れ落ちながら素直に称賛する。しかしそれだけではなかった。

リヴァアは口元を緩め絶望的な言葉を吐いた。

「しかし……地獄への旅路には……同行してもらおうぞブラート!!」

直後ブラートは大量に吐血した。

タツミは真っ青になり走りよる。

「先ほどの注射はドーピングだけでなく猛毒でもある。その猛毒の刃を受けたお前は……」

いい終える前にリヴァアは息絶えた。

「兄貴早く手当てを」

「タツミ…お前の戦いはまだ…終わってねえぞ…」

揺れる指先でブラートが示した先には、奥の手鬼人招来を奏でるニヤウの姿が。

少女にすら見紛うほどの華奢な体をしたニヤウの体躯が膨れ上がる。

服は破れ、身長も横幅も2〜3倍に膨れ上がる。体格だけでない。威圧感も桁違いに上がっている。

「久しぶりだよこの姿は」

(マジかよ。さっきの小柄な時にも押し負けたのに)

体が震え、自然と足が後退りしていた。

頭の中ではブラート、そして自分のために戦わないといけないと分かっている。

しかし、苛烈な状況がそれを許してくれない。

「タツミ…」

凍り付いた体を優しく溶かしてくれる優しい声。

「あ、兄貴…」

「お前にインクルシオの鍵を託す」

ブラートは、震える手で、剣の形をしているインクルシオの鍵を、タツミに渡そうとする。

しかし、タツミは、

「お、俺が、兄貴の帝具を!!」

と予想だにしないブラートの言葉に、困惑し、鍵を受けとることすらできない。

俺が兄貴の帝具に耐えられるのかという不安と、なぜ今になってそんなことを?という疑問が頭の中で渦が巻く。

「止めたほうがいいよ。インクルシオの負担は大きすぎるみたいだから、着けた瞬間即死するよ」

ニヤウが、タツミの困惑に追い討ちをかけるようにニヤニヤしてタツミを揺さぶる。

「お、俺は…どうすれば…」

「うだうだしてんじやねえ!!」

タツミを鼓舞するかのようにブラートの鉄拳が飛ぶ。

「あ、兄貴」

「自分を信じなくてどうする。お前の素養、今までの経験値、インクルシオをつけるのに十分だ。帝具の相性も、お前がインクルシオを初めて見た時の反応からしても大丈夫だ。お前ならやれる自信を持って！」
兄貴としての優しい笑顔。猛毒で立つこともままならず、苦しいはずなのに。

「尊敬する兄貴にそこまで言われて、やらない訳にはいかないぜ」

ブラートからインクルシオの鍵を受けとる。

視線が交わり、タツミは黙って頷く。

鍵となる剣を水平に構える。

「インクルシオオオオ!!」

タツミの叫び声と共にタツミの体に合わせてインクルシオが装着される。

インクルシオはタツミの思いに反応し進化したのだ。

「やはりな、タツミお前はすげえよ。いずれ俺を確実に超えるな。草場の影で見守ってるぜ」

暗くなっていく、ブラートの視界の中で、インクルシオを纏ったタツミは、一撃でニヤウを葬った。

ポツリポツリと雨が降り始めた中で、冷たくなっていくブラートの亡骸を抱き締めて、タツミは声にならない声を上げて、涙を流した。

尊敬するブラートに最後まで迷惑をかけてしまったこと、そしてもうブラートと接することが出来なくなってしまったこと。とてつもない喪失感と絶望感が胸を占めていた。

◆◆◆◆◆

降りしきる雨の中、集められたナイトレイドのメンバーの前で、組み上げられた祭壇が燃え上がる。

闇を照らす炎によって照らされたメンバーは皆俯き、涙を流すもの、拳を握り締めるもの、歯を食いしばるもの、反応は違うが、一様に悲しみに胸が支配されていた。

冷たい雨が皆を濡らす。

辺りに響くのは、雨が地面を打つ音と、ブラートの亡骸を燃やす炎の音。

誰も祭壇が燃え尽きてもその場から動けなかった。

「俺が、俺がなんとかしなくちゃならなかったんだ」

タツミが地面に倒れ込むように殴り付ける。

「俺が！俺が！俺が！」

「いい加減にしねえか!!」

主水の怒号が響く。

「この稼業はいつ誰が死んでもおかしくねえ稼業なんだよ。お前も覚悟はできていたんだろ！」

「……………うう……」

タツミの嗚咽が響く。

「乗り越えるしかねえんだよ。この稼業に一步でも足を踏み入れた俺たちはな」

主水は自分でも言ったことを噛み締めていた。

それ以降、誰も言葉を発することなく雨に濡れ佇むだけだった。

第29話

主水がブラートの内々での密葬を終え、ナイトレイドのアジトから帝都に帰りついたのは早朝のことだった。

未だにシトシトと静かに降り続ける雨は、ナイトレイドの仲間たちの心うちを表すかのようであった。

何度も仲間の死を体験してきた主水でさえも、今回は大きな衝撃を受けていた。

今までも、この稼業ならばいつ誰が死んでもおかしくないという過酷なものながら、頭の片隅で死ぬことはないのでは、と考えていた、念仏の鉄や、鍛冶屋の政が殉職した時と、同じくらいの衝撃を受けていた。

まさか、ナイトレイド1のブラートが！と仕事人の因果を感じる。(タツミにあれだけの啖呵をきっておいて、俺がうじうじしていたらしめしがつかねえな)

精神的疲労はピークに達し、睡眠も一切とつてはいなかったが、今日は、昇進して初めての顔合わせなので、気合いを入れて行くことにした。

頬を叩き、扉を開け、番傘をさした時だった。

「中村さんおはようございます」

「…タカナ様!!なぜここに?」

家を出てすぐの所に傘をさしたタカナが立っていて、笑顔で挨拶をしてきた。

家を教えたこともないのに何故?という疑問が浮かぶ。

すると、主水の考えを読みとったかのように、うつすらとタカナは微笑むと

「多くの警備隊員の宿舎がここら辺にありますからね」

と答えるタカナ。

江戸で同心が八丁堀に住むように、この帝都でも警備隊員の住む場所はだいたい決まっていた。

主水は惰性に勧められた所に居を構えていたので、そこまでのこと

は知らなかったのである。

「そうであっても私は同僚とこの辺であったことはないんですが…」
主水の疑問にタカナはヤレヤレといった感じで深くため息をついた。

「朝合わないのは中村さんが遅刻ギリギリだからですよ。皆さんは真面目に朝早く出仕しますからね。夜は夜で遊んでいるのではないのですか」

「いやはや…」

やぶ蛇だったなと苦笑いを浮かべるしかない主水であった。

「タカナ様は何故ここに？」

主水は話を変えるべく、疑問を呈す。

何故朝っぱらからここに？という疑問。

「今日は中村さんの晴れの舞台ですからね。上司として見送りをしたかったんですよ」

いつもの嫌みったらしい笑顔ではなく、澄んだ晴れやかな笑顔を浮かべるタカナ。

主水もつられて笑顔になる。ちよつとした心遣いが、この世界で築いた絆を感じさせたのだ。

「ありがとうございます。タカナ様」

「いえいえ構いませんよ。少し疲れているようですが、これなら大丈夫そうですね」

タカナは主水の肩をポンつと叩くと過ぎ去り様に、

「エスデスにはくれぐれも気をつけてくださいね」

と真剣な声色で呟くと、振り返ることなく傘をクルクルと回し、去っていった。ハツとして主水は振り返るが、タカナの姿は既に小さくなっていった。

(タカナ様あなたはいったい……)

主水は去っていく小さなタカナの背中に問いかけるのだった。



大理石の廊下には、満遍なく高級な赤絨毯が敷かれ、匠の技が垣間見える、細かな細工や彫り物が施された壁面、光源となるランプはど

れも高価で年代物なのか、古いながらもしつかりとした作りをしている。

有り余る金を使い作られた贅を尽くされた宮殿内を、主水はキヨロキヨロと挙動不審に歩いていた。

(どうなってるんだここは？だだっ広くて今いる所すらわかりやしねえ)

完全に迷っていた。まるで田舎者が都会で迷ったように。

江戸にも宮殿並みに巨大な江戸城もあったが、主水は登城をしたことはなかったもので、ここまで巨大な建物に足を踏み入れたのは、これが初めてだった。

(聞こうにも人一人いやしねえ)

宮殿に着くまではよかつたしかし、着いてからが問題だった。

宮殿内の地図すらなく、集まる場所だけが明示された召集令状。

主水は途方にくれていた。

(セリユーと一緒に来りゃあよかつたな)

父娘？相棒？とも言えるセリユーを思い出す主水であった。

そんな時だった。

「あの、どうかしましたか？」

声が聞こえた方に振り向くと、そこには誠実そうな青年が。

年の頃は20才ほど、精悍な顔つきをしているが、服装は、宮仕えするような服装ではなく、軍服のようなラフな服装なので、官僚などではないことは一目で分かる。

一際目についたのは、魚の頭や、尾や蛸足が飛び出た大きな包みを抱えていることぐらいか。

「あまりに広くて迷ってしまっ

ハハハハと頭を掻きながら苦笑いを浮かべる主水。

「そうですね。俺も今日初めてここに来たので同じようなものですよ」

(こりやあダメかもな) 落胆の面持ちで青年を見ていると、

「どこに行くんですか？」

気さくに話しかけてくる青年。明るく人当たりの良い青年だ。ど

こかタツミに似ているなと思う主水。

「特別警察会議室だったかな」

再度懐から取り出した召集令状を開き、見直し答える。
青年の表情がパツと明るくなる。

「お、俺も特別警察会議室に呼ばれているんです!!」

興奮ぎみに途端にハイテンションになる青年。

主水同様初めての場所で緊張していたのだろう。

青年が見せてくれた文書も主水の物と同様のものであった。

「つてことは新しい同僚になるのか。私は中村主水と言います」

「俺はウェイブって言います。よろしくお願いします」

一人より二人、困っていた同じ境遇の者同士が出会い、二人は安堵した。

目的地は同じということで、二人は雑談を交わしながら特別警察会議室を探し、宮殿内を歩き出した。

「ウェイブ大したもんだな。お前にしたがってついていたらすんなりついたらぜ」

ほんの僅かな時間であったが、主水とウェイブは打ち解け、主水はタメ口で話すまでになっていた。

ウェイブは主水が年配ということ、まだ丁寧語を交えてはいるが。

主水は『特別警察会議室』と書かれたプレートを見て感動している。

「そんなことないですよ。じゃあ開けますね」

ウェイブは主水に褒められたことに、照れながら、扉を開いた。

「帝国海軍から来まし——」

固まるウェイブ。

「失礼しました」

即座に扉を閉めた。青い顔をして。

「どうしたんだ？」

「な、中に拷問官？みたいな不審者が」

「んなことないだろ」

ウェイブは嘘をつくタイプではないのは分かっているが、到底信じられないウェイブの言葉に、見間違えだろと思いつながら主水は扉を開いた。

「帝都警備隊から来まし——」

主水も動きが止まる。

室内にはポツンと一人の男が。

ただ様相がおかしい。

ガツシリとした体格で、上半身裸でマスクを着け、縮こまって座っている、まさに異様な風体。

「間違えました」

デジャビユか、主水も即座に扉を閉めた。

「すまねえウェイブ。お前の言っていることは正しかった…」

「分かってもらえれば俺は構わないですよ…」

二人揃って部屋の前のプレートを見返すが、何度見返しても『特別警察会議室』と書いてある。

「同僚…なんですかね…」

「たぶん…そうだろうな…」

二人は深いため息をついた後、意を決して主水は扉を開き、「失礼します」と入室し、ウェイブも主水に続いて挨拶し入室した。

そそくさと入室した主水とウェイブは男から少し離れた席に腰をおろした。

それから室内は異様な静けさが支配していた。

じつとこちらを熱のこもった瞳で凝視するマスクの男。

主水もウェイブも心が折れかかっていた。

警備隊はまともな所だったんだな。

今になって気づいたことだった。

客観的に見ると、僅かな時間だが、主水とウェイブにしたら恐ろしく長く感じる時間が過ぎた。

すると、物音一つしない静寂を撃ち破るように、静かに扉が開かれた。

入ってきたのは、年の頃10代で可愛らしい容姿をした少女であつ

た。黒いセーラー服と腰に挿した刀から、どこかアカメを想起させる。

まともな少女のようだと主水とウェイブは胸を撫で下ろす。

しかし、その希望もすぐに崩された。

その少女は椅子に腰を下ろすと、大きな『クロメのお菓子』と書かれた袋を取りだし、お菓子を徐に食べ始めたのだ。

その姿は小動物のようで可愛らしくはある。

ウェイブが初めに動いた。

「よ…よお。君も召集されたんだろ。俺はウェイブって…」

訝しげに見ていた少女は、即座に反応した。

「このお菓子はあげない」

お菓子を抱えて護りに入った。やはり少し？いや大分変わっていった…

ウェイブはあからさまに落胆し、静かに席に戻った。

刹那再び扉が開かれる。先ほどとは打って代わり大きな音をたてて、豪快に。

「帝都警備隊所属セリユー・ユビキタス&コロです」

ビシツと敬礼をした一人と一匹。主水がよくよく知っているセリユーだ。

しかし、続いて異様な人物が。

セリユーとコロが薔薇の花びらを巻き、道を作り、跪き、

「Drスタイリツシュ、準備が整いました」

と声をかけると、

「第一印象に気を遣う…：それこそスタイリツシュな男のタ・シ・ナ・ミ」

白衣を着た30前後のオカマだった。

主水は見慣れてはいるが、ウェイブにはショックが大きかったのか、口を開けて茫然としている。

「あつ主水君。もう来てたんだ」

セリユーが走ってきて主水に飛び付いた。

(まさかセリユーに癒される時が来るとはな…)

セリユーに抱きつかれながら、傍目に見ると、ウェイブがスタイリッシュに目をつけられたのか、

「アナタ中々のイケメンね。アタシが磨いてア・ゲ・ル？」

とウイंकを送られ、ウェイブは真っ青になり、身震いをしていた。

（御愁傷様ウェイブ）

心の中で黙祷をした主水である。

（それにしてもまともなやつがいねえな）

視線を一周させるが、ウェイブとセリユーが霞むほど、キャラが濃い面々が揃っていた。

頭が痛くなる主水であった。

そして、再度開かれる扉。

まともなやつが来るはずないと諦めの境地の主水とウェイブを、いい意味で裏切ってくれる人物が入っていききた。

「どうやら私が最後のようですね」

まるで天使に見紛う程の美青年。年齢は20代前半程か。

屈託のない笑みをたたえている。

「よお…ウェイブだよろしくな」

また騙されるんだろとふて寝していたウェイブであるが。

「ランです。こちらこそよろしくお願いします」

ここに来て初めてまともな挨拶を丁寧に返してくれたことにより、ウェイブの心が見事に撃ち抜かれた。

「主水さん以外でやつとまともな人が来てくれたー！」

ランの手を握りしめて、ウェイブは感謝の涙を流した。

しかし、主水は訝しげにランを見ていた。

悪い感じはしないが、どうも笑顔の裏に何か隠されている気がしたからだ。

（今は様子見か。この組織で貴重なまともな人物にはかわりねえからな）

個性溢れた七人のメンバーが一同に集結した。

第30話

ナイトレイドのアジトでは、ブラートの死に対する悲しみを振り払うべく、鍛練に身を置くタツミとラバック、そしてその鍛練に手を貸すアカメとレオーネとシエーレ、その鍛練を見守るマインが集まっていた。

少しでも強く、ブラートの強さに1日でも早く追い付けるように、見守っていてくれるだろうブラートを安心させられる程の力を得られるようにと、汗を流している。

「皆ここにいたのか」

コートを羽織り、大きな荷物を背負ったナジエンダがそこにいた。その様相からして、どこかへ出掛ける前であるらしい。

「ボスはどこかへ出掛けるんですか？」

シエーレから受け取ったタオルで汗を拭きながら、問うタツミ。

「ああ、お前が回収してくれた帝具を革命軍本部に持って行く所だ」

ナジエンダは荷物が入っているリュックから、軽々と、ベルヴァークをひよいと取り出す。

「あの重いベルヴァークを軽々と!!ボスすげえ!!」

「元、帝国の將軍だからな」

ナジエンダを見て、タツミとラバックがコソコソと話す。

ナジエンダはその様子を見て、自慢気にベルヴァークで一振り、二振りと素振りをし、照れたような笑顔を浮かべている。

ナジエンダでも、人に褒められるのは嬉しいらしい。

「話を戻すが」

ナジエンダは照れ隠しもあるのか、ゴホンと咳払いをし、話を戻す。

「今日私が本部へ行く目的は帝具を届けるのがメインだが、メンバーの補充も兼ねている」

ナジエンダは暗に言わずに済ませているが、誰もが、ブラートを失ったことが起因していると理解していた。

ナイトレイドの中でも屈指の戦鬪力を誇るブラートを失ったのだ、新たなメンバーを補充するのも必然的な流れである。

「まあ、即戦力となると期待は薄いかな」

「…俺が弱かったばかりに……ごめん…」

俯き伏し目がちになりながら、タツミは呟く。

ブラートが死んだことを未だに自分の責任だと、負い目に感じていたためだ。

ナジエンダは煙草を吸うのを止め、目を瞑りながら、慰めるようにタツミに語りかける。

「お前が戦った三獣士は帝国最強の攻撃力を持つエスデスの側近だ。その三獣士を全て撃破した上に帝具まで回収してきた。さらには、船の乗客を救い、三獣士と戦い死ぬことになるはずだった者も救うことになったんだ。お前は誇っていい！よくやっているんだ！」

「…ボス……」

ナジエンダの温かい言葉に、涙を溢すタツミ。

押さえてきたものが、涙として溢れた。

「黙っていようと思ったんだけど、前にブラートが言っていたよ。『タツミは素質がある。俺がこれからも鍛えてやれば、必ず俺を超えるぜ。楽しみだ』って笑いながらな」

レオーネは限りなく広がる、青空を見てそうタツミに話すと、励ますようにポンと肩に手をおいた。

タツミは黙して、俯いた。まま、拳を握り締めた。

雨が降っているように、地面は涙で濡れた。

「自分を誇れ。そして生き残り、ブラートを超える男になってみせろ」
ナジエンダはその言葉を残し、革命軍の本部に向かった。

◆◆◆

主水は変ないや、濃い同僚達に囲まれて、頭を悩ましていた。

「はい、どうぞぞ」

「ああ、すまねえな」

スツと自然に出された茶を、流れのままに受けとる。

(おっ茶柱が……沈んだまま上がってこなくなった……か……)

湯気が立つ緑茶を見て、落ち着いたのちに、主水はハツとした。

この常識はずれな面々の中で誰が、気を効かせ、流麗な動作で自然

に、また受け入れやすく茶を出してくれたのかと。

「!!」

振り返り見た主水は、目を見張った。

一応当たりをつけて、常識人に見える、ウェイブか、ラン辺りを想像していたが、そこに立っていたのは、マスクを被った上半身裸の、あの男だった。

「ゴメンネ。入ってきてくれた時に、黙ったままで。私人見知りで、緊張しちゃって。でもね見てみると、私が一番の年長者みたいだから、直していかないといけないわね。帝具使いの同僚になったんだから、仲良くやっていきましょ。私は、焼却部隊から来たボルスです」

主水と横に座るウェイブに自己紹介をするボルス。

(焼却部隊か……掃除屋みたいなものか)

主水達に仕事人は、仕置きした的をその場に残しておくことが出来ない場合に、秘密裏に片付けてくれる死体処理の専門家、掃除屋を使っていた。そして、焼却という言葉から、その掃除屋が頭に浮かんでいた。

また別の位置からは、探るような視線を、オカマ博士、スタイリッシュがボルスに投げ掛けていた。

(焼却部隊……人も何もかも焼き尽くすというスタイリッシュな部隊……納得のルックスね。好みじゃないけど)

様々な思惑が渦巻く中、何者かが、カツカツと足音をたて、室内に入ってきた。

「ん……マジかよ!!」

主水は絶句した。

入ってきたのは、流れるような青い髪を腰まで伸ばし、白い制服を着て、仮面を被った、不審者だった。

(おいおい、どこからどう見ても、エスデスじゃねえか。あれで誰にもバレていないと思ってるのか!)

主水が困惑していると、

ウェイブがスツと立ち上がり、エスデスに歩みよる。

「もしかして、あんたもここに呼ばれた同僚か」

疑うことなく気さくに話し掛けるウェイブ。

「やめろウェイブ——」

ウェイブを止めるべく、制止しようとする主水だが、時既に遅し。何故か、強烈な蹴りを受け吹っ飛んできたウェイブの巻き添えをくいい、二人して壁にまで吹き飛び、仲良く床に転がった。

「賊には殺し屋もいる。常に警戒は怠るな！」

流れるような体捌き反転すると、ランに蹴りを、幾多も放つが、全てかわしきる。

(いい反応だ)

エスデスが領いていると、背後から迫る影が、

「よくも主水君に」

腕を引き、貯めた力を爆発させ放つ。

螺旋を描きながら放たれる、コークスクリューブロー。

(中々いい攻撃だ)

必要最小限の動きで、エスデスはセリユートの攻撃を避け、コロを虫を払うかのように、振り払う。

セリユートの腕は、勢いそのまま床に突き刺ささり、刺さった腕を中心に、部屋全体に亀裂が走る。

「攻撃力は素晴らしいが、殺気により、かわすのは容易いぞ」

話の隙をつき、刀の鯉口に指をかけ、刀を抜き放ち、一閃するクロメ。

「ふざけられても、こちらは加減出来ない」

割れた仮面のしたには、うつすら笑みを浮かべた、エスデスが。

「それが帝具八房か…流石の斬れ味だな…」

パラパラと崩れ落ちていく、仮面。

「エスデス將軍!!」

現になる素顔に皆驚きが隠せない。

「イテテテ、巻き込んだじゃってすいません。主水さん」

「いや構わねえよ」

(にしても、誰も気付いちやいねえとはな)

主水も腰についた埃りを払いながら立ち上がる。

(同僚だけじゃなく、上司までこれじゃ、先が思いやられるぜ)

これからの苦勞が思いやられて、深いため息を吐く主水であった。

その後、エスデスから七人全員に、黒い背広が支給され、皆それを着用した。

この世界に来て、初めて背広を見た主水が、ボルスとウェイブに手伝ってもらい、背広を着たのは、秘密の話である。

(狭く苦しくて着なれねえな)

揺ったりとした、着物と違い、体にピッタリとフィットする背広に違和感を覚えながらも、宮殿内を颯爽と歩くエスデスや皆に続く主水。

「今から我々は陛下と謁見する。その後にパーティーだ」

「い、いきなり陛下と！」

「初日から随分と飛ばしたスケジュールですね」

陛下との謁見と言う言葉に、たじろぐウェイブとラン。

(陛下ってえのは、將軍か天皇ってところか)

ウェイブとランの驚きを見て、そう考える主水。

陛下という言葉聞いたのも今回が初めてだからである。

「緊張するね主水君」

「そうですね」

(その陛下も今後の的になるかも知れねえから、しっかりと見とかないな)

別の意味で注意深く見ておこうと思った主水である。

「厄介ごとは早く終わらせるに限る」

エスデスはさも当然のことのように話す。

陛下との謁見を厄介ごとと言えるのはエスデスぐらいだろうと、思うメンバー達。

「あのエスデス様。あたしたちのチーム名は決まっているのでしょうか？」

スタイリッシュの問いに、待っていましたと言わんばかりの笑みを浮かべて、エスデスは宣言した。

「我々は独自の機動性を持ち、凶悪な賊の群れを容赦なく狩る組織：

故に、特殊警察イエーガーズだ」
ここに、エスデスを筆頭とした、特殊警察イエーガーズが発足した。

第31話

一面に、きらびやかな装飾が施され、部屋の天井には大きなシャンデリアが吊り下げられ、壇上に国の主たる皇帝が座する椅子が存在する、広い皇帝との謁見の間に通されたイエーガーズの面々。

両側に並ぶのは、国を運営するそうそうたる官僚やら幹部達。横目に主水が見ると、その列席にはチョウリの姿も。

その場のチョウリは以前のような剽軽さではなく、感情を全く感じさせない無表情で並んでいる。

「陛下のお成りです」

女官の声が響くと同時に、その場に存在する全ての人間が深々と、頭を下げた。

「主水君、主水君」

「主水さん」

微かな声で両側、セリユーとウェイブに声を掛けられる。

皇帝が入室するという大事な時に、一体なんだと少し煩わしきを感じながら、頭を上げずに、横目に見ると、何故呼ばれたか理解した。

皆は方膝を立てて、頭を下げている中、主水は日本古来の正座をして、床に三つ指を立て頭を下げていたのだ。

（やっちゃまった！）

今まで江戸で行ってきた作法はこの世では通じない。

今になって思いだし、作法の間違いに気づいた時には遅かった。どうしようかと思案していると、皆の前にいるエスデスから

「礼を失っていないければどんな格好でも構わん」

という声かけがあったため、そのままの格好で頭を下げることになった。

両側に立ち並ぶ官僚の中には顔をしかめる者もいたが、チョウリなどは、愉快そうに、笑みを噛み殺すのであった。

僅かの間の後に、椅子に着座する音が鳴る。

「一同の者面を上げよ」

子供特有の高い音程の声が広間に響く。

一同が揃って頭を上げる。

最初に目に入ってきたのは、皇帝の椅子に座る、まだ年端もいかない、少年と、その傍らに謁見の場に相応しくないとはいくらなんでも常識がないのかと疑問に思う光景が。

(あれが大臣か。しかしなんでこんな場で肉食ってるんだ)

肉を大口で頬張る大臣がいたのだ。

江戸時代においても、幼少の見切りから、若くして君主にたつ者が存在していたので、皇帝が若いということには、然程驚くことではなかった。

しかし、流石に公式な場で、何かを口にしてるような者は初めて見たので、驚きというか、呆れたとしか言えない主水であった。

江戸であつたら、側用人であろうが、大老であろうが、筆頭老中であつても、切腹になるだろう不敬な態度である。

そして、一番の問題は、そのような不敬な態度を取る大臣に誰も指摘することが出来ないことだ。

裏返せば、それだけの権力を有しているということの証明になるのだが。

「おお、そなたらがエスデス將軍率いる特殊警察イエーガーズなのじゃな」

「はい、陛下。ここに控える者達が、イエーガーズのメンバーです。陛下の頭を悩ます逆賊を征伐するために選りすぐられたメンバーです」

エスデスの言葉を聞き、皇帝も笑顔を浮かべる。

その笑顔には帝都の闇を思わせることなど更々ない、純粋な笑顔であつた。

「これならば、陛下も安心して国を治められますな」

依然として肉を頬張りながら、話す大臣。

(こいつは、皇帝と違って悪どい気配が溢れてらあ)

悪党はいやという程見てきた主水故に、大臣を一目見ただけで、その歪んだ闇を看破していた。

だが、第一印象だけで決める訳にもいかないのです、この僅かな限られた謁見の時間の中でも、出来る限り客観的に、皇帝や大臣を見極め

ようとしていた。

最終的的なものとなっている大臣と、これ以降の流れによっては、的となるかもしれない大臣の傀儡の皇帝。

見極めるためには、滅多にない最大の機会であった。

「ではここに特殊警察の任命書があるので、エスデス将軍はあとでみんなに配っておいてくれ」

「御意」

恭しく頭を下げるエスデス、滅多に見られない姿である。

「ところで将軍、あの要望書についてなんだが…」

皇帝はなにか奥歯に物が挟まったように、言わずらそうに口を開き、大臣に視線を送るが、大臣は冷や汗を流しながら、皇帝の視線から目を背けた。まるでこちらに振らないでくださいといった感じで。

「陛下、まずは私が気長に探してみます」

エスデスは含み笑いを浮かべた。

イエーガーズの面々は何のことが分からないといった感じで、話を聞いているしかなかったが…

そんなこんなでエスデスと皇帝、大臣しか分からないやり取りもあったが、皇帝との謁見の儀は滞りなく終了した。

謁見が終わり、パーティーを開くということで、イエーガーズのメンバーは、最初に集合した、特殊警察会議室に向かって、宮殿内の廊下を歩いていった。

「緊張したね」

「本当ですね。俺も緊張で、心臓がヤバかったですよ」

「…ああ」

セリユーとウェイブの返しにも、上の空で答える主水。

この時主水は、先程の謁見の場で初めて見た、皇帝と大臣について考えていた。

（大臣は噂通りで、悪どい臭いがプンプンしてやがった。しかし、それだけでなく、強かさも感じられた。的になるのも当然だな。あんな狸と関わらにやならねえとは、チョウリも大変だろうな）

大臣への第一印象は予々聞いていた噂や、殺しの的になるといふこ

とから、予想できていたものだった。

（だが、分からねえのは、皇帝だ。たしかに年若く、頼りない面もあり、チラチラ視線が大臣に向かうこともあった。しかし、完全に大臣の操り人形になるような無能さは感じられなかった。まあ、今回の場が、政治的な場でなかったからと言ってしまえばそれまでなんだが…）

皇帝に関しては、考えが纏まっていなかった。

この僅かな時間で全て把握することなど出来はしないと、主水自身も思っていたことではあるので、落胆などの気持ちはなかったが。

◆◆◆◆◆

イエーガーズ発足のパーティーは、ウェイブが持ってきた手土産で、海鮮鍋のパーティーとなった。

イエーガーズの女性陣は誰一人として料理が出来ないということ、ウェイブとボルスが台所で腕を奮っていた。

待っている面々は各々自由時間を堪能していた。

執事服に着替えたランを、熱い眼差しで見つめるスタイリッシュ、猫じゃらしでコロと遊ぶクロメ、そして

「隊長は日頃何をしているのですか？」

「私は、狩りや拷問、またはその研究などかな」

尊敬の眼差しで質問するセリユート、頬を染め恍惚の表情を浮かべながら見つめるエスデス。

「これは、先程の謁見の場での失態についての罰でしょうか」

エスデスが見つめる先には、石を抱かされ、苦悶の表情を浮かべる主水の姿が。

「何を言っている。あのようなことなど問題ではない。あの時も言っただろ。礼を失っていないければ問題ないと」

「では、これは？」

主水は苦しげに抱かされている石と、正座をしている十露盤（そろばん）を見て、訴えかけるような瞳でエスデスを見つめる。

「うっ…流石中村だ、私の（ドS）心をここまで揺り動かすとは…」

さらに頬を紅潮させ、荒くなった呼吸を、深呼吸をすることで整えた後に、エスデスは答えた。

「こんなものは拷問とは呼べん、私と中村の軽いスキンシップと言った所だ」

「……………」

絶句とする主水。これからの未来に暗雲が立ち込める。

このままではエスデスに攻め殺されると危機感が募り、助けを求めようように、セリユーに視線を送ると、

(頑張つてね主水君！)といった励ましを込められた視線を返され、ラ
ンを見ると、

(お互いに頑張りましょう！)

といった思いが込められた視線を苦笑いをしながら返された。

物理的にダメージを受ける主水と同様に、ランもスタイリッシュから精神的にダメージを与えられていたのだ。

「ふう……堪能した……今日は初日だ、スキンシップはここまでにするか」

エスデスの一言で主水の足の上から石が退かされる。

(つたく、これじゃあ体が持たねえぜ)

拷問の痛みなど無かったかのように立ち上がると、セリユーの隣の席に腰を下ろした。

勿論エスデスからは離れた側のセリユーの隣席だ。

「話を戻すが、今私が一番してみたいことだが、恋をしてみたいと思っ
ている」

「!!」

皆は息を飲んだ。まさかエスデスの口から恋という言葉が出るとは想像すらできなかつたのだ。

皆に戦慄が走ると同時に、ナイスタイミングといった具合にウェイ
ブとボルスが海鮮鍋を持って部屋に入ってきた。

「みんな、海鮮鍋ができたよ」

ボルスが皆に呼び掛け、鍋を机に並べていく。

(エスデスの恋の相手か……全く想像できんな)

恋人ができりやあこの攻め苦から解放されるかもな。まあ夢のま
た夢か……今は鍋を堪能するか)

解決策が見つからない難題は放っておき、主水も鍋をつついた。その後イエーガーズは皆揃って海鮮鍋を味わったのだった。

第32話

大地が鳴動する程の歓声、それに助長されるように、激しくなる剣撃や立ち回り。

今、エスデス主催の都民武芸試合が行われていた。

主な主催理由は、暇潰しやエスデスの恋人探しである。

エスデス主催ということで、イエーガーズの面々も運営に関わっていた。

例えばウェイブは試合の審判、ランならば、エスデスの付き人として、といった感じである。

しかし、この人、中村主水は、イエーガーズに於いても相変わらず、昼行灯ぶりを遺憾無く発揮していた。

「おつ、ノブナガなかなかやるじゃねえか。手慰み程度だが、かなりやるほうだな」

運営をサボり試合観戦を楽しんでいた。

因みに、今試合で戦っているのは呉服屋のノブナガ。

主水が帝都に来てから懇意にしている店の主人だ。

ノブナガの呉服屋にしか、日本風の服がなかったため行き着けとなつた店とも言える。

「勝者呉服屋のノブナガ」

ウェイブが勝ち名乗りを上げると、轟く歓声。

ノブナガも高々と刀を天に掲げて、歓声に酔いしれている。

(次回おだてて安くしてもらおうか)

主水が悪知恵を働かせていると、舞台の清掃をボルスが行い、賞金をセリユーが渡している。

自分がサボっている時に仲間が働いているのを見ると、少し良心が痛んだ。

現実から目を反らし、晴れ渡る青い空を見て、ブーツとしていると、いつの間にか清掃が終わり、最後の試合の二人が舞台上がっていた。

「おい………いっただいどういことだ………」

舞台上の二人の内の一人を見て、主水は呆氣にとられていた、

「西方、鍛冶屋タツミ！」

いつも見ているナイトレイドのタツミが舞台上に上がっていたのだ。

「あのバカヤロウ！ いったいどういうつもりだ！」

主水の手がワナワナと震える。

もし主水がタツミの近くにいたら迷わず鉄拳制裁を加えていただろう。

ただでさえ、この稼業は人目についてはいけないもので、目立つことはどんなことがあってもしてはならない。

それは仲間の命すら危うくするものであるためだ。

それ以上に今回の問題が大きいのは、この試合が敵のエスデスが主催している試合で、強さが目立てば、目をつけられナイトレイドにも危険が及ぶことは、火を見るより明らかなことだ。

そのため、主水は飽きれと同時に、その思慮の足りなさに強い怒りを感じていた。

(負けてくれりゃあいいが、敵の牛を見ても力の差は歴然だ。厄介なことにならないきやいいが)

この時、主水の考えの遥か斜め上をいくほどの厄介なことが起ころうとは、誰が予想できたであろうか。

案の定戦いは一方的なものになり、タツミが牛を完封し、ウェイブによって勝ち名乗りを受けていた。

その時だった、突如エスデスが壇上から舞台に降りてきた。

ざわつきだす会場。会場内に来ていたラバックとレオーネにも緊張が走る。主水も何が起こるのかと気が気じゃない。

エスデスはタツミの前に立つと、まるで乙女のような顔をして、微笑みながら、タツミに首輪を着けた。

「!？」

皆の驚きと喧騒など無視してエスデスはまるで所有物のようにタツミを引き摺り、タツミが僅かに抵抗すると、はにかみながら首に手刀を打ち込み、お持ち帰りしたのだった。

(なんなんだこの流れは!?)

全く状況が分からない。

多分この会場中の人全てが理解できていない行動である。エスデスを除いては。

いてもたっても居られず、状況を確認すべく、厳しい表情で戻ろうとした時だった。

「主水の旦那ー!!」

「いいところに」

「レオーネとラバック」

あわてふためき、取り乱しながら走ってくる二人。

二人もこの会場で成り行きを見守っていたのだ。

「タツミがエスデスに」

「ああ分かってらあ。こんな大会に出るからこんなことになるんだ…」

あからさまに不機嫌そうな顔で呟く主水、それと同時に曇る二人の表情。

「すまねえ。旦那、この大会のことをタツミに教えたのは俺なんだ…」

「マジかよ。止めなくちゃならねえやつが、逆に進めるなんてよお。

呆れてものが言えねえぜ…」

主水は吐き捨てるように呟き、ラバックとレオーネを睨み付ける。

その圧倒的な威圧感に二人は動きが止まる。

「すみません…」

「もう起こっちゃまったことはうだうだ言ってもしょうがねえ。説教は次に置いて、今はタツミのことをどうにかしねえとな。今から俺はイエーガーズに戻って状況を判断した上で、対策を講じる。おめえらは早まったことすんなよ」

主水はそれだけ二人に告げると、踵を返し、闘技場をあとにし、イエーガーズの本拠地である特殊警察会議室に向かった。

その道中ウェイブとボルスと会い、合流した。

「いったいエスデス様はどうしちゃったのかしら?」

「俺も何がなんだか」

やはり二人も今回の出来事に困惑していた。

一般市民を大衆の目前で、首輪をつけて拉致したのだから、困惑して当然ではあるが。

「まあ、今はエスデス様から聞くしかないな。そして出来れば穏便にことをすませねえとな」

ナイトレイドのメンバーとしての答えとしても、イエーガーズのメンバーとしての答えとしても通じる答え。

二人は当然イエーガーズを思つての答えと受け取り、

「そうね、結成されたばかりのイエーガーズの悪い噂が広まったら困るものね」

「一般市民を拉致したエスデス將軍が率いるイエーガーズとか言われるのはマズイですよ」

三人は互いに視線を交え、頷き合うと、固く握手を交わした。

主水と二人の思惑は違えど、目的は一致したのだ。

(常識人の二人は上手く味方につけられたが、相手は常識が通じねえエスデスだ。まだ味方が必要になる)

主水の頭には他のイエーガーズの仲間4人が浮かぶ。

(セリユーならいけるな。ランはいけそうだが、真意が読めんため少し怪しいか。クロメは……分らん。スタイリツシユは……論外だな)

主水はそのように考え、セリユーとランを探しながら歩いたが、特殊警察会議室に着くまでに、その二人に会うことはなかった。

三人が宮殿の特殊警察会議室に帰りつくと、部屋にはイエーガーズの他の四人と、エスデス、椅子に鎖で拘束されたタツミの姿がそこにあつた。

(皆はもう集まっていたのか……合わねえはずだ。さてどうするか)

主水が思案に比べると、主水に気づいたタツミが哀れをそそり、助けを求めるような視線で主水を見つめた。

(少し我慢している、自業自得だしな)

生きているタツミを見て、少々安堵を覚えた主水であつたが、タツミの視線を一蹴した。

「というわけで、イエーガーズの補欠となるタツミだ」

「あの、市民をそのまま連れて来てしまうのはまずいと思うのですが」「俺もそう思います」

ボルスの言葉に賛同するウエイブ。

「私もボルスとウエイブと同じに思います。市民にイエーガーズの悪印象を与えてしまうことを恐れます」

主水はボルスとウエイブに感謝しながら、タツミを助けるべく、エスデスを説得する。

「気にしなくてもいい。私は気にせん」

暖簾に腕押し、糠に釘、馬の耳に念仏、エスデスに響くことはなく、嬉しそうに微笑んでいる。決して黒い笑みではなく、乙女のような純真な笑み。

「いや気にする気にしないでは——」

「大丈夫だ。暮らしに不自由はさせないさ。それに部隊の補欠にするだけじゃない：タツミは私の恋の相手になるんだ」

噛み合うように噛み合わない会話。

主水、ボルス、ウエイブの三人は、エスデスを説得することを遂に諦めた。

(話にならねえな。他の方法を考えるか：)

「えーと、なんで首輪をさせているんですか？」

説得を諦めたウエイブが、別に疑問に思ったことを聞いた。

普通なら好きになった人に首輪をつける人など、余程変わった性癖を持つ者しかいないからだ。

「愛しくなったから、無意識にカチャリと」

歪んだ性癖を持っていた…

「ペットではなく正式な恋人にしたいならば違いを明らかにすべく、外されたほうが良いのでは？」

ランの助言にエスデスは耳を傾けると、僅に思案にくれた後領き、「確かに言う通りだ。外そう…」

タツミの首輪を外した。

ウエイブと主水は黙って呆れるばかりであった。

「そう言えばこのメンバーの中で、恋人がいたり、結婚している者は？」

首輪を仕舞いながら、エスデスは、視線をイエーガーズのメンバーに向ける。

スツと一人の手が上がる。

それは誰もが予想だにしていなかったボルスであった。

皆の顔が驚きが変わるが、主水は然程驚くこともなかった。

（関わってみりやあ分かるが、ボルスは見た目さえ気にしなけりやまともだしな。いても可笑しくないだろ。まあ俺にも力カアがいたが、この世界じゃねえし、目立ちたくもねえから黙っておくか）

主水は照れながら、「結婚六年目なの」や、「私にはもったないほどの、すばらしい妻なの」、とのろけるボルスから視線を床に反らし、状況の整理を始める。

（危機的状况かと思っただが、タツミがナイトレイドとばれた訳でもねえし、命の危険もなさそうで、一安心だ。いや視点を変えるとナイトレイドにプラスに働くかもしれねえ。恋に溺れたエスデスの戦闘力は落ち、俺への拷問も影を潜めるだろうからな）

自分の願望交じりの思考にくれていると、不意に扉が開かれ、イエーガーズの初仕事か舞い込むのだった。

第33話

すでに黄昏時を過ぎ、宵闇が辺りを侵食する刻限になっていた。しかし、山間に佇む盗賊団のアジトは夜の安らぎなど無く、地獄の様相を描き出していた。

膾切りにされ、肉片と化した門番、たった一発の拳による打撃で崩壊した門、頭を撃ち抜かれながらも、何か神々しい者を見たかのように安らいだ表情で生き絶えた盗賊の一団、時刻を夕方と錯覚するほどに、天まで燃やす程の勢いで、闇を照らし払い、盗賊団のアジトと盗賊の残党を、容赦なく燃やす地獄の猛火。

これほどの惨状をたった数人のイエーガーズが、ほんの僅かな時間で成し遂げてしまったのである。

その光景を一望できる丘の上で、唾然とした表情で見つめるタツミと、アジトを燃やす炎のように頬を染め、タツミを見つめるエスデスの姿がそこにあった。

目の前でまざまざと見せつけられた、これから敵となるイエーガーズの力の一端、囚われの身にあるタツミに焦りを植え付ける。

それとは別の場では、何をすることもなく、ブラブラと辺りをぶらつく主水の姿が。

他のイエーガーズの面々とは違い、どこか場違いな雰囲気醸し出していた。

何故か？それは、今回のイエーガーズの初仕事の打ち合わせによって決まったことが問題となっている。



ボルスのノロケにより、和気藹々とした雰囲気をぶち壊すように扉が開かれた。

「エスデス様！ご命令にあったギョガン湖周辺の調査が終わりました」

敬礼しながら兵士が情報を伝えると、エスデスはうっすらと口許を緩めた。

「フフフ……丁度いいタイミングだな。お前たち初の大きな仕事だ

ぞ」

イエーガーズの面々は「仕事」という一言により、雰囲気ガラリと変わり、ピリピリと緊張したものとなる。しかし、皆の顔には何か余裕を感じさせるものがある。

いままで成し遂げてきた実績からだろう。

エスデスは一枚の地図を皆に見えるように机に広げる。

「ここがギョガン湖だ。お前たちはギョガン湖に山賊の砦が出来たのは知っているな」

エスデスが地図の中心部を指しながら、視線を一周させる。

「もちろん知っています。帝都近郊における悪人たちの駆け込み寺ですな」

警備隊でも何度か話題に上がっていた案件の為、知っていたセリユーが答える。

少し苦々しげな表情をしているのは、ギョガン湖の山賊は凶悪な極悪人が多く、警備隊の時には、危険度が高く、手を出せなかった苦い思い出があったからである。

「そうだ。今は居場所が分からないナイトレイドなどは後回しにし、居場所が分かっている敵から潰していく」

エスデスの眼孔の鋭さが増す。

「敵が降伏してきた場合はどうしますか隊長？」

「降伏は弱者の行為……この世は弱肉強食、弱者が淘汰されるのは世の常だ」

エスデスの冷たい声が響く。

しかし、皆は反論などすることもなく、静かに頷いた。軍の中では上官の言うことが絶対である。

(ドSらしい考えだぜ……)

「出陣する前に皆の覚悟を聞いておきたい」

つまり、これからは命令次第で、手を血に染めていく覚悟ができてくるかを確かめようとしているのだ。

「私は軍人です。命令に従うまでです。このお仕事だつて……誰かがや

らなくちやいけないことだから…」

優しさを持つているからこそそのボルスの発言。

誰かにさせるぐらいなら自分が嫌なことは引き受ける！という覚悟が感じられる。

「悪人を殺す覚悟はできています。ただ悪人の程度によりませんが」

(イエーガーズに入る時には心配だったが、大丈夫そうか…)

未だに一抹の不安はあるが、ある程度安心できるセリユの宣言であつた。

「私は命令を肅々と実行するのみ…今までずっとそうだつた」

幼い容姿とは真反対な重みのある発言。

クロメの歩んできたこれまでの人生が過酷であつたことが伺える。

「俺は…大恩人が海軍にいるんです…その人に恩返し出来るかつて聞いたら、国の為に頑張つて働いてくれればそれでいいって言つてくれたんです。だから俺はやります！恩を返すために、命を懸けてでも」
ウエイブにも強い思いや覚悟があつた。

普段の人当たりのいい好青年とは別の顔がそこで見えた。

「私とはある願いを叶えるために出世しなくてはならないのです。その為に手柄を立てないといけないので、やる気に満ち溢れています」
そこに普段の天使のようなランはいなかった。

すでに悪魔のような笑みに一変していたのだ。

ランにここまでの変化を与える程の何かがあり、余程の強い願望があるのだろう。

「Drはどうだ」

ニヤニヤしているだけのスタイリツシュの覚悟を問うべく、エステスは話を振つた。

「アタシの行動原理は」瞑っていた瞳をカツと見開き、

「スタイリツシュの追及!!」

力強く宣言した。

皆は呆然と見守るだけ。

さらにスタイリツシュの世界が続く。

「かつてエステス様の戦いを見た時に思ったの」

片手を額に当て、

「あまりに強く、気高く、あまりに残酷、ああ……神はいたのねと!!」
両手を広げ、天井を仰ぎ見、

「そのスタイリッシュキー……ぜひアタシは勉強したいのです」

スタイリッシュは白衣を何度も翻し、舞を舞いながら胸中を告白し、遂には床に膝まずいていた。

スタイリッシュについては言うことはないだろう。

（ついに俺の番か……だが命が懸かっているようが俺は趣旨を変えることはねえ!）

強い覚悟を持ち、一歩前に出た時だった。

「中村お前はいい」

「えっ!?!」

予想外の反応に、気が抜ける。

「お前の強い意志は以前甘味処で聞いた」

「甘味処!」

いち早く反応したのは主水でなくクロメだった。

甘い物好きの反応は凄いものがある。

「フッフ、今度は皆で行こう」

「はい!」

優しい笑顔に、優しい声でクロメに話すエスデス。クロメも今まで無表情であったことが嘘のように、満面の笑顔で返事を返した。

このやり取りだけを見れば、素晴らしい上司と部下のやり取りである。

「話を戻すが、中村の意志だけではなく、帝具も殺すことができないものらしいな」

エスデスの言葉を聞いたメンバーは、ここで主水の帝具は『スペクテッド』のような補助専用の帝具だろうと、予想をつけた。

「だからといって、お前もイエーガーズの一員なのだから働いてもらう。イエーガーズの中でも何よりも一番重要な仕事をな」

（一番重要な仕事?）

さすがの主水にも緊張が走る。悪人の殺害より重要な仕事だと言

うのだから当然である。しかも言っているのがエスデスという。

「ああ、私の趣味……もとい、これからの帝国の為に敵の捕縛をしてもらいたい。無傷でな。お前なら容易いことだろう」

（自分の快楽の為に、直ぐには死なない傷のない実験台が欲しいということか…）

なんとなくワクワクしたようなエスデスに対して、「分かりました」と主水は一言だけ返した。

「では、行くぞ。イエーガーズの初仕事だ！」

◆◆◆◆◆

ということがあり、今に至る。

（ほとんど死んで、ピンピンしているやつなんて、いねえじゃねえか）

半壊し、燃え盛っているアジトの中を歩く主水。

エスデスに求められた、拷問用の盗賊を探していたのだが、どれもこれも死体ばかりだった。

（見つからなかったらまた俺がエスデスの拷問を受けなくちゃならねえのか…）

エスデスの嬉々とした顔が脳裏に浮かぶと、ブルブルと身震いをした後に、辟易とした表情で歩きだした。

その刹那、音もなく主水の真上から大剣が振り下ろされた。

舞った砂埃が収まると、そこには陥没した地面のみで、主水の姿は何処にもなかった。

「良かったぜ。今まで相当悪いことをしてきた野郎でな。俺も任務を果たすことができたぜ」

「!!」

大剣を振り下ろした盗賊は力無く地面に倒れた。

盗賊の背後には、抜き放たれた帝具アレスターを携えた主水がいた。

◆◆◆◆◆

仕事を終え、宮殿に帰りついた後に、イエーガーズは散開し、主水とウエイブは下弦の月が照らし出す夜道を、帰宅の途についていた。

「初仕事やつと終わったな」

「終わりましたね。俺はあまり役に立てませんでしたけど」

頭を掻きながらウェイブは苦笑いを浮かべる。

「でも主水さんは凄いですね。無傷で盗賊を捕らえるなんて」

「そんなことはねえよ。運が良かっただけさ」

帝具の能力はいずれ明るみになることもあるかもしれないが、それまでは、自ら率先して話すことはしない。気心が知れた相手でもだ。

仕事人にとっては、些細なことでも自分だけでなく、仲間も危険にさらす、つまり自ら首を絞めることになることもあるからだ。

その後も笑いながら雑談をし、別れ道に来る。

「じゃあ俺の家はこっちなんで、失礼します」

「ああ、おやすみな」

ウェイブと別れた主水は、自らの足でラバックの貸本屋に向かった。

「ラバックいねえか？」声を潜めて、軽くノックする。

「今開けるよ」

扉が開けられ、地下のナイトレイドのアジトに通された。

「タツミは今のところ命は大丈夫だ。というか命の危険どころじゃねえ問題になっている」

主水深くため息を一回つくと、ラバックにこの成り行きを全て話した。

「マジかよ！本当にタツミは年上キラーだな…」

「年上キラー？」

「ああ、主水の旦那は知らなかったっけ、タツミの野郎、年上に好かれるってことでボスが言っていたんだ」

苛立たしげにラバックは話す。大好きなラバックからすると、腹立たしくてしょうがないらしい。男の嫉妬である。

「そうだな。その年上キラーが災いしたな。で、そういうことだから、命は大丈夫だ。俺は隙ができればいいタツミを逃がす。それまでは静かにしとくようにボス代行のアカメに言っといってくれ。多分心配しているだろうしな」

「ああ、分かった」

ラバツクの表情は緩む。ラバツクもタツミのことを心配していたことが窺えた。

「ああ、それと」

主水の真剣な表情が崩れ、何か暗いものが浮かぶ。

「この件が片付いたら、おめえとレオーネ、張本人のタツミとみっちり話すことがあるからな。覚悟しとけよ」

「お、覚えてたのね……」

床に膝をつくラバツクを見ながら、主水は不敵な笑みを浮かべるとアジトを去っていった。

第34話

物音一つしない、豪華な宮殿内を、思案顔で主水は歩いていった。今一番の懸案事項である、タツミをどう逃がすかという問題。

イエーガーズのメンバーから逃がすのであれば、然程悩むことも苦勞することも無いのではあるが、なんといつても帝都一の危険人物工スデスから逃がさなくてはならないということが、一番の問題であった。

「おはよう主水君」

「おはようございませす主水様」

「おはようございませす」

無意識化で挨拶され、反射的に主水は挨拶を返していた。だれとも気づかずに。

主水は一瞬の間を置き、現実に戻る。挨拶を返したものの、いったい誰に挨拶をされたんだ？と。

挨拶を掛けた相手を見た時、主水は懐かしさを感じた。

笑顔で立つチョウリと、父チョウリを護衛する娘のスピアがそこにいた。

「これはチョウリ様。スピアお嬢様、お久しぶりです」

「昨日謁見の間で目を合わせはしたが、会って話すのは本当に久しぶりだね。私も君に会えて嬉しいよ。この魔の巣窟の中で気を許せる相手なんて、まずいないからね」

チョウリは以前と変わらぬ笑顔で話す、昨日謁見の間で見た無表情とは違った、感情が隠った笑顔。

その表情を見ただけで、チョウリも再開できたこと大變に喜んでいれることは、容易に感じ取ることができた。

「あれから大丈夫ですか？」

命の危険やら、宮殿内の仕事について、暗に問う。あまり声高に出れない話題であるからだ。

「私も何度も修羅場を大臣という立場で乗り越えてきた身だからね。大丈夫だよ。ただ、今では良識派の官僚達からは、大臣に寝返った裏

切り者と後ろ指をさされる身分ではあるがね」

苦笑いを浮かべながら話すチョウリ。

自分の命を守り、大臣に取り入ったふりをしながら、尚且つ民のことも思いやる。チョウリの苦勞の程が思い知られた。

「主水君なら今の言葉で察してくれたと思うが、上手く大臣に取り入れたのは幸先がいいよ」

チョウリの苦笑いが、いつの間にか、不敵で、何か含みを込められた、薄気味悪い笑顔に変わる。

(分かつてはいたが、チョウリもかなりの狸だな。まあドロドロと悪鬼蔓延る宮殿内じゃ、そうでなくては生きていけないだろうがな) 純粹に戦鬪力のみを必要とする、主水が属する世界と真反対の世界に生きるチョウリを見て、政治家の強かさを知った主水であった。

「ついつい嬉しくて話が長くなってしまったな。すまないな主水君」

「いえ、私も気分が晴れましたから」

二人は笑顔を交わす。

「さあ、今日も大臣に媚を売りながら政務に励むか。またな主水君」 晴れやかな笑顔を浮かべチョウリは去っていく。

後ろでスピアも頭を下げた後、チョウリに続いて去っていった。

(チョウリは大丈夫のようだな。次は俺の番だ)

主水はチョウリの後ろ姿を見送った後に、気合いを入れ、イエーガーズの特殊警察会議室に向かった。

角を曲がると特殊警察会議室に差し掛かる所で、主水の足が止まる。

部屋の死角から壁に背を預け、頬に手をあて、室内に耳を傾ける白衣の男、スタイリツシュがいたからだ。

(ヤツは何を探ってやがる)

主水はスタイリツシュを嫌い、尚且つ警戒していた。

前者はセリユーの人体改造のことから、後者はナイトレイドの中でも屈指の頭脳を誇ることからである。

主水も、スタイリツシュに警戒しながらも、室内に目を向ける。

室内ではウエイブとクロメ、タツミ、そしてエスデスが会話をして

いた。

主水が位置する場合は、部屋から離れているため、如何せん声は聞こえてこない。

しかし、主水はあるスキルを備えていた。

(フエ、ク、マ、に、行、く、ぞ、か)

読唇術である。

(ひ、る、は、タ、ツ、ミ、と、ウエ、イ、ブ、だ。しめたこの機会を逃す訳にはいかんな)

主水はタツミ救出を行動に移すことに決めた。

(フェクマはたしかフェイクマウンテンの略語だったな。先回りするか)

物音一つ立てず踵を返し、去ろうとした時だった。

「おはよう主水君！何してるのこんな所で？」

元気いっぱいので、いつの間にか背後に来ていたセリユーに声を掛けられた。

「おはようございますセリユーさん。少し落とし物をしまして…」

「大丈夫？私も手伝うよ」

「いや、もう見つかりましたから」

セリユーと会話を交わしていると、スタイリッシュの姿は霧のように消えており、室内から出てきた、エスデス、タツミ、ウエイブ、クロメと鉢合わせした。

「中村とセリユーではないか。私達は今からフェクマに向かう。後のことは任せたぞ」

「お任せください！」

エスデスに向け、ビシツと敬礼するセリユーとコロ、それを見て満足そうに頷くと、エスデスは三人を引き連れ、颯爽と去っていった。

「じゃあ私も悪人探しに行きますか」

主水も遅れることなく行くこうとする。

「あ、主水君！今日の午後暇かな？」

少しソワソワしながら聞いてくるセリユー。

「午後なら大丈夫ですが」

「ほんと！じゃあ修行に付き合ってくれろ？」

「いいですよ」

「ありがとう主水君。じゃあ今からボルスさんの書類仕事の手伝いをしてくるね。またね主水君！」

セリユーは満面の笑顔で、嬉しそうに去っていった。

（気付かれないギリギリの間を取って追うか）

本当なら先回りをするはずだったが、エスデス達が先に行ってしまったために、尾行することにし、主水は気配を消し、十分に間を取り、エスデスの後を追った。

主水は着かず離れず尾行し、フェイクマウンテンに辿り着いた。

そこで、タツミとウェイブ、エスデスとクロメに別れ、フェイクマウンテンを登って行った。

（タツミを追い、隙あらば逃がし。もしも隙が無ければ作って逃がすか）

主水は二人の後を追う。

しばらく、タツミとウェイブが雑談を交わしながら、登頂していたが、いつの間にか、木に擬態する危険種に囲まれていた。

（今がチャンスか）

主水が思惑と、タツミの思惑は一致していた。

危険種を全力で相手するウェイブの目を盗み、タツミはその場から逃げ去った。

（俺が手を貸すまでもなかったか）

タツミの成長を僅かながら喜ぶ主水。

（後はウェイブがどう動くかだな）

ウェイブに視線を移すと、タツミが居なくなったことに狼狽し始める。

（そりゃあ、ああなるはな。タツミを逃がしたと知ったらエスデスがどうなるか…）

主水がウェイブの身になって考え、身震いしていると、ウェイブの頭にもおぞましい笑みを浮かべながら、嬉々として拷問の準備を始め

るエスデスが浮かんだのであろう。

顔面蒼白になり、

「タツミお前の気持ちは分かるが。俺はまだ死にたくねえんだあ
あああ!!」

魂の叫びを上げると、腰に携えた剣を抜き、地面に突き刺した。

「グランシヤ——」

(すまんウェイブ…)

ウェイブに気取られず、主水は瞬時に背後を取ると、帝具アレスタ
ターで後頭部を一閃した。

「…………俺は何をしているんだ?」

思考することを封印されたウェイブは頭を抱えて、悩み始めた。

(お前が犠牲になってくれたことに感謝する…)

後にウェイブに訪れるだろう災難(エスデスの制裁)に思いを馳せ、
合掌した。

(本当はタツミを追いたいが、ここまでお膳立てすれば大丈夫だろう。
帰るか)

主水は憐れなウェイブを置いて、その場を立ち去った。

◆◆◆

主水が特殊警察会議室に帰還すると、書類の山に埋もれる、ボルス
とセリユ一の姿が。

「…大丈夫ですかボルスさんとセリユ一さん?」

どう見ても大丈夫ではないのは明らかである。

イエーガーズのメンバーは戦闘以外にも高い能力を有してはいる
が、好き嫌いが激しいのか、書類仕事など一切しなかった。

そのイエーガーズの面々の後始末を、ある意味イエーガーズの良
心、言い換えればイエーガーズの母のボルスが受け持っていたのだ。

「…………大丈夫…だよ」

「私も…大…丈夫」

二人とも意識が朦朧としているのか、端切れが悪い。

ただでさえ、重要な役職のため書類仕事が多い。その上、イエー
ガーズは発足間近なのが書類仕事を増やすことに、拍車をかけてい

た。

「私も手伝いますね」

主水は二人を見捨てることが出来ずに、果敢に書類の山に飛び込んでいった。

その後、やって来たランが、やつれ果てた三人の惨状に気付き、手を貸してくれたことで、主水達にはランが本当に天使のように見えていた。

第35話

校庭のグラウンドがまるごと入るのではないかと思われる程の巨大な鍋。

なみなみと灌がれた水からは、白い靄が立ち上ぼり、所々薄い氷が水面に張り、氷の塊が浮かんでもいる。

鍋の下から見上げるように佇む表情を無くしたエスデスが、片手を上げると、幾多の重りを体に結び付けられた、半裸の男が、瞳に涙を浮かべてクロメによって連れられてきた。

そのまま促されるままに、鍋の上部にいたる階段を上らされる。

憐れで悲哀に満ちたその男、ウェイブを見ても、エスデスの表情は変わらない。

「やれ」

抑揚の無い声で刑罰の実行の命令がとぶ。

「えい」

「うわああああ!!」

クロメに背中を蹴られ、ウェイブは鍋の中に没した。

「寒!!おぼで…!!」

人間が耐えるには厳し過ぎる水温は、ウェイブの体に痛みとして苦しみを与え、水練達者な海の男でも音をあげる程の重りは、ウェイブをもつてしても、水中での自由を奪い、鍋の底に引きずりこもうとする。

「ウェイブ、今日一日そこで頭を冷やし、深く反省しろ!今回はこのよ
うな温いお遊びで許してやるが——次回は無いと思え!!」

エスデスの周囲が白く凍りつく。

底冷えする程の威圧感溢れる声でエスデスは最後通帳を言い渡す。
愛するタツミを逃がしてしまったことが、エスデスの逆鱗にもろに
触れてしまったのだ。

(やはりこうなっちまったか……すまねえなウェイブ)

絶え間なく辺りに響く、もがくウェイブがたてる水音と、水の冷たさからくる断末魔を聞きながら、この状況を作り出してしまった張本

人の主水は、心の中でウェイブに深く謝罪した。

「ウェイブ以外のイエーガーズは至急会議室に集合しろ」

エスデスのその一言で拷問の執行を見届けたイエーガーズの面々が会議室に集合した。

「Drはどうしたんだ？」

エスデスは集まったイエーガーズの面々に視線を巡らすと、この場にはいないスタイリッシュについて尋ねた。

「Drスタイリッシュは朝から姿を見ていません」

セリユーが代表で答え、エスデスはその答えを元に視線を巡らすと、皆一様に頷いた。

（スタイリッシュが居たのを知っているのは俺だけか……）

主水は皆と同じように頷いてはおいたが、朝スタイリッシュがいたことを思い出していた。

（……まずいことになってるかもしれないな……ヤツもエスデス達の話聞いていた……もしかしたらヤツもタツミについて疑いを持っていて、フェクマまでついてきたのかもしれない。気配は感じなかったが……）

逃げたタツミを追い、ナイトレイドのアジトを発見されるという、一番最悪の想像が頭に浮かぶ。

「Drが単独行動をするのは今に始まったことではないか。では、Dr抜きで始めよう。今回集まってもらったのは逃げたタツミを捜索するのが目的だ」

ウェイブが逃がしたタツミを探し、連れ帰ることをイエーガーズの仕事とするというこのようだ。

私物化や、職権乱用にも思われるが、イエーガーズのリーダーのエスデスが命じた瞬間それが公式の仕事となる。

「タツミがいなくなったのはフェクマだ。故に皆にはフェクマで捜索にあたってもらう。ボルス、中村、セリユー、クロメはフェクマで捜索、ランは私と共にここで待機だ」

指示が出されると共に、イエーガーズの面々は席を立ち、即座に行

動に移った。



切り立った岩山が立ち並ぶフェイクマウンテンに再び主水は訪れた。

辺りはすっかり日が暮れ、朝とはその様相は一変していた。

まさか一日に二度来ることになろうとはと考えていると、

「私とクロメちゃんて東側を捜すから、主水君とセリユーちゃんは西側をお願いね」

一番の年長者であるボルスの指示を受け、捜索に向かう。

この組分けにしたのは、普段から主水とセリユーが、仲良くしていたことを鑑みてのことだろう。

ボルスだからこそできる心配りの行き届いた指示である。

「タツミ君とDrを捜しに行こ主水君！」

「分かりました」

口ではそのように答えるが、頭の中では、このままセリユーと共に深々と捜索にあたることは危険ではないか？という葛藤が渦巻いていた。

険しく切り立った岩場を抜けると、それまでになかった深緑の深い森に行き当たる。

（まずいなこれ以上進むとナイトレイドのアジトにたどり着いちまう）

段々とデッドラインに近づきつつあることに、主水は焦りを感じる。

「セリユーさん危険種のレベルが上がる、こんな夜更けにこの森に入るの危険です。迂回するか、ボルスさん達がタツミを見つけているかもしれないので、一度戻りませんか？」

なんとかこれ以上先に進むことを阻止しようと苦心する主水。

しかし、セリユーそんな主水の苦労を露知らず、微笑を浮かべると、「私の勘なんだけど、この先が怪しいと思うの。それに、私にはこれがあるから大丈夫」

セリユーは月光に照らされて虹色に光るガントレットを主水に見

せる。

「それは？」

「これはね、Drが私の為に作ってくれた五つの属性を持ったガントレットなんだ。帝具や臣具程の力はないけれど、そこら辺の腕がいい鍛冶師さんが作る武器よりよっぽど強いんだよ」

Drスタイリツシユの力作を誇るように、満月にかざすと、虹色の光が一層輝きを増した。

だからといって主水も折れる訳にはいかなかった。これ以上セリユをアジトに近づけないためにも。

しかし、その努力も無為に終わる。

森を隔てた奥の方から、轟音が轟き、空には巨大な飛行物体が地面に影を作りながら、旋回しているのが目に入った。

(あれは特級危険種のエアマンタ…何処かで見た覚えが…)

主水がその姿を見て瞬巡していると、隣にいたはずのセリユが、迷いなく走り出していた。

「嫌な予感がする…行こ主水君！」

(俺はもつと嫌な予感がするぜ)

今日一番に顔をしかめ、セリユの後を追い走り出した。

二人は森の悪路や、行く手を遮るように深く生え繁る植物も物ともせずに、突き進んだ。

森の出口に近づくと、辺りが一望できる岡の上の広場が見えてきた。

そして、そこに居たのは、二三人の側近(耳がデカイ女と目や鼻が大きい男)を連れ、逃げ惑うスタイリツシユと、和装を身に纏い、頭部に角を生やし、巨大な槍とも金槌とも判断がつかない得物を携えた、見たことがない男がいた。

また、丘の下には、苦しそうに地面に横たわるナイトレイドのメンバーが。

(ナイトレイドの方が旗色は悪いな。それとあの男は新しいナイトレイドのメンバーか)

主水が鋭い視線を男に向けていると、追い込まれたスタイリツシユ

は白衣の裾から、注射器のような物を取り出した。

「あ、あれはダメDr!!」

セリユーはスタイリツシユの持つ注射器を一目見ると、顔色を変え走り出した。

「チツどうにでもなれ」

主水は非常時にと用意しておいた、黒いローブを目深に被ると、セリユーを追って走り出した。

「終わりだ」

男は巨大な得物を振り上げ、スタイリツシユを圧殺しようと降り下ろす。

「大事な人を殺させはしない!!」

横から割って入ったセリユーが虹色に輝くガントレットで、得物の腹を打つと、爆炎を上げ、得物は弾かれ、携えていた男も共に吹き飛んだ。

「えっ！セリユー？」

スタイリツシユは注射を打とうとする手を止め、突然現れた自分の味方を見て目を白黒させている。

「スタイリツシユ、引き時だ」

スタイリツシユの傍らに、黒いローブを目深に被った主水が現れると、スタイリツシユに撤退を促す。

「どうしてあなたたちがここに？」

「お前を助けるためだよ。仲間としてな」

（なんで口から出任せを言わなくちゃならないんだ…まあ仲間の劣勢を覆すためにも、そのうえまだコイツには利用価値がある。しようがないか…）

「あたしが仲間…」

スタイリツシユが普段言われなれていない言葉。スタイリツシユの周りには損得勘定のみの人間関係しかなかった。

何か反芻するように惚けたスタイリツシユは呟く。

「お前をセリユーは大事だと思っているんだ。その思いを無駄にするんじゃないねえ！」

「……分かったわ……」

スタイリッシュは観念したように頷くと、撤退を始める。

「逃がすか!」

男は吹き飛ばされた場で、瞬時に立ち上がると、撤退するスタイリッシュに向かって地面を蹴った。

蹴られた地面は深々と抉れ、男は突風を巻き起こしながらスタイリッシュに向かう。

セリユーは男の前に躍り出るが、男は気にする素振りもなく、突進する勢いに任せ、得物を突き出す。

セリユーは得物の下に身を屈め潜り込むと、ガントレットを頭上を過ぎ去る得物の下に添え、ガントレットを滑らせ得物の軌道を上方変える。そして、そのままガントレットと得物が接する箇所から火花を撒き散らしながら前進し、懐に入り込むと、空いている拳で打ち抜くように鳩尾に一撃を加える。

電撃を纏ったガントレットが螺旋の渦を描きながら男の鳩尾にヒットすると、男の腹に巨大な穴が穿たれた。

しかし、男は表情を変えない。

セリユーの表情に困惑の色が浮かぶ。

すると男の腹に空いた巨大な穴が瞬時に再生された。

(まさかコロと同じ生物型帝具!)

驚きから一瞬の隙ができたセリユーを、圧殺しようと、力任せに得物に力を込めた。

「ぐっ……」

セリユーは放った拳を引き、上から押し付けられる得物を腕を交差し、守りを固める。

しかし、男の力は想像以上に強く、セリユーの足が地面にめり込む。

「ガアッ!」

主を守るべくコロが男に襲い掛かる、男は横目にコロの動きを捉えると、スツとバックステップを踏みコロをかわす。

「セリユー!」

主水がセリユーに向かおうとするが

「先に行つてて…D rをお願い…私はD rの為にもう少し足止めするから」

「…分かった」

苦渋の判断に顔をしかめながらも、セリユーの思いを受け止め、血の滲む拳を握りしめて、主水はスタイリツシユ共々セリユーを殿に残し撤退した。

第36話

次第に白み始める空。朝日が山裾から少しずつ顔を出し始め、朝特有の鳥の囀りが辺りに木霊する。

しかし、主水、スタイリツシュ二人とも、沈黙を貫き、晴れず、険しい表情を浮かべている。

恩人のスタイリツシュを救うためにナイトレイドの足止めを志願し、その場に殿として残ったセリユー。直ぐに合流すると言っていたものの、既に半刻の時間が経過しながらも、いまだ合流できていないのだ。

(ついさっきまで聞こえてきた、爆発音が止んで四半刻か…微妙な時間だな…)

閉じていた目を開くと、主水は意を決したように口を開いた。

「スタイリツシュ、帰るぞ…」

「えっ!?!」

スタイリツシュが僅に戸惑いの声をあげる。

「何を驚いている。おめえにとってはセリユーも駒でしかないんじゃないかねえか、使い捨てのな」

「……」

スタイリツシュは返す言葉がなかった。

主水が言うように、スタイリツシュにとっては、セリユーも一枚の駒でしかなかった。以前までならば。

しかし、何故か今はスタイリツシュにとって、セリユーは大事な仲間になっていたのだ。

命がけで助けられたことが起因となったのか、「仲間」と言われたことが心に響いたのかは分からないが。

この事實は、損か得かの損得勘定をのみを指針にしてきた、リアリストのスタイリツシュ自身にとっても、驚くべき心境の変化であった。僅かであっても、スタイリツシュにとってはとてつもなく大きな変化。

「それにな、俺がセリユーに頼まれたのはおめえを助けることだから

な」

最初はナイトレイドのアジトを発見したスタイリツシユは即刻殺そうと考えていた。

しかし、まだスタイリツシユにはしてもらわないといけないことがあること、そしてセリユーが命をかけてまで助けようとしたことが相まって生かすことにした。

ただ、そのまま生かすことについてはかなりの問題がナイトレイドにとってありそうではあるが、そこにも、決して楽観視ではなく、勝算があった。

まず一点目は、主水は以前ナジエンダから、帝都周辺に、革命軍のアジトが他にも幾つか点在していると聞いていた為に、バレても他へアジトを移すだろうと考えたこと。

そして、二点目は、今回のスタイリツシユの独断先行から考えても、スタイリツシユは損得勘定を指針に行動するために、ナイトレイドのアジトの位置を話してもスタイリツシユには全く利益は無い為に、決して言うこともないとある意味確信していた為でもある。

以上の二点から、スタイリツシユを生かしていても、今回は、そこまでの被害はないのではないかと、算段を踏んでいた。

(前までなら待つことも、ましてや生かしておくことなどまずなかったはずだ。俺はいつからここまであまちゃんになつちまったんだ)

朝日に照らされ淡く赤く染まる雲に視線を向け、主水は自分の変化に戸惑いを覚えていた。



セリユーとコロの前には、ナイトレイドの新メンバーの生物型帝具の男、そして、セリユーは気づいてはいないが、インクルシオを纏ったタツミがいた。

ただ敵はその二人だけではなかった。

セリユーが間合いを取るべく、僅に後ずさった時だった。

白み始めた上空を旋回する特級危険種エアマンタの背が閃光すると同時に、弾丸がセリユーの背後に着弾したのだ。

(あれは前に逃がしたナイトレイドのメイン。確か帝具浪漫砲台パン

プキン。今回は逆になっちゃったか。もう逃げられないなら、一人でも多くのナイトレイドをここで倒す！」

セリユーは覚悟を決めた。ここで命を落とすことになっても、犬死にはしない。必ず何人か地獄の道連れにすると。

「行くよコロ！ナイトレイドロー！！」

「グアーアーッッッ！！」

セリユーは男に、コロはタツミに、一陣の風となり突っ込んだ。

セリユーは男の怒涛の突きを体を捻りながら避け、果敢に懐に踏み込んでいく。

「ハッッ！！」

セリユーの白い冷気を纏った左ストレートが胸に直撃し、突き刺さり抉れた部分から凍結する。

(あつて)

大きく引き力を極限まで貯めた渾身の右のコークスクリューブローが凍結した胸部を穿ち、拡散した衝撃波が体をうち砕いた。

男の体を半壊させ、優位に進めているはずが、セリユーの顔には焦りしかない。

(ここにもコアはないなんて)

生物型帝具はどんなに強力な攻撃を加えようが、体を粉碎しようが、コアを破壊しない限り、倒すことができない。

故に、セリユーの顔に焦りと焦燥が浮かんでいたのだ。

半壊していた体を急激に再生した男は、得物を振り下ろす。

「くっ」

得物がセリユーをかする。

得物から突き出た刃がセリユーの服だけでなく、体をも切りつける。

その後、得物が巻き起こした叩きつけるような風圧で、セリユーは血液を散らしながら吹き飛び、木に叩きつけられ、そのまま膝をついた。

(まさか、生物型帝具がこんなに強いなんて、思ってもいなかった…) 今までパートナーとして組んできた相棒のコロ。

練習相手として組み手などをしていたこともあったが、練習は練習。

実戦になって初めてその恐ろしき、そして厄介さを知った。

驚異的な再生能力があるため、相手の攻撃を全く恐れることなく、また攻撃を受けても動じることなく踏み込んでくる。防御を捨てた攻撃ほど怖いものはない。

そして、その特性や強さを見せつけるかの如く、コロもインクルシオを纏うタツミとの戦いを優勢に進めていた。

タツミが繰り出す槍での突きを全て受けながらも前進し、タツミが渾身の力で放った槍の一撃をも受け止め、筋肉で抜けなくする。

そして、丸太のような豪腕による容赦のない攻撃が始まる。

以前は単調な戦い（直線的な）を行い、シエーレにそこをつかれたことがあったが、セリユーと共に主水の鍛練を受け、学習し、その戦いも進化していた。

大小様々な攻撃を織り交ぜ繰り出す。

タツミは大振りの攻撃を避け、同じ要領で避けようとする。

しかし、次に来たのは小振りの一撃、避けることもできず叩き込まれ、膝を付く。

膝をついたタツミの眼前に迫る凶悪な牙を振りかざしたコロ。

「うっ」

極限まで身を屈め遣り過ぎすが、幾つかの牙がタツミの肩を抉り、白いマントを鮮血で染める。

しかし、それで終わりではなかった。

コロは器用に宙で反転すると、拳を組み合わせ、まるでハンマーのように打ち下ろした。

「かはっ!!」

まさか空中にいるコロから追撃があるとは予想すらしていなかったタツミは、まともにその攻撃を背に受け、地面に叩きつけられ、めり込み、その衝撃で周辺にも亀裂が走る。

「グオーーッッ!!」コロは天に向かい、勝利を示すかのようにはげを上げる。

コロが動かなくなつたタツミを見下ろし、まだ息があることを確認すると、留めをきそうと近寄るが、そこで動きが止まる。

主人であるセリユーが横目に入ったのだ。

そこには、命が風前の灯火となつているセリユーの姿が。

木にもたれ掛かるように膝をついた、セリユーが苦悶の表情を浮かべ、その前に、セリユーを見下ろすように立つた男が、今にも自分の得物を振り下ろそうと、振りかざしていた。

コロはタツミを捨て置き即座に走り出すが間に合わない。

男は全く表情を変えず、その得物を振り下ろした。

セリユーの目には、自分に迫り来る得物がスローモーションのように見える。

(ゴメンね主水君、Dr…私ここまでみたい…ゴメンねコロ情けない遣い手で…)

頭に真つ先に浮かんだのは謝罪の言葉ばかりであった。

次には思いの丈が、

(私何もできなかつた…悔しいよ…)

セリユーは瞳を閉じると、頬を一筋の大粒の涙が伝う。

悔し涙か、はたまた、大事な人にもう会えないことへの悲しみの涙かはさだかではない。

伝つた一滴の涙が地面を濡らす時、男の得物が地面に突き刺さつた。

第37話

巻き上がる砂塵、そして、その砂塵に混在するかの如く、チラチラ
と瞬く赤い血液。

砂塵の量からも男の得物の破壊力が窺えた。

ただ、今まで無表情に相手を殲滅していた、男に僅ながら驚きの色
が表情に垣間見えた。

何か思案顔を浮かべた後に、男が徐に右腕を上げると、得物を握り
しめていたはずの右手が存在せず、朱色のまるで血のような液体が、
断面からとめどなく流れ落ちていた。

砂塵が落ち着くと、得物が切り離された右手と共に、セリユーにか
するか、かすらないかというギリギリの地面に突き刺さっていた。

(えっ私は助かったの!?)

男だけでなく、セリユーも他間に漏れず、驚きが隠せない。

死を覚悟していた自分がやったはずもない、また、コロもあの距離
から間に合うわけがない。

一体誰が?と疑問を抱いていると、陽炎が揺れるように、何か揺
らめいたかと思われた直後、セリユーの前に突如白いローブを目深に
被った見知らぬ人物が現れていた。

その人物の右手には、赤い液体を滴らせた細身の剣が握られてい
る。

そこから見ても、この人物が、男の右手を斬り、自分の危機を救っ
てくれたことが容易に想像出来た。

「もしかして…主水君?」

今まで何度も自分を救ってくれた人の名を無意識のうちに呼んで
いた。

ただそれは願望だったのかもしれない。

主水だったら嬉しいという。

しかし、目の前の人物は、首を横に振り、それを否定した。

そして、一言、

「早くここを去りなさい」

囁くように呟いた。

その声は何処かで聞いたことのある声ではあったが、今はそれを考えている暇はないと、目の前の人物の指示に従い、悪に背中を向けるのは不本意ではあったが、走り出した。

「逃がさないわよイエーガーズ!!」

特級危険種エアマンタの背が再び煌めく。

同時に放たれるセリユーを狙った正確無比な弾丸。

セリユーに着弾するかと思われたが、セリユーを守るように現れたコロによつて防がれた。

遠ざかる二人を横目に見送ると、煌めく何かを人差し指と中指の間に挟み、それを投擲するように左手を軽く振りぬく。

朝日に一度煌めいた何かだが、エアマンタの額に刺さると、エアマンタは麻痺したように、体を硬直させ、浮力を失い地に落ちた。

セリユーの追っ手となりうる障害を排除すると、男に振り向く。

「貴方はどうしますか？ 私は、できればこれ以上やりたくはないのですが…」

ローブで影になっているため、表情は何えないが、そこに存在するであろう、瞳が、鋭く自分を射ぬいているであろうことは、丁寧な言葉とは裏腹に、その体から放たれる圧力から想像できた。

「ナジエンダの命令は絶対だ!」

男はそう宣言すると、右手を再生し、再び地に突き刺さった得物を抜き、大地を蹴り走り出した。「行くぞ!!」

木々を揺らすほどの風を巻き起こし、白いローブの人物に向かう。

ローブの人物は、軽いため息を吐く素振りを見せると、軽く細身の剣を振り、液体を払うと、鋒を男に向けた。

あと一歩で両者が交錯するその時に、

「やめろスサノオ!!」 ナジエンダの声が響く。スサノオの得物もあと僅かで接触するかという鼻先でピタリと止まっていた。

「今の状態のそいつには誰も勝てんよ」

「ナジエンダは知っているのか?」

「ああ、腐れ縁というやつか…そんないけすかないヤツは1人しか知

らん。そうだろ？」

その人物は、ナジエンダの言うことを肯定するように微かに首を縦に振る。

「だがな」

ナジエンダの声色が今までの知り合いに話し掛けるような和やかなものから、剣呑なものにガラリと変わる。

「いくら挙動のおかしなお前でも今回のことは見逃すことはできんぞ」

まるで敵に対するように詰め寄り問い詰める。

「ええ、分かっています。革命軍に属している以上、敵を助け、逃がすことがどれ程の重罪かは…しかし、私にも曲げられない信念があり、それだけではなく、彼女には貸しが一つありましてね、いてもたってもいられなかつたんですよ」

その人物はスラスラと答え、言葉では謝罪してはいるが、口調からは全く悪びれることなく飄々としているように感じられた。いや実際そうであつた。

「確かに今回は貴女方の邪魔をしてしまいましたので、次回何かしら貴方達の手伝いをさせてもらいますよ」

その人物はそうナジエンダに伝え、フツと口許を緩めると、元からそこには存在していなかつたかのように、蜃気楼のように姿が消えていた。

「フツ、食えんやつだ…」

ナジエンダも鼻を鳴らして苦笑いを浮かべていた。



主水とスタイリツシユは共に無言のまま、そしてついてくる三人のスタイリツシユの側近も同様に黙ったまま、フェイクマウンテンの登山道を下っていた。

「スタイリツシユ様、上空から何かが来ます！」「あれはエビルバード？いや、エビルバードの亜種です!!」

沈黙を破り、焦るように、耳の大きな女性が告げると、より詳しい情報を目が大きな男が補足して伝える。

「エビルバードの亜種ですって！」

見上げると、既に目視できる位置に、一般的なエビルバードより二回り以上大きく、鋭い嘴、鋼鉄をも軽々引き裂くであろう鍵爪、見るものに恐怖を植え付ける禍々しい羽色をしたエビルバードの亜種が、巨大な羽を羽ばたかせ、辺りに突風を吹かせながら空中に制止し、主水達を見下ろしている。その鋭く輝く瞳は猛禽類のものそのものである。

「どうやら主水達を捕食すべきターゲットと決めたらしい。」

「エビルバードは特級危険種、亜種だしたら超級危険種並みね。できれば素材として欲しいわね」

スタイリツシユは舌なめずりをしながら、物欲しそうに、エビルバード亜種を見つめている。

スタイリツシユからしたら、自分が捕食対象となっているなど気にも止めず、エビルバード亜種をどうにかして実験素材として手に入りたいと思っているらしい。

スタイリツシユは頬に手を当て、どのように手にいれようかしらと思考の海に潜り、スタイリツシユの側近三人は恐怖で慌てふためく中、主水は周りの喧騒全てを歯牙にもかけず、無表情を貫き、歩みを止めることもない。

また主水の周りには、ピリピリと張りつめた緊張感が漂っている。

その雰囲気は辺りに静寂をもたらす。

スタイリツシユの側近は勿論、宙に制止するエビルバード亜種ですら、その雰囲気気圧され、動きを止めている。

しかしこの間、主水の頭の中にあるのはただ一つのこと、敢えて無視をしているのではなく、周りに気を配る余裕がなく、気づいていないだけであった。

（俺のしたことは正しかったのか？）

必要最小限の犠牲にとどめ、スタイリツシユを救うという任務をこなしたことは間違いなく、正解ではある。

しかし、そんな一義的な答えを主水は求めているのではない。

セリユを信頼し、尊重をしたためであっても、置いてきてしまっ

たことは、間違いではなかったのかと：

思案に耽り、無意識に歩を進める主水に違和感を覚えたのか、エビルバード亜種がけたたましい咆哮をあげる。

その咆哮は空間を揺らす振動となり、辺り一面に襲い掛かる。

岩壁には亀裂が入り、崩れ落ち、細かい粒子となり、スタイリツシユの側近の耳が大きな女性は、

「イヤアアアアアア！私の耳があああああ！」

と断末魔をあげると、耳から大量の血液を流し、生き絶えた。

鼻と目も、鼻や瞳から血を流し、瀕死状態で亀裂が入った地面に体を横たえ痙攣している。

いち早くエビルバード亜種の動きを察知したスタイリツシユは思考の海から脱し、耳を押さえながら、主水の影に隠れていた。

「てめえは黙ってる！」

思考を邪魔された主水は、鯉口を切り一閃エビルバード亜種の咆哮を斬った。

咆哮を斬るといふ圧巻の離れ業にエビルバード亜種は一瞬戸惑うが、獣特有の凶暴さを発揮し宙を滑空し、鋭い嘴を向けて襲い掛かった。

主水は、右手に携えた刀を下段に構えながら、摺り足で向かい来るエビルバード亜種に向かって左斜め前に進む。すれ違い様に銀色の閃光が光ると、エビルバード亜種の首が、大量の血液を撒き散らしながら宙を舞った。

「あらあら…もつたいない…それにこの子達ももう無理そうね…」

スタイリツシユは首が飛び、絶命したエビルバード亜種と、倒れ動かなくなった三人の側近を見て愚痴を溢す。

「行くぞ…」

主水は何もなかったかのように、一声スタイリツシユに掛けると、変わらぬペースで歩を進めた。

フェイクマウンテンの登山口にたどり着くと、そこにはマスク越しながら、心配そうにキョロキョロしているボルスと、暇そうに、岩の上に座り、足をブラブラさせながらお菓子を食べるクロメの姿が。

「あつ主水君！Drは見つかつたみたいだね。タツミ君はいないみたいだけど……あれセリユーちゃんは？」

主水の姿を一目見て直ぐに走りよつてきたボルスがスタイリツシユを見て満足そうに息を吐いた後に、辺りを見回し、姿が見えないセリユーについて尋ねる。

「……………」

険しい顔をした二人の動きが止まり、一瞬の沈黙が場を支配する。その険しい表情と沈黙からボルスも察しがついたようで、先を促すことはなかつた。

しかし、そのまま流す訳にもいかず、主水は息を一つついた後に、「もうセリユーはいない」と口を開こうとした――

その時だった、

「遅れました。セリユー・ユビキタス&コロ帰還しました」

服は裂け、豊満な胸部を露出させ、血にまみれ酷い怪我を負いながらもそこには、いつもの笑顔を浮かべたセリユーが、コロと共に敬礼して立っていた。

第38話

今にも泣き出しそうな鉛色の空、一筋の陽光も通さない暗雲が空を覆っている。

今、主水、ウエイブ、クロメが街中にある一つの宿屋兼酒場を取り囲むように陣取り、鋭い視線を向けている。

取り囲んでいる宿屋は、物音一つせず、静まり返り、緊迫した雰囲気の流れている。

建物の内部からは何人かの気配、そして、二階の軒先には、身ぐるみを剥がれ、禪一丁で縄によってぐるぐる巻きにされた一人の男が、まるでてるてる坊主のように吊り下げられている。

「私はどうなっても構いません。中の人達を——ヒッツ!!」

吊るされた男は勇ましいことを言うてはいるが、室内から現れた、無機質な銀色の刃を首筋につけられたことにより、短い悲鳴をあげ、失神した。

かれこれ約一刻前

主水はボルスが黙々と書類仕事を片付ける横で、厚いファイルのページを一枚一枚に真剣に目を通していた。

厚いファイルには数多く寄せられた解決すべき依頼が、項目毎に載せられている。

「何か目につく仕事あった？」

書類仕事が一段落ついたので、ボルスが主水に尋ねてくる。

マスクで表情は伺えないが、口調から優しさと気遣いを感じさせる。

「これといった仕事はありませんね」

主水は笑顔で返す。

何故昼行灯の主水が、朝から熱心に仕事を探しているのか、これには理由があった。

あのスタイリッシュの一件以来、顔出しが出来ないナイトレイドに久しぶり顔を出そうと考えていたのだ。

ただ、つなぎによつて届いた情報によると、今ナイトレイドが陣取っている場所は、以前のような帝都近郊ではなく、帝都から南東に800キロに位置するマーズ高地に居を構えているというのだ。

そのため、纏まった休みを取ろうと思ったのだが、いくら主水であっても、何も功をたてずに有給を取るのは、気が引けたため、何かしらの仕事に貢献してからと考えていたのだ。

(そう簡単に手頃な仕事が見つかるはずもねえか…)

ボルスの隣に座り、湯気がたつ入れたての茶を啜っていると、突如扉が開かれた。

「誰か手を貸してください!」

焦った様子で飛び込んで来たのはウェイブであった。

「いったいどうしたんだ、そんなに焦つてよ」

「あ、主水さん。今帝都警備隊から手を貸してほしいという要請が入ったんです。どうも賊が人質を取って立て籠っている。さらに悪いことに、その賊の集団はかなりの使い手の集まりなようで、警備隊にも相当被害が出ているみたいで」

帝都警備隊という言葉が出ると、主水の表情が一瞬険しくなる。

すぐに戻すが、人の機微に敏感なボルスは、主水の一瞬の変化を見逃さなかった。

「そういえば、帝都警備隊は主水君やセリユーちゃんの前まで勤めていた所だったね。気になるのは当然だよ。ここは私に任せてくれていいから、助けに行つてあげて」

「すまない」

ボルスに感謝をし、ウェイブと、たまたまいエーガーズの会議室で待機していたクロメを伴い、現場に向かった。

主水、ウェイブ、クロメが現場につくと、物々しい雰囲気包まれ、立て籠っている宿屋を遠巻きに帝都警備隊が、蟻の子一匹這い出せないように、取り囲んでいた。

主水は情報を得るべく、その場の指揮官であるはずの警備隊長タカナを探すが、その場にはいず、仕方なく副隊長に聞くこととした。

「お久しぶりです副隊長」

「立派になったな中村さん。いや、今は俺達より身分が上だから、敬語を使わないといけないか」

「構いませんよ。状況が状況ですので積もる話は置いて、現状はどうなっていますか？」

主水の問い掛けに、副隊長は渋い表情を浮かべ、僅かに瞬巡した後、状況を話し出した。

「人質になっているのは宿屋の宿泊客、朝食を取りに来た客、それと……」

「それと？」

言いつらそうに口を濁す副隊長に主水が合いの手を入れて、先を言うように促す。

暫く、辺りを見回すと、回りの野次馬に聞こえないように、また申し訳なさそうに小さい声で話す。

「隊長のタカナ様です……」

「!!」

その一言に、主水、ウェイブは絶句する。

クロメはあまり気にはしていないようで、普段通りお菓子を食べている。

辺りにはポリポリというお菓子を食べる音だけが響く。

「タカナ隊長が……か」

「はい……立て籠り犯の要求を聞きに行った時に……」

主水は頭を抱えながらも、以前南町奉行所に勤めていた時、筆頭同心田中が人質になったことがあったな、とあの時のことが自然と思いつけられていた。

「分かった……で賊の要求と人数は？」

「要求は捕らえられている仲間と人質の交換です」

(ムリだな。帝国が認めるはずはねえし、それ以前に、ほとんどのやつがスタイリッシュの玩具になって原型を残してねえからな)

主水がそのように考え静かに黙ると、言葉を継いでウェイブが問い掛ける。

「では賊の人数、人質の人数、配置を分かる範囲でお願いします」

「はい、賊は7人、人質は10人です。分かる限りですが配置は――」

副隊長は宿屋の間取りの地図を用意し、説明を続ける。

「店の玄関に賊の見張りが2人、一階の一室に人質が5人と賊が3人、二階の一室に人質が5人と賊が2人です」

「うまく分散されてやがるな」

復帰した主水が書き込まれた間取りを見て、どうするかと唸る。

上司のエスデスであれば、人質になるような弱者など淘汰されて当然だと、正面突破し、いくら犠牲が出ても賊を皆殺しにするであろう。

しかし、主水は全くの逆、甘いと言われればそれまでだが、人質から誰も犠牲を出さずに賊を捕縛することを考えていた。

そして、その主水の考えにはウェイブも大いに賛同していた。

クロメは主水とウェイブの考えが理解できなかったらしいが、主水が

「人質に死人が出なかつたら菓子が好きだけ食わしてやる」

と約束したため、瞳を輝かせて、喜んで同意した。

「主水さんどうしましょう?」

間取りとにらみ合いを続け、頭を捻っていたウェイブが主水に尋ねてくる。

「どうやらウェイブは考えるのが苦手なようで、ギブアップしたようだ。」

「まだ情報が足りねえな。賊の武器、強さ、大雑把でなく正確な位置：これが分からねえと策がたてられねえ」

まだまだ情報が足りなかった。犠牲が出てもいいなら今の情報で十分だが、理想を現実にするためにはまだまだ不十分であった。

こんなときに身軽な情報屋がいたら：そんな弱気が現れかけた時。

「俺が情報を集めてやろうか」

背後から突然声がかげられた。

突然のことに主水、ウェイブ、クロメは振り返る。

各々に少々驚きの色が表れたが、皆は押し隠した。

後ろに現れた若い青年は、三人に気づかれることなく、その場に現

れたからだ。

頭を悩ませていたとはいえ、この三人に気づかれなかったことだけでも大変なインパクトがあった。

「おめえは？」

主水は探るような目付きで静かに問い掛ける。

「名前はいいじゃねえか。俺が調べてやるっていつてるんだよ」

全く臆することなく青年は答える。

見た目は若く、身のこなしが良さそうで、熱血漢溢れる青年。

普通にどこにもいそうな青年、しかし、主水はその青年から自分と同じような雰囲気、同じようなにおいを感じ取っていた。

「どうします主水さん？」

「このまま手をこまねいているわけにもいかねえしな。嘘をついているようには見えねえ。事態を動かす為に頼んでみるか」

主水とウェイブが背を向けて相談した後に、その青年に情報収集を頼むことにした。

現場で待機していると、鉛色の雲が覆う薄暗い空に、爆発音と共に、大きな一輪の花が開いた。

その大きな爆発音と辺りを照らす光に、警戒心が増していた賊達は、関心が火花が上がった東の空に向かう。

その時だった、一つの黒い影が西側の屋根に上がり、そのまま屋根裏にスルリと入っていった。

「上手くやったみたいですね」

「ああ」

二人は青年の動きに感心したように呟く。

このような市井にもまだこのような逸材が隠れていたことにも主水は驚いていた。

(やはり俺の勘は間違ってたな。多分こいつも俺らと同じだ。情報屋として雇いたいほどだ)

暫く静かに動きを見守っていると、屋根裏から例の青年が出てきて、スルリと地面に降りてくると、足音も気配もなく、主水達の元に

帰ってきた。

「お疲れ、どうだった？」

気さくに話掛けるウェイブに、少し戸惑いを見せるが、それも一瞬のことで、今得てきた情報を話す。

「店の玄関先にいるヤツは、2人とも飛び道具を持っていた。2人も銃だ」

「外の警戒のためか。間合いに入り込めばいけますね」

「ああ、そうだな」

主水はウェイブの発言に頷く。

「次は一階の一室だが、人質5人を囲むように3人が配置され、得物は金槌、斧、大剣だ。玄関先のやつと違ってかなりの猛者だぜ」

「重量級の武器か…重いから一階に配置されたんですかね」

「ウェイブは単純だね…」

返事しない主水に代わり、ポツリとクロメが溢し、ウェイブは落ち込む。

青年はそんなウェイブをスルーするかのよう続ける。

「二階は2人で人質を挟むように配置され、窓側にいるやつが剣、対面のやつは槍を装備していた。この2人も一階のヤツと同等の猛者だ」

「ありがとよ、お前のおかげで見えてきたぜ。これは礼だ」

近場に用意しておいた礼金を渡した。

「じゃありがたく頂いておくよ」

青年は爽やかな笑顔で礼金を受け取ると、踵を返し、帰ろうとする。

「名前か、住んでる所を教えてくださいねえか？」

主水は去り際の青年に無意識の内に尋ねていた。

主水は自分が尋ねていたことをあらためて認知してから、心の中では自分が情報屋を求めていることを理解した。

「帝都の外れで花火師をしている」

それだけ言うと、青年は去っていった。

第39話

ポツリポツリと、鉛色の空が涙を流し始める。

まだ小雨ではあるが、雨は警備隊員の体力を確実に奪っていく。

早急に解決しなくてはならなくなっていた。

「まずは屋根裏か床下に忍び込むために、外に注意を引くやつが必要だ。言い方はわりいが困るだ」

実行するのは主水、ウェイブ、クロメのため、主水はウェイブとクロメに視線を送る。

主水の頭の中ではこの役目を任せる人物は決まっていたおり、『困』という言葉を出せば、率先して名乗り出てくれるだろうと予想していた。

「俺がやります。グランシヤリオを使えば、銃なんて恐れることもありませんから！」

予想通りウェイブが拳を力強く握り、名乗り出た。

主水もウェイブの予想通りの動きに満足して、口元を緩め頷く。

「ウェイブ頼んだぞ」

「はい任せてください」

「大丈夫かな……」

あまりの張り切りぶりに、クロメは心配そうに呟いた。これについては主水も同じだが、ウェイブが未だにイエーガーズの中の失敗が目立つばかりで、一方全くと言っていい程活躍していなかったことがその最たる理由である。

実力はエスデスできえ認める程で、申し分ないのだが。なにぶん生かせていないのだ。

「次は俺とクロメが一階と二階どちらかに行くかだが」

敵の配置から考えると、賊が三人いる方に主水が行くべきである。

確かにクロメのスピードはイエーガーズ内でも屈指のものだ。しかしながら、それに反して、小柄な為、一撃一撃の威力は軽く、重量級の武器を扱う豪傑を、一撃で戦闘不能にするには向かないと考えていた。

そう考えると、どのような相手であつても、打ち込む場所によれば、相手を一撃で行動不能に持ち込める帝具アレスターを持つ自分が、三人を相手にすべきだと、主水は考えていた。

「私は一階に行く」

クロメの言葉は主水の意思に反していた。

「勝算は？」

表情は普段とは変わらず無表情だが、声からは自信を感じさせる発言だったため、クロメなりに勝算があるのだと理解し、肯定も否定もせず、主水は一言で聞き返す。

主水の問いにクロメは行動で答えるように、返事はせずに、徐に腰に挿した日本刀の帝具へ死者行軍へ八房を抜く。

すると、八房の刀身が怪しい光を放った刹那、クロメの両側に突如二人の男が現れる。

二人の男の、片方はスキンヘッドでサングラスをかけ、白いコートを着た屈強な男。

もう片方は黒いローブを纏い、気味の悪いマスクをかぶった男である。

ただし、どちらも共通するのは、生気のない死んだ魚のような瞳をしているという所だ。

「帝具へ死者行軍へ八房か：確か遣い手が殺した相手を自分の傀儡として操れる帝具だったか……」

「うん、そう。サングラスをかけたほうはウォール。有名なガードマンをやつてただけど、標的を守つてたから殺したの。黒いローブを纏っているのはヘンター。バン族の生き残りで、トリツキーな動きを得意とする、殺すのが一番苦労した自慢の一品なんだ」

自慢げに説明するクロメに、不快感を滲ませながら聞くウェイブ、（まあ仕方ねえな。人によつちやあ死者に対する冒涇と捉えることの方が多からな。ただ一方で、魂がなくても器だけでもいいからずつと寄り添っていたと思うヤツもいるのも確かだ。人それぞれでこれほど評価の変わる帝具もねえだろうな）

目の前で帝具八房の力を見て、主水はしみじみと考えていた。

「いい組み合わせだな。三人で一氣に制圧する。もし出来なくとも、ウォールで人質を守らせ、おめえとヘンターで残りを狩る。一階は任せませ」

「うん。お菓子の件忘れないでね」

「ああ……」

主水の答えに満足すると、満面の笑顔を浮かべて準備にかかった。

雨が本降りの中、グランシヤリオを纏い準備万端なウェイブが行ってきます！」と気合い十分に宿屋の表に歩いていく。

「おい、立て籠り犯！無駄な抵抗は止めて出てこい！」

ビシツと指を差し、告げたその時だった。

間髪入れずに、幾多の弾丸が、宿屋の玄関口から放たれ弾幕となりウェイブを襲う。

しかし、帝具グランシヤリオに近代兵器が効くはずもない。

ある弾丸は弾かれ、他の弾丸はグランシヤリオにあたった瞬間砕け散ったりする。

「クロメ行くぞ」

「うん」

ウェイブが囷となっている間に、主水とクロメそしてクロメの影となりウォールとヘンターが続き、宿屋を回り込み、屋根を伝い、クロメは一階の、主水は二階の天井裏に入り込んだ。

屋根裏は薄暗く、埃っぽく、蜘蛛の巣が張っているなど、進むだけでも苦勞する場所であった。

(よくこんな所をあの手時間で行き来して情報を集めてきたな)

纏わりつく蜘蛛の巣を払い辟易としながら、主水は、青年の手際の良さに改めて感心した。

音をたてずに慎重に進むと、室内の光が一筋の明かりとなり、主水はそこから中を覗きこむ。

青年が言っていたように、五人の人質と、それを挟むように二人の男がいる。

「おい、その女。なかなかいい女だな。こつち来て酌しろよ」

槍を床に置き、酒を呑んでいる男が、舌なめずりをしながら、一人の少女に絡み始めた。

少女は恐怖に震え、動くことはおろか、返事をすることも儘ならな
いでいる。

「聞こえねえのか！こつちに来て酌しろつつつてんだよ!!」

声を荒げた男は、足をふらつかせながら少女に近づくと、髪を掴み
引き摺っていく。

「娘に乱暴はやめてください」

誰もが恐怖で黙認するなか、震えながらも、その少女の父親らしき
初老の男性が懇願する。他の客は男を刺激したくないため、何も言わ
ず黙って俯いている。

「アアアッ！俺にたてつく気がっ！」

男は丸太のような腕で初老の男を殴り飛ばす。

吹き飛んだ初老の男は壁に叩き付けられ動かなくなる。客は青ざ
め震えるのみで初老の男性に近寄る気配すらない。

「お父さん！」

「興が冷めた。酒はいい、俺の相手をしろ！」

「誰か助けてー！」

男はまるで狂った獣のように少女に馬乗りになると、涎を滴ながら
服を引き裂いていく。しかし、客は誰も止めには入らない。それどこ
ろか、視線を反らしている。

誰も関わりたくないのは、自分に矛先が向かうのを恐れるためだ。

このような非常時に一番大切なのは自分の身のみ、他人は二の次に
なる。

「いい体してやが——」

「まだ産毛しか生えてねえような子供に手え出してんじゃねえ！」

男の眉間を、黄金の光が打ち抜くと同時に男は意識を失い、対面の
窓を破り、外に吹き飛んでいく。

「おっと」

吹き飛んだ男の対面では、窓辺の男が振り抜いた剣を、鞘から半身
抜いた刀で防ぐ。

「俺の望んだ相手が来てくれたな…感謝する…」

刀と剣が交錯し火花を散らす中、男は嬉しそうにポツリと呟いた。天井裏で隙を伺っていた主水が、槍を持った男に大きな隙が生じた時に、天井を踏み抜いて突入したのだ。

一方一階では、二階の喧騒で三人の賊の注意が上にそれたことに乗じて、突入した。

一番最初に舞い降りたクロメが大剣を持つ賊の腕を切り落とし、ウォールの銚が心臓を穿つ。見事なコンビネーションで一人を葬る。ヘンターはトリツキーな動きで斧を持つ男の背を取り、鉈のような刃物で頸動脈を切り裂いた。

まるで噴水のように鮮血を撒き散らし、男は生き絶える。

僅か一瞬の隙が賊二人の運命を決めた。

しかし、言い換えると、クロメ達は二人しか仕留められなかったのだ。

轟音をあげながら振り抜かれた巨大な金槌がクロメ達三人を容赦なく襲う。

咄嗟に反応したウォールが矢面に立ち、盾で攻撃を防ぐが威力が強すぎ、殺しきれず、クロメ、ヘンターもろとも、玄関の二人の賊をも巻き込んで外に吹き飛んだ。

「クロメ大丈夫か？」

「う、うん…ありがとう…」

吹き飛ばされたクロメは外で囷になっていたウェイブに抱き止められていた。

僅かに頬を染めて。

「そろそろ下ろして…」

「あ、悪い」

ウェイブはどぎまぎしながら下ろす、しかし、敵はそのようないい雰囲気など気にすることなく攻撃を仕掛けてきた。

「危ない」

眼前に迫る金槌をウェイブが寸での所で受け止める。

「ぐっ……」

グランシャリオを纏っているウェイブをもってしても、その衝撃は凄まじく、足が地面に沈み、足を起点に亀裂が走る。

「そのまま受け止めてて」

クロメが男の首を落とそうと横に一閃、しかし、男は躊躇することなく金槌を放し、身を屈めてかわすと、ウェイブに足払いをし、体勢が崩れたウェイブの腕を取り、そのままジャイアントスイング。

宙にいるクロメをも巻き込もうと試みたが、守ることに関しては最強のウォールの盾によつて守られ、ウェイブは地面をバウンドして家屋の壁に叩き付けられた。

「チツ、ちまちま籠城なんてしないでよお、コイツらを皆殺しにするのが早いつていう俺の考えが一番だったな」

男はウェイブが落とした金槌を広いながら、八房を構えるクロメと、立ち上がったウェイブに視線を向ける。

「ウェイブは手を出さないで」

クロメはウォールとヘンターを解除する。

二人に配っていた集中力を一点にすることにより、戦闘力を向上させる。

相手が多人数であれば、集中力を分散させても、手勢を増やす方が良いが、一対一であれば、集中力を分散させずに戦いたいと考えた。

また、自分一人で戦いを楽しみたいという戦闘狂的な考えもあったのだが。

クロメは低い体勢から地を蹴り、左右にステップを踏みながら男に向かう。

「喰らえやー」

金槌がクロメを捕らえることはなく、爆音のような轟音をたて、地面にクレーターを作る。

「遅いよ」

既に背後を取っていたクロメが八房を振り下ろす。

「えっ!?!」

クロメに驚きの表情が浮かぶ、八房が鋼のような筋肉によって、首

の半ばで止まったのだ。

驚きにより出来た隙を見逃すほど男は甘くなかった。

クロメを振り払い、金槌を振るう。

宙に払われたクロメは金槌を避ける術も防ぐ術もない。

「クロメ!!」

「ガハッ!」

金槌がクロメに降り注ぐ前に、ウェイブがクロメと男の間に入り、渾身の一撃を打ち込んだ。

ウェイブの拳は男を打ち抜き、男を葬った。

「どうしてウェイブ?」

「助けて当然だろ、仲間なんだからな」

グランシヤリオを解いたウェイブは爽やかな笑顔をクロメに向ける。

クロメは僅かに頬を染めると、

「ウェイブのくせに……」

言葉では反発するが、顔を背けると、嬉しそうに微笑みを浮かべた。

第40話

拮抗する刃と刃が軋み、ギシギシと摩擦音を奏でる。

「まるで俺のことを知ってるような物言いだな」

「当然だろ。お前に会うのがここに来た目的なのだからな」

男は言うや否や剣に力を込め、拮抗状態から脱した。

主水は、人質を庇うように前に出て、横目で人質に逃げるように合図を送る。

人質は蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い、また先ほど襲われていた少女は隣室まで吹き飛ばされ、動かなくなっている父親に駆け寄り、手当てを始めた。

「さあ俺とお前だけだ。お前の正体を話してもらおうぞ」

「これを見れば分かってるだろう」

男はそう言うのと、流れるような流麗な動作で、剣を大上段に、肩に担ぐように構える。

次の瞬間、

「色即是空」

男が呟いた言葉が主水の耳に届いた時には、主水の頬を温かい液体が流れる感触を覚えた。

主水は剣での一撃を受けたことに対する驚きよりも、その一連の動作に驚きを覚えていた。

（この世界でお目にかかるとはな…）

「………たいした腕だな。その腕ならさぞかし囚人の首を落としてきたんだろうな」

男の剣を大上段に、肩に担ぐように構え、引き斬るように斬りつけ、同時に「色即是空」と唱えるのは、首斬り役人が斬首するときにする一連の動作であった。

まさかこの世界にも、江戸と同様の斬首の基本動作があったということに、驚きを覚えたのだ。

「軽い挨拶代わりだ。これで分かったようだな。お前の様相がこの帝都のものではなく、俺の故郷の東方のものだったからこの挨拶を試し

てみたんだが。俺の勘もたいしたもんだ」

男は微かに口元を緩める。

「そんなことあどうでもいい。てめえはいつたい何もんなんだ」

たんたんと話す男に焦れたように主水は少々声を荒げて問いかける。

「ああ、俺の正体か。俺は元首斬り役人シユザン、以前殺されたザンクの生前の同僚兼友人だ」

何かを懐かしむように遠い目で話す。

以前の公での公表ではセリユーが捕らえたとなっているが、実際は主水が捕縛し、雪国でアカメが葬った首斬りザンク。

どのような外道であっても、生きていて、誰とも繋がりが無い者などいない。

現に主水の目の前にも殺されたことを悲しみ、復讐に來た者が現れたのだ。

主水が口を開こうとしたのを、予期し先読みするように話し出す。

「お前が捕らえたというのはザンクに聞いた。そしてお前以外の者に殺されたということも噂で聞いた」

「じゃあ俺を狙うのはお門違いじゃねえのか」

「ああ、そう思うかもな。だが違う。ザンクは雪国で誰かに殺される前にすでに死んでたんだよ。出所した時点で、人間の尊厳など無いままに人体改造をされたことになってな。ザンクは強くなったと喜んでいたが、俺にとつちや生きていても、死んだも同然だ」

シユザンは憎々しげに怒りを滲ませて吐き捨てた。

生前はザンクと懇意にしていたのが良く伝わる話し方だ。

「故に俺はやつの墓の前で誓ったんだ。捕縛したやつ、改造という名の死を与えたやつを殺すと」

完全な逆恨み。しかし、稀にだが、このような復讐をしようと主水に向かつてきた者も今までにもいた。

故に動じることもない。

「そうか…まあ俺もおめえを捕らえるのが今回の任務だ。相手してやるぜ」

主水の眼光がより鋭く、研ぎ澄まされたものへと変わる。それに呼応するかの如く、シユザンは辺りが揺らぐほどの殺気を解き放つ。今まで冷静に話すために抑え込んでいたのだろう。

隣室で怪我をしている父親の看病をしている少女がその殺気に当てられ、失神した。

一般人が間近で受ければ、命にも危険が迫るほどの殺人的な殺気。シユザンはゆらりと剣を肩に担ぐと、首斬り特有の構えをとる。

一太刀で首だけでなく、体をも容易く両断することができる必殺の一撃。

(この一太刀で決めるつもりか)

主水も右手で腰に挿した帝具アレスターを抜き、晴眼に構える。

室内に重い静寂が訪れる。気を抜いたら押し潰されそうな程の重い静寂。唯一響く音は、外で降る雨音が奏でる音のみである。

かなりの時間が経過したのか、はたまた全く時間が経過していないのか、もはや二人のせめぎあいの中では時さえも、固唾を飲み見守るという、あつてないようなものである。

主水もシユザンも全く微動だにせず、射抜くような鋭い視線を投げ掛ける。

僅かな動きも見逃さないように、まばたきすらせず一挙手一投足を睨み付け。

僅かな遅れが命取りとなる、主水もシユザンもお互いの力量を感じ取り、集中力を途切れさせることはない。

軒先に伝う雨の滴が窓際の欄干を打ち、弾け、音をたてる。

刹那、二人が動いた。

『降り下ろされる太刀の下は地獄だが、踏み込めば極楽となる』

十手術での教えに従い、主水は一気に踏み込み、眉間を打ち抜くように鋭い突きを繰り出し、シユザンは主水を頭から縦に両断すべく剣を降り下ろす。

先に相手に得物が触れた方が勝機を得る。

しかし、共にあと僅かな位置でお互いの得物が止まる。

シユザンの剣はアレスターの鉤口で動きが止まっている。

「十手か…懐かしい物を見たもんだ…」

「知ってたか。じゃあこういう使い方をするってえのも知ってるんだろうな」

主水の口元がつり上がると、アレスターを返す、それと共に舞うシユザンの剣。

(手応えがねえ…)

十手を返す前にシユザンは先を読み、剣を手放していた。

即座にシユザンは腰に挿している二本挿しのもう一振りの脇差しを抜き、横風ぎに放つ。

主水はアレスターを逆手に持ち、床に突き立て剣を止める。

主水は左足を一步前に出し、左の肩口を相手に向け、鯉口に当てた左手の親指で刀の鐔を弾く。

鞘を走る刀は勢い良く、まるで弾丸のように飛び出し、刀の束がシユザンの鳩尾を打つ。

「うぐっつ!?!」

鳩尾を突かれたため呼吸が一瞬止まり、シユザンの体が揺らぐ。

「刀にはこんな使い方もあるんだよ」

力が弱まった僅かな隙を見逃さず、アレスターに接する脇差しを払いのけ、そのまま逆手で振るい、衝撃音を残し頭部を薙いだ。

「すまないザンク…俺も勝てなかったようだ…」

瞳から怪しく光る殺気が消えると、シユザンは床に倒れこんだ。

「手強い相手だったな…」

主水は床に伏せたシユザンを見て、僅かに瞬巡する。

このまま生きたまま捕縛すれば、十中八九スタイリツシュの改造を受けられることになると…

ならばここで命を絶つべきかと。

(いや、俺の仕事はここまでだ…)

仕事人は起こる悲劇を未然に防ぐことはしない。

起こってしまった最悪の結果に対して依頼され、関わりをもつただだ。

気を入れ直すように主水は窓を開けると、すでに雨は止み、雲の合

る。

主水は、この世界の女性はとんでもない大食漢であることを、身を持ってその一件と、ナイトレイドでの食事から知った。

そして、その大食漢の筆頭に位置するアカメの妹ということから、懐に危険を感じ、デザートの食べ放題の店を選びやって来た。

故に、いくらクロメが食べようとも、主水には被害はなく、逆に店主は大損という運びになったのだ。

(今考えりゃあレオーネの一件は安い勉強量だったな)

主水はしみじみと積み重ねられ、うず高く伸びる空いた皿を眺めつつ、考えていた。

そんな主水を後目に、店側の悲劇は制限時間が終わるまで続いたのだった。

第41話

帝都から200里(800km)、危険種が多く蔓延る、秘境マージ高地に主水はやって来ていた。

(たった一日でここまでやってこれたのは感謝しねえとな)

約一日前、主水は犠牲者を一人もださず、無事人質事件を解決した。しかし、一番大変だったのは、事件のあらましを書き提出する調書であった。

ウェイブ、クロメの功績については、事実を書けば良かったのだが、自分の欄には力を隠すため、事実をそのまま書くわけにはいかなかった。故に、頭を絞った結果、侵入した天井を誤って踏み抜き、犯人の上に落下、そして運良く捕縛と書いて提出した。

事実を知っている人質の数人には話を合わせてもらおうという辻褃合わせも入念にしてだ。

実際に主水の戦いを見ている者がいないために出来る荒業である。

ただ、提出した調書に目を通したエスデスが意味ありげに笑っていたのには肝が冷えたが。

そして、苦労した甲斐あって、無事に約一週間の有給を得ることができた。

しかし、次に訪れた問題は、帝都から臨時のナイトレイドのアジトまで200里の距離があること。

それが主水を悩ましていた。

歩いていくとなれば、途方もない日数がかかる。馬を使っても、一週間では行き帰りが出来ないことが想定されたのだ。

で、いつものように、裏の世界にはなにかしら便利なものがあるだろうと、ある組の知り合いのフリーにダメ元で相談してみると、その悩みを解決に導いてくれる人物を知っているというので、紹介してもらった。

その人物は、老齢ながら、瞳には依然として力強い光を讃える人物であった。

若い頃は、大小の蟹の危険種を使い、裏の仕事を行い、現役を引退した今は、娘と共に、危険種の蟹を使った運び屋を行っている人物である。

中々気さくな人物で、同じ裏家業に身を置く者として、すぐに打ち解けた主水は、高速で移動する大きな蟹を貸してもらい、その蟹の背に乗り、揺られながらやって来たのだ。

「ここまでありがとな」

労りの言葉を主水が蟹にかけると、巨大な鋏を持ち上げ分かったというような素振りを見せ、帝都の主の元に戻っていった。

「よし行くか」

主水がアジトと言うからには隠されているのだろうかと考え、見落としないように、目を凝らしながら歩くと、秘境という名には不釣り合いな物が堂々と建っていた。

「分かりやすいのはいいが、目立つな」

自然のまっただ中に人が建てた木造の大きな家が建っていたのだ。

「ここしかねえな…」

主水は家の中に入っていく。

「お帰り主水」

扉を開けた玄関先にエプロンをつけたアカメが立っていた。

「おお、ただいま…ってなんで待ち構えたようにここにいるんだ？」

嬉しい反面、アジトに行くという繋ぎさえ出していないのに何故分かったんだ？という疑問。

「ラバックが張った糸にかかったから分かったんだ」

「そうか」

合点が言ったと返事をする、微かに微笑みを浮かべたアカメに、ナジエンダの元に通された。

「ボス、主水が来ました」

扉の外でアカメが中にいるだろうナジエンダに声をかけると、

「分かった。中に入っているぞ」

という返事があり、アカメと共に主水も入っていった。

「久しぶりだな主水」

「ああ、すげえ所に居を構えたもんだな」

主水が疲れたような表情で話すと、ナジエンダはそうだろうという感じで、してやったりといった感じで笑った。

「今日は来てくれてちようど良かった。新しいメンバーをお前にも紹介しないといけないからな」

(そっぴいあセリユーと戦っていた男が新メンバーだろうな…)

以前の苦い思い出が蘇るが、主水は全く顔には出さず、頼むとナジエンダに返した。

「じゃあ皆を呼んでくるよ」

アカメは外に走って行った。

「で、主水、顔見せもあるだろうが、今日来た本当の理由は何なんだ？」
ナジエンダは探るような目付きで主水に尋ねる。

「ああ、裏家業の人間として説教をしてやらねえといけねえやつがいるからな」

主水は獰猛な笑みを浮かべる。見る人が見れば恐ろしさを感じるが、そこは馴れたナジエンダ、故に、

「お手柔らかにな」

とナジエンダも微かに笑みを浮かべながら返した。

しばらく主水がナジエンダと雑談を交わしていると、部屋の外がざわざわと騒がしくなってくる。

「皆が集まり出したようだな。入ってこい」

ナジエンダが部屋の外にいるだろうメンバーに声をかける。

すると扉が開かれ、懐かしい面々が。

ただ、ラバツクやレオーネ、タツミは戦々恐々とした面持ちをしている。

主水がここに来た理由を察していたのだ。

しかしながら、希望は捨てずに、違ってくれと必死に願っているの
だろう。

(少し灸を据えてやるからな)

主水が鋭い視線を三人に飛ばすと、ビクツとした後に、表情が曇っ

ていった。

「皆集まったな。今回久しぶりに主水が来たため、まだ紹介していなかった新メンバーを紹介したい。スサノオ、チエルシー前に出てくれ」

（スサノオ：日本の三神の内の一人。狂暴でヤマタノオロチを倒した話もあったな。名前通りか否か楽しみでもあるな）

以前主水は一度スサノオを見てはいるのだが、状況が緊迫していた上に、あの時はセリユーのことしか考えていなかった為に、全く主水の記憶には残っていなかった。

メンバーの中から大柄の男スサノオと、飴をくわえた一人の女性チエルシーが進み出る。

突如、スサノオが厳しい表情で主水に近づく。

大柄故に、主水は見上げるような感じだ。

（中々の威圧感だ。それにしてもなんのつもりだ）

僅かに身構えるが、周りのメンバーは、またかといった感じで笑みを浮かべている。

徐に男は手を主水に伸ばす。

「衽が乱れている」

呆然とする主水と几帳面に着流しの乱れを直すスサノオ。

主水は気が抜け、皆は笑っていた。

「スサノオは几帳面な所があつてな。また戦闘も家事も万能な私の帝具だ」

ナジエンダは胸を張ってまるで自分のことのように、誇らしげに語る。

「そ、そうか、よろしくな」

「ああ」

主水とスサノオは握手を交わした。

見た目はかなりの堅物のように見えるが、皆はスサノオのことを頼りにしているように感じたため、付き合いやすい男なのかもしれないと主水は感じていた。

そうこうしていると、チエルシーが近づいてくる。

(またもや女か。世界の違いを感じるな)

主水が組んだ幾多の仕事人仲間にも確かに女性はいた。しかし、居ても一人ないし二人、男より女性の方が多くことに、若干の違和感を感じていた。

「私を女だと思つて侮つたんじゃない？おじさん」

場が静まりかえる。

「そう感じたか？」

主水はおじさんと呼ばれたことなど歯牙にも掛けず、返事を返す。

「いいの主水、おじさん呼ばわりされて。怒りなさいよー」

マインが主水に詰め寄る。どうやらマインはチエルシーを気に入らなく、主水をけしかけたいのだろう。

「まあ年からいつたらおじさんだしな。この中じゃナジエンダの次に高齢だからな」

場が凍りつき、ナジエンダの瞳に殺意の炎が灯る。

主水はすっかり忘れていた、ナジエンダがその貫禄からは感じられないが、20代中盤であることを。そして、年のことは禁句であることを。

ナジエンダの義手が、ギシギシと軋む音を立てる。

(殺気!!)

主水がおぞましい殺気を感じ取った時には、主水は頭に大きなたんこぶが出来上がり、床に伏していた。

「私は20代中盤だ!!」

ナジエンダは鬼の形相で吐き捨て、皆は震撼していた。

「主水、女性に年を聞いたらだめ」

「……………」

あまりの攻撃力にさすがの主水もアカメに返事をするこゝささえ出来なかった。

しばらく経ち、主水は頭に手を当てて立ち上がった。

「エスデスよりおぞましい殺気だったぜ……まあいい、悪かったなチエルシー。俺は女だと侮つたつもりはねえが、そう感じさせちまったならな。だがな、見りやあ分かる。お前がかなりの腕だつてえのはな。

しかも裏家業に身を置くものとしてしつかりわきまえていることもな

「そ、そう。それならいいや。よろしくね」

「ああ」

スサノオの時と同様に握手をしたのちに、主水は振り向き、

「じゃあ次は、裏家業としての心得が足りねえやつと話をしねえとな」

足音をたてずに逃げようとしているタツミ、ラバツク、レオーネを主水の視線が射抜く。

その圧力故に足が止まる。

「体に教え込んでやる」

主水は三人の首根っこを掴み、引き摺り、外に出ていった。

「失礼なやつだが。どうだチエルシー。主水は？」

「皆と違うね。雰囲気や潜ってきた修羅場の数がね。皆と馴染んでいるように見えてもどこか違う場所にいる」

冷静に感じたままを話すと、少し間を置き、

「だけど、なんか安心感があるかな」

チエルシーは何かを思い出しながら呟いた。寂しそうな表情で。

「そうか…」

チエルシーの過去を慮り、それ以上は追及しなかった。

「どうしてこうなっているか分かっているな」

「はい…」

陽射しが強い炎天下で、タツミ、ラバツク、レオーネは主水の前に正座して縮こまっている。

一様に神妙な顔つきで。

「前までなら問答無用で鉄拳制裁だが、それじゃあ進歩がねえ」

鉄拳制裁という言葉にビクツと三人はしたが、後に続く言葉を聞き、僅かに希望が見えた。

「試合方式で三人まとめてあんなアホなことをしねえように鍛え直してやる」

「主水さんに鍛えてもらえる」

「三人でかかればなんとかなるかもな」

「俺は後衛だ。被害は少なく済むな」

三人は楽観視していた。

地獄が訪れるとも知らず。

30分後

「レオーネ直線的過ぎるぞー！」

「うわっ！」

規格外の速さで打ち込まれる木刀。

レオーネは打ち込まれた腹を機転にしてくの字に折れ吹き飛んび、何回か地面をバウンドし、倒れた。

「少しは手加減してよね」

レオーネは倒れながら呟いた。

「どうした。かかって来ねえのか」

主水の怒声が轟く。

「容赦ないわね……」

「少し厳し過ぎると思う……」

マインとシェーレが鬼と化した主水にしごかれ、地面に伏している三人を見て、不憫に感じていた。

「あれぐらいされて当然よ。三人はそれだけのことをした。仲間を危険に曝す、へたをすれば全滅するようなことをね」

ナジエンダと共にやってきたチエルシーが、感慨の籠った口調で静かに話す。

そのいつもと違った雰囲気、マインもシェーレも黙ってしまふ。

「まだまだ。行きますー！」

木刀を杖として、フラフラになりながらタツミは立ち上がると、走り出した。

「あくあ、寝てりやあ楽なのにな。先輩として情けない姿は見せられないっての」

タツミの姿に触発されたのか、悪態をつきながらラバックも立ち上がった。

「俺が旦那の動きを止める。そこでお前は一発入れる。このまま無傷で終わらせるなよ」

ラバックは吠えると、三味線の弦を主水にめがけて飛ばす。

弦は主水の木刀に巻き付き、動きを止めた。

(三味線屋を思い出すな。だがそこまでは至ってねえ)

主水は木刀を立て引いた後、地面に平行に構える。

「やばっ外された」

ラバックは主水が引つ張ったことに対し、引き返した所で、木刀を平行にさせられたために、弦を外されたのだ。

「入れええええ!!」

すでに間合いに入っていたタツミの木刀が、主水に降り下ろされる。

「惜しかったな」

タツミの木刀が空を切る。

「えっ!？」

幻影のように姿が消え、刹那、背後に現れた主水はタツミの背中に一撃を入れ、試合という名の制裁は終了した。

一瞥すると、主水は踵を返し、歩き出す。

そして、三人に駆け寄るアカメとシエーレとのすれ違い様に

「鞭はくれといた。これで懲りただろ。あとは任せませ」

と囁くと、そのまま去っていった。

第42話

雲一つない快晴の青空。照りつける太陽は、恵みの光を燦々と降らせ続ける。

そんな中で、汗だくで息をきらせたタツミと、涼しい顔をして、息一つきらしていない主水が、剣（木刀）を交えていた。

「はあっ！」

「踏み込みが甘い！」

突き出される木刀を軽々と主水が払うと、タツミの体勢が崩れる。

「王手だ」

木刀の鋒がタツミの喉元に当てられる。

「参りました」

「強くはなっているが、まだまだ甘いな」

「主水さんが強すぎるんですよ」

主水がナイトレイドに滞在する間は、今は亡きブライトに代わりタツミの稽古に付き合っていた。

普段はスサノオに見てもらっているらしいが、剣術であれば、と主水が面倒を見ていた。

「次は少しアレの見極めに付き合ってくれるか？」

「はい任せてください」

主水の問い掛けに、心地よい返事を返すタツミ。

自然と主水の口元にも笑みが浮かび、腰に挿す帝具アレスターを抜こうと、右手を柄に添えた時だった。

「主水、タツミ、新たな仕事が入った集まってくれ」

突如現れたアカメにより、新たな仕事が寄せられたことを告げられる。

「しょうがねえな。行くか」

「そうですね」

主水とタツミはアカメに続いて臨時のアジトに戻って行った。

主水とタツミがナジエンダの部屋に着くと既に、チエルシー以外の皆が集まっている。

「遅いわよ主水、タツミ」

「すまねえな。ついつい力がはいつちまってるな」

マインの文句に慣れた感じで飄々と主水が返す。

嫁や姑、はたまた上司の愚痴りに比べたらマインの文句を流すことなど、主水にとつては雑作もないことだった。

「集まったようだな」

ナジエンダの声に、部屋の雰囲気引き締まりる。

「帝都での仕事が届いた。遠出になるが、出向いて仕事をする事になる。レオーネ仕事について説明を頼む」

「はい。依頼を受けたのは一昨日の夜だ」

◆◆◆◆◆

時は丑三つ時、草木も眠り、雲によつて月さえ隠され、真の闇が支配するスラム街の外れの辻堂で、一人の少年が、頭を下げていた。

「依頼を聞こう」

突如辺りに響いた声に驚き、躊躇しながらも、少年は意を決したように話始めた。

「殺して欲しい人物がいます」

「…理由を聞こう」

「はい俺の村では、年々厳しくなる税金の取り立てに困り。知り合いに頼んで村の娘を奉公に出すことにしました。その内の一人から聞いた話です。」

揺れる馬車の中に三人の少女が乗っていた。

一人は泣き腫らしたのか充血した目で、元気なく俯き、一人はその少女を励まし、一人は足をパタパタさせながら、暢気に外の風景を見つめるといった感じで三者三様といった所だ。

「エアたった三年だよ。頑張ろ」

黒髪のフードを被った少女が、先ほどまで俯いて落ち込んでいたセミロングの髪の少女を慰めている。共にかなりの美少女である。

「う、うん…皆のためだもんね。じゃあ奉公先の旦那様ってどんな人だろうねルナ？」

奉公先の旦那様という人が高給で三人を雇ってくれたとは聞いてはいたが、どのような人物かは聞かされていなかった。

「多分エロ親父だと思う。夜の相手を求められるかも」

フードを被ったルナは冷めた表情で語る。

「えー！！」

「大丈夫だエア。そうなら私が壊して磨り潰してやる！」

活発そうな少女が拳を握り締めて、笑顔を浮かべる。

「ダメだよファル。狂暴なことしたら」

三人は帝都での生活を不安に思いながら馬車に揺られていた。

「す、凄い!!」

三人は馬車から降りると驚きで、嘆息を溢した。今まで住んでいた村とは全てのスケールが違った。

村では平屋が基本だが、帝都では、どれも見上げる程の高さを持ち、先進的な見た目をしており、三人はその光景に魅了されていた。

そんな中、突然三人に掛けられる声。

「こんにちは」

街並みに見とれていた三人が我に返り、声を掛けられた方へ振り向くと、良い身なりをし、誰もが見惚れるような、爽やかな笑顔をたたえた美青年が、手を上げて歩み寄って来る。

三人のもとに歩み寄り、またその笑顔は三人に向けられてはいたが、三人は皆一様に首を傾げる。彼が面識の無い人物の為だ。

故に、警戒心の強いルナが、探るような視線で見つめていると。

「はじめまして、僕が君達の旦那様になるバツクだよーっ」

一転して気さくに話しかけるバツクと名乗る人物。

そこには、三人が想定していた脂ぎったエロオヤジとは真反対の人物がいた。

若く、清潔感があり、誠実そうな好人物。

警戒心の強いルナ以外の二人は内心安心していた。

この人なら三年間頑張れそうだと。

すると、バツクが三人に視線を巡らし、頷く。

「これから帝都で暮らすことになるから、服などを変えた方がいいね」
バックは懐から分厚い財布を取り出す。

その財布をとつても、見事な細工が施され、丁寧な作りが見て取れる確かな一品であり、その羽振りの良さが垣間見れる。

バックは財布から数枚の金貨を取り出すと三人に分け隔てなく配る。

今まで見たこともない程の大金に呆気に取られ、呆然と立ち尽くす三人に、バックは再び笑顔を向け。

「さあ、このお金で服を買いにいこう。これが初めての君達の仕事だ。これからはセンスも重要になるからね」

笑顔で提案の要旨を告げる。

三人の少女は田舎暮らしの為、ショッピングなどしたことがなかった。

しかし、女性という本質は変わることはない。

初めてのショッピングを楽しみ充実した時間を過ごす。

この先に地獄が待ち受けるとも知らずに。

三人は見違える姿でバックの元に戻ってきた。

元々素材が良かった三人のため、身につける物が変わった瞬間、誰もが振り返るほどのものとなっていた。

「綺麗になったね。じゃあ行こうか」

バックは変わらない笑顔を浮かべる。

三人は気づくことはなかった。

その爽やかに感じる笑顔の奥に、隠された今までのものと違いどす黒く腐ったものが存在することを…

「すいーいー」

帝都に来て、何度同じフレーズを使っただろうか。

聞くものが聞けば、バカの一つ覚えだと言うだろうが、そんなことも気にならないほどの驚きを再び感じていた。

開かれた門から中に入る馬車。

馬車の窓の外には、バラなどが咲き乱れる巨大な庭園が広がり、過

ぎぐる景色の中には見事な彫像が据えられた噴水が、その更に先には、遠近法が狂ったのかと錯覚するほどの立派で豪華な屋敷が存在していた。

馬車が目的地に着くと、屋敷の中からやって来た強面の黒服の従者によって馬車のドアが開けられ、屋敷の中の広間に通された。

「中もすごいね！」

「お給金高そうね」

素直に感想を漏らすエアと、辺りを値踏みし、期待を口にするファル。

シヨツピングで上がったテンションそのままの様相。

ルナもあまり表情は変わらないが、幾分か嬉しそうにしている。

「楽しそうで何よりだ」

バックが変わらぬ笑顔で現れる。

しかしながら、何故か不穏な空気を醸し出しながら。

「それではメインディッシュだ」

バックは指をパチリと鳴らすと、黒服の一団が部屋に現れ、三人を羽交い締めにする。

二人は困惑と恐怖に思考が止まる。

しかし、ファルだけは違った、帝都に出てからは、私が二人を守ると決意していたために、羽交い締めにされながらも、抵抗を試みる。

村で習っていた拳法。

村の中でも五本の指に入る程の腕前。

うまく体を捻り、渾身の力で蹴りを入れる。

普段ならばその一撃で終わるはずだった。

しかし、それこそ『井の中の蛙大海を知らず』男は蹴られながらもニヤリと笑うと、

「田舎者の拳法かよ」

有無を言わさず腹に一発叩きこむ。

「ファルちゃん！」

エアの悲痛な声が広間に響く。

「いい声で泣くねー」

そんな三人には絶望的な状況をもバックは嬉しそうに眺めている。しかし、絶望は序の口であった。

扉から現れる三人の男。

胴着を着た禿げた男、烏帽子を被りよく肥え、目を血走らせ舌舐めずりをする男、鬻を結びドーベルマンを連れた男、の三人が滑った視線を三人の少女に向ける。

まるで舐めあげるかのように、マジマジと、下卑た眼差しで。

その中の一人胴着の男が、腹に一撃を受け、意識が飛びそうになっているファルに近づく。

「そう言えばこの跳ねっ返りの娘の落札者はスカさんでしたね」

「ええ、私はこういう娘を少しづつ刻んでいくのが面白いのですよ」

恍惚の表情を浮かべ、苦しむファルを見ながらスカと呼ばれた男はバックに答える。

「了解しました。両足折っちゃってよ」

バックの指示を受け、黒服の男は無慈悲にファルの足をあり得ない方向に折る。

「いやああああああ」

辺りに耳障りな折れる音と、耐えられない痛みに泣き叫ぶファルの断末魔がこだまする。

「いい、いい、いい、惚れ惚れする声じゃわい。もつともつと鳴き声を聞かせてくれ」

スカは誰もが目を背けたくなくなる程の残酷な行為を嬉々としてファルに行う。

轟く叫びは止まらない。

二人は羽交い締めにされているため、耳を塞ぎたいがそれさえもできない。

絶望と恐怖、二つの感情のみが二人を支配していた。

「ここにいる三人はね、いわゆるマニア層のひとでねー。もう普通の女の子じゃ満足できないんだって。みんな最高の笑顔を見てから、苦しむ顔を見て愉悦を感じる変態なんだよ。呆れた変態だよね」

バックは依然としてニコニコとして、その残酷な行為を見つめる。

「わしは、わしはあのおとなしそうな娘だ。目だの、目だの、ペロペロして萌え萌えしたいの」

烏帽子の男が常人にはまるで理解の及ばない事を口走る。

しかし、バツクはその意を察したように、顎で黒服の男に指示を飛ばす。

黒服の男は千枚通しを持ち、ルナの視力を奪い取った。

ファルとルナの悲鳴が辺りを染める。

気が狂いそうな光景ながら、周りの男は薄ら笑いを浮かべている。

それは乃ち、そのような場面が日常的に行われ、慣れきつていているということを、表していた。

「随分待たせおって」

鬚を結った男がエアの前に立つ。

「剥げ」

「勿体ないなせつかく買ったのに」

鬚の男の指示を受け、黒服の男がエアの服を引き裂いた。

身につける物を失い、必死に体を隠そうとするエアに、男はドーベルマンを近づける。

「ワシの可愛い息子のドグちゃんだ。ドグちゃんは発情期での、大人にしてあげたいんだ」

男はそう言うと、首輪を外した。

その後も狂乱の宴が続いた。

以上の話が俺がエアから聞いた話です。ファルはその後、四肢を失い死に、ルナは自殺したそうです……。エアは男に忠実に従い：可愛がられて：少しの自由が与えられているそうです」

少年は声を詰まらせながら、事の内容を話した。

握り締められた拳からは、赤い鮮血が滴り落ち、地面を赤く染めた。悔しき、怒り、悲しみ、三つの感情に押し潰されそうになりながらも、必死に耐えている。

「絶対に、絶対に許せない!! エアだけでも助けたい! このお金はエアが男の目を掠めながら集めたお金と俺の全財産です。お願いです。

この晴らせぬ怨みを！力のない俺と三人にかわって!!」

崩れるように膝をついて少年は土下座しながら、叫ぶ。

「……分かった……裏を取り次第……仕事にかかる」「ありがとうございませす」

少年の泣き声が辺りに響いた。

◆◆◆

以上が私が聞いた話の全てです」

レオーネが話し終えると、皆の表情にも怒りと、悲しみがありありと浮かんでいた。

ただ、主水は顎に手を当てて何かを考え込んでいるが。

「裏を取っているチエルシーが後少しで帰ってくる。その話を聞き次第行動に移す。皆準備をしておけ」

「はい！」

皆、固い表情で準備を整えるため散会した。

第43話

チエルシーが帰って来たのは、日が傾き、辺りがオレンジ色に染染まった時だった。

そして、準備を終えた仲間達が再びナジエンダの部屋に集められた。

「チエルシー裏は取れたか」

「4人だったからすこーし手こずったけどしつかり取れたよ。依頼にあったような外道だった。女をおもちゃにするような…今日も同じような取り引きがあるみたいで一同に集まるみたい」

ピリピリとした雰囲気と共に、皆の顔が怒りに染まる。

タツミは剣の柄を握り締め、レオーネは指を鳴らし、ラバックは誰よりも怒りを濃くした鬼の形相である。

女好きのラバックだからこそ激しい怒りが沸き上がっているのだろう。

「よし、丁度いい。今夜結構する。外道に天誅を加えてやろう！」

「おうー！」

皆は意気揚々と室内を後にする。

しかし、やはり主水はスッキリしない表情を浮かべている。

「どうしたの主水。気になることでもあった？」

飴をくわえながらニコニコと笑顔を浮かべたチエルシーが主水に尋ねてきた。

「ああ、まあな…」

「やっぱり主水は皆と見方が違うね。実は私も引っ掛かったことがあったの…」

すでにそこには笑顔のチエルシーは居ず、裏家業の顔をしたチエルシーがいた。

「私とは違うかもしれないから聞いておきたいんだけど」

チエルシーは周りを見回し、声を潜める。

他のメンバーには聞かれたくないのだろう。

主水にはその理由がよくわかっていた。

故に、「安心しな。皆は既に外に出て誰もいないぞ」と付け加えた後に本題に入った。

「俺が今回の依頼で違和感を感じたのは、依頼人の男についてだ」

主水は言葉を止め、チエルシーを伺う。

同じかと問うように。

「私とは違うね。私の理由は後で言うから続けて」

「ああ、今この時期に村の男が帝都に来るのはありえねえ。農作期にただでさえ必要な男手を気になるという単なる理由で、帝都に送るはずはねえからな。誰かに呼ばれて帝都に来たという風に考えると、誰かが後ろで手を引いているのではと考えてな。まあ考えすぎと言えばそれまでだがな」

チエルシーは目をつぶり、人差し指を頬に当てながら聞き、主水の話が終わると、目を開き、口を開いた。

「うん。考え過ぎじゃないと思う。この稼業は少しの見落としでも命取りになるからね…」

チエルシーは主水の意見に賛同した。どこか影のある表情で。

主水も気づいたが、この稼業になる人間には何かしら過去に問題があることも多々ある。そして、聞かれないことが殆どだ。

故に、自ら話そうとしないならば聞くべきではないと考えていた。

「ありがと…」

「何がだ？」

「なんでもない」

チエルシーは小さい微笑みを浮かべると、再び表情を引き締め、話を戻した。

「私が違和感を感じたのは、依頼料についてよ。依頼料は、エアという娘がくすねて貯めた金だと言っていたけど、私も以前金持ちの屋敷に居たから分かる。あれだけの依頼料をくすねるだけで集めるのは不可能よ。譲渡されるならまだしもね。あれだけの金を少しずつくすねたら、金持ちは目敏いから直ぐに気づく。自分の金を奪った者を許すことはない。何度も見てきたわ。だからあれだけの依頼料の作り方を聞いて違和感を覚えたの」

苦々しい表情のチエルシーを主水は初めて見た気がした。

いつも笑みを浮かべていた彼女が初めて浮かべた表情だったからだ。

「最もな意見だ…」

金持ちはいくら金を持つていたとしても、それ以上に際限なく金を欲し、尚且つ自分の金は必ず手放さない。

主水も何度もその光景を見てきた。

一生で使いきれない程の財を築きながらも、謀略を図り、金を求める。少しでも自分の財を狙う者がいれば容赦なく害す。

「…違和感の塊だな…」

「そうね、でも…」

「裏が取れている以上、俺達は依頼されたことを粛々とこなすだけだ。何かが起ころうとしても、俺達にできることはねえ。それが俺達の稼業だからな」

仕事人時代に何度も感じたこと。仕事人が出来るのは悪を斬るのみ。良い未来に変えるなどの、正義の味方ではまずないのだ。

「やっぱり主水は皆と違うね。こんなに本音で話したのは初めてだよ」

チエルシーは嬉しそうに微笑んだ。

仕事を忠実に、厳格に、任務遂行し、様々な経験を積んだ。そこから覚悟など多々学ぶことがあった、まだ甘かったと。

そのため、甘さを残すナイトレイドのメンバーとは一歩引いた位置で対応していたために、本音で話すことが出来る者もいなかったのだろう。

その相手が出来た喜びから無意識に表れた微笑だった。

「皆は、いい意味で純粹で優しい、悪く言うと単純で覚悟が出来ていない。こんなこと話すと気にしちゃう、主にタツミとかね」

「ああ、着実に成長はしているがな」

「うん…」

タツミという名を自ら出しながら、頬を染めるチエルシー。
「惚れたのか？」

「ウーン、気になる…かな」

ニヤニヤしながら聞く主水に、チエルシーはあっさり心のうちを見せた。

気を許してくれたのだらうと主水は考え、僅に頬が緩んだ。

(しかし、タツミは何人無意識に落としやあ気が済むんだ)

一転主水はエスデスを落とした無邪気な笑顔を浮かべるタツミを思い浮かべ深くため息を吐くと、チエルシーと共に部屋を後にした。

◆◆◆

エアマンタが帝都近郊の大地に体を下ろすと、辺りは既に夜の帳が落ち、すっかり闇に支配されていた。明かりと言えば、帝都の町の灯りと、月と星の煌めきだけである。

「ここからは歩いていくんだ。私はここで待っている。また、面が割れている者もいるからな、回りには用心しろよ」

ナジエンダが指示を出すと、皆はその足で取り引きが行われているであろうアジトに向かった。

チエルシーの案内によりアジトにつくと、人目につかないように身を隠す。

「どうする?」

「当然正面突破だろ!」

「おう!」

「ちよっと待て」

突撃をかけようとするタツミとレオーネの肩に手をかけ主水がひき止めた。

「どうして止めるんだよ旦那?」

「まじで聞いているのか?」

「うん」

さも当然のように頷くタツミとレオーネに、頭痛を覚える主水。

自分の常識と違うことがあると、この世界ではそれが常識なのだろうと、主水は抑えたこともあったが、しかし、仕事人として、これだけは抑えることは出来なかった。

「バカか。ここは街中だぞ。そんなことしたら人が集まってくるだ

ろ。今日に限らず暗殺は人知れずするもんだ」

「私も今回は主水に賛成」

「そうですね」

「今回だけ？」

アカメ、シエーレは頷き、アカメの発言にマインが突っ込む。

皆のマイペースさにため息を吐く。

まあまあと苦笑いを浮かべたチエルシーが主水の肩を叩く。

「あまりモタモタしてられない。どうするんだ主水の旦那？」

辺りを警戒しているラバックが小声で聞いてくる。

「天井裏から行くぞ。それとチエルシー……」

「りようかーい」

主水がチエルシーに耳打ちすると、チエルシーは帝具へガイアファンデーションを使い、黒服に化けると、アジトの裏に消えていった。

「俺達も行くぞ」

「はいー」

皆は主水に続き屋根に舞い上がり、通気口から天井裏に入り込んだ。

物音、気配を消し天井裏を進むと下から人の声や泣き声が聞こえてくる。

「ここか……」

主水は刀から小柄を取り出すと、迷わず隙間に刺し入れ天番を外し、室内を覗きこんだ。

眩い光と共に、室内の状況が入ってくる。

黒服の男数十人、それを束ねる笑顔の男バック、胴着を着こんだ禿げのスカ、小太りで烏帽子を被った男、髻を結った男、主要な標的の三人だ。

その三人が下卑た笑みを浮かべ見つめるのは、手枷足枷をはめられ、鎖で繋がれた少女達で、皆一様に俯き涙を流している。

「主水さん、俺もう我慢できませんー」

タツミが中の様子を見て、拳を握り締め心情を吐露する。

「あと少し待て、その機会はくる。今俺達がするのは、室内の状況を記

憶し、作戦をたてることだ」

タツミは室内の様子から目を叛け黙りこんだ。

皆は冷静に成り行きを見守っている。

裏稼業を行ってきた経験の差がそこに表れていた。

「顔バレをこれ以上しない為にも、人質に顔を見せずに実行する」

「そりゃあ無理だろ。どうやったって顔を見られるだろ」

レオーネが当然の如く反論する。

部屋の中にいる少女に気付かれずに仕事をする事は、不可能と誰もが思うからだ。

「それについてじゃあ大丈夫だ。チエルシーが上手くやってくれる。それとこれからの流れだが、俺とアカメ、レオーネ、ラバツク、タツミで皆殺しにする。シエーレはエクスタスで少女の枷を切り逃がし、マインはここからシエーレの援護を頼む」

「分かりました」

「分かったわ」

シエーレは少女を救うということに意気を感じたのか笑顔で同意し、皆は表情を引き締めて同様に頷いた。

「次は配置を記憶してくれ。二分後に灯りが消える。配置を記憶したら、目を瞑り、闇の中でも視野が取れるようにしてくれ」

「私は夜目が効くから大丈夫だな」

ライオネルで獣化したレオーネは胸をはる。

「姉さんの帝具はこういう時も役にたつんだな」タツミは目を輝かせてレオーネを見つめる。

レオーネも満更ではない表情である。

皆は室内の黒服やターゲットの配置を記憶すると、目を閉じる。

屋根裏に沈黙が流れる。

「フヒヒヒ、今日の娘達も美味しそうだ萌え萌えじゃの」

烏帽子の小太りの男が、少女の間近にまで顔を近づけたなめずりをする。

欲にまみれた男の吐き出す腐敗臭じみた吐息に、嫌悪感を感じた少女が顔を叛けようとした瞬間、屋敷中の灯りが消えた。

「どうなつとるんじゃあ！」

「停電みたいです」

轟く怒号、暗闇に包まれた室内が混乱に包まれる。チエルシーがブレイカーを落としたのだ。

「行くぞー！」

「おうー！」

ナイトレイドのメンバーが一齐に天井裏から降り立つ。

皆は迷いなく、黒服を仕留めながら、主要な標的の三人に向かう。暗闇に煌めく刀や剣、吹き荒れる血飛沫、うめき声を上げながら、吊り上げられる男達、空気を切り裂く轟音と共に振るわれる鉄拳、体が碎け肉片と化す男、凄惨な状況をシルエットが雄弁に語っていた。

「もう大丈夫」

シエーレは脇目も振らず囚われの少女に近づき帝具エクスタスで枷、鎖を切っていく。

「おんどれなにもんじゃー！」

闇になれ始めた黒服の一人がドスをシエーレに降り下ろす。

刹那、男は盛大に眉間から鮮血を撒き散らし、軀と化した。

シエーレの補佐をしたのは天井裏で浪漫砲台パンプキンを構えたマインであった。

シエーレはマインを信じていたので、敵を気にすることなく少女を助けるのに専念出来たのだ。

「な、なんなんじゃあ」

少女を見つめていた、烏帽子の男が取り乱しながら右往左往する。「女を食いもんにしたどぶねずみが：あの世で閻魔様に侘びるんだな」

ドスの効いた声で呟くと、主水は太刀で袈裟懸けに悲鳴を上げる間も与えず、両断した。

(ヤバイぞ死んだ真似を)

闇に包まれていることをこれ幸いとして、床に寝転がるスカ。

しかし、スカは知らなかった、ナイトレイドには高レベルで死んだふりをする者がいることを。

「死んだふりが下手だねえ」

「がああああ…」

糸に吊り下げられて、梁に吊るされるスカ。

ピンと張った糸が弾かれると共に、スカの生命活動が途絶えた。

バックと鬩の男は、徐に床を開け、地下に作られた逃げ道を降りていく。

「逃がさない」

闇の中で赤く光る目を持ったアカメが後を追う。アカメを止めるべく、黒服の男が銃を構えるが、発砲する前には、肉片と化する。

「ぼ、僕だけは助けてくれ。僕は子供のこ……」

「葬る」

言い訳に聞く耳も持たず、アカメは帝具〈村雨〉を振るう。

飛び散り壁を血に染め、仕事は終了した——と誰もが思っていた。

第44話

少年は一心不乱に走った。夜の闇を振り払うかのように。再び幼なじみの少女の笑顔を見たいが為に。

少年は月が雲間から顔を出し、中天に差し掛かった頃に、月明かりに照らされた今は主なき巨大な屋敷に訪れていた。

門は固く閉ざされているため、少年は塀を乗り越え、薔薇が咲き誇る広大な庭を抜け、屋敷の中に入り込む。

深夜ということと、屋敷の主が召し使いの黒服のほとんどを連れて行ったため、屋敷の中は、虫の音しかしない静寂に包まれていた。

昼間には、豪華に見えた廊下に飾られた絵画が不気味に感じられるが、臆病風に吹かれることもなく、少年はついに少女の部屋の前に辿り着いた。

少年ははやる鼓動を抑え、扉を開いた。

「エア、ついに皆さんが殺ってくれたよ。もうこんな所に居る必要はないんだ。一緒に村に帰ろう」

急に開かれた扉に驚くかとも思われたのだが、まるで来ることを予期していたかのように、少年に笑顔を向け、問いかける。

「テストゴマ兄ちゃん。本当なの？殺してくれたの？」

「ああ、本当だよ。殺しを受けてくれたお姉さんが教えてくれたんだ」「嬉しいー！」

エアはテストゴマの胸に飛び込んだ。

抱き止めたテストゴマには万感の思いが去来する筈であった…

しかし、実際に彼に訪れたのは、冷たい金属の感触と、自分の体内を先程まで流れていた血液が、外部に漏れた感触、そして、耐え難い痛みであった。

テストゴマの理解の範疇を遥かに越えた現実には、痛みを堪えながらも、その疑問を問い掛けるしか選択肢は存在していなかった。

「どういふことエア？」

「どういふことってこういうことよ」

テストゴマからエアは勢いよく何かを引き抜く。抜かれると同時に

吹き出る血液。テスゴマは血液があふれでる傷口を手で押さえながらエアを見る。

テスゴマを嘲笑するように見るエアの手には、テスゴマの血で赤く彩られた出刃包丁が。

「分らないよエア…」

テスゴマは痛みと、涙で揺らく視界の中でもエアをとらえ続けた。しかし、そこには純粹無垢な笑顔で、「お兄ちゃん」と慕ってくれていたエアは存在しなかった。

歪なおぞましい笑みを浮かべた別物のエアが立っていたのだ。

あの面影は既にこの世を去っていたのだ。帝都に来て、たった三ヶ月の内に…

「察しが悪いお兄ちゃんには私が丁寧に教えてあげよう」

テスゴマの体に底冷えする何かが走った。決して血液が流出し、体温が下がってきたことが起因していないことは、既に理解の範疇である。

「私は帝都に来て、知ったの、人との絆や、愛、そんな物は何の役にも立たないって。役に立つものはお金だけだつてね。あいつに従順を装って従っている内に、あいつは私に多額の金をくれるようになったの。最初はそれでも満足していた。でもね、次第にそれだけでは満足できなくなったの。そんな中でより多くの金を得るためにはどうすればいいのか考えたの。簡単なことだった、家族のいないあいつを殺して、この富を愛人として手に入れるという。その為にはまず、私のライバルとなる遺産を譲渡されそうな人間を一人づつ消していった。そして最後にあいつ。でもね、自分で依頼したらどこかでボロが出てしまうかもしれない、だからね、お兄ちゃんの出番なの。お兄ちゃんなら私が手紙を出せば、下心丸出しで、間抜け面に来てくれると確信していたの。案の定来てくれて、私の手駒のように働いて殺しの依頼をしてくれたつてわけ」

エアは、話を聞き泣き崩れるテスゴマの前で、尚も饒舌に語り続け、堪えていた笑いを我慢できなくなったのか、話を終えた瞬間大声で笑い始めた。

そこには、人間の底無しの闇と欲望に捕らわれ、墮ちる所まで墮ち
きつた人間が存在していた。

少女は純粋で、無垢であったが為に、容易に帝都の闇に染められて
いたのだ。

「そんなお兄ちゃんに御褒美をあげる」

エアは蔑みの目をテスゴマに向けながら、懐から、金糸や銀糸で見
事な細工を施された財布を取りだし、中から六枚の金貨を取り出す
と、テスゴマに投げて渡した。

「三途の川を渡るには金が必要みたいだからあげるわ。残ったら地獄
で使っていいわよ。地獄の沙汰も金次第だからね」

それだけ言うと、エアは薄ら笑いを浮かべ、「忙しくなるわね」とだ
け残し、テスゴマのことなど既に忘れ去ったかのように部屋を後にし
た。



主水達は、人質を解放した後、明かりをつけ、ターゲットの三人
を含む、全ての暗殺対象を殺害したことを確かめていた。

「どう？数はそろった？」

「レオーネおめえもこれぐらい手伝ったらどうだ。皆に任せつきりで
よお。ただでさえ、おめえが殺した相手は肉片になってて数えにくい
のよ」

数が合わなくては、殺し漏れた者がいることになり、遺恨が残るこ
とになる。すると、後々の禍根となることは火を見るより明らかだ。

故に、きちんと死体の数を照合していた。

「まあまあ、私はそういうチマチマした仕事が苦手なの。それにもう
重要な仕事は済ませたよ」

「姉さんは豪快だからなあ」

「胸も豪快だしな。グワッ！」

レオーネの分まで働いたタツミが疲れも見せず、繋ぐと、気配を隠
しながら近づいたラバックがレオーネの胸に飛び込もうとして、床に
叩きつけられていた。

「で、レオーネは何をしたのよ」

加わったメインがイライラしながら尋ねる。

死体数えの仕事にうんざりしていた所に、笑顔で帰ってきたレオーネが癪にさわったらしい。

「依頼人の少年に仕事を終えたってことを伝えに行ってきたんだ。喜んでたよ。そのままどつかへ走って行っただけだ」

「……そうか……」

「主水……」

「俺達にはもうかかわり合いのねえことだ……」

主水とチエルシーに得たいの知れない嫌な予感が沸き上がる。

もしもこれがタツミであったら全てを放り出しても少年テスゴマの元に向かったであろう。

しかし、二人にはそんな甘さはなく、達観していた。故に自分達には何も出来ることはないと感じて考えることとした。

数会わせも終わり、ナイトレイドの一行が敵のアジトを去ろうと門を出た時だった。

月明かりに照らされた道をフラフラと揺らめき、倒れそうになりながらも、壁に体を預け、必死にこちらに向かってくる何者かの姿が。

「お……姉さん……」

力尽きたのか、はたまたレオーネを見て安心したのか、血にまみれ、顔面蒼白になった少年は壁をずりながらその場に倒れこんだ。

「大変……」

「……」

走りようとするシェーレを手を横に上げて首を横に振り制止する主水。

依頼人であろうと、姿を見せるべきではない、と主水は考えたのだが、その意図を図れずまた、優しさを持ったシェーレは批判の視線を主水に飛ばす「何故行つてはいけないのですか」と。

しかし、主水は意図を黙して語ることはなかった。

少年に手を差し伸べたのは依頼を受けたレオーネのみだった。

「その怪我はいつたいたいどうしたんだよ？」

レオーネの問い掛けに、少年は涙を流しながら、途切れ途切れ、囁

くほどの小さく消え入るような声で話始めた。

「最後の……頼み……が……あります……」

レオーネの求めた答えではなかったが、テスゴマのこの世で最後になるであろう願いを聞くために一言返す。

「なんだ？」

「俺の……幼なじみの……エアが……帝都の闇に……染まって……しまいました。これ以上……エアに……罪を犯して……欲しくはない……。だから、だから……」

「もういい……」

溢れる涙と悲しみに染まるテスゴマの表情を見たレオーネは言いたいことは理解したと、最後まで言わせることはなかった。

テスゴマは震える手をレオーネに差し出し、レオーネの手に置くと、そのまま息を引き取った。

レオーネが手を開くと、月明かりを受け、金色と赤みを帯びて光る、血にまみれた六枚の金貨がそこにあった。

「依頼料か……」

レオーネは金貨を握り締めると、テスゴマの臉をおろし、その場にそっと横たえ、立ち上がる、

「どうする殺れるか？」

主水が近づく。

気づいていながら、何もしなかった負い目が少しはあったのか、自分が殺ろうかと尋ねたのだ。

「私が受けた依頼だから、私が殺るよ……」

レオーネは振り向くことなく、月明かりに照らされた街中を走り抜けた。

「明日からこの屋敷と、この財は全て私のもの」

エアはほくそ笑みながら月明かりの射す屋敷のエントランスで喜びを表すかの如く、舞を舞うようにステップを踏んでいた。

「何よりも大事な物を捨ててまで金を手に入れて満足か？」

「誰よ!？」

エントランスに呼応するように響いた声に、エアは声を荒げる。まるで何が悪いとでも言うかのように。

「あんたにテスゴマを間に挟み殺しを頼まれ、そして、今回はこれ以上幼なじみの手を汚させないでくれて頼まれた者だよ」

レオーネは俊敏にエアの元に現れ、細い首を掴み宙吊りにした状態で、レオーネは答える。

その闇を湛えた瞳にエアは恐怖を覚える。

『死』という避けられない恐怖を。

「あの役立たずがつ！」

顔を歪め、エアは苦しさを我慢しながら吐き出した。

「もうダメだな。帝都の闇に染まりきってる……」

レオーネが目を伏せると、エントランスに何かが折れる音が響く。

月明かりに照らされ浮かび上がった影は、力が抜け、まるで人形のようにだらりと手足が垂れたエアの姿を映しだしていた。

少女の命が絶えたことを月は静かに見守っていた。

穢れなき純粹無垢な少女でさえも、いや純粹無垢であったからこそ、帝都に蔓延る深い闇に捕らわれ、起こった悲劇である。

この少女の悪行は許されることではないが、この件の一番の被害者であったことは言うまでもないことである。

第45話

「主水勝負だ!!」

「ああ…かかつてきな!」

気迫溢れる強い眼差しで主水を見つめるスサノオと、不適な笑みでその視線を軽く受け止める主水。

緊迫した雰囲気、周囲りに集まった仲間たちは、固唾を飲んで見守る。

誰も、その雰囲気、声を出すことさえ出来ず静まり返っている。流れる汗、渴いた喉唾を飲むと同時にゴクリと音をたてた。

「行くか…」

「勝負だ!」

スサノオは勢いをつけてつきだす。

主水はつきだされた物を受け入れ、素手で掴み、頬張った。

主水は目を瞑り何度も咀嚼を繰り返す。

主水の一挙手一投足をスサノオは緊張の面持ちで見つめ、仲間たちは二人の動静を見つめていた。

長いようで短い時間。

主水の咀嚼は止まり、ゴクリと音をたて物を咽下し、湯飲みの茶を啜る。

茶飲みを置きフツと息をつく、動きを止めた主水を皆が固唾を飲んで見守る。

愉快そうに口許をフツと緩めると、主水は口を開いた。

「スサノオおめえは全く大したもんだ!ここまでの大福は江戸でも食ったことはねえ。旨かったぜ」

主水は迷わずスサノオを称賛した。

「やったぜスーさん!」

「私の帝具なのだから当然だ!」

ナイトレイドの仲間たちがスサノオを囲んで騒ぎだす。まるでお祭り騒ぎだ。和気藹々とした雰囲気、主水も悪い気はしなかった。

今まで何が行われていたのか?

外に出て岩の上に腰を下ろし、頬を撫でる爽やかな風を浴びながら、雲が薄く棚引く空を眺め、主水は感慨に耽っていた。

「ん、チエルシーか？」

「よくわかったね。隙をつけたと思ったのになー」

足音も気配も無かったが、主水は現れたチエルシーを言い当てた。

そして、振り向かず言い当てた主水の横に、チエルシーは微笑み腰を下ろした。

「どうしたんだ？皆は今頃スサノオが作った大福食ってる頃だと思っただがな、おめえはいいのか？」

「みんなよろこんで食べてるよ。私はしたかったことがあってね」

風に靡く髪をかきあげるフツと微笑むチエルシーの横顔には、いつものはつらつとした物は影を潜め、寂寥感のようなものを感じさせられた。

「何か悩みでもあるのか？」

「どうしてそう思うの？」

「おめえの笑顔にいつもの元気が感じられたなかつたからな」
「！」

チエルシーは主水の指摘に驚かされた。

帝具へガイアファンデーションの遣い手として、演技であったり、表情を隠すことには自信を持っていた。

しかしながら、主水は心のうちを見透かしたかのように言い当てたからだ。

「さすがだね主水。読心術は裏家業で磨いてきたのかな？」

次は主水がチエルシーの質問に暫しの沈黙に落ちた。チエルシーは凶星をついたかなと思っていると、主水はどこか遠くを見るようにして、苦笑いを浮かべながら答えた。

「かかあやばばあ、嫌味な上司のご嫌を見るようになった時に身につけてな……」

主水は笑われるか、かわいそうなものを見る目を送られるかと思っていた。しかし、チエルシーの表情はそれとは全く違ったものだった。

「主水には奥さんがいたの？」

「まあな。今は別れたも同然だがな……」

主水は口を濁した。

こちらの世界に来たことにより、妻りつとは離れ離れになった。形式的には別れたといっても差し支えはないのだが。

「そうなんだ……少し嬉しいかな……」

「どうした？」

「気になるなら私の心のうちを読んでみたら」

「……」

チエルシーは小悪魔っぽく目を細めて笑みを浮かべた。

「少し元気が出たようだな」

「主水と話してたらね」一旦言葉をきり、間を開けた後に、意を決し言葉を繋ぐように淡々とした表情で語りだす。

「実は私は以前革命軍の別の部隊に所属していたの。今のナイトレイドのように皆仲が良かった。でもね、それは突然終止符を打たれたの。私が別の仕事をこなして帰ってきた時には、皆が襲撃を受けて殺された。だからかな、ナイトレイドの皆の笑顔に、以前の仲間の顔が重なっちゃって少し顔に出ちゃったのかも……」

「そうか……」

主水には掛けるべき言葉が見つからなかった。

自分も何度か仲間を失ったことがあった。

当然のことだが、仕事人は前提として仲間の死を覚悟しているとはいえ、その言い様のない辛さは身をもって理解していた。

それ以上にチエルシーの場合、全ての仲間が亡くなってしまったとなれば、それこそ言葉に表せないものがある。

故に言葉が見つからなかったのだ。

「そういうこともあって、ナイトレイドの皆には死んで欲しくないから、甘い考えをしているとついつい言葉がきつくなっちゃうのかも」「それについては俺も同じ意見だ。あいつらはまだまだ甘い所があるからな」

「うん、この稼業でなければ優しさだから、長所でもあるんだけどね……」

主水とチエルシーの脳裏には、主にタツミの顔が浮かび、二人揃って苦笑いをするのだった。

「ところで主水って、イエーガーズにもスパイとして働いてるみたいだけど、ナイトレイドと二足のわらじはきつくはないの？」

暗い雰囲気を払拭するように、チエルシーは明るさを取り戻し、話題を変えた。

「ああきつ——」

「くないない」

突然言葉が挟まれる。主水が答えの腰を折った人物を見ようと振り返ると、そこには不適な笑みを浮かべたレオーネとラバックがいた。

「どういうつもりだレオーネ」

主水は厳めしくレオーネに視線を送る。

「真面目に仕事してないし。袖の下受け取ったり。サボって甘いもの食べたり」

「うっ…」

「家には仕事をサボってエロ本借りにくるしな。しかも俺の秘蔵の本が…」

ラバックは、シユレッダーにかけられたように変わり果てた秘蔵の本を思い出し出したのか、涙を流しながらレオーネに続いて主水を攻め立てる。

ラバックはエロ本の怨み、レオーネは以前の扱きの仕返しとばかりに無慈悲に攻め立てる。

主水は反論したくも凶星のため、中々言葉が出てこない。

「そういう面があるのも人間らしくていいと思うよ」

「えっ！」

「チエルシーちゃん旦那に甘いよ！」

普段毒舌のチエルシーが見せたデレ？にレオーネは不満を持ち、ラバックは悔し涙を流しながら反論する。

チエルシーはレオーネとラバックが見た姿は演技だと理解していただろう。しかし、それを気づいていないレオーネとラバックにはそ

れを指摘することなく、肯定した。

「だそうだとレオーネ、ラバツク」

心強い仲間を得たと主水はニヤニヤしながら守勢から逆に攻勢に入る。

「憎つたらしい顔して〜」

レオーネは主水のニヤニヤした顔を見て、悔しそうに歯軋りする。

「でもね。主水ももう少し煩惱は抑えたほうがいいかもね」

「お……お……」

チエルシーの一人勝ちであった。

この時三人は明確にチエルシーには口論では勝てないかと察したのだった。

第46話

新月のため、全てが闇によって黒一色に染まった世界で、一寸先も見えない空間が広がっていた。

「今日も暮らしに困ったすえの盗人だけか…まあセリユーも捕縛しただけで殺しやあしなかったのは本当に大きな進歩だな」

イエーガーズの仕事を終え、帰途についていた時だった。

「た…助け…」

主水の進行方向の曲がり角から、男が倒れこむように出てきた。

「どうしたんだ？」

主水が男に駆け寄ろうとした時だった。

男の口腔内が僅かに発光した後、火花を散らして男は肉片となり弾け飛んだ。

普段ならば夜の夜空を照らすように咲く大輪の花が、地に咲いた。男の体内を苗床として。

「おいおい 一体どういうことだ。男が爆発しやがった…」

あまりの出来事にしばし我を忘れて茫然としていると、

「仕事を見られちまったか…殺すしかねえな…」

黒い影がボソボソと呟き、懐から冷たい光を称えるドスを抜くと、ドスを構え体勢を低くして、主水に突き進む。

「チツ…」

瞬時に帯からアレスターを抜き、鏢迫り合いに持ち込んだ。

「くっ…」

「まさか…おめえは!!」

主水も男も間近に接近したために、互いに相手を確認し、困惑の表情を浮かべる。

そこにいたのは、主水も男も共に知っていた顔であったからだ。

「花火師…!」

「イエーガーズ!」

主水はアレスターを、男はドスを振りきると、二人の間に間合いができる。

「ただもんじやねえと思っていたが、俺と同じ稼業だったとはな。おめえに話があるドスを引け」

「俺はイエーガーズなんかと話はねえ！」

男は全く主水の言葉に耳を傾けることはなかった。

仕事人の掟を護るためか、はたまたイエーガーズなどの国会の犬が嫌いなのかなのは分からないが。

「俺は確かにイエーガーズに入っただけにはいるが、真に属しているのはナイトレイドだ。お前の稼業と同じようなな。だからこそ話がある」

「聞く耳もたん」

男はステップを踏むと、スツと闇に溶け込むように姿が消えた。

「やるしかねえか…まずは動きを止める」

「やれるもんならやってみな！」

「！」

突如後ろに現れた男がドスを振るう。

横風ぎに振るわれたドスを間一髪身を屈めてかわすと、振り向き様にアレスターを振るう。

「おっと」

男も見事に黄金の閃光を放つアレスターをかわすと、バックステップを踏み、間合いを開けると同時に、何かを投擲した。

投擲された球体の物質は、目映い閃光を放ち爆発を起こした。

「くっ…！」

闇を照らす余りにも苛烈な閃光に、闇に慣れていた主水は耐えきれずに目を閉じた。

「終わりだ」

男は砂煙が舞うほど力強く地を蹴り、風を切りながら、突き進む。

男のドスが主水の心臓に突き立てられるまであと僅かな所で、黄金の輝きが走る。直後、男は糸が切れた人形のように力なく崩れ落ちた。戸惑いの表情を浮かべ。

当然である。優勢であったのが、一瞬でまた訳もわからず、劣勢に陥ったのだから。

「残念だったな。俺の視界を塞いだことで油断ができたな。消してい

たはずの気配が今は感じられるぜ」

「マジかよ…」

男は地に倒れ込んだまま動きを止めた。

いや、動きを封印されたことにより動けなくなったと言うのが正しい。

「早く殺せよ…」

男の観念したかのようないい口に、主水は大きなため息を吐きながら頭を掻いた。

「だから言っただろ、俺はおめえと話がしたかっただけだど。待つてろ」

主水がアレスターをそつと撫でると、男の体の自由を奪っていた封印が解かれ、男が驚きの交じった表情で、訝しげに主水を見つめる。

「動けるようにしたのか…」

「ああ、これで俺が敵じゃねえと分かったろ。話を聞いてくれるか」「いいだろう」

主水は男に求められるままに、仲間になって欲しいという旨を伝えた。

「話は分かったが、まだ信用することはできない」

男の言葉に主水はうつすらと不適な笑みを浮かべた。まだ信用できないと言われたのにだ。

何故なら、信用できないと言ったのを主水は肯定的に捉えていたからだ。

生きるも死ぬも紙一重で生きている仕事人にとって、警戒をしても、し過ぎるということはない。

むしろ警戒心が高い方がいい。

「じゃあどうすりゃあ信用する」

主水の問い掛けに次は男が口角を緩める。

「お前にしてもらいたい信用を得るのにうってつけの仕事がある。それをしてくれりゃあ信用してやる。ついてきな依頼人に会わせる。

あと俺の名は天閉だ」

天閉と名乗った男は主水の前を歩きだした。

天閉と話をつけた翌日、人気のない街角で、主水はある人物と会っていた。

「頼めるか」

「いいよ。だけど貸しだよ」

「わかってらあ」

主水は話を終わるとその場を後にした。

「あつ、主水君こんな所にいたんだ！隊長が呼んでるよ。イエーガーズは全員集合だつて。行こ」

セリユーは主水の手を取ると、右手でリードをつけたコロを、左手で主水を引き摺るように引っ張って宮殿に向かった。

「遅いぞ中村」

机を囲みイエーガーズの面々が並ぶ会議室に、セリユーに手を引かれた主水が入室した途端に、エスデスに叱責を受ける。

「すいません」

主水は頭を低くして、空いている自分の席に着いた。

「全員揃ったのでこれからの作戦を説明する。ラン」

「はい。今回の作戦概要ですが。今一番の殲滅対象となるナイトレイドのアカメとマインと思われる人物が、東のロマリー街道沿いで目撃されました。陛下から討伐の勅命を受けたため、イエーガーズの全員で討伐に向かいます」

ランが淡々と手に持ったレポートを読み上げると、腕を組んでいたエスデスは頷いて立ち上がる。

「ということだ。行くぞー！」

「はいー」

皆は即座に席を立つと、エスデスに続いて会議室を後にした。

イエーガーズのメンバーが騎乗する八体の馬が帝都の大門を出て、風のように駆ける。

イエーガーズのメンバーの表情は固く真剣な者、笑顔である者様々

だ。対峙することになるナイトレイドは強敵であることを知っているからこそその固く真剣な表情。

笑顔なのは、研究材料として得ることを望むスタイリッシュや、最愛の姉との対峙を待ち望んでいたクロメである。

そんな中でも主水は普段とは変わらなかつた。

大地を駆けること二刻、ロマリー街道を目前とした位置の大きな街にイエーガーズは辿り着いた。

帝都とは然程変わることのない街並み、昼食のため良い匂いが漂っている。

イエーガーズのメンバーも走り通して疲弊した馬を乗り換えるため、また昼食を取るためにその街で休息を取っていた。

各々が思い思いに買った食事を取りながらこれからの概要について話し合う。

「ナジエンダは東へ、アカメは南へか……ここに来て二手に分かれたか」
エスデスが諜報部隊から得た情報を読み上げながら、思考を巡らす。

ナジエンダならばどのように動くかを。

「東へ行けば安寧道の本部のキヨロクへ。南へ行けば反乱軍が大勢を占める都市へ。どちらもキナ臭いですね」

エスデスの読み上げた情報を元に、行き先を予想しボルスが答える。

「確かにそうだが、ナイトレイドは帝都の賊だ。地方までは手配書が回ってはいないので、油断して顔を出し、あまつさえ二手に分かれた所を目撃されたというのは――」

「都合が良すぎますね。毘だと考えるべきかと」

エスデスの思考を読み、ランが言葉を繋ぐ。

「私たちが帝都から誘きだすのが目的でしょうか？」

「ああそうだろうな……あいつは……ナジエンダはそういうやつだ。燃える心でクールに戦う」

エスデスはセリユ어의問い掛けに、昔を思いだし感傷に浸るように呟く。

その様子から、ともに將軍の地位に立っていたナジエンダをエステスが高くかつていたことが伺えた。

「罨ならば追うと危険ですね」

「いや……これは好機だ。今まで全く姿が見えなかったナイトレイドが姿を見せたのだ。今この機を逃さず叩き潰す！私とラン、セリユ、中村でナジエンダを追う。クロメとウエイブ、ボルス、スタイリツシユはアカメを追え」

「はいー」

クロメとスタイリツシユに薄ら寒さを感じさせる笑みが浮かんだのを、主水は見逃さなかった。

言葉には形容出来ない嫌な予感が去来する。

しかし、主水には為せることは何も無かった。

「常に周囲の警戒は怠るな。そして相手が多数の場合退却しても構わん。攻め込むが、特攻しろという訳ではないからな」

エステスの部下思いな所が垣間見れる指示。

だが次の瞬間エステスの視線は鋭くなる。

「帝都に仇なす最後の鼠だ。追いつめ仕留めるぞ！」

「了解!!」

それからのイエーガーズの動きは、迅速だった。

新たな馬を駆り、走り出した。

エステス率いる主水一行はナジエンダの影を追い、一心不乱に東へ走る。

しかし、いくら走っても一向にナジエンダの僅かな痕跡さえも見えない。

さすがのエステスにも焦りの色が浮かぶ。

「妙だな。そろそろ追い付いてもよい刻限だが」

「確かに妙ですね。私が帝具を使用して空から探索してみましようか？」

「いやいい。私のペットと同様で長くは飛べないだろ。とっておけ」

イエーガーズの知恵となるエステスとランが話し合う。その端で。

「主水君。元氣ないように見えるけど大丈夫？」

「大丈夫ですよ。セリユーさん」

「そうかな…」

朝から口数が少ない主水をセリユーが気にしていた。

「畏だったようですね」

周囲に視線を送るランの眼光が鋭くなり、冷えきった視線を向ける。

「そのようだな」

既に回りを多数の盗賊に囲まれていた。

「ピヤッハー！噂通りの超絶美女だぜ！たまらねえぜ！」

「楽しめそうだぜ！」

「後ろのお嬢ちゃんもいいこといっぱいしてやるからな」

舐め回すようにエスデスやセリユーに視線を向ける下劣な男達。

「聞くに耐えません。血の臭いもしますし。容赦はしません」

セリユーは顔をしかめて虹色に輝くガントレットをつけ、臨戦体勢に入る。

「蹂躪するぞ。中村お前は前回同様活きがいいのを二三人確保しておけ、聞きたいことがある」

エスデスの言葉が開戦の合図となった。

イエーガーズ四人対盗賊団数百人。

客観的に見れば、盗賊団が有利と見える。

しかし、それは一般的な基準であり、人の域を遥かに超えたイエーガーズの面々には適応されることはない。

セリユーとコロが斬り込む。

動きが鈍い兵と、多勢に無勢と侮っていた兵隊が血飛沫を舞いあげ、千切れ飛んでいく。

肉片や血液が飛び交い、断末魔が響く。

セリユーとコロの攻撃を乗りきった残党は、鋭く舞うランの帝具〈マステイマ〉の羽により微塵に刻まれた。

そんな疾風怒濤の攻撃の中、主水は一人の兵を取り押さえていた。

ただ普段の手際の良さからは、かけ離れた様子に、心配して敵の血にまみれたセリユーがやって来る。

「体調悪いの？動きが悪いよ」

「昨夜色街で女郎と朝まで張りきってしまいました…」

主水が頭を掻きながら答えると、空間が凍りついた。

決してエスデスが帝具を使用したのではない。

「中村さん。正直なのは素晴らしいのですが。もう少し答え方は考えた方が良いでしょう」

ランが困ったような笑顔で主水に助言する。

主水がランの言葉に耳を貸していると、肩に痛みが走る。

まるで万力で締め付けられるような感覚が。

振り返ると、瞳のハイライトが消えたセリユーが闇に沈んだ空虚な瞳で、肩を掴んでいた。

「話し聞かせてもらえるかな？」

全く抑揚のない声で尋ねてくる。

しかしその質問は、『話す』と『黙秘』の二択ではなく、『話す』という一択しかない、率直に言って命令である。

主水の背に冷たいものが走る。しまったと思ったが時既に遅し、セリユーがジリジリと詰め寄って来るのと同時に、命の危機も迫っていた。

そんな最中、

「セリユーそこまでにしておけ」

エスデスがため息をつきながら、言葉を挟む。

主水は助かったと胸を撫で下ろし、安堵したのだが、事態は逆に深刻になっていった。

「主水の尋問はこの件が片付いてからにしろ。私も尋問には手を貸してやる。今は優先順位を考えろ」

エスデスが主水の捕らえた兵の一人に、目を覆いたくなるほどの尋問をしながら、含み笑いを浮かべて告げた。

主水に死亡フラグが建った瞬間だった。

第47話

エスデス側が盗賊集団を蹂躪していた頃、ナジエンダ率いるナイトレイドの全メンバーと、クロメ、クロメの帝具へ八房により呼び起こされた8体の死人、ボルスが大乱戦を繰り広げていた。

ウェイブは奇襲を受け、クロメを庇ったため遥か彼方に飛ばされ、スタイリツシユは戦闘が始まる頃には、「ウフフツ」という笑い声を残し姿を消していた。

一番の太刀回りを行っていたのは、シエーレ、スサノオと超級危険種の屍デスタグルルとの戦いであった。

デスタグルルが放つ咆哮や打撃を、暗殺モードに移行し、瞳を鋭くし見据えたシエーレが舞を舞うように紙一重でかわしていく。

ただ、桁外れの攻撃力や、広範囲の攻撃が激しく、防戦一方なのも事実であった。

「スサノオさん、どうして何もしないのですか？」

腕組みをして首を捻るスサノオに、大きく間合いを取りながら尋ねるシエーレ。

その質問には、何もしてくれないスサノオに対する批判も僅かだが込められている。

「シエーレ、やつの胸を見ろ！」

スサノオは徐に指を指す。

「出っぴりがありますか？」

「そうだ！あれのせいで……左右非対称なんだ!!」

「……」

拳を握り締め力説するスサノオを、シエーレは呆れたように半目で見ている。

「それが気になって何も出来ないの？」

「ああ、そうだ」

さも当然だというように主張するスサノオに、シエーレは軽くため息を吐き、「少し待っていてください」と言うと、デスタグルルに向けて走り出した。

左右に華麗にステップを踏み、相手の狙いを攪乱し、懐に飛び込むと、デスタグールの骨をかけ登る。

動きに攪乱され戸惑っているデスタグールの左胸の出っぱりに辿り着く。シエーレの瞳が怪しく光り、帝具へエクスタス〈がシャキンと音を立てた。

刹那、非対称の証たる骨の破片が地に落ちる。

「よくやったシエーレ！」

スサノオが歓喜の雄叫びを上げ、地を踏みしめ、地面を抉りながら走り出した。

間近のシエーレを振り払うことに夢中になっていて、スサノオに気づかないデスタグールの足元に詰め寄ったスサノオは、得物で足を薙いだ。

砕けはしないが、足を掬われたデスタグールは大きく体勢を崩す。

「今だシエーレ！」

「はい」

空中から舞い降り、大地に着地すると、再び地を蹴り、シエーレは舞い上がる。

体勢を崩され、デスタグールの頭部がシエーレの眼前に迫る。

シエーレは無表情でエクスタスを開く。

二つの刃が閃めき、重なり一つの刃になった時、デスタグールの脛椎が断ち切られ、頭部が落ちていった。

一方で、シエーレは成し遂げてくれるだろうと、待ち受けていたスサノオは、重力により速度を上げ落ちてくる巨大な頭部を獲物で穿った。

頭部に存在した、亀裂を寸分たがわず撃ち抜かれたことにより、頭部全体に亀裂が走り、崩れながら微塵に砕かれていく。

枚散る欠片が陽光に照らされ輝く中に、シエーレとスサノオの勇姿があった。

「見事だシエーレ、スサノオ」

嘗ての同僚ロクゴウの〈八房〉による呪縛を断ち切ったナジエндаが、既にそこに現れ、二人に拍手を送った。

(まさか超級危険種を二人で倒してしまうとはな)

ナジエンダはスサノオの奥の手で強大な力を持つデスタグルを倒そうと考えていた。しかし、その想定は良い方向で裏切られ、その戦果にナジエンダは満足していた。

「戦いが終わって直ぐで悪いが、シエーレ、タツミが危うい。助けに行ってくれ」

「はい」

ナジエンダの指示を受け、シエーレは踵を返し走り出した。

「シエーレ」

「はい?」

突然ナジエンダに呼び止められたシエーレは返事をし、振り返りながらも、何故呼ばれたかは分からず首を傾げる。

「いやなんでもない…行ってくれ…」

「はい」

再び走り出したシエーレの背を、ナジエンダは不安げに見つめていた。

「どうしたんだナジエンダ?」

ナジエンダの傍らに来ていたスサノオがナジエンダに問い掛ける。

「何故か言い知れぬ不安をシエーレに感じてな…まあ杞憂であるとは思うが…」

嫌な予感を振り切るようにかぶりを振ると、ナジエンダとスサノオも標的をクロメにし、向かって行った。

「っ、強い!」

タツミは帝具〈ヘインクルシオ〉を纏い、エイプマンとハンターの二人を相手にしていた。

ただ、すでにインクルシオも二人の攻撃によりボロボロになっていた。

「そのエイプマンは強いよ。帝都近郊にある暗い森の中にいたんだけどね、手に入れるのに丸一日かかったから。他のエイプマンなんか霞むほど強かったんだ。戦闘力だけなら超級危険種並みだよ」

からからと笑いながら自慢するようにクロメは答えた。

嘗てそのエイプマンはセリユアの修行相手であり、お互いに競いあい、高めあったあのエイプマンであった。

ヘンターのトリックキーな動きに翻弄された所でエイプマンの強大な攻撃を打ち込まれる。

そのパターンでタツミは何もすることが出来ず、為されるままに、痛めつけられていた。

「殺、殺、殺、殺、殺す！」

地を滑るように迫り来るヘンターを迎え撃つようにタツミが拳を放つ。

しかし、ヘンターはタツミの拳が当たる直前に、まるで重力を無視したようにフワツと舞い上がる。

舞い上がったヘンター影に隠れながら迫っていたエイプマンが、空を切ったタツミの拳を受け止めた。

エイプマンは不適な笑みを浮かべると、腕をそのまま掴み、地面に叩きつける。

「ガハッ！」

地面にめり込んだタツミに、宙から舞い降りたヘンターが、馬乗りになるようにのし掛かり、巨大なバタフライナイフのような得物で首を落としかかる。

「死、死、死、死ね」

「させません！」

エクスタスがヘンターのナイフを弾く。

ヘンターもタツミから降り、再び地を滑るように後退り、間合いを取る。

「大丈夫タツミ」

「シエーレ、助かったよ」

ニッコリと微笑むシエーレに、タツミも素直に感謝を示す。

「私がああの仮面を倒します。タツミはあの猿をお願いします」

「おう！」

シエーレとタツミは背中合わせになる。互いの体温は二人を勇氣

づける。二人は共に口許を緩めると互いの敵に走り出した。

依然としてヘンターは不規則な動きでシエーレを攪乱する。

鋭い視線で静かにヘンターの動きを見つめ、変則的に繰り出される攻撃はエクスタスで受け流し、稀に斬撃を交える。

(確かに動きは変則的ですが、反射神経は鈍い)

シエーレは、戦闘に関しては、類い稀なる力を備えていた。

まるで戦闘マシンとも形容出来るほどの冷静な判断力、桁外れの反射神経、的確に相手を捕らえる眼力。

ただし、それは一人で戦う場合に限られる。

元来の優しい性格が災いして、仲間との共闘の場合は、仲間を気にかけるあまり、集中力が落ち、その戦闘力を遺憾無く発揮することが出来なかつたのだ。

故に、今回のように一対一の戦いであり、タツミの力を信用している今なら、帝具の力も相まってその戦闘力は飛躍的に上がるのだった。

ヘンターはゆらゆらと揺れるような、変則的な動きでエクスタスの斬撃をかわそうとするが、タツミと違い容赦のない鋭さとエグさを持つシエーレの斬撃に追い詰められ始める。

「私は殺しについては容赦ないですよ。だって、これしか私は役にたたないんですから」

シエーレの斬撃は繰り出される毎に正確さを増し、また威力もそれに比例するように増大していく。

「そろそろ終わりにしましょう」

ヘンターの耳元で囁かれる、冷えきった声による『死の宣告』、屍のヘンターが理解しないまま、シエーレが通り過ぎると、首と胴体が離れ離れになった。

吹き出る血液を浴びながら、シエーレは無表情で動かなくなったヘンターに一瞥を向けると、タツミの戦いを見て頷いた後その場を後にした。

タツミはエイプマンとの一騎討ちになったことにより、冷静にエイプマンの攻撃を避けていた。

一発一発の威力はでかいが、直線的な攻撃が多数を占めていたからだ。

そのため、攻撃を避けてはカウンター気味に槍で切りつけていた。「死体にはそんな攻撃効かないよ。心臓を貫かれても大丈夫だしね」まるで助言でもするかのようにクロメがタツミに話しかける。

「そんなことは分かっている。動きを確かめていただけだ！」

タツミは槍を地面に突き刺すと、大地を強く蹴った。

「これで終わりだ」

怒涛のラツシュを放ち、フィニッシュに渾身の力を込めた一撃を打ち込んだ。

拳はエイプマンの顔を碎き、戦いは終息した。

「シエーレ終わったね」

タツミは背後で戦っていたはずのシエーレに声をかけたが、すでにその場にシエーレの姿はなかった。

「どこに行ったんだ。まあシエーレなら大丈夫だろう」

タツミは自己完結し、クロメの元に向かった。

ボルスと戦っていたアカメとレオーネだったが、一番の障害であった、ボディーガードのウォールの動きを止め、更にレオーネがボルスの帝具〈ヘルビガンテ〉を破壊した為勝負は決したように思われていた。(帝具は壊されちゃったし、打つ手はなくなっちゃった。ならば…)

「奥の手発動」

ボルスは賭けに出た。

既に帝具が壊れた今、奥の手は使えない。

しかし、どんなことがあっても任務はやり遂げなくてはならない。

ボルスの強い責任感が命を懸けた、最後の賭けを選んでいた。

「破壊する」

ボルスは覚悟を決めて帝具の自爆スイッチを押した。

光輝いた帝具は一瞬の有余の後に、辺り一面を破壊し、焼き付くし、その吹き荒れる爆風は、全てを凧ぎ払った。

後に残されたのは、爆心地を中心に半径数百メートルに渡るクレー

ターのみであった。



「なんとか逃げ切ったみたい……」

ボルスは生きていた。

アカメとレオーネが光輝く帝具に気をとられ、ウォールの盾を用意していた隙について、逃げ切ったのだ。

初めは責任を果たすために、アカメ共々自爆するつもりだった。

しかし、『死』を目前にした時、不意に家族の姿が頭を過った。

（こんな所で死ぬわけにはいかない！帰るべき場所が、待っている家族がいる!!）

今まで嫌なことであろうと、頭で理不尽なことと理解していたことであつても、自分を殺し、忠実に言われたことを成し遂げてきたボルスが、初めて自分を優先した時であつた。

「ウォールさんには悪いことをしちゃった……クロメちゃん……無事だといいいけど」

俯くボルスの脳裏に、今度は、仲間の姿が浮かんでいた。

自分の家族の元以外の居場所。

自分の過去を話しても、批判することなく、認め、仲良くしてくれた仲間達。

「また…皆で……一緒にご飯食べたいな……」

ボルスの口から無意識に発せられた呟きは、後の出来事を案じるかのごとき言葉であつた。

暫く、満身創痍の体を叱咤するように、歩みを進めているそのような頃合いであつた。

「一かけ、二かけ、三かけて…仕掛けて、殺して、日が暮れて…」

どこか焦燥や悲哀を感じさせる、聞き覚えのある声が、風に乗りに聞こえてくる。

何故だか分からないが、聞き入ってしまったボルスが、我に立ち返り、俯いていた顔を上げると、声の主が、一本ポツリと立つ木に寄り添うように夕陽に型どられた影を作り、ひっそりと佇んでいた。

第48話

夕陽による逆光により目を細めて見たボルスは、自分の目を疑った。

「なんで主水君がここにいるの?」

主水に会えたことによる安心感よりも、疑問を抱く。

主水はエスデスと共にロマリー街道を南下して行き、自分達は東に進んだため、ここにいるはずがない。

距離的に考えても、どんなに馬を駆ろうとも、最低でも一日はかかる程離れているはずだ。

また、主水の帝具についても、空間移動ができるものではないことは、分かっている。

以上のことから、どう考えても、主水がここにすることは、有り得ないのだ。

そして、ボルスに警戒心を抱かせるのは、もう一つ理由があった。

今までボルスが見たことがない、特別な人を寄せ付けない雰囲気、主水が放っていたことである。

「本当に主水君なの?」

「ええ、そうですよボルスさん」

否定してくれることをボルスは本能的に望んでいたが、それは目の前の人物が肯定することにより、儂くも瓦解した。

「じゃ、じゃあなんで主水君がここにいるの?」

今一番聞きたいこと——いや、聞かなくてはならないこと…

「一つしなくてはならない依頼を受けましたので」

「依頼?」

「ええ、今までならば、依頼人の為にも内容は話さず仕事をするのですが、ボルスさんには知る権利があるので話しておきますよ」

能面のように無表情の主水はボルスを見据え、ポ淡々と語り始めた。



天閉の背を追い約一刻、帝都の外れにある開けた土地にある一件の

あばら屋に辿り着いた。

「入って直ぐの部屋で待っている」

扉を開け、入るように天閉は促す。

主水は軽く頷くと促されるままに部屋に入り、腰を下ろす。

辺りに視線を巡らし、深閑とする部屋で待つこと数分。

隣の部屋にだろうか、二人が入ってくる気配が。

「さあ頼みごとをいってくれないか」

「…はい……」

天閉の声の後に聞こえた声は、弱々しく儂さを感じさせる声であり、またその声色からして、まだ年端もいかぬ少女の声だと判断できた。

「殺して欲しい人がいます。今はイエーガーズという職業についているボルスという人です…」

「……」

主水は自分の耳を疑った。

こんな日が来ることは理解していた。

しかし、こんなにも早くこの日が来ようとは。

自らの手で、ボルスを殺す依頼を受けることになろうとは…

「私のお父さんは火付けをしたという無実の罪で捕まり、ボルスに火炙りで殺されました。お父さんの死にショックを受けながらもお母さんは、私のために夜通し働いてくれましたが、疲れが溜まり、一ヶ月後に…亡くなりました…」

終始少女の声には泣き声と嗚咽が交じっていた。

「天閉、裏は取ってあるのか？」

静かに黙って聞いていた主水だが、儂い希望をかけて少女の傍らにいるであろう天閉に尋ねる。

「そう来ると思ったぜ。抜かりはねえよ、死刑の調書を忍び込んだ先の庁舎で調べてきた。とんだ出鱈目が書いてあったぜ。それと共に刑の執行者の欄にもボルスの名前はあったよ」

「そうか…だがその話していくと火炙りの刑を科したやつと、無実と知りながら捕らえたやつ二人も仕事にかけるべきじゃねえのか」

今までの主水では考えられないことであった。

仕事にかけるべき相手を端から見れば庇うような言動をしていた。

以前の仕事仲間が見たら驚きを隠せない姿だろう。

「それも言うと思っただぜ。そいつらならもうあの世に送っただぜ。イエーガーズお前が目の前で見てたじゃねえか」

「あの…」

主水の目の前で爆散した人物がその内の一人だと主水は理解した。

「で、どうするイエーガーズ？ 受けるのか、受けねえのか？」

「依頼料は？」

「この娘が自分を岡場所に売って作った金貨三枚だ」

少女の辛い心境が窺えた。自分の身を売ってまでして作った金貨三枚。強く悲しい怨みを感じた。

「分かった。その依頼金貨一枚で受けよう」

その言葉を聞き、天閉は心を撫で下ろしていた。

天閉はターゲットのボルスについても、下調べをしていた。

しかし、如何せん警戒心が強いことと、愛妻家のため、仕事を仕掛けるような夜遅くに外に出ることがなかったのだ。

そして一番の問題は、天閉の殺し方の問題だ。

天閉は相手の体内に口を通して花火を入れ、爆散させる。

しかし、マスクを常用するボルスには使えない。

それらが理由となり、天閉が手をこまねいていた所に主水が出てきたのだ。

故に天閉にとっては一石二鳥であった。



俯き地面に視線を向けていたボルスはポツリと呟いた。

「いつか報いを受けるときが来ると思っていたけど、まさか主水君の手で与えられることになるなんて思ってもいなかったな……」

先程まで夕陽が照っていた空を覆うように、厚い鉛色の雲が這い出してきている。

まるで、その場の二人の心境を表すかのように。

「じゃあなボルスさん。地獄で会おうぜ……」

主水は、陽炎が揺らめくように姿を消し、瞬時にボルスの背後に現れると、逆手で脇差しを抜き、躊躇なく突き刺した。

ボルスの胸から鮮血で真っ赤に染まった刃が突き出す。

無表情であった主水の表情は僅に歪んでいた。

「主水君……仕事とはいえ……話も聞かずに……問答無用で処刑してきた……私が……こんなことを頼むのは……卑劣だと思っただけ……頼んでいいかな……」

痛みに苛まれ、苦しそうに、途切れ途切れボルスは言葉を発する。

「なんだ？」

「家族を……時間がある時で……いいから……少し……気にかけてほしいの」

ボルスのマスクは吐血と涙でグショグショになっている。

心根は優しいボルスのこと、仕事でやりきれない思いをした時も、同様になっていたのかもしれない。

ボルスは、表に出せない表情を押し隠すことも、マスクを常用した数ある理由の内の一つにあったのかもしれない。

「この世に俺がいる限りはな……」

「あ……りが……とう……」

ボルス崩れ落ち、地面に血溜まりを作った。

主水は脇差しを振り、血を払うと、鞘に戻した。

(仕事人として逃れることが出来ない業か……)

雲間から雨が降りだす。

空も主水の仕事の終着を待っていたかのように……

「見届けたゼイエーガーズの旦那」

主水に歩み寄った天閉が声をかける。

仕事が果たされたというのに、天閉の表情も晴れぬものがあった。

同じ稼業に身を置くため、色々と思うところがあるのだろう。

「やり取り見せてもらったがよ……因果なものだな……」

まるで自分にも問いかけるように、主水に語りかける天閉。

主水はすぐには答えず、涙を流し始めた空を見上げた。

「……仲間も何もねえよ……俺は金しだいでどちらにも転ぶんだから

な」

一拍開けた後、主水は振り返ることもせず、突き放すように吐き捨てると、地に伏せ温度を失ったボルスの亡骸を肩に抱え、ゆっくりとその場を後にした。

◆◆◆◆◆

同時刻、ナジエンダ、スサノオから逃げきったクロメが苦しそうに地に腰を下ろしていた。

(あの異常な爆発はヘルビガンテの自爆によるもの…。ボルスさんはやられちゃったんだ…。お姉ちゃんはどうなったんだろう)

ボルスと戦っていた姉のアカメに思いが行く。

自分の唯一の家族。

小さい時から、どんな時も自分を守り、寄り添っていてくれた優しい姉。

しかし、帝国の暗殺部隊を脱退し、自分を裏切り帝都を出奔した。

「生きていてくれないと困るよ…また一緒にいるんだから…」

クロメは少し表情に影を落とすと、帝具〈八房〉を握り締めた。

「隊長と合流しなくちゃ…」

ふらつく足取りで、八房を杖に、少しずつ歩みを進める。

ナイトレイドのメンバーと戦っていた時の姿とはまるで別物である。

「うっ……きれてきちゃった…」

足を急に止めたクロメは、呼吸が荒くなり、脂汗を流し、ついにはその場に踞った。

「お菓子を……食べなくちゃ…」

震える手で『クロメのおかし』と書かれた巾着袋を取りだし、手を入れる。

袋の中のクッキーを掴んだ感触に、クロメの目には、安堵の色が表れた、その刹那、

「ごめんなさい…」

謝罪の声が辺りに響き、クロメの視界が天と地を一巡した。

回転する視界の中クロメが見たのは、血飛沫をあげる自分の首の断

面と、冷たい視線を自分に向ける、血塗られたエクスタスを持ったシエーレであった。

「お…姉ちゃん…」

「こんな悲しいこと、アカメにはさせられないから」

シエーレは、恐らく今生の最後の言葉になるだろう、クロメの言葉を聞くと、一度悲しそうな表情をした後、踵を返し歩き出した。

クロメの死に行く姿を見たくはなかったのだろう。

しかし、これが大きな隙を作り、そしてその後のシエーレの運命を決めた。

「痛…かった…よ!!」底冷えする声がシエーレの耳に届くと、シエーレの胸から血煙が立ち上る。

「えっ!?!」

状況が把握出来ず、混乱し激痛に苛まれながら振り返ると、落とされたはずの首が繋がり、目を血走らせたクロメが、八房をシエーレに突き刺す姿があった。

「なんで?・首を落としたのに…」

「あたしが教えてあげるわ」

シエーレの疑問に答えるように、白衣を靡かせたスタイリッシュな、虫歯のポーズをとりながら、したり顔をして、颯爽と表れた。

「簡単なこ・と・よ。クロメはね、薬で強化されてて、首を落とされてもしばらく生きていられるの。そ・こ・であたしが帝具神ノ御手へパーフェクターでチョコチョコイと首を繋いであげたってわけ」

曇天に両手を上げてポーズを取る。

恍惚の表情で。

「みんな…ごめんなさい。アカメ…役にたてなくてごめんね…」

仲間との思い出が脳裏をなぞる度、シエーレの頬を瞼から溢れた涙が伝う。

皆で過ごした、楽しいことも、厳しいこともあった濃密な人生。

それまでの走馬灯が走り、幕を下ろすと、シエーレの『命』の幕も下り始める。

直後、涙で歪んでいた視界が闇に染まる。

「大丈夫、あなたも私のおもちゃとして一緒にいられるから」

瞳を閉じ生き絶えたはずのシエーレは、クロメの帝具〈八房〉が怪しく光ると同時に、闇に染まった瞳を開きユラリと立ち上がった。

「私のおもちゃの出来上がり」

雨にうたれ、痛みを顔に歪めながらも、新たなおもちゃを手に入れたことにより、口の端を吊り上げてクロメは笑った。

「研究材料にしたかったのに、クロメのおもちゃになっちゃったわね」
言葉とは裏腹にスタイリッシュも薄ら寒い笑みを浮かべていた。

第49話

雨が降りしきるロマリーの街の片隅に、雨を凌ぐために目深に外套を被った一人の男が、何かを待つように、静かに佇んでいた。

何をするでもなく、微動だにしないので、すでに街の一つの景色と化している。

激しい雨のため、街中は閑散としており、雨音以外の音が存在しない中、一つの足音が男の元に近づいてくる。

足音の主たる一つの影は、番傘をさした主水であった。

「待っていたぜ」

外套を目深に被った男は主水を見て、不適な笑みを浮かべる。

「仕事は終わったの？」

主水は窺れた表情で問い掛ける。普段以上に疲れはてたという印象だ。

「ああ、なんとかな。助かったぜ」

男が答えを返すと、主水は右手で指の間の一本一本にメイク道具を挟み、振ると、主水は白い煙に包まれ、掠れ、みるみるうちに姿がチエルシーのものとなる。

「本当に大変だったんだよ。エスデスは鋭い眼差しで見てくるわ、拷問させろって言うてくるわで、気を抜けなかったのよ。今までの仕事の中で一番大変だったよ」

「その表情を見りゃあ分かるな。悪かった」

外套を被った主水は労を労うように笑みを浮かべた。

「もう、ストレス溜まりっぱなしだよ。解消のためにやけ食いして太ったら責任とってもらうからね」

「ああ、一緒に運動すりゃあいいか？」

主水の答えに、一度ポカンとした表情をチエルシーが浮かべた後、半目になって意味深な笑みを浮かべ、顔を近づけてきた。

「主水、それセクハラだよ」

チエルシーの指摘に、今度は主水が少し思案する。

主水としては、タツミと修行していたことを頭に浮かべて、そのよ

うなことを言ったのだが、チエルシーは主水をからかうために、別の際どい解釈をし、主水がそれに、どのように対応するかを楽しんでいた。

(タツミならあたふたしながらおもしろえ反応するだろうが、俺には通じねえぞ)

チエルシーの思惑に気づいた主水は口の端を吊り上げると、ずずいと詰め寄り、壁まで追いやると、壁に手を当て、逃げ場を無くす。

つまり壁ドン状態で、耳元で囁く。

「チエルシーはそつちを考えたのか、そつちに考えがいくつてえなら、おめえも溜まってるんだな。今夜でも付き合ってるか？俺はお前なら大歓迎だぜ」

「えっ!!」

チエルシーの顔が茹で蛸のように真っ赤に染まる。耳までも朱に染まっている。

「わ、私はそんな意味で言ったんじゃ…」

あたふたと視線を右往左往させ、挙動不審な動きを見せる。

「ふっ」

「へ?」

「最高の反応だ。気が和らいだぜ」

主水は腹を抱えて笑いだした。

「主水に一本取られちゃったな」

チエルシーも、笑いながら言うが、目は全く笑ってはいない。負けず嫌いな性格が表れていた。

しかし、次の瞬間チエルシーは何か気づいたような動きを見せると、真からの歪んだ笑みを浮かべる。

主水は主水で、何か冷たいものを背筋に感じて周囲を見回す。

「蒔いた種は育ちきつたみたいね。楽しみ、楽しみ」

チエルシーがウキウキしながら、視線を向けた先から、雨音以外の足音と、

「も〜ん〜ど〜く〜ん」

と間延びした声で主水を呼ぶ声が。

「ありやあせリユーじゃねえか。どうしたんだ。何かしたんじやねえだろうなチエルシー？」

嫌な予感がした主水はチエルシーに視線を向けるが、既にその場にチエルシーの姿はなかった。

首を傾げる主水の肩がポンポンと叩かれる。

何か嫌な予感をビンビン感じ、頭の中に警鐘が鳴り響く。

主水の危険察知能力が働いていた。

恐る恐る主水が振り返ると、声とは違い、顔に影が射し、無表情でずぶ濡れのセリユーが肩に手を置いていた。

その瞳は、底無し穴に広がるような、漆黒の闇を湛えていた。

「お・は・な・し・きかせてほしいな」
「？」

全く抑揚のない声が、不気味さを醸し出している。

だが何がなんだか全く分からない主水。

(チエルシーの野郎俺に化けているとき、セリユーになんかやらかしかやがったのか)

「えくと、なんの話でしょうかセリユーさん」

考えても無駄なので、刺激しないように、出来るだけ丁寧に、探り探り尋ねる。

「お店に行ったことだよ」
(店?)

主水の頭の中に浮かぶ店は、最近であれば甘味処しか思いあたる所がなかった。

(怒ってるてえことは、甘味処に連れていかなかったことを、俺の姿でチエルシーがばらして、怒らせたのか)

検討違い甚だしいことを考えていた。

しかし、主水が導き出せるのはこれが限界であった。

まさか女郎とハッスルしたなんて言っているとは、夢にも思うはずがない。

「すいません。ついついうまさうで、我慢できずに食べてしまったんです」

「じゃ、じゃあ、あの話は本当だったの!!」

「はい、おそらく」

「!!」

セリユートの無表情だった表情が瞬時に驚愕と絶望と悲しみと憤怒の交ざった複雑なものに変わる。

盥一杯に涙をため、顔は真っ赤に染まり、体はプルプルと震え、虹色のガントレットからはスパークが飛び、雨粒を蒸発させていく。

(なんだこのエスデスをも超える殺気は、しくったか)

主水はその恐ろしさに気圧されていた。修羅場を果てしなく潜ってきたあの主水がだ。

一歩主水が後ずさると、俯いたセリユートが一歩進む。

「主水君のー」

セリユートは腕を大きく振りかぶる。ガントレットからはセリユートの心境を表すように、多数のスパークが弾け、辺りに音がこだまする。

「バカーー！ー！！！！」

主水（パパ）に裏切られたように感じたことからの絶望、自分の知らない所で行われた不潔な行いへの怒り、どこその馬の骨か分からない女に主水（パパ）を取られたことに対する嫉妬、あらゆる負の感情がない交ぜになり、爆発した力が込められた拳が主水に迫る。

(ヤバイ！死ぬ!!)

主水は脊髄反射の域で、とつさにアレスターを抜き、守りを固める。幾多の修羅場に遭遇してきた経験がものを言った。

セリユートの拳がアレスターに迫る。

存在する金属の中で最高の硬度を誇る、神から人類が下行されたオリハルコンで作られたアレスターが軋むようにすら感じられる程の破壊力。

(マジか!!)

殺し切れない勢い。

辺りには爆音に近い音と、突風のような衝撃波が走り、辺りのガラスが砕ける。

だが、まだそれは序の口であった。

セリユーが拳の手の内をしめ、そしてアレスターに交錯した。

主水の教えがここで出たのだ。

桁違いの爆発的な威力が主水を襲う。

耐えきれず、主水は吹き飛び、お星さまになった…

「もう、主水君なんか知らない」

雨雲の向こうに消えた主水を見据えるように眩くと、セリユーは悲しそうな表情を浮かべた。

そのずぶ濡れの背中には、哀愁が感じられ、寄り添うコロも主人と同じように、静かに佇んでいた。

主水が再び吹き飛ばされた先から、ロマリーの街に戻ってきたのは、二刻あまり経った後のことであった。

体はボロボロ、服は泥だらけでヨレヨレになっていた。

杖をつきながら歩く姿には、悲壮感が漂っている。

(や、やっと辿り着いた)

主水は生還し再びこのロマリーの街に戻ってこれた嬉しさを噛み締めながら、滞在中の宿屋に向かう。

もう既に外套は雨を凌ぐことさえ出来なくなっているの、泥だらけの上、ずぶ濡れになっていた。

「大変な目にあつたようですね主水さん」

宿屋の前で待っていてくれたのだろうか、ランが主水に歩みより、傘を差し出してくれる。

主水にはそのような心遣いが嬉しく、頭を下げた。

「ありがとな。しつかし大変な目にあつたぜ」

しみじみと語る主水に、ランは苦笑いを浮かべると、

「私も男ですから、主水さんの気持ちも分かります。そして、率直に話すことにも好感が持てます。しかし、慕われている女性にあのような答えをするのはどうかと思いますよ」

たしなめるようにランは話ってくる。

(チエルシーは一体俺の姿で何を言いやがったんだ)
ますます気になるチエルシーの発言。

ランの発言からすると、男ならではのようだが、
いくら考えても分からない。

(しょうがねえ)

主水はどうしても知りたくなり、賭けに出た。

「すいませんが、さつきセリユーに殴られて、何を言ったか記憶が無くなってしまうして。後学の為になんて言ったのか教えてくれませんか」

記憶喪失を装い尋ねる。

「大丈夫なんですか？」

ランは心配そうに尋ねてくる。

「はい、大丈夫です。発言した辺りの記憶がなくなっただけですから」「そうですか。ではお話します。主水さん、あなたは『昨夜色町で、女郎と朝まで張り切ってしまいました』と言ったんです」

主水は絶句した。

(チエルシーの野郎なんてこと言いやがったんだ。いくら俺でもそんな軽卒な発言するわけねえだろ)

心の中で絶叫した。

(つてえことは…)

主水は先程のセリユーとの会話を思い出すと、血の気が引いた。

(俺は甘いものについて聞かれたと思い、「ついついいうまそうで、我慢出来ずに食べてしまったんです」と答えた。だが、セリユーからすると、「ついつい、女郎がうまそうで、我慢出来ずに食べて(やって)しまったんです」と解釈しちまったのか)

主水の脳裏に、悪魔の笑みを浮かべたチエルシーが、ニシシと笑う姿が想像された。

(俺の負けか…だがこのまま済ませる訳にはいかねえな)

主水はもうセリユーに顔を会わせられないかと考え、一方では、貸しどころでは賄えないぞチエルシーと心を復讐に燃え上がらせていた。

第50話

暗雲立ち込める安寧道本部のキヨロクに、ナイトレイドとイエーガーズが、入り方に違いはあるが、既に到着していた。

共に大きな傷を抱えて。

ナイトレイドでは、シエーレが帰らず、仲間の不安は極限に達してはいたが、任務優先から、キヨロク行きを決断した。

イエーガーズでは、スタイリツシユにより弱ったクロメがロマリーに運び込まれたこと、ボルスの死体がロマリーの街の周辺で発見されたこと、この二点が少なからず、仲間に同様を与えていた。

しかし、こちらに至っては、帝都のオネスト大臣から、キヨロクの安寧道の教主補佐ポリツクを護衛するように、命が飛んだためキヨロクに速やかに向かうことになった。

「相変わらず動きにくい服だな」

「意外と似合ってますよ主水さん」

用意されたスーツを着用しながら、不満を口にする主水に、ランが笑顔で肯定する。

あの一件以来、ランに気に入られたようである。

ランもその容姿から色々な女性関係があつたのだろう。

だが、その一件以来、セリユーは主水と目すら合わせようとはしなかった。

「せっかくの歓迎会だ。開き直って楽しめ。何か面白いものがあるかもしれないぞ」

着飾ったエスデスと共に、イエーガーズの六人がポリツクの私室に立ち入る。

室内は、宗教団体とは思えない光景が広がっていた。

質素であるべき食事は、豪華絢爛で、殺生の証となる肉や魚も食卓に上がり、禁欲のきの字もないほどに、美しい女性で満たされていた。

その先の玉座に座る、護衛対象のポリツクには、美しい女性が群がり、不快感極まる姿を晒していた。

その様を見て、仲間たちも僅に表情を曇らせていた。

(外道を絵に書いたようなやつだな…)

主水も同様に眉をひそめていた。

「これはこれはエステス將軍。わざわざ貴女が来てくださるとは、大変心強いですよ」

膝を組み、ふんぞり返りながら話すボリック。

誰もが嫌悪するような態度ながら、エステスは平然と対応している。

「大臣から指令を受けたんでな。部屋をいくつか借りるぞ」

「ご自由に。私の屋敷は退屈しませんよ」

女性に視線を這わせながら、ボリックは下卑た笑みを浮かべる。

イエーガーズの面々では、ウェイブは呆れた表情を、ランは苦笑いを、セリユーは汚い物を見るような目で見ていた。

スタイリツシユやクロメは無関心のようだが。

「興味はないな。が、私達がこの部屋に入ってからずっと覗いているやつには、会ってみたいがな」

エステスは鋭い視線を天井に向ける。

そこにいるのは分かっているとでも言うように。「流石ですエステス將軍」

ボリックが指を鳴らすと、四つの影が音もなく舞台に舞い降りる。

「こやつらこそ、私が教団を牛耳る為に大臣から預かった暴力の化身、皇拳寺羅刹四鬼です」

胴着を纏う強靱な肉体を持つ男、ボクサーのような姿をした男、袴姿の顔に傷を持つ女性、胴着を着崩し褐色の肌をした女性。

皆様相はバラバラだが、纏うヒリヒリと肌を刺激するようなオーラは皆同じであった。

「將軍がお越しくださったため、今まで護衛に専念させていたこの鬼達を迎撃に使うことが出来ます」

「ま、待ってください」

ボリックの発言を聞き、セリユーが待ったをかけた。

二度ナイトレイドと拳を交えたからこそ、その実力を認め、安易に攻撃を仕掛けるべきではないと、ボリックに待ったをかけたのだ。

「ナイトレイドと戦うのに帝具なしでは…」

セリユーが前に一步進み出た所で、壇上の一つの影が消えた。

「……………」

突如セリユーの後ろに現れた男は一瞬身を硬直させた。

「どういうつもりですか」

瞬時に身を翻し、男に鋭い視線を向けたセリユーは、顎に接するか接しないかという所に拳を突き付け、コ口は今にも食い殺さんばかりに牙を向いて口を開いていた

「流石イエーガーズ。ゾクゾクするぜ、惚れちまいそうだ」

陶醉した表情で主水を見る男。

（フツ、気づいていやがったか）

男がセリユーの背後を取ろうかと迫った折りに、主水は男に対して殺気を放っていた。

一般人なら失神する程の殺気。主水としては抑えてはいたが。

そのため、セリユーの背後を取った男は、僅に動きを止めたのだった。

「……………」

主水はさらりとその視線を流し、無関係を装ってはいいたが。

そんなこんなで、お開きになり、解散となった。

「主水君…」

幾つかの食べ物を取り、部屋を後にしようとした主水に声がかけられた。

「セリユーさん……………なんででしょうか？」

声をかけてきたのは、あの一件以来目を合わそうともしなかったセリユーであった。

僅に主水もどきまぎししながら返事をする。

「さつきはありがとう。私が狙われた時に、相手の動きを止めてくれて、あれがなかったら、相討ち気味だったと思う」

「出過ぎた真似をしたかなと思いましたが」

「そんなことはないよ。ありがとう主水君。それと今までごめんね」
嬉しそうに、顔を赤らめながら笑顔でセリユーは浮かべていた。

翌日、からりと晴れた日本晴れの中、セリユーは昨夜と違い、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「どうしたんだセリユー？」

「あ…隊長」

部下に気をかけるエステスは直ぐにセリユーの異変に気付き、声をかける。

「あのポリツク、わざわざ隊長がいらっしやっつてまで、守るに値するやつとは思えなくて…」

セリユーは正直に心情を吐露した。

エステスに心を開いているからこそ、仕事を批判するようなことも、正直に話したのだ。

「あいつはナイトレイドのエサと考えとけばいい」

エステスはクスリと笑うと、セリユーを批判するのではなく、肯定した上で助言した。心得を。

「そうですね……」

エステスの答えに頷きながらも、どこかぎこちない笑顔を浮かべる。

やはり納得しきれないようだ。

「お前は気を張りつめ過ぎているぞ。中村を見習え」

エステスが指を指す先には、警護の任を堂々とサボり、子供と戯れる主水の姿が。

「お前ら、教団内の敷地全てでかくれんぼするぞー」

「はーいー！」

「……いや、中村ははめを外し過ぎだな…あとでノーマル拷問コースBだな。だが…」

エステスは呆れたような眼差しで主水を見た後、少し思案すると、「おい子供達、そのオッサンの彼女も仲間に加わりたみたいだぞ」

「ちよ、ちよつと隊長!!私と主水君は…」

顔を真っ赤にしてモジモジしているセリユーに、

「休憩時間だ。突発的な余興も良いものだぞ」

エスデスはそう告げ、ポンと背中を押した。

◆◆◆◆◆

「おじさん見—つけた」

「見つかったか」

日が傾き始めた頃合いに、主水とセリユ、子供達はかくれんぼに興じていた。

「おじさんいつもボリツク様の家の周りに隠れてるんだもん。見つけるの簡単だよ」

「広すぎてまだ把握しきれなくてな。じゃあ帰るか」

「うん」

主水は優しい眼差しを向け、帰るのを促した後、鋭い視線でボリツクの屋敷を一瞥し、微かに口許を上げた。

「そろそろ終わりにするぞ」

主水が子供達を呼び集める。

日は暮れ始め、辺りは鮮やかなオレンジ色に包まっている。

「暗くなる前に帰らねえと家族が心配するからな」

「はい。また明日も遊んでねおじさん、お姉さん絶対だよ。さようなら」

「気をつけて帰るんだよ」

子供達は名残惜しそうに帰っていく。後ろ姿を見守るセリユも僅に寂しそうに感じる。

初めはエスデスに促されてしぶしぶ遊んでいるという感じであったが、次第に心から楽しんでるように見えた。

「楽しかったね。純粋な子供達と遊ぶのが、こんなに楽しいとは思わなかったよ」

「そうですね。子供はかわいいもんですね」

小さくなっていく子供達の背中を見ながらしみじみ話していた主水とセリユだが、ここで主水とセリユは、一人だけその場から動かない少年がいることに気づく。

「どうしたの？」

いち早く気づいたセリユが腰を屈めて、少年に目線を合わせて尋

ねる。

「お姉ちゃんが迎えに来てくれるのを待ってるんだ」

屈託のない笑顔で答える少年。

おそらく安寧道の本部に勤めているのだろう。

「セリユーさん、見回りの時間ですよ」

不意にかけられる声。

爽やかな笑顔でランがセリユーを迎えに来ていた。

「どうしよう主水君…」

「後は私に任せて下さい。自由時間ですから」

セリユーにランと見回りに行くように促す。

どの口が言うと、エスデスがいたら言うだろう。

「あつ主水さん。隊長から言伝てがあります。夜に部屋に来るように
ということですよ」

「あ〜…夜伽を求められてるのか」

困った笑いを滲ませ、ボソツと主水が呟いた瞬間、辺りが白むほどの冷気がセリユーから溢れだした。

「失言ですよ主水さん…」

「隊長をそんな目で見ているの?」

闇に沈んだ瞳を向けられ、本能的に恐れおののいた主水は

「軽い冗談です」

即座に頭を下げ事なきを得た。

見回りに行く二人を見送る主水の頭の中では、エスデスのノーマルレベルの拷問が頭を巡っていた。

辺りに夜を告げる鐘の音が響く。

季節が季節のため、まだ日は暮れきってはいないが、夜の闇が迫ってきているのは確かだった。

「家を教えてくれりゃあ送って行ってやるぞ」

「お姉ちゃんを待っていたいです」

真剣な小さな眼差しが主水に向けられる。

主水は軽く頷く。

「そうか。姉ちゃんが好きなんだな」

「はい」

そうかと言った表情で少年を見ると、思い立ったように置いておいた包みから、団子を取り出す。

「腹減ったろ。食うか」

「えっいいんですか」

仕事をサボり、どこか景色がいい所で食べようとしていた団子だった。

少年は遠慮しているのか、受け取ろうとしない。

だが、瞳は団子に釘付けとなり、さらには腹が大きく鳴った。

「体は正直だな。さあ食え」

「ありがとうございます」

主水と少年は団子を食いながら、暫く話をしていると、

「ごめんね待たせちゃって」

後ろから愛らしい声が聞こえてくる。

「あっお姉ちゃん」

少年はぱつと表情が晴れ渡ると走っていく。

少年が駆け寄る姉は、年の頃は14、5才か。白く張りがある肌とは対照的な、柔らかそうな流れるような黒髪。サラサラと風にそよぐ黒髪は長く、腰の辺りにまで達している。

容姿は年齢よりも幼さを感じさせるもので、綺麗というより、可愛らしく、小動物のような愛らしさをも秘めている。

ただ少年を優しく見守るその姿は、姉というより母性を感じさせる。

「弟を面倒見てくれてありがとうございます」

弟共々、丁寧に頭を下げる姉。礼儀がしっかりしていることが伺える。

「いや、気にしなくていいぞ。暗くなってきたからな、気をつけて帰るんだぞ」

主水は少年の頭を軽く撫でると、片手を上げて去っていった。

重い足取りで帰る主水を待ち受けるのは、見回りの仕事をサボったことに対する、エスデスからの罰の、ノーマルレベルの拷問であった。

第51話

清々しい朝を迎えるように鳥の囀り音が、淀みない新鮮な空気が、新しい日の到来を告げる。

誰もが心地好いと感じるような朝であるのに、主水にはそうではなかった。

目の下には深くまができ、見るからにゲツソリとし、くたびれ果てた様相である。

「体中がまだ悲鳴を上げてやがる。エスデスの野郎嬉々として拷問しやがって。これじゃあ体がもちやあしねえ」

昨夜の苛烈な拷問を思い出す。

主水がエスデスの部屋を訪れた時には、これ何に使うの？というような奉行所の尋問部屋でも見たことがない器具が、選り取りみどりに、ところ狭しと広い室内に、置かれていた。

そして、その器具の使い心地を確かめるように、陶醉とした表情のエスデスが、罰という名の拷問を明け方まで続けたのだ。

「野郎、いつか仕事にかけてやる」

体の具合を確かめるように、動かしながら嘯く。

今回に限っては、普段のようなエスデスの趣味趣向による理不尽な拷問ではなく、ある意味自業自得なものであるのだが。

持参してきた着流しを着用していると、扉をノックする音と共に、「おはようございます。開けてよろしいでしょうか？」

声がかけられる。

「ん、誰だ？」

主水は、丁寧な挨拶の為、警戒心を僅かに緩めながら、扉を開けた。開かれた扉の前には、メイド服を来た少女が、深々と頭を下げている姿が。

「イエーガーズ様のお世話を申し付けられました、シズクと申します」
緊張しているのか、震える声で、依然として頭を下げたまま挨拶をする少女。

「そうか、まずは顔を上げてくれねえか？」

「はい」

か細く消え入りそうな声で、返事をする少女は、ゆつくりと顔を上げる。

「あっ…」

「おめえは…」

顔を見合わせるように動きを止める二人。

共に見知った相手だったのだ。

「あっ、その節はソウタの面倒を見て下さりありがとうございます」
再び深々と下げられる頭。

昨日弟を迎えに来たあの少女だった。

「あの坊の姉ちゃんだったか」

「はい」

(やはり教団内で働いていたか)

「緊張してるみてえだが、気抜いていいぞ」

昨日の弟を迎えに来た時の姿とは全く違うので、頭を掻きながら参ったなどといった感じで主水は話す。

「いえ、イエーガーズ様に無礼な真似は出来ませんので…」

はあと深くため息を吐くと、

「気をつかわれちまうとつかれちまうから、俺のために気を抜いてくれ」

頭に手を置き、優しく話かけた。

どう接すればいいか、分からなかったため手探りをしながらといった感じだ。

ただ、頭に手を置かれた瞬間、ビクリとし、暫く身を縮こませるように、硬直してしまったため、逆効果であった。

「シズクは俺のお世話係になったのか」

「はい。イエーガーズ様が快く滞在出来るように、お手伝いするようにと」

「そうか」

(自由に探る時間が制限されるかもしれないねえな)

少し思案するそぶりをすると、少女の表情が固くなる。

「お気を害しましたか」

「いやいや、大丈夫だ」

消え入りそうな声で目を潤ませる少女にタジタジの主水。

やりにくさを感じながらも、何とかしないと考え、部屋の中に招き、共通の話題から繋ごうと試みる。

「シズクはここで働いているみてえだが、親と一緒に働いているのか？」

「…両親は亡くなりまして、教主様のお陰でここで働かせていただいています」

気丈を装いながら、儂げな笑顔を無理して作るシズク。

「悪かった」

「いえ…」

気まずい沈黙が流れる。

「そ、そうだ。腹が減っちゃったから飯を貰えると嬉しいんだが」

「分かりました。少々失礼します。用意してきます」

丁寧に45度の挨拶をし、部屋を後にした。

少女が出ていくのを見届けると、無意識に息を吐いた。
すると、

「タジタジだったね。あゝ面白かった」

初めて見る、こちらもメイド服を纏った女性が、笑いながら部屋に気さくに入ってくる。見知った仕草で。

「……………。チエルシーか」

「当ったりー」

白い煙が沸き、晴れるとイタヅラな笑みを浮かべたチエルシーが姿を現した。

「おめえのせいでひどい目にあっただぞ。とんでもねえこと言いやがって」

「そうかな。主水を演じたら自然に出た言葉なんだけどなく」

からかうように話すチエルシー。

「はあ、まあ今はいい。でおめえは偵察か？」

「そうだよ。先に入っていた偵察隊の話によると、どうもボリツクの

部屋には墓場に通じる抜け道があるみたいで、悪行を確認しながら、そこら辺も探るように言われてね」

(あの部屋か)

ポリツクの私室は到着した当日に訪れた部屋なので、思い出しながら考えるが。いまいち記憶が曖昧で何も気づくことはなかった。

「チエルシーなら心配ねえとは思うが、気をつけろよ」

「大丈夫だよ。危ない羅刹四鬼は外に出てるし、私が世話するように言われたのはウェイブってイエーガーズで、結構鈍そうだし、女に馴れてないみたいで、からかうと面白い反応するんだよ。まるでタツミみたい」

(ウェイブじゃあチエルシーには勝てんな。遊ばれるだけだ…)

「分かったが、油断はするなよ」

「分かってるって、私の仕事は完璧だから」

チエルシーは再び入ってきた姿に戻ると、「じゃあね」と帰って行った。

入れ替わりに湯気が沸き立つ食事を持ったシズクが現れる。

「おいしい匂いだな」

匂いによって食欲を掻き立てられた主水は感想を漏らす。

「口にあうと良いのですが」

自信なさげに出された食事を見て、主水は感動した。

焼き魚に、だし巻き卵のような物、そして汁物といったって普通の物。しかし、主水にとっては感涙ものであった。

江戸では、決まってメザシや海苔ばかり、そしてナイトレイドでは飽きるほどの肉づくし、日本人としての本能を呼び起こされたのだ。

「いただきます」

手を合わせて、マイ箸を懐から出すと、相当な勢いで食べ始めた。因みに、主水の箸は、スサノオ作の匠の品であり、漆塗りで精巧な彫りが施されたものである。

「こんなうめえ朝食初めてだぜ。ありがとよシズク」

食べ終わった主水は笑顔でシズクに礼を言う。至福の時だったと言わんばかりに。

「あ、ありがとうございます」

シズクは満面の笑顔で答えた。

「初めて笑顔見せてくれたな」

「あっ」

言われて初めて気づいたといった感じのシズク。

「私がイエーガーズの皆さまのお世話となった時に、仕事仲間が、イエーガーズの皆さまは恐ろしい人ばかりだと言われて。少し機嫌を損ねると命はないと言われて…それだけでなく、私のお世話する方は…」

「俺は？」

「女色を好むお方ですぐに寢床に引き込まれると、シエルチさんが…」（シエルチ…：チエルシーか。またしても）

風評被害がチエルシーにより酷くなっていくのをヒシヒシと感じた主水であった。

「でも、穏やかで優しい人のようで。安心しました」

「そうかそれは良かった」

主水も笑顔で返すと、徐に立ち上がり、太刀と脇差しを帯の左に挿し、アレスターを右に挿し、中村家の紋が刺繍された羽織を羽織る。

「お仕事に行かれるのですか」

「まあな。シズクはどうするんだ？」

「私はこれからは主水様の世話だけをするように言われたので、洗濯やお掃除をさせていただきます」

少し主水は考えると、

「俺の仕事手伝ってくれねえか」

と提案し、

「私に出来ることでしたら…」

と言うシズクを伴い、仕事に向かった。

主水とシズクが広場に訪れると、既に子供たちとセリユーがところ狭しと遊んでいた。

「あっ主水君おはよう」

「おはようございますセリユーさん」

主水に気づき駆け寄ってくるセリユー。

「あれその娘は？」

「この娘は私のお世話を命じられたシズクです」

「よろしくお願いします」

緊張の面持ちで挨拶をしるシズク。やはりまだ主水以外のイエー
ガーズに恐れを抱いているらしい。

「こちらこそ」

二人が挨拶をするのを見終っていると、

「おじさんおはようございます。約束守ってくれてありがとう。遊ば
う」

子供達が主水に群がる。

「よし、何するかなあ」

「えっ!!」

セリユーとシズクの声はもる。

「主水君（様）巡回の仕事はいいの（ですか）」

「これも大事な仕事ですよ。それにナイトレイドについては何とか四
鬼が探しているので大丈夫でしょう。足手まといになりたくないの
で」

あつけらかなとして話す主水。全く懲りたというか、反省した様子
は見られない。

「主水さーん。どこにいるんですかー。俺達の見廻りの番です
よー」

ウェイブが焦った声で走りながら主水を呼んでいる。いつになっ
ても現れない主水を探しに来たのだ。

「おめえら、今日もかくれんぼだ。セリユー鬼頼んだ」

主水は早口で告げると、ウェイブから逃げるように立ち去った。

丸一日子供と遊び、時が過ぎた。

既に日は暮れ始めセリユーは巡回に、子供達も家路についた。

「シズクも今日はありがとな。今日はあがってくれて構わねえぞ」

「ありがとうございます。でも晩御飯はいいんですか？」

「ああ、どうにでもなるからな。ちょうどいい。街に買いに行きがて

ら、もう暗いから送っていくぜ」

「えっそんな悪——」

「やったー!」

遠慮しようとしたシズクを遮るようにソウタは喜び、連れだつて街に出る。

既に夕飯時は過ぎ、人は居なくなり、外灯に日が灯るなか、街のメINSTORIートに差し掛かる。

「家はこの先です」

「あれ何?」

ソウタが何かを見つけたのか走り出した。

突然足を止めたソウタに追いつくと、三人に衝撃が走る。

そこで見たのは、地に倒れたラバックとそれを見下ろすように立つ羅刹四鬼のシュテンとメズであった。

(ラバックは死んでるのか……いやコイツらは気づいてはいねえが微かだが息はある。死んだふりといったところか)

主水は状況をいち早く悟り、冷静さを取り戻したが、姉弟は青ざめた表情で立ち尽くしている。

初めて死んだ、それも殺された人を目の前で見たのだ、ショックを受けて当然である。

「これはこれはイエーガーズの。このナイトレイドはワシが救いを与えましたぞ」

「それはそれは御苦労様です……」

シュテンに頭を下げる主水。それを見て満足気なシュテン。「たいしたことなかったけどね」

腕を頭に組ながらメズも話す。

「では我々はこれで」

二人を連れ、その場を立ち去ろうとしたその刹那。

「待たれよ。ことの顛末を見てしまった小さき二人の迷い子にも救い与えねば」

シュテンが三人の前に立ち塞がった。

裏の仕事を見たものは、何者でも生かしておけないということだろ

う。

「この姉弟は安寧道の信者です。ここで見たことも決して口外することはありません。どうかお見逃しを」

主水は懇願するように、丁寧に説得を試みた。

しかし、

「ワシらには知ったことではない。ワシらの主はオネスト大臣であり、ポリツクではないのだからな」

決して認める気は更々ないようであった。

もしも、邪魔するならば、お前にも救いをとでも言うかのように、恫喝気味に言い捨てた。

(どうするんだ主水の旦那)

死んだふりをしているラバックも気が気でない。

ある意味自分がこの一件の発端であるからだ。

(しかたねえな)

主水の表情が消えた。

直後、主水の姿も闇に溶けるように消える。

「この二人に手を出してみろ。おめえにも俺が救いを与える」

シュテンの背後を取った主水が突き刺すような殺気を叩き付け、シュテンのみに聞こえるように囁いた。

今まで味わったことがないほどの殺気と威圧感に言葉を失う。

幾多の修羅場を、鍛練を乗り越えてきたが、それすらも霞むほどの、恐怖をまざまざと見せつけられ、シュテンは立ち尽くしていた。

「さあ、行こう」

動きを止めたシュテンを無視し、二人を連れ、主水は去っていく。小さくなっていく背中を黙って見送るしかシュテンには出来なかった。

「どうしたのシュテン。何で見逃したの」

「…ワシは人間には救いを与えられるが…本当の鬼には救いは与えられん」

青ざめた表情でシュテンはポツリと呟いた。

(さすがだぜ主水の旦那。だが、俺はいつまで死んだふりしてりやあ

いいんだ)
ラバックは心の中で嘆いていた。

第52話

教団内の一室で、籠りつきりで一心不乱に作業に没頭するスタイリツシュの姿があった。

動かすのは帝具へパーフェクターを填めた両手のみ。作り出されていく物は、人知を超えたオーバーテクノロジーの逸品。

しかし、スタイリツシュの目標は帝具と同レベルの物であり、今作成している物では、全く満足出来てはいなかった。

「あー、上手くいかないわねえ」

手を高く上げて背伸びをする。

没頭していたためかなりの長時間、同じ体勢でいたため疲労が溜まっていた。

「少し睡眠を取ろうかし——」

ベッドに横たわろうとした時だった。

スタイリツシュの第6感が何かを感じ取った。

「何かが、何かがこの教団内で行われているわ。あたしのリビドーをたぎらせる何かが」

今まで疲れていたのが嘘のように、スタイリツシュは何かにつ張られるように部屋を飛び出した。

スタイリツシュは風の如く走り抜け、迷うことなく目的地にたどり着いた。

ノブが潰れ、罫が入り、外れかけ、がたついている扉の部屋。

何があったのか想像も及ばない程の姿になった、哀れな扉の有り様。

主水の部屋だった。

しかし、スタイリツシュはそのようなことにかまうことはない。

何故なら、部屋の中からスタイリツシュのみが感じ取れる妖艶な空気が感じられるのだから。

様子みとばかりに、スタイリツシュは扉に耳を傾けた。

「あつ、あつ…気持ちイイです主水さん」

「気色悪い声を出さないでくださいよラン」

「も…申し訳…ありません…んっ…主水さんのテクニクが…素晴らしくて」

普段聞くことのないランの乱れたあられもない声に、スタイリッシュは思わず息をのんだ。

（きつとランと主水が絡んでいるのね！この部屋にあたしの望む快樂の世界が！）

妄想が力となり、たぎる心を抑えられず、スタイリッシュは迷わず扉を開け放った。

「あたしも仲間にはいるわー昇天させてー!!」

約一刻前の昼下がり、主水は部屋でまったりと、シズクはその横で働いていた。

「シズク、いいか？」

「何でしょう主水さん」

シズクは既に主水に心を開き、『様』付けから『さん』付けに変わっていた。

「前までかかあにさせられていたことがあったんだ。今までなんとなくしていたんだが、無くなった瞬間無性にしたくなってな。させてくれねえか」

「私でお役にたてるなら」

何をとは聞くことなく、頷くシズク。主水を信頼し、酷いことはされないと思ひ込んでいたためだ。

たった少しの間ではあるが、二人の間には、親子ほどの信頼関係が結ばれていた。

「じゃあそこに横たわってくれ」

主水の要望に、シズクは従い、メイド服が皺にならないように横になっ

「もう主水君ったら。皆集まってるのにどうしたんだろ」

「キュウキュウ」

セリユーが広場に現れない主水に痺れをきらせて、主水の部屋まで迎えに来ていた。

セリユーもコロも同じように腕を組ながら。

主水の部屋の前についたセリユーは、ノックをしようと軽く腕を上げた、その瞬間、

「アツ…主水さん…痛いです…」

「すまねえな。小さくて加減が出来なくてよ」

妙に色っぽい声と、ギシギシとベッドが軋む音が室内から漏れてくる。

(えっ!?ちよ、ちよっと今の声なに!?主水君何してるのよ!!)

セリユーはパニックに陥り、更には血の気が引き、状況を探るため、また嫌な想像をかきけすために、扉にへばりつき、聞き耳をたてる。頭の中では、以前主水が言ったあの言葉が駆け巡り悪夢が蘇る。

「ウェイブをからかうのは楽しいわね。でもそろそろ仕事もしないとね」

チエルシーは化けたままの姿で、飴を口の中で転がしながら、教団の宿舎内を歩いていた。

角を曲がり、イエーガーズの面々が陣取っている部屋が続くため、警戒心は怠ることはない。

そして、長い廊下の間辺りで見えた光景に、僅かに戸惑いを受ける。

(あれはセリユー…主水の部屋を盗み聞きしている!!それも真剣な顔で)

目に入ったのが、セリユーが主水の部屋に聞き耳をたて、それを心配そうに見つめるコロの姿だった。

(もしかして主水がバレたの。いや主水がそんなへまをするとは思えないし。まずは確認しないと…)

チエルシーは覚悟を決めるとセリユーに歩み寄った。

「イエーガーズ様。こんなところでどうかなさったのですか」

「……………」

セリユーはチエルシーの問い掛けに、返事もせず微動だにしない。

中の音を聞くのに集中しているために聞こえていなかった。

(何、シカト)

チエルシーが少しイラツとしたその時、

「ア……アン……す、すごいです……」

室内から淫靡な声が微かに漏れてくる。

(な、何なの今のイヤらしい声!?何をやってるのよ主水!!)

チエルシーもいてもたってもいられず、セリユー同様、扉に耳をつけた。

(隊長にお暇をもらったので、こんな時間ではありませんが、主水さんとウエイブを誘って、お酒でも酌み交わせたら)

日頃の労をエスデスが労い、ランに僅ながらの時間を与えたため、ランが一升瓶を持ち、主水の部屋に向かっていた。

「おや、あれは……」

ランの目に入ってきたもの、それは、セリユーとメイドが主水の部屋の扉にへばりつき、聞き耳をたて盗み聞きをし、その二人を静かに見守るコロの姿だった。

セリユーは顔に影が射し、メイドは顔を蒸気させ、真剣に聞き入っている。

「そんな所で何をしているのですか?」

「……………」

「……………」

集中力を研ぎ澄ませた二人に、声は届くことはなかった。

「聞こえていないですか。コロは分かりませんか」

「キュウウ……………」

寂しげな表情を浮かべるコロ。

(一体何が二人をここまで惹き付けているのでしょうか。無粋ではありませんが私も)

ランも耳をすまます。

「主……水……さん……気持ち……いいです……こんなの……初めてです……アツ」

「そうか、ここがいいのか、もつと良くしてやるよ」

(こ、これは……)

室内から聞こえる淫らな声。あられもないシズクの声と、それを嬉しそうに攻め立てる主水の声。

ランの頬を冷や汗が伝う。

(マズイですね。このままでは気心が知れた仲間をまた一人失うことになってしまう……しかし、主水さんももう少し用心しなくては、壁が薄い部屋でことに及ぶとは……)

イエーガーズの中でも作戦参謀にあたるランは、主水の今置かれた、崖つぶちの命の危機を救うべく思案にくれる。

しかし、ランであってもこの修羅場を乗り切る術が見つからない。

ランはその性格から、綿密に揺らぐことのない予定を建て、行動していたために、女性関係で失敗したことはなかったからだ。まして修羅場などありえなかった。

(さて、どうしたものか……)

ランが悲嘆にくれたその際に、セリユーがゆらりと幽鬼の如く立ち上がった。

「もんどくんだったらいいなにしてるのかなー」

声は明るいのが、言葉に抑揚はなく、まるでお経のように平らく、また形容し難い、おぞましいオーラを放ちながら、ハイライトが消えた瞳でドアノブに手を伸ばす。

手がノブに触れた直後、グシャツという音が辺りに響き、ドアノブたった物の欠片が地面に落ちる。

「かるくふれただけなのに、やわいノブだね。もうつかいものにならないや……まあいいか、わたしのじやまをするとびらもないよね」
躊躇することなく、腕を振り上げるセリユーを見て、ランとチエルシー、そしてコロは震え上がり、後退する。

二人の頭の中に警鐘が響き渡る。ここにいるだけで命に関わるぞと。

「も〜ん〜ど〜ん〜ん」

友達を呼ぶように声をあげながら、セリユーは拳を振り抜いた。
轟音を上げながら繰り出された拳は風を切り、扉を吹き飛ばす。

蝶番ごと吹き飛ばされた扉は、部屋の先にある窓を突き破り、外に吹き飛んだ。

「なにがおこった!」

「えっ!?!」

声をあげる主水とシズク。

セリユー、チエルシー、ランが見たものは、三人が考えていたようなものではなく、ベッドに横たわるシズクをマッサージする主水の姿であった。

「あれ……違った。でもうん、そうだよ。主水君がそんなことしないよね」

「予想と違うわね」

「安心したような、残念なような」

訳が分からないと茫然とする主水とシズクの前で、三人が真実を知り、自分勝手に感想をもらす。

「説明してもらいましょか……」

荒れ果てた自分の部屋を見回し、主水は皆を上げ威圧するように三人に問い掛ける、丁寧な言葉が一層主水の凄みを引き立てた。

三人はひきつった笑いを浮かべ、全てを話した。

「皆さん私をどういう風に見ているのですか」

「……………」

主水は呆れたように深いため息をつき、シズクは顔を真っ赤にして両手で顔を覆い、悶えていた。

「では、主水さんは以前よくしていたマッサージを無性にしなくなつた」と

「そうですね。無理やりやらせられていたのがいつの間にか慣習になつたみたいで」

りつに尻にしかれていたことがついに慣習にまでなっていたのかと、苦笑いを浮かべる主水。

何度か役にたつこともなかったわけではないが。

「シズクにはしてあげましたし、皆にもマッサージをしてあげますよ、

そこに横になってください」

そして、今

「アアアアアアア!!効くわ、すばらしいわあ！新しい世界がみえるわあ！」

スタイリッシュが天にも昇るような、恍惚の表情をしてベッドの上で悶えていた。

酷使し腰に疲労が溜まっていたためその効果は絶大だった。

三人は複雑な表情でそれを見ている。

(なんか穢らわしい…)

(エグいわ…)

(見てはいけないものを見てしまったような気がします…)

その後、主水はイエーガーズ内のマッサージ係として実権を握った。

第53話

漆黒の雲に覆われた空から、大量の雨が降り頻り、地面を打つ。

夜の静寂を切り裂くように、雨音や時々光る稲光の後に落雷の音が辺りに轟いている。

「では、おやすみなさいませ主水様」

「おう、気をつけて帰れよ」

恭しく挨拶をし退出するメイド。

主水はため息をつく。

先日から急にシズクが、ボリツクつきの配置転換を受け、新たなメイドが派遣されるようになった。

また、その日からシズクの弟のソウタも広場に訪れることはなくなっていた。

悪化していく天候の如く、主水の心中にも暗雲が垂れ込み、嫌な違和感を主水に与えていた。

（そろそろ寝るか）

雨が降ることにより、季節を問わず気温が冷え込んでいたため、軽く体を震わせると、きちんとベッドメイキングが為されたベッドの掛け布団を上げ、床に入ろうとしたその際だった。

辺りを闇を切り裂くような眩い閃光が室内に射し込み、落雷の音が鳴り響いた直後だった。

雨が降り頻る外を走る幾つかの足音と、飛び交う怒号。

鳴り止むと同時に訪れる雨音のみの一瞬の静けさの後に、響く断末魔。

「何があったんだ」

窓辺に立ち、外界を見下ろすと、闇に見える多くの人影が円になり何かをしている。

カッと光る閃光が辺りを照らすと共に、一瞬ではあるが概要が見えた。

布で顔を隠した男達が、何かに暴行を加えていた。

（危険種でも出たのか）

男達の一種異様な様相から、教団の暗部を司る男達だと理解する主水。

厄介事に巻き込まれることを疎み傍観を決め込んだ主水だったが、次の閃光が辺りを照らしたその刹那、傍らに立てて置いた二振りの刀を取り、窓から飛び出した。

地に着地すると同時に男達の円に走りだす。

「すいません、何かあったんですか？ちよつと失礼しますよ」

無関係だが気になったという感じで、焦る気持ちを抑え、冷静さを装い、かつ丁寧に対応し、周囲の男を掻き分け、中心にいたる。

「!!」

主水の表情に色が消えた。

中心にあったのは、幾多の暴行を受け、血にまみれ、静かに地に横たわるソウタの姿だった。

まだ僅かに息はあるが、虫の息で、すぐに絶えることになるのは誰が見ても分かる状態だった。

「何があつたんだ…ソウタ！大丈夫か！」

男達が未だに取り巻いていようが、そのような事を気にするおくびも出さず、ソウタを抱き起こし問い掛ける主水。

「そいつはボリツク様に——」

「てめえには聞いてねえ黙ってる!!」

主水の体を中心に冷たい殺気が吹き荒び、男達は声を失った。

「おじさん……お姉ちゃんの…仇…ボリツク……これで……」

小刻みに震える手でソウタは懐から何かを取り出すと、主水に手渡した。

主水が手を開くと、金貨が4枚あり、主水はそれを握り締め、小さく頷く。

主水は今までも、多くの依頼人と接し、更には一人一人の人生を見届け、仕事にいたる過程に触れてきた。

そのため、ソウタが話す途切れ途切れで、脈絡のない単語のみでも、ソウタが言いたいことを理解するには、然程苦勞することはなかった。

ソウタは主水が頷くのを見ると、雨の滴に交じらせ、一筋の涙を流し、痛みや苦しみを抑えこんで、いつも主水に見せた屈託のない笑顔を向ける。その後、力なく項垂れ、息を引き取った。

短い人生に幕が下りたのだ。

「おいおいこの小僧金持ってやがったか。俺達の酒代に使えたのに損したぜ。イエーガーズさんよ、俺達がそいつを始末したんだからその金こちらにくれませんかね」

先程までは吹き荒れる殺気に気圧されていたが、ソウタに相對していた主水はそれを抑えこんでいたので、男は先程感じた殺気は気のせいだと思ひ込み、男の中の一人が嘲るように主水に声をかける。

主水が受け取った金を戦利品と考えての発言。

しかし、主水はその発言を取り上げること、ましてや反応することもない。

主水は瞼を手でそっと閉じると、その場に優しく寝かせ、俯いたまま立ち上がった。

「くれる気になったんですかねー」

布で顔を隠しているため、表情は伺えないが、口調から主水を侮っていることは理解に固くない。

安寧道本部に来てからの主水は昼行灯を貫いていた、その事からボリックに仕える者はシュテンやメズ以外は主水を蔑み、侮っていた。

しかし、既に主水は表の顔ではなく、裏の顔である、仕事人としての顔に移行していた。

依頼された仕事を淡々とこなすのみの。

男が手のひらを主水に向け、催促するように上下させた。

その刹那、辺りの闇を払うように稲光が光ると同時に、その光を更に切り裂く、銀色の一閃が三度、宙に閃いた。

眩い閃光が消え、暗闇が再び辺りを支配する中、男は両腕を失い、血液を撒き散らしていた。

「……………」

しかし、男は断末魔さえ上げることが出来なかった。

「喉笛も断ち切った、痛みにも苦しみなから死にな」

冷たい視線を男に向けた後、瞬時に男に肉薄し、刀の束で鳩尾を穿ち、男を遙か後方に弾き飛ばした。

「お、お前ら陣形を整えろ」

何が起こったのか、しばし茫然としていた男達だが、暗部に生きていたため、立ち直るのは早く、主水を瞬時に敵と判断し、一番後方に控えるリーダー格の男が檄を飛ばす。

しかし、仕事人と化した主水は、甘くはない。ターゲットの隙を見逃すことなくつき、容赦なく、攻め込んだ。

雨にぬかるむ地を、泥を跳ね上げるほど強く踏み込み、雨を切り裂きながら主水は進み、一瞬で一人の男の眼前に迫ると、すれ違い様に逆袈裟に切り上げる。

血煙を上げ、斜めに崩れ去っていく男を、何があつたとばかりに、驚愕の表情で茫然と見つめる男を刀を翻し、返す刀で切り下げる。

主水が進んだ先に待ち構えていた男が、降り下ろす仕込み刀を、太刀で受け止め、つばぜり合い状態から、上から抑えるように下段にまで下げる。その後、刀を引き、束で顎を打つ。顎を打たれ意識が刈り取られ、ぐらついた所で容赦なく首を薙いだ。

刹那、斜め後ろから迫る槍の鋒を反時計回りで流し、その流れで、通り過ぎる男の首に刀を当て、引き切った。

「背後を取ったぞ。死ね！」

主水の死角から背後を取った男が真上から剣を降り下ろす。

主水は即座に刀で剣を防ぎ、左手で脇差しを抜き、背後の男の心臓を貫いた。

噴水のように心臓から血飛沫を上げ、男は崩れ落ちた。

天から雨粒が地に落ちるまでの、一瞬とも思える僅かな時間で、残っていた6人中5人の命が刈り取られた。

リーダー格の一番後方にいた男は青ざめ、腰を抜かした。

決して、死んだ男達は弱くはなかった。幾多の裏の仕事をこなしてきたのだから。

しかし、そこに立つ主水は、今まで見てきたどのような敵とも別格の強さを持っていた。

羅刹四鬼が赤子に見えるほどに。

その事実が男の戦意を喪失させていた。

無表情で血の滴る刀を提げながら、主水は一步ずつ歩みを進める。

「頼む助けてくれ。俺はポリック様に命令されたことをしただけなんだ。命だけは」

男を見下ろす位置で主水は立ち止まる。

男はブルブルと震えながら土下座をしている。

「てめえはお前が言ったことと同じことを言ったヤツをどうしてきた」

「ヒイツ」

主水は男を唐竹割りに、両断した。

主水は男達の死骸を冷たい視線で一瞥すると、地に横たえたソウタを抱き上げ、その場を立ち去った。

頻りに降りしきる雨をまともに浴びながら、主水は市街地のメインストリートを歩く。

既に時間や気候故に、人気はなく、街全体が眠りにつく。街灯の淡い明かりがのみが、辺りをうつすらと照らすし、主水を認識している。

主水は町外れのある長屋の前に立つと、戸に手を掛ける。

その家の鍵は閉められておらず、ギーーという音を立て、部屋の内部を晒した。

中から、冷たい空気が主水を迎える。

主水は躊躇することなく、室内に足を進める。

玄関から入って直ぐの部屋で主水の足が止まった。

「やはりこういうことか…」

主水が想定していた最悪の結果が主水を迎えた。

この二週間温かい笑みで自分の世話をし、慕ってくれた少女シズクが冷たくなり、天井から吊り下げられた縄によって首をくくつていた。

主水は無言でシズクの縄を切り、シズクを下ろすと、ソウタの横に寝かせた。

静まり返り震撼とした室内に、主水を伝う雨の雫が床を打つ音のみ

が静かに響く。

寝かされた二人を見てみると、今にも「主水さん（おじさん）」と屈託のない笑顔を向けてくれるように主水は感じていた。

（一挙に二人を失っちゃったか…）

顔をしかめ、主水は立ち去ろうと腰を上げると、机の上に置かれていた開かれた一通の手紙が目に見える。

主水は表情を消したまま、手紙を読み上げる。

『ソウタへ。お姉ちゃんは今日ボリック様によって汚されてしまいました。お父さんやお母さんの代わりにソウタといつも一緒にいようと思っていました。この汚れた体でソウタに接することを、私は許せませんでした。ここに私がこれまで働いて稼いだ金貨4枚があります。このお金は生活の足しにしてください。こんなお姉ちゃんを許してね。ソウタは頑張って私の分も生きてね』

「…裏を取る必要もねえな…だが、この金は高すぎらあ…」

主水は4枚の金貨の内の一枚を取り袖にしまうと、残りの三枚を机の上に置き、手紙に付け加えた。

『最初にこの二人を見つけた者は、この金で二人を吊ってやってくれ。なお、この金を横領した場合、地獄に送る』

書き上げると、手を合わせ二人の冥福を祈った後に、姉弟の家を後にした。

第54話

とある一室で、人目を避けて主水とメイドに化けたチエルシーが、密会していた。

「ごめんね主水。シズクが弄ばれている所を見ていながら何も出来なかった…」

チエルシーは悔しさを表情に滲ませて、頭を下げた。

チエルシーとしても、シズクは助けたかった。

しかし、その場に羅刹四鬼がいたこと、そして帝具へガイアファンデーションを使用したとしても止めることは出来ない判断したため、チエルシーは形的に傍観者になってしまったことを後悔していた。

「構わねえよ。裏家業に身をおくものとしてはそれが正解だ…だが、変わったなチエルシー」

言葉とは裏腹に主水の声は暗かったが、言葉の最後には僅かに笑みが浮かんでいた。

「どこが？」

「ナイトレイドに来たばかりのチエルシーだったら、謝ることはなかっただろうからな。よく言えば皆に影響を受けた。悪く言えば毒されたな」

「それはあるかも」

ナイトレイドの仲間の顔が頭に浮かび、密かに笑みを浮かべる。

重苦しかった雰囲気も僅かに和らいだ所で、チエルシーは本題に入る。

「主水はポリックを殺るの？」

チエルシーの問い掛けに、主水の表情は厳しくなる。

「ああ、ソウタの頼みだからな。ただ、ここ最近何度か狙ったんだが、エスデスが近くに控えててな、手出しが出来ねえ。本気で奥の手を使っても勝てる確率は五分五分って所だ。それに今裏切ってもいいことはねえ。組織が無くなるまでイエーガーズを辞めるつもりもねえしな」

「確かにエステスはヤバイわね。見ただけでも分かるけど、強さを体験したボスは、エステスを倒すには5万の精兵と10人以上の帝具遣いが必要だって言ってたしね」

苦虫を噛み潰したように話す主水に、チエルシーも同意する。

やはり護衛のエステスがネックとなる。

これは主水にとってもナイトレイドにとっても一番の悩みの種であった。

「じゃあどうするの？」

「話によると今夜辺り皆が襲撃をかける手筈になっているから、そのどきくさに紛れて気づかれねえようにヤツを始末する」

静かに語る主水だが、そのあまりの迫力にチエルシーはたじろいぐ。

今までの仕事とは、主水にとって一線を画するものであるということが、その気迫からまざまざと伝わる。

(初めて主水の本気が見れるかも…)

「どうする皆と連絡取る？」

「いやいい。この依頼は俺が受けたもんだ。皆にはわりいが陽動になってもらおう」

主水はそうチエルシーに伝えると、そのまま足早にその部屋を立ち去った。

(次は天閉か…)

主水は安寧道本部を出ると、街の片隅の路地裏に来ていた。

「突然の呼び出し勘弁してくれよ。ただでさえ帝都も面倒なことになってるのによ」

ブツブツと文句を垂れながら物影から姿を現す天閉。

「悪いな。事が動きそうなんでおめえに手を貸してほしくてな」

「はあ、いいぜ言ってみな」

ため息を吐きながらも耳を傾ける天閉に、軽く頷き主水は手順を話す。

「手順は分かった。どっちに転ぼうが俺の仕事はあるんだな。旦那高くつくぜ」

「帝都についたらまとめて払ってやるよ」

主水は後ろ手に軽く手を振り帰っていった。

(旦那表情固かったな。まあ旦那なら大丈夫だとは思うが)

天閉は主水の普段との違いに違和感を覚えたが自分は自分で任された重要な仕事が出来たので、入念に準備を行うため、街の雑踏に消えていった。

安寧道の本部に主水が帰ってきた時には、厳重な警備が敷かれていた。

暗部の仕事を行う関係者や、鎌のような帝具？を持ったいかにも咬ませのような男まで。

(たいしたヤツはいねえな)

横目に警備の隊列や、兵士の質をしていると、

「主水さーん。どこ行ってたんですか？イエーガーズの召集がかかってたんですよ」

ウェイブが息をきらせて走ってくる。

エスデスに遣わされたのか、大変な焦りようである。

「そうか。悪かった」

「えっあっ…いや」

今までに見たことがないほど、おとなしいというか、紳士的な主水に度肝を抜かれるウェイブ。

しかし、ウェイブも変態達に囲まれ成長してきた為、即座に順応する。

「隊長が呼んでいるので直ぐに行ってください。拷問されても知りませんよ」

「ああ、分かった」

(主水さん大丈夫かな)

去っていく後ろ姿を見て、なんとなく不安を感じるウェイブであった。

「中村主水です。入ります」

主水は扉越しに声をかけ、室内に入る。

「やつと来たか。はあ、まあいい、いつものことだな」

既にエスデスでさえも主水の昼行灯ぶりに慣れ始めていた。

「隊長、警備が嚴重になっていたんですが」

「ああ、ナジエンダの思考を読むと、今日の夜に強襲をかけてくるのはほぼ確実だ。故に警備を嚴重にした。そして中村お前は、私とクロメと共にポリツクの警護だ」

「！」

エスデスの言葉に啞然とする。

ただでさえ警備が厳しくなっているという厳しい状況にある中、更には一番厄介なエスデスの目が届く範囲に居なくてはならない。

そのような最中にポリツクを始末する。果たして出来るのだろうか、どのような厳しい中でも仕事をしてきた主水でも厳しいものがあった。

故にその想定外の事態に、主水は愕然としていた。

「お前は私の三獣士からチョウリを守ったぐらいだ。期待しているぞ」

エスデスは主水に歩みより、隣を過ぎる際、主水の肩に手を置き、

「クロメのことも頼む」

主水に囁くように告げた。

エスデスはそのまま、振り返ることもなく、部屋を出ていった。

(最悪エスデスと剣を交えることになるかもな…)

主水の先行きは、暗雲に包まれ、五里霧中となっていた。

◆◆◆◆◆

夕暮れを告げる鐘が辺りに響く。

(時間か…)

手入れをしていた刀を鞘に戻し、腰の帯に挿すと部屋を後にした。

黄昏た空を見ながらポリツクの部屋に向かう。

今まで時間はあったが、良い案は浮かばなかった。

以前捕らえられた罪人を護送中に、刀の柄を外し仕込みと化した刀で殺したこともあったが、今回は、手練れのエスデスやクロメがいる

のでまず無理だという結論に至った。

思案にくれる主水だが、そのような時こそ、時が過ぎるのが早く感じるもので、ボリックの屋敷にたどり着いていた。

ボリックの屋敷に入って直ぐに、武装した教団員が配置され、わき目にした様子を見ながら、先を進み、ボリックの私室に入る。

「遅いぞ中村！」

「申し訳ありません」

主水が軽く頭を下げると、袖から金貨が落ちる。

ソウタからの依頼料の金貨である。

(なぜ落ちたんだ)

しっかりと袖に入れておいた筈なのにと、落ちたことを疑問に思いながらも、しやがみ拾う。

(これは！)

拾う為に屈み視線を床に下ろした時に、ある発見が、主水に閃きを与えた。あれが使えると。

一度は諦めた案の問題点が解消されたのだ。

(ソウタが教えてくれたのかもな)

主水は軽く笑みを浮かべると、

「隊長申し訳ありません。腹の具合が悪いので少し厠に行つてきます」

主水は部屋を出て、約10分後に戻ってきた。

「もういいの？」

「大丈夫です」

クロメに笑顔で答える主水準備を整えて戻ってきた。

その後何も問題は起こらず、既に時間は深夜一時になっていた。

月は雲に隠れ、屋敷に射し込む光もなくなった時だった。

「ナイトレイドが現れました！」

外がざわめき始め、室内に飛び込んできた兵士に告げられる。

「来たかナジエンダ」

エスデスが満足げに、黒い笑みを浮かべる。

「状況は」

「はい——」



地中から陽動班のタツミ、ナジエンダ、スサノオ、レオーネが突入し、インクルシオの奥の手の透明化を生かし、気づかれることなく警備の兵士を倒していく。

しかし、その策も最後まで上手くはいかなかった。

中庭に至る前門に、姿を消したままタツミが足を踏み入れた、その瞬間、

「コロ」

「ガウツ！」

「ぐっ!!」

コロの豪腕がタツミに打ち込まれた。

タツミは瞬時に腕を交差しガードをしたが、地面をずりながら、数メートル後退した。

「待ってたよナイトレイド」

「なぜ分かった」

攻撃により透明化が解けたタツミが、立ち塞がるセリユーに問う。

タツミはかなりの戸惑いを覚えていた。インクルシオの奥の手の透明化が初めて破られたからだ。

「簡単よ。気配を感じたからね。お前は消していたかと思ってると思うけど、消しきれていなかったよ。コロはね、犬並の嗅覚持つてるから分かったのよ」

セリユーは主水との訓練により、かなり繊細に気配を読む技術を修得していた。

「皆行ってくれ。ここは俺がなんとかする！」

「分かった」

「死ぬなよタツミ」

セリユーとコロに、槍を持ち走り出したタツミが皆に告げる。

ナジエンダとレオーネ、スサノオは頷き、タツミをその場に残し屋敷に突入した。



漆黒の空を水中を泳ぐように特級危険種のエアマンタが旋回していた。

陽動班が引つ掻き回した隙に、ボリックを討つ実行班のアカメ、ラバック、マインの三人である。

「このまま大聖堂に突っ込む！マインちゃんは侵入用にパンプキンで穴開けてくれ」

「任せておきなさい。私は射撃の天才なのよ」

ラバックに、マインはその小さな胸を自信満々に叩き返事をする。

大聖堂の上空まであと僅かな所で、エアマンタの脇を高速で過ぎ去る影が。

「隊長の読み通りですね。別動隊が空からの奇襲。しかし、私には通用しませんよ。空中は私の領域なんですから」

丁寧な言葉使いながら、威圧感を持った声で過ぎ去り際にランはい放った。

「愚策と言わざるを得ませんね」

死角に回り込んだランが、帝具マステイマの無数の羽を撃ち込んだ。

羽はエアマンタを撃ち抜き、エアマンタはそのまま墜落していく。

「ヤベエ、今のでエアマンタ即死しちゃった。墜落するぞ！皆しっかりと掴まれ」

三人は必死にエアマンタに掴まるが、その隙をランが見逃すはずがない。

しっかりと追撃を背後から放つ。

「ラバック少し私を押さえて！このピンチを好機に変える！」

マインはパンプキンをランに向かい射撃した。

帝具パンプキンは遣い手がピンチであればあるほど威力が上がる。

故に、パンプキンの射撃はランの放つ羽を全て消し去り、更にランの脇腹を掠めた。

「厄介な帝具ですね…」

掠めただけでもかなりの威力であり、ランは落下した。

「皆俺に掴まれ、クローステイルで即席マツトを作る！」

クローステイルの糸を束ね、構成しマットを作ったことと、エアマンタの死骸が威力を吸収し、地面に三人は無事足を下ろすことができた。

「エアマンタありがとう。少し手前に落ちてしまった。急ごう」

「行かせねえよ」

グランキャリオの鍵を肩にかけてウェイブが三人の前に立ち塞がった。

表情は冷静に見えながらも、声には怒りが交じり、瞳は力強い光を称えている。

「クロメだけでなく、ランにまで傷つけやがって！これ以上仲間を傷つけさせねえ！お前らの相手は俺だ！」

ウェイブは鍵を鞘から抜き、地面に突き立てた。

「グランシヤリオオオオ!!」

ウェイブは黒き鎧に身を包むと、三人を迎え撃った。

第55話

普段であれば、草木も眠る丑三つ時、しかし、今回はそれに当てはまることはない。

ボリックの屋敷を中心にして、周囲で激闘が繰り広げられ、その戦いの大きさを物語るように爆音や、破壊音、が絶え間無く轟き、そして眩い閃光が夜空を照らすことが度々起こっていた。

それはボリックの屋敷内部でも近づき、戦いの火蓋が切られるのも時間の問題になっていた。

ボリックの玄関先に配置されていた警備兵は全てレオーネとスサノオによって倒され床に伏せている。

「この先からとんでもない殺気がビンビン感じるよ」

戦闘狂のレオーネすら身震いするほどの殺気が分厚い扉から溢れてくる。それはそのまま、この世においても、また生物界においても、強さの頂点に君臨するエスデスがいるということ、如実に証明していた。

「行くぞレオーネ、スサノオ！」

自らに気合いをいれるかの如く、声を張り上げると、ナジエンダは扉に手をかけた。

「ヒイイイツ!! ナイトレイドが、ナイトレイドが、お守りくださいエスデス將軍」

命の危機に恐れおののいたボリックは腰を抜かしながら、膝まずき、エスデスにすがりついていた。

「私はナイトレイドを相手する。中村、クロメ、コイツを少し離れた所で守ってやれ」

エスデスはヒールでボリックの顔面を踏みつけ、まるでゴミでも見るような、冷たく、蔑んだ瞳でボリックを一瞥すると、主水とクロメに指示した。

「了解」

「行きましようねボリック様。少し下がりましたようかクロメさん」

主水はボリックの襟首を掴み引き摺りながら壇上から下り、気丈に

笑顔を見せるクロメに声をかける。

「うん」

クロメも歩きだしポリツクの傍らに着いた、それと同時に大きな扉が重厚な音をたて、開かれ、ナジエンダ、レオーネ、スサノオが飛び込んできた。

「久しぶりだなナジエンダ」

「エスデス…」

顔馴染みだからこそその挨拶。

エスデスはどこか嬉しそうではあるが、一方のナジエンダの表情は曇っていた。

以前の戦いで、片目と片腕を失った苦い思い出が蘇っているのだろう。

そのような最中、

(あのナイトレイドの女。なんと艶かしい…)

先程まで腰を抜き、震えていたポリツクは、レオーネの巨乳を見つめてにやけていた。

「折角ここまで来てくれたんだ、私の帝具を振る舞ってやろう。その後の語り合いは拷問室でな」

「遠慮しようお前とはあまり口を利きたくない」

鋭いエスデスの視線を、軽く流すナジエンダ。

「つれないやつだな。奥の手も用意してやったというのに」

「……？帝具のデモンズエキスには奥の手はないと聞いたが？」

ナジエンダは以前聞いていた情報と違うことを疑問に思い、口にし、主水は表情を僅かにしかめた。

「そうだから自力で編み出したんだ。凄いだろ」

自信するかのように話すエスデスに、ナジエンダの表情が苦しくなる。

あまりにも型外れで、常識外のエスデスに言葉を発することも出来ない。

「自慢したかったんだな」

「奥の手って編み出せるもんじゃないよなふつう」

スサノオとレオーネもあまりの事態に混惑ぎみに感想を述べた。

二人も、エスデスを常識で測ることが出来ないと思いきらされた。

「とは言え、莫大なエネルギーを消耗するのだから。ここ一番しか使わん。私に使わせるぐらいの戦闘になるのを期待しているぞ」

エスデスの瞳が獲物をかる肉食獣のものとなる。

(…アカメ達はまだ来ないのか…それにあれでは主水も動けんだろうな…ならば先に私達で仕掛けエスデスの注意をひく、あわよくば…)
「中村、クロメ、護衛に集中しているよ。他のヤツがどこから来るか分からんからな」

「了解」

クロメは辺りに警戒を向ける。

姉のアカメが来ることを想定しているのだろう。

(第一の目標はコイツの始末。だが、ナジエンダ達三人が殺されそうになった時、俺は…)

ナジエンダと主水が思考を巡らせている中、戦いの火蓋が切って落とされた。

「私を楽しませてくれ！行くぞナイトレイド！」

レイピアを天に掲げると、直径数十メートルにも及ぶ巨大な氷塊が瞬時に精製され、三人を押し潰しにかかる。

そのあまりの巨大さに、ナジエンダとレオーネは驚愕の表情に染まるが、スサノオは冷静に、

「俺の後ろに」

と二人を下がらせると、氷塊に数十の突きを繰り出し、氷塊を破壊する。

辺りに砕けた氷塊の欠片が降り、幻想的な光景を演出する。

「ほう。これならどうだ？」

幻想的な光景の真っ只中に佇むエスデスは、楽しそうにその光景を見届け、次はどうしのぐ？と第二手に移る。

幾多の氷柱を弾丸のようなスピードで放つ。

着地したスサノオは得物を掲げると、得物の側面から刃が現れ、螺旋を描き、飛び交う氷柱を破壊していく。

しかし、エスデスの放つ無限とも思われる氷柱は、防ぎきるには難しく、防御をすり抜け、スサノオを貫通する。

「おおっやりましたな！」

喜びガッツポーズを取るポリックだが、直ぐにその様相も消える。スサノオの傷が瞬時に再生したからだ。

「お前が報告にあつた生物型の帝具か」

再生の様子を見て、エスデスは口の端を三日月の如く吊り上げ、

「これは俄然面白くなって来たぞ、こちらからも仕掛けていくぞ！」

辺りに冷気を撒き散らしながら宣言すると、ここに来て初めてレイピアを掲げ、戦闘体勢を取る。

三人も、釣られるようにエスデスに向かって突っ込む。

一番手はスサノオ。

そのスピードには目を見張るものがあり、熟練の兵士であっても、視界に捕らえ難いほどの速度。

しかし、優雅に視界に捕らえたまま笑みを浮かべるエスデスは床に手を着ける。

刹那、床を突き出た氷柱がスサノオの腹部を貫き、突き上げた。

それと同時にレオーネが死角にあたる背後から回し蹴りを放つ。

スサノオは囷。生物型帝具の強み核を破壊されない限りダメージになることはないという特性を使つての『肉を切らせて骨を断つ』を実際に行ったのだ。

それほどしなくてはエスデスには届かないと考えた上での作戦。

しかし、確実に捕らえたと思われた、レオーネの蹴りは空を切る。

困惑に満ちた表情を浮かべたレオーネをレイピアが貫く。

蹴りを避け、更には背後を取り、レイピアによる一突き。

(なんて反応速度だ。獣のそれより早い!!)

レオーネを救うべくナジエンダが拳を発射するが、それも残像を残しながら優雅にかわす。

僅かな攻防ですら格の違いを見せつけられる。

三人で戦っているのに、触れることさえ出来ない。また、三人は肩で息をするのに対し、エスデスは平常通り。

三人に叩き付けられる、残酷な現実には、言葉を失う。

(ここしかねえか…)

主水は徐に懐から、ワインボトルを取り出すと、

「祝勝祝いに一献」

コルク栓を抜き、ボリツクに差し出そうとしたが、主水は足を滑らせ、ワインボトルを割り、辺りに撒き散らした。

「鈍いやつめ」

「これは申し訳ありません」

主水は憤るボリツクに頭を下げる。

(一尺と三寸つて所か…)

「クロメさんあとは任せました。汚名返上をしてきます」

頭を上げた主水は、クロメに声をかけ、そのまま地を蹴り走り出した。

「面白い。確保しておくとするか」

ナイトレイドの三人の強さを認め、興味がわいたエスデスは、妖艶な笑みを浮かべ、三人を捕らえることを決意する。

体勢を低くし、三人に向かおうとしたその横を、主水が走り抜けた。

呆氣にとられながらもエスデスは主水の意図を理解し、呆れの混じるため息を吐き、動きを止めた。

(規律違反ではあるが、挽回したいという中村の気持ちも分からんではない。事がうまくいけばそれをもって良しとするか。だが、もしもダメだったら…)

美しくも、見るものを凍てつかせる程の笑顔を浮かべ、主水の背中を見送った。

主水は帯からアレスターを抜き放つと、スサノオに躊躇なく降り下ろした。

ぶつかり合う金属音が辺りに響く。

スサノオが咄嗟に自分の得物で主水のアレスターを受け止めたのだ。

だが、それで主水の攻撃が止まることはない。

まるでアレスターを体の一部のように操り、スサノオを攻め立て

る。

その攻防は互角であるのだが、その戦いとは別の事でナジエンダとレオーネは大きな衝撃を受けていた。

確かに今は、イエーガーズとナイトレイドという立場には置かれているが、戦う必要のない主水が態々出向き、スサノオに襲いかかったからだ。

裏切りかと不審の目を向けられても、しょうがない主水の行動。

「主——」

「黙れレオーネ。ヤツには何か意図があるのかもしれない。今は状況を見守るしかない」

声をあげそうになるレオーネをナジエンダは制した。

ここで主水にレオーネが文句を言えば、主水がナイトレイドと身分が明かされるのみでなく、今回の行動に何かしらの意図があれば、それを阻害することになるからだ。

ナジエンダに促され渋々レオーネもその指示に従うことにした。

既に主水とスサノオは何十合と撃ち合いを行い、ある意味戦いは膠着状態となっていた。

そんな最中、主水は焦れたようにアレスターを大きく降りかぶり、同時にスサノオに目配せをした。

スサノオは主水の意図を瞬時に把握し、得物を一閃した。

スサノオの得物の一閃は、ノーモーションから放たれ、主水は攻撃を止め、アレスターを逆手に持ち変え、柄を右手で持ち、左手でアレスターの本体を支え、スサノオの得物の一閃を受け止めた。

しかし、その威力は凄まじく、その勢いのまま、主水は吹き飛ばされ、屋敷の天井を貫き、夜空を彩る星となった。

第56話

月が雲の影に隠れ、闇に閉ざされた空を、一つの影が黄金の線を引
き、横切った。

(スサノオが理解してくれたのはよかったが、やりすぎだ…)

宙を舞いながら気だるげな表情を浮かべ、フツと息を吐くと、中空
を舞い、自由に身動きがとれない中、無理に体勢を立て直し地に足を
つける。

ただ、吹き飛んだ勢いが強すぎ、着地点からかなり後退していた。
(チツ草履が擦りきれちまったか)

裸足になった足を見て、一瞬顔をしかめたが、これからが本番だと
ばかりに、気にする素振りもなく、小走りに走り出した。

「私としたことがしくじったわ……」

所々血液で赤いシミがついた白いメイド服姿のチエルシーが建物
に身を隠しながら、自分の不運を呪った。

ナジエンダの仕事の後の逃げ道を確保しようと裏で活動していた
時に、ボリッククの屋敷周囲を警護する羅刹四鬼イバラを見かけ、この
ままでは、屋敷に奇襲をかけるアカメ達の障害になると危惧したチエ
ルシーは、警護の兵に身をやつし、始末しようと決意し、行動に移す。
「イバラ様。ナイトレイドが屋敷に突入をかけてきたので挟み撃ちに
すべく、屋敷の玄関先に来てくれとのボリックク様からの指令です」

「分かった、行こう」

イバラは踵を返すと屋敷の玄関先に向け歩き出す。

その背からは、警戒心は少なからず感じるが、出来なくはないと
チエルシーは判断を下す。

注意深いチエルシーとしては普段ではあり得ないことではあるが、
仲間のために、少しでも役にたちたいという思いが、チエルシーに無
理をさせた。

背後を取ると、隠していた暗殺用の針を抜き脊髄を穿つ、目的遂行
まであと僅かな所だった、

「何をしてるんだ」

ニタリとおぞましい笑みを浮かべたイバラが顔を180度回転させて、チエルシーを見据えたのだ。

(どんな首の骨してるのよ)

あまりの恐怖に声もでない。

今まで幾度となく修羅場を掻い潜ってきたチエルシーだが、このまま始末をすることは不可能と断念し、逃げることにした。

ただし、ただ逃げるだけでない。出来るだけ引き付け、この屋敷から放すことを目的に変え。

「鬼ごっこかい」

ゲラゲラと下卑た不快な笑い声を辺りに響かせながら、羅刹四鬼のイバラが、一歩一歩屋敷の片隅にあるチエルシーが身を潜める小屋の裏に着実に近づいてくる。

(あいつ直ぐにでも私を殺せるのに、私を追い詰めことを楽しんでる)

チエルシーは悔しさに唇を噛み締める。

だが、チエルシーには不意討ち以外の戦い方は出来ない。

例えここで、動物に化けたとしても、この状況では見抜かれてしまう。

上手く逃げ切れたとしても、引き付け屋敷から放すことは出来ない。

イバラの気配から集中を切らさずに、頭の中で幾多のパターンをシミュレートするが、どれも手詰まりである。

「見つけたぞー」

「!!」

それまで前から感じていた気配が、いつの間にか背後に、更には声も背後から聞こえた。

頬を冷や汗が伝い、体が緊張で、凍り付いたように強ばる。

(詰んじやったか…)

諦めの言葉が頭に浮かぶ。

既にチエルシーは眼前に迫る死を迎え入れる覚悟をし、振り向く。そこにあつたのは、見るものを震え上がらせるほどの不気味な笑み

を浮かべたイバラが。

遊びを終わらせる宣言するかのよう、徐に拳を振り上げる。

「少しは楽しめたよ。バイバイ」

チエルシーはぎゅつと目を瞑る。

(タツミ……)

イバラの豪腕がチエルシーを砕く——かに思われた。

しかし、

「こんな所に居られては邪魔なんですがねえ」

何故かイバラと違う聞きなれた声。

恐る恐るチエルシーは目をあける。

開かれた視界に入ったのは、

黒い羽織を羽織った後ろ姿と、そこに射し込む黄金の光。まるで後光のような。

「大丈夫かチエルシー」

「えっ主水？」

まるで聞き返すように尋ねるチエルシー。思惑が外れたかのよう
に調子の外れたトーンで。

「ああ、タツミじゃなくて悪かったな」

少しの落胆の色を感じ取った主水は、ニヤリと笑いながらの邪険な
返し。

主水とチエルシーが気軽に打ち解けあっているからこそその容赦が
ない返し。

「いやそういうわけじゃないわよ」

「頬が赤く染まってるぞ」

あたふたと否定しながらも、それを肯定する本能的な変化と恐怖か
ら起こる硬直が解けたことを見届け、更に口許を緩める主水だが、視
線を前方に向ける頃には、すでにその表情は180度転換していた。
「まさかイエーガーズのあんたがナイトレイドの一員だったとはな。
だが俺にとっては最高だぜ。あんたとやりあいたくてやりあいたく
て、しょうがなかったんだ」

舌なめずりをしながら、主水に恋い焦がれる相手に送るような熱い

視線を向けるイバラ。

そして、早くも戦闘体勢を整えている。

「気色わりい野郎だ。俺は時間がねえから一瞬で終わらせてもらうぜ。ネズミ退治であとがつかえてるんでな」

主水は鯉口に手を添え、右手で太刀の柄を掴み、鞘から抜く。

白銀に輝く刀身が外気に曝されると同時に、主水が地を蹴った。

「真つ向勝負か。そそるねえ」

人間とは思えない、体の柔軟性から、あり得ない速度で攻撃が放たれる。

主水は冷静に、あるいは避け、あるいは太刀で弾き、あるいは流し、傷を負うことすらなく、即座に間合いを詰める。

右手に携えていた太刀が銀色の軌跡を描き、横風ぎに一閃。

「おっと」

「えっ!!」

しかし、主水の横風ぎの一閃はイバラの腹をかすることもなく、空を斬った。

イバラは羅刹四鬼の特異な身体能力で、太刀の軌道にある体の部位を後方につきだし、軽やかに攻撃を避けていたのだ。

「残念。俺達羅刹四鬼はレイククラァー…ガハッ!」

「しのこの抜かさず地獄に行きな」

得意気に言葉を発していたイバラが、急に動きを止め吐血する。

血走った目で振り返ると、いつの間にか背後に現れた主水が太刀で背中から心臓を穿っている姿が。

「いつのまに……」

イバラの疑問に答えることもなく、太刀を更に深く刺し、突き上げると、イバラは痙攣したように二三度ピクピクと震え、息を絶えた。

主水が太刀を引き抜くと、刺したあとから血が吹き出し、地面を朱に染める。

普段と変わらぬそぶりで太刀を振るい、刀身から血を払うと、主水は刀を鞘に戻す。

辺りにカキンと鞘と鏢が鳴らす金属音が響くと、その音で我に返っ

たチエルシーが主水に駆け寄る。

「ありがたい主水助かったよ。あと、主水の仕事初めて見たけど、鮮やかな手際で感動しちゃった」

「助けられてよかった。まあ、長年してるからな」

羅刹四鬼を寄せ付けることなく、瞬殺した主水に、恐ろしさと同時に、負の感情に相反する、頼もしさも感じるチエルシー。

今まで見てきた仲間とも別格の強さ、そして経験の差を、目の前で見せられ、それがチエルシーに頼もしさを感じさせていた。

「羅刹四鬼でも一番強いイバラをあんなに簡単に倒しちゃうなんて」

「ヤツは俺が間合いを詰めても、後方に下がることもなく、足場を固めて手数を繰り出した。それに合わせて攻撃の時に見せたあの気持ちわりい体の柔らかさ。合わせて考えりやあ、ああやってかわすというのは容易に読めてな、横風ぎはそれに繋げる起点、本命が背後からの心臓への一撃だ。自分から刺さりに来てくれて楽だったぜ」

主水はチエルシーにネタをばらしながら、屋敷に向かって歩き、ボリックの屋敷の壁に近づくと、屈み、格子状の通気口を引き抜く。

以前主水が、子供達とのかくれんぼの最中に探していた、仕事を遂げるための一つの突破口だった。

「今から俺は本命を片付ける。チエルシーおめえは今すぐここから逃げろ。あと、中庭ではまだ戦闘が続いているから裏から逃げな」

「了解。気をつけてね」

「ああ」

主水は通気口からボリックの屋敷の床下に入り込んだ。

「…主水がいると安心感があるな…」

チエルシーは一人ごちると足早にその場を立ち去った。

走る閃光、轟く打撃音、中庭では、闇の中、インクルシオを纏ったタツミとセリユーが一騎討ちを繰り広げていた。

「キュウ……」

少し離れた所で、コロが主であるセリユーを心配そうに固唾を飲んで見守っている。

イエーガーズの持つナイトレイドの情報でも、インクルシオを持つのは百人斬りのブラートとされ、未だにブラートは世を去り、タツミに引き継がれたことは知られていない事実。

そんな中で、セリユーは正義を重んじていることと、自らの力を試さんが為に、一騎討ちの提案を持ち掛け、タツミもそれを了承する形で一騎討ちが為されていた。

「はっー！」

「甘いよ」

タツミが繰り出す槍を見切り、最小限の動きでかわし、横を過ぎていく、槍の柄を左手で掴み、自らに引き寄せる。

「終わりよ」

空いた右手のガントレットから青白いスパークが走り、螺旋を描きながら鳩尾を狙い打ち込まれる。

「うわあああああ!!」

直前で槍を手放し、腕を交差しガードしたため、打撃の威力は大きく緩和されたが、纏っていた雷がインクルシオ内部のタツミに走る。

雷は激痛となりタツミの体内を走り抜けた。

「うっ……」

雷が抜けた後、あまりの激痛にタツミは膝をつく。

タツミとセリユーの間には大きな差が開いていた。

「ナイトレイド最強のブラート。帝都側にいた時にはその強さから、百人斬りという勇名を持っていたと聞いたのに、期待外れね」

セリユーは膝をついて、肩で息をするタツミを見て、残念そうに呟く。

以前スサノオに追い詰められた自分の力が、主水に鍛えてもらい、どこまで伸び、更にはナイトレイド1の力を持つインクルシオ遣いのブラートに、ついていけるかを確かめる為の戦いであり、苦戦することを予想していた。

しかし、相対してみると、この力の差、ある意味拍子抜けだった。

「ウオオオオ!!」

セリユーの言葉を受けた瞬間タツミは力強い咆哮を上げる。

(インクルシオを持つ俺は兄貴と認識されている。ならば俺が弱いと兄貴が弱いと思われちまう。それはダメだ!!)

未だに自分とブラートの間に広がる大きな差を、再認識させられながらも、強い思いがタツミを立ち上がらせる。

「俺はやられるわけにはいかないんだ！」

タツミは残る力を振り絞って、セリユーに向かって走り出した。

第57話

辺りの闇に溶け込むような漆黒の帝具へグランシャリオを纏ったウエイブが、流線型のボディで風を流し、加速しながらアカメに向かう。

アカメも同様の黒い装束で闇に明滅するかのようになり、ステップを踏みウエイブに向かう。

交錯すると同時に激しい金属と金属がぶつかり合うかな斬り音が甲高く響き、二人を中心に円上に衝撃波が吹き荒んだ。

それは戦いの始まりを告げるものだった。

アカメの帝具〈村雨〉が、紫電の輝きを放つ。

細い糸のように洗練された軌道を、闇の中でアカメが紡げば、ウエイブはその糸の如き軌道を払うように豪快に拳や蹴りを、流れるような体裁きで放つ。

共に凌ぎ合いで、決定だになり得ない。

ただ、アカメの方が明らかに不利であった。

(このグランシャリオにはインクルシオ同様に隙間がない)

アカメの帝具〈村雨〉は一撃必殺であり、体に僅に切り傷をつけるだけでも、刀身が持つ呪毒で死に至るというチート級の帝具ではある。

しかし、そのような〈村雨〉にも大きな欠点があった、グランシャリオやインクルシオのように体に触れる隙間さえない帝具などには、〈村雨〉は効果を出せないという。

故に決定打足り得なかったのだ。

攻防が一秒毎に入れ替わる熾烈な戦い。

ウエイブの強烈な右ストレートを村雨で防ごうと刀身を引き、縦に構えた時、急にウエイブは右ストレートの勢いのまま、握り拳を開き、村雨の刀身を握り、力任せにガードを抉じ開ける。

(ガードを開けられた！)

予想外の行動に一瞬の戸惑いが生じ、それに乗じてウエイブが身を翻し裏拳を放つ。

「うっ！」

裏拳を腹に叩き込まれたアカメの華奢な体は、くの字に曲がり、容易く弾き飛ばされ、木立を薙ぎ倒しながら吹き飛んだ。

「食らえ」

マインの帝具、パンピキンの正確無比な射撃が闇を切り、二筋ウェイブを襲うが、冷静にバックステップを踏みかわす。

「ドンピシャだ。待ってたぜ」

ウェイブが足を地につけた刹那、ラバックの帝具へクローステールを一斉に四方から拘束するように、絡み付く。

「今だマインちゃん！」

「もう撃ってるわよ！」

まさに阿吽の呼吸、ラバックの拘束が決まった瞬間、指示を聞くことなく、マインのパンピキンが火を吹いた。

決まるはずだった。

今まで何者も拘束した後には逃したことの無いクローステールを、ウェイブは力業で引きちぎり、拘束を逃れ、上空に舞い上がった。

「マジかよー」

今まで無かった展開に困惑しながらも、上空から迫るウェイブの攻撃を防ぐべく、クローステールで物理結界の守りを固める。

蜘蛛の巣状に張られた強固な結界にウェイブは躊躇なく、蹴りをつきいれる。

しかし、万全の守りだったはずのクローステールの結界は軽々と突き破られ、僅に威力が軽減した蹴りが、ラバックの腹を抉り、ラバックは吐血しながら弾き飛ばされ、林立する木立に叩きつけられ、そのまま地に腰を下ろす状態となった。

仲間を守るといふ強い意思を持ったウェイブは強かった。

「終わりにさせてもらおうぞ」

ウェイブがラバックに向けて足を一步踏み出す。しかし、ウェイブは体に違和感を覚え、足を止めた、いや止められたと言うべきか。

うつむいたままのラバックが苦しさを押し殺しながら、微笑を浮かべ、口を開いた。

「かかったぜ」

闇に走る無数の糸がウェイブの四肢を縛り上げ、拘束していた。

「無駄なことを」

ウェイブは先程と同様に力を込め、糸を力業で引きちぎりにかかる。

しかし、糸は切れるどころか、揺らぎもしない。

「界断糸、東方に住む超級危険種の急所を守る最強の糸。その切れ味のためそのように呼ばれる。クローステールのとっておきだ切れねえよ。アカメ、俺がこいつを引き留める！行ってくれ！」

「分かった」

ラバツクの思いを無駄にする訳にはいかない。

アカメとマインはラバツクに頷くと、わき目も振らず闇の中を進んだ。

「足掻いても無駄だぜ……」

未だに糸を切ることを諦めず、もがくウェイブを、嘲笑うように手を引き、糸の拘束を強めるラバツク。

優位に立つラバツクだが、その表情に余裕は微塵もない。

(ヤベエ、さっきの攻撃が効いてきちまった……)

ラバツクの視界が歪み、ぼやけ、狭まる。

(ごめん……足留めもここまでだわ……)

ラバツクの意識は途切れ、崩れ落ちるように地に倒れ込み、それに伴い、ウェイブの拘束も解かれた。

(大部離されたか。急がないと)

ウェイブはラバツクを見ることなく、踵を返すと、抉れるほど強く舗装された地面を蹴り、アカメの後を追走した。

「やっと屋敷が見えて来たわね」

アカメとマインが走る視線の先に、林立する林の先に、うつすらとボリツクの屋敷の影が、微かに見え始めてきた。

しかし、その中で砂煙を巻き上げながら追撃する影と、前方から轟音を放ちながら向かってくる影が。

「また来た。しつこいわね。ラバツクも、振りきられたみたいね。それに前から筋肉ダルマが。挟み撃ちか、私はグランシヤリオをやるからアカメは前から来る汗臭そうな筋肉ダルマをお願い」

射撃主として優れた視力を有したマインが、いち早く2つの敵影を見つけ指示を出す。

「あれは…シユテン!!分かった…」

アカメの声の僅かなブレに、驚きの色をマインは感じ取ったが敢えて言及することなく、振り返り、パンプキンを構えた。

(パンプキンは遣い手がピンチであればあるほど威力が上がる)

ウェイブは空中に舞い上がり、一度宙に静止する。

「グランフォース!!」足を付きだし、闇を切り裂きながら、一本の放たれた矢の如く、マインに向かって突き進んでくる。

既に射程には入っている、しかし、マインは放たない。

パンプキンを最大出力で放つために。

(ギリギリまで引き付けて…5、4、3、2、1…)

「いっつっつっけえええ!!」

ウェイブのつき出された足により、マインの前髪が揺れる。

それほどまでにウェイブが接近した刹那、パンプキンを放たれた。

遣い手の命の危機に陥るほどの危機的状態故に、パンプキンの威力は極大にまでなっていた。

人一人軽々飲み込むほどの極太の精神エネルギーが収束され放たれた。

「うおおおおおおお……」

空の闇、雲を切り裂き射撃に飲み込まれたウェイブは煌めく星となった。

「久しぶりじやのうアカメエエエエ。お主にも救いを与えてやろお おお!!」

辺りの林を揺さぶる程の声を響かせながら、弾丸のように体を凶器と化し、特攻してくる。

「昔馴染みのよしみだ。一撃で葬る」

アカメは地を滑るように、村雨を下段に携え走り出した。
村雨の刃が届く間合いに足を踏み込むと同時に下段から逆袈裟に斬り上げる。

「ムン!!」

シュテンには金属製のものなどない中で、金属と金属がぶつかりあう音、そして刃が止まる感触が。

アカメの目に入ったのは、シュテンの髭に止められた村雨。

そして、その突進力は健在で、アカメは反発力で遙か後方に押しやられた。

「どうだわしの自慢の髭は」

シュテンは武器にも相棒にも、友にもなる髭を労るように撫でる。

「私の村雨が髭に抑えられるなんて…」

逆にアカメは悔しそうに歯噛みする。

第一刃はシュテンが勝利した。

「行くぞ。我が拳で救いをー皇拳寺百烈拳!!」

名前通りに、一秒間に数百とも言える打撃。

拳が幾つもあるように見える程の、嵐のような打撃の雨。

スピード自慢のアカメは、一打一打を冷静に捌くが、それにも限界がある。

服が破れ、体にはアザが浮かび上がる。

「クッ」

「救いを受け入れよー」

苦境に立たされているはずのアカメの口許が僅かに上がる。

「救いを喜ぶか」

「いや。自分の手を見てみたらどうだ」

「何!!」

シュテンの顔が青ざめる。

指についた小さな傷から梵字のようなものが広がり、全身に広がり、心臓に到達する。

するとシュテンの瞳孔が開き、大きな巨体が崩れ落ちた。

「シュテンを殺るなんて強くなつたねアカメ」

闇に響く女性の声。

そして、軽やかな足取りで現れる軽装の女性。

「メズ……」

「久しぶりだねアカメ」

笑顔のメズに対し、アカメは無表情で返す。

「アカメ知り合いなの？」

「帝都の暗殺部隊にいた時のね……」

僅かに口ごもるアカメを見て、マインも聞くのを躊躇うが、時間がないのも確かなこと。

「まあいいわ。敵なら分かってるわねアカメ」

「ああ……」

アカメも村雨を構える。

「挨拶は戦闘でか……まあ素手でやるのは無理があるから、私も帝具を使わせてもらうね」

「！」

羅刹四鬼は、その身体能力を遺憾なく発揮し戦うため、帝具を持っていないという情報があった。しかし、メズが発した「帝具を使う」というもので、大きく違う現実二人に緊張が走る。

「私の体と心を捧げたランさんから貰った帝具を初披露」

顔を赤らめたメズが、ウェイブにより払われた雲間から顔を出す月に向けて、腕を上げる。

まるで踊り子のような流れる所作で、掲げていた腕をアカメに向ける。

「私の特性を鑑みて選んでくれたこの帝具〈ブラックマリン〉でね」

メズは頬を赤らめニッコリと笑うと薬指に嵌めた帝具ブラックマリンを月に照らし、光らせた。

「その帝具は革命軍にあったはず！」

そう帝具ブラックマリンは以前三獣士リヴァが所持していたもの。それをタツミが回収し、ナジエンダが革命軍本部に持ち込んでいた。

なのに何故？という疑問。

「この帝具はね。以前あった小さな戦いの際に革命軍の将が持っていたのを倒して奪還したって聞いたわ。遣い手がいなかったみたいだけど私に適応したから、エンゲージリングとしてランさんが送ってくれたの。キヤツ、恥ずかしい」

手で顔を覆い、照れるメズ。

「隙だらけよ倒しちゃいませよ…」

「いや、なぜかこの隙に攻撃するのはいけない気がする…」

呆れ返る二人を尻目に、照れまくるメズだが、二人の冷たい視線を感じたのか、コホンと咳払いをすると、体に着けていた何らかの金具を外した。

ガチャンという地面を打つ重厚な音が轟くと同時に、メズの格闘家とは思えない、白魚のように繊細な指に嵌められた、帝軍ブラックマリリングが怪しく光り、メズのきめ細かな表皮から浮きでた液体が、球体となり宙に浮く。

「前人者は常時水を携帯し、更には攻撃も限りがあったみたいだけど、私はそうはいかないよ。さあ、始めようかアカメ」

一つ一つの液体が鋭い刃と化し、アカメとマインに襲いかかった。

第58話

辺り一面延々と、漆黒の闇が支配している。

明かりと言えば、冬の空に儂く光る星の如く、一定距離毎に空いた僅かな穴から、微かに光る仄かな光のみ。

光源と呼ぶにはあまりに儂く弱い光。

それではこの闇を照らすことなど出来はしない。

故に視覚が閉ざされた中であるが、主水は、身を屈めながら、床下を止まることなく、進んでいた。

聴覚を頼りに。

(あの時と同じだな…)

闇の中を進みながらも、思い出される過去の記憶。

今思い出されているのは、大奥の阿茶の局という人物を始末した仕事。

その仕事も今と同じように床下から侵入して仕事を行った。

ただその時も大きな問題があった。

侵入者対策として床下がまるで迷路のようにいりくみ、途中で道に迷うということがあった。

幸いその時は、機転を効かせた仲間のサポートにより、仕事は果たせたが。

今回は仲間のいない中での、たった一人での仕事という面が、大きな違いである。

そして、その勘案事項が原因で、この方策を諦めていたのだが、先程袖から落ちた金貨を拾う際に見た床に空いた空気穴を見て、問題も解決し、これを実行しようと決意した。

はからずもソウタの依頼料が導いてくれたように、見つけた解決への糸口なのだからものにしなくてはと…

全神経を聴覚に傾け、闇が支配する床下全域に感覚を研ぎ澄ませる。

しかし、ここで聴覚は予期せぬものを拾うに至った。

「その治癒能力興味があるな。私が試してやろう」

綺麗な声ながら、冷たく室内に響く地獄の底から響いてくるような、恐ろしさを感じさせる声。

それが、これから起こる恐怖の舞台の幕開けを宣言していた。

「片目を潰す…頬に風穴を…爪を剥がし…右胸を抉り…腕を刻む…足を切断し…足の指をくり貫く」

言葉の一節ごとに響くレオーネの断末魔。

それだけで、その場を見ていない主水でさえ、そこで行われている地獄のような凄惨な光景が脳裏に浮かぶ。

だが、主水には何もすることは出来ない。

例えそれが、現場に立ち会いその光景を目の当たりにしたとしてもだ…

(すまねえなレオーネ。辛抱してくれ、あとわずかだ…)

しかし、その場にいる仲間には、どんなに力の差を感じても動かない訳にはいかなかった。

「奥の手いくぞ！スサノオ禍魂顕現!!」

奥の手発動の声と共に、エスデスとナジエンダの魂の三分の一を使い極限まで強化されたスサノオの戦いが始まった。

(奥の手を使ったスサノオでもエスデスには届かねえ。早く始末しねえと…)

仲間の危機から主水にも焦りの感情は生まれるが、その焦りを押し殺し、冷静に再び聴覚のみを働かせ、聞き耳を立てる。

意識的に、求める音のみを拾うために、他の音をシャットアウトして…

(……………)

元々この場ではあつて無いようなものだが、目を瞑り、視覚を閉ざし、集中力を研ぎ清めます。

轟く轟音の中、僅かにしかし、確かに響いた水の音。

(掴んだ！)

極限まで研ぎ清まされた聴覚が、雑多に混在する無数の音の中から、僅かに響く解決への糸口となる音を拾った。

主水は即座に行動に移す。

闇の中とは思えないほどの素早い動きで、突き進んだ。
音の出所へ。

(ここか……)

主水はたどり着いた。

ポリックがいる目印となる場へ。

空気穴から一滴ずつ滴り、音をたて地面を濡らすワインのもとに。以前の仕事の時に、仲間が的の居場所に迷った時に、湯飲みに入っていた茶を溢し、知らせてくれたように、今回は主水自らが目印にワインを溢し、その場の目印にしていた。

(この穴から一尺三寸……ここだな)

ポリックが存在するだろう所に目測で測っていた通りに、あたりをつけ、音をたてずに太刀を抜く。

しかし、その時、俄に状況が大きく変わった。

帯に挿しているアレスターが主水に何かを伝えるように脈動したのだ。

(光明だ。エスデス自らやり易い状況を作ってくれるとはな……)

主水の口許が僅かに緩む。

そしつ脳裏に、以前深夜に見たエスデスの姿が浮かぶ。

空間を凍結し、時間を止めるといふ奥の手を自ら作り出し、成功させたあの姿を……

主水は即座に太刀を置き、アレスターを抜く。

地上から聞こえるエスデスの声に合わせる。

「私の前では全てが凍る。摩可鉢特——」

(空間封——)

『摩(印)』

辺りが白み、空間が凍結し軋む音が響く中、強制的に時間が停止する。

はたまた、床下のアレスターの束が穿った空間に出来た亀裂も空間を拘束し、流れる時を止めた。

今時間が停止した中動けるものは二人のみ。

故に、時間が止まると、辺りに真の静寂が訪れる。

だが主水に走る倦怠感と激痛。

奥の手の副作用。

世界の理にまで作用を及ぼす規格外の奥の手の為に、使用の際に代償を支払うことになる。

時間を一秒止める毎に一日寿命が縮む。

無理に寿命を縮ませるために、否応なく訪れる倦怠感と激痛が、アレスターの奥の手の副作用である。

(この副作用、あの時を思い出すぜ：だが、そんなことに気を回している暇はねえ。問題はあがあるがこの好機を逃す訳にはいかねえ：)

時間が動いたままであれば、ボリックを貫くと同時に、叫び声を上げたり、もしくは倒れ込むなどして仕事がバレることになる恐れがあり、それのみを恐れていた。

しかし、その問題をエスデスが自ら解決に導いてくれたのだ。

とんだ皮肉である。

しかし、解決と同時に新たな問題も生まれる。

音が存在しない空間で物音をたてずに仕事をおこなえるかだ。

厚さ3寸ほどの石を貫くのは、副作用で鈍る体でも苦はないが、はたして音なく貫けるかが、立ちはだかる大きな障害であった。

だが、うかうかしている訳にはいかない。

主水は、アレスターを帯に挿すと、激痛で震える手で太刀を拾う。

その時さらなる幸運が訪れる。

「時空を凍結させた」

エスデスがまるでオペラ歌手のように室内に響く声で独り言を話し出したのだ。

(またもやエスデスがやってくれたぜ。音が無い今仕事したら音がして気づかれるとまずいと思ったが、独り言を言っている今なら聞こえねえ)

「これこそタツミを二度と逃さない為、また敵を確実に倒すために――」

依然としてエスデスが独り言をしている機会を利用し、太刀を突き上げた。

(手応え有り！だがまだだ…)

僅かに擦れる摩擦音がするが、エスデスに気づかれることはなかった。

しかし、主水は上手くことを運びながらも、再度危険を犯してまで同様のことを繰り返した。

太刀を一度抜くと、再度突き上げるといふ。

(てめえには一度刺しじゃ足りねえ…シズクとソウタの二人分だ！受け取れ!!)

静かに突き上げた太刀を引き抜くと、倦怠感と激痛に苛まれる体を引き摺るように、その場を後にした。

主水が月明かりの中、床下から這い出ると、辺りの凍結が溶ける。

主水も安堵し封印を解き、時間が動き出す。

(急がねえとな)

主水は急ぎかつ入念に、着流しと羽織りに付いた埃を払うと屋敷内に走った。

今顔を出せば、アリバイとなる。故に急いだ。

「中村主水ただいま帰還いたしました!!」

主水が室内に踏み込むと、スサノオの腹部をレイピアで突き刺したエスデスと雑巾を裂くような耳障りな断末魔を上げ、盛大に吐血したボリッククの姿が。

ナジエンダ、レオーネ、スサノオにはいきなり現れスサノオに攻撃を加えるエスデスに対して、また吐血し生き絶えたボリッククへの二重の驚き、エスデス、クロメは生き絶えたボリッククへの驚き。スサノオの攻撃は防いだのに何故？という。

「どういう事だ！なぜボリッククは死んだ!!」

室内にエスデスの驚愕に歪む声が響くと、茫然としていたナジエンダは、我に帰り、思考を働かせ、状況を瞬時に整理し声を上げた。

「スサノオがボリッククを殺った！任務成功だ！帰還するぞ!!」

主水が殺ったと思われることは無いとは思いながらも、不審に思わ

せない為にナジエンダはスサノオが殺つたと言葉を発した。

「任務失敗か…ならばせめてお前達は逃がさん!!」

エスデスのレイピアが刺さる先からスサノオが凍結していく。

「スサノオ!!…こうなれば二度目（重ねがけ）だ。禍魂顕現!!」

ナジエンダの体から力が抜け、スサノオが更に強化される。

体が半分以上凍りついていたスサノオの体が発光し、凍結が溶けていく。

「チッ…」

エスデスは舌打ちをすると、レイピアを引き抜き、後退した。

「逃げるぞ!・レオーネ体の破片を集めろ、ナジエンダ起きれるか!」

横目に二人を見ると、虫の息ながらも二人は体を起こし行動に移る。

「逃がすと思ったか!!」

鋭く尖る氷柱がスサノオに襲いかかる。

「ヤタノカガミ!」

反射された氷柱がエスデスに帰る。

「同じ技が二度効くと思うな!!」

青い髪を靡かせ、舞うように氷柱をかわし、ヤタノカガミを一刀のもとに両断すると、間合いに入ったスサノオの胸に手を置く。

「凍れ!」

氷塊が牢獄となり、スサノオを閉じ込め、一つのオブジェと化した。

「残りは二人だ」

エスデスが二人に鋭い視線を向けると、二人の頭上から帝具へ八房を振り上げたクロメが迫っていた。

第59話

「やるねアカメ」

メズは袖を優雅に振り舞を舞うように液体を操る。

アカメは液体を村雨で切り落とし、マインは避けながら、余裕がある際はパンプキンで迎撃する。しかし、消されるつどに生成されるため、一向に減ることはない。

そのため、液体の弾丸の弾幕を振り払うことは出来ずに、メズ自身に攻撃を加える所か、近づくことさえ出来ない状態である。

「隙がない…」

一つ一つが針穴に糸を通すほどのコントロールで操られており、全く隙が無かった。

「それだけじゃないよ」

メズは自信満々にアカメの持つ村雨に視線を送る。

村雨には、幾多の液体の弾幕を切った際についていたと思われる、液体がまとわりつき、村雨をコーティングし、刃物としての効果を為さなくしていた。

「私の汗は粘着力が高いからまとわりついていたらなかなか取れないよ」

「くっ」

「じゃあ私が！」

顔をしかめたアカメの影からメズの死角を抜い、進んでいたマインが飛び出し、正確無比な射撃を放つ。

メズは迫り来る弾丸を目にし、うつすらと不敵な笑みを浮かべると、袖たなびかせ腕を振ると、メズの前に液体のカーテンが広がり弾丸を遮った。

「どう強いでしょ。ランさんと私の愛の結晶なんだから」

メズの格闘家としての動体視力、そして相手の行動を先読みして戦うスタイルに、相性抜群の帝具が加わることで、その戦闘力は遥かに上がっていた。

もしも、帝具がなければ、アカメだけでも然程苦勞することはなかっただろう。

「水塊弾だけじゃ面白くないし、新しいブラックマリンの力見せてあげようか」

メズが腕を上げブラックマリンを掲げる。

アカメとマインも各々帝具を構える。

「使えなくなつた村雨でどこまで凌げるかな」

ブラックマリンが怪しげな光を放ち、新たなる力を解放しようとした丁度その時。

「メズ様！ボリック様が討たれ亡くなりましたので、至急帝都に帰還するように命が出ております」

息をきらせ現れた兵士が息を整えることすらせずに、敬礼をしながらメズに伝える。

「あくあボリック討たれちやつたか。まあいいや、仕事とはいえあんなやつのために働くなんて今の私にしたらバカらしいし」

メズが腕を下ろすと、ピリピリと張りつめていた雰囲気は急に弛緩する。メズの殺気が失せたことを表していた。

「じゃあねアカメ。今度は帝都で殺りあおうね。帝都に帰還する前にランさんに可愛がってもらわなくちゃ」

メズは先ほどとはうって変わって恋する乙女表情を浮かべると、スキップをするように軽やかな足取りで闇の中に消えた。

そこに残るのはアカメとマインと伝令を伝えた兵士のみ。

「お前はとうする？」

鋭い眼光で兵士に問い掛けるアカメ。

今にも命を奪えるのだということを含ませた質問。

「怖いなー。せつかく助けてあげたのに」

兵士は急に砕けたような物言いになると、白い煙を発し、煙が晴れると、チエルシーへと姿が変わっていた。

「あんた何してるのよこんなどころで？」

「なあに？命の恩人に対して？」

「うぐぐ……」

ニヤニヤしながら見下ろすチエルシーに、マインは現実助けられていたために、言い返すことも出来ずに齒軋りする。

「チエルシー、実際の所ボリックは本当に死んだのか？」

「ウーン私も確認はしていないから分からないんだけど。主水が殺るって言うっていたから大丈夫なんじゃないかな」

「そうかそれなら大丈夫かもな」

アカメもチエルシーの意見に賛成する。

短絡的かもしれないが、それだけ主水は仕事に於いては信頼されていた。

普段の姿からは想像出来ない程の裏の顔をして、目の前で主水が完璧な仕事をしてきたのを、目にしてきたための信頼感だった。

「でもね、ボリックは仕留めることは出来たと思うけど、ボス達はエスデスと交戦中だと思う。苦戦しているはずだから、出来れば助けに行ってあげてほしい」

「分かった。マイン急ごう」

「ええ」

チエルシーのらしからぬ仲間思いの発言を受け、アカメとマインも軽く笑顔を浮かべ、頷くと、ボリックの屋敷に向かって走り出した。
(みんな無事に帰って来てよね)

チエルシーは祈るような気分で、二人の背中が見えなくなるまで、その場で見送っていた。

◆◆◆◆◆

「最初よりも歯応えはあったけど、ここまでのようね」

ポニーテールがほどけ、髪が下ろされた状態で、セリユーは地に倒れたインクルシオを纏ったタツミを見下ろしていた。

「また、俺は力がなくて満足に足止めすら出来ないのか…」

そのダメージのため、動くことすらままならず、地に伏したまま、地面の土を握り締めた。

冷たい視線で先ほどまでは見ていたセリユーではあるが、今では、その瞳に映るタツミに、共感したかのような優しげなものがそこに存在していた。

まるで過去の弱かった自分を、今のタツミに重ねたかのように。

(自分の弱さを悔いる気持ちはよくわかる。だけどこれも正義を貫く

ための仕事)

軽く頭を振り切り換えると、セリユーは拳を握り締め、タツミの間近にまで歩み寄る。

「正義の名の元に、断罪を加えます」

セリユーのガントレットが真っ赤に染まり、陽炎が立ち上るように揺らめく。

闇が赤く照らされ、周囲の温度も微かに上昇する。

赤く発光したガントレットがタツミに舞い降りる。

タツミも覚悟を決め、瞳を閉じた。

「俺の出番が来ちゃったか」

辺りに溜め息交じりの声が響くと、丸い物体が投擲される。

「何？」

セリユーが振り返ると、丸い物体が目映く強烈な閃光を放ち、破裂した。

爆風をもろに浴びたセリユーの小柄な体が吹き飛ばされる。

「逃げるぞ」

「俺は皆の為に逃げるわけにはいかない」

頑なに拒否するタツミ。その責任感故仲間において自分だけ逃げることを許さず、それ故に拒否したのだ。

「安心しろ仕事はイエーガーズの旦那が責任もって何とかしてくれる。それにな生きていれば挽回はきく」

タツミは訝しげに見ていたが、『旦那』と言う言葉により安心したのか心が動かされ、『挽回出来る』という言葉で、澁々ながら納得し、天閉に身を任せ、その場を走り去った。

「逃げられた…」

吹き飛ばされた所をコロに助けられたセリユーは、その暗闇を急激に照らした閃光で、眩む目をつぶったまま、気配を探り、タツミが逃げたのを知ると、拳を握り締め悔しさを露にした。

天閉は、タツミに肩を貸し走りながら、主水の読みに驚いていた。天閉が主水に頼まれたことが、タツミを手助けすることだった。

主水が言っていたのは、ナイトレイド一行が、中庭に差し掛かった時に戦いが起こる。その戦いは白銀の鎧へインクルシオを纏った者がその場に殿として残り、戦うが、戦いはイエーカーズのセリユーが9割方勝つだろうから、殺される前に助けてくれ、ということであった。

その話を聞いた際には、本当にインクルシオを纏ったタツミが残るのか？イエーカーズのセリユーが勝つのか？と疑問を抱いたが、現実には主水が言っていた通りに事が進んだことに、驚きを感じ、その読みの鋭さに舌を巻いたのだった。

「あの、助けてくれてありがとうございます。あなたは主水さんと知り合いみたいですが…」

「ああ、俺は天閉。主水の旦那の手助けをしているもんだ。イエーカーズとも革命軍とも関係はないがな」

タツミは命の危機をすんでの所で助けてくれたことに礼を言い、天閉も笑顔でそれを受け、自分の素性を軽く話した。

このまま、この敷地を出れば、という所まで至り、まさに安心から気が緩みかけたそんな状況の中、二人の前に立ちはだかる者が。

「ボリックの奥の手の俺に会ったのが運の尽きだぜお二人さんよ」

大きな正に死神の鎌と形容出来る大鎌を肩に担いぎ、夜だというのにサングラスをかけ、葉巻を加えた白いスーツを着た男が立ち塞がった。

「道を急いでいるんで退いてほしいんだが」

表情を引き締めた天閉は、相手に鋭い視線を飛ばしながらも、丁寧な口調で告げた。答えは分かっているが確認のために。

「それは出来ねえ相談だ。敵はこの帝具奇々怪々へアダユスでほられるのが決定してるんでな」

ユラリと立ち上がった男はフツと葉巻を吹かすと、大きく鎌を振り上げ声を上げた。

「俺の名前はホリマカお前たちをあの世に送る——オゴツ!!」

「ウダウダうるせえよ！あの世に逝ってな！」

余裕を見せ油断していたホリマカに闇に溶け込みながら近づいた

天閉が、ホリマカの間近で姿を見せると、葉巻を飛ばしながら大口を開けたホリマカの口に花火を放り込んだ。

「お前は——」

その一言を残し、ホリマカは発光し、大輪の花を咲かし、塵となった。

「汚ねえ花火だな」

ホリマカの命が咲かせた花火に感想を漏らす天閉の元に、空から鎌の帝具（ヘアダユス）が降ってきた。

ホリマカが爆発した際に空に舞い上がったものだ。

「まあいい。行き掛けの駄賃に貰つとくか。使い道なかったらどっかに売り付けて金にすりゃあいいいな」

天閉は背に鎌を担ぐと、下ろしていたタツミの元に向かう。

「天閉は強いんだな」

少し驚きの表情をしたタツミ。

「これでもお前たちと同じ裏家業に身をおいてるんな」

タツミに肩を貸し、再び二人は走り出した。

第60話

満身創痍でろくに身動きが取れないナジエンダとレオーネに、クロメが八房を掲げて上空から斬りかかる。

凶刃が間近に迫るその最中、真横の屋敷の壁が消し飛び、拳だいの瓦礫が飛び交い、一筋の閃光がクロメを掠めた。

「あだっー！」

「くっ…」

体勢を崩したクロメは、なんとか着地をするとバックステップを踏み、後退した。

「なんとか間に合ったようね」

壁が消し飛び大きな風穴が空いた場から顔を出したマインが、安堵に満ちた声で呟き、穴から屋敷に飛び込んだアカメは、大ケガはしてはいるが、まだ生きてはいる二人を見て胸を撫で下ろした。

「お姉ちゃん…」

クロメが嬉しそうに黒く歪んだ瞳をアカメに向ける。

アカメもそのクロメの視線を流すことなく、真っ向から受け止める。

姉として妹の歪んでいる思いであろうと、受け止めなくてはならないという、強い思いと覚悟があった。

実際クロメをここまで病ませてしまったのは、自分にも責任があるということ、痛感していたからでもある。

「アカメ、因縁も分かるけど、今は皆で逃げるのが先決よ。私が風ぎ払うから二人をお願い」

「…分かった」

クロメの思いを受け止める為の戦いに望むはずだったアカメに、マインが待ったをかける。

マインの正論に、渋々だがアカメも頷いた。

「お前たちは一匹たりとも逃がさない。よく回りを見てみるんだな前方には私とクロメ、後方には中村がいる。あとは」

エスデスが穴が空いた壁に手を向けると、巨大な氷柱がせりあが

り、穴を塞いだ。

「八方塞がりか…」

三人はその様を見て言葉に詰まるが、次の瞬間状況が好転した。

「残念だったなエスデス！」

「なにがだナジエンダ？」

ナジエンダのしたり顔に嫌悪感を示しながら、エスデスが尋ねる。

「挟み撃ちにはならない。背後の中村とやらは、先ほど壁を撃ち破った際に飛び交った瓦礫を浴び気を失っているぞ！やれマイン!!」

三人の背後には頭にたんこぶを、作った主水の倒れた姿が。

（最悪死罪、良くて拷問か…：死罪の場合は何とかして逃げねえとな）
それを視界に納めた刹那、

「いくわよ!!」

マインの声と同時に屋敷がパンプキンの横風ぎのレーザーが走る。

エスデス、クロメは身を屈めそれを避ける。

「しまったー！」

レーザーが過ぎ去った後には、既に三人の姿はなく、更には先ほどの横風ぎのレーザーでスサノオを拘束していた氷塊も溶け、スサノオも『ヤサカニノマガタマ』で逃げ去ったあとであった。

「またもやナジエンダにしてやられた…」

支柱を失い崩れ落ちるボリッククの屋敷の中でエスデスは苦虫を噛み潰したような形相で、立ち尽くし、瓦礫に呑み込まれていった。

◆◆◆

ボリックク暗殺騒動から一日が過ぎ、エスデスを除くイエーガーズの6人が一同に集まっていた。

「主水さん大丈夫ですか」

「……………」

ウェイブが見る影もなくボロボロになり、痩せこけ、死んだ魚のような生氣のない目をした主水を心配し、話し掛けるが、返事はなかった。

隣で主水の手を握りしめるセリユーはその主水の痛々しさに目を伏せている。

「ウェイブ今はそつとしておいてあげるべきです。中村さんは、昨日の失態の罪（独断専行で護衛を放棄し突っ込んだ事と、気絶してナイトレイドを取り逃がした事）を問われ、隊長の寛大な計らいにより死罪は許されましたが、朝まで拷問のハードレベルを受けていたのです。私も最初の10分は場に立ち会いましたが、あれは言葉に表すことの出来ないほどのものでした：死罪の方が楽に思えるほどに：精神が崩壊していないだけでも奇跡と思われれます」

沈痛の面持ちで話すラン。

その現実を聞き、セリユーは目を潤ませ、ウェイブは言葉を失った。ウェイブは以前タツミを逃がした失態からイージーレベルの拷問を体験したが、それでも殺してくれと思うほどの耐え難いものだった。

それがハードとなると……考えるだけでも寿命が縮まるほどの恐怖を感じた。

後に主水はその壮絶な体験をしみじみと語った。

「苦し紛れに行つたアレスターによる痛覚封印をしていなかったら、良くて廃人、悪くて死んでた」と。

イエーガーズの面々は、今回ボリックを暗殺されただけではなく、ナイトレイドを一人も捕らえたり、倒すことが出来なかったことで、大きなショックを受けていた。

エスデスは後処理から暫くキョロクに残ることになり、イエーカーズの6人は先に帝都に帰ることになっていた。

「ああそう言えば羅刹四鬼の生き残りはどうなったんだ？」

「あの二人は昨夜帝都に帰還したようですよ」

しらつと答えるラン。

その胸中では、

（ウェイブやクロメにはメズをたらしこんで、可愛がってあげた後、帝都に先に返したとは言えませぬね）

と考えていた。

「昨夜はお楽しみだったわね。あたしも可愛がってほしいわ」

スタイリッシュがボソツと熱のこもった視線と声でランに身を寄

せ、背中に指を這わせる。

ランの笑みがひきつり、嫌な汗をかいたのは言うまでもない。

イエーカーズの6人は、行き交う人波をかき分けキヨロクの大門に至る。

そこには、6人分の馬が用意されており、見送りに兵士達もその場に配置されていた。

「では皆さん一人一頭の馬に乗ってください。これから三日かけて帝都に帰ります」

ランの指示を受け、皆は馬に騎乗する。

しかし、主水は馬に乗ることはなかった。

「どうしたんですか主水さん？」

不思議に思ったウェイブが主水に声をかける。

「すまねえな。俺は少し女の所に顔を出さなくちゃならなくてな。先に言っておくれ」

「ちよつと主水さん！」

ウェイブは青ざめ、即座にセリユーの方に振り返った。

満身創痍の主水が今度こそ死んでしまおうと危惧してのことだ。

しかし、

「気をつけてね主水君」

予想していたのと違い、悲しそうな顔で主水を送り出すセリユー。

「あ、あれ、どうしてセリユーは怒らないんだ？」

ウェイブは予想とは違ったセリユーの反応に疑問を持ち、隣に来ていたクロメにこそつ耳元で問い掛ける。

「中村さんが別れを言いに行くのは愛人などではないからですよ」

しかし、答えたのはランであった。

イエーカーズの事を、細かいことまで把握しているからこそ知ってはいたのだが、全てを話すことはなかった。

「皆さん行きますよ。先に帝都で待っています」

ランの後に続いて皆はキヨロクを後にした。

「じゃあいくか…」

主水は踵を返すと、とある場に歩いて行つた。

辺りは静けさが漂い、物寂しさを感じる、人気がないキヨロクの中心地から離れた場所に、目的地があった。

主水は無言で行き掛けに買った花束と団子を一つの墓に供えた。

墓石には、

『シズク享年14歳 ソウタ享年8歳』

と刻まれている。

主水の意向を汲んでくれたシズク姉弟の知り合いが、主水が残した金貨三枚で、建ててくれたものだった。

主水は静かに手を会わせ、

(ボリックはあの世に送つた、安心して成仏するんだぜ)

と二人に話し掛けていた。

手を会わせて、どれだけの時間が経つたのだろうか。

つい先ほどまで誰もいなかった墓地に何者かが現れ、主水の背後まで来ていた。

「もういいかい旦那？そろそろ迎えのものが来る時刻なんでな」

「ああ報告は終えた。もうここには用はない……」

静かに主水は天閉に言うど、再度墓に視線を送ると、その後は振り返ることなく墓地を後にした。

時間は既に黄昏時、辺りはオレンジ色に包まれ、夕飯の買い出しに急ぐ主婦や、家路につく者達で人に溢れていた。

「どこに迎えが来ているんだ天閉？」

「こんな街中に来るはずないだろ。このキヨロクからかなり離れた荒野だよ」

天閉の『荒野』という言葉に主水はため息を吐いた。

キヨロク周辺は街道が整えられており、荒野になっっているのは、街道から外れて、かなりの距離にあるからだ。

人の足でも街道を外れた後、約半刻ほどの時間を要する。

「しょうがねえだろ。乗り物は危険種なんだから。街に近づいただけ

で色々問題が起こるんだよ」

「それならしょうがねえな」

主水は以外とあっさり頷いたことに天閉も呆氣に取られた。

主水としては乗り物が危険種と分かった瞬間納得していた。

イエーカーズの仕事としても、危険種が帝都の周辺に出現しただけでもよく召集がかかっていたからだ。

キヨロクを大門から出て更に街道から外れて半刻ほど経つと、辺りは深淵の闇に包まれ、遠く離れたキヨロクの街の明かりが、空に煌めく星のように見える辺りにまで来ていた。

「旦那やつとついたぜ」

天閉が指し示した先には、一度江戸で大きな騒動の発端となったことのある鳥がいた。

「丹頂鶴か？」

疑問形になった理由は簡単だった。

見た目は完璧に丹頂鶴なのだが、なにぶん大きさが違いすぎた。

羽をたたんではいるが、その大きさは体高約五メートル、横幅約二メートル、羽を広げたら数十メートルにも至るのではないかという、途方もない大きさであったからだ。

「こいつはタイラントクレーン一級危険種だ。戦闘力だけで言えば特級クラスらしいが、臆病で警戒心が強く、あまり害になることがないため一級どまりらしい。俺の知り合いの裏家業の仲間に貸してもらった乗り物だ。帝都とキヨロクを約半日で運んでくれる」

「たいしたもんだ」

主水は心からそう思った。

帝都からキヨロクまでは馬を使っても2〜3日かかり、しかも馬は疲労するので乗り換ええないといけなかった。

そのため主水は心からそう思ったのだ。

「天閉。おめえが前に言ってた帝都で今起こっている厄介な事ってえのを、帝都につくまでに話してくれねえか」

「聞き流さずに覚えていたのかよ。まあいいぜ。旦那にも大きく関わることだと思っからよ」

天閉がタイラントクレーンの首をポンポンと叩くと、二人に乗りやすくなるように、タイラントクレーンは羽を広げる。

すっかり訓練されてるんだなあと感心しながら主水は背に備え付けられている、座席に座った。

「しっかりベルトを絞めてくれよ。すげえ風圧だからな」

天閉の言うことを聞き、ベルトを絞めると、タイラントクレーンは巨大な羽を羽ばたき、まるで爆風のような風を巻き上げ、二人を乗せ、夜空に飛び立った。

第61話

白き雲をしたにおき、月光に照らされ白銀に輝くタイラントクレインの羽毛の上で優雅に空の旅を、満喫するどころではなかった。

「天閉とんでもなく寒いんだが…」

主水は仕事用のマフラーを目深に巻き、袖に両手を引っ込め、鼻声で文句を垂れる。

なぜ飛び立つ前に言わなかったとばかりに。

「人目の届かない上空で、しかもその飛行スピードから風を浴びることを念頭に置けば予想の範疇だと思っぜ」

天閉は飛び立つ直前に着込んでいた為に、余裕の笑みを浮かべる。行きで地獄を見た為学習したことだった。

(こいつ嵌めやがったな)

江戸時代には上空に行けば行くほど気温が下がるということは、知られていなかった。

鼻をすすりながら、主水は体を震わせ、天閉を怨むしかなかった。

「まあそれはいいとして、話聞かせてくれねえか」

「ああ、帝都の事か。発端は旦那らイエーガーズがキヨロクに出払ったことが問題だよ。イエーガーズがいない間帝都の警備が疎かになるってことで、新たに秘密警察ワイルドハントつう組織が作られたんだ」

「ちよつと待て…帝都警備隊はどうしたんだ」

帝都にはイエーガーズとは別に帝都警備隊が治安を護っていた。

しかし、天閉の話ぶりではイエーガーズのみが帝都を護っていたというような口ぶり、少なからず違和感を覚えたため、主水は口を挟んだのだ。

「帝都警備隊はなんかごたごたがあつたらしくてよお、今は機能してねえよ」

(ごたごたか…)

元は帝都警備隊に身を置き、同僚だった者も多かった為、気には掛かるが、今は頭の片隅に追いやり、悪かったと天閉に話を戻すように

促す。

「元に戻るぜ。でよお、そのワイルドハントつてえ組織がとんだ荒くれ、外道集団で、女、子供を見りゃあ犯し、気にいらねえと皆殺しつう外道の限りを尽くしてるんだよ。リーダーが、オネスト大臣の息子シユラつてヤツで、誰も文句を言えないから問題が大きくなってるって寸法だ」

(女、子供……犯す……!!)

主水は青ざめ詰め寄る、

「おめえに頼んでおいたボルスの妻子はどうなった」

主水はボルスの最後の頼みを聞き入れ、自分が帝都にいない時は、天閉に陰ながら気をつけるように頼んでいた。

そんな最中に、女や子供を犯すという事を聞き、焦り問い詰めるに至ったのだ。

「旦那落ち着け。俺に抜かりはねえよ。あの未亡人も子供もえらく容姿がいいんであぶねえと思っただからよ、懸賞で温泉旅行が当たったってことにして、旦那が帰るまで、帝都から離れるようにしといたから安心していいぜ。あと二、三日で帝都に帰ってくるはずだ」

「そうか……ありがとよ」

主水は胸を撫で下ろした。

ボルスを仕事で手にかけてしたのは紛れもない事実。

そして、その事については後悔などしてはいないが、遺言として頼まれ救うことを約束したボルスの家族を見殺しにしたのでは、言葉は悪いが寝覚めが悪い、故に主水は妻子が無事と聞いて安堵した。

「喜んでる所で悪いが別途で旅行の代金も払ってもらうぜ。これも仕事なんぞな」

「分かったよ……(しっかりしてやがる)」

累積していく支払いに頭を悩ませながらも、やむなく頷く主水であった。

「再び話を戻すが、全く関わりあいたくないやつらだが、一応聞いておくが、メンバー構成はどうなってるんだ？」

主水は表の仕事では極力関わらずに、また関わってもへこへこして

穩便に済ませるつもりではあるが、それほどまで怨みを持たれているなら、近いうち裏の仕事になるのではないかという考えに至ったために尋ねた。

「悪いが見た目と名前しか知らねえよ。こつちも命が大事だからな、仕事でもねえのに危ない橋は渡りたくはねえからな」

天閉は前置きをした上で簡単に話し出した。

「リーダーのシユヲを含めてメンバーは7人。一人目は、イゾウという旦那と同じ侍だ。草のような物を常にくわえた羽織袴の男だ」

（俺と同じ侍なら、戦い方も予想がつく。問題はないな…）

様々な流派を学び、極めてきた主水にとって同じ侍ならば、遅れを取ることはない、自負していた。

「二人目は、エンシンつつうあぶねえヤツだ」

「あぶねえ？」

今までの話から全員が「あぶねえ」んじゃないかと僅かに疑問に思いう主水はついつい言葉に出した。

「見た目からしてあぶねえんだ。常に舌出して露出が半端ない姿してやがる。薬でもやってるんじゃないかねえかってヤツだ」

（女の露出はありがてえが、男とはな…）

顔をしかめ、ため息をはく主水。

そんな主水を気にする素振りもなく天閉は続ける。

「三人目はチャンプつつうデブのピエロだ」

（ピエロは道化だったか…太鼓持ちみたいな者か）

主水はピエロについては江戸ではもちろん見たことなどなく、帝都に来てから初めて知り、セリユーに教えてもらい、知ったが、未だにあやふやであり、自分の知っているものでいったらと考え、宴会などを盛り上げる太鼓持ちを思い出していた。

「四人目は——」

「待て待て、それだけか？」

「ああ、でぶのピエロって言えば分かると思ってな。まあ付け加えるとすれば、常にハアハア言ってるぐらいかな」

さらりと流す天閉は主水が無言なのも構わず、さらに続ける。

「四人目は、女でコスミナ。メガネかけてうさぎ耳つけた、内まきのショートカットの髪型で、胸元を強調した姿で、胸がデカイ姉ちゃんだ」

「男に比べて詳しくねえか…」

「そうか」

さらっと答える天閉に呆れたような視線を向ける主水。

敵になりそうなヤツラなのに女なら良いのかと、一瞬ラバックが頭に浮かんだ。

「五人目は、ドロテア。一言で言っただけだ。八重歯が愛らしいな」

「ロリ？」

聞いたことがない言葉に疑問符を浮かべる主水。

「幼女のような見た目ってことだ。性格があれじゃなければかなり需要がありそうなんだが」

「……」

主水の冷たく蔑んだ瞳に耐えられなくなり、一つコホンと咳払いし、仕切り直して続ける。

「六人目は、すまねえが分からねえ。白いローブを目深に被っていて名前所か、姿さえ分からねえ。まあより詳細な情報がほしけりや金を出すことだな」

天閉はニヤリと笑い、指で円を描く。

裏家業には常に金がつきまとうということ、端的に表していた。命を掛けて対価を受け取るのだから当然だが。

「百聞は一見に如かず。遠目に見て見るしかねえか」

「俺の労力を返せと言いたいが。まあそれが一番だろうな」

主水は前途多難かと白み始めた空に浮かぶ有明の月を、見上げて、フツと白い息をついた。

「旦那着いたぞ」

約半日の夜空の旅を終え、帝都から少し離れた山間地に二人を乗せたタイラントクレーンは降り立っていた。

「返事がねえなあ。凍え死んじまったか。死んでもいいけどよ、金を

払ってから死んでくれよ。旦那起きろよ」

容赦なく平手打ちをかます天閉。

主水が死んだら、借金を踏み倒されてしまう。必死になるのも道理である。

「ああっ！よく起こしてくれた。大きな川の前でババアに似た脱衣婆に有り金全部奪われる所だったぜ」

冷や汗を拭いながら袖にある金貨を確かめ、ちゃんとあることを確認して、安堵の表情を浮かべる。

「俺も旦那が蘇生してくれて助かったぜ。相当つけが貯まってるからな。行こうか」

天閉は爽やかな笑顔を主水に向けると、主水は観念したように、黙って自宅に向けて歩き出した。

「マジかよ……」

帝都に足を踏み入れた主水は、絶句した。

キョロクに出向く前は、活気があるとは言えなくとも、人気はあり、僅かに賑わっていた。

しかし、今は違っていた。

まるで、世界が変わったかのように、寂れ、静まり返り、寂寥とした雰囲気が流れている。

まだ早朝ではあるとはいえ、異常な光景である。

「だから言ったろ。ヤツラのせいで皆引きこもっちゃってるんだよ。まあ根性あるヤツは今でも店は開くけどな」

天閉は腕を頭の後ろに組んで、回りを流し見る。既にその光景は見慣れたというように。

「まあ旦那もヤツラのイカレぶりをその目で嫌でも見ることになるさ」

全く感情のこもらない声で天閉は答えると、動きを止めている主水を促し、先を急いだ。

主水は自宅につくまで注意深く辺りを観察しながら歩いたが、どこも同じ有り様で、ひっそりと息を潜め生活しているようだった。

まるで、何か恐ろしい者の視界に入ること恐れるように。

「全部で金貨10枚ってどこかな」

「ボリ過ぎだろ!!」

主水は明らかに法外な値段に声を上げた。

帝都での金貨10枚ならば、江戸での小判10枚にあたる。

江戸時代の武士がサンピンと揶揄されたように、一年三両一分の給金であり、故に給金の三年分に当たる。

「因みに10両は今の60万から100万ほど」「手間隙考えたら安いぐらいだぞ」

(ここで決裂したら後々めんどくさくなるからな。しょうがねえ…)

金には煩い主水も、折角見つけた優秀な協力者を失うことの方が不利益になるのは明白であるので、渋々承諾した。

自宅に入ると主水はキョロキョロ辺りを見回し、掛け軸に近づくと、徐に裏を見て、上下の縁に挟んだ金貨を抜き取る。

以前から主水はせんとりっつから金を守るためにヘソクリをして隠していた。

今ではそれは必要のないことではあるが、癖として体に染み込んでいるのだ。

そんな自分の惨めな癖に苦笑を浮かべながら10枚の金貨を用意し、天閉に支払ったのだった。

第62話

イエーガーズの仲間達が帝都に着くまで約二日。遅れてキヨロクを後にしたはずの主水が、先に帝都に着いていたとなると、色々と言いつく事を考えるのに面倒なので、自宅に引きこもろうと、キヨロクを出る時には考えていた。

しかし、現状の帝都のあまりの変わりように愕然とした主水は、宮殿に行き、出来るだけワイルドハントの人員について調べることにした。

以上のことから、目的地まで人目を避けようと思ったが、帝都には、麗らかな陽気だと言うのに、人気は疎らであり、あまり気にすることもなく、宮殿にたどり着いた。

宮殿は普段と変わらず、静寂に包まれてはいるが、何かしら重たい雰囲気にも包まれているような印象を、主水は僅かに感じていた。

主水がイエーガーズの文書や書類を保管している書庫を目指し、顔を伏せ、歩を進めていると、前方から人影が。

(身を隠すか、それとも……)

僅かに主水は瞬巡したが、前方から来る人物を見て、その考えを捨てた。

「お久しぶりですチョウリ様」

主水の顔見知りであり、かつ心を許している人物。

今は、厳しい表情で眉間に皺を寄せているチョウリであったからだ。

「これは主水君。帝都にいつ帰ってきたのだ？」

険しい表情が一転して、明るい表情へと変わる。

人に気を遣うことに長けたチョウリだからこそ、

主水に心配させまいと、気を遣い表情を一転させたということは、容易に読み取れた。

だからこそ主水も、チョウリのことが気にかかり心配になる。

「内密にして欲しいのですが、キヨロクからは昨夜帰還しました」
軽く聞かれたことについて、「内密に」ということを含め返答をし、

少々迷いはしたが、覚悟を決め踏み込んだ。

「お疲れのようですが、どうかなされたのですか？」

少し寝れた感のあるチョウリは主水の問いかけに表情を一瞬曇らせる。

今まで主水の前では見せたことのないものだった。

言い淀むチョウリに気を遣ったのか、付き添っていたスピアが口を開いた。

「中村様は昨夜帰還ということ、お知りではないかもしれませんが、実は最近——」

「スピア!!」

急にチョウリの厳しい叱責の声により、ビクツとしたスピアは口をつぐむ。

「ここではなんなので私の家に来ないか主水君」

先程の剣幕から、主水は即座にスピアが語ろうとしたことを察し、宮殿内では不味い事柄とも理解出来たので、チョウリの邸宅に共に向かう運びとなった。

宮殿を出た三人は待機していた馬車に乗り込み、チョウリの邸宅に向かう。
やはりと言ってよいのか、馬車においてもチョウリは黙り込み、口を開くことはない。

重苦しい雰囲気の中、馬車は進み、チョウリの邸宅に辿り着いた。

馬車が止まると、馬を扱っていた従者がいち早く降り、馬車の扉を開く。

チョウリ、スピアが降りるのに続き外に出た主水の目の前に、チョウリの邸宅が広がっていた。

チョウリの邸宅は、主の性格を表すように、他の貴族のような贅を尽くした豪華絢爛なものではなく、チョウリ、スピアの親子二人で住むのに十分な大きさで、とても貴族が住むような住まいではなく、質素で慎ましやかなものであった。

「狭い所で悪いのだが、入ってくれたまえ」

「お邪魔します」

チヨウリに促されるままに、主水は一礼すると草履を脱ぎ、チヨウリの家に招かれるまま、邸宅内に足を踏み入れた。

チヨウリに続き歩いていくと、屋敷内の渡り廊下に差し掛かり、そこで主水の目に写ったのは、僅かなスペースを見事に活用した、日本庭園であった。

落ち着きのある季節毎の自然の色彩に彩られ、肅々と時を刻む鹿威しの竹の響きが、心地よく感じられる、わびさびの世界。

日本人の主水も心安らぐ感覚を得ていた。

チヨウリに通された部屋は茶室のような落ち着いた空間であり、遅れて入ってきたスピアがお茶を二人の前に進める。

「これはすいません」

主水は軽く会釈をすると、主人のチヨウリが口にするのを見て、続いて茶を啜る。

「わざわざ家まで申し訳ない主水君。君も忙しかったのではないか」

「いえお気になさらないください。私はいつでも暇ですから」

悪そうに謝罪するチヨウリに、気にしないでくださいと笑い掛ける主水。

主水にとっては素の姿に近いのだが、主水がさりげなく気づかってくれたのを察し、余程チヨウリにはそれが嬉しかったのか、はたまた心を打ったのか、瞼には光るものがあつた。

これまで気を遣うばかりで、気を遣われたことがなく、精神的にも疲弊していることが見て取れる一幕であつた

「先程は声を荒げてしまつてすまなかつたねスピア」

「いえ私も場所がらをわきまえずに申し訳ありません」

スピアも既に叱られた理由を心得ていたので、素直に自分の非を詫びた。

すでに先程のような剣呑な雰囲気は消え、和やかなものに包まれていた。

主水からしたら、そのような和やかな雰囲気を壊したくはなかつたが、何れはしなくてはならない話なので、申し訳なく思いながらも、踏

み込んだ。

「宮殿内で話すことを憚られ、また、他人には聞かれてはならない、最近になって現れたチョウリ様の悩み事とはやはり——」

「主水君の察しの通りワイルドハントのことだよ」

苦々しい表情を浮かべ、チョウリはその想定通りの言葉を口に出した。

主水もやはりなと得心がいった感じで軽く頷いた。

大臣派が殆どを占める宮殿内で、大臣の息子のシユラが率いるワイルドハントを批難することは、自ら死地に飛び込んで行くのと、同義である。

「父は国民の為を思い、自ら汚泥に身を沈め、昔の仲間たちから後ろ指を指されながらも、大臣に従い、大臣の出す法令による国民の負担を軽くすべく、我慢し平身低頭働いてきました。やっと大臣に取り入れたと思われた矢先にあの憎きワイルドハントです。無差別に人を殺し、凌辱し悪逆非道を尽くしています。このままワイルドハントを野放しにして置くわけにはいきませんが、そのように口を出すと、大臣に目を付けられ、意見を言えなくなります。その板挟みで父は深く悩み、疲れ果ててしまったのです」

涙ながらに話すスピアを見て、主水にもその心痛が理解され、心が締め付けられるような感覚を覚えた。

選ぶことが出来ない二択。

どちらを選んでも結果皺寄せにより、良い結果どころか、より悪くなる未来しか見えない。

どちらも間違いであることが明白でありながら、必ずどちらか一つを選ばなくてはならない二択、残酷な現実に向き合っていた。

しかしながら、主水は選ばなくてはならないならば、チョウリが安全な方を選ぶべきと口を開く。

「今は国民に我慢してもらおう他ありません。未来に良くなる道を残すためにも、チョウリ様には危ない道は避け、今のまま黙って進むことをお勧めします」

ワイルドハントには手を出すな。

それが主水が導き出した答え。

チョウリには言えないが、ワイルドハントは遠くない未来に、因果応報、壊滅することになる。

ならば、今は後の為に耐えるよう主水は考え、この道を勧めた。

スピアも父の身を案じ、主水と同じ意見を抱いていた為に、今日初めて潤んだ瞳で笑顔を見せた。

しかし、当の本人のチョウリは納得出来てはいない。

聡明なチョウリは、大方主水の答えの意図は理解出来ていた。

しかし、裏を返せば、それは、国民が無下に殺されるのを黙って見ていると言われたのと同じであり、国民第一を信条に掲げるチョウリにとつては、受け入れることが耐え難いものであった。

暗中模索、チョウリは必死になつて一寸先も見えない闇の中、もがいていた。

何か良い道はないのか、きっと何かしらあるはずだと。

後々主水は深く後悔することになる。この時、チョウリの性格や信念を深く理解していたはずなのに、なぜ、やんわりと意見を勧めるだけで済ませてしまったのか。

強く進言すべきではなかったのかと。

◆◆◆◆◆

主水はチョウリ邸を辞去した後、シンと静まり返り誰もいないイエーガーズの本部の書庫にやって来ていた。

当然鍵はしまっていたので、以前牢屋番として働いていた時に、囚人の鍵師に教えてもらったピッキング技術を使用した。

イエーガーズ発足当初、エスデスは警察という仕事柄、どんな些細なものであろうと、これからは事件に関係する資料が必要ということ、帝都について、さらには帝都周辺及び辺境にあたるまで幾多の資料を取り寄せ、この資料が集まる書庫を作り上げた。

故に、この書庫に探りを入れれば犯罪者、事件のあらましについてほとんどといっていいほど、情報を得ることが出来る。

ただし隠蔽されていなければという但し書き付きは必要だが。

普段の昼行灯ぶりとはかけ離れた真剣な表情で、一心不乱にワイル

ドハントの人物名をあらゆる事件が登録された登記簿から探りを入れる。

さしあたってここ十年の帝都、及び帝都周辺地域に当たりをつけて調べていく。

(ねえか…)

約二刻主水は必死にページをおって探ったが、めぼしいワイルドハントの情報は見つかることはなかった。

もつともワイルドハントを探る上で犯罪者に当たるのは間違いではない。

しかし、ワイルドハントのメンバーは、シユラが世界を放浪した先でスカウトしてきた犯罪者なため、情報がでてこなかったのだ。

ただ、一つ主水が気になった点があった。

この書庫は作られた後からほとんど使用されてはいなかったはずであった。

故に大半に埃が積もっていないながらも、帝都中央部ジョヨウ地方の資料の埃が払われ、最近読まれた形跡があったのだ。

故に気になり、より慎重に探りをいれたのだが、有益な情報を得られることはなかった。

(こりゃあ更なる出費覚悟で天閉に調べてもらう必要があるか…)

主水は懐具合を確かめ、一息吐くと、その場を後にした。

しかし、着実に悲劇の幕開けが主水に忍び寄っていたことを、まだ主水は気づいてはいなかった。

第63話

ワイルドハントの横行はどどまる所を知らず、更に悪化の一途を辿っていた。

この二日間でも多数の使者が出、多くの血が流された。

先日行われたのは、帝都に訪れていた、旅一座に対する取り調べという名の凌辱と殺しであった。

その発端も、些細なことである。

旅一座の座長は、ワイルドハントには逆らわず、賄賂を送ることによりお目こぼしされるといいう情報に従い、シユラに袋一杯分の賄賂を渡した。

しかし、それがシユラの怒りを買った。

賄賂という行為を正義感から嫌ったのでは勿論ない、賄賂の額が気に入らなかつた、ただそれだけだった。

そして目をつけたのは、一座の女性であった。

旅一座だけあり、女性は皆美しく、シユラの瞳にはどれも面白そうな玩具に見えていた。

そして始まる狂乱の宴。

シユラとエンシンが一座の女性達に獣のように襲いかかり、目を覆いたくなるような凌辱を始め、コスミナは男を（性的な意味で）貪り、中でもシヨタコン、ロリコンという歪んだ性癖を持つチャンプは、10歳程の少年に、その歪んだ欲望を向けた。

少年ばかりはお助けくださいという老齢の女性には、憤り、原型がなくなるほどの暴力の嵐を降らせ、肉片にする悪行を働いた後、自らの欲望を少年にぶちまけた。

性的欲望に疎い、イゾウとドロテアは別の快楽を求める。

殺害と食欲という名乗の。

イゾウは愛刀へ江雪に血を吸わせることに無情の喜びを持ち、逃亡をはかる劇団員を肉片に変え、血の海に沈めた。

ドロテアは、帝具の八重歯を突き立て、まるで吸血鬼のように生氣を吸い死に至らしめた。

帝都に帰りついたイエーガーズが現場にたどり着いた時には、既にワイルドハントの姿はなく、犯され、ぼろ雑巾のようになった女性や男性の姿。白目を向き、苦しみ抜いて息を引き取った少年。原型をとどめない老齢の女性。肉片と血の海と化した劇団員。生気を抜かれミイラと化した死骸。

見るも無惨な陰惨な現場が広がっていた。

ウェイブ、セリユーは怒りにうち震え、ランは少年の死骸を物思いげに見つめていた。

(ここまでひでえ現場は初めてだ……)

主水も今までの人生の中でも類を見ない凄惨な現場に、絶句していた。

そして、今日もワイルドハントは街を絶望で染め上げた。

つい先日、自分の力を見せつけるかののように、皇拳寺に押し入り、難癖をつけ、師範と師範代をなぶり殺しにした。

その仇を討つべく、皇拳寺の門下生がワイルドハントに立ち向かった。

しかし、これをシユラ一人で瞬殺し、門下生の一人がうら若き少女であったために、一人だけ残り、絶望を与えた後、泣き叫び、助けを請う少女を、無慈悲に街のど真ん中で凌辱した。

そして、イエーガーズが現場に到着した時には、満足気に余韻に浸るシユラと、ワイルドハントのメンバーがイエーガーズを出迎えた。

「よう、遅かったじゃねえか。ゴミは俺が片付けておいたぜ」

嘲笑うかのように、上から目線で話すシユラ。

まるで悪びれることもない。

「御足労おかけしました」

「御苦労様です」

ランと主水は表情を変えることなく、素直に頭を下げた。

しかし、ウェイブは我慢ならず、怒りで震え、シユラを睨み付ける。

「その二人は分かっているじゃねえか。それに比べて、てめえは俺に手間かけさせて挨拶すらろくにできねえのかよ！」

シユラの鋭い視線がウェイブに刺さる。

ウェイブは、怒りで唇を噛み締め、血を流しながらも、

「ありがとうございます……ごいしました……」

と頭を下げた。

これも、ランから言われていたこと、「隊長が戻られるまでは耐えて下さい」という言いつけを守った形であった。

「後始末は私たちにおまかせください」

笑顔でランがシユラにそう告げると、満足気に去っていった。

残されたランと主水とウェイブは、ワイルドハントが陣取っていた空き家の扉に手をかける。

中からは、何か雫が地面を打つ音のみが漏れ、生き物がある気配すらない。

(また嫌なもんを見ることになるのだろうか)

と主水は思う。いや三人とも同じ思いだったろう。

心なしかランの扉に掛けた手にも力が入る。

意を決して扉を引くと、ギーと錆び付いた音をたてながら、扉は開かれた。

開かれた扉から、むせかえるような鉄錆びの臭気が溢れてくる。

しかし、三人は鼻を覆うことさえできなかつた。

嗅覚を忘れさせるほどの状態が、視覚から流れ込んで来たためだ。

精肉工場に吊るされる豚や牛のように、天井の梁から、裸体の男性多数と、一人の少女が逆さに吊るされていた。

全ての死骸は血の気が下がり、顔面の穴という穴から血液が流れ落ち、地面を血の海に変えていた。

「なんでこんな酷いことが出来るんだ!!」

ウェイブが目を反らし、壁を殴り付ける。

「気持ちわかります。しかし今は、この者達を吊ってあげるのが先です」

ランがウェイブを宥めるように肩に手を置き、優しく告げる。

「……ああ」

ウェイブは消え入りそうな声で、一言小さくランに返すと、沸き上がる怒りを抑えて、無言で三人は後始末を始めた。



天井が突き抜けるほど高く、豪華な調度品で彩られた宮殿の大広間で、巨大な机を前に、オネスト大臣を中心に、帝都の官僚達が集まり、これからの政策や帝都について議論をしていた。

ただし、この場に集められた官僚達は全て大臣に媚びへつらい地位を維持する官僚達ばかりであり、形ばかりの議論で、大臣の政策が肅々と全会一致で通っていく、まるで議会とは呼べない代物であった。

その中にはチョウリも名を連ねている。

その表情は鬱積に満ち、また何か覚悟を決めた表情をしていた。

議論が一段落ついた所で、意を決したようにチョウリは立ち上がった。

「おやおやどうしましたかチョウリ殿」

下卑た笑みを浮かべ、肉を頬張るオネスト大臣が、突然立ち上がったチョウリに、ぬるりとした視線を向け問いかける。

大臣は冷静な様子ではあるが、回りは騒然となる。

確かにチョウリならばこのような議会でもやんわりと意見を挟むことはこれまでも幾度か見かけた光景であった。

しかしながら、普段の一步引いた感じの平身低頭という感じは今回はなく、表情は固く、憤りを秘め、ただならぬ思いが他の官僚にも読み取れたことが、ざわつかせた最大の理由であった。

「オネスト大臣に一言申し上げたいことがあります」

「なんですか。お聞きしましょう」

オネスト大臣はにこやかに訪ねるが、逆にそれが周囲に恐ろしさを感じさせ、広間に緊張が走る。

もう誰も言葉を発することもなく、固唾を飲んでチョウリが大臣を怒らせないことを祈るばかりである。

「大臣は、御息のシユラ殿の、ワイルドハントの悪行を御存じか」

広間の空気が凍り付く。今や宮殿内でさえ禁句となっていることを、直接大臣に聞くと、まさに命知らずの周囲から見れば悪行を、チョウリが行ったからだ。

「チヨウリ殿の仰りたいことは分かりかねますな」

大臣の視線が僅かに鋭くなり、剣呑な空気が流れ出す。

既に、肉を食べる手も止まっている。

「先日旅一座を皆殺しにした件と、皇拳寺の師範と師範代を惨殺したことを言っています」

大臣の視線を真つ向から受け止め、負けじと厳しい視線を投げ掛ける。

「何が問題だとチヨウリ殿は仰るんで？」

「前者は賄賂が少ないと言うことで劇団員を凌辱後皆殺し、後者はシユラ殿の力試しの為に殺したと報告が来ております。大臣はこの事について、どのように処断するおつもりか」

チヨウリは厳しく問い詰める。

『怒髪天をつく』をまるで形容するかのようになり、チヨウリは目を怒らし、今まで見せてきた好好爺の面影などなくなり、大臣だったころの強さが蘇っていた。

「ハハハハハ、チヨウリ殿は面白いことを仰る」

部屋の緊張を吹き飛ばすように大声で笑いだす大臣。

しかし、その笑い声は、愉快という感情はなく、不快感をもちに表した物であり、チヨウリ以外誰もが震え上がり、大臣に視線を向けることすら出来ない状態で視線を反らす。

「お答えしましょう。前者の件は、不正な行いを目溢しするようにワイ口を渡そうとしてきたために、秘密警察として粛清。後者のことは前回キヨロクでの羅刹四鬼の失態を伝えに言った所、逆上して襲いかかってきたため、やむ無くと聞き及んでおりますぞ」

大臣の言い分を聞き終わると、チヨウリの口許に笑みが浮かぶ。

まるで想定通りと言うように。

「そのような言い逃れがまかり通るとお思いか大臣。私はこの件について証人を得ております。お入りなさい」

チヨウリの声が響くとおどおどした男が入ってきた。

「昨日私に言ったことをここで申し上げるのだ」

チヨウリの発言を受け、男は顔を上げる。

「部屋の外で議論を聞かせてもらいましたが、オネスト大臣の仰る通りです。私はこの耳と目で、聞き、目にしました」

大臣は口許をまるで三日月のように釣り上げ、鬼の首をとったかのように、青ざめたチョウリに視線を向ける。

「どうやら私の言い分があつていたようですね。チョウリ殿もお疲れから耄碌した模様。家で休まれたらどうですか。衛兵チョウリ殿をお連れしろ!!」

「何故だ…」と小さく呟き、項垂れ、力の抜けたチョウリは衛兵に両側から支えられ、連れ出された。

「では今回は解散にしましょう」

大臣の声と共に、恐怖の議会は終結した。

「シユラ様、仰る通り証言いたしました。妻と子を返してください」
議会で証言したおどおどした男が、ある一室でシユラに泣きついていた。

チョウリの証言をするという情報を得たワイルドハントが、男の妻を人質に取り、証言を裏で操作していたのだ。

「ああ、二人とも死んだぜ。女は軽くサンドバッグにしてたらずぐにな、子供はチャンプが可愛がつてから、天国に送っちゃったようだぞ」
へらへらと笑いながらシユラは答える。

「どういうことですか！言われた通り言えば妻子は返してくれると言ったから、私はチョウリ様を裏切り、あのように発言したの!!」

男は泣き崩れた。

「安心しろよ。すぐに合わせてやるからよ!!」

シユラは男に拳を振り抜くと、拳が男の頭部を破壊し倉庫内を血で染め上げた。

「もれえなあ。あと始末しねえとブドーの雷オヤジがうるせえからな。誰かに掃除させるか」

血にまみれた拳を拭きながら、シユラは終始へらへらと笑っていた。

第64話

「よくやってくれましたシユラ。おかげでチョウリの化けの皮を剥がし、処分することができました」

宮殿内の一室で、巨大なプリンを頬張りながら、大臣オネストは息子のシユラの功績を称える。

チョウリの奥の手となる、罪に対する証人の妻子を人質に取り、逆に証言を上手く操作し、チョウリを追い詰め、排除することが出来たことへの称賛である。

「へっ、まあ俺にかかればこんなもんだ」

満更でない表情で軽口を叩く。

嬉しきで口許が無意識に緩んでいることから、シユラの心のうちが表れている。

「これからも忠信ぶった愚か者どもを炙りだし、連座制で処分していくので、よろしく頼みますよ」

大臣はプリンをペロリと食べおすと、したなめずりをしながら、皿を置き部屋を後にした。

「やったぜ。オヤジに褒められたぜ!!」

オネスト大臣が出ていくと、嬉しさを爆発させ、シユラはうち震えていた。



主水は宮殿を飛び出し、先日の記憶を思い返し、チョウリの邸宅に向かっていた。

およそ四半刻前に、ランによってチョウリが謹慎処分を受け、しかるのちに処刑されるだろうという一報をもたされたからだ。

主水は走るうちに、草履の鼻緒が切れようとも、足を止めず走りチョウリの邸宅前に辿り着いた。

しかし、予想通り、チョウリの邸宅の門前には、槍を構えた衛兵が立ち、門を固く閉ざしている。

ランからの情報によると、今チョウリの邸宅に詰めている衛兵は、大臣配下という話であった為に、イエーガーズの名を出したとしても

無駄だと悟り、裏に回ることにした。

(門は閉ざさされているが、門番はいねえのか?)

裏門にも、やはり衛兵が配備されていた痕跡はあるのだが、どうい
う訳か、姿が見えない。

裏門に注意深く歩みよると、死角にある草場で眠る衛兵の姿が。

気にはなるが、これ幸いとし、気配を消し、主水は固く閉ざされた
裏門を乗り越え、チョウリの邸宅に足を踏み入れた。

チョウリ邸宅は静寂に包まれていた。

ただ、僅かに人の気配は感じた為に、警戒しながら、一つ一つしら
み潰しに部屋を渡り歩く。

幾つか探り、ある部屋に足を踏み入れると、次の部屋から明かりが
漏れている。

足音を忍ばせ、近づき、部屋の気配を探ると、人の気配が。

その気配は落ち着いた感じで、チョウリだと主水は判断し、扉越し
に声をかける。

「中村主水です。チョウリ様お邪魔してよろしいでしょうか」

「おお、やはり来てくれたか主水君。気にせず入ってくれ」

主水が扉を開くと、達観したような表情で、吹っ切れたように爽や
かな笑顔をしたチョウリが、白装束(死に装束)で正座していた。

部屋に入った主水は軽く会釈し、チョウリの対面に座る。

「チョウリ様。お話はお聞きしました…」

主水の言葉に、チョウリは僅かに間を置くと、静かに頭を下げた。

「本当に申し訳ない。一度主水君に助けてもらった命を、主水君の言
うことを聞かず失うことになってしまい…」

少々言葉を詰まらせながら話すチョウリに、主水の心も痛む。

しかし、今は感慨に更けている余裕などない。

主水はチョウリに考え抜いた末に導き出した提案をする。

この提案をするが為にここに来たとも言える重要な提案。

「チョウリ様。あなた様はここで命を失ってはならないお方です。不
本意ではあると思いますが、今は生き長らえるために、革命軍に身を
お隠し下さい。チョウリ様ならば、革命軍は喜んで匿ってくれます」

主水が自らの提案をチョウリに伝えると、チョウリは面白そうに微笑んだ。

「どうかなさったのですか?」

突然笑うチョウリを不思議に思い、主水は思わず尋ねていた。

「いやすまない。君と全く同じことを、先程訪ねてきた以前の君の上司に言われてね」

チョウリの「以前の上司」という言葉に、主水の脳裏にタカナの姿が浮かぶ。

そんな最中、チョウリは軽く首を横に振った。

「申し訳ないが、私は逃げるつもりはない」

「何故ですか?」

主水もチョウリの白装束を見た時、覚悟を感じ取ってはいたが、やはり我慢できず、強い口調で問い掛ける。

「私が命を賭けることで、陛下が何かしら感じて下さるかもしれない」「残念ですが、今の陛下ではチョウリ様の思いは伝わらないかと…」

主水は本年を語る。

今や大臣の傀儡となっている皇帝では何も感じないのでと。

「うむ……だが、私は陛下のもとで長年働いてきた。そのため僅かにでも可能性があると思っている。…故にこの命をその希望にかけていると思うのだ」

(自らの命を賭けて陛下に讒言するつもりか……ここまで覚悟を決められたチョウリ様を止めることは出来ないか……)

チョウリの覚悟を聞き、主水はチョウリを説得することは無理であると理解した。

そして、真の忠信を目の当たりにした気がした。

「主水君、私の最後の頼みを聞いてくれるかね」

「私に出来ることなら」

真剣に主水を見つめるチョウリに、主水も目線を反らすことなく、受け止める。

チョウリの最後となる頼みも含めて。

「私には心残りがあってね。一つ目は、娘のスピアのことだ。だがこ

の問題はタカナ君が解決してくれる」

「タカナ様が？」

「ああ、先程君が来る前に現れたタカナ君に、スピアを託した。このままでは私と共に処刑される運命だったのでね。スピアには幸せになつて欲しいからね」

親の顔をしたチヨウリの瞼から、一筋の涙が零れ落ちる。

娘の行く末を見守れないことへの悲しみか、あるいは、今生の別れをしたからかはチヨウリにしか分からない。

チヨウリは涙を拭うと、再び表情を引き締める。

「すまないね。二つ目だが。この帝都と陛下を意のままに操るオネストと、この帝都を絶望に染めたシユラ率いるワイルドハントのことだ」

静かな口調ではあるが、そこに含まれた隠しきれない怒りを、主水は聞き取り、受けとめる。

「あの親子が生きている限り、帝都、そして帝都に住まう国民に平和と安寧が訪れることはない。故に主水君。君にこのようなことを頼むのは酷なことであるのは、承知の上でお願いしたい。あの逆賊共を討ってくれ」

チヨウリは畳に手をつけ頭を下げた。

土下座という形で誠意を表したのだ。

今やチヨウリが信頼し、頼ることが出来るのは、主水しかいなかったからだ。

僅かに間をおき、主水は静かに首を縦に振る。

「仕事人兼ナイトレイド中村主水、その依頼お引き受け致します」

ここに来て初めて主水は大臣を、そして悪逆非道のワイルドハントを討つことを決意した。

◆◆◆◆◆

帝都の脇道を走る二つの影。

一つはナヨナヨした、女性特有の走り方をする、れっきとした男性のタカナと、生気を感じさせない瞳をし、力なく腕を引かれるチヨウリの娘スピアであった。

「スパアさん。悲しいのはよく分かります。しかし、今はお父上の思いを無駄にしないためにも、お力を落とさずに前を向いてください」
「……………」

タカナの声は届いていないのか、スパアは力なく項垂れる。

瞳は真つ赤に充血し、止めどなく溢れる涙は、キラキラと光を放ち、零れ落ちていく。

（チヨウリ様と今生の別れをしたのだからしようがないかもしれないね。心と体を落ち着け整理する場所に早くお連れしなくては…）

「娘のスパアだけは守ってやって欲しい」と涙ながらにタカナはチヨウリに懇願された。

それを叶えるため、スパアを安全な場所に連れていく中で、追つての衛兵の目が届きにくい、帝都の脇道を通り、帝都からの脱出を試みていた。

もしも、チヨウリに頼まれなかったとしても、タカナは自分から志願するつもりではあった。

何故なら、タカナは既に帝都警備隊長の座を追われ、賞金首になつており、帝都を逃げ出す算段をつけていたからだ。

（ここを真つ直ぐ進み、突き当たりを左折すれば帝都の外に通じる西門に辿り着くはず。門に辿り着けば、商人に姿を変えたり、あまりしたくはありませんが、賄賂を与えればなんとかなる…でしょう）

タカナは頭の中で、先々の事を組み立てながらも、スパアの手を引き、足を止めることなく、かつ警戒を緩めず走り続けた。

まだ日は高いが人がいないため、いやがおうでも足音が辺りに響く。

これだけはどうにもならず、我慢するしかなかった。

しかし、あと僅かな所まで来て、最悪なことが起こった。

「見つけたぞ元帝都警備隊長にして革命軍幹部タカナと、大罪人チヨウリの娘スパア!!」

黒い甲冑に身を包んだ、衛兵が左折すると同時に眼前に現れ、道を塞いだ。

「あなたたちは帝都の騎士の中でも精鋭中の精鋭の近衛隊！何故皇帝

を守る役目を負っているはずの貴殿方が私達をおっているのです？」
タカナの前にいるのが、普通の衛兵ではなく、戦闘力でもずば抜けた近衛隊であったことに疑問を呈する。

宮殿内での皇帝の護衛が任であるはずではないのかと。

「我々はオネスト大臣のお言いつけに従いお前たちを追っていたのだ」

(近衛隊までも自分の支配下においたのですか)

大臣の手際の良さに、タカナは辟易とする。

「革命軍幹部タカナ及び大罪人チョウリの娘スパア。抹殺対象を捕捉、直ちに執行にかかる」

近衛隊六人が各々の武器を構える。

精鋭だけあって、その気迫や威圧は底知れぬもので、空気をつたい、二人にピリピリと伝わってくる。

「お話で解決しませんか」

及び腰のタカナは必死に提案する。

しかし、その必死の願いも通じるはずもない。

「覚悟しろ。皆一斉に行くぞ!!」

先頭の近衛隊リーダーの檄と共に、近衛隊の六人が一斉にタカナとスパアに襲いかかった。

第65話

中天に差し掛かった日が見つめる中で、近衛兵による肅清がタカナとスピアに迫っていた。

「あまり殺生は好きではないのですが…やむえませんね…」

タカナはスツとスピアの前に出て、庇うように迫り来る近衛兵の前に立ちほだかり、腰に挿した細剣を抜く。

タカナの細剣は、まるで先が透けるのではないかと思われる程極限まで薄く研ぎ澄まされており、人の目を惹き付けるほどの工芸品のような美しさを誇っていた。

しかし、抜いたにも関わらず、タカナは細剣を構えず、そのまま静かにその場に佇んでいる。

そんな、戦闘体勢に入っていないようなタカナにも、容赦なく近衛兵が剣を、斧を降り下ろす。

次の瞬間タカナの後ろから見ていたスピアは、驚きに目を見開いた。

タカナが避けることもせず、微動だにしなかっただけでなく、降り下ろされた剣や斧が、まるで意思を持ち、自ら身を翻しタカナを避けるように、タカナのすぐ横を過ぎ通り過ぎたからだ。

さらに驚くべきことに、剣と斧を降り下ろしたと思われる近衛兵が、頭をタカナの前に差し出すような体勢になっていた。

「おねむりなさい」

タカナはまるで指揮者が指揮棒で三拍子を刻むように、細剣を振るうと、近衛兵の首が地に落ちた。

「残り四人ですか…私から行きますね」

タカナはゆらりと歩き出す。

目の前で起きた、信じられない現実にも、近衛兵達は動じず、タカナを抹殺するために、攻撃を四方から浴びせかける。

しかし、まるで幽鬼のように揺らめくタカナには、まるでそこに存在しないように掠りもしない。

「帝具の力か!？」

非現実的な光景に近衛兵はそう呟く。

帝具でもない限り、このようなことは有り得ないとも言おうように。

「いえ、私は帝具など持つてはいませんよ」

過ぎ去り様に聞こえる声に、近衛兵達は振り向くことはなかった。

何故なら既に近衛兵四人は、体に指令を送る為の頭部が、切り落とされ、地に落ちていたからだ。

「タカナ様…お強かったんですね…」

悲しみに囚われていたスピアだが、目の前で起こった驚愕の出来事に、そのように呟いた。

また、そのように言った理由もある。

スピアは、宮殿内や街の噂でも、帝都警備隊長タカナは、知識や知能こそあれど、貧弱そうで、ナヨナヨしたモヤシで、戦闘力はからつきしだと聞いていたからだ。

「やっと、口を聞いてくれましたね。よかった。スピアさんの質問には目的地についてからお答えします。今は先を急ぎますよ」

「はい…」

スピアは、未だに深い悲しみが胸を締め付けてはいた。しかし、タカナが、父親チヨウリが命を懸けて救ってくれた命を、無駄にしないためにも、今は足を止める訳にはいかないと、意思を強く持ち、タカナのもとに歩み寄る。

「では行きましょうか」

タカナはスピアに微笑みかけ、次の瞬間180度真逆の厳しい視線を後方に向けた後、再びスピアの手を握り走り出した。

「ハアツハアツハアツハアツ。やるねえあのおっさん！俺に気づいてるばかりじゃなく、視線で俺を牽制しやがった！そそるねえ！殺り合ってみたいなあ」

タカナの鋭い視線の先にいた、歌舞伎者のような異様な袴を着て、見るものを魅了する程の、整った中性的な容姿の男がいた。ただ、顔に浮かぶ笑みにはただならぬ狂気を感じさせる。

「敵を見つけないさったか。即座にお教え願いたい」

男の周りに集う近衛兵が男に詰め寄る。

「ご動じめさるな」

男は一喝するが、近衛隊は役目柄静まらない。

「騒ぐなつつうのー!」

目を狂気でギラつかせ、歪んだ笑みを浮かべ立て掛けてある巨大な薙刀を左手に握り、振るった。

「な、なにを!?!」

血飛沫を上げ、体が斜めに滑り落ちるように、崩れ去る近衛兵。

「フツハハハハッ! かかって来いっつうの!!」

興奮気味にしたなめずりをして、野獣のような瞳を向ける男に、恐怖を覚える近衛兵達。

「乱心者だ気をつけ——何!!」

即座に近衛兵の隊長格が支持を飛ばすが、時既に遅し、周り全ての近衛兵がバラバラになり、自分の首に血にまみれた薙刀があてがわれていた。

「ハアツハアツハアツハアツ! 弱いなあ!」

水が流れるように緩やかに、かつ優雅に、舞を舞うように、男は残りの近衛兵の隊長格の首を宙に舞わせた。

「よいのですか」

「やつらが殺ったことにすりゃあいい」

傍らの男衆の問い掛けに、男は興奮冷めやらぬ様子で薙刀の血を払いながら答える。

「ワイルドハントの詰所に戻られますか?」

「しようがねえな。まだ時じゃないしな」

男は一度去っていくタカナの背に視線を向けると、軽く口端を吊り上げ、姿を消した。

日は落ち、辺りは薄暗くなる頃、タカナとスピアは、広大な森の中を歩いていった。

近衛兵を葬った後に、タカナとスピアは西門を強行突破して、走り

続けこの森にたどり着いたのだ。

「スピアさん大丈夫ですか？」

「はい…大丈夫です…」

疲労の色を隠せないスピアだが、タカナを心配させないように、また足手まといになりたくないという思いから、気丈に振る舞いタカナに笑顔を向けた。

（かなりキツそうですね。ただ後少しの所まで来ているのですから、早く休ませてあげるためにも、ここは踏ん張ってもらいましょう）

「後少しです。行きましょう」

スピアにタカナは手を差し出し、スピアも弱々しいながらも微笑みを浮かべ、タカナの手を取り、足場の悪い森の中を一步一步踏み締め歩き出した。

息をきらせながらもスピアはタカナと共に迷路のようにいりくんだ森の中を歩き続け、遂に開けた草原が目の前に広がった。

大空に佇む半月は、二人に微笑むように、辺りを柔らかい光で照らしている。

「あれが目的地ですよスピアさん」

タカナが指し示す先に、切り立った崖に隠すように作られた建物が見えた。

「あれは？」

「革命軍の組織ナイトレイドのアジトです」

「ナイトレイド!!」

スピアは顔を恐怖でひきつらせ、声を上げた。

スピアはナイトレイドとは帝都において暗殺を生業とする血も涙もない、冷酷無比な殺し屋集団という噂を聞いていた為の反応だ。

「恐れなくても大丈夫ですよスピアさん。確かにナイトレイドは殺し屋稼業ですが。悪党しか殺しません。また貴女のお父上チョウリ様と親しくしていた中村さんもナイトレイドのメンバーなんですから」

「中村様も…!!」

「ええ」

スピアは中村というタカナの言葉を聞き、表情を和らげる。

父チヨウリがあれだけ親しげに、また信頼していた主水がナイトレイドだと聞き、信じられないという思いがある一方、主水がナイトレイドであるならば、ナイトレイドは信じるにたる組織だと考えたからである。

「じゃあ入りませうか。汚い所ですがどうぞ」

「お邪魔します」

まるで自分の家のように招き入れるタカナに促されるまま、スピアはナイトレイドのアジトに足を踏み入れた。

ナイトレイドのアジトは、人の気配もなく、全くの無音の世界が広がっていた。

「ナジエンダーいませんかー」

タカナが声を上げるが、建物内で響くだけで、全く反応はない。

「まだ帰っていないようですね。中村さんや、イエーガーズのメンバーが帝都に帰っているのもうナジエンダ達も帰っていると思っただけです」

少し困った顔で悩んでいたタカナだが、すぐに開き直り、
「帰ってくるまでまたしてもらいませうか」

とあっけらかんとして言うのと、

「空き部屋もあるのでしようし、そういえば温泉もあるそうですから、自由に使って体を休めてくださいね」

まるで自分のアジトであるかのようにタカナは言うのと、

「何処を自分の部屋にしましよつかね」

とウキウキしながらアジト内を我が物顔で物色し始めた。

（いいのかな勝手に使って…）

「ヒギヤアアアアア!!」

戸惑っているスピアの耳にぼろ雑巾を引き裂くような声が。

「どうしたのですかタカナ様」

スピアが駆けつけると、腰を抜かしあたふたするタカナの姿が。

「く、く、く、黒い塊があったのでついついてみたら、Gだったんですよ！汚らわしい！ナジエンダには管理責任者として重大に説教しなくてはなりませんね！」

鳥肌をたて、腰を抜かしながら、怒り続けるタカナを見て、あの時とは別人だなどしみじみ思っていると、それを察したのか、タカナがその格好のまま口を開いた。

「革命軍の中でも機密事項に近いんですが、話すと約束しましたし、いいでしょう。私の力のことなんですが」

(いきなり!!)

唐突に話を始めるタカナに、驚くスピアを気にすることなく雄弁にタカナは話し出す。

「実際スピアさんが噂に聞いていた通り、平常時の私の力は、一般人にも劣ります。体格のいい子供にさえ、負ける程です」

タカナの語ることは、そのままスピアが帝都の宮殿や街中で耳にした話そのままであつた。

「けれども、私の力はある限定下では、大幅に上がるのです。守る者がいる場合という限定条件で：因みに、自分の身を守る為には使えませんが。そのような力だからこそ、誰かを守るために、存分に発揮出来る革命軍に、仮初めの身分ですが、帝都警備隊に身をおいていたのですよ」

自嘲的な笑みを浮かべると、

「これは御内密にお願いしますね。革命軍においても知っている人は僅かにしかいない、機密事項なので」

と立ち上がり、ポンポンと誇りを払うと、窓際に指を這わせ、「全くナジエンダは掃除もろくに出来ないんですか」

とブツブツと愚痴を溢しながらアジトの奥に消えていった。

第66話

鉛色の雲が空を覆う中、チョウリの処刑が帝都の外れの刑場で、公開で執行された。

しかし、見せしめの為に公開で行われながらも、昨今のワイルドハントの件が影響して、見ていたのは主水のみであった。

ただそのような中でも、チョウリは毅然とした態度で、潔く刑執行の舞台上上がり、一度主水に視線を送り、晴れやかな顔で笑顔を向ける。

君達のお陰で憂いはないとも言おうように。

そして、舞台に座り辞世の句を詠み終わると、肅々と刑が執行された。

国と、皇帝、国民の為に一生を捧げた元大臣チョウリは、その生涯を閉じた。

チョウリの生きざまを断腸の思いで見届けた主水は、俯き、暗い表情で、改めて思いを強くして刑場を後にした。

しかし、未だに主水は動けなかった。

さすがに主水といえども、ワイルドハント全員を不意討ちといえ一人で相手するには、荷が重い。

故に、ナイトレイドがキヨロクから帰りしだい、未だに手を着けていない、いつぞやチョウリから送られた菓子の下に敷き詰められていた金を仕事料とし、正式なナイトレイドの仕事とし、仲間の助力を請うつもりでいた。

そのようなある意味手詰まりの状況の中、更なる悪夢が主水に迫っていた。

「旦那、ここにいたか！」

差し迫った状況なのだろう、緊迫した表情で天閉が走ってくる。

「どうしたんだ？」

「ヤバい状況になるかもしれねえ。走りながら状況を伝えるからついてきてくれ」

明らかに焦る天閉に、事態は急を告げていると、主水は察し、天閉

の後に続き走り出した。

「何があるんだ？」

「ボルスの妻子が墓参りに向かってるんだ。更に悪いことにワイルドハントが巡回している最中だ」

「最悪だな…だが昨日ウエイブが伝えたはずなんだがな…」

ボルスの妻子は旅行から帰ってきた初日に墓参りに向かった。

その際に、同席したウエイブが、最近の状況を暈しながらだが伝え、落ち着くまでは帝都に近づかないように、伝えていたはずだった。

故に、これで大丈夫かと、主水の警戒が緩んだ中での、この状況である。

「ああ、ただ旦那の話では、『帝都に近づくな』って伝えたんだよな。墓場は郊外だぜ。それにボルスの妻子にとつて墓場は心の支えであり、抛り所なんだ。足を運ばねえことは耐え難いことなんだよ」

天閉の言葉に、主水は自分の思慮の足りなさを痛感した。

日本であれば、仏壇や遺影という形で、家で故人に語りかけたり、祈ることが出来る。

しかしながら、この世界の帝都には、そのような習慣はない。

合いたければ墓場に行くしかないのだ。

その点を主水は考慮していなかった。

主水と天閉は走り通しで、帝都郊外のボルスの眠る墓場に辿り着いた。

風に靡く草や木のざわめきのみが辺りに木霊する中、一つの墓場の前に、しゃがみ、瞳を閉じて手を合わせる人影が…

ボルスの妻子は黒い喪服を着て、墓場に語りかけているようである。

主水と天閉は安堵した。

二人にはまだやつらに遭遇することなく、大事には至っていなかったからだ。

「よかつたな旦那」

「ああ」

主水が天閉の言葉に頷こうとしたその刹那。

主水の目があるものを捕らえ、険しくなる。

それを、察知し、天閉も主水の視線の先を見据え、動きを止めた。

墓場にやって来る外道集団ワイルドハントの一向。

「帝都郊外に最近現れる美しい未亡人か…そそるフレーズだぜ」

「ハアハアハア、かわいい幼女、かわいい幼女、俺の妻に…ハアハア」

したなめずりをするシユラと、息を荒くして危ない言葉を呟き続けるチャンプ。

世が世であれば、確実に後者は拘束されるだろう。

それを一步引いて、ドン引きの表情で見つめるドロテアと、気にする素振りもないイゾウ、コスミナ、エンシン。

やはり今回も白いローブを被った男はいない。

主水と天閉の二人はワイルドハントが気づかないようにと、祈るような気持ちで見守っていたが、神は二人と妻子を見放した。

「おっ！噂通りの上玉じゃねえか!!」

「すつつつつつげえかわいいいいいんですけどおおおお!!天使だ、天使だ!!幼女の天使だああああ!!!ハアハアハアハアハアハアハアハア」

ハアハア」

見定めるように湿った視線を向け、二人に歩みよるシユラと、目を血走らせ、鼻息荒く、奇声をあげながら走り出すチャンプ。

ボルスの妻子は突如現れた集団に恐怖を感じ、ボルスの妻が娘を庇うように抱きしめ怯えた瞳で、シユラとチャンプを見上げている。

「やべえぞ旦那！俺も手を貸す殺つちまおうぜ！」

「待て、今殺るとなると二人をまきこんじまう。もし、俺が奥の手を使って皆殺しにしたとしても、二人の命を助けることは出来るが、二人にトラウマを植え付け精神的に傷を負わせるばかりか、二人がワイルドハント殺害の容疑で疑われる。勿論、俺達も疑われ危うくなる」「じゃあどうしろってんだよ！」

冷静な表情で話す主水に、焦り捲し立てるように詰め寄る天閉。

経験の差が明確に表れた一幕である。

「俺に考えがある耳貸せ」

「ああ」

主水がコソコソつと手短かに伝える。

「いいのかよ。二人は助けられても、旦那の命があぶねえんじやねえか」

「うだうだ考えている暇はねえ！」

主水は走り出し、シユラとチャンプ、震え抱き合うボルスの妻子の間に入り込んだ。

「なんだてめえは」

「俺と天使の邪魔するんじやねえよ！ゴミがあああ！！」

「あ、貴方は」

怒りを滲ませて睨み付けるシユラと、狂気に歪んだ瞳で罵声を吐くチャンプ。

後ろからは、ボルスの妻が、助けを求めるといふような消え入るといふような声を出した。

ただ、そこに娘だけは命に代えても守るといふ強い意思を感じさせる姿であり、主水は安心させるように頷いた。

「てめえ俺を無視つてんじやねえぞ！！」

怒気をはらませるシユラ。

主水は土下座しながら告げる。

「どうぞこの二人はお見逃しください」

「ああ！俺に意見する気かクソヤロウ！」

全く聞く耳を持たないシユラ。

「あなた様が今ここでこの二人に手を出したらオネスト大臣の名に泥を塗ることになります」

主水としてはヘドがでる程虫酸が走る言葉ではあるが、この場を乗りきるべく、その思いを飲み込み告げる。

「関係ねえよ！退けよ殺すぞ！」

(やはり聞く耳もたねえか)

既にやる気に満ちているシユラには大臣の名を出しても通じない。

しかし、これも主水の想像通りの展開。

故に、主水は天閉に指を立て合図を出した。

(分かったよ旦那)

物陰で待機していた天閉が花火を投擲した。

「むっ」

花火にいち早く気づいたイゾウが、へ江雪の鯉口に手を当てると同時に、刀を抜き、銀色の一閃を放ち、花火を両断した。

「あめえよ、俺の花火は特別製なんだよ！」

刀と鞘の触れあう音が『禁』と静かな墓場に響いた刹那、花火が強烈な閃光を放つ。

「ぬかったか！」

「なんだこりゃ!!」

「目があっ!!目があっ!!」

間近で閃光を浴びたイゾウが悔しげに、シユラとチャンプは何が起こったと、網膜を刺激する閃光を手で遮り目を閉じ叫ぶ。

「後は頼んだぜ天閉」

「ああ、旦那も生きて帰って来いよ……」

眩い光の中で、天閉が妻子を連れて逃げていくのを細目で見届け、(後は足止めだけか……)

と気合いを入れた。

「てめえ嘗めたまねしてくれるじゃねえか！」

「俺の天使があああああ!!!ふぎけんじゃねえええええ!!!」

「がはっ！」

シユラが怒鳴ると同時に、ボルスの娘の幼女がいなくなったために、怒り狂ったチャンプが主水を殴り、主水は吹き飛び、地面に伏した。

「ふぎけんな、ふぎけんな、ふぎけんな、ふぎけんなああああ!!!」

キレたチャンプはその怒りを拳に乗せ、嵐のように拳を降り下ろす。

「俺にも殺らせろよ!オラッ!オラッ!!」

シユラも加わり、地に伏した主水に何十発と蹴りを叩き込む。

凄惨なりんち。

怒りの赴くままに、嵐のような暴力を二人は振るう。

「ぐはっ……」

「ハアハアハアハア」

「くたばったか」

血を吐き意識が飛びかけた主水を前に、チャンプは息をきらせ、シユラはニヤニヤしながら侮蔑の目を向ける。

「落とし前をつけさせるか、チャンプ起こせ」

チャンプは主水の鬚を掴み起き上がらせる。

「命で償ってもらおうぞ！」

シユラが一步踏み出そうとした時、唐突にシユラの前に黒い鞘が出される。

「どういうつもりだイゾウ」

シユラは邪魔されたことに不満を感じ、イゾウを睨み付ける。

「やめておけ。こやつはイエーガーズの一員。ここで命を奪えばエスデスと事を構えることになるぞ。お主にその覚悟があるというなら殺るがよい」

イゾウはそう告げると、鞘を納め、背を向けた。

「チツ、あの姉ちゃんに敵に回したくはねえな。チャンプそこら辺に放っておけー！」

「クソが!!」

チャンプは主水を地面に叩きつけ、唾をはきかけた。

「行くぞ」

シユラの一声で、ワイルドハントは去って行った。

主水は血にまみれ、すでに意識がない状態で、墓場に放置された。

第67話

鉛色の空からシトシトと静かな雨が地面を打ちつける。

そのような中、光が灯った治療室の外で、俯き涙を溢すセリユーと、セリユーの感情を共有するように悲しげな瞳で寄り添うコロ、セリユーを励ますクロメ、怒りを噛み殺すウェイブの姿があった。

シユラとチャンプのリンチにあった主水は、ワイルドハントが去った後に、ウェイブによつて救出された。

天閉と主水により助け出されたボルスの妻子が、ウェイブに主水のピンチを伝えたためである。

そして、ボロボロになった主水を墓場で発見したウェイブが、急いで治療室に運び、今スタイリツシュが治療にあたっているのだった。

運び込まれたボロボロの主水を見て、セリユーは取り乱していたが、スタイリツシュが

「天才のあたしが治療するのよ。安心しなさい」

と笑顔でセリユーの肩を励ますようにポンポンと叩いたことにより、今の状態に至っていた。

「ボルスさんの奥さんや娘さんが助かったのは嬉しいが、なんで主水さんがあんなにされなくちゃならないんだ!!」

ウェイブが拳を苛立ち紛れに壁に叩きつける。

壁には亀裂が走り、ウェイブの怒りの強さを表していた。

「安心してセリユー。八房があるから大丈夫」

「ありがとう…クロメ…」

一見ずれた励ましかたであり、聞く者が聞けば、怒りだしてもしょうがない言葉ではあるが、セリユーはクロメと共に何度か仕事をこなし、その言葉が、真にセリユーを気遣った為に出た言葉と分かっていた為に、感謝の言葉を、言葉に詰まらせながらも伝えた。

「キユウウウ……」

その二人のやり取りを、コロも静かに見つめていた。

「おうおう、まるでお通夜みてえだな」

ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべてやって来るシユラ。

ウェイブの体から殺気が溢れ出し、セリユートの体がピクリと揺れる。

近くにいる者しか分からない動きではあるが。

「いけません」

主水が運び込まれたという知らせを聞き、駆けつけてきたランが、今にも殴りかかりかけるウェイブを止める。

「なんで止めるんだよ！」

「今あなたが殴りかかれば、中村さんが耐えた意味がなくなります」

「くそっ！」

ウェイブとランのやり取りを心底楽しそうにヘラヘラと笑いながら傍観するシユラ。

しかし、シユラの関心は既に別の所に移っていた。

「おっ、なかなかの上玉が揃ってんじゃねえか」

シユラはセリユートとクロメに、淫靡な視線を這わせる。

「改造済みと、薬付けか。こりゃあ楽しめそうだぜ」

セリユートとクロメに手を掛けるシユラ。

「いや……」

クロメの弱々しい拒絶の声。しかし、クロメも逆らうことは出来ない。

「止める!!」

ウェイブの声が響くが状態が好転することはない。

しかし、その直後。

バチンという音と同時にシユラが弾かれた。

俯き瞳が影に隠れた状態で立ち上がるセリユート。

「んだあっ!!嬢ちゃんやろうってのか!!」

払い除けられたことに逆上するシユラ。

「ええ、あなたは主水君の仇だから……」

(まだ中村さんは死んでいませんよ)

ランはこんな状況の中でも、そのように思ったが、空気を読み言葉には出さなかった。

「いいぜ。場所変えるか。ここでやったら雷オヤジがうるせえから

な。シャンバラ！」

シユラは懐から帝具へシャンバラを取りだし起動する。

陰陽を表す太極図が浮かび上がり、シユラとセリユーを包み込むと、二人の姿は消えた。

何が起こったんだと辺りを皆が見回す中。

「宮殿で何をする気だ!!」

壊れる程の勢いで開け放たれる扉。

一足遅れで大將軍ブドーが現れたのだ。

おそらくセリユーのあふれでる殺気を感じてやって来たのだが、遅かった。

静まりかえる場で、皆の視線を受け、恥ずかしくなったのか、ゴホンと咳払いすると、

「何もなければいい…」

と呟きスゴスゴと去っていった。

一息いれた後、

「セリユーさんが心配です。皆で手分けをして探しましょう！」

ランの指示にウェイブとクロメは頷き。雨の降るのも構わず走り出した。

雨が体をうつつ感触を受け、セリユーは辺りを見回す。

そこは、既に宮殿内ではなく、雨音のみが響く、静けさ漂う、木立が林立する薄暗い林の中であった。

「場所変えてやったぜ嬢ちゃん」

目の前にはシユラの姿が。

そこで、セリユーは事前に調べておいた帝具へシャンバラの力を思い返し、予定通りと軽くほくそ笑んだ。

「確認するけど、あなたが私の主水君を傷つけたのね」

依然として俯いたまま問いかけるセリユー。

危うい雰囲気醸し出しながら。

「ああ、あのオッサンをぼこしたのは俺とチャンプだ。『私の主水君』か…お前は、あのおっさんの女なのか？」

「ゲスの勘繰りね。私と主水君は家族よ」

淡々とした口調で呟く。すると、

「フッフ、ハハハハハハハ！」

腹を抱えて大声で笑い出すシユラ。

「家族ごっこかよ！腹痛え！ヒーヒー俺を笑い殺させる気かよ！」

依然として笑い続けるシユラに、俯き無言を貫くセリユー。

「夢見勝ちな嬢ちゃんだなあ。いいぜ、一時間後くらいには現実を受け入れて、俺だけを求める○奴隷と化してるだろうしな」

「……………」

依然として、シユラの挑発にも応じることはない。

「そろそろ始めるか。安心しな手加減してやつからよ。後で本番を楽しむ為にも、あまり傷付けずに、一発で終わらしてやるからな」

「……………」

俯いたまま無言で軽く走り出すセリユー。

こんなもんかと余裕綽々に構えるシユラだったが、急にシユラの視界からセリユーの姿が消えた。

「どこに行きやがった!？」

いなくなつたセリユーを探し辺りを見回すシユラ。

「……………」

声が下から響き、シユラが見下ろした、直後、セリユーはノーモーシヨンで、コークスクリューブローを放つ。

螺旋の渦を描きながら放たれた拳は、シユラの腹部を深々と抉る。

「オゴッ！」

セリユーの拳により、臓器が損傷を受けたのだろう、シユラは吐血した。

「……………」

腹を抉っていた拳に、無言で力を入れる。

力は衝撃波となり、シユラは吹き飛び、何本か木を薙ぎ倒し、地を揉んだり打って転がっていった。

「なぜ…………この俺が…………小娘…………とききに…………」

地に倒れたまま、忌々しげに言葉を漏らすシユラ。

「簡単なこと。慢心があったからだよ。自分が強いと思う慢心。私を女だと見くびった慢心」

シユラはセリユースの言葉通り慢心に充ちていた。

向かってくるセリユースのスピードが更にシユラを慢心させた。

そして、間合いまで、一踏みの所で、急加速したセリユースを見逃したのだ。

セリユースは歩み寄ると続ける。

「慢心がなかったとしても私には勝てないですけどね。様々な武術の良い所を取り入れた武術みたいですけど、気配ではなく、目で追うようでは私には勝てませんよ」

「なぜ…それを…」

シユラの武術の一端さえ見ることなく、自分の武術を見抜いたセリユースに疑問をぶつける。

「いつも見ていたからですよ」

既にシユラを見下ろす位置まで歩み寄っていたセリユース。

「悪の限りを尽くすあなたをいつか断罪することを夢見て……」

怒りで我を忘れかけるシユラだが、セリユースの瞳を見た瞬間、背筋が凍り付き、怒りが冷めた。

見下ろすセリユースの瞳は、空虚なもので、何も瞳には写ってはいなかった。存在するのは深淵の闇。一点の光も、淀みもない、清んだ闇。どこまでも続くような果てしもない闇に、シユラは感じたことのない恐怖を覚えた。

既に、今宵のことを考え、猛り狂っていたシユラ自身も、恐怖に萎み縮みきっていた。

「これからが本番です。かなり手加減してあげたので、体は動かずとも意識はしっかりしているでしょう」

口許は歪み、深い闇を称えた瞳がシユラを捕らえ続ける。

シユラは恐怖から、金縛りにあったように動けなくなっていた。

「知っていますか？私も隊長に聞いたのですが、人が一番痛覚を刺激されるものが何かを」

セリユースは問いかけているかのように話しているものの、実際は独

り言を話すように淡々と話し続けている。

「雷なんですよ」

セリユーは拳を挙げると、嵌めているガントレットが青白く発光し、激しくバチバチとスパークを散らす。

「主水君と、あなたが殺した人の痛みをその身をもって味わってくださいね」

「ヒッーや、や、やめ——・*#?&」

言葉にならない断末魔を挙げると、激しく痙攣するように揉んどりうっ。

「あれ？もう意識がとんじやったのかなあ」

セリユーがシユラの体に置いていたスパークを放つガントレットを僅に離し、シユラの顔面をパチンと叩く。

「がつー」

「起きましたねまだまだいきますよ」

——まるでループするかのようになり、感電させ叩き起こし、また感電させ叩き起こす。その地獄が延々と続く。

何度目だろうか、またもパチンと大きな音が辺りに響く。

「あれ？起きないなあ。もう一発」

セリユーが振りかぶると、何かに気づいたのか即座に後方にバックステップを踏む。

セリユーがいた場所に、泥を巻き上げながら突き刺さるキセルが。

(いつの間にも！)

ここにきて初めて自分が多くの色とりどりの袴を着て、化粧をした男衆に囲まれていたことに気づく。

「悪いな嬢ちゃん」

「!!」

目の前にいつの間にか歌舞伎者のようなきらびやかな袴を着て、白塗りの髪を振り乱した男が唐突に現れ、地面に刺さっているキセルを抜くと、泥を払い、懐にしまう。

(まったく気づかなかった！)

シユラをいたぶることに気を向けていたとはいえ、近くに気配があ

れば必ず気づくはず。

セリユーが突然のことに驚きを隠せないでいると、男がセリユーに視線を送る。

刹那、とてつもない圧迫感が、セリユーを押し潰すように降りかかる。

「!!」

今までの驚きがかき消え、新たに訪れる恐怖。

男の瞳が宿す、限らない狂気を感じ取り、さらに、その男の持つ底知れぬ力を体感したからだ。

「本当に悪いな。そこに転がっているクズは、今は一応俺の上司でな、俺が出世するための手づるなんでな」

男はセリユーに伝えるように話ながら、意識を失ったまま横たわるシユラを担ぎ上げる。

しかし、セリユーは身を縮こまらせ呆けたように動けない。

シユラを担いだ男が、セリユーに背を向けて歩き出すと、足を止め、振り向くことなく言葉をかけた。

「こいつが用なしになったら苦しみ悶えるように殺してやるから安心しな。まあ、それまでこいつが生きていたらただけだな、フツハツハツハツハツハ」

笑い声を辺りに響かせながら、男が雨により辺りに満ちてきた霧に姿を消すと、続いて男衆も消えていった。

セリユーはシユラを、悪を取り逃すことを悔いることなく、安堵に包まれていた。

男がその場から去った為に安堵したのだ。

しばらく固まったように雨にうたれていると、空から羽音が。

「セリユーさん大丈夫ですか?」

舞い降りたランが問いかけるが、反応は薄かった。

「朗報ですよ。中村さんが意識を取り戻しましたよ」

「えっ!主水君が!!」

「はい」

笑顔で頷くランを見て、込み上げてくる涙をこらえることなく流

し、元気よく立ち上がると、治療室目指してセリユーは走り出した。
(よかった元気になったようで)

クスツと微笑んだ後、ランは表情を厳しいもの一転させる。

(あのような男がワイルドハントにいたとは、今まで事を進めていながらも、気づかなかつた…少し離れていた私でさえ恐怖を覚える程とは。あの者がいない時に事を進めなくては)

いつもの柔和な表情はなく、ランは厳しい面持ちで決意を込めた瞳を、雨降る空に向け覚悟を決めていた。

まるで天に召された者に覚悟を見せるかのように…

第68話

「主水君！」

ずぶ濡れになったセリユールが息をきらせながら治療室に飛び込んできた。

その姿からもどれだけ主水を心配していたかが分かる。

「あらセリユール、早かったわね」

帝具パーフェクターを外して寛いでいるスタイリツシュがいち早く気づき、笑顔で声をかける。

「あつドクター、主水君は？」

「もう大丈夫よ。言ったでしょあたしに任せなさいって」

笑顔でセリユールの頭をなでるとスタイリツシュにスタイリツシュは治療室をあとにした。

(笑顔になってよかったわ)

「ドクターお疲れ様でした」

スタイリツシュが室外に出ると、ランが声をかけてきた。

「あんまり大変じゃなかったわよ。でもねそう思うなら……」

にんまりと何かを企んだ笑顔を浮かべたスタイリツシュはランにおもむろに近づくと、身を寄せて、背中に指を這わせる。

「ド、ドクター？」

爽やかな笑顔があからさまにひきつりスタイリツシュに何かと尋ねる。

「もう分かっているでしょ。ご褒美を体で払ってこ・と・よ」

ウインクを飛ばすスタイリツシュに、ランは貞操の危機を感じ、話題を切り替える。

「大変じゃなかったとはどういうことですか？」

「ハアいけず。まあいいわ、言葉の通りよ。主水の怪我は見た目ほどひどくはなかったってことよ」

スタイリツシュは両手を広げながらヤレヤレといった感じで話す。

「いったいどういうことでしょう」

「言葉の通り、怪我は表層的なもので、深刻なものではなかったのよ。

主水は全ての攻撃を受け流していたってことよ。多分意識がとんだ後もね。信じられないけど」

「……………」

驚愕の事実にはランは言葉を失った。二人によってたかってリンチされながら、それを全て受け流していたというのだから、当然ではあるが。

「じゃあね。可愛がってもらうのはまたの機会にするわ」

スタイリツシユはランに軽くウインクを送ると、スタイリツシユに去っていった。

（それにしてもいい体だったわ。材料としても楽しむにしても。治療でなければとびついてたわ）

スタイリツシユが危ういことを考え頬を赤らめていると、

「スタイリツシユ殿」

前から声を掛けられた。

「予想通りね」

スタイリツシユは不適な笑みを浮かべ前方に視線を送ると、やせ浪人姿の男と、シユラを連れ帰った歌舞伎もの姿の二人の男が。

「イゾウと初めて見る顔ね、それもとびきりのイケメンね」

「お初にお目にかかります。奥田左京亮と申します。以後お見知り
を」

恭しく丁寧に挨拶をする左京亮、

（なかなかの食わせものね。そんなところも合わせて魅力的ではあるけど）

スタイリツシユ自身がなかなかの曲者であり、左京亮からも同じ臭いを感じ取っていた。

「スタイリツシユ殿、シユラが大変な深手を負ってな貴殿に手当てを
してもらいたい」

（やはりね）

スタイリツシユは早いうちからこうなるのではと想定していた。

シユラとセリユーが共に姿を消したということと、セリユーが無傷で帰って来たことを合わせての想定であった。

「いいわよ、ただし条件があるけど」

「……なんでござろう?」

イゾウは暫し間をおいて問う。

イゾウはシユラとスタイリツシュが昵懇の仲であり、シユラの怪我を伝えれば、有無を言わさず了承すると考えていたからだ。

「条件は、イエーガーズとワイルドハントの騒動を、これをもって手打ちにすることよ」

「あいわかった。シユラには後程伝えておく」

「我々もイエーガーズの方とは争いたくはないですから」

イゾウとシユラは共に頷いたのを見てスタイリツシュは笑顔を浮かべ、また付け加えた。

「怪我は完治させると約束するけど、心の傷は癒せないわよ」
「……………」

「構いません」

言葉を失うイゾウとは対象的に、左京亮は笑顔で了承した。

◆◆◆

スタイリツシュとの話を終えたランが雨が降るのも気にならず、建物の裏に来ていた。

「いますかメズ」

「はい、ここにいますあなた」

ランの呼び掛けに、まるで妻のように闇から姿を現すメズ。

頬を赤らめ、目を潤ませながら。

「頼みたいことがあります」

「なんでも言ってください」

「聞かれると困るので」

ランはメズに歩み寄ると耳元で囁く。

「あつ……うう……吐息が耳に……ゾクゾクしちゃう……」

悩ましげな声をあげるメズ。

どこか艶かしい。

「聞いていますかメズ?」

「は、はい!お任せください」

メズは元気よく走り出そうとした時、ランがメズを後ろから抱きしめ、再度耳元で甘く囁いた。

「上手くやってくれたら、また愛してあげますからね」

「ひゃ、ひゃいー!」

のぼせたような表情で、耳まで真っ赤にしてスキップをするように闇に消えた。

(これであとは時が来るのを待つだけですか)

ランが治療室に歩きだすと、セリユートの探索から帰って来たウェイブとクロメに合った。

「ランどうしたの神妙な顔して?」

「なんでもありません。ああそうです、セリユートさんは今意識を取り戻した主水さんに合っています。行きましょう」

三人は纏まって治療室に向かった。

◆◆◆

「主水君!」

「セリユートさん、ご迷惑おか……セリユートさん!」

主水を見るなり抱きつき、涙を流すセリユートに困惑の表情を浮かべる主水。

あまり女の扱いに慣れていないために、どうすればいいのかと、思案にくれる。

そんな中主水はあることに気付く。

「こんなに雨に濡れてしまって、体も冷えきってしまったって、大丈夫ですか」

セリユートの頬に手を当て、垂れる雨粒を拭い、冷えきっていることに気付くき、問い掛ける。

「大丈夫だよ。主水君の怪我に比べたら」

笑顔で主水の心配を否定するセリユート。

セリユートの気遣いが嬉しかった。

またわざわざ問い掛けた主水であったが、セリユートに何があったのかは、うっすらであるが、分かっていた。

夢とうつつの狭間の微睡みで、スタイリッシュが、誰かにセリユート

とシユラが何処かへ消えたと聞いていたからだ。

ここで軽く御礼を言うだけで良いのだが、主水はあることを思いだし、言葉だけでなく、行動も合わせて示した。

「ありがとうございます」

主水は笑顔で礼をいい、頭を撫でた。まるでわが子を慈しむかのよう。

セリユーは何故礼を言われたのか、頭を撫でられたのかは、分からなかったが、その安心感に身を委ねた。

しばらく時間が経過すると、主水は外から迫る気配に気付き、セリユーに声をかける。

「セリユーさん迎えが来た見たいですよ」
「？」

可愛らしく小首を傾げるセリユー。

唐突に扉が開き、何かが飛び込んできた。

「キュウウウウ」

セリユーの胸に飛び込んできたのは、泥だらけで、薄汚れたコロであつた。

コロも消えた主人を心配し、今まで必死に駆けずり回り、セリユーを探していたのだ。

「ゴメンね心配かけて」

セリユーはコロの頭を撫でている。

「二人とも濡れたり、汚れてしまったみたいですから、風呂に入ってきたらどうですか」

「うん、そうするね。行こうコロ！」

「キュウ！」

セリユーはコロのリードを引き、治療室をあとにした。

「さてと、入ってきたらどうだ」

主水は声を上げる。
すると、

「さすが中村さん、気付いておられましたか」

ラン、ウェイブ、クロメの三人が治療室に入ってくる。

「良かった主水さん大丈夫なようで」

「元氣そうで安心しましたよ」

「うん」

三人は一樣に安堵した表情を浮かべた。

主水も心配かけたなど、礼を述べようとした時だった。

「中村さん、セリユースさんのお風呂を覗きに行かなくて良いのですか」
からかうような顔で尋ねてくるラン。

「まだ全快ではないので」

「なかなかの返しです」

ニヤリと不適に笑う主水に、ランも笑顔で返す。

二人はわかり合ったように視線を交わすが、ウェイブはなんとも言えないような表情で、クロメは穢らわしい物を見るような冷えきった視線を二人に向ける。

「コホン、冗談はここまでにして」

二人の視線に耐えられなくなったのか、軽く咳払いすると、話を変えようとする。

「今回の件について、話を聞きたいのですが、中村さんも今日はお疲れだと思しますので、明日にしましょう。よろしいでしょうか」

「それでお願ひします」

主水も承諾すると、三人は挨拶して帰っていった。

◆◆◆

同時刻、キヨロクから帰りついた、ナイトレイドがアジトを前にして動きを止めていた。

「どういうことだ！」

帝都に帰りついたナジエンダ一行は言い知れない違和感を感じていた。

月明かりに照らされたアジトから光が漏れていたのだ。

実際ナイトレイドのアジトを知る者は、革命軍に限られるが、革命軍の者が、ナイトレイドのアジトに来ることはほぼない。ましてやアジトに無断で入ることは、勿論のない。

故に、その有り得ないことに、言い知れない違和感、いや緊迫感を

一行は感じていた。

しかし、ここで無為に時間を浪費する訳にもいかない。

「皆敵がいるかも知れない。警戒していくぞ」

「おう！」

皆は、意を決してアジトに、気配を消し足を踏み入れた。

第69話

アジトの中は、静寂に包まれていた。聞こえるのは外から響く虫の音だけ。

また、明かりは、アジトの外から見た時に、三階から光が漏れておりその他は闇に包まれていた。

そして見たまま、一階部分には、窓から入る月明かりしかない。

「行くぞ」

ナジエンダが、皆に小声で告げると、皆無言で頷き、ナジエンダの後に続いた。

中は薄暗くとも慣れ親しんだアジト、難なく三階部にたどり着き、明かりが漏れていた部屋を目指す。

足音を消しながら進むと、ある部屋かすら明かりが漏れ、なにやら鼻歌のようなものが聞こえる。

確実に暗殺者ではないと思われるが、警戒は解かずに、半開きの扉に近づく。

（私の部屋か…）

ナジエンダは、自分の部屋を覗くというあり得ない状況に、辟易しながらも、慎重に中に視線を向けた。

「な、なんだこれは!!」

自分の部屋の変わりように、つつい声漏れた。

部屋全体が、ピンク一色に染まっていたのだ。

「ボス！」

レオーネが慌ててナジエンダの口を押さえるが遅かった。

「やっと帰って来たんですね。待ちくたびれましたよ」

ナイトレイドの皆が帝具を構えるなか、叩きを持ち、マスクをつけ、エプロンを着けたタカナが姿を現した。

皆が臨戦態勢に入っているのを、ナジエンダは手で制す。

「皆すまん。コイツは私の知り合いだ。迷惑を掛けた」

「なんだそうだったのか」

頭を下げるナジエンダに、一同は安堵するが、一人だけ気が気で無

いものが。

(ボスの知り合い!? 知らねえぞこんな男)

ラバックである。

ラバックは、ナジエンダが帝国軍の將軍時代から、付き従ってきたが、タカナについては知らなかったのだ。

だが、それはラバックにとっては大きな問題ではなかった。

一番の問題は、少しナヨナヨとしてはいるが、なかなかの美形の男であるというところが、問題だった。

焦るラバックを知ってか知らずか、

「皆は体を休めてくれ。私はコイツと話があるんでな」

と暗に、ナジエンダは人払いをした。

「はい」

皆が出て行くなか、一拍子遅れるラバック。

そんな最中、

「その緑のあなた？」

タカナがラバックを呼び止めた。

「なんすか？」

ぶつきらぼうに返事をするラバック。

「まあ何て返事の仕方なのかしら。まあこれから指導すればいいことだし、今回は見逃してあげましょう。あなたはこの部屋の二つ目先の空き部屋にいる女性を連れて来てくれませんか」

口調は丁寧ではあるが、態度は尊大で、デカイため、少しラバックはイラつき、それが表情に出た。

しかし、ラバックは単純だった。

「すまないなラバック。頼めるか」

見つめるようなナジエンダの視線受けたラバックは、喜色満面の表情で飛び出していった。

「魔性ぶりは変わりませぬね」

「うるさいぞ」

ラバックがナジエンダの部屋から出た時だった。

「キヤアアア!!」

「うわあああ!!すいませんでした!!」

絹を引き裂くような若い女性の声と、平謝りして、部屋から飛び出し、へたりこむタツミの姿が。

「どうしたんだタツミ?」

あまりの慌てように驚いたラバックがタツミに歩み寄る。

「ラバック、俺が部屋に戻ろうとした時、隣の空き部屋から音がしたから見てみたんだよ」

「んで」

「そしたら女の子が着替えをしてたんだ」

「!!」

ラバックは目を見開いた。羨ましさからくる怒りの衝動からだ。

内心（主人公特有のラッキースケベかよ!!）と怒りを滲ませ歯軋りをしたが、逆に（今なら堂々と覗ける！ナジエンダさんからの大義名分があるんだ!!）拳を握りしめ、即座に行動に移した。

鼓動を弾ませ扉に近づくとラバックの背後を閃光が通り過ぎた。

「私という可愛い彼女がいながら、どこぞの女の部屋覗くなんていい度胸してるじゃない!!」

般若のような形相をしたマインが、パンプキンの銃口をタツミに向けながら、ジリジリと歩み寄る。

逆にタツミは後退りしながらワタワタと弁解をするが、全く通用しない。

タツミとマインは、キョロクから、帝都への帰りの道中に、マインから告白をし、それをタツミが受け入れて付き合っていた。

（バカップルが）

羨ましさからラバックが心の中で吐き捨てていると、

「待てタツミー……!」

逃げるタツミを追ってマインがパンプキンを乱射しながら追っていった。

余談だが、持ち主の精神エネルギーを弾とするパンプキンのこの時の威力は、危機的状況の時より上だったという。

「失礼します」

胸の鼓動を高めながら、ソロリとラバックが扉を開けると、ラバックの動きが止まった。

そこには、期待していたものはなかったが、見とれるだけのものがあった。

仄かな月明かりに照らされ幻想的な光景の中に、まるで妖精のような女性が。

月明かりに照らされた、肩にまでかかるほどのサラサラと流れるような美しい髪は、キラキラと輝き、白くきめ細やかな肌、薄い長襦袢を着ているため、月の光によって浮き上がる陰影が、スタイルの良さを表している。

年の頃20歳前後ほどで、大人の女性の美しさを感じたが、ピンク色の借り物と思われる長襦袢が大きいのか、ブカブカで、袖があまり、手が隠れている様子と、うつすらと頬に朱がさしている様は可愛らしさを感じさせた。

「あ、あなたは？」

急に現れ、動きを止めたラバックに、スピアは驚き尋ねた。

「きみを呼んできてくれて頼まれて」

しどろもどろながら、端的に答えた。

スピアの姿に見惚れても、ナジエンダの言い付けだけは、しっかりと果たす。

「ありがとうございます」

スピアは丁寧にお辞儀をすると、椅子にかけてある上着を羽織り、部屋を出ていった。

(美人だったなあ)

出ていったスピアの姿を思い返して、心の中で呟いていた。

◆◆◆◆◆

「失礼します」

ノック後に挨拶をして入って来るスピアを見て、

「来てくれましたねスピアさん」

タカナは笑顔で迎え、まるで自分の部屋であるかのように、近場にある椅子に座るように促した。

そのような、タカナの姿を見ても、ナジエンダは小さく溜め息を吐くだけで、文句は言わなかった。

多分、慣れているのだろう。

「貴女をここに呼んだのは、これからどうするかを、貴女自身に決めてもらうためです」

「これから？」

「ええ、このまま誰も貴女を知るものがない別の地に行き、平穩に暮らすか、父上の無念を晴らすか」

タカナが真面目な口調で話す言葉を聞き、スピアはピクリと体を僅かに揺らし、ナジエンダは黙って聞きいつていた。

タカナの思惑を理解して黙って聞くことにしたのである。

「お父上は、前者を望んでいるとおもいますが、貴女の人生は貴女が決めるのですよ」

「……………少し考えさせてください」

「ええ、体を休めながらゆっくり考えてくださいね」

スピアは厳しい現実を突きつけられ、ひ表情を無くしたまま、部屋を退出した。

「スピアお嬢様にしたら辛いだろうな」

「ええ、父親を失いその悲しみが癒えぬまに、すぐにこれからのことを考えなくてはいけないのですからね」

今まで多くの悲しみを乗り越えてきた二人にとってみても、スピアの置かれた状況には、同乗を禁じえなかった。

「ところで、お前がここにやって来たのは、スピアお嬢様を私たちに預けるためにやって来たのか？」

「それもありますが、それだけではありませんよ。以前した約束を果たしにきたのですよ」

「以前の約束か……………」

ナジエンダの脳裏に、浮かぶ光景。

スサノオが追い詰めたセリユを、タカナが庇い、逃がした時に約束したこと。

「後日償いをしますよ」

そのことを、タカナが言っているということは、容易に想像出来た。「ええ、貴女方の敵であったセリユーさんを、私が以前ザンクに殺されたようになった時に助けてくれたお札に助け、その償いにとしたあの時の約束です」

「でどのように償うつもりだ？かなり大きい貸しだぞ？」

真剣な表情で問い掛けるナジエンダに、タカナは自信満々といった感じで提案する。

「私がナイトレイドに加入してあげます。感謝なさい」

「な、なに!!」

想定外の答えにナジエンダは驚愕の声を上げると同時に、頭の中で、計算を始める。

たしかに、タカナがナイトレイドに加入すれば、戦力が飛躍的に上がり、更には今では不可能と思われるいた人員補充が可能になる。

となれば、有無も言わず承諾しそうなものだが、大きなリスクがあったのだ。

以前、革命軍本部での出来事。

「全く、肉ばかり食べて、体に悪いですよ」

「部屋の掃除ぐらいしたらどうです。埃が残ってますよ」

「女性の部屋とは思えない殺風景な部屋ですね。私の部屋を見習ったらどうです」

「そんな男勝りな性格だから行き遅れるのですよ」

等々、ネチネチとまるで姑のような対応してきたのだ。

精神的なストレスが酷かった。それがタカナ加入への迷いへと繋がっていたのだ。

ナジエンダの中でも結論が出ず、しばらくの有余を得るために、話を代える。

「タカナお前は革命軍本部には戻らないのか？」

「戻るつもりはさらさらありませんよ」

タカナはあっけらかんと言いはなった。

まるで、当然の事のように。

「何故だ？」

タカナも革命軍の幹部とはいえ、本部の指示には従わなくてはならない。

しかし、タカナはそれすらしないと云うのだ。

疑問と共に、静かな怒りがナジエンダに込み上げていた。

「革命軍本部に裏切り者が居るからですよ」

僅かに二人の間に静寂が訪れる。

ナジエンダはタカナの言っていることが理解できなかったからだ。

しかし、その一時的な静寂の中で考え、理解すると、声を荒げ、激昂した。

「ふざけるな!!志を同じくする革命軍の同士の中に裏切り者がいるだと!!」

ナジエンダはいかり怒りのまま、タカナに食って掛かった。

今まで共に命懸けで戦ってきた仲間を冒瀆されたと感じたのだろう。

しかし、そんな剣幕のナジエンダを見てもタカナは、たじろぐことなく、冷静に話続ける。

「貴女の言い分はもつともです。しかし、私も確証があつて言っているのですよ」

「ではその確証とやらを話してもらおうか」

ナジエンダは冷めやらぬ怒りを押し殺して、タカナに話すように促した。

文句を言うのは話を聞いてからでもと思ったことと、タカナが確証がある時まで言ったことが、ナジエンダが自分を抑えることに至った理由である。

「おほん、では話しますが、話の前提として、貴女は私の革命軍内での扱いはご存知ですよね」

「当たり前だろ。何年の付き合いだとおもっている!」

タカナの革命軍内での扱いは、幹部としても、特殊なものだった。

幹部でありながら、帝都に潜入しての任務故に、タカナの名は軍の名簿にすら記名されず、尚且つ、軍の内部でも一部の者しか知ることのない、特殊な立場であった。

その僅かな知り合いの一人であるナジエンダは、当然とばかりに頷いたのだ。

「そうですね。ならばこう言うだけで、通じると思いますが。私が帝都警備隊隊長を追われたのは、私が革命軍のメンバーと知られたからです」

「!!」

ナジエンダは、絶句した。

タカナが述べたことが、端的に、革命軍の内部、それも上部に裏切り者のいるということを表していたからだ。

「言うまでもないことですが、私の素性を知るものが、捕まったという情報は入っていないことから、裏切り者がいるのは確実です」

僅かな希望もタカナによって切り捨てられ、ナジエンダもタカナの言うことを信じるしかなかった。

「ということ、革命軍本部では、自由に動けないだけでなく、命を狙われる可能性があるのです、信じられる貴女が治めるナイトレイドに加入することにきめたのですよ」

「はあ仕方ないか。革命軍内部ではお前の方が僅かに地位は高いが、ナイトレイド内では私がリーダーだ。指示には従ってもらおうぞ」

「ええ、構いませんよ」

したり顔で承諾するタカナを、大丈夫だろうか、ジト目で見ていたナジエンダだが、戦力が増えたことにはかわりないと、ポジティブに考え、リスクには目を瞑ることにした。

「では明日皆にお前を紹介するから、今日は空いている部屋で休んでくれ」

「もう部屋は頂いていますからお気遣いなく」

タカナは踵を返すと、後ろ手にてを組んで、胸を張り、ピンク色に染められたナジエンダの部屋を後にした。

(この部屋は明日にタカナに元にもどさせるとするか)

ナジエンダは頭をかかえ、目に優しくない色に染めあげられた部屋を、茫然とながめていた。

第70話

宮殿の一室に、大臣オネスト、ワイルドハントのイゾウと左京亮、ドロテアがベッドに横たわるシユラを他所に、雑談に興じていた。

イゾウと左京亮は、自国の遊戯、将棋を指し、オネストとドロテアはなにやらとてつもない悪事について、話し合っていた。

それもこれも、会うことがないと思われていた、稀代の錬金術士ドロテアと、稀代の科学者スタイリツシユが遇いまみえたことが、起因となつてのことである。

「王手ー」

「ぬう…」

左京亮が不敵な笑みを浮かべ、イゾウが顔をしかめるといふ、終盤の局面に移行したなか、

「予算はいかほどで？」

「妾としては最低でもこれぐらいかの」

オネストとドロテア、デブと幼女という犯罪臭漂う二人は、話の詰めに入った時だった。

「はあっっっ!!」

掛け布団をはねあげ、シユラが飛び起きた。

冷や汗をダラダラとながし、顔は青ざめている。

「目を覚ましましたかシユラ」

オネストは立ち上がると、シユラに歩み寄る。

ドロテアと話をしてきた時とは違い、険しい表情で。

「オヤジ…：俺は」

「情けない、大臣の息子ともあろうものが、小娘一人にのされるとは」溜め息まじりに、蔑みの視線をシユラに向ける。

大臣としたら、シユラであれば、その言葉に、いきり立つと思つていた。

しかし、シユラは小娘という言葉を聞くと同時に、頭をかかえ、ガクガクと震え始めた。

シユラの脳裏にフラッシュバックする光景。

深淵の闇に占められた、心の底から恐怖心を引き立てられる、空虚な瞳。

延々と襲い掛かる、激痛、激痛、また激痛。

セリユーとの一件が、身体以上に、心に修復不可能な程の傷を刻みつけていた。

「こりやあダメですな」

オネストはシユラの醜態を一瞥すると、呆れたように、吐き捨てた。「そのようじゃのう。お開きにするか」

ドロテアが、ニヤニヤと笑いながら、口にすると、オネストは頷き、左京亮に視線を送ると、

「以前の舞踊陛下はお喜びでしたよ。次も期待していますぞ」

と左京亮に親しげな笑顔で告げ、部屋を後にした。

「抜かりないのお、左京亮よ」

「いやいや貴女がほどではありませんよ」

ドロテアと左京亮は含み笑いを浮かべ、視線を交わしあった。



「———とすることがあったんです」

治療室に集まったラン、ウェイブ、クロメ、セリユーに、主水が昨日の全容について、話していた。

とはいえ、天閉については、はぐらかしはしたが。

「そういうことがあったのですか」

ランは厳しい表情で、物憂げに頷いた。

この頃ランには引っ掛かるものがあり、ちょうど良い機会だと、主水は切り出した。

「私の話はここからです。今度はランさんの話を聞きたいものですな」

主水はランに視線を向け真剣な表情で問い掛ける。

「私も最近のランは変だと思う。そろそろ何を考えているか話してほしい」

「うん、いつも笑顔のランが、最近は暗かったよね。なにか思い詰めたように」

「ああ、変だったよな。俺も気になってた」

いい機会だとばかりに、クロメとセリユー、ウェイブもついつい詰りめ寄る。

「たいした話ではありませんよ」

「じゃあいいよね」

真顔で一心にランを見詰める三人にランは観念したのか、フツ溜め息をつくくと、話を始めた。

「私は、ジョヨウ付近の農村で教師をしていました」

（ジョヨウ………確かその地方の記録だけ読まれたあとがあったな。関係がありそうだな）

主水は以前資料室で事件の記録にあらかた目を通した時に、埃が積もった書の中で、ジョヨウの記録書だけ埃はなく、読まれたあとがあったことを思い出していた。

「ジョヨウは豊かな地で、治安もよく、子供たちも勉学には意欲的だったため、飲み込みが早く、皆将来有望で、私の自慢の生徒でした。しかし、私が留守していた時、ある凶賊により、皆殺しにされてしまったのです。悲惨なもので、皆暴行された後の凶行で、苦しみに歪んだ顔で、亡くなっていました」

「そんな、未来ある子供たちを、許せない……」

ランは怒りと悲しみが無い交ぜになった表情で語り、セリユーは怒りを露にする。

以前安寧道の本部で、遊んだ子供たちを思い浮かべたのかもしれない。

かたや主水は確信を得ていた。

子供が暴行された上での殺害という部分で。

「で、犯人は捕まったのか」

ウェイブが身をのりだし尋ねると、ランは視線を落とし、首を横にふった。

「ジョヨウは、治安の良さを売りにしていたため、その事件を無かったことにしたんです」

「マジかよ」

「そんな……」

ウェイブは拳を固く握りしめ、セリユーは信じられないといった感じで、シヨックを隠しきれない様相であった。

正義を重んじるはずの、役人が隠蔽した、その事実からも、帝都の腐敗ぶりが、眼前に示され、今まで信じてきたものが、揺らぎ始めていたからだ。

「ジヨヨウだけではなく、どこも同じようなものです。だからこそ、その一件を通して私はこの腐った国を、内部から正しい道へと導くことを決意しました」

「何故中から変えようとしたんだ？」

「うん、ダメだけど革命軍の道もあったと思う」

ウェイブが口を濁したのを悟り、クロメが確信に踏み込む。

中々言いづらいことではあるが、ウェイブとクロメは真剣であるので、それに答えるべく、ランも口を開いた。

「ジヨヨウの太守が女性で気に入られたためです」

（さすがランだな。常習犯か……）

言葉の真の意味を読み取った主水は苦笑いを、表面上しか理解出来なかった三人は素直にそうかと頷いた。

「三人が純粹でよかったですな」

「はい、言った後になって危うい発言だと気づきました」

主水とランは三人に気づかれないように、こつそりと言葉を交わした。

「まあそんな所でイエーガーズに加入したんです」

最後は笑顔でしめた。

しかし、ラン以外の四人は納得していなかった。

「はぐらかすのはダメ」

「バレてましたか」

いつの間にか、論点をすり替え終わらそうとしたランだったが、それも見抜かれ、やれやれと終に観念したランは、柔和な表情を消し、重い口を開いた。

「最近やっと私の生徒を殺した犯人を見つけたのです。ワイルドハントの中に」

ワイルドハントという言葉に、一瞬皆の動きが止まる。

「安心してください。なにもする気はありませんよ。そろそろ隊長も帰ってきますし、それからでもおそくはありませんから」

再び柔和な表情に戻ると、ランは

「では中村さんもまだ休まないといけませんし、お開きにしましょう」と一方的につげ部屋を後にした。

「ランさん」

「どうしました」

部屋を出て暫くしたところで、物陰からスツと姿を現したメズがランに近寄った。

「今夜、左京亮とイゾウ、ドロテアなどは、大臣の酒宴に呼ばれるため、場を外し、ターゲットは詰所に残るようです」

「ありがとうございます。では今夜実行します」

普段は天使のような容姿のランが、今は悪魔の微笑みを浮かべていた。



「と言うことで、今回新たにナイトレイドに加入するタカナだ」

夜が明け、ナジエンダの執務室に集められた仲間たちの前で、タカナが紹介されていた。

「こんにちわ皆さん。紹介にあつたタカナです。以前は帝都警備隊長をスパイとしていましたが、いつも心は革命軍にありました。私がナイトレイドに加入したからには、失敗はありませんよ。なんでも頼ってくださいいね」

「帝都警備隊長………そういえば、主水が話していたな」

アカメが、タカナが帝都警備隊長の隊長をしていたと聞き、顎に指をあて、思い出すように言葉に出すと、

「ああそういういえばいつてたな」

なにか面白いイタズラを思い付いたような楽しげな笑みを浮かべ、レオーネも続いた。

「そうですね中村さんが。でなんと私を称えていたのですか？」

興味深そうに尋ねるタカナ。

「えーと、確か、『うちの警備隊隊長のオカマがな、ほんと口うるさくグチグチ女みたいに文句を垂れやがる。いつも心は梅雨模様だぜ』だったかな」

「……………」

プルプルと震え出すタカナ。

色白の顔も紅潮しだしている。

「私が聞いたのは、『鳥も通わぬ八丈へ、流れ流れて行くわいな、哀れタカナの行く末は、ふかの餌食か鳥の餌』だつてさ、気持ちよさげに歌つてたぜ。ちなみに八丈は、仕事が出来なくて左遷された奴が行く僻地なんだつてさ」

「ほくくくく、中村さんはそんなことを、いいでしよう元警備隊上司、現革命軍の上司としてお話ししないといけませんね」

額に青筋をたてながらも、なんとか怒りを抑えるそぶりです、タカナは呟いた。

この状況に至らしめたアカメは何故怒ったのかと、子首をかしげ疑問符を浮かべ、レオーネはニシシと黒い笑みを浮かべていた。

そのようなやり取りを見て、ナジエンダが小さく一つ溜め息をついた時だった。

部屋の扉が開かれ、マインと、チエルシーが入ってきた。

その瞬間タカナの目が光った。

「そのピンクの貴女、いい趣味していますね」

「え、なに？ありがとうでいいのかな」

いきなりの発言で呆気にとられるマインと、主水が言っていたように、オカマジやないかと確信したメンバーたちであった。

「で、どうだった？」

ナジエンダが仕切り直しとばかりに、マインとチエルシーに尋ねる。

「もうすごいなの。依頼人が行列をなしちやて、訴状もこのとおり」

チエルシーは抱えていたカバンを開くと、山のように、怨みつらみが書かれた、殺し依頼の訴状が。

「すごい量だな。みんな同じ相手なのか？」

タツミが問うと、マインがそうよと頷いた。

「これが、依頼料」

マインがナジエンダの前にどしっと袋をおく。

袋からは、金貨であつたり、小銭であつたり、大量の怨みが籠った金が垣間見れた。

「よし、ナイトレイド帝都帰宅後の初仕事だ。的は訴えと、訴状全てに書かれているワイルドハント。全部で七人ということで、一挙に仕留めることはできん。分散して殺しにいくぞ！」

「おう!!」

勇ましく皆が応じ、室内を出ていくなか、

「腕がなりますね」

とひよろつと細い腕を回すタカナを、ナジエンダが止めた。

「何ですかナジエンダ。貴女も私の華麗な剣さばきを見たいのですか？」

「いや、お前は残って、私の部屋の壁の塗り直しだ！」

ナジエンダは有無を言わず、タカナの襟首を掴んで引き摺っていった。

ただ、ナジエンダがタカナを留めたのはそれだけではなかった。

スピアにとってはタカナのみが知り合いというなか、タカナが居なければ、心細いだろうという配慮と、スピアの決断を二人で聞こうという考えから生じたものであった。

様々な思惑の元に、事が動き出そうとしていた。

第71話

既に日は落ち、満月が辺りを照らす頃合い。

一人の青年が、決意を秘めた眼差しで、イエーガーズの隊舎を後にした。

「メズは辺りの警戒を頼みます」

「はい……」

何か言葉を掛けたかった、しかし、とても言葉を掛けられる雰囲気では無かった。

これが最後の交わした言葉になるかもしれないのに……

メズは言い知れない不安を胸中に抱きながら、辺りを警戒すべく、闇に姿を消した。

「どこへ行くんですか？」

突如として投げ掛けられた言葉に、視線をあげると、満月に照らされた二つの影が。

「セリユーさん、それにクロメさんまで」

二人は少しむくれたような顔をして、ランを出迎えた。

二人が不満を表しているだろうということは、ラン自身が一番よく理解していた。

「綺麗な満月に誘われまして、少し夕涼

みに」

自分で口にしながらも、苦しいなと感じながら答えた。

「ウェイブなら騙せたかもしれないけど、私たちは騙せないよ」

「いつもと違って、きれがないですね」

二人は半目で、じとつとした視線をランに向ける。

分かっているんですよと言わんばかりに。

(騙しきれませんか……)

ランは自分とメズの二人で、誰も巻き込まずに本懐を果たすつもりだった。

それは、今回することは完全に私怨であり、誰の利にもならないからであった。

しかし、二人の意思の固さ、さらには、自分を思ってくれたことに感謝の念を抱き、ランは全てを語ることにした。

「もう分かってしまっているようですね」

二人は笑顔で頷き、それを見たランも、厳しい表情を僅かに緩め、柔和ないつもの雰囲気に戻った。

「ええ、私は仇を討つために、また帝都の害悪を討つつもりです」

「私も協力する。あいつらはどう考えてもこの国のためにはならない」

「うん。悪は討たないと……それにまだ主水君の敵の片割れが残っている。おそらく、ランの仇と同じ」

「そこまで分かっていましたか」

クロメ、セリユーは頷きあうと、三人は先を見据えた。

「お二人とも助力お願いします」

「うん」

◆◆◆

「出てきた」

草葉に身を隠したクロメの視線の先に、ワイルドハントの詰所から作り笑顔を浮かべたランと、よだれを滴ながら下卑たニヤケ顔を浮かべたチャンプが出てきた。

「私の役目は待ち伏せ……」

クロメは取り決めに思い返す。

それは、三人がワイルドハントの詰所に向かう道すがら、話し合ったこと。

まず、ランが自分とセリユーのターゲットを言葉巧みに誘いだし、人気のない廃墟に連れ込み、事前に待機していたセリユーと合流後にじっくりと粛正。

クロメは、ワイルドハントの仲間が来ることも想定して、待機と共に、仲間が来た場合の迎撃。

今詰所に待機している人員を考えると、クロメ一人で複数を相手にする可能性があるが、それでも大丈夫と自信を持ってクロメが承諾したため、それでいくこととなった。

「チャンプさんは何故子供たちを愛でた後……殺すのですか？」

「そりゃあ決まってるだろ、天使たちを汚い大人にしないためさ!!」

ランについていくチャンプは上機嫌で満面の笑顔でランの質問に答えていく。

「大人はダメだ。カスしかいねえからよ！天使には永遠に天使のまま
でいてほしい！いやいなくちやならねえんだ!!」

熱く熱弁するチャンプ。

養護するわけではないが、それにも訳がある。

チャンプは裕福な家庭に生まれながらも、親から虐待されて育つてきた。

その後も汚い大人に絶望し、そんな中で無垢な子供に癒されている自分に気づき、その時に決意した。

「天使たちを汚い大人にしてはならない！」

ド外道のチャンプにもこのようになった理由があったのだ。

興奮冷めやらぬチャンプはそのままの熱さでランにて続き廃墟に入っていった。

「おおい！どういうことだ!!どこに天使がいるってんだよ!!」

子供たちがいるという嘘を信じ、ほいほいとついてきたチャンプは、辺りをみまわして、話が違うと怒鳴りちらす。

「貴方は、以前酒に酔った時にこう言ったのを覚えていますか」

「んだあ？」

「ジヨヨウで子供たちを襲った挙げ句、皆殺しにしたと」

辺りにランの抑揚の無い声が響く。

怒りを抑えてはいるが、隠しきれてはいなかった。

「あああ、あの時は人数も多くて今思い出してもウツトリしちまう
なあ……だが今は関係ないだろ!!」

「あるんですよ……私が、あの子たちの教師だったのですから!!」
神々しい羽の帝具〈マスティマ〉を発動し、闇夜に飛翔する。

しかし、その怒りと殺意を体から放つランの姿は、悪魔に近い。

「出番です、セリユーさん！」

「待ってました」

ガントレットが纏う雷が、セリユートの体にもまとわりつき、ポニーテールが逆立った状態で現れたセリユートは、瞬間的にチャンプに肉薄する。

「んだてめえは」

「主水君と帝都の皆さんの仇討ちにきたんですよー」

セリユートの拳がチャンプの分厚い贅肉に守られた腹にめり込む。

「ぐあああああー！」

感電しながら断末魔を上げるチャンプ。

「まだまだ」

「セリユートさん私の分も残しといてくださいよ」

「わかりました」

右腕を引き抜き、さらに一撃をいれる。

「ぐおー！」

体がくの字に折れ曲がり、顎が前に出た所に、アッパーを放つ。

華奢な体に見会わない威力で、チャンプの巨体が浮き上がる。

「今ですラン」

「ありがとうございます」

ランがスツと腕を上げると、周りを浮遊している幾多のマスティマの羽が一斉にチャンプに襲いかかった。

しかも、ランらしく抜かりはなく、死角無しの、四方八方からの一斉掃射。

「ぐげえええええええ」

まるで針ネズミのようになったチャンプが、血煙を撒き散らしながら地に落ちた。

「子供たちが受けた苦痛に比べればこんなもの大したものではないはずですよ」

「私もそう思います」

ランとセリユートが地に伏したチャンプに歩みより、ランは懐から植物を取り出す。

エスデスが端正を込めて育てていた特別な花。

決して女らしく愛でるためではなく、趣味を引き立てるためのも

の。

ランは冷酷な目付きでチャンプの傷口に塗り込んだ。

「うがああああああああ!!!」

「傷口に塗り込むことで激痛を引き出すものです。さすが隊長です。まだ意識を失わないでくださいね。これからが本番なんですから」

口許にうっすらと笑みを湛えて、月の光を浴びて、鈍く銀色に輝く刃物を取りだす。

「まっ、待て！俺をばらしたらためえがしたってバレバレだぞ！」

「大丈夫ですよ。ナイトレイドがしたことにしますので」

躊躇なく刃物を深く突き立て、抉った。

ランのあまりの変わりようと恐ろしさに、セリユーは怒りが冷め、傍観者になりさがっていた。

「今の屠殺されたブタが挙げるような悲鳴は？」

「あんなひでえ悲鳴、やつしかあげねえよ。だから言つたろヤツは信用できねえって」

「来ましたね」

ランを尾行してきたエンシンとコスミナの二人の前にクロメが立ちはだかる。

「邪魔はさせない！ナタラ、ドーヤ、シエーレ！」

クロメが帝具〈八房〉を天に掲げると、名を呼ばれた三人が現れる。

ナタラは槍を、ドーヤは二挺拳銃を、シエーレはエクスタスを構える。

「たしかイエーガーズの一員だったと思う」

「おもしろえじゃねえか」

エンシンはしたなめずりをし、空に目を向ける。

「だが運が悪かったな。まさか満月の日に奇襲をかけるとはな」

すると、突如エンシンの腰に携えている曲刀のような帝具が、脈動し、威圧感を放ち始める。

「帝具のノリが違うぜ！ヒヤツハアアアアア!!」

エンシンが帝具〈シヤムシール〉を振るい、空を切ったかと思われ

たその刹那、幾重にも真空の刃が飛び、四人を襲う。

月光麗舞シャムシールの特異能力が、真空の刃を放つことができるというものであるからだ。

四人は瞬時にバラバラに散会する。

ドーヤは横つ飛びしながら二挺拳銃を放つ筈であった。

しかし、銃を放つ前に、ドーヤの両方腕が宙を舞った。

「女の手は俺に奉仕をして、楽しませるだけのものなんだよ」

いつの間にか、ドーヤの真上を取ったエンジンが、真空の刃を放っていた。

しかし、それもクロメの想定の内であった。

ニヤリと笑みを浮かべるエンジンを見て口許を緩めるクロメ。

上空では、エンジンを挟むように、ナタラとシエーレが配置取っていた。

ドーヤが囷となり、二人が隙をついたのだ。

ナタラは槍を突きだし、シエーレは刃を開いたエクスタスを突きだす。

「なかなか考えてんじやねえか。だがな——満月輪
!!」

エンジンは宙で、円を描く。

360度全てに真空の刃を飛ばし、迫っていたナタラとシエーレを血に染め、弾き飛ばした。

シエーレは宙で、態勢を整え、地に足を下ろすと、月に照され白く輝くメガネの元、視線を向けると、エクスタスを未だ宙を舞うエンジンに向ける。

「なにする気だ？何をしても俺には効果ないけどな」

エンジンが満身するなか、エクスタスが激しく発光する。

エクスタスの閃光は、黒い闇に慣れていた皆の網膜を閉ざすのも、容易なことだった。

「目がっ、クソツタレ！」

「シエーレ殺って、そいつの死体はいらないから」

クロメの冷めた声が響いた直後、甲高い刃が触れ合う音が二度回り

に響き渡る。

エクスタスの発光が止んだ時には、宙で背を向けたシエーレの後ろで、エンシンが頭部、胸部、腹部の三つに分断されていた。

「ありやりやエンシンちゃん死んじゃった。まあいいか。コスミナのコンサート始まりますよー」

冷酷な視線をエンシンに向けていたクロメの背後を、コスミナが密かに取っていた。

大きな立ち回りを演じるエンシンに注目を集めさせ、コスミナは密かに行動していた。

「聴いてください！出力フルパワー！大地鳴動へヴィプレッシャー！！」

マイク型の帝具から発せられた音は、空間を揺るがす振動となつて、クロメを破壊しに掛かる。

絶体絶命の刹那、現れたランが、クロメを抱て上空に退避する。

突然の登場に驚くクロメだが、優しい笑顔を向け、

「ありがとうラン」

礼を言った。

しかし、二人の危機は終わっていなかった。

上空に退避したため、僅かに油断が生じていた。

それを狙ったかのように、球体の物がランに当たると同時に、竜巻となった。

二人を巻き込んだ竜巻は、様々な物を巻き込み、凶器と化した様々な物により、身体中を切り裂かれる。

(これはチャンプの帝具……まさかまだ！)

ランの悪い予想は的中していた。

血まみれになったチャンプがニタニタと血を滴らせながら、二人を見ている。

帝具快刀乱麻へダイリーガーへ

6つの球の帝具であり、それぞれに属性があり、当たると同時に発動する仕掛けとなっている。

「てめえの話を聞いた時、最悪のこと思い出したんだよ。天使とイ

チャイチャラブラブしてたときによお、天使たちはてめえのことばかり呼んでいたんだよ……萎えちまったのと、ムカついたので、二三人殺しちまったよ。俺の天使たちとの時間潰しやがって、これでぶっ殺してやるよ、爆の球!!」

球が向かって来るのが、ランにはゆっくりに見えた。

怒りによってランの能力が高められていた。

「終わりにします。奥の手神の羽!!」

マステイマがまるで後光のような神々しい光を放ち、開かれると同時に嵐が止み、次にランとクロメを包み込んだ。

爆の球は弾け、大地を揺るがす程の爆発を起こしたが、煙が晴れるなか、二人は爆発による影響が全く無いままに、宙に静止していた。

「マジかよ……」

信じられないと言った感じでポツリと漏らしたチャンプの視界から、ランの姿は消えていた。

「神の羽の移動速度は自然界最速の光と同じ」

「!!」

チャンプが振り向くと、怒りに燃えた瞳でチャンプを睨み付けるランの姿が。

刹那、神々しいまでの光を放つ神の羽が振り抜かれた。

「があっ……」

先ほどまで優しい光で二人を包み守っていた光の羽が、一転して、苛烈な攻撃的な光を放ちながらチャンプを飲み込んだ。

神の羽が過ぎ去ったのちには、塵一つ残っていないかった。

(やっつと、仇を討てました……)

ランはやりきったという感じで、クロメを下ろすと地面に倒れ込んだ。

「あくあ、チャンプちゃんも死んじやたか。でも今は……」

肉食獣のような獯猛な瞳に変わり、ペロツとしたなめずりすると、走り出す。

「ランちゃんいいことしましょう」

「なにをバカなことを言っているんですか」

コスミナを遮るようにセリユーが立ち塞がる。

「あなたもここで裁かれるんですよ」

セリユーが、地を蹴ったその瞬間、コスミナの胸から血が舞い、コスミナを撃ち抜いたであろう弾丸が上空に軌跡を描いた。

「あの弾丸はナイトレイドのマイン……」

以前の記憶を呼び起こし、崩れ落ちていくコスミナの後方を睨み付けるセリユー。

「やったわ！さすが私ね！護衛もありが——！！！」

マインの動きが止まる。

言葉が途中で止まったことにより、何があつたんだと、レオーネがマインの視線が釘付けになった所に視線を向けると、レオーネの動きも同様に止まった。

「なんで……なんで……シエーレが……イエーガーズのところに……」

セリユーのさらに後方に、クロメのいるシエーレがいることに、動揺と驚愕が隠せなかったのだ。

「シエーレ!!」

マインは走り出した。

生きていると信じながらも、心のどこかで、もうシエーレは……と諦めの思いが去来していたところに、シエーレが、親友が生きて現れたからだ。

いや、マインはシエーレは生きていたと願っていただけかもしれない。

そんな僅かな願いも、マインの前に現れ、手で前にいくのを制したアカメのその行動が、そしてその悲壮に満ちた表情が崩れていた。

「お姉ちゃん……」

「クロメ、そのシエーレは……」

分かつてはいた……そのシエーレの正体は。

しかし、どんなに絶望的な現実がそこに存在していたとしても、真実を知るまでは、希望がある。

しかし、そこに希望はなかった。

「私の新たな仲間——シエーレだよ。やっぱり強いね元

お姉ちゃんの仲間は」

「クロメ!!!」

その場に無言で崩れ落ちるように膝を落とすマインと、激昂して斬りかかるアカメ。

しかし、それを強制的に制するようにラバックの声が響き、それと同時に、現れたメズがランを抱き起こし、クロメとセリユーに逃げるように促す。

切迫した表情で。

「皆気を付けろ！何かが、何かがとんでもないスピードで向かって――

ラバックが警告の言葉を言い終わる前に、一陣の風が吹き抜け、砂煙舞い上がるイエーガーズとナイトレイドのメンバーの中心に、巨大な薙刀を肩に担いだ左京亮がきらびやかな袴をはためかせ現れたのだ。

「おもしろえことやってるじゃねえか！俺も混ぜてもらおうぜ!!」

二勢力の争いの中に、一石を投じるように、現れた左京亮が波乱を起こす。

第72話

月明かりの照らす中、まるで、舞台上上がるように現れた左京亮。きらびやかに輝く袴や、風情を醸し出す満月をも霞ませる程の、妖艶な美しさを感じさせる容貌を持つ。

誰もが魅了される程のものであるのに、魅了されるどころか、誰もが気圧されていた。

それは、この男左京亮から、底知れぬ力を感じたことと、その笑みから、今まで見たこともない、ただならぬ狂気を感じ取ったためである。

「おっ、ロリコンデブと、ビッチとDQN は死んだか」

まるで、舞台上から観衆を見回すように、辺りに視線を巡らせ、ワイルドハントの仲間の変わり果てた姿を見つけると、楽しげに呟いた。

事も無げに。

しかし、その呟きから、真意を読み取れないイエーガーズの面々、主にセリユーは震撼させられていた。

ワイルドハントの、左京亮の仲間のエンシンとチャンプを殺したのは自分たちであるからだ。

「つまらねえ奴らだったな。まあいいか。おいイエーガーズ。ここは俺に任せて帰んな」

「えっ!!」

左京亮の言葉に動きが止まる。

それは左京亮を敵に回すことにならなかつた安堵と、困惑からだっ

た。「不思議そうな顔してんな。俺がワイルドハントの一員だから、敵討ちに来たと思ってるんなら、とんだ勘違いだ。俺はこんなゴミのような奴ら仲間とも思ってるからな。ここに来たのは、俺が出世するため、皇帝の悩みの種になってるナイトレイドをぶっ殺しに来たからだ」

左京亮は、肉食獣のような獯猛な瞳で、ナイトレイドに視線を送る。

ターゲットをロックオンするかのようには。

「帰すわけないでしょ……」

誰ともなく、発せられる、冷ややかで、怒りの込められた呟きが、辺りに静かに響く。

「シエーレの仇はここで討つ!!」

マインは、怒りに染まった眼差しで、クロメを睨み付けると、パンピングを構え、照準をさだめ、引き金に指を添える。

クロメも応戦するように、八房を構え、シエーレとナタラにも同様に構えさせる。

「分け前が減るだろうが!!」

左京亮の透き通るような声の怒号が飛ぶと同時に、降り下ろされた薙刀が、地を裂き、砂煙を巻き上げる。

「二度は言わねえよ。さっさと帰んな。さもなければ、お前たちもまとめて相手してやることになるぞ」

凍てつくような殺気が込められた視線が、左京亮が本気で自分たちをも相手にするということを、雄弁に語っていた。

それを察したクロメ、セリユー、ランを担いだメズは砂煙が舞う中を、走り抜け、その場を退避した。

「やっど邪魔者は消えたな。上首尾じゃ。これでナイトレイドをぶっ潰した功績は俺一人のものになる」

砂煙が晴れると、左京亮は、巨大な薙刀を肩に担ぎ、ナイトレイド五人の前に立ち塞がった。

「さあ、かかって来いっつうの!!」

「ワイルドハントの一人ならターゲットに変わりはない! 葬る!!」

左京亮の言葉に呼応するかのように、アカメが走り出す。

紫電の輝きを放つ、村雨を鞘から抜き、闇を切り裂きながら、間合いを瞬時に詰め、低い態勢からのびあがるように、逆袈裟に切り上げる。

「おおっと」

左京亮は、大きく仰け反りながらアカメの一刀をかわす。

「まだだ!」

アカメはかわされた刃を返し、返す刀で袈裟懸けに切り下ろすが、崩れた態勢のまま左足を軸に反時計回りに360度回転し、一刀をかわすと、その回転の勢いのまま、薙刀を突きだした。

「くっ」

アカメは即座に身を翻し横に避けるが、薙刀はアカメのスレスレを過ぎ去り、掠めた黒髪がハラリと舞う。

「良くかわしたな。第二刃はどうだ？」

左京亮はそのまま刃をアカメに向け、薙ぐ。

瞬時に引き戻した刀で薙刀を受け、つばぜり合いに持ち込むが、やはり力では左京亮には勝てず、そのまま薙刀と刃を交えたまま、下方に押し下げられる。

左京亮は、刃をアカメに向け、村雨の峰を滑らせ、切りつける。

「くっ！」

薙刀はのけ反るように避けたアカメの左頬に切れ目を入れる。

崩れた態勢にさらされたアカメは、追撃を恐れたが、左京亮はフツと不適な笑みを浮かべると、身を屈める。

間髪入れず、空を切るレオーネの拳。

「外しただとー！」

「気配を感じてな」

左京亮は視線を地面に向けたまま、手元に戻していた薙刀を後方に引く。

「がはっ！！」

薙刀の束がレオーネの鳩尾を的確に突き、体が浮く。

左京亮は舞うように立ち上がり様に、くるくると薙刀を一回転させる。

「！！」

鳩尾を突かれ、痛みに苛まれながら、宙を浮くレオーネに再度激痛が走る。

眼前に自分の右腕が鮮血を撒き散らしながら、宙を舞っていた。

「次は首を舞わすか」

レオーネに向けた左京亮の顔におぞましい笑みが浮かぶ。

命の危機をまざまざと感じるレオーネ。

しかし、

「葬る!!」

態勢を立て直したアカメが、村雨を降り下ろす。

左京亮は、レオーネに体を向けていたため、完全に隙をついた形になる。

しかし、左京亮は軽く体を左に傾け、過ぎ去る村雨を薙刀の下部で受け止め、傾け瞬時に流し、その流れから、前方に出ながら反時計回りに回転し、薙刀の峰でアカメを薙いだ。

「がはっ」

アカメは腹部を薙がれ吹き飛ぶ。

「よくも二人に」

背後から迫っていたタツミが、槍で突く。

左京亮は、裾を翻し、槍の柄を掴むと、左足を一步引き、軸足とすると、タツミを振り回し、レオーネを巻き込んで弾き飛ばした。

「ぐふっ」

二人はもつれながら揉んどりうって地面を転がっていった。

吹き飛ばされたアカメは、宙で反転し、木に着地すると、木を蹴り、左京亮に肉薄し、横風ぎに切り裂いた——はずだった。

「手応えがない!?!」

目の前には両断された左京亮があるにも関わらず、その手に斬った手応えがまるで無かったのだ。

「惜しかったな。おまえが斬ったのは俺の残像だ」

すぐわきから聞こえる声。

「な——」

「一人確保」

左京亮は、上げていた左腕を下げると、薙刀の束が、アカメの背を突き、地面に叩きつけた。

「生きた奴一人確保しときゃあいいだろ」

左京亮は、東で押さえ込み、地面に叩きつけられ、動きが止まった

アカメに視線を向け、口許を軽くあげる。

「あとは、皆殺——はっ!!」

左京亮は、振り返り様に、薙刀を一閃した。
「弾かれた」

闇に、軌跡を刻み、はなたれた弾丸が、薙刀により弾かれ、上空に消えていった。

刹那、周囲の空間の雰囲気ガラリと変わる。

重力が増えたかのような圧迫感、心の底から沸き上がってくる恐怖、肌が焼けつく程の緊張感が、左京亮の体から溢れだし、場を満たしていた。

「おもしれえことしてくれんじゃねえか——」

今までの嬉しそうな表情は消え、怒りに表情を歪めた左京亮が立っていた。

射撃したマインは、場の雰囲気に飲まれ、動けないでいる。

「あーあ、種子島かよ。嫌なこと思いだしちまったじゃねえか……死ねよ」

今までのほとんど最初の位置から離れずに戦っていた左京亮が、一般人からしたら消えたように見えるほどのスピードで走り出した。

「マインには触れるんじゃねえ!!」

左京亮の前に、タツミが割って入る。
自分の彼女を守る為に。

しかし、左京亮はそんなタツミを嘲笑うように、軽々と突きだされる槍を右腕で振り払い、流れでタツミの顔面を鷲掴みにし、持ち上げると、勢いよく後頭部から地面に叩きつけた。

「ぐはあっ」
「邪魔するんじゃねえよ」

地面にめり込んだタツミに吐き捨てると、再び地面を蹴り、マインに詰め寄る。

「来るなあっ!」

マインは左京亮にパンプキンを放つが、全て薙刀で弾かれる。

「死々々ねっ」

「ひっ」

瞬間的に間合いに入り込んだ左京亮は、大きく振りかぶった薙刀を降り下ろした。

第73話

「死く〜ね」

「ひっ」

仄かな月光を浴び、冷たく光る薙刀が降り下ろされる。

その速度は尋常ならざるものであるが、マインの瞳には、それがスローモーシヨンのように見えていた。

そんな最中頭に浮かぶのは、（死にたくない！死ぬわけにはいかない!!）という強い思い。

（まだシェーレの仇を討てていないのに）

脳裏を過る亡き親友の笑顔。

（やつとタツミと恋人になれたのに）

マインの前で笑顔で手を差し出すタツミ。

強い『生』への執着。

しかし、それを嘲笑うかのように、無機質な冷たい刃がマインの儂い願いを断ち切りにかかる。

辺りに何かを打ち付けるような、耳をつんざく程の衝撃音と、爆風のごとき衝撃波が吹き荒れ、辺りの木々をざわめかす。

「おいおい、ただの木偶の坊だとおもっていたのによ。俺の一撃を止めやがるとはな」

「……これが俺の使命だからな」

今まで戦闘を観察するかのように見ていたスサノオが、左京亮の一撃をマインの前に立ちはだかり止めていた。

一撃の強さから、薙刀の刃が、僅かにスサノオの得物に切れ目を入れ、さらには、スサノオの両足は地面にめり込み亀裂を周囲に走らせはしていたが、耐えきっていた。

生物型帝具としての並外れた力故に成し遂げられたことだった。

「皆（こ）は俺に任せて逃げる！一斉にかかっても、まだこいつには勝てない!!」

スサノオは声を張り上げて仲間告げる。

スサノオから間合いを取り、記憶を手繰り寄せる。

いつぞやシユラに渡された帝具凶鑑のある頁に記載されていた、項目『生物型帝具』が頭に浮かぶ。

「ハアッ！お前は帝具だったのか」

左京亮は理解いったと笑みを浮かべ、首を拾いあげ、繋げるスサノオに問い掛けた。

「ああ、俺は生物型の帝具だ」

断面に首を置くと、直ぐに再生され、元に戻った状態で、答える。

「まさか帝具だから身代わりになったのか。くだらねえ」

左京亮は、興ざめだと言わんばかりに、吐き捨てる。

「俺の犠牲で皆が助かるなら安いものだ」

左京亮の言葉に真っ向から反対するスサノオ。

その表情は真剣そのもので。

「ししようがねえな。冥土の土産に俺が、姉貴の死から学んだことを教えてやるよ。構えな！」

スサノオが構えを取った刹那、一陣の風がスサノオの頬を仰ぎ、直後左京亮が、薙刀を地面に突き立てる、ズンという大きな音がこだまし、水面を揺らす波紋のように、薙刀が刺さった場から円上に空気が震動する。

すると、スサノオに衝撃が走る。

唐突に、スサノオの両腕が液体を流しながら滑り落ち、地面に落ちたのだ。

（いつ切られたんだ!!）

スサノオが滑り落ちる自分の腕を見て、初めて切り落とされたことに気づいた時には、左京亮の右腕が、自分の胸に深々と突き刺さっていた。

「死ぬは——」

左京亮は、スサノオの胸から腕を引き抜く。

その手には、白く丸いものが、

「負け」

言葉を発した直後、握られていた白く丸い、スサノオの核が音をた

てて砕け散った。

「帝具人形にも命かあるのかは疑問だがな」

「左京亮様」

闇を照らす満月を遠くを見るように見上げ、首を左右にふり、ほぐしながら、左京亮が手を払っていると、音もなく現れた男衆が声をかける。

「なんだ」

「この者たちはどうすればよいですか。ビッチは辛うじて生きているようですが」

男衆が、バラバラの肉片と化したエンジンと、胸から血を流したコスミナに軽く視線を向ける。

「性欲だけじゃなく、生命力も相当なもんだな。帝具は回収して、ビッチはドロテアの所に持っていけ。なんかの材料にはなるだろ」

「はい」

男衆は、コスミナを肩に担ぎ、チャンプ、エンジン、コスミナの帝具を回収し、闇に姿を消した。

「これからも俺の昇進と楽しみのために、せいぜい生き残れよナイトレイド」

口許を愉快そうに歪めると、左京亮は

「哀れお菊の物語」

しみじみと口ずさみつつ闇に消えていった。

第74話

傷が癒えた主水であったが、その表情には、暗雲がかかったように、影が射し、険しいものであった。

その理由は、ラン、クロメが傷だらけになり、セリユウが青ざめて帰ってきた時に、メズから聴取した話に起因する。

イエーガーズとワイルドハント、そしてナイトレイドの三つ巴の争いに関しては、それほど驚くべきことではなく、遂に来たかという感じで受け入れることは出来た。

しかし、問題はその後の話、ワイルドハントの七人目、左京亮の話に及んだことだった。

名前からして、以前「円光院」という寺で、苦しめられた「右京亮」とたった一文字違いで、気になる存在であるのに、聞いた所によると、その姿までが、瓜二つという所に問題があった。

頭の中では、タカナ様のように、似た人物であると片付けようとしたが、簡単には割りきれぬ問題ではない。

なにしろ、右京亮は倒せたとはいえ、仲間の不意討ちのお陰であり、主水一人では勝てなかった相手であったからだ。

(一度会って見るべきか……)

「その御仁」

(気はのらねえがな)

「待ってくださらんか」

「おっ!!」

思案中に突然肩に手を置かれ、呼び止められる主水。

ビクツとした後に、振り返ると、見知らぬ人物が。

「すまぬ驚かせてしまったか」

主水と変わらぬ装束を身に纏い、腰に一本挿しの様相の男が立っていた。

「どちら様で？」

「御無礼ご容赦頂きたい。拙者は、ワイルドハントに属するイゾウと申す。お見知りおきを」

(ワイルドハント!!)

驚きはあったが、事を荒立てる訳にもいかないの、そのような様子をおくびにも出さず対応する。

「これはこれは、っ丁寧に、私はイエーガーズの中村主水と申します」昨夜殺しあいの死闘を演じた組織に属する者とは思えない、丁寧な挨拶を交わしあう二人。

周りを歩く者はあからさまに、この異様な風体の二人を避けて通っていく。

「で、私に何かご用で」

「姿を見て、拙者と同じ東方の出ではと思ったことと、その腰のものから、ただならぬ雰囲気を感じてな。拙者は、この「江雪」一筋だが、気にかかってしまった。拝見させてもらえぬか」

イゾウは腰に挿した「江雪」を右手で少し上げた後に、主水の腰の太刀に視線を移す。

(下手に拒む訳にもいかねえな。しかしこんなやつをも引き付けちまうとは、殺し過ぎて妖刀の類いにでもなっちまったのか)

主水は苦笑を押し殺して、太刀を帯から抜くと、イゾウに手渡した。

「拝見させて頂く」

イゾウは頭を下げると、懐から和紙を取りだし、口に挟んで刀を抜いた。

イゾウの刀を見る眼差しは真剣そのもので、水平に構え、刃、それを反して峰などを、事細かに見やった後に、小さく頷き、嘆息を漏らすと、鞘に刀を戻し、主水に返すと、和紙を口から離し、

「かたじけない。良いものを拝見させて頂いた」

と感謝の念を表した。

「この帝都の武芸者は皆帝具、帝具と帝具以外の武器を蔑ろにする傾向にあり、参っていた所にそなたのような御仁に会えたこと、感謝にたえぬ。では」

イゾウはそれだけ言うと、踵を返し、歩き出す。

だが、二三歩歩いた所で足を止めると、

「そなたの刀も我が「江雪」のようにあまたの血を吸っておる。いつか

命を賭けたやり取りをしたいものよ」

と溢すように眩き、去って行く。

(また厄介なヤツに目をつけられたもんだ)

そのイゾウの後ろ姿を見つめてみると、以前エスデスに目をつけられた時のことが思いだされて、深い溜め息が自然と出ていた。

(おいおいあのオツサンもこの世界に来てたのかよ。こりやあ近い内に挨拶しねえとな)

その姿を物影で見ている者がいることに、主水は気づいてはいなかった。

◆◆◆

それから約二週間が経過した。

主水としては、ナイトレイドに顔を出さなくてはと思いつながらも、イエーガーズの隊長代行のランが負傷で、抜けていることと、隊長であるエスデスが不在が重なったため、皆の仕事の分量が増し、さらには、今では隊長のシユラが引きこもり生活に入っていたため、問題は減ったが、それまでの事件の事後処理が貯まっていたこともあり、仕事に追われ、全く自由な時間が無い状態であった。

(まったく冗談じゃないぜ。サボることすら出来ねえとは)

疲れた顔で、心のなかで文句を垂れる主水。

「どうしたんですか主水さん。今日も張り切って頑張りましょう」

今日の帝都巡回のパートナーであるウェイブが能天気になんか励ましてくることに、いつも通り元気なヤツだと思おう一方、さらに疲れが増しそうだとも思って、苦笑いを浮かべるのであった。

帝都巡回を終え、イエーガーズの宮殿内の詰め所に戻って来ると、丁度、昼の到来を告げる鐘の音が響き渡る。

「主水さん昼どうします?」

「金欠なんぞで、食いに行く金もつたないから握り飯を持ってきた。ってことで、今日は一人で食うわ」

「そうですか。じゃあ俺は少し行ってきましたね」

ウェイブは主水に悪いなと思いつつも、外に食べに出かけて行った。

(江戸にいた時と変わらねえな)

主水は心のなかで一人ごちながら、竹の葉の包を開け、握り飯と沢庵を食べ、質素な食事を終えた。

◆◆◆◆◆

主水は暫く仮眠を取った後、何とはなしに重い腰を上げ、部屋をあとにした。

(何故か分からんが、嫌な予感がするぜ。虫の知らせってやつか……) 静まり返った宮殿内を歩いている時、前の廊下から歩いて来るものを見た主水の足が止まり、戦慄が走った。

物腰柔らかな中性的な容姿、うつすらと浮かべる作り笑顔、それは対照的なきらびやかな装束、またその装束は、この世界では目にすることが無い、袴と呼ばれる日本独自の式服である。

(マジかよ)

主水の本能が伝える、本物の奥田右京亮であると。

命を賭けたやり取りをしたことから分かること。

震える体を鼓舞して、再び歩みを進める。

近付くたびに、高まる鼓動を抑えるすべなく、しかしながら、表情には出さず近づいていく。

「これはこれは、確かイエーガーズの方でしたね」

男と主水の距離が近づいた折りに、予想外にも、男から話掛けてきた。

それも、フレンドリーに。

意に反した男の出方に沈黙する主水、しかし、その初めて会ったかのような様子に、こいつはタカナ様同様、右京亮に似ただけの男ではないという考えが頭を過る。

「あ、これはこれは、私はイエーガーズの中村主水と申します。であなた様は？」

「私はワイルドハントに属します左京亮と申します。今後とも宜しくお願ひします」

左京亮は、爽やかな笑顔を浮かべると、主水に対し手を差し出す。

主水もその手を流れから握った。

握った刹那走る違和感。

主水の手には、何かが握らされたのだ。

「くれてやったもんを返すのは無粋だぜ」

左京亮の言葉に背筋が凍りつくなか、主水が手を開くと、見覚えのある山吹色の小判が。

右京亮と小判から甦る記憶、その小判は、右京亮が江戸南町奉行就任の際に催された宴会で同心全員に配られたもので、主水が右京亮を殺った際に、冥土への送り賃とばかりに、右京亮の屍に投げ返したものであった。

驚愕から、左京亮の顔を見上げると、そこには先ほどの爽やかな笑顔とは対極の悪魔のような醜悪な笑顔を浮かべる左京亮が。

「久しぶりだなオッサン」

「てめえは右京亮!!」

主水は瞬時に間合いを開け、刀に手をかける。

「ここでは左京亮だがな。血の気の多いやつだなあ。今すぐ殺りあいたいのは分かるが、今日は挨拶に来ただけだ」

左京亮は徒手で手を振る。

しかし、主水は警戒を解くことなく、いつでも抜けるように、右手を刀の柄に、左手は鯉口に手を掛けたままにしている。

「てめえは何故ここにいる？俺が殺ったはずだぞ」

「それはおめえにも言えることじゃねえか。まあいい聞かせてやるよ。あれは、お前らが円光院を去った後のことだ」

◆◆◆

薄暗い室内を、辺りに並ぶ蠟燭が仄かに照らし出す。

無数に転がる屍、それを静かに鎮座している如来像が、優しげな笑みを口許に湛えてその様を眺めている奇異な光景。

（俺は死ぬ〈負ける〉のか……）

幾つかの屍の中の一つの右京亮は薄れ行く意識の中、自問自答を繰り返していた。

そんな最中、陽炎が立ち上るように、空間が揺らぎ、陰陽対極図が浮かび上がり、大小二つの影が現れる。

「ここはどこだよ？」

「帝具の奥の手を使ったお主が知らぬものを妾が知るとでも思うのか。それにしても陰気臭い場所じゃのお」

シユラが頭を掻きながら帝具へシャンバラを眺め、ドロテアは呆れたように小さく溜め息をはくと、あたりを見回した。

「次元を越えて異世界に来たのかも知れんのお。それにしても、とんでもない場所に飛ばしてくれたもんじゃのおシユラよ」

「文句ならシャンバラに言えよ。確かにお前が言うように見たことねえ場所だな。しかも死体が山のようにころがつてるしよ」

シユラがヤレヤレと言った表情で、一人ごちる中、ドロテアは死体に近寄っては何かを調べている。

「こんな所に来てまで材料集めか」

「……………」

ドロテアは返事を返すことなく丹念に死体を調べ、一つのもの前で、八重歯を見せながら口許を吊り上げた。

「シユラよ。こいつはかなり強いぞ。それに微かに息がある。いづれは死ぬが妾なら完全に蘇生させられる。持ち帰るぞ。手を貸すがよい」

年相応の愛らしい笑顔を浮かべたドロテアの発言に渋々シユラは従うと、右京亮を抱えて、シャンバラを起動させ、その場を立ち去った。



「つてことがあってな、おれはここにいる。あの時言ったら、俺の首はまだついてるってな。またなオツサン」

左京亮は主水の肩をポンと叩くと、笑い声を響かせながら、去って行った。

主水はその後ろ姿を呆然と見送るしかなかった。

第75話

人氣が無く、豪華ながら無機質な印象を受ける廊下を歩く一人のメイド。

その容貌は、凜とした気の強さを感じさせる美しさを醸し出しているが、表情には、それとは対照的に張りつめた緊張感がありありと表れていた。

様々な掃除用具を持つ手は僅かに震え、手に汗握る様からも、メイド仕事に赴くメイドとは思えない光景である。

(待っているみんなのためにもやり遂げないと)

メイドは決意を固めるように、胸の前で拳を握り締め軽く息を吐き、目の前の扉をノックした。

「失礼します」

「……………」

中からは返事はないが、メイドは仕事を果たさなくては成らないため扉を開き部屋に足を踏み入れた。

昼だというのに、室内はカーテンが閉めきられているため暗く、また窓も閉めきられているため空気が濁っている。

そんな室内の片隅にあるベッドは、毛布が丸くなり小刻みに震えている。

一般的な宮仕えのメイドがこの様を見たのならば、部屋の主に気を効かせ出ていくのが相場かもしれない。

しかし、このメイドはそれとは逆の行動にでた。

ベッドに歩みよりながら、束ねた髪から一本の針を取り出す。

束ねられていた髪がほどけ、決め細やかな髪が清流が流れるようにさらさらと波打つ。

「お掃除に参りました」

メイドが口許に微笑を湛え針を構えた刹那、毛布がはね上げられる。

「予想通り来なさったようだな。あのクズも罔にはつかえるみたいだな」

「主人に向かつてそれはなからう左京亮よ」

ベッドから舞い降りた左京亮が、瞬時にメイドを取り押さえると、部屋の外から草を加えたイゾウが苦言を呈しながら室内に入ってくる。

「なにをなさるのでですか!? 私はただシートのほつれを直そうと」

メイドは左京亮に腕を取られ、絨毯に顔を押し付けられた状態ながらも、必死に誤解を解くように弁解する。

「そんな意見は通らねえよ。ここに入った瞬間おめえは詰んだんだ。なあイゾウ」

「左様。この部屋は女人禁制メイドが入ることは禁じられておる」

「私は今日から雇われたメイドで、そのようなこと知らなかったのです」

「この部屋での仕事は指示はされぬはず。それよりも、これがなによりの証ではござらぬか」

イゾウがメイドから一本の針を取ら上げ、掲げた。

「裁縫用ではござらぬな。血の臭いが染み付いておる」

「議論の余地はねえな。拷問室にご案内」

左京亮は口端を三日月のように歪めると、メイドを拷問室に連行した。

◆◆◆

拷問室に連行されたされたメイド、帝具へガイアファンデーションを取り上げられ、姿がチエルシーのものとなっていた。

そのチエルシーの瞳は、死を覚悟した者の眼差しをしていた。

殺し屋は、捕まればどのような苛烈な拷問を受けようとも仲間のこと、組織の秘密全てを黙して語らず、出来るのは死を迎えるのみそのことをチエルシーは深く理解していた。

しかし、チエルシーもまだ20歳の女性だった。

頭に過る後悔

(タツミ、マインごめんね……)

自分自身のことではなく、仲間への謝罪だった。

チエルシーは、ナイトレイド加入後何事にも真剣に取り組み、また

純粋なタツミに惹かれ好意を抱くようになっていた。

しかし、タツミはキヨロクへの遠征中に、マインの好意を受け入れ恋人となる。

心の中には僅かな蟠りがなかったとは言えない、だがまた一方でチエルシーは、マインならしやうがない、お似合いの二人だと、蟠りを越えて二人を祝福していた。

そんな中での、帝都帰還後のワイルドハントの暗殺。

マインを庇ったが為にタツミは大変な怪我を負い帰還する。

殺し屋であれば、いつ死んでもしやうがない、日頃から冷静に考えていたチエルシー。

しかし、最近では、いやナイトレイドに加入してから考えが変わっていた。

(殺し屋なら死んで当然。でも、僅かでもあの二人が、仲間が、生還できる可能性がふえるなら)

そういう思いからチエルシーは自分にしか出来ないシユラ暗殺を志願し、請け負ったのだ。

「この娘がシユラを狙ってまんまと罠に引掛かったのですね」

拷問室に吊り下げられたチエルシーを見て肉をクチャクチャと頬張りながら大臣オネストは左京亮に尋ねる。

顔は嫌らしくまた醜い笑みで歪んでいる。

(こんな間近にいるのに何物出来ないなんて…)

悔しさからチエルシーは瞳を閉じた。

「ええ、この帝具でメイドに化けていたようです」

左京亮は大臣に見せるようにチエルシーから没収した帝具へガイアファンデーションを机の上に置いた。

「よくやってくれました左京亮。シユラは今どこにいますか?」

大臣はガイアファンデーションを手に取ると、左京亮にシユラの居所を問う。

今までであれば、室内に引きこもっていたので聞くまでもないことであったが、最近ではリハビリも兼ねて、無理やら部屋から引きずり出して働かせていたためのことだ。

しかしながら、シユラに愛想をつかせていた大臣オネストは、あまり気にはせずにはいたため、どこで働いていたのか分からずそれを聞くに至った。

「今なら第二拷問室にいるかと」

「そうですね。呼んできていただけますか」

「はっ」

控えていた係の者が、大臣の命を受け走った。

「なかなか乙なことをお考えですね」

「父親としての愛ですよ」

—————

第二拷問室では、歴戦の拷問官さえも目を背ける凄惨な拷問が、シユラによつてなかなかのイケメンの男に行われていた。

「オラオラさっさとゲロっちまえよ。まあ俺としてはもう少し楽しんでえから粘ってくれたほうが嬉しいがなあ」

「アツ————!!言います!言わせてください!!」

シユラは頬を蒸気させ、口許を三日月のように歪め自分のいきりたつモノを男に突き立て、快楽を貪り腰を打ち付けつつ尋問をしていた。

女性恐怖症になつてから、シユラはそちらの方向に目覚めていたのだ。

「ああっ聞こえねえなあ!!」

「アツ————!!言わせてください!!」

男は苦痛と屈辱に顔を歪ませながらも、必死にシユラに懇願するが、シユラは愉悦を貪りながら、聞き流す。

シユラの動きがフィニツシユに向かい激しくなる。

「やめてください!!」

身の危険を覚えた男は悲痛な叫び声を上げるが、シユラが聞くはずもない。

直後、拷問室の扉が開け放たれ係の者が入ってくる。

「お楽しみのお申し訳ありません。シユラ様、オネスト大臣がお呼びです」

「オヤジがか…チクシヨウウあと少しで逝けたのによう」

シユラは、大臣（オヤジ）には逆らえないとモノを納めると、オネスト大臣の元に向かった。

残された拷問を受けた男は、死んだ魚の目をしていたことは言うまでもない。

—————

「オヤジ来たぜ………ヒッ!!」

「またですか。これ以上私を失望させないで欲しいですな」

吊り下げられたチエルシーを見て女が！とばかりに震えるシユラを見て大臣は、呆れ返る。

「オネスト様仕方ないのではないかと…未だに心の傷は癒えてはいないでしょうし」

シユラを弁護する左京亮ではあるが、口許には押し殺せない微笑がウツスラと浮かんでいる。

左京亮は今後のオネストのすることを理解しているがための笑みである。

「ええ、だからこそです。失望していてもあなたは私の息子です。故にその心の傷を治してあげようと思ひましてね」

「ほんとかオヤジ!!」

シユラ自身も早く治したいと思ひながらも、友人で名医のスタイリツシユでさえ匙をなげた症状。

諦めかけていた所に救いの手がサシノベラレタために、シユラは藁をも掴む思いですがりついた。

シユラの様子を見たオネストは、不適な笑みを浮かべる。

「簡単なことです。もう一度女をいたぶり自分のほうが女より上位な存在と理解出来ればその症状も治るでしょう。故に、この女にどんな方法でもかまいません。全てを喋らせ、その後に始末してください」

「俺がその女を…」

「ええ」

内心では出来ると思うのだが、身体は震え、足が進まない。

セリユーがシユラの心に刻み込んだ傷は深かった。

「なにを怖がっているのです」

オネストは徐に拳を振り上げると、躊躇なくチエルシーに叩き込んだ。

「うぐっ!!」

「こんなことをしても反撃出来ないのですよ」

オネストは何度か殴り付けていると、シユラの瞳にかつて存在していたギラついた光が蘇りつつあることに気づく。

「キャッ!?!」

オネストはチエルシーの服を掴むと強引に引き裂いた。

露になるスタイルの良い見惚れるほどの体。雪のように白い決め細やかな肌。

「さああなたが好きだった女体ですよ。ことが終われば好きにしていますから頑張りなさい」

オネストはそれだけ言うと左京亮を伴い拷問室を後にした。

残されたのはシユラとチエルシーだけであった。

第76話

帝都の外れ、夕陽が山裾に沈み行く頃合い、何人かの警備隊員が物陰に身を潜めてある建物を見張っていた。

そんな所に、フラフラとやって来る主水の姿が、

「御足労ありがとうございます」

「おう。あと気づかれるから明かりは消してくれ」

マフラーを目深に被り、現れた主水。

帝都警備隊に盗賊団のアジトを制圧する援護にイエーガーズからの助っ人として呼ばれていた。

「固つくるしい挨拶はここまでで、久しぶりです主水さん」

「おう久しぶりだな」

帝都警備隊の同僚との再会であった。

そのため主水も気楽に話すかと思えば、何故かそうでもなかった。

「主水さん雰囲気変わった？それに声や体格も少し違うような」

「そ、そうか？多分イエーガーズでしごかれてるからかな。まあそんなこといいじゃねえか、ふあゝ俺はここで見てるからなんかあったら言ってくれ」

「やっぱりあの主水さんだ……あてにはしてませんが頼みますよ」

「ああ」

以前通りの大あくびで全くやる気がない態度の主水に、警備隊員は苦笑いを浮かべながらも、自分達の知っている主水だと安心して、盗賊のアジトを取り囲むように配置についていった。

すでに辺りには夜の足音が近づいていた。

◆◆◆

「チエルシーちゃん遅いな……」

「ああ、チエルシーなら大丈夫だとは思いますがさすがに心配になるな」

宮殿の外でチエルシーを待つラバックやレオーネにも不安が募る。

チエルシーの腕前を知ってはいるが、敵の本拠地となる宮殿に単騎で乗り込んだ上に、予定している時間が超えていれば、心配になるのは当然である。

しかしながら、二人には宮殿に入るすべもないので、なにも出来ることはなく、ただ手をこまねいて待つているしかなかった。

「主水の旦那に連絡が取ればいいんだがな」

「あの不良役人こういう大事な時に連絡取れないんだよな。用の無いときにはそこら辺でフラフラしている姿をよく見かけるのに」

沈み行く夕陽を背に、二人は心配げに影が伸びる宮殿を見ていた。

◆◆◆

宮殿内の拷問室から、ピチャピチャと響く水音、身悶えするような音、そして恥ずかしさを押し殺すような微かな声が漏れる。

たしかにそれだけでも十分気にはなるが、その場所が拷問室、いるのは若い男女、そして男は男女無差別に食いまくるシユラということとで、外の見張りの拷問官も妄想を、下半身を強大に膨らませていた。

そのような拷問室の中では、暗い拷問室に一際映える白い肌を、均整の取れた美しい肢体を一糸纏わぬ生まれのままの姿で晒し、顔を赤くし顔を背けるチエルシーと、シユラの二人のみが存在していた。

「うう…い、一体いつまでこうしておくつもり？ さつきから飲んでばかりじゃない……」

気丈に問いかけはするが、チエルシーの声には耐え難い羞恥の感情が色濃く表れていた。

それも当然ではある。

腕を拘束され吊るされた状態なので隠すことすら出来ず全裸を晒しているのだ、いくら気の強いチエルシーでも羞恥に耐え難いものがある。

「しよがねえだろ止まらねえんだからよ」

シユラは、囁き続ける「お茶を。」

以前のシユラであれば、喜んで拷問をし、さらには女性が美しければ、美しいほど、貪るように凌辱に走ったであろう。

しかし、今のシユラは違う。変えられてしまったのだ、セリユーによって。

今までならば、女と見れば体に指令を出すまでもなく無意識に脊髄反射の域で動いていた体。

しかし今では動かそうにも体は震え言うことをきかず、ヤンチャ盛りだったシユラの相棒もすっかり男以外には鳴りを潜めていた。

そして、その緊張のため、喉の渇きが尋常ではなく、拷問室に来てからはずつと飲み物ばかりを飲んでばかりいた。

(何でなんだよ!!この女は俺に逆らうことは出来ねえ。それに旨そうな体をしているのになんで動かねえんだよ!!)

シユラは苛立ち紛れに壁に拳を叩き付ける。

(こんなのは俺じゃねえ!!)

「なにもしないなら解放してくれない」

死を覚悟しているチエルシーが侮蔑と嘲笑まじりに言葉を発した。

聞いていた情報からすれば、短気なシユラは挑発すれば、すぐにその挑発にのり怒りのあまり情報を聞くことすら忘れ殺すだろう。

そうすれば、皆に迷惑をかけることも、拷問による苦しみが長々と続くこともないだろうという考えからチエルシーは行動をおこした。

単純なシユラは案の上その挑発にのってくる。

「ふざけんなー!ふざけんなー!ふざけんな!!俺を見下しやがって!俺を誰だと思ってるんだシユラ様だぞ!そして俺はオヤジの信頼を取り戻すんだよ!!」

シユラは自尊心のみで構成されていると言っても過言ではない。

その自尊心が、チエルシーの言葉と視線により刺激され、ついにセリユーによって植え付けられたトラウマを打ち破った。

「俺をバカにしやがって、ふざけんじゃねえ!!」

「うっ……くっ……」

シユラは火がついたように怒りくるい、嵐のような暴力をチエルシーに浴びせかける。

「俺が女なんかを恐れるはずねえだろ!どいつもこいつもバカにしやがって!!」

溜まっていた鬱憤を晴らすようにチエルシーをサンドバッグのようになぐり付ける。

チエルシーは息絶え絶えで悲痛な声をあげて苦痛に顔を歪める。

「シユラ様お辞め下さい。このままでは情報を聞き出す前に死んでし

まいます!!」

拷問室から響くあまりの怒号と打撃音に驚き、拷問室に入ってきた拷問官二人がシユラを止めに入る。

しかし、一旦怒りにのまれたシユラは治まらない。

「うるせえ！先にてめえらを殺してやつてもいいんだぞ!!」

「うがー」

シユラは両腕を振り回し拷問官をはね除け怒りに充ちた視線を叩きつける。

視線は明確に語っていた邪魔者は誰であつても殺すと。

その視線を受けた拷問官は自分も殺されるのではという明確な恐怖から身動き一つうてなくなる。

「そうだよ黙つてりやあいんだよ」

シユラは動きを止めた拷問官に吐き捨てると苛烈な暴力により、意識が朦朧としたチエルシーに再び歩み寄る。

自分を侮辱したものの命を奪うために。

「オヤジ殿の信頼を今度こそ完全に裏切ることになつてもいいのかわ？」

振り上げた拳がチエルシーにあたる寸での所で止まる。

シユラが振り返った声の先には、拷問室の壁に寄りかかった左京亮の姿が。

オヤジという言葉がシユラを冷静に立ちもどらせた。

「なんとか冷静になったようだな」

「ああ、おかげさまでな」

怒りを納めた様子の子のシユラに拷問官は胸を撫で下ろす。

シユラが怒りに任せて殺してしまえば、シユラだけでなく自分達も処分されるのは火を見るより明らかだからだ。

「ありがとうございます左京亮様」

「構わねえよ。シユラ今日はここまでにしたらどうだ？恐怖症も治つたみたいだしな」

「ああそうするわ。おい拷問官！そいつを牢屋にぶちこんどけ。それと、そいつに手を出すなよ！多分そいつは初もんだ。俺が情報を聞き

出した後に楽しむんだからな」

ベロつとしたなめずりをし歪んだ笑みを浮かべると、シユラは笑い声をあげ、左京亮はチエルシーを横目で見てウツスラと笑みを浮かべ拷問室を後にした。

「なんでえ大臣の息子だからって自分ばかりいい思いしやがって！」
「ああほんとだよな。こんないい女の裸見りや俺の息子が収まりやしねえよー！」

拷問官二人は裸体のチエルシーを見て生唾を飲み込む。

しかし、二人の頭には先程のシユラの言葉の表す意味が浮かぶ。

『つまみ食いしたら殺す!!』

という。

「死にたくはないな……」

「そうだな……。いやちよつと待てよ、食わなければいいんじやねえか」

いい案が思い付いたとばかり手を打つ拷問官。

「どういうことだ？」

「触ったりするだけなら大丈夫だろ」

「たしかに……それなら初ものままだな」

欲望の籠が外れかけた拷問官は、舐めるようにチエルシーに視線を這わせると、徐に立ち上がる。

「俺は下だ。お前は上な」

「ふざけんな勝手に決めんなよ。じゃんけんだ！」

「しかたねえな」

微かに意識が戻り視界が開けた中で拷問官二人がじゃんけんをする姿が見える。

(私……死ねなかつたんだ……)

次に目を覚ますのは地獄に落とされた時だと思っていたチエルシー。

死ねなかつたと残念に思いながらも、どこか安堵している自分がいることに気づく。自分が心の底では生きることが望んでいるということを確認し、苦笑いを浮かべた。

「よっし俺の勝ちだ！さっきの取り決め通り行くぞ」

「しようがねえな」

まるで餓えた野獣のような息遣いで欲望丸出しでチエルシーに歩み寄る拷問官。

「なにする気よ」

「明日からの厳しい拷問の前に、身体検査をしようと思つてな。いい気持ちにさせてやるよ」

チエルシーは拷問官の今から自分にしようとしていることに気づき恐怖する。

「まずは初ものの証しらばさせてもらうぜ」

「いやっ!!」

拷問官の一人が足を掴み開きにかかり、もう一人の拷問官は豊かな胸に手を伸ばす。

縛られている状況、女では男には治からでは敵わないという現実が抗うことを許さない。

(タツミ……)

諦めていたはずなのに浮かぶタツミの顔。

閉じた瞳から一筋の涙がこぼれ落ちる。

「ぐはっ!」

「うぎやっ!」

「なに!?!」

穢らわしい手で触れられることもなく、さらには響く断末魔にチエルシーは瞑っていた瞳を開く。

鮮血で朱に染まる視界の中で崩れ落ちる拷問官の一人と、無言尚且つ無表情で刀をしゃがみこみ自分の足を掴む拷問官の一人の頭部に突き立てる主水。

主水が刀を頭部から引き抜くと、頭部から血液をぶちまけ、拷問官の一人は流血により出来た血だまりに身を沈めた。

「……………」

主水は血を払うとその抜き身の刀でチエルシーを拘束する鎖と手枷を断ち切った。

「主水なの？」

「ああ、大丈夫か」

「いいの私なんかには構って、ばれたらイエーガーズにいられなくなるのよ。それに殺し屋失格だよ」

助けてくれて嬉しかった。

しかし、革命軍の中では帝国の深くまで潜入している主水の役目はチエルシー一人の命より貴重なものとなる。

したがってチエルシーは殺し屋としてそのように聞いたのだ。本心を隠して。

「確かに殺し屋（仕事人）失格だな…だがな、おめえの方が大事だからな。イエーガーズの身分よりも革命軍なんかよりもな……」

主水は江戸での仕事人のときも口では厳しいことを言いながらも、仲間を助ける為の敵のアジトに単騎で突っ込むこともあった。

今回もそれと同じであった。

「えっ！」

チエルシーは自分と同じように主水は仕事（殺し）には非情な考えを持っていることを知っていた。そのチエルシーにとって、主水の答えは意外でもあり、また……嬉しくもあった。

「主…水……」

チエルシーの感情は決壊する。

死ぬことを望んでいたことさえも忘れ。

チエルシーの視界は涙でゆがみ、そのまま主水の胸に飛び込み涙を流す、まるで子供のように。

主水はただただ黙ってチエルシーが落ち着くのを静かに待った。

「ごめんね取り乱しちゃって」

「かまわねえよ。それより目のやり場に困るからこれを着てくれ。まあ嬉しくはあるがこれからのことを考えるとな」

「ありがと……」

顔を背け黒い同心羽織を渡す主水と、自分が何も身につけていないことに気づき、顔を真っ赤に染めて受けとり羽織るチエルシー。

「さつきも言ったけど本当にいいの？」

「ああ、イエーガーズで働けなくなったらナイトレイドにずっといいりやあいだけだ。それにチエルシーのことを聞いてからアリバイを作っている。今頃イエーガーズの主水が盗賊のアジトに乗り込んでいるだろうからな」

主水は軽くほくそ笑む。

「主水さんそっち行つたぞ」

「おう」

主水は逆手に持った刀で向かい来る盗賊の首をはねた。

（俺の得物は花火なのにまさか刀を使うことになるうとはな。礼金倍にしてもらわなきやわりにあわないぜ）

ずり下がったマフラーを再び上げながら心の中で愚痴を溢していた。

暗くて視界が悪いことを利用して、さらにはマフラーを目深にかぶり、鬚のヅラをつけることで、天閉が主水の変わりをしていた。

あまりクオリティーは高くないが。

「宮殿内の警備の動きは全て頭にはいつている。行くぞ歩けるか？」

「うん、なんとか」

チエルシーは気丈に答えるが、シユラの暴力によるダメージのためか足取りは危うい。

「しようがねえな」

主水はしゃがみ背を向ける。

「いいの」

「早くしろ」

「うん……………」

チエルシーは僅かに躊躇しながらも、主水に促されたためさらに顔を紅潮させておぶさった。

主水は拷問室を出て暗く、静まり返り、肌寒い宮殿内を進む。

気配、足音を消し慎重に先へ進む。

目指すは裏門。

表門は扉が閉ざされさらには幾多の警備員が配置されている。たしかに裏門にも警備員がいないことはないが、表門よりは少なくともまた抜け道があることが決め手であった。

抜け道はイーガーズの仕事をサポートする時に使っていたものである。

(それにしても順調すぎるな……)

裏門が視界に入る位置にまでやって来た。

しかし、違和感を感じる。

たしかに宮殿内の警備の動きを知ってはいたが、あまりにも順調に来すぎていたのだ。

さらには、警備員が少ないから裏門を選んだ。

しかしその裏門に関しても、宮殿内同様全く警備員の姿が見えないのだ。

心配すらも。

(嫌な予感はあるが、チエルシーの怪我もある。今はここで時間をくう訳にはいかねえな)

主水は細心の注意をはらいながら裏門横の抜け道へ急ぐ。

刹那二人を襲う鋭い殺気が。

「左京亮の言っていた通りでござるな」

月下の元裏門のしたにイゾウが立ちはだかった。

第77話

門の前に立ちほだかるイゾウを見て主水とチエルシーは動きを止めた。

宮殿を出るまであと僅かという所で、ワイルドハントの中でも一位二位を争う実力者のイゾウが現れる。ゴールに手が届くかという正にその時、とてつもなく高い壁が突如目の前にそそりたち行く手を遮ったのだ。動揺しないほうがおかしい。

(ここまで来てとんでもねえやつが出てきやがった……)

違和感を感じていたことから、なにかあるのではと最悪な事態をも想定してはいた。

しかし、イゾウが現れたことは、その予想すらも遥かに超えるほどの悪い状況であった。

『全く左京亮の慧眼には恐れ入る。『今宵裏門を張つていれば間者の娘を連れたナイトレイドとしての中村主水が現れる。さすがイゾウの望む戦いが現実になる』まさに言っていた通りになるとはな』

顎に手を添えイゾウは感嘆しながらほくそ笑む。

(チツ、俺は左京亮の手のひらで転がされていたって訳か……)

主水は苦虫を噛み潰したように眉間に皺を寄せた。

少し考えれば分かるはずだった。

自らの思考を、行動パターンをすべて左京亮ならば把握し、対策を立てるであろうことは。

故に主水は自分の浅はかさに苛立ちさえも覚えていた。

(時間はかけられねえが殺るしかねえか)

主水はイゾウの動きに最大限に注意を払いながら建物の影によりチエルシーを降ろし問いかける。

「どうだ歩けるか？」

「なんとか……」

チエルシーはナイトレイドの中でも一番主水と考え方が近いと言っても過言ではない。故に既に主水が言わんとしていることを理解していた。

『逃げろ』と言わんとしていると。

「そうかその顔を見りゃあ分かってきていると思うが一応言っておく。やつは今まで相手していたやつとは比べ物にならねえほどの力の持ち主だ。やり合えば必ずどちらかは死ぬ。俺は死ぬ気はねえがそうもいかねえ。戦いが始まつたら、俺はやつと罅迫り合いをして動きを止める。その隙に……………」

「主水？」

言い終える前に言葉を止め、なにか考え込むような仕草を見せる主水にチエルシーは声を掛ける。

（いや待てよ。このままチエルシーを逃がすのさえも左京亮ならば読んでいるはずだ。ならばここでチエルシーを逃がすのは得策じゃねえ）

主水は今まで左京亮の手のひらの上で転がされていたことに思いを馳せ、今回の行動も読まれているのではと考え、暫く考え込んだのだ。

「いや、すぐに終わらせるからそこで待っていてくれ」

「うん…待ってる…絶対に…死なないでね」

チエルシーは僅かに瞳を潤ませ言葉を詰まらせながらも嬉しげに答えた。

事実チエルシーは俺に構わず逃げろと言うと思っていた。

ならば、嫌でも主水の意向を組み、逃げなくてはならないと覚悟を決めていた。

しかしその考えとは裏腹に待っていてくれと言った。

つまり、死ぬことはないとあまりにも希望的観測を含めた拡大解釈に近いが、そのように言っていると考え、単純に嬉しかったのだ。

（副作用があるうがやつとガチで殺りあうよりは被害は少ねえはずだ）

主水は視線をアレスターに向け決意を固める。奥の手で即決めると。

主水が決意をかためたことにイゾウは軽く笑みを浮かべる。

願いが叶うと。

「お主がナイトレイドということには誰にも言ってはおらぬし、邪魔者は全て排除し今宵はいない。さあ我らの戦いを邪魔するものは無い！日が明けるまで死闘を繰り広げようぞ！だがその前に

「!!」

イゾウは石畳を滑るように独特の摺り足で瞬時に間合いを詰めると、闇を切り裂く銀色の軌跡を描くように〈江雪〉を鞘から抜き一刀した。

〈江雪〉の鋒がアレスターに僅かに視線を向けた主水のコンマ何秒という隙をつき、主水の腰に挿したアレスターの鉤を捉え、アレスターを帯から抜き宙に舞わせる。

アレスターは黄金の光を放ちながら飛びイゾウの遙か後方の地を打つ。アレスターは寂しげな甲高い音をたて転がった。

「我らの死闘に帝具なぞ不要!!」
(しくったか!!)

主水の思惑はイゾウの一刀目により儂く散った。

◆◆◆◆◆

「やるじゃねえかイゾウ。見ろよあの意表をつかれたオツサンの顔を。笑えるぜ」

月明かりが照らす宮殿の屋根の上で肘を突き酒を煽りながら愉快気にそのさまを見下ろす一つの影と、それを取り巻くようにずらりと並ぶ五つの影が。

「イゾウがオツサンを殺った場合はあの女を捕らえて拷問室に送れ。オツサンが勝った場合は——分かってるな？」

「はい」

「フハハハハ、どうなるか楽しみだな」

心底愉快気に男は高らかに笑い声を夜空に響かせた。

◆◆◆◆◆

イゾウは目的を果たしたとばかりに一旦後方に下がり十分な間合いをとった。

「お主なら大丈夫だと思うが、下手な気を起こされると興醒めなので

な。帝具は排除させてもらった」

（こいつの思考を読みきれなかった俺の失態だ。もうガチで殺るしかないねえ！）

主水は左手を鯉口に添え、右手で太刀の柄を掴みスラリと抜いた。

銀色の刀身は月光を浴び妖艶な輝きを放つ。

「月明かりの下で見るそなたの幾多の血を吸った太刀も美しいものだ。日が明けるまでの約三刻共に死闘を繰り広げようぞ！行くぞ江雪！今宵は極上の血を与えてやるぞ!!」

イゾウは口に加えた草を吹き捨てると、江雪を上段に構え石畳を蹴り主水に迫る。

（やつの太刀筋を見極めるためにもまずは…）

主水は勝負を急がず見極めるために、どの型にも対応できるよう太刀を正眼に構え迎えうつ。

「フツ」

イゾウが江雪を降り下ろす、主水は太刀を斜に構えて流す。

しかし、イゾウは江雪が主水の太刀に僅かに触れるかといった所で江雪を水平に引き、主水の顔面に向けて突きだした。

「うつ」

主水は即座に顔を反らしてかわすが、完全にはかわしきれず頬に切れ目がつき血液が頬を一筋伝う。

「そうか上手いか江雪よ。更に飲ませてやるぞ」

イゾウは突きだしたままの江雪を右薙に一閃する。

主水はその流れを読みきり後退しながら反時計回りに体を回転し避けきり、その回転からの流れで逆袈裟に切り上げる。

「はっ」

イゾウは後方に瞬時に下がり太刀をかわす。

「拙者の目に止まった御仁さすがでござるな」

イゾウは切れ目が入り風に舞った羽織の裾に視線を送り主水に称賛の言葉を送る。

そこには真の好敵手に巡り会えたことに、そして命を賭けた戦いに興じることが出来ることへの喜びの色がありありと表れていた。

「おめえもかなりの腕だな。それにその刀江雪が相当な業物だな」

「ああ江雪は我が愛刀。この世に二振とない最高の相棒よ」

イゾウは天を仄かに照らす月に掲げるように江雪をかざす。

(やはりな…)

その光景を見て主水が刃を交えた時に感じた違和感は晴れた。

主水が感じた違和感、それはイゾウと主水の間合いの違いと素早い立ち回り。

イゾウは踏み込み短い間合いから高速の剣激での適切な打ち込み。

しかし、主水にとつてはその間合いは窮屈であり、有効な攻撃にはなりえず、また相手の手数にも負けていた。

主水とイゾウの身の丈はほぼ同じ、また剣術の腕もそれほど違いはなかった。

故に感じた違和感。だが、今の流れでそれも晴れた。

イゾウの江雪は太刀と呼ぶには短く、脇差しというには長く、主水の太刀が約二尺四寸ほどであるのに対し、江雪は二尺ほど。

その差は見た目には僅かなものではあるが、刃を交えると大きな違いとして表れる。

今回はイゾウが攻勢に出て、主水が守勢であったために、間合いを詰められ相手の間合いで攻められていたのだ。

そこに、違和感を感じており、今江雪を見据えたことにより解決された部分である。

(こちらの間合いに持ち込むためにも攻勢に出ねえとな)

イゾウの剣術に関して主水の知識に該当する流派はなく、この世界独自のものだということが分かったが、刀の軌道は大方理解出来たので攻めに入ることにした。

「今度はこちらから行くぜー」

「フツ、みすみす先手は渡さぬよ」

主水とイゾウがともに石畳をけり激突する。

しかし、出足は主水のほうが早かったため、主水優勢で始まる。

主水は自分の長いリーチを生かし、相手攻撃を無力化し戦いを演じる。

間合いに入られればその素早い立ち回りと小回りの効く太刀さばきで劣勢になるが、それさえ封じられればイゾウの短いリーチ外から攻撃でき有利に事を進められる。

イゾウも重々それについては承知しており強引に間合いを詰めるべく踏みこみ斬激を繰り出す。

主水はさらりと後方に引き斬激を流す。

刹那、イゾウが斬激を流されたことにより体勢を崩す。

主水は見逃さず間髪いれず横一閃に切り裂いた。

銀色の一閃がイゾウの影を両断したはずが、手応えはない。

「フェイクでござるよ」

主水の懐に入りかがみこんだイゾウの姿が。

イゾウは不適な笑みをこぼすと「斬」という音を立てて主水と交錯し走りぬけた。

「主水!!」

チエルシーの悲痛な叫びがこだまする。

イゾウの背後では血飛沫を上げ踞る主水の姿があった。

第78話

イゾウは月に照らされ主水の血により赤く輝く江雪を満足気に一瞥すると、微かに口許を緩めた。

「楽しかった時間もここまでのようでごさるな」

イゾウは踞る主水に一步一步歩み寄る。

その表情は満足感と寂寥感のない交ぜになった複雑な表情であった。

主水に勝利を修める寸前の所まで来ている満足感と、それとは逆にこの楽しかった時が終わってしまうことに対する喪失感といった所か。

「そうだな…終わりに近づいているな」

「なにー！」

主水が血の滴る脇腹を抑えながらユラリと立ち上がる様子を見て、イゾウの中に言い知れぬ恐怖感が沸き上がる。

「なぜ立ち上がれる!?深く斬りつけたはず!!」

先程の一太刀で立ち上がれるはずがないという思えるほど先程の一刀は手応えを感じていた。なのに何故という思いのままにイゾウは声を上げた。

「さっきのやり取りは罠に嵌めたと思っていたおめえが逆に俺の罠に嵌まったからだ」

「罠?」

「おめえが残像をフェイクとして残したのは分かっていた。それを逆利用させてもらった。引っ掛かったふりをして、逆におめえを罠にかけるといった具合にな。戦いの興奮で痛みさえ感じてねえみたいで気づいてはいねえみたいだが」

主水はそう言うと、イゾウに向けて何かを投げつけた。

主水が投げた物はなにやら液体を撒き散らしながらイゾウの元に舞い降り、イゾウは手を伸ばそうとした際に、主水の言っていることを理解した。

「そういうことであつたか」

伸ばそうとした左手が存在していなかったのだ。

視線の先は血にまみれ、袖口ごと腕がなくなっていた。

「肉を切らせて骨を断つ。おめえに一太刀浴びせるにはこれぐらいしかなかったからな」

「まさか本当に『肉を切らせて骨を断つ』を実行するものがいたとは驚かされる。さすが我が好敵手」

イゾウは体を震わせる。

沸き上がる恐怖心からか、はたまたまだ主水とやりあえる嬉しさからかはイゾウにしか分からない。

「ああ、俺もここまで苦しめられたのは久しぶりだぜ。だがこれで終わらせてもらう」

主水は足場を固め、左手を鯉口に向け、右手を柄に沿える。

居合いの構えを取った。

「居合いか。だが体勢が整っておらぬようだが」

薄暗く詳細には見えないが、何度か柄を握り直すようなもそもぞとした素振りを見せる主水にイゾウは問い掛ける。

「ああ緊張で手が滑ってな」

「しっかりと握るがよい。そなたの最後の一太刀になるのであろうからな」

「もう大丈夫だ」

主水は暗闇の中で不適に微笑んだ。

（居合い……全力を込めた必殺の一撃。たしかに一撃当たれば終わりだが、裏を返せば一撃を避ければ拙者の勝ちだ）

イゾウが考えるように居合いという抜刀術は威力だけで言えば一撃必殺であり、その一太刀で勝負が決するため、二太刀いらすとも言われる。

しかし、二太刀いらすと言われる理由にはもう一つ理由があり、鞘を滑らし抜き放った後は、振りきられているためその一刀で一連の動作は終わることからもいわれている。つまり後に更に一太刀加えることはできず、大きな隙ができるのだ。

故に一刀を避けきることができれば拙者の勝ちとイゾウは思った

のである。

「参る」

イゾウは残像が残るほどの、目視不能のスピードで主水に向かって走り出す。

その様を見つめるチエルシーは、ただただ主水の勝利を祈り、宮殿の上の男は楽し気にことの成り行きを見下ろしていた。

(ヤツの間合いまであと三……二……一……ここだ!!)

イゾウには既に主水の刀の間合いが先程の立ち合いで見極めており、円上に線引きされたかのように感じていた。

イゾウの右足の爪先が主水の居合いの間合いに掛かった。

刹那主水の柄にかかっていた右腕が振り抜かれる。

イゾウは瞬時に地についた右足を蹴り後退する。

主水の右腕は既に振り抜かれており、主水に大きな隙が生じていた。

(避けきれたのか!?……しかし、これぞ好機!!)

ほんの僅かな違和感。

主水の腕の振りが早すぎ本当に避けきれたのか疑問に感じていた。

しかし、見てみれば腕は振り抜かれており、主水には大きな隙が生じている。

故にイゾウは地を蹴り江雪を降り下ろす。

「ぬ……!!?」

イゾウの体から力が抜ける。

イゾウが視線を下げると自分の腹部に深々と刺さる刀の刃が。

再びイゾウが上げた視線の先の主水の右手には刃も鏢も無い刀の柄が。

(そういうことか……)

イゾウは全てを察した。

主水が振り抜いたのは目釘を抜かれ取り外しが出来るようになった柄のみであり、刃のないものであった。一般的な刀には柄が埋められている部分には刃は無い。しかし主水の刀には柄が埋められている部分は刃になっている。つまり、仕込み刀である。

つまり、主水は柄だけを振り抜き、イゾウがそれを見て避けきつた
と思い前進すると同時に、鯉口に当てていた左手の親指で鰐を弾き刃
を飛ばしイゾウの腹部に刺したのだ。

「卑怯……なり……」

「殺しあいに卑怯もへつたくれもねえ」

主水の突き放すかのごとき言葉に、イゾウは反発するどころか、何
故か納得していた。

（たしかにな。殺しあいには何があるかと相手を恨むべきではなく、
自分の手抜きを悔いすべきであるな。思い返せば刀を受け取った
時に柄からも血の臭いを感じた時に察するべきであった。それに刀
の刃があつた状態であれば拙者は居合いを避けきれてはいなかった
であろう）

イゾウは軽く血液が溢れる口許を上げ微笑み、フラフラと後退す
る。

「人生の最後に……これほどの血沸き肉踊る戦いが出来たことを……感謝
せねばな。先に地獄で待つておるぞ……中村主水よ。共に行かん江
雪よ!!」

イゾウは江雪を振り上げ、残り全ての力を振り絞り地面に叩き付け
た。

あれほど強靱であつた江雪の刃が、まるで主であるイゾウの意を汲
んだかのように欠片を散らせ真つ二つに折れた。

「素晴らしき相棒よ……」

先に逝つた相棒を見送るとイゾウの体から力が抜け地に伏した。

「なんとか殺れたな」

主水はその場に崩れるように腰を下ろした。

それまでの極限の緊張が解けたためだ。

「主水！大丈夫！」

駆け寄るチエルシー。瞳は僅かに潤んでいる。

「ああ、なんとかな」

主水は着流しをはだけさせ、胸に刻まれた刀傷から未だに流れる血
液を手拭いで拭うと、再び袂を直し、立ち上がる。

「そんな酷い傷で大丈夫なの？」

チエルシーは心配そうに立ち上がった主水を見上げる。

「おめえの怪我に比べたら体したことねえよ。だが悪いがもうおぶつてやることは出来そうにねえ」

「そんなの構わないよ。約束守ってくれてありがとう。私の肩につかまっつて」

気丈にしながらも、つらそうな表情を隠しきれない主水にチエルシーは優しく微笑みかけると、立ち上がり主水に肩をかした。

「すまねえな。まだ何かありそうだ。行こう」

「うん」

主水とチエルシーは裏門を抜け宮殿を後にした。

◆◆◆◆◆

「イゾウはあんな簡単な罠に掛かって死んじまうとはな。まだまだだったな。ガツカリだ」

宮殿の屋根にいる男は盃に注がれた酒をグビツと飲み干す。

言葉のわりにはあまり感慨がこもってはいない。

「よし。じゃあ後はおめえ達だ。手筈通りやれよ」

「はい」

天を見上げる男の周囲から、取り巻きの姿が消えた。

「どちらに転んでも楽しめる」

男は徐に立ち上がると闇に溶け込むように宮殿の屋根から姿を消した。

◆◆◆◆◆

人気の無い、街灯の光に照らされた街中を主水とチエルシーは走っていた。

「チッ。やはりな」

顔をしかめ溜め息を深く吐く主水。

「どうしたの」

「二筋縄ではいかねえとは思っていたが。左京亮に手抜かりはねえみたいだ。手下が後をつけてやがる。このままアジトまで就いてくるみてえだな」

「!!」

チエルシーは主水がワイルドハントの左京亮について深く知っているかのような発言と、自分が全く気づけなかった尾行をしている者がいるということ把握している主水に驚きが隠せなかった。

「多分だが。これでヤツラの方も弾ぎれだろうよ左京亮の手駒が来てやがるからな」

主水はチエルシーに掛けていた肩をはなすと一歩前に出る。

「アジトまで走れチエルシー。あとは俺が引き受ける」

「バカなこと言わないでよ!!」

チエルシーは語気を荒くして怒鳴った。

静まり返る夜の街に響く声に主水も啞然とする。

しかし、主水も引き下がる訳にはいかない。

「バカはおめえだ！ここで逃げなきゃ死ぬんだぞ!!」

「いいわよ主水と一緒に死ぬのなら！もうあんな思いしたくないのよ!!」

チエルシーの声が涙声になる。

どんなときにも感情を抑えていたチエルシーが、感情を露にした。

チエルシーが、ナイトレイド加入前の全滅した仲間のことを言っているのか、はたまた先程の主水とイゾウの戦いの事を言っているのかは定かではない。

だが、チエルシーの思いは主水に通じていた。

「ハアしかたねえな。おめえも俺と同じで殺し屋（仕事人）失格だな。得物はどうする?」

主水もチエルシーに折れた形となるも、主水は軽く口許を緩めた。

「フッフ。私も主水と一緒に殺し屋失格か。みんなに感化されたのかも。あと得物は大丈夫。私も腐っても暗殺者よ。身ぐるみ剥がされても武器だけは渡さないわ」

チエルシーは主水に笑顔を向けると、髪の中から針を取り出す。

「無理はするなよ」

「無理しないと死んじゃうよ」

「それもそうだ」

二人は清々しく笑い会うと、主水は鋭く殺気のこもった眼差しを後方の闇に向ける。

「出てこいよ。いるんだろ」

主水の声に呼応するかのように、左京亮同様のきらびやかな袴を着込み、中性的な容姿をした五人の男達が姿を現した。

（またこいつらを相手にするのか。まあ前のヤツラとは別物だろうか（な）

「キャハハハ」

「フフフフ」

「ヒヤハハハ」

ニタニタと笑う男達の不気味な笑い声が辺りに響く。

ただでさえ不気味な姿が、闇により更にその異様さを引き立てる。

「いつ見ても不気味なヤツラだな。イゾウほどじゃねえがそれでも十分強いぞ。気合い入れろよチエルシー！」

「気合い十分よ」

満身創痍の二人の戦いが始まる。

第79話

「ギャハハハ」

「ウフフ」

男達が主水とチエルシーを取り囲む様に陣取りながら、まるで主水とチエルシーを挑発するかのようには嘲笑じみた笑い声を響かせる。

見た目の異様さがあわさり独特の不気味な雰囲気の主水とチエルシーを取り巻く。

「やつらの雰囲気は飲まれるなよ。おめえは俺が撃ちのがしたやつを仕留めてくれりゃあいいからな」

「うん、分かった」

チエルシーは静かに頷く。

チエルシー自体も自分の殺しは暗殺専門ということで、近接戦闘では足を引っ張ることになることを自覚していたので主水の指示に従った。

「ヒヤハハハハ!!」

「来るぞ!!」

男の一人が刀を抜きけたたましい笑い声を夜の街に轟かせながら主水に斬り込んだ。

「ヒヤアッ!」

男の真上から降り下ろした一刀を一步引いて必要最小限の動きでかわすと、即座に前進して切り返す。

男の袴を僅かに太刀の鋒が掠め切り裂くが、体には届かずかわされる。

先程のイゾウとの死闘と、受けた傷から主水の太刀の振りが鈍くなっていた。

男が下がると同時に、主水の死角となる男の背後から二人の男が飛び出し、左右から間を開けず襲い掛かる。

「くっ」

左側の男の一刀を無理な体勢から半身になりかわし、返す刀で切り上げる。

男も予期していたかのように後方にバックステップを踏み間合いを開ける。

右側から攻め込む男は低い体勢から主水の懐に入り込み、逆手に持った小太刀で斬りつける。

「チツ」

主水が身を翻すが、僅かな判断の遅れから腹部を横に斬りつけられ、鮮血を散らす。

男は不気味な笑みを浮かべ更に踏み込み追撃に出る。

「調子にのるんじゃねえ!!」

小太刀が返される前に主水は男の腕を右腕で掴み、左手で持った太刀を首にあてがい引くように断ち切った。

男の首の断面から吹き上がる血飛沫を目眩ましに、上空から舞い降り襲い掛かる男。

「次から次へと」

愚痴をこぼしながらも相手の気配を感じとっていたため、慌てることなく身を屈めて横風ぎの脇差しを避けると、主水の真上を過ぎ去る男の腹部を太刀で突き上げる。

「ガアアアッ!?!」

腹部に突き刺さった太刀は男が前に進む力が合わさり腹部を切り裂いていく。

「二人目だ」

大量の血をぶちまけ倒れ伏した男に脇目もふらず、返り血を浴びた無表情の主水は残り三人の男に鋭い殺気のこもった視線を向ける。

(すごい…)

チエルシーは完全に呆気に取られていた。

あれほどの手傷を負いながらも、かなりの技量を垣間見せる男達をいなし、さらには二人を葬った。

今までチエルシーも多く殺し屋を見てきたが、誰もが子どもに見えるほどに主水の強さは異質であり次元を超えていた。

(私じゃ役にたてないのかな…)

確かに主水は目の前にいる。しかし、実際は自分の近くにいるよう

で、遠く離れた所に主水がいるような気がし、一抹の寂しさを感じていた時だった。

「左京亮様のために死ねえ!!」

死んだと思われた大量の血を撒き散らしていた男が、ふらつきながら立ち上がり、主水に脇差しを振り上げ襲い掛かっていた。

「危ない主水!!」

主水は確実に仕留めたと僅かに油断していたために背後から男が立ち上がり襲い掛かってきたことに気づくのに遅れ隙ができていた。

そんな最中、いち速く男に気づいたチエルシーは、考えるよりも速く男に走りより、脊髄に針を突き刺した。

「グガガガ!!」

ビクビクと男は痙攣し息絶えた。

「助かったぜチエルシー」

「どういたしまして」

主水の脳裏でチエルシーの姿に以前の仕事仲間仲間針使いのやいとやや、簪で脊髄を突き刺し殺す秀の姿が重なっていたのは主水自身にとっても驚くべきことだった。

主水の感謝の言葉に自然とチエルシーは笑顔を溢すが、チエルシーは自分ではこんな緊迫した場面ながらたった一つの主水の言葉で笑顔になっていることには気づいてはいなかった。

(やべえな。視界が狭まって来やがった……)

イズウとの一戦で負った傷から血液を失い、先程男から受けた傷により更に血液を失ったため、大量の血を失い主水は窮地にたたきされていた。

しかし、戦うことを諦める訳にはいかなかった。

戦いを止めた瞬間に待ち受けるのは『死』のみ。

一度死を迎えていたため、恐怖はない。

しかし、かわした約束を守るため、待っている人がいるために今は死ぬわけにはいかなかった。

主水が戦いを続行すべく一歩踏み出すと、男達は一歩引く。

更に一歩踏み込んでも同様の動きをとる男達。

そのにやつく表情からも男達が主水の気迫に押されているのではなく、主水が出血により弱っていくのを待っているのを窺っているのが分かる。

男達も気づいていたのだ。

イゾウとの一戦を注視し、更には左京亮のために命をかけ、一太刀仲間の男が斬りつけたことを見ていることにより、気づいていたのだ主水の出血が酷く、時間をかけるだけで主水は自滅するだろうことを。

ジリジリとしたにらみ合いと間合いの取り合い。

無表情ではあるが、焦りを覚える主水と対極的に余裕ある下卑た笑みを浮かべる男達。

時が経つほどに主水の血液が着流しを濡らし、滴り、それと共に主水の体力を著しく奪っていた。

(こっちの世界でもこんな幕切れなのか。これも仕事人の業が成せるわざなものな。約束護れそうもありません。すいませんチョウリ様もう面倒を見てやれそうもねえすまねえなセリユー)

優しい笑みをたたえるチョウリと、朗らかな笑顔を向けてくるセリユーの顔が浮かび、弱気な考えが浮かぶ。

またそれと並行して、

(チエルシーだけはにがさねえとな)

という考えが。

しかし、それさえも運命は許さなかった。

主水が踏み出そうと足を出そうとした瞬間だった。

主水の体がぐらつき体が言うことを聞かず、そのまま膝をつき辛うじて倒れていない状態に陥っていた。

「主水大丈夫!？」

チエルシーが駆け寄るよりも早く、男達が待っていましたと前方と左右から襲い掛かる。

「ヒヤハハハ」

(チクショウ、ここのまでか……)

狭まっている視界の中の男達の姿を駒送りのように次第に大きく

なっていく。

三人の男が勝ちを確信し、得物をふりあげ口許を三日月のようにつりあげ、降り下ろす。

「やめてええええええええ」

チエルシーの悲鳴が辺りに響きわたる。

「好きにはさせねえよ！」

「吹き飛ばっ！」

前方と左側の男が割って入ってきた影により吹き飛ばされ建物の壁にめり込み、右側の男は首を押さえながら宙に浮かび上がっていく。

「助けに来たぜ主水の旦那」

「主水でもボロボロになるんだな」

建物の上から月光を浴びながら、男を吊し上げるラバックと、主水の前に珍しいものを見るかのように立ち止まっているレオーネの姿があった。

「おめえら」

「レオーネとラバック」

主水とチエルシーは突如現れた二人に驚きながらも、助けに来てくれたことに感謝を禁じ得なかった。

ラバックは宙吊りにしているグローステイルをピンと弾き、男を仕留めると建物の屋根から降りて駆け寄る。

すると、ハツとしたように一瞬真顔になり、次には一転して満面の笑みを作り一筋の鼻血を垂らし、親指をたてた。

「チエルシーちゃんグッジョブ!!」

「えっ」

チエルシーは慌てて主水に駆け寄ったために、同心羽織は乱れ、妖艶な見惚れるほどの裸体を晒していた。

その姿にラバックはギラついた視線を向け、神々しいものを目の当たりにさせてもらっていることに感謝を示したのだ。

「ちよんぎつちやおうかな?」

「調子に乗りました。すみません」

端から見ると美しい笑みなのだが、向けられているラバックにどつては殺気をこめられた笑みだと感じられ、ラバックは即座にチエルシーに土下座をすると、チエルシーはそそくさと羽織を調えた。「よく分かったな」

「なかなかチエルシーが帰ってこなかったから心配して来て待ってた時に、ラバックが張つてた糸に反応があつて急いで来たんだよ。間に合つてよかつた」

レオーネは笑顔で語った。

そして、笑顔で主水に向き直ると、

「今日の借りは大きいよ旦那」

「ああ、これが終わつたら思う存分呑ましてやるよ」

「やる気出るよ」

主水の答えに腕を回して喜ぶレオーネ。

「じゃあ俺も」

「ラバックは色町と一緒に行くか。もしくは俺の知り合いの若くて器量がいい夜鷹を教えてやるよ」

「よろしく願います」

「まかせておけ」

深々と頭を下げるラバックと、満更でもない表情の主水。

さらには、その二人を白い目で見るチエルシーとレオーネ。

居たたまれない雰囲気の中、主水は真剣な表情で視線を飛ばす。

「しづてえ野郎だな」

先程レオーネに吹き飛ばされた二人の男がゆらりと立ち上がる。

「じゃあ残りを片付けるか」

「ああ、大人の階段早く登るためにも死んでもらうぜ」

指をなるすレオーネと、グローステイルを自在に操るラバックが二人の男に立ち塞がった。

第80話

薄く垂れ込める雲の隙間から月光が仄かな光で照らす中、不気味な笑い声を響かせる二人の男とレオーネ・ラバツクの二人がにらみ合い、戦いが幕を開けようとしていた。

雲が流れ月が隠れ、闇が一面に辺りを支配した時だった。

「!!」

レオーネとラバツクの視界から闇に溶けるように男二人の姿が消えた。

「マジかよー」

ラバツクが何かに気づき体勢を崩し傾いた所を男の刃が駆け抜けた。

「こいつー」

ラバツクは崩れた体勢のまま即座にクローステールを束ね槍を形成し男に放つ。

男は微かに口許を上げると、蝶が舞うように回転しながら槍を避けると、体勢を整えたラバツクに回し蹴りを放つ。

「ぐはっー」

ラバツクは脇腹を蹴られ強制的に肺から空気を放出させられ、息を吸うこともできず痛みで顔をしかめた所を刀で斬りつけられる。

「食らう……かよ」

腕を引き、引き戻した槍で刀を受け止めると、槍を振り切り男を後方に退けると、ラバツクも後方に引き即座に間合いをあけた。

「ラバ!!うっ!?!」

レオーネの視線が僅かに男から劣勢にたたされるラバツクに動いた所を、男は闇から姿を現し襲い掛かる。

完全に隙が出来ていた所だが、帝具〈ライオネル〉により獣化し、全ての能力面で強化されたレオーネは、その圧倒的な反射神経で瞬時に刃を屈んで避け、男の腹部に拳を叩き込んだ。

確実に拳は男の腹部を捕らえたはずであるが、当たった直後に滑るような感覚をレオーネは覚えた。

背後に吹き飛ぶ男の表情は苦悶が浮かぶものとは対称的に、口許に小さな笑みを浮かべて宙で体勢を整え見事に着地した。

(あの僅かな時間で私の拳を受け流したのか)

レオーネも一端後方に下がり、ラバックと背中合わせの状態になると、ポツリと呟いた。

「かなり手強いな」

「ああ、俺も周りに警戒の為に糸を張っていなかったらヤバかった。手負いの体で二人を葬った旦那は人間じゃねえな」

素直に男の力を認めたレオーネの言葉にラバックは頷く。

「そんなこと言いながら姐さん嬉しそうだな」

「ああ、久しぶりに全力でやれると思うとワクワクしてね」

嬉しそうな笑顔を見せるレオーネに、やれやれといった感じでラバックは一つ息を吐くと、

「姐さんに負けないように俺も頑張るか」

と呟き、レオーネが男に向かって走り出すと同時に、男にクローステールを結びつけたナイフを三本投擲した。

男が体を左右にふりながらナイフを避け前進し、刀を振り上げた。

(ナイフをかわしたことによって動きが鈍った。ここだ！)

まずは視界で捕らえることも難しい動きを遅くすること。それに成功したラバックは、ナイフの先端に付けたクローステールを引き、ナイフを引き戻すと同時に、ナイフの先端から外したクローステールで斧を形成し降り下ろす。

「前後の攻撃をどうかわす？」

後方から迫るナイフと前方から降り下ろすされる斧。

それを男は舞を舞うように、袖をはためかせ、後方から迫るナイフを払い落とすと、流れるような身のこなしで斧の軌道から体を外す。

(やはり受けずによけたな。予想通りだ)

ラバックが斧を形成しているクローステールを緩めると、糸がほどけ分解されたクローステールが蜘蛛の巣状に広がり男を捕らえにかかると、

「なかなかやるな。しかしこれぐらい」

男は覆うように降りかかってくる蜘蛛の巣状のクローステールを刀で斬りつける。

強靱で切れにくいクローステールではあるが、洗練された男の乱れなき剣激によりクローステールが切り裂かれていく。

「お前の糸が全て切られた時、お前の命も尽きる」

「さあどうかな」

切り裂かれていくクローステールの中の一本が切れることなく、刀にまとわりつく。

「なに！」

「クローステールの奥の手〈界断糸〉だ。簡単には切れねえぜ」

グローステイルが切られることも予測し、界断糸を紛れこませていた。

ラバックが界断糸を引くと、刀だけでなく男の体も拘束する。

「交ぜといて良かったぜ」

ハアハアと息をきらせながらもラバックが拘束している界断糸を全力で引くと、男は断末魔をあげる間もなく血煙をあげバラバラな肉片と化した。

「……………」

「ちよこまかと」

レオーネは男に接近すると、拳を放ち続けるが、尽く避けられる。

「フフフフフ」

避ける度にカウンター気味に刀で斬りつけられるので、無傷の男に對して、レオーネは刀傷が増えていく。

「このヤロウ!!」

自分の攻撃は当たらないのに、相手の攻撃が当たることに焦れたようにレオーネが拳を振りかぶり大振りで放つ。

男が屈み、レオーネの拳が空をきる。

「しまった！」

「ヒヤハハハ」

男はしめたとばかりにレオーネの心臓めがけて刀を突きだした。
「仕留めた」

しっかりとした手応えのもと、刀がレオーネの心臓を穿ち体を貫いた。

レオーネの閉じられた瞳を見上げ、男が歪んだ笑みを浮かべる。しかし、その笑みはすぐに驚愕に変わった。

レオーネの閉じられていた瞳がパツと開いたのだ。

「なぜ死んでいない!？」

「引っ掛かったね。私の体はかなりタフでね。これぐらいじゃ死なないんだよ」

口許から流れる血を拭くと、

「これでお前はかわせない」

左手で男の首をつかみと、腹に右拳を叩き込む。

人知を超えた野獣の力を持ったレオーネの拳は、容易く男の体内に到達する。

男の体内に存在する肋骨を掴み引き抜くと、男は吐血し体を痙攣させた後、首から力が抜けだらりとする絶命した。

◆◆◆◆◆

「なんとかなったな」

「かなりしんどかった」

レオーネは満足げに刺さった刀を引き抜き、ラバツクは心底疲れたような表情で主水とチエルシーの所に駆け寄った。

「お疲れ様二人とも」

「御苦労様。疲れた所悪いんだが。クローステールで俺の傷口を縫ってくれねえか」

チエルシーと主水の労いの言葉に軽く二人は微笑むと、ラバツクは主水の元に歩み寄った。

「分かった。これも合わせて貸しだからな主水の旦那」

ラバツクは手早く主水の傷口をクローステールで縫い合わせる。

ほんの数分で胸に刻まれていた傷口はラバツクにより縫い合わされた。

ここまで手慣れていたのも、今までレオーネの傷を何度も縫い合わせてきた経験があったからだ。

「ありがとよラバック」

主水は脱いでいた着流しに腕を通すと頭を下げた。

「でどうする旦那？」

ラバックの問い掛ける意味を読み答える。

「おめえたちは先にアジトに帰っていてくれ」

「どういうことだよ旦那？ 私達だけ先に帰れって」

レオーネは声を荒らげ主水に問い詰め、ラバックとチエルシーもその答えの真意をはかりかね表情を曇らせた。

三人とも主水も共にアジトに帰るものと理解していたためだ。

「イゾウの話からすると俺がナイトレイドだと知っているのは死んだイゾウと左京亮のみ。そして俺の考えからすると左京亮は俺の正体は誰にも話さねえはずだ。自分だにとどめておき利用するか、手札にするかって所だろうな」

主水は以前も左京亮は主水が仕事人と知りながらも南町奉行所で働いていたのをほくそ笑みながら容認していたことを思いだしそう答えた。

そこに食いついたのはラバックだった。

「旦那はあの化け物みたいなの左京亮ってヤツを知っているのか」

「ああ……それについてはアジトで話す」

主水が僅かに表情を曇らせたことからあまり言いたいことではないことと察し、また後程話すということ信じ小さく頷くに止めた。

「イゾウが死に捕虜がいなくなった所で俺が行かなかつたらアリバイがあるうとも疑われるだろう。まだ俺のイエーガーズでの情報は重要だろうからな虎穴に入らずんば虎兇を得ず」

決意を秘めた主水の瞳を見て三人は主水の意味を曲げることは出来ないと察し、反論することを飲み込んだ。

「無理しないでね主水……」

「ああ、三人に助けられた命だからな」

主水は答えながらチョウリも同じ様なことを言っていたことを思い出し、あの時のチョウリの気持ちは今になって理解した。

「近いうちにアジトに行くってナジエンダに言っただいてくれ」

「分かった。待ってるぜ旦那」

三人は心配そうな表情ながら去っていった。

（失った血は補給してえが、医者に行つて輸血したら足がつくかもしれねえ。肉でも食つてなんとかするしかねえか）

主水はふらつく足取りで自分の家に帰っていった。

第81話

「ふうもう朝か」

裸のシユラは気だるげにベッドから起き上がるとカーテンを捲り、窓を開ける。

開かれた窓からは朝特有の清々しい空気が部屋に吹き込み、朝を告げる鳥の囀りが耳を打つ。

「早かったわね。まああれだけ熱くなれば時間も早く感じるわよ」

先程までシユラの隣で寝息をたてていたはずのスタイリツシュが、いつの間にか目を覚まし、シユラ同様に一糸まとわぬ姿で微笑みながらシユラに声を掛ける。

「ああ、そうだな。だけどよ、まさかお前とこんな関係になるとは思わなかったぜ」

シユラは初めてスタイリツシュに会った時に「なんだこのかまは」と訝しげに見ていたことを思い返し、苦笑いを浮かべた。

そう、両刀使い、つまり二刀流になったシユラは、スタイリツシュとも真の『おともだち』になったのだった。抑えられない己の猛りから。

「そうね、でもこれで心も体も合わさって本当の意味での親友になれたのよ。もう一勝負いこうかしら」

スタイリツシュは挑発的な笑みを浮かべ、それを受けたシユラも同様に笑みを浮かべる。獰猛な獣のような。

「フツ、また猛つてきちまったぜ」

シユラが連戦明けであるにもかかわらず再び臨戦体勢に入り、スタイリツシュが横たわるベッドに歩み寄る。

「またもや地獄絵図の再来かとも思われたまさにその時。

「シユラ様！至急お知らせしなくてはならないことがあります！」

扉が慌ただしくノックされ、焦った声でシユラに一報を伝えるべく現れた兵士の声が。

「空気が読めねえヤロウだな。今は忙しいんだ突っ込まれなくなかったらさっさと消えろ!!」

シユラは自分の相棒同様いきり立ち怒号を飛ばす。
邪魔するんじゃないやねえとばかりに。

「しかし……………」

兵士としてもさすがに引き下がることはできないが、面と向かわなくても分かるシユラの苛立ちに恐怖を覚え、歯切れが悪くなる。

それがさらにシユラの怒りを増させる。

「困ってるみたいだな」

「左京亮様」

「俺に任せな。邪魔するぜ」

扉の外ですがるような兵士の声と、左京亮の清み澄る声で何やら話し声がすると、扉が開かれ左京亮が部屋に入ってくる。

兵士は安堵し、尊敬の眼差しで左京亮の背中を見送り、対称的にシユラはばつが悪そうな表情で左京亮を迎え入れた。

しかし、そんなシユラも真剣な表情をした左京亮を見て、その深刻さを察し表情を引き締め口を開いた。

「何かあったのか？」

「ああ、昨日お前が尋問していた女が逃げて、さらには尋問官とイゾウが殺された」

「嘘だろ……………」

シユラは一言言葉を発すると言葉を失った。

女が逃げたこと以上にイゾウが殺されたことに驚きとショックが隠せなかったのだ。

イゾウはその腕を見込んで、シユラが大金を積んで連れて来た男だった。

ただその大金に見劣りせず、その強さはエンシン、チャンプ、コスミナ、シユラで一斉にかかっても軽くあしらえるほどの強さであり、ワイルドハントの中でも比肩する者のない強さであった。

死ぬどころか傷を負うことすら想像できないほどのものであったからだ。

「信じられないのも分かるがこれからのことを話合わなくてはならなくてな、すぐに出仕してくれ」

左京亮はそれだけ告げると、立ち尽くすシユラを一瞥して部屋を出ていった。

「クソッ！何がどうなってんだよ!!」

部屋から漏れ聞こえてくる声に左京亮は口許を緩めていた。

◆◆◆◆◆

「ふあ〜あ、おはようございます」

「おはようございます中村さん」

「復帰するんですか？」

大あくびをしながらイエーガーズの一室に入る主水に何もなかったかのように爽やかな笑顔で挨拶をするラン。

久しぶりにその元気そうな姿を見た主水は、形ばかりに問いかけて見た。

「もう大丈夫みたいですよ主水さん」

会話に入ってきたウェイブが指を指す。

そこには、綺麗に片付けられ、整えられた書類の束が。

「まさかこの短時間で!!」

主水は自然と驚きで嘆息をもらした。

昨日までは確かにそこにはうず高くつまれた書類の束が乱雑に置かれ、魔境と化していた。

さらには、誰もがその現実からは目を反らし見てみぬふりをしてきたのだ。

それもこれも今のイエーガーズには、戦闘特化の脳筋ばかりで、静かに机で仕事を出来る人はいなかったからだ。

それを、今日朝復帰したばかりのランが片付けてしまったのだ。

驚かないほうが可笑的い。

そしてこの時、皆の心には、さすがイエーガーズの副官だ。ランがないとイエーガーズも立ち回らないなとしみじみと思われたのだった。

(これは幸先いい)

主水はこれは好機と口を開いた。

「すいません。明日から少し年休が欲しいのですが」

「構いませんよ。宮殿内では何か問題があったようですが、今ではワイルドハントの一件が片付きそこまで忙しくありませんし、昨夜も私の代わりに野盗退治に行ってくださいだったみたいですし」

依然として朗らかな笑みを浮かべながら了承するラン。

主水が頭を下げ、踵を返した際だった。

「ちよつと待ってください中村さん」

僅かに主水に緊張が走る。

振り向いた際に見たランの笑顔が先程までとは僅かに違っていたからだ。

「このことなんてすが」

「なんでしよう」

ランから一枚の紙を手渡される。

主水には見覚えがある。

「書類の山の中に隠されたように紛れ込んでいましたが、受け取ることはできません」

主水が提出した飲み屋での領収書であった。

「仕事以外のものは受け取れません」

「いえこれは、夜勤の際のもので…疲れを癒すためにも」

口を濁す主水の後ろで、その会話を聞いていたウェイブは、

(あの時珍しく奢ってくれたのはこういうことだったのか)

と珍しく奢ってくれた主水の謎の核心に至っていた。

「夜勤の手当ては出ているはずですよ」

笑顔でありながら強い口調のランに、主水は言い返すことも出来ず、「ケチだな…」と小さく愚痴を溢すしか出来なかった。

「あ、それと中村さん」

「まだ何か？」

「その領収書から見ると二人で呑んだようですね。私も次回は誘ってくださいね」

ランはそう告げると部屋の奥に歩いていった。

◆◆◆

(上手くいったな)

主水は宮殿を出て街中を歩きなまらほくそ笑んでいた。ただ、やはり昨日の今日で足取りは危うい。

皆の前では必死に平然とした姿を演じていたのだ。

既に街中は、ワイルドハントの横行が終わったため、賑やかさを取り戻していた。

人々の心に刻まれた傷は癒えきつてはいないが、笑顔や活気は回復しているようだった。

「聞いたか、また出たんだとよ」

「何が出たんだ？」

「『舞姫』だよ」

（舞姫？）

主水は聞きなれない言葉に足を止めた。

何故それに興味をひかれたのは何故かは分からないが。

「ああ、見惚れるほどの美しさで悪を殺すってやつか。絶世の美女らしいな俺も見てみたいぜ」

「悪人になればみれるぜ。なんでも正義の味方らしいからな。殺されるけど」

話をしていた男達は笑いながら去っていった。

（知らぬえ内に新たなヤツが出てきたようだな）

世が荒れば、それを憂いて、またはそれを好機と行動を起こすものが現れる。

善か悪かは別として。

主水は何かを考えるように佇んでいると、

「ただの殺し屋が正義の味方なんてね。勘違いも甚だしよ……」
後ろから馴染み深い声が。

「おはようございませりユーさん」

「おはよう主水君」

苦笑いを浮かべたセリユーだった。

正義の味方という言葉に疑問を感じていたのだろう。

「世の中の人の捉え方は千差万別ですからね」

「うん。でも本当の正義の味方を分かって欲しいな」

寂しそうに呟くセリユー。

おそらく殉職した父親を思い出しているのだろう。

主水もセリユーの口にする『正義』に違和感を感じながらも、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「あ、ゴメンね。ランに聞いたら主水君が暫く休みを取るって聞いて。少し寂しく感じちゃって……」

「一週間ぐらい休みをもらっただけですよ。私がない間よろしくお願ひしますね」

主水はセリユーの頭に手を置き、優しく語り掛けるように話した。「子どもじゃないのに。うん分かった」

主水の対応に不満を溢しながらも頷くと、

「行くよコロー！」

と元気よくコロに声を掛けると、コロを引き摺りながら街の雑踏に消えていった。

主水は、自宅につき、体を休める。

昨夜の戦闘から、イエーガーズへの出仕まで休むことなくこなしていたために、体が悲鳴を上げていたためだ。

主水としては軽く体を休めるつもりが、目を覚ました時には、窓からオレンジ色の遮光が射し込み、日が暮れる頃合いになっていた。

(朝よりは楽になったな。行くか)

主水は起き上がるとパンパンに膨れ上がった皮でできたしつかりした作りの袋を担ぐようにして、家を後にした。

◆◆◆

日が傾き、山裾が燃え上がるように赤く染まる中、主水は帝都の大門を通り街道を歩いていた。

やはりこの時間になると、帝都へ続く街道であつても全く人気はない。

ナイトレイドのアジトは、途中まで街道を歩み、そこから街道を外れ、幾つかの山を越えて行くことになる。

主水は帝都を出る際に買った串焼きを頬張りながら肅々と歩いていると、

「そのオツサンここ通りたきや身ぐるみ置いて行きな」

剣や斧、槍などを持った見るからに柄の悪い男達に囲まれていた。

(めんどくせえなあ。野盗かよ)

疲れたような表情で溜め息を漏らす主水。

その様を見て男達は下卑た笑い声を上げながら、嘲るように下から見上げてくる。

「ビビっちゃまったかオツサン？死にたくなかったら全て置いてきな
(うぜえな)

主水は徐にアレスターに手を伸ばそうとしたその時だった。

「悪行もそこまでです」

凜とした女性の声が辺りに響く。

「なんだてめえは」

男達が振り向くとそこには、黒いまるで喪服のような着物を着て、巨大な鎌を持ち、雪のように透き通った肌をして、肩に掛かるほどの銀髪をした凜とした美しさを持つ女性が立っていた。

「あなた方の殺しを依頼されましたので、地獄巡りにご案内いたします」

「こいつ今よく話にでる『舞姫』とかいうやつですぜ」

「噂通り美しいぜ。無力化して犯っちまおうぜ」

剣に舌を這わせながら女性に歩み寄る男。

生理的な嫌悪感をもたらすその姿を見ても女性は怯まない。

「死での旅立ちへ案内いたします」

女性は鎌を下段に構えた所から振り上げ、空いた手で裾を翻しながら、舞を舞うように鎌を振るう。

その姿は舞姫という名そのもので、鎌舞が終わる時には、男達は肉片と化し、まるで桜の花が枚散るように赤い鮮血が辺りを染めていた。

「……………」

「……………」

主水と男達を肉片に変えた女性が目を合わせた瞬間両者ともに動きを止めた。

お互いに知っている人物だったからだ。

「スピアさん!!」

「主水様!!」

一瞬の間の後に二人は同時に驚きの声をあげた。

第82話

動きが止まった二人を地に沈みかけの斜陽が照らす。

照らし出されたスピアの面差しには、以前僅かに感じていた幼さはなく、強い決意を秘めていた。

「なぜこのような所で、このようなことごとくを!？」

主水は問い掛けた。

以前死の間際に対面したチョウリが、娘のスピアはタカナに任せ、革命軍の本部に行つたとばかり思っていたのだ。

それなのに、帝都近くのこのような場で、しかも名が世間に知れわたるほどの殺しをしているという事実が主水に衝撃を与えていた。

「父の仇を討つためにナイトレイドに加入したのです」

主水を真つ直ぐ見たスピアは真剣な眼差しで答えた。

そして、先程の手際からもうすでに何度か仕事をこなしていることが垣間見えた。

（危惧していたことが起こつちまったか……チョウリ様も浮かばれねえな…）

主水はスピアが修羅の道に足を踏み入れたことを残念に思いながらも、その事実を受け入れることにした。

スピア自身が決めたことに対して誰も文句を言うことはできない。

「そうか……」

「で、では主水様はこんな所で何をなさっておられるのですか」

主水の沈んだ雰囲気を感じたスピアは、話題を変えるべく主水に問い掛けた。

「私は今からナイトレイドのアジトに行こうと思つていました」

主水は外向きの丁寧な言葉遣いでスピアの問い掛けに答えた。

肩に提げていた袋を見せながら。

「そ、そうですね。では共に参りませんか。私も仕事を終えましたので」

「ええ、参りましょうか」

主水もスピアが緊張しているのを感じとり、このままの悪い雰囲気

気でいるのも良くないと察し、軽く微笑んで答えた。

◆◆◆◆◆

「スピアさんも強くなりましたね」

実際の所、以前のスピアは皇拳寺槍術の免許皆伝とはいえ、型に嵌まったもので実践向きではなく、あまり強さは感じられなかった。

しかし、先程見たスピアの戦闘力は、以前とは別格の実践的なものになっていたのだ。

見るものを釘付けにするほどのまるで日本舞踊のように流麗な鎌裁き、そしてそれを可能にする柔らかな体裁き。

敵の行動を読んだ上での戦い。

まるで別人になったスピアがそこにいた。

今であれば、鼻頂目無しに見ても、十分に三獣士相手に善戦できるほどの実力を持っていると断言できる。

「はい。以前の私は井の中の蛙でした。ナイトレイドに加入して自分の弱さを知り、そして良い師匠にも巡り会えたことが私をここまで成長させてくれました」

儂く笑うスピア。

父親のチョウリの仇を討つという願望を叶えるために、血の滲むような努力をしてきたのは容易に想像できた。

その後もボチボチと話をしながら、夜の闇に満たされた獣道を歩き続け、ナイトレイドのアジトに辿り着いた。

◆◆◆◆◆

「ではナジエンダ様に主水様が来られたことを伝えてきますね」

スピアは背中に担いだ鎌の帝具へアダユスを揺らし走ってアジトの奥に消えて行った。

主水もゆつくりと静まり返り、窓から差し込む月光により仄かに照らされたアジトの備え付けの椅子に腰を下ろす。

普段であればここまでの道程は、主水にとっては大したことの無い距離であるため、然程疲れることはない。

しかし、治りきらない怪我と昨夜の死闘の疲れのためにかなり疲労していた。

既に時刻は深夜、故にナイトレイドのメンバーも眠りについてた。

暫く座り体を休めていると、先程走っていったスピアが息をきらせて帰ってくる。

「主水様、ナジエンダ様が今からお会いになりたいということですよ」

このような刻限のために、主水はナジエンダとの面会は明日になるのではと思っていた。

そんな中でのナジエンダの配慮に主水は感謝した。

スピアの後には続き微かに虫の音が響くアジト内を歩くと、温かな光が漏れている部屋が見えてくる。

「ナジエンダ様。主水様がいらっしやいました」

スピアが扉を軽くノックし声を掛けると、一言「入れ」と返事が返ってくる。

それを合図にスピアに続き主水も室内に入ってしまった。

相変わらずナジエンダの部屋は机の上以外は整理整頓がなされており、ナジエンダの性格が垣間見れた。

「すまないな。このような時間に」

主水は他人行儀にナジエンダに頭を下げた。

「フフツ、主水らしくないな。そんなに気にすることもないぞ。まだ書類に目を通していて寝てはいなかったからな」

ナジエンダは笑みを浮かべ隣に置いてある書類の山に視線を向けた。た。

「ところで今日のここに来た目的はなんだ？」

ナジエンダの問い掛けに、主水は一度スピアに視線を向けた後に、僅かに眉間に皺を寄せた。

ナジエンダも主水の僅かな変化を見逃さず、そして、意図をくむ。

「スピア、悪いが席を外してくれないか」

「分かりました」

スピアはナジエンダの指示を聞き、首を傾げながらも頷くと、部屋を出ていった。

「スピアには聞かせたくない話だとすると、チョウリ様の話か」

「ああ……しかし、驚いたぜ。スピアさんがナイトレイドに加入しているとはな」

「だろうな」

主水とナジエンダは共に苦笑いを浮かべた。

「まさかチョウリ様の願いとは真反対の道を選ぶとは」

「チョウリには同情を禁じ得ないが、これも本人が選んだ道だ。反対することはできません。それに今ではナイトレイドの中でも主力になりつつある欠かせないメンバーの一員だ」

ナジエンダも主水の意見に賛同はしながらも、ナイトレイドのボスとしての発言も忘れない。

ナジエンダの発言からも分かる通り、スピアはすでにナイトレイドに必要とされ、スピア自身にとつても居場所となっていた。

「本題に入ろうか」

ナジエンダの表情が変わり、主水は同意するよう頷くと、床に下ろしていた袋をナジエンダの前の机の上に置く。

「チョウリ様から死の間際に依頼された仕事だ」

主水が袋を開くと光に照らされ黄金の光を辺りにばらまく、溢れんばかりの金貨が。

以前主水がエスデスの三獣士からチョウリを護った時に謝礼として渡された、菓子折の下に敷かれた金貨である。

なにかのために、主水は手をつけずにとつておいたものとなる。

仕事人として本能的にこのようなことが、起こるのではと感じ取っていたのかもしれない。

「仕事内容は？」

「帝都の害悪となる大臣オネストとワイルドハントを消すことだ」

主水の言葉を聞いたナジエンダは、軽く口端を上げる。

「元より依頼されなくともオネストは最大の殺しの的であり、ワイルドハントはすでに他から殺しの依頼も受けている。断る理由などないー！」

ナジエンダは断言した。

言われるまでもないことだと。

「今まではオネストを殺す革命軍に加担するつもりはなかったが、チヨウリ様の最後の頼みだ。俺も加えてもらう」

「願ってもないことだ。あと、ラバから聞いたが、お前はワイルドハントの中でも最大の難敵になりそうなヤツの情報を持っているようだな。明日にでも皆の前で話して貰いたい」

「……分かった」

以前のラバツクの反応と今回のナジエンダの頼みで、ナイトレイドと左京亮が何らかの悪い関わりがあったことを主水は感じとり、了承した。

そうではなくとも、元より主水は話すつもりではあったが。

「今日は隣の部屋を使ってくれ」

「ああ」

話は翌日に持ち越しとなった。

—————

「中村さんが来ているとスパシアから聞いていましたが、今日はまだ会わない方がいいでしょうね」

帰ってきたスパシアから主水が来たということを知り、やって来たタカナではあったが、外から室内の真面目な空気を読んだタカナは、それを察して今日は退散することにした。

◆◆◆◆◆

翌日になり、ナイトレイドのメンバーが広間に集められていた。

ナジエンダの隣に立つ主水を見たチエルシーは、瞳を潤ませて喜び、ラバツクやレオーネも安堵し胸を撫で下ろしていた。

そんな中でも主水は違和感を感じていた。

居るべきはずの二人の姿が見えないからだ。

「ナジエンダ、シエーレとスサノオの姿が見えないんだが」

主水が感じた違和感について口にすると、部屋の空気が冷えきり、暗く、どんよりとしたものとなる。

それだけで、主水は理解し、やっしまったなと後悔した。

この稼業であれば、いつ訪れても不思議ではない現実。

主水自身も何度も経験してきたことだった。

「悪い……」

「構わん。いずれ言わなくてはならないことだからな。シェーレは、イエーガーズのクロメによって屍の傀儡にさせられ、スサノオはワールドハントの左京亮から皆を護ために死んだ……」

気丈に話すナジエンダだが、言葉の端々に感情の揺らぎが見え、その場にいるメンバーも視線を落とし、怒りや悲しみに沈んだ表情をしていた。

（それで左京亮のことを……）

主水は今に至ってナイトレイドと左京亮の因縁を知るに至った。クロメはイエーガーズの同僚、左京亮は因縁の相手。

その二人が絡んでいることは、少なからず主水にも動揺を与えた。

「主水、お前に話してもらおう前に紹介したい二人がいる」

（二人？）

この場にスピアがいないことから、一人はスピアのことと予見できしたが、二人いるという所に疑問を覚える。

「入ってくれ」

「はい」

「ええ」

扉が開かれ入ってくる二人。

（なん……だと）

一人は予想通りのスピア。

だが、もう一人が度肝を抜いた。

予想所の話ではない。

分かるはずがない。

驚きに動きを止めた主水を見てほくそ笑むナジエンダとタカナ。

「なにを驚いているのですか中村さん」

いつもの嫌みな笑顔でお決まりのフレーズを使うタカナに、主水は本物だと頭を抱える。

「旦那が動揺するの始めて見た」

「うん。主水を動揺させることが出来るなんて、凄いタカナ！」

「俺もそう思う」

初めて見た主水の動揺する姿に、仲間達は皆驚き、レオーネ、アカメ、タツミも口々に感想を溢す。

「中村さん！本題に入る前に少しお話があります。私がない所で大変面白いことを言っていたみたいですね。レオーネさんとアカメさんから聞きましたよ」

ひきつった笑顔で眉をピクピクさせながら話すタカナ。

主水はレオーネとアカメに視線を飛ばすと、レオーネはニヤニヤしながら顔を反らし、アカメは何のこと？といった風に首を傾げる。

「元警備隊の、そして現革命軍の上司としてお話があります」

そのまま流れを無視してタカナは主水に愚痴と説教を始めた。

「……………」

「タカナそれぐらいにしておけ。もう主水のHPは0だぞ」

さすがに主水を不憫に思い、また本題に入りたいナジエンダが口を開いた。

「まあいいでしょう。ここまでにしましょう」

「やつと終わったぜ」

「何か言いましたか」

「いいえ……………」

やはり頭が上がらない主水であった。

「自己紹介はいらさないな。では本題に入ろうか」

ナジエンダは表情を引き締めて主水に促す。

主水も表情を一転させ、左京亮について語った。

「……………」

「まさか旦那がアイツとそんな因縁があったなんてな」

主水は真実を話しても複雑になるだけなので、部隊をこの世界の東方の話として皆に話した。

「ああ、だからヤツは俺が殺す」

決意を込めた言葉に室内が静まりかえる。

「で、でも、大丈夫なの？」

たまらずチエルシーが問いかける。

心底心配した表情で。

それも当然である。

主水の話では追いつめられ、仲間の助けがあつて勝てたという話だったからだ。

「ああ今回は勝算がある。大丈夫だ……」

言い切れるものではないが、主水にはたしかに勝算があつた。

以前左京亮と戦つた時と違い今では30前後に若返り、そして若返つたからこそ使える奥の手を持っていた。

初見ではまずかわすことは不可能な。

「主水がそこまで言うなら」

チエルシーもそれ以上は言うことはなかった。

「では左京亮は主水に任せるとして、引き続きワイルドハントの殺しを狙うことになる。今では姿を現さなくなつてはいるが、いつ機会が来るか分からん。しつかり準備をしておいてくれ」

ナジエンダが視線を巡らす先で皆一様にうなずいた。

ただ、仲間の中で一人、スピアは頷くことなく拳を握り締め表情を曇らせていた。

第83話

麗らかな昼下がり、日向でウトウトしている主水の元に、ニヤニヤと締まりのない顔でやって来るラバック。

「旦那起きてくれよ。チャンスだぜ」

「あくあ。いったいなんなんだよ貸本屋」

主水は気だるげに、尚且つ眠りの邪魔をされ、不機嫌にラバックを見る。

「そんな顔しないでくれよ。いい情報がるんだよ。耳かしてもらうぜ。実は――」

「！」

ラバックの耳打ちを聞く毎に主水の瞳が開かれ、生気の満ちたものとなる。

「行くぞ貸本屋!!」

「そうこなくつちや旦那!」

この時ラバックが不適な笑みを浮かべていたことを主水は知らなかった。



「だんだん見えてきたな」

「ああ」

主水とラバックは、気配と足音を消し、五感を研ぎ澄ませ注意深くアジトの裏庭を歩いている。

目指す目的地、いわゆる桃源郷を目指して。

つまりラバックがもたらした情報は、ナイトレイドの女性陣が温泉に入りに行くという情報であった。

ラバックにとって覗きとはライフワークであり、逆にそれを取り締まるべき主水にとってもそれは趣味であった。

以前主水は、主水の家を間借りしている若い女性の入浴を度々覗いていたことがあった。

そういうことから実績があり、その点でラバックとは意気投合し、同志となっていた。

「旦那今日のターゲットは誰なんだよ」

ラバックが嫌らしい笑みを浮かべながら主水に問いかける。

「そうだな……アカメとレオーネ、チエルシーって所か」

「あれスピアちゃんはいいいのかよ?」

ラバックは驚いたように問い掛ける。

スピアは『舞姫』と言われたことを含め、誰が見てもまごうことなき絶世の美女である。

故に、ラバックとしたら一番始めに出る名だと考えていたのだ。

すると、ラバックの問い掛けに主水は話すらそうに口を開いた。

「スピアさんはもちろん見たくはある!だがな、もし見たら……:…:夜にチョウリ様が枕元に現れそうですよ」

「なるほど」

主水の答えにラバックは頷いた。

娘を溺愛していたチョウリ様ならありそうなことである。

「じゃあ他は?」

「簡単なことだ。ナジエンダは貸本屋おめえのもんだろ。マインは……:…:まあなんだ……:」

あからさまに口を濁す主水。

ラバックと「ああ」と気づいたようではあるが、反論すべく口を開いた。

「旦那、小さいのも中々いいもんだぜ。成長の過程を見守れるからな」
「年齢的に成長はねえと思うぞ」

二人が正反対の意見を出した刹那、茂みが揺れた。

「!」

「大丈夫だ旦那。ここは野ウサギが多くてこんなこと日常茶飯事だから」

なぜか焦ったように告げるラバックを怪しくは思うが、この機会は逃せないと流した。

「貸本屋おめえ毎日こんなことしてるのか」

「ああ美少女の裸を見ないほうがおかしいだろ!男として!!」

ラバックは熱弁を振るいながら、晴れ渡るような笑顔で親指を立て

た。

誇らしげに。

「湯気が近くなってきた。無駄話もここまでだ。行くぜ」
「おうー！」

二人ははやる心を抑えながら、さらに細心の注意を払い前進する。目的地は僅かだが、そこで気を抜くと命に係わる。

何度も命懸けで覗きを試みたラバック専用の罠がそこかしこに存在しているからだ。

（あぶねえ！）

主水の鋭い視線が、茂みに隠された細い糸を見つけだす。

糸の先には、大岩が。

確実に殺しにきている。

（嚴重過ぎる警戒だな）

主水は冷や汗を流しながら罠を解除した。

そして、ついにたどり着く。

壁を隔てた先に広がる桃源郷を覗き見るポイントに。

（たしかここだったな）

主水は壁に開けられた穴から覗き見る。

（湯気が濃いな）

何かを規制するかのように広がる邪魔な湯気、そして不自然な逆光。

暗闇と違い慣れることはないので、目を必死に凝らすしかない。

すると、湯気の向こうに雪のように白く、細身の背中が。

（おっ誰か来た！あの背丈からいくとアカメか、チエルシーか）

主水は壁にめり込むほどの勢いで壁の穴にへばりつき、目を凝らす。

直後、主水の願いが通じたかのように、陰が穴に近づいてくる。

鮮明になってきた肌は、シミや傷ひとつない。

丁寧に入入れられていることが伺える。

（あと少しだ！）

湯気が割れ、姿が鮮明になった。

(!!)

主水は目眩に見回れたかのようにぐらつき、即座に目をそらすと、嗚咽をもらす。

主水は地獄を見たのだ。

そう、その陰はナイトレイドの女性陣ではなくご機嫌のタカナであり、真正面からタカナのタカナを見てしまったのだ。

「どういうことだラバック!!」

怒りに任せてラバックに振り返る。

当然である。ラバックの言に偽りがあつたのだから。

美しく瑞々しい実物の裸が間近で見れる。それはもう女神の水浴びだと。桃源郷だと。

しかし、そこに存在したのは、真逆に存在するオカマの行水であつたのだから。

怒りに任せて振り返ったさきには一同に揃った怒りや呆れに彩られたナイトレイドの女性陣とそれに従うようにつくラバックの姿が。

「貸本屋、裏切りやがったな」

「旦那が悪いんだよ!」

二人の間に存在していた熱い絆が崩れていく音が。

「どういうことだ?」

「あれは三日前のことだった」

ラバックは拳を強く握り締め涙を流しながら語り始めた。

◆◆◆

ラバックが帝都での表の仕事の貸本屋を終えてアジトに戻つてくると、あからさまに落ち込んだタツミの姿が。

「どうしたんだそんなに落ち込んで?」

「……………スピアさんにあからさまに拒絶されてるんだ」

「へえ〜珍しい」

普段からことごとく年上女性にもてるタツミがこれまた珍しいと思ふ一方、(ざまあ)と日々もてることと、彼女持ちになったことを愚痴る気持ちから思っていた。

「で、理由は分かっているのかよ?」

「聞いてみたらなんでも主水さんが良くスピアさんに会っていた時に話していたみたいなんだ。『俺の知り合いにタツミってやつがいます。これがとんでもない年上専門のたらしでして。無意識に落とすては弄ぶんですよ』って言っていたみたいなんだ」

「あつてんじやねえか」

日頃の言動を羨ましく思っているラバックは心からそう思い、主水の言を肯定した。

ラバックの正直な肯定に反論しようとしたその時だった。

大人の女性の色香を纏うスピアの姿が。

「おっスピアさんだ。俺は仲良くしてくるぜ。指くわえて見てるんだな。スピアさーろーん」

「ラバックさん、お仕事お疲れ様です……」

「あ、あれ……!?!」

言葉とは裏腹にラバックから間を空けるスピア。

「ス、スピアさん」

「ご、ごめんなさい」

手を伸ばそうとするラバックから逃れるように後退りするスピア。

ラバックの女好きの本性を知る者ならいざ知らず、新入りのスピアはそのことは知らず避けられるはずがない。

「スピアさん、タツミが避けられるのは分かるんだけどなんで俺まで？」

「実は主水様が仰っていたんです。『帝都に住んで貸本屋をしているラバックというやつがいるんですが、これがまたとんでもないスケベなやつで、覗き妄想四六時中、女と見れば見境なしに盛ってるんですよ。行くことはないと思いますが帝都に行った際には気をつけてくださいいね』と……」

「……………」

「ププ」

啞然とするラバックの横で笑いを漏らすタツミ。

室内に秒針が刻む音がしばらく響いた後にラバックは、プルプルと震え出し叫んだ。

「あのオツサン言いたいこと言いやがって、前には一緒に風呂覗いた仲じゃねえか!!」

「ほくくお、どういうことだ?」

「だから、前に一緒にナイトレイドの風呂覗いたんだよ。超絶難易度攻略って友情と絆を育んだのに、そんな風に俺を思っていたなんて………ってえっ!?!」

振り返った先には、指を鳴らすレオーネ、鋼鉄の義手をギシギシと軋ませるナジエンダ、パンプキンを構えるマインが。

直後アジト周辺にラバツクの断末魔が響き渡ったのだった。

◆◆◆

「つてことがあったんだよ。全て旦那のせいで俺はひどい目にあったんだよ!!」

咽び泣くラバツク。

そして、おぞましい殺気をばらまく女性陣。

(ちっこは撤退するか)

「逃がさないよ」

「な…に…」

いつのまにか主水の背中を取っていたチエルシーが主水の腕を掴んでいた。

「いつのまに」

「あの一件から気配を消す技術をあげててね。主水に効くなら仕事でも使えそうね」

笑顔で話すチエルシー。

すると、少し顔を赤らめうつむき。

「言ってくれば………」

と呟いていたが誰も聞き取れてはいなかった。

「では主水制裁を受けてもらおうか」

「ああ、受けてやるよ」

主水は大人しく従った。

心の中で

(エステスの拷問を受けてきた俺に一般的な拷問が効くと思うなよ)

と情けない理由で余裕綽々に構えていた。

しかし、その考えは甘かった。

エスデスの拷問を間近で見っていたナジエンダは、知らず知らずの内にエスデスの拷問技術を得ていたのだ。

そして、主水にとって恐怖の夜が幕を開けた。

◆◆◆◆◆

数日後、主水が帝都への帰還準備をしていると、扉が無造作に開かれタカナが入ってきた。

「いったいどうしたんですかタカナ様」

「ええ、中村さんに渡しておこうと思っていたものがあります」

タカナは持っていたバインダーを主水に手渡す。

「見ても？」

タカナが静かに頷くのを見て主水はバインダーを開く。

「!!」

主水の表情が一変し、食い入るように内容に目を透す。

「これは!!いったいどのよう!?」

「警備隊長の時に少し調べて見たんですよ。中村さんなら役立てるところができるでしょうからお渡ししたんですよ」

「感謝します」

主水が真に感謝する姿を見て、タカナは満足げに笑顔を浮かべた。

「それと、その見返りとは言いませんが、私の代わりにスピアさんと帝都で仕事をしてきてもらいます。ナジエンダには話を通していただきます。スピアさんについては仕事後、ラバックさんと、タツミさんと共に帝都を探ることになりましたのでよろしくお願いしますね」

タカナは言い終わるとさっさと部屋を後にした。

(面倒ごとを押し付けられたか。だが、これの見返りとした安すぎらあ)

主水は一通り目を通すとうつすらと笑みを浮かべた。

まるで悪役のような、しかしそれでいて悲しげなものを含んだ。

第84話

「そろそろ行くか」

主水は太刀と脇差しとアレスターを帯にさし、黒い同心羽織りに袖を通す。

準備を整えた主水が部屋を後にしようとして扉に手を掛けると、不意に扉がノックされる。

またタカナ様か？と思いつながら扉を開けるとそこにはチエルシーが立っていた。

「どうしたんだ？」

なぜチエルシーが来たのか分からない主水は問いかける。

「うん、主水が今日帝都に帰るって聞いたから顔を見たくて」

僅かに顔を赤くして微笑みながら答えるチエルシー。

なにか思う所があるようだが、主水はそこら辺の乙女心には疎いため、普通に返す。

「ああ、予想通り左京亮は俺のことをばらさなかつたんでな、無事にイエーガーズで働けるってわけだ」

「そうか……」

微笑みから一転して僅かに表情が曇り、心配そうな顔をする。

「もう大丈夫なの」

「ああ、大丈夫だ。まああの怪我也俺の腕の未熟さが招いた結果だ。おめえが責任に思う必要はねえよ。おめえはいつもの不適な笑顔を浮かべていればいいんだよ」

チエルシーは自分が失敗したことから、主水が無理をして自分を助けに入りそして、イゾウと左京亮の部下と死闘を演じ大怪我を負ったと責任を感じていた。

それを察した主水がフォローするように答えたのだ。

「ありがと……」

「泣くなよおめえらしくない。おめえは笑顔があつてるぜ。じゃあな」

主水はチエルシーの肩に手を置いて通り過ぎた。

「待つて主水」

去つていく主水にチエルシーは待つたを掛ける。
意を決したように。

「なんだ？」

主水は足を止め振り返る。

チエルシーは何かを口にしようとはするが、躊躇するようにモジモジしており、今までの飄々として大人びた感じはしない。年相応な姿はチエルシーの素の姿なのかもしれない。

「あ、あのね……気をつけてね」

「おう。おめえも帝具はもうねえんだ。無理はするなよ」

チエルシーは言いたかった本心は言えなかった。

言つたらそれが主水の足枷になつてしまうのではと機具したのだ。

主水は背を向けて手を上げると去つていった。

チエルシーは主水の背中が見えなくなつても物憂げな瞳で胸に手を当てて、主水の去つていった先を見ていた。

◆◆◆◆◆

主水が庭先に出ると、見送りに来てくれたナイトレイドの面々と、背中に自分の背丈以上の大きさの帝具へアダユスを背負い、仕事着の黒い喪服のような着物を着たスピアの姿と、地に降り立っている特級危険種エアマンタの姿が。

「旦那気をつけてなもう怪我すんなよ。あとあの約束も守れよな」

「分かつてらあ」

レオーネは満面の笑顔で見送り、

「気をつけてねスピア」

「はい。行つてきます」

アカメに声をかけられ笑顔で返すスピア。

「もう準備は良いのですか？」

「ええ準備万端です」

スピアは主水の答えに頷くとエアマンタに飛び乗った。

主水も続いて飛び乗るのをスピアは確認すると、

「お願いしますマンタさん」

と軽くエアマンタの頭を撫でると、エアマンタは今まで見たことがないほどの勢いで大空に飛び立った。

「スピアさん申し訳ないのですが、今回の仕事内容を教えてくださいませんか。タカナ様はなにも教えてくれなかったのです」

「師匠らしいですね」

スピアはタカナを思い返して、思い当たることがあったように困ったように苦笑いを浮かべた。

それを見た主水はスピアも大変な目にあっているんだなと同情を禁じ得なかった。

「ではご説明します。今回のターゲットは医者の方ヨウと、アヘンの売人バイヤーの二人です」

「フヨウ!!」

主水は『フヨウ』という名を聞いた途端に反応した。

そして瞬時に、タカナが今回自分を指名した訳を即座に理解し、不適に微笑んだ。

(探す手間がはぶけたぜ)

「どうかなさったのですか?」

急に大きい声をあげた主水に問いかけるスピア。

「いえ、続けてください」

「では」

スピアは主水に促されたので、聞き返すことなく話を再開する。

「フヨウはアヘンを精製するだけでなく、人の命をお金のあるなしで判断する外道です。お金のあるものには手厚く、無いものは見捨てるといった具合に。バイヤーは、フヨウの作ったアヘンを売りさばく売人です。またそれだけでなく、金で雇った傭兵崩れの男にフヨウの敵になったものなどを殺させたことも何度もあるようです」

「ありがとうございます。あと今回の的のフヨウですが、少し用があるので任せて頂けませんか」

主水は真剣な表情でスピアに告げるので、スピアも先程のことと関係があることを察して、快く了承した。

「この調子であればあと一時間ほどでつくと思われれます」

スピアは主水にそう告げると日が傾き始めた空を見上げた。



「ありがとうございます」

帝都から離れた荒野にエアマンタは降り立っていたおり、スピアがエアマンタの頭を撫で感謝を述べると、嬉しそうにエアマンタは戻っていった。

辺りは斜陽によりオレンジ色に染められ、頃合いで言えば、魔が蠢く時間『逢魔時』であった。

つまり、闇で仕事をなす仕事人にとっても調度よい頃合いであった。

「では参りましょうか」

「スピアさん帝都に行っても大丈夫なのですか？」

歩き出そうとするスピアに主水は問いかけた。

スピアは今では帝都で指名手配される身であり、また帝都は悲しい思い出のつまった地である。

故に主水は聞かずにはいられなかった。

「大丈夫です。『舞姫』として名は知られていますが、顔は見られていませんし、それに帝都を出た時よりも髪が伸びていて容姿も変わっているのでまじまじと見られなければ分かりませんから」

スピアが銀色に輝く髪を撫でると、さらさらと風に靡き、オレンジ色の日を受けキラキラと輝いた。

「それに、皆を苦しめる悪は放つてはおけません！」

光りを溢しながら髪を靡かせ振り返ったスピアは、強い決意を感じさせるだけでなく、斜陽に照らされ美貌がさらに引き立てられていた。

それも、主水も魅了され動きを止めるほどに。

（もったいねえ。これだけの美貌を持つてりやあチヨウリ様が望んだ幸せな将来も送れたらうに）

主水は今は亡きチヨウリの面影を思いだし残念に思っていた。



「私達には好都合ですが、無用心ですね」

帝都の前門に二人がたどり着いたのは夜の帳が落ち、辺りが薄暗くなつた時だった。

そして、スピアが呟いたのは、警備が配置されていると予想していた前門に、警備の兵が誰もいないことに対しての呟きであった。

「まあ、私が勤めていた警備隊ですから」

「それは……」

主水のとてもしやない自虐的な冗談に言葉を詰まらせるスピアを見て、しくつたなど思った主水は、

「行きましようか」

と一言告げいち早く警備がない前門をくぐり抜け、帝都に足を踏み入れた。

さすがに、帝都と言うだけあり、帝都内は明かりで満たされており、人目につきやすい状況であったので、主水とスピアは、人目を避けることができ、街頭がない裏通りを通り目的地に向かった。

賑やかな帝都であっても、スラム街のような裏通りはある。

この稼業に入りそれを痛切に知ったスピアは、うつむいて廃れたスラム街を歩いていった。

「ここか」

二人は目的地につくと、嚴重に固められた屋敷の門に視線を送る。

まるで、病院とは思えない屋敷である。

「警備固いので、裏に回りましようか」

「……………」

「どうしました主水さん」

急に黙り、目頭を押さえた主水に焦り問いかけるスピア。

自分がおかしなことを言ってしまったのかと。

だが、実際は逆であった。

主水は感動していたのだ。

今まで主水は度々ナイトレイドのメンバーと仕事をしてきた。

しかし、それは暗殺とは程遠く、どんなに警備が固かろうが、人目につきやすい所だろうが、構わず特攻するというもので、主水も最初こそは反論していたが、今では諦めていた。

そこへ、自分が間違っていないなかつたことをスピアが示してくれたのだ。

故に、主水は感動したのだ。

「ありがとうございます。スピアさん。裏に回りましょう」

「は、はい」

なぜお礼をと疑問に思いながらも、スピアは主水に続いて裏に回った。

裏には、表と違い警備は一人しかいず、さらにはその一人の男は以前主水が警備隊の時にしよつぴいた事があつた男であつたので、主水が行くことになった。

「誰だ………、って旦那ですかい」

「久しぶりだな。おめえはこんな所でなにやってんだ」

「いえ、なにも」

伏せていた顔を見上げると、男は隠していた後ろ手にドスを抜き、主水に襲いかかるはずだつた。

しかし、顔をあげた先には主水はいない。

「まだこんなことしてやがって………次は閻魔の所に行くんだな」

男の胸から刀が突きだし、血液を散らしたのち、男は崩れ落ちた。

「すげえ」

スピアはその主水の無駄のない仕事に感動さえも覚えていた。

そして自分との差をまざまざと感じさせられていた。

◆◆◆

薄暗く薬品の臭いの漂う一室で、ベッドに縛り付けられ、虚ろな瞳で涎をたらしながらグツタリと衰弱した男を、まるで物でも見るかのように見下ろす白衣の男フヨウと、黒服を着たアヘン売人のバイヤーが密談していた。

「どうだ私が精製したアヘンは」

「さすがです。精神錯乱と衰弱に至るまでの時間が長くなりながら、中毒性は強くなっている」

「当然だ。これで死ぬまで金を搾り取れるようになる」

フヨウはしたり顔で口許を吊り上げながら話すとバイヤーから大金

の入った袋を受けとる。

「それだけじゃなくこんな献体も手には入るとは」

「ああ、貧乏人ならば、『お前の病は私にしか直せない』と少し脅せばすぐに言いなりになる。そして独身であれば、そのまま簡単に処分もできる」

自慢げにフヨウが話していると、

「先生、見てほしいという患者が来ているのですが」

戸を隔ててフヨウに尋ねる声が。

「金持ちなら通せ。貧乏人なら追い返せ」

「それはねえんじゃねえか」

フヨウの答えに今までの男と違う声色で答えが来ると、血にまみれた男が戸をぶち破つて部屋に倒れこんだ。

「なにもんだ!」

バイヤーが怒号を飛ばす。

このような場によって来るのは商売敵ぐらいしかいないと思いがらも。

「貴方方の悪事は聞かせてもらいました。地獄に赴いてもらいます」

冷えきった声が室内に響き、フヨウとバイヤーの前にスピアが姿を現した。

「女……………そうか。今帝都で噂が流れている『舞姫』とか言う名の。おもしれえお前ら出てこい」

バイヤーの声に反応するように扉が開かれ、多くの傭兵崩れの男たちが入ってくる。

「お前らこいつをやっちなまえ。俺の知り合いも何人かこいつに殺されてるんでな」

「おうよ」

男たちが各々の武器を取り出すのを見て、スピアも帝具アダダスを抜き、右足を引き、体を斜めに向け、アダダスを右脇に取り、刃を下に向け後方においた構えを取る。

（脇構えか。刃を後ろにし見えなくすることによって間合いやりーちを悟らせない構え。ただ太刀であれば長さはほぼ決まっているため

に、あまり利がない構えだが、武器が間合いやリーチが分からねえアダユスならばこれほど利にかなった構えはねえ)

主水は感心したように軽く微笑んだ。

「どうした、早くやれ!!」

(分かってねえな)

傭兵たちはスピアの思惑通り、脇構えによつて間合いが測れず動けないでいた。

その意図に気づかず痺れをきらしたバイヤーが声をあける。

バイヤーの声がとび男たちが覚悟を決め一斉にスピアに襲いかかる。

だが、スピアはそれより先に、先手を取るように、長い袖を翻す。闇を体現するような黒い袖は、男たちの視界を遮り、一瞬男たちの動きを止める。

そして、袖が払われると、男たちの首にはアダユスの刃が添えられていた。

「ご自身のなさったことを閻魔様の前で懺悔してください」

男たちの背後からスピアの声が響きわたる。

刹那、スピアは容赦なくアダユスを自分の元に引く。

アダユスの刃は無慈悲に男たちの首を、命を刈り取った。

「ひいひいーゆ、許してくれ。か、金ならやる」

スピアの背後で、落ちていく傭兵たちの首を見て腰を抜かしたバイヤーが、今までの威勢のよさはかき消え、命乞いをする。

「往生際が悪いですよ。観念してください」

スピアは容赦なく命乞いを聞き流すと、

引き戻したアダユスで前方を薙いだ。

バイヤーの首が宙を舞い、それだけでなく、バイヤーの背後の全てが風ぎ払われた。

振り返ったスピアの背後で、バイヤーの鮮血が桜の花びらのようにおどましくも幻想的に舞い散り、風がれた壁がガラガラと音をたてて瓦解する。

その美しくまるで演劇の終わりのように見える光景が、『舞姫』とい

う呼び名を体現していた。

その裏で主水もフヨウさらつと取り押さえていた。

「スピアさん。こいつには幾つか聞きたいことがありますので頂いていきますね。しっかりと始末しますので、ナジエンダにはうまく言っ
といてくださいね」

主水がそうスピアに告げると、クスツと笑って笑顔で

「分かりました。うまく言っておきます」

と答えた。

先程まで冷酷に殺しをしていたとは思えない変わりように、殺し屋
がいたについてるなとしみじみ思う主水であった。

「では、私は革命軍本部からの指令にあった、帝都の探索に備えてラ
バックさんとタツミさんと合流しますのです」

スピアは主水に丁寧にお辞儀をすると、夜の闇に消えていった。

「さあ、こいつを叩き起こして尋問するか」

主水は薄暗い室内で黒い笑みを浮かべた。

第85話

「へえ、今日来るのか」

喜色の声をあげたシユラは口許を三日月のように吊り上げた。

それまでのシユラは、イゾウが殺され、チエルシーに逃げられと、大きな自分の責任となる案件に頭を悩ませていたが、それがまるで嘘のようにテンションをあげていた。

「はい。革命軍からの指令が届いた日から考えて間違いないでしょう」

彦三頭巾という亡者を表す頭巾、つまり

黒づくめの頭巾で頭と顔を覆い、瞳だけが露出した状態の人物が淡々と答える。

異様な見た目故に、無感情の声がより不気味さを引き立てる。

「以前のチョウリの時といい役にたつてくれるぜ」

シユラはチョウリの一件を思い出す。

チョウリが奥の手の証言者を手にいれたことをオネスト大臣及びシユラに伝えたことと、その証言者を見つけ出しシユラに引き渡したのは目の前にいるその人物だった。

チョウリは有能であり、革命軍に加入させる訳にはいかないと、日頃からマークしていた為にできたこと。

しかしながら、その人物も自分の主と共に革命軍に間者として属しているため、革命軍の為と偽りながらチョウリをマークしていたのだが。

「だがよ、今回はこんな回りくどい仕方じゃなくてよ。直にナイトレイドのアジトを教えりゃあいいのによ」

「さすがにナイトレイドのアジトまでは重要機密事項であり、深くまで入り込んでいる我が主でも分からないようですよ」

「チツつかえねえな」

シユラは先程とは裏腹に舌打ちをし不満を露にした刹那、その人物は懐から懐剣のような小型の刃を抜きシユラの喉に突き付ける。

「我々はオネスト大臣の間者であり、あなたの駒ではないのですよ」

「わ、分かった、分かったから、離れる！」

依然として変わらぬ声色には怒りの色は表れているとは感じられないが、凍てつくような殺気が込められており、また、直に伝わる冷たい刃の感触が恐怖を引き立てた。シユラはその殺気と死を実感させられる感触に恐怖し、怖じ気づいた。

そんなシユラを見てその人物もシユラから離れ、懐から何枚かの紙を取り出す。

「現時点でのナイトレイドのメンバー七人の詳細です」

「ナジエンダ、アカメ、レオーネ、マイン、ラバック、タツミ、チエルシーか……こいつは逃げやがったアマか。他は大体面が割れてるな。だが新たに分かったやつもいる」

シユラは六枚の資料に目を通すと一度舌舐めずりをする。

まるで美味しそうな料理を目の前にしたように。

「どいつも旨そうだ。捕まえたら味見しないと」

テンションと共に沸き立つシユラJr、しかしそれを意にも介さずその人物は踵を返し、

「では革命軍に戻りますので」

とシユラに告げシユラの自室を後にした。

「おっし狩りに行くか！」

シユラは意気揚々と自室を後にした。

◆◆◆

「ラバックさんとタツミさん。似合ってますよ。可愛いです」

「そ、そうかな」

「俺も自信あったんすよ」

帝都を探索する指令を受けたラバック、タツミ、スピアが帝都の仮のアジトの貸本屋に集まっていた。

そして、ラバックとタツミは、筒がなく探索を進めるために女装して姿を変えていた。

それを見てスピアは似合っていると賞賛し、タツミは照れ、ラバックは気取ってポーズを取っている所であった。

「そんなことよりスピアさんも白いワンピース似合っていて可愛いで

すよ」

「そ、そんな……」

タツミのスキル年上キラーが通常通り発動し、スピアにクリティカルヒットする。

タツミへの警戒心をスピアも持っていたはずだが、その防御すら容易く貫通した。

頬を染めたスピアがモジモジしながら視線を落とす。

その側では、

「タツミ、テメー彼女いながらスピアさんまで落とすきかよ!!」

血涙を流しながらタツミの胸ぐらをつかんで文句を言うラバツク。

「ま、まて、まて。俺はそんなつもりはない」

「うるせえ！何でいつもお前ばっかり!!」

止め役がいなかったため、そのような不毛な争いがしばらく続いた。

—————

「つてことで、帝都の探索が終わったらこの地に集合だ」

ラバツクは一枚の地図を開き帝都近郊の山を指した。

その地点は険しく、また危険種が出たり、盗賊が潜んでいたりと、警備隊すら恐れて近寄らない場所なので、まず人が来ることはない。

故に、情報の交換が出来る場所としてそこを選んだのだ。

「分かった」

「分かりました」

「おっしじゃあ行くぜ!!」

二人が了承するのを見てラバツクが締めた「……」はずだった。

「ラバツクさん。今は女の子なのですから言葉遣いには気をつけてくださいね」

花開くような可憐な笑みで言われたラバツクは、しばし言葉を失う。

「……いい……」

「どうしたんだよラバ」

呆けたように佇み何か小さく呟くラバツクに声をかけるタツミ。

誰が見ても危ない状態に見える。

「いったいどうしたんだよ!!」

タツミも心配になりラバックを揺り動かす。

「いやな、レオーネ姐さんに鉄拳制裁食らうのもなかなかいいんだが、やっぱり美しいお姉さんのスピアさんに優しく叱られるのは格別なんだよ」

「はいはい」

タツミは一つ深いため息を吐くとラバックをその場に置いて、スピアと共に探索に向かった。

ラバックに変な性癖が生まれた瞬間だった。

◆◆◆

「世界は俺を中心にして回ってやがるぜ」

シユラは建物の屋根の上からある人物と、資料を見比べてほくそえんだ。

なにもかもが自分の思い通りになるなど。

「俺の目には女装なんて関係ねえぞ。それより実物はよりいいぜ。大人になりきっていない青臭さ漂うあの風貌。そしてなにより生意気そうな面なのも調教しがいがありそうでいい。早く俺自身の帝具でヒイヒイ言わしてやりたいぜ」

(あれ、依然兄貴から感じたのと同じ感じが)

シユラの野獣のような視線を受け、タツミは身震いをして辺りをキョロキョロと見回した。

そしてこの事態は他の所にも波及していた。

—————

「隊長どうなされました」

突拍子もなく不機嫌さが顔に表れたエスデスにランが問い掛ける。

久々の帝都への帰還と、イエーガーズのメンバーとの久しぶりの再会に際して何か問題があるのかと危惧してのことだ。

「分からんがとてつもなく不愉快な感じがした。私の大事な物に手を出されそうだな。まあ私の大事な物に手を出したら、拷問『無間地獄』コースを数万回死ぬ直前の状態で心底味わわせてやるがな」

(隊長の大切な物に手を出す命知らずな者などいないと思いますが)

どす黒い殺気を撒き散らすエスデスに、冷や汗をながしながら、ぎこちない笑みを無理矢理に浮かべてランは心の中で呟いた。

エスデスの直感が現実になりかかってはいたが。

「……………」

「なんだか分からんがブルツときたぜ……武者震いってやつか。楽しくなってきたぜ。だが、まだだ。やつの話ではあと一人いるはずだ……揃った所を人気のねえ所で狩りに出る！」

シユラは屋根を飛び移り距離をおき、タツミを尾行した。

◆◆◆

タツミはその後も帝都での聞き込みや探索を行い、何らかの収穫を得たのか、帝都郊外の集合場所にやって来ていた。

(自ら人気のねえ所に来やがったぜ)

全てが自分の思い通りに進んでいることに、シユラの口許が緩みっぱなしになっていた。

しかしながら、シユラは以前己の慢心故にセリユーに負けたと後悔していたため、その時に学んだことから、極力慢心することを抑えていた。

性格上完璧にとはいかないが。

「タツミもう戻ってたか」

離れた所で気配を消し様子を伺っていると、タツミと合流する一人の青年の姿が。

(やつは……ラバツクか。これでメンツが揃いやがったな。行くぜ！)

シユラは全力でタツミとラバツクに肉薄するが、タツミとラバツクは突然の襲撃に反応が遅れる。

「お前たちが行きたかった宮殿内に招待してやるぜ！シャンバラ!!」

シユラの帝具シャンバラが輝き、陰陽五行図が浮かびあがり、タツミとラバツクが飲み込まれ姿を消した。

「やったぜー！今頃俺の配置しておいたやつらが捕まえているはずだ！これでオヤジも認めてくれるはずだ！そしてさの後には、捕虜にしたやつらと……今日は徹夜で楽しめそうだな」

シユラは上手くいった、そして今朝の失態も帳消しになったと高笑いを響かせた。

そして思い描くはタツミとの拷問交じりの禁断の世界。

しかし、そんな妄想を打ち破るように声が聞こえた。

「あなたは……………!!」

「あつ？」

シユラが薔薇色の妄想を中断させられたことに苛立ちを感じながらも、声がした方に振り返る。

こんな場所に来るやつがまだいたのかと。

「シユラ!!」

「あん。誰かと思やチョウウリの娘じゃねえか。まだ帝都に居たのかよ」

タツミとラバックと合流するために集合の場に帰ってきたスピア。

しかし、その場にいたのは、二人ではなく予想外の人物シユラだった。

スピアの顔が怒りに染まる。

今まで何度夢に見たことか、父の敵として討つことを。

その自分の父チョウウリの仇のシユラが現実に目の前に現れたのだ。当然のことである。

しかし、シユラは意にも介さずヘラヘラと嘲るような笑みを浮かべる。

「私は父の敵を討つ為にナイトレイドに加入したのよ!!」

スピアは吹き荒れるほどの殺気をみなぎらせながら背中に背負っていたワンピースとは不釣り合いな布に包まれた帝具へアダユスゝを抜き開放し、以前見せた脇構えをとる。

「やつの資料にはなかった情報じゃねえか」

おいおいといった感じでシユラは、頭を掻きながら一つため息を吐く。

しかし、次の瞬間表情を一転して嬉々としたものとする。

「いいぜ。来いよ！俺は前にお前を見た時からやりてえと思っていたんだ！宮殿でのメインディッシュの前に味わわせてもらおうぜ!!」

ペロリと舌舐めずりをすると、シユラも以前の失敗を繰り返さない
ためにも油断なく構えをとった。
スピアにとっての敵討ちが幕を開ける。

第86話

「おはようございまして」

「重役出勤とは出世したものだな中村！」

「!!」

いつも通りの飄々とした態度で普通に遅刻した主水は凍り付いた。なぜか、それは

「エスデス隊長帰られたのですか!!」

最近までキョロクにおり帝都に不在であったはずのエスデスがイエーガーズの詰め所で圧倒的な存在感を示し、そこに鎮座していたのだ。

鬼の居ぬ間になんとやらはもう出来なくなっていた。

ウェイブは「やってしまいましたね」というような気まずそうな表情で。

ランは「死なないでくださいね」といった憐れそうな苦笑いで。

クロメは「あくあ」と呆れた表情で。

セリユーは「大丈夫かな、心配だな」とハラハラした表情と、四者四様というべきか、静まり帰っていた。

「中村！久しぶりに楽しもうか」

「べ、弁解を！」

不敵な笑みを浮かべ腕捲りをするエスデスと、あたふたしながらも生き残りをかけた謝罪に持ち込もうとする主水。

やっと癒えた傷がまた、いやそれ以上に酷いことになるのは、冷笑を浮かべる目の前のエスデスを見れば自明の理であるのはあきらかであるからだ。

「聞く耳もたん！朝からなぜか分からんがイライラしててな、楽しめたかった所だ！」

「せ、生理ですか？」

（やっちゃったよこの人!!）

四人が驚愕しながら主水を見る。

もう生きて会うことはできないのではと皆が同じことを考えてい

た。

「……………ラン。今拷問室は空いているか…」

「はい…第一拷問室ならば…」

「行くぞ中村…」

影で瞳が見えなくなったエスデスに襟首を捕まれ主水は、ズルズルと引き摺られて地獄の一丁目に連れて行かれた。

◆◆◆

エスデスと屍と化した主水が拷問室から帰ってきたのは約一時間後であった。

「久しぶりのなかなか充実した時間だった。やはり中村は違うな」

エスデスはどこかツヤツヤとした健康的な表情になっていた。

拷問室でどのようなことがあったのかは屍のようになった主水を見て四人が想像することすらおぞましいと思っていた。

「帰ってきて早々だが、中村お前はこれから出張してもらう」

「……………私ですか」

ボロボロになった体をセリユーに支えられながら起こし聞き返す。

今までイエーガーズで出張が仰せ付けられたことなどなかったからだ。

「ああ、お前を…指名でな。内容はお前に直接伝えるそうだ。すでに依頼人は宮殿の前にいるらしい。行ってこい」

「分かりました」

何度もエスデスから拷問を受けいささか耐性がついてきたのか、ゆっくりと立ち上がると、ヨロヨロと詰め所を後にした。

「エスデス隊長よろしいので」

「やつなら大丈夫だろう」

エスデスに耳打ちするランとそれに小さく答えるエスデスの姿があった。

—————

主水が宮殿を出ると、まるで素顔を隠すように黒いローブを目深に被った男が身動き一つせず佇んでいる。

衛兵も怪しんでいるようだが触れようとしないことから、この

男が依頼人ではないかと主水は思い、しゅしゅ話し掛けた。

「おめえが俺を指名した依頼人か？」

「……………」

男は無言で頷く。

明らかに怪しいが今ここで帰ったらエスデスに何をされるかわからないため、大きなため息を吐くと。

「ついて来い……………」

男は一言呟くように言葉を溢すとトボトボと歩き出した。

主水も疲れた表情で後を追った。

◆◆◆

一般人が立ち入ることのない、険しい山の中で、殺気に満ちた瞳で睨みつけるスピアと、ヘラヘラしながらも油断なく構えをとるシユラが一触即発の状態で相対していた。

「来いよ、どうした。ビビったか？」

「……………」

来させようと挑発するシユラだが、スピアは挑発には乗らず脇構えを崩さない。

「チツ」

シユラは小さく舌打ちをする。

スピアの脇構えによりスピアの間合いとリーチが測れないために、攻めることが出来なくなっていた。

以前の慢心していたシユラならば、間合いもリーチも分からずとも「俺が負けるはずがねえー」と猪突猛進に突っ込んでいただろう。

しかし、今のシユラは違う。

ちよつとしたミスが命に関わると言うことを学んでいたのだ。

そんな最中シユラは閃いた。

「てめえのオヤジもバカだったよな。自分から死を選ぶなんてよ。ハッ分かったぜ、チョウリは一線を越えたMだったんだな」

「黙れ!!」

スピアは地面を蹴って走り出した。

自分をバカにされるのは耐えることが出来たが、敬愛する父をバカ

にされるのは我慢ならなかったのだ。

つまりスピアはシユラの思惑に乗ってしまったのだ。

スピアは待ちの構えの脇構えを解きシユラを風ぎ払うように一閃した。

スピアのアダユスによる一閃は轟音を挙げて、前方の木々を風ぎ払った。

しかし、その木々の中にはシユラは含まれていなかった。

シユラは瞬時に身を屈めアダユスが頭上を通り過ぎると同時に立ち上がり、スピアに肉薄していた。

「!!」

「どうだ嬢ちゃん。大きい得物なら、懐に入られたら終わりだよな」

シユラは愉快げにスピアに囁くと、拳を振り上げ、連打した。

「オラオラオラオラ」

「うっ」

首をはねたと思っていた所で、逆に懐に入られ、とつさなことに対処出来ないスピアはシユラの連打を浴び、吹き飛ばされ地面を転がりながら、立ち並ぶ木々に叩きつけられた。

「おいおいもう終わりか?」

ヘラヘラとするシユラだが、セリユー戦から確実に腕をあげていた。

事実、天才的な才を持つシユラが、セリユーに負けたことを根に持ち慢心を捨て鍛練に勤しんだのだ。

「私は……………父の敵を討つまでは……………死ねない!!」

スピアはよろけながらも立ち上がると、再び地を蹴った。

「そこらへんにしとけよ。お前の体はあまり傷つけないんだよ」

辟易とした感じで溢すシユラの鼻先にアダユスの刃が迫る。

「おおっと」

振り下ろされたアダユスをシユラは横にステップを踏みかわす。

アダユスは地面に突き刺さると、刺さった所を起点にして地面が弾けとんだ。

「とんでもない威力だな。だが当たらなければ意味ねえよ」

「うるさい!!」

スピアは刃を返し切り上げた。

「そんな大振りじゃ俺は捕らえられねえよ」

再び身を屈めアダダスをかわすと、そのままスピアの足を払った。

「キヤ」

「かわいい声で鳴きやがるぜ」

足を払われ態勢を崩したスピアの腹部に掌底を撃ち込む。

撃ち込まれ、吐血するスピアは掌底を撃ち込まれた場所を起点にして、体をくの字に曲げられ、一瞬の後に二人を中心にし、円上に衝撃が辺りに吹き荒れ吹き飛んだ。

シユラが東方で学んだ発勁と呼ばれる『気』を使った技である。

スピアは何度も地面をバウンドし地面に横たわるとそのまま伏せたまま動かなくなった。

「やっと動かなくなったか。喘ぎ声を聞けねえのは残念だが、初物ならキツくていいだろう」

吹き飛んだ先で倒れピクリとも動かないスピアに舌舐めずりをしながら歩みよるシユラ。

(体が動かない。私は父の敵も討てずに辱しめられて死ぬの……)

意識が途切れ途切れのスピアの頬に一筋の涙が伝う。

あの辛かった修行の日々はなんだったのか。

辛く厳しかったタカナとの修行の日々が頭を過る。

走馬灯のように流れる光景の最後に父チヨウリの微笑んだ顔が浮かんだ。

そして、チヨウリの顔が心配げな表情に変わる。

(父さんにこれ以上心配をかけるわけにはいかない)

体力はもうない、しかし強靱な精神力がスピアに力を与えた。

「マジかよ」

もう動かないと判断を下していたスピアが、ゆっくりと立ち上がる。

驚愕の光景にシユラは茫然と動けなくなっていた。

満身創痍ながらもスピアの瞳には光が灯り、死んではいなかった。

「あなたを倒すまでは死ねない！アダユスの奥の手発動!!」
アダユスが赤黒いおぞましい光を放ち、地獄の底から響く亡者の悲鳴のような音が辺りに轟きはじめた。

第87話

中天に差し掛かった日が、真上から麗らかな陽光を降らせる時間帯にも関わらず、スピアの構えたまるで死神の鎌のような帝具へアダユスから赤黒い光が這い出て、辺りを侵食し、形容しがたいが

血のような夕日と夜の帳が交じりあい織り成される光景がそこに現れていた。

ただ、そこには哀愁や郷愁、焦燥的な感覚ではなく、ただただ心の底からじわりじわりと湧いてくる恐怖感のみが支配していた。

また、恐怖感を煽るのはそれだけではない。

耳を塞いでも聞こえてくる亡者の怨嗟や憎悪をつげる、悲痛な叫びや悲鳴。

それが、赤黒い光がアダユスから染み出ると同時に辺りに響き渡ったのだ。

まるで目の前に地獄が顕現したのではと錯覚するほどの光景である。

「なんだよ……これ!？」

底知れぬ恐怖からすでに戦意を喪失し立ち尽くしているシユラが呟いた。

シユラの本能はここには危険だと警鐘をならし続けるが、体は動かないばかりではなく、体は止めどなく震え、冷や汗が止まらない。

目の前のスピアが、性的な欲求を満たすためのものから、ただただ未知の恐怖の対象となりさがっていた。

「アダユスの奥の手です。あなたの命はもう私の掌中にあります」

口の端から血液が溢れるが、スピアは気にする素振りもなく、微笑を浮かべる。

それは、普段ならば感じられる美しさは欠片もなく、凍えるほどの恐ろしさを感じさせるものであった。

「アダユスの奥の手へみんなのうらみは、対象者に怨みつらみを持ち死んでいった者たちをこの世に呼び戻すものになります。つまり、人々からの怨みが多ければ多いほどその効力は苛烈なものとなりま

スピアは場違いな笑顔で答える。

心なしか出血が増したその笑顔には、計り知れない狂気が内在している。

「やはり、父さんはいませんか……………」

一瞬の寂しげな表情を浮かべはしたが、すぐに先程と同じ笑顔に戻る。

スピアとしては、亡者と成り果てようと、生前の面影がなかりうと、チヨウリに会えたらと願っていた。

そこにはクロメに通じる所がある。

しかし、チヨウリは全てを主水に託し潔く散ったために、地獄に落ちることなく、天に召された。故に亡者の群れの中にはいなかったのだ。

「そろそろ体がきつくなってきましたので、私の手であなたを冥土に送って差し上げます」

変わらぬ笑顔ではあるが、血の気がひき青ざめた表情のスピアはアダスを掲げ、シユラに歩みよる。

「ああ……………ああ……………あうげが……………がげへら……………」

腕を口に突っ込まれたり、髪を引きちぎられたり、男の象徴を引きちぎろうとする者、首を絞める者、痛みや恐怖が限界を超えたシユラは、涎や涙、鼻水、顔から出る液体全てを流し、失禁しながら既に精神は崩壊し、狂い、廃人とかしていた。

「さあ、地獄に堕ちてください!!」

スピアはアダスを大きく振りかぶり、シユラに振り下ろした

「すいませんね。貴女もシユラも死なせる訳にはいきませんので」

突如姿を現したタカナがスピアに手刀を打ち込む。

スピアは気を失い崩れ落ちるのをタカナは抱き止めた。

スピアの掲げていたアダスは、スピアの手から放されており、す

でに奥の手の発動が止まり、シユラを埋め尽くすほどの亡者は消え、地獄のような様相の辺りの雰囲気も、昼下がりの麗らかなものへと戻っていた。

「私が今回の裏で蠢く思惑にもう少し早く気づいていれば、貴女をこのような目に合わせることもなく、本懐を遂げさせてあげられたのですが。本当に申し訳ありません」

タカナは苦々しい表情を浮かべる。

その表情には、深い後悔の色がありありと浮かんでいた。

自分でも分かっていた革命軍に潜む獅子心中の虫の存在。

それが今回の革命軍からの指令に絡んでいたことも少し考えれば分かることであつたと。

「こんなクズでも今は大事なカードになりますからね。タツミさんとラバックさんの交換条件に見合うほどの重要な切り札に」

精神、人格ともに破壊され、廃人と化し笑い続けるシユラを苦虫を噛み潰すような表情で視線を送り、ぽつりと呟いた。

どんなにゴミのようになっても大臣の息子というのは大きなカードになる。

「今回の事からももう放っておくわけにはいかなくなりましたね……」

タカナは決意を固めたように大空を見やると、舞い降りてくるエアマンタの姿が舞い降りてきた。

「タカナ、タツミとラバックが捕らえられたというのは本当か」

「ええ、先程この帝都に潜伏している革命軍のメンバーから情報がありました」

「なんとということだ」

エアマンタから舞い降りたナジエンダは拳を地面に叩きつけた。

想像外の悪い自体にクールなナジエンダが、冷静さを欠いていた。

「二人を助け出すためのカードがここにありますが、万が一のことがあれば、中村さんと連絡を取ればなんとかかります」

タカナはナジエンダを落ち着けるように諭し始めた。

「ああそうだな……では、一度アジトに戻って作戦をたてることとし

よう」

ナジエンダは壊れたシユラをエアマンタの背に投げのせ、タカナはスピアを抱え、アダユスに手を伸ばす。

しかし、その場でタカナはフリーズしたように動かなくなった。

「何をしている。早くしろタカナ」

「ナジエンダ手を貸してください。アダユスが重すぎて持ち上がらないんです」

「はあ、まったくモヤシなのはかわらんな」

タカナの軟弱さを嘆くように軽くため息を吐くと、アダユスに近寄り手を伸ばす。

「なっ！たしかに重いな。主水が持ち込んだ時にはそうは感じなかったが。よくこんなものを片手で振り回せるな」

「人の魂を吸って重くなったのかもしれないね」

驚くナジエンダの側でタカナはポツリと呟いた。

それだけ、スピアがアダユスを使い、多くの悪の命を葬ってきたということを、タカナの言葉は端的に表していた。

「ああ、そうかもしれないな」

ナジエンダは両手でアダユスを抱え、タカナはフラフラと危うげな足取りでエアマンタにやっこの思いで乗り込んだ。

◆◆◆

「こねえな」

宮殿の中庭でキセルをふかし、手近な岩に腰を下ろしている左京亮が呟いた。

朝、これからのことをシユラの元で話終わりすぐにシユラが「いい情報が入った。俺がナイトレイドを中庭に放り込むからお前は中庭で待機して、転送されたら回収しておいてくれ」と頼まれたために、中庭でキセルをふかしていた。

「まだ来んのか？」

「ああ、シユラは何を手間取っているんだろうな。ドロテアお前はどうなんだ」

左京亮は振り返ることなく、答えドロテアに尋ねた。

「妾をシユラと一緒ににされてはかなわんぞ。当然上手くいっただわい。あとは頃合いを見て」

ドロテアは黒い笑みを浮かべる。

端から見たら、幼女が八重歯を垣間見せて愛らしい笑みを浮かべていると思われるが、本質を知っているものにしたら、どす黒い笑みにしか見えなかった。

「つと話していたら影だぜ」

左京亮はキセルの灰を落とし、懐にしまうと、側に立て掛けてある巨大な薙刀を手に取り立ち上がった。

すると、中庭上空の空間に陰陽五行図が浮かび上がり、中心から二人、ラバツクとタツミが降ってきた。

「ここはどこだ？」

「お前らの最終目的地だろ」

「えっ！」

ラバツクが態勢を整える着地し、呟く言葉に答えを返され、振り返ると左京亮の姿が。

「左京——!?!」

「一人目」

「がはっ！」

薙刀の束で鳩尾を突かれ、ラバツクは意識を失いその場に倒れた。

「ラバツク!!」

事態に気づいたタツミはラバツクに声をかける。しかし、ラバツクの答えは帰ってこない。

「ドロテアそいつ頼むは」

「任せておけ。妾もこここのところ研究ばかりで体がなまっておったからのお。ちようどよい運動じゃ」

ドロテアは舌舐めずりをすると、タツミに飛びかかった。

「な、なにを」

「若い小僧の血は旨そうじゃ」

ドロテアは帝具の八重歯を剥き出し首に噛み付いた。

「うわあああああ！負けるか。インクルシオオオオオ!!」

ドロテアに噛みつかれたままタツミは、ラバックと共に生きて帰るためにインクルシオを纏った。

「よつと。まさかあの状態で帝具をまとうとわのお。それにしても旨い血じゃった」

ドロテアはタツミから弾かれながらも、頬を染めてタツミの血の旨さに感嘆していた。

「な……………タツミ!!」

最悪なことは続いていた。

イエーガーズの会議を終えたエスデスが調度タツミがインクルシオの名を呼び纏う光景を目にしてしまったのだ。

エスデスは信じられないと青ざめたまま動かなくなり、気づいたタツミも同様に驚愕にかられていた。

「皇帝陛下の御所でなにをしている!!」

怒号と共に、エスデスと並び称される大將軍ブドーも現れる。

自分の守護する宮殿内での異変に気づいての登場である。

「賊か。我が帝具雷神憤怒へアドら——」

「タツミどういうことだ!!」

(こんな最悪の状況で戦える訳がない。ラバックを連れて)

タツミは戦ったとしても待つのは『死』であることを容易に察し、走り出した。

地を強く踏み締め、土煙を撒き散らしながら。

(お二人さんが現れたから傍観するとするか)

左京亮はタツミが撒き散らした土煙に紛れて姿をけした。

「ラバック」

タツミは土煙に紛れラバックを回収すると、姿を消し上空に舞い上がった。

(やった!)

「甘いぞタツミ。もう逃がさん!」

タツミの動きを予測したのか、上空に先回りしていたエスデスがタツミを地に叩き落とした。

「——メレクで終わらせる!」

待っていたかのように現れたブドー大將軍の帝具が、落ちてきたタツミにジャストミートし、インクルシオに亀裂を入れるほどの力でタツミを穿ち、全てを終わらせた。

ラバックとタツミは共に囚われの身となった。

第88話

「そうですか。シユラが自分の身と引き換えにナイトレイドの二人を捕らえたのですか……うぐ、うぐ」

「はい…」

執務室の机でうつむいて報告を聞く大臣のオネスト。

まるで悲しみ涙を流すように机に突っ伏し体を震わすオネストに、感情移入したのか、報告をしている兵士も沈痛な面持ちで背筋を正し返答を待っている。

「!!」

だが、そんな思いを嘲笑うかのように顔を上げたオネストを見て兵士は青ざめ、目を疑った。

自分の息子が捕らえられたというのに顔を上げたオネストは、泣いているのではなく、薄ら笑いを浮かべ肉の塊を貪り食っていたのである。

つまり、先程まで集中して机の上の肉にかじりついていたので。

「旨い肉ですねー。この肉の方がよっぽど役にたつ。私の糧になるのだから」

「……」

兵士はなにも言えなかった。

確かにオネストはよく言えば狡猾、悪く言えば狂っているということとは知っていた。

しかしながら、息子が捕まったことに思いを馳せない所か、息子と肉を比較し始めたのだ。

呆れを通り越して恐怖すら感じていた。

「報告ありがとう。帰っていいですよ」

「はい……はい……」

兵士はオネストの声で我にかえり、執務室を後にした。

「息子が捕まったのにタンパクよのお」

ニタニタと笑いながら出てきたドロテア。

まるでこういう反応をするのだらうと分かっていたように。

「当然でしょう。子供などいくらでも増やせます。次は母体を厳選しなくては。どうですドロテア殿私の優秀な子供を生んでみませんか。満足させてあげますぞ」

「ふえ!？」

やはりシユラのオヤジである。この子ありて、この親あり。子は親の鏡とはよく言ったものだ。

あまりにも予想外の問いかけに優秀なドロテアの頭脳さえも一時フリーズする。

「本気か？」

「ええ、いたって私は真面目ですよ」

ドン引きのドロテア。

見た目幼女にメタボツたオヤジが、真剣な顔で子作りを要求したのだ。

これは東方に伝わる物語りの少女を自分好みにしたて（調教し）た美男子もビックリな光景であろう。

「大臣よ、それを妾の国ではロリコ……」

「失礼します」

ドロテアが、ジト目でオネストに苦言を述べようとした際に、水をさすように左京亮が執務室に入ってきた。

本来の不敵な笑みを浮かべた姿ではなく、仮面を被った紳士的な態度で。

「どうしました。左京亮」

「今日の人質の扱いについてお聞きしておきたく」

オネストはほうとアゴヒゲを一撫でした後、まるで三日月のように口許を吊り上げて答える。

「予想としては革命軍はシユラとあの二人の交換を求めてくるでしょう。私としてはあのようなクズはどうでもいいのですが、ただ棄てるだけではもったいない。最後に役にたってもらいます。つまり革命軍の要求に乗ったふりをし、そしてこのこ現れたナイトレイドをシユラ共々皆殺しに」

「面白いですね」

数々の謀略を謀ってきた左京亮をしてもオネストの計略には感嘆した。

どんなに非情な悪党であっても親子の愛情というものはある。

しかし、オネストにはそれさえも微塵もなく、逆に冷酷に利用するというのだから。

左京亮でさえも姉を慕っていたことがあったというのに。

「それについてですが、今日一日猶予をいただきたいのですが」

「いいでしょう。どうやら策があるようですからね。左京亮あなたは優秀です。自由におやりなさい」

「ありがとうございます」

左京亮は深々と礼をし、妖艶な笑みをうつすらと浮かべ執務室を後にした。

「オネストお主は奴を気に入っておるようじゃのお。じゃが奴は助けた妾が言うのもなんじゃが、自分の主をも利用し、利用価値を失うと最後には裏切る男じゃぞ」

「重々承知しておりますよ。そのような私に似通った狡猾な部分も含めて私は彼を、大変気に入っているのですよ」

(類は類を呼ぶか)

帝国では様々な思惑が渦巻いていた。



暗く、黒いシミや鉄錆びの臭いが漂い、血がこびりついた器具がところ狭しと並べられている拷問室の中で苛烈な尋問がラバックに対して行われていた。

「はけ！はけ！はけば楽になるぞ！」

何度も熾烈に縄で吊るされたラバックに暴力という名の尋問を行う拷問官。

「誰が…仲間を売るかよ……………」

体が揺らされ、苦悶の色が表れながら血へどをはいても頑なに拒絶するラバック。

ラバックも先に捕まり拷問を受けたチェルシー同様、この拷問室に連行された時から、情報はどんなことがあっても吐かず、死を迎える

ことを覚悟していた。

それは全て愛するナジエンダのために。

「ちっ。まだはかねえとは強情な野郎だ。今日はここまでにしておいてやる。だがな明日はこんなもんじゃねえぞー！」

拷問官は、吊り下げられ意識が朦朧としながらボロボロになったラバツクに吐き捨てた。

重い扉が扉が重厚な音をたて閉まっていくのを認識し、ラバツクは相棒のタツミを、そして最愛の女性ナジエンダを思い描いていた。

（俺はなにがあつてもナジエンダさんは裏切らねえ。たとえ死んだとしても！）

自分の血が滴り落ち音をたてるような静寂に包まれる室内に、外から声を潜めた会話が聞こえてくる。

「聞いたか。捕まったもう一人のやつは強情ですぐに内密で処刑され、晒し首にされるらしいぞ」

「取り引き材料にするのかと思っていたがな」

「ああ、どうも見せしめにするためらしいな」

（嘘だろ。タツミが処刑……）

茫然自失となるが、自分も明日をも知れぬ身であり、何もできない状態であるので、唇を悔しきで噛むしかなかった。

—————

もう何時間経ったのであろうか、ラバツクが拷問室にある鉄格子が嵌められた窓を見上げると、淡い月光が射し込んでいることから、最低でも五、六時間経っていることが容易に想像された。

そんな時だった。

「な、なにもんだーうげっ!!」

「うごっ!!」

くぐもつた声と悲鳴の後、ドサツという何かが倒れる音が響き刹那、扉が開かれた。

「だ、旦那ー！」

「声をたてるなー！」

主水が血を流し倒れた拷問官を背に室内に音をたてず入ってきた。

これを期待していなかったわけではない。

しかし今回は宮殿内部での大きな事件であったことと、以前捉えていたチエルシーに逃げられていたこともあり、警備は比較にならないほど厳しいものになっていた。

故に、ラバックは主水の助けはないものと自分に言い聞かせ諦めていたのだ。

そういう理由から自然と目頭が熱くなり、視界が揺れていた。

「大丈夫かラバック」

「ありがとう旦那。俺は大丈夫だ。ただタツミは……」

「わかっている。タツミは明日にも処刑されるとのことだ。そのため警備が厳重でもうにもならん。幸いこちらは警備が手薄でな、おめえは急いでこのことをナジエンダに伝えてくれ」

「旦那はどうするんだ」

「俺は少ししておくことがある。急げ！」

主水はラバックの縄を切り、開放すると、アジトに知らせに行くようにラバックに指示をだした。

ラバックも頷くと体に走る痛みをこらえ、主水に言われた通りに警備の穴をつくように、宮殿を走り抜けた。

タツミの危機を知らせるために。

◆◆◆◆◆

東の山裾が線を引かれるように赤くなり、空が僅に白み始めている。

あと二時間もたてば夜が明けるのだろう。

そんなことさえも気づくことなくラバックは息をきらせて走り続けている。

宮殿から走り続けてすでにラバックの足はしばらく前から感覚を失っていた。

通常であれば、走ることはおろか、歩くことさえも困難な状態。

しかし、ラバックはタツミの危機を知らせ、そして助けるためにアジトに走り続けていた。

(あと僅だ。タツミ待ってろよ)

一般的に仕事人（殺し屋）が捕まった場合は組織を守るため見殺しにするのが暗黙の掟であり、ラバックもそれは重々承知の事実であった。

しかし、見殺しに出来ないほどにタツミの存在はラバックの中でも大きくなり、さらには、ナイトレイドの仲間なら助けに行くと言うのが目に見えていたため、ラバックは諦めることなく走り続けたのだ。

日が顔を出しかけてはいるが、アジト前の森は深いため薄暗い。しかし、すでに慣れ親しんだ森のためラバックは一度も止まることすらなく進んでいく。

「やつと……………誰だ!？」

アジトが見える森の出口に差し掛かった刹那ラバックは後ろに人の気配を感じとる。

（つけられていたのか……………）

深い後悔に駆られながら後ろを振り向いた。

しかし、その後悔は杞憂に終わる。

人影を見たラバックが、その姿に安堵した。

「旦那、用事があったんじやなかったのかよ」

「いやあ、おめえが心配でな」

頭を掻きながら苦笑いを浮かべラバックに歩み寄る主水。

ラバックも僅に表情を崩した刹那。

「ご苦労ラバック」

薄暗い闇を切り裂くように銀色の光が駆け抜け、血飛沫が舞いラバックに激痛が走る。

主水が太刀を抜き放ちラバックを一閃したのだ。

「だ、旦那!!」

何が起きたのか理解出来ずに力が抜けていき崩れ落ちていくラバックに、無表情で主水は切り上げた太刀を返し振り下ろし首を跳ねた。

首と胴が分かれたれ、暗転していく意識の中でラバックはナジエンダとの出会いから、共に帝国を抜け革命軍に加盟したあの日。そして今に至るまで苦楽を共にした充実した日々。また、気心が知れたナイト

レイドの仲間との厳しくも楽しく歩んできた日々を走馬灯として見
ていた。

命の灯火が消える刹那、ラバックの瞳から一筋の涙が溢れ落ち、首
と共に地に落ちた。

—————

(ラバ!!)

「どうしたんだボス？」

作戦会議中に突然立ち上がったナジエンダに問い掛けるレオーネ。

(なぜ急にラバのことを思い出したんだ)

自分でもなぜ突然ラバックのことを思い出したのかは分からない
が、たしかに嫌な胸騒ぎに心はざわつく。

しかし、ボスである自分が慌てる訳にはいかず、なんとか心を落ち
着ける。

「いやなんでもない」

「で、でもよ」

何事もなかったようにナジエンダは答えるが、人知れずナジエンダ
の瞳には光るものがあつた。

長年共に過ごした為に通じるものがあつたのかもしれない。

—————

主水は亡骸となつたラバックを蔑むように見下ろすと、太刀を伝う
ラバックの血液を払い、鞘を走らせ納刀した。

静寂に包まれた森に静かに鏝が鯉口を打つ音が響いていた。

第89話

時間は数時間遡る。

主水は依頼人の後に続く。

帝都を出てからここまで約二時間ほど経過したが、依頼内容どころか、一言も話すことなく歩き続けていた。

依頼人にも事情があり話したくないのだろうと、黙っていた主水だが、さすがにこれほどまで何も話すことのない依頼人に違和感を覚え、問い掛けることにした。

「そろそろ教えてくれてもいいんじゃないかねえか。わざわざ俺を選んだ理由をな」

話すことはないだろうなと考えながらも問い掛け少し相手の出方を待つと。

「そろそ……ろい……いだろ……う」

壊れたラジオのようにまるでノイズが交じったようにポツリポツリと言葉を溢す男。

主水は気持ち悪い野郎だと思っていると、不意に男が振り向いた。

「!!」

普段から滅多なことでは驚かない主水であったが、久々にゾクリとした。

白目を剥いた男が、泡をふきながら、体を揺らし始めたのだ。

さらには殺気を放ちながら。

(やべえぞこいつは……)

即座に刀の柄に手をかけた主水の目の前で、男の体躯が膨張し2倍にも3倍にも膨れ上がる。

まるで鋼のような筋肉と見上げる程の体躯になった男が主水に襲いかかった。

◆◆◆◆◆

「これで妻とスタイリッシュの協同制作の力をためせるのお」

「ああ、今回の作戦に邪魔なヤツを帝都から立ち退かせ、さらには足止めと、お前の人形の力試し、まさに一石二鳥だな」

宮殿の一室、ドロテアの工房で大きな画面を見つめながら話すドロテアと左京亮。

わざわざ主水を選んだのは、ラバックを使ってナイトレイドのアジトを暴くためには主水は邪魔なこと、そしてドロテアとスタイリツシュが作り上げた生物兵器の性能調査を兼ねたものだった。

「さてイゾウとの戦いでは全ては見られなかったからな、今回は見られるか」

「ヤツは妾とスタイリツシュが作り上げた2番目に強い生物兵器じゃ。期待に応えられると思うぞ」

二人は共にうすら寒い不敵な笑みを浮かべた。

「ドロテア様。左京亮殿……」

「ふむ、準備ができたようじゃのお」

「そのようだな。もういいのか？」

左京亮は、画面から目を放すことなく現れた男に声をかける。

「はい。拷問官を使いあの男には手筈通り偽の情報を吹き込んでおきました」

「そうか。ならば夜になったら作戦に入るようにDM女に伝えておけ。ガイアファンデーションを使つての初仕事だとな」

「はっ」

男は画面にチラリと視線を送ると、辺りが揺らぎ目に見えるほどの殺気を放ち、怒気をはらませながら去っていった。

「改造され、その上妾の手術を受けてもなお主水に対する憎しみは強いようじゃのお」

「ああ、友を殺され、さらには自分も人間としての尊厳を奪われるほどの手を加えられたんだ。キレて当然じゃねえか」

「そうかのお妾のおかげであればどの人知を超えた力を得たというの満足できんのかシュザンは」

ドロテアは不思議そうな顔をして真顔で疑問を呈した。

シュザン、以前懇意にしていたザンクの敵討ちを狙い主水に立ち向かったが、主水に一矢報いることができず、捕らわれ、スタイリツシュの元に送られた男である。

主水が危惧したように、シュザンもスタイリツシュの元で改造を施され、さらにはドロテアの手術も受けていたのだった。

「あと、最高傑作のシュザンは妾のものじゃぞ。お主は自分の部下のようにパシリにしとるがのお」

「しかたねえだろ。俺の部下は全てこいつに殺されたんだからよ」

左京亮は画面に映る主水を顎でさす。

その表情には怒りなど感じられず、逆に楽しげに見える。

ドロテアも考えが読めない左京亮に軽く苦笑いを浮かべるだけであつた。

◆◆◆◆◆

巨大な体軀から想像出来ないほどの速度で繰り出される打撃。

一般人では視認することも出来ないほどのものである。

しかし、主水にとっては分かりやすい予備動作があるので、お遊び程度の攻撃であつた。

主水は、流れるような無駄のない足裁きの摺り足で打撃をかわしきり、一踏みで懐に入り込み太刀を抜くと同時に両腕を空に舞わせ、心臓を一突きした。

「他愛ねえ」

主水は太刀を引き抜くと終わったと背を向けるが、男は倒れることなく歪んだ笑みを浮かべた。つまり、終わってはいなかったのだ。

バキバキと切断部から音をたて、肉が蠢くと同時に両腕が再生した。

「マジかよー」

再生と同時に放たれる左右の打撃をよけ、主水は後退し間合いを開ける。

相手の攻撃が届かない所で状況を冷静に整理するためである。

しかし、その行動が裏目に出た。

危険種と化した男の腕がリーチから考えられないほど伸びたのである。

予想外の攻撃に僅に回避が遅れ、頬を打撃がかする。

だが、主水もただでは転ばない。

崩れた態勢から風をきりながら過ぎ去る腕を切り上げた。

切断部から流れ落ちる液体が地面を濡らすたびにジュツと音をたてて地面を溶かし穴を開ける。

(血液に触れるわけにはいかねえか)

主水は江戸で仕事人をしていた時には、妻帯者であり、僅かな血痕からでもばれる恐れがあったため、普段から相手の返り血を浴びることなく仕事をこなしてきた。

故に迫り来る血液(溶解液)を避けるなど容易いことであった。

わざとであろう、男は再生をせずに血液のような溶解液を切断部から撒き散らす。

主水は左右に身体を揺らしながら男に肉薄すると、瞬時に交錯し、駆け抜けた。

刹那、男はバラバラな肉片と化した。

「ここまでもまだ戻りやがるか」

主水の視線の先では再び肉片が蠢き再生を始めた。

しかし、状況は悪くなっていた。

主水の太刀に血糊や脂がまとわりつき、切れ味を奪っていたのだ。

一太刀目は、主水の神速の一太刀で、血糊や脂が付着する間もなく切り裂いたが、二太刀目は崩れた態勢のため、僅に剣速が落ち血糊や脂が付着することとなった。

(こりゃあ研ぎにださねえとならねえな)

主水は太刀を見て溜め息を一つ吐くと、太刀を一振りし鞘に納め、開いた手で脇差しを抜き、逆の手でアレスターを掴んだ。

(ヤツの再生の仕方は生物型帝具のコロヤスサノオと似て何かに集まってしている。だとすると、集まる所に核があるはずだ。それを見つけて破壊すりゃあ)

日が暮れ始め、主水の伸びた影が男にかかるほどになるなかで、肉片と化していた男が恐るべき再生能力で、元の形に戻っていた。

「しねえええええ!!」

怒りをむき出しにして大地を踏み鳴らし襲いかかってくる男に、主水は冷静に視線を送り見据える。

太刀の時より間合いをつめ、右手の脇差しで斬激を繰り出し、左手のアレスターで切断面の再生を封印する。

その作業を男とすれ違う僅かな間に幾度も行い通りすぎた。

主水の背後でバラバラになり動きを止めた肉片が地面に落ちる。

「仕事人に手を出した報いは受けてもらうぜ」

主水は振り返り肉片に近づき視線を巡らす。

動きを止めた肉片の中に、静かに脈動する肉片が一つ。

その肉片をじっくりと見ると、赤い宝石のようなものがある。

(どうやらこれが核のようだな)

主水がアレスターを振り下ろすと燃えるような赤い輝きを放つ石がたちまち色を失い、亀裂が入り砕け散り、直後肉片は霧散した。

肉片が霧散していくなか、男の声で

「ありがとう」

という今までのような歪んだ声ではなく、澄みきった晴れたような心からの声を主水は聞いた気がした。

(操られていたとしたらなんだがやりきれねえな……だが、ぼさつとしている訳にはいかねえな。なにか嫌な感じがするぜ。それに俺を嵌めた借りはきっちりかえさねえとな。急いで帝都に帰るか)

主水は踵を返すと帝都に向かって走り出した。

◆◆◆

「たいしたことねえじゃねえか。期待外れだな」

「仕方なかろう、スタイリッシュはナイトレイドの戦闘力を基準に調整したと言っておつたが、ヤツが規格外だったんだじゃからな」

ドロテアが頬を膨らませむくれたように反論する言葉に、左京亮は少し考え込む。

(確かに俺とおっさんが殺りあつた時より強かつたな。若返つたことが起因してるのかもな……だが、まだ俺には勝てねえおっさん)

左京亮は不敵な笑みを溢す。

余裕に溢れ、またどこか楽しそうに。

「ニヤニヤしおって気持ち悪いのお。それよりスタイリッシュとさらなる強化をせんとな」

ドロテアはトテトテと足音を立てながら工房の奥に去っていった。
(じゃあおっさんが帰ってくる前にことを済ませるか)

左京亮も袖を翻し颯爽と工房をあとにした。

◆◆◆◆◆

水音が鳴り響く宮殿の地下。

鉄錆びの臭いや、鼻を覆いたくなる臭気が漂う薄暗い牢獄が並ぶなか、意識を失ったタツミが寝かされていた。

ブドーの帝具アドラメレクをノーガードの中で叩き込まれた為に、そのダメージははかり知れず、未だに意識が戻っていなかった。

そんな中、そのタツミの眠る牢獄にカツカツという足音を響かせ近づいてくる者がいた。

「……タ……タツミ…起きているか？」

普段の凜とした態度は微塵もなく、言葉はしどろもどろで顔を赤らめたエスデスであった。

なにか思う所があるらしいが、乙女と化したエスデスはタツミをじつと見つめたままモジモジとして動けないでいた。

そんなまるで時間が凍結したような中で、エスデスが意を決したように行動を起こした。

先程牢番から押収したカギで牢の扉を開け入りタツミの顔が見えるところまで寄るとしやがみこんだ。

「タツミ………」

エスデスはタツミの頬に手を当てる。

その表情は帝国の二大将軍、何万という敵をほふってきた者ではない。
い。

恋する少女のものである。

(やはり私のタツミかわいいな。私の手の届く所にある…か…我慢ならん。ここで既成事実を作ってしまったら…)。

以前男と女のことには疎いと言っていたエスデスではあるが、あれから副官のランに口伝で教えられていたために、知識をつけていた。

エスデスはどぎまぎしながらもタツミの服に手をかけ脱がし始める。

(タツミも頑張ったんだな。いい体になってるぞ)

徐々に露になっていくタツミの体にエスデスも自然と息を荒くし、熱い吐息を漏らす。

今まで何千、何万という敵を相手に夜通し戦っても、また帝具遣いを複数相手にしても息をきらせたことがないエスデスがだ。

あと一枚という所まできて、エスデスは自分の衣服に手をかける。スルスルという衣擦れの音が牢獄に静かに響く。

薄暗い牢獄の中に、メリハリのきいたまるで輝くような白い肌をエスデスは露にする。

「タツミ、かわいい子を作ろうな」

エスデスがタツミに手をかける――

鳥の囀りが牢獄にも僅に聞こえてくる。所謂朝チユン

とはいかなかった。

「オホン、取り込み中のなか申し訳ないのですが、エスデス將軍これらの話があるので御足労いただきたいのですが」

「大臣か。全く空気を読んでもらいたいものだ……」

「申し訳ありませんね。なにしろ色々と立て込んでいますので」
言葉とは裏腹にオネスト大臣は全く悪びれた感じはしない。

「臭気に耐えられませんので私は先に行きますので、早く来てくださ
いね」

いつも食べ物を持っている手にはハンカチを持ち、鼻や口をそのハンカチで覆いながら足早にその場を去っていった。

「まったく無粋な。タツミ少し行ってくる。楽しみはあとにとってお
こうな」

愚痴を溢したかと思うと、瞬時に満面の笑顔をタツミに向ける。普段主水に向ける野獣的な笑みではなく。100パーセント善意と好意のみで出来上がった笑顔である。

エスデスは脱いであつた着衣に身を包み、さらさらと流れるような青く美しい髪をかきあげると、名残惜しそうに牢獄を後にした。

第90話

「どうぞ」

控え目に三度響いたノックの音に室内のタカナも同様に声を抑えて答える。

答えに呼応するように、ナジエンダが静かに扉を開け姿を現した。「どうだスピアの容態は？」

今後の対応について協議をしていたナジエンダだが、僅かな休憩の合間に傷ついたスピアを見舞いに来たのである。

ナイトレイドのボスとして、そして仲間としてスピアの容態が気ばかりであったのだろう、心配げな表情で付き添っているタカナに問い掛けた。

「衰弱が激しいですね。やはりアダユスの奥の手の影響ですね……」

「アダユスの奥の手か……」

ナジエンダもタカナの答えを聞き、表情を曇らせた。

以前タカナからアダユスの奥の手については報告を受けていたからだ。

アダユスの奥の手。

スピアがシユラに話した通り、アダユスの奥の手は、受けた対象に怨みを持つ死した者を冥界から呼び寄せその怨みを晴らさせる能力。

しかし、分かたれた地上と冥界との壁に穴を開け繋げ、死した者を呼び寄せるといふ世界の理をねじ曲げる行為のため、その奥の手の使用には多大なりリスクを伴う。

使用者自身の命である。

ただし、それにも但し書きがある。

奥の手を受けた者が死して、その穿たれた穴を通り冥界に赴いた時点でその命を対価とするという。

故に、シユラを死に至らせ冥界に送る前にタカナによって阻止されたため、命は助かったのだ。

「命には別状はありませんが、衰弱は酷い。当分意識は戻らないでしょうね……」

タカナの表情も曇っている。

当然のことであろう。

スピアの父チヨウリに託されて共に帝都を脱出し、ナイトレイドに加入してからは師匠と弟子として共に訓練をしてきたのだ、その絆は確固たるものとなっている。

「それはそうと、ラバックさんとタツミさんについてはどうなったのですか？」

「二人とも貴重な戦力で仲間だ。シユラを取引の交渉材料として人質交換を提案することとなった。狡猾なオネストであろうと自分の息子ならば乗らないことはないだろう。明日の朝一番にその旨を帝国側に伝え、返答を待つこととする」

「上手くいかなかった場合はどうするのですか？」

タカナも大臣の息子のシユラであれば、事は上手く運ぶと思っていた。

他人であったスピアでさえ今では家族同然の大事な存在になっている。

ならば、真の親子であれば、その絆はさらに強固なものだとタカナは考えたのだ。

しかし、どんなに些細な案件であろうと組織の長であれば、最悪の事態も想定しておかなければならない。そのためナジエンダに尋ねたのだ。

「可能性は低いと思われるが、その場合は主水に助力を頼むこととする」

「……そうですね。それしかないでしょうね……」

タカナは小さく頷いた。

その作戦における重大な欠陥に気づきながらも。

「まだこれからのことについての話を詰めないといけないのでな」

ナジエンダはそう話すと、スピアの部屋を後にした。

「……私も覚悟を決めないといけませんね……」

タカナは懐から一つの封筒を取り出すと、スピアの眠るベッドの横に置き、

「この稼業に足を踏み入れた時点でありはしないことですが、お幸せに……」

まるで父親のような優しげな瞳で見つめ眠りにについているスピアに告げるように呟くと静かに部屋をあとにした。

◆◆◆◆◆

「すつかり遅くなっちゃったな」

主水は男を倒してすぐに急いで帝都に向けて帰途についたため、想定では深夜には帝都にたどり着くであろうと考えていた。

しかし、主水の考えあてが外れた。

帝都に向かう道すがら、まるでそれを妨害するかのよう盗賊に絡まれたり、依頼人ほどではなかったが、改造された男たちに襲われたりとしたため、たどり着くころには新たな一日の始まりを告げるように、太陽が地平線から僅に顔を出すほどの頃合いになっていた。

「嫌な予感的中しそうだな……」

明らかに主水を狙ったかのようにおこる数々の問題に、主水の考えは確信に近くなっていた。

帝都において自分に関わる大きな動きがるのではと。

「ん。なんだありゃあ」

そんな不安をよそに、主水の視線があるものを捕らえた。

ある人影である、

すでに太陽が顔を出しかかった黎明時であるため、仕事に出るものがないも然程おかしくはない。

しかし、主水はそこにいる人物に違和感を覚えていた。

一点目は、その身のこなしである。

全くの無駄を感じさせない一挙手一投足。

今まで幾多の手練れを見てきた主水はその動きから、その者が暗部で働くものであると判断したのだ。

今まで得てきた知識から、忍びに近い身のこなしであったためである。

二点目は、その姿である。

この世界に住む者は、少し変わった者を除き、洋装を着こなし、主

水やイゾウのような和装を着こなす者はほとんどいなかった。(なぜかタカナも和装であり、その弟子となったスピアもそれに倣ったのか仕事着は和装ではあったが)

そのような状況の中、その人物は和装であったのだ。

だが、あまり着るものがない和装だから違和感を覚えたのではない。

その和装が普段から見慣れたもの、そう自分と瓜二つであったのだ。

(面倒事は避けてえが、これは無視することはできねえな)

主水は気配、足音を消し、その人物の背後を取り声をかけた。

「おい、ちよつと待ちな」

「私ですか」

「!!」

振り向いた人物と主水の二人が共に固まった。

振り向いた人物も主水で、声をかけたのも主水であつたらかだ。

「おめえはなにもんだ！俺の姿しやがって」

「あゝらら。ご本人さん登場か」

主水(の姿の人物)がやっちゃったという感じで苦笑いを浮かべると、右手に持つ袋を左手にもちかえ、右手の五本の指にそれぞれなにかをはさみ腕を振った。

白い煙がたちそれが引くと、胴着のような着物を着た一度キヨロクで見たことのある女性が姿を現した。

「たしかおめえは、なんとか四鬼のスズカだったか。それにその帝具は…」

「覚えてくれてたんだ。そう羅刹四鬼のスズカ。今ではイエーガーズに属していて、毎日シユラと左京亮様に足蹴にされて幸せな日々を送っているの」

スズカは恍惚に充ちた表情をして、クネクネと悶えはじめる。

主水はそれを見てため息を吐くと、スズカはそれに気づいてさらに続ける。

「話は戻るけど、これが私の新たな帝具(ヘガイアファンデーション)。

今まで時間をかけて変装してたのが本当に楽になったよ。それに変装のクオリティーもハンパないし」

自慢気にスズカはガイアファンデーションを掲げ主水に見せる。

主水はそれを見ると、顔をふせ口許を挙げた。

好機だとばかりに。

しかし、主水にはそれ以上に気になることも。

「それを返してもらおうのはさておき、おめえが持つその袋から血の臭いがするんだが」

主水がスズカの左手に下げられたなにか丸いものが入った袋を指差す。

底が赤く染まり、液体が滴っている。

経験則からそれが、紛れもなく人の血液であることは、既に理解していた。

「そっか、やっぱり左京亮様が言ってたようにあんたはナイトレイドだったんだ」

スズカは、今回のラバツクの一件からすでに主水がナイトレイドのメンバーで、帝国に潜り込む間者だということを知ってはいたが、さも知らなかったと言った感じでニヤニヤと笑いながら呟いた。

まるで挑発するように。

これもスズカの常套句のようなもの。

相手を怒らせ攻撃を仕掛けさせるための。

怒りにより苛烈になる攻撃でスズカ自身の性癖（ドM）を満足させさらには、怒りにより我を忘れて攻撃する際に必ず生じる隙をつき殺すために。

「……………」

しかし、主水は全く動じる素振りもない。

「はあ。つまらないな。まあ、これを見たら変わると思うけどね」

スズカは袋に手を入れ、何かを掴むと歪な笑みを浮かべてそれを取り出した。

「!!」

主水の表情が一瞬で驚愕に変わる。

「は〜い。驚いた？あんたの仲間のたしかラバックっていったかな。左京亮様の策略であんたが外に出ている内にシユラが捕らえて、それを使って今ナイトレイドの本拠地を見つけてきたところ。案内してくれて用はすんだから廃棄処分したんだけどね。面白かったよ。信じていたあんたに殺される際泣いてたんだから。あー傑作だったな。笑いを堪えるのに苦労したよ」

けらけらと笑いながら自慢気に話すスズカ。

しかし、度はこしてはいるが、これも策のため、視線だけは主水から外さず、指一本の動きさえも具に捉えていた。

主水はすでに驚愕の表情から無表情なものに変わっていた。

「ありやりや怒ると思ったのになあ。結構薄情なんだ……えっ!？」

スズカの世界が、視界が途端に左右でズレ始めた。

割れたスズカの視界の中から決して目を離すことはなかった主水の姿が消えていた。

スズカの背後から脇差しの鍔が鯉口叩き響く金属音が鳴った際、半分にずれていたスズカの視界がさらに四つに分割された。

まるで、割れたガラスを通して見るように。

「てめえには痛みを感じる時間さえ与えるつもりはねえ」

なにも感情がこもっていない冷えきった声が響く。

実力者のスズカさえも全く気づかないうちに怒りを抑え込んだ主水に一瞬のうちに十数太刀に渡り切り刻まれたのだ。

スズカが死に至るまで、極上の痛みを味わうことも、自分が切られたことにも気づくこともなかった。

あれほど気を抜くことなく警戒していたのにだ。

スズカはそのまま血飛沫を、今になって斬られたことに気づいたとしても言うかのように、遅ればせながら辺りに撒き散らし、倒れこんだ。

主水は屍となったスズカには目もくれず、頭部のみになったラバックに歩み寄った。

「逝っちゃったか貸本屋……」

この稼業に足を踏み入れた以上、何時、誰が死のうともおかしくはないと割りきっていいようとも、そして何度体験しようとも決してなれ

ることのない大きな喪失感。

また、この世界に来てからなにかと関わりが深かったラバックであつたため、その衝撃は大きなものであつた。

無念と苦しき、恐怖、悲しみ、様々な負の感情に彩られたラバックの頭部を袋におさめ、スズカだつたものが持っていたガイアファンクションを拾うと暗い表情をしたまま主水は歩きだした。

第91話

「やれやれバラバラになっちまってんなあ……これじゃあ快感を感じる隙もなかっただろう」

帝都から僅に離れた街道で血の海に浮かぶバラバラになった肉片に視線を向けながら呟くと、キセルを吹かせた。

「こんなことになるんならオッサンの姿でナイトレイドに特攻させるんだったな」

一度青空を見上げ左京亮は呟く。

しかし、その顔には暗い表情は浮かんではいない。

自分の手駒であるスズカがこのような末路を辿ったのにだ。

(ドロテアに発信器をつけたいもらって助かったぜ。折り返し地点辺りを探せばアジトの位置も分かるだろう。近いうちにドロテアでも連れて散策でもしてみるか)

左京亮はうつすらと口許を緩めると、キセルから灰を落として帝都に向けて帰途についた。

◆◆◆

パチパチと薪が燃え弾ける音が辺りに響き、目映い光が薄暗い辺りを照らす中、ナイトレイドのメンバーは、あるものは俯き、あるものは顔を背け、あるものは現実を直視すべくしっかりと前を見据えている。

誰もが一樣に沈痛な面持ちであるのは言うまでもない。

主水がラバックの骸(頭と森の出口で見つけた胴体)をアジトに運び込んだのは、昼過ぎ辺りであった。

ちようど帝国側からの返答を待つナイトレイドに更なる凶報が大きな衝撃を与えた。

そして、帝国側からの返答がないまま今に至り、ラバックを皆で吊っていたのだ。

「……これからは、さらに苛烈な日々が待ち受けることになり、皆にはしっかりと働いてもらうことになる。今日は解散とする。あとは私が火の番をしておく皆体を休めてくれ……」

気丈にナジエンダは皆に告げた。

この中で一番ショックを受けているだろうナジエンダを見るのも辛く、皆は閉口したままその場を立ち去った。

皆が立ち去った後、ナジエンダはラバックの残したゴーグルを握りしめながら茫然とラバックの亡骸を燃やす炎を見つめていた。

蘇る記憶は、初めてラバックと出会った將軍として帝国に属していた時代から、ナイトレイドとして共に過ごしてきた今に至るまで。

仲間の中でも一番付き合いが長かったラバックの死によりナジエンダは胸が張り裂けんばかりの大きな悲しみを受けていた。

ナイトレイドのボスとして仲間の前では悲しみを吐露することはなかったが、一人になったことにより、感情が決壊していた。

「ラバ………」

嗚咽交じりの小さな呟きが辺りにこだまする。

幾重にも渡り、頬を涙が伝う。

今日この時だけはナイトレイドのボスではなく、戦友の死を悲しむ一人の人間として過酷な現実を受け止めていた。

「……」

「レオーネこんな時でなんだがよ。これからは無茶をするなよ」

「分かってるよ旦那……ラバがいなくなっただけでクロスステールが使えなくなっただけだからだろ」

「ああ………」

「大丈夫だよ……無茶はしない。そうしないとラバが心配してゆっくり成仏もできないもんな」

レオーネは僅に鼻をすすりながら、微かな笑みを浮かべて答えると、そのまま振り返ることなくその場を後にした。

その後主水は誰とも言葉を交わすことなく、自室にたどり着き、もうひとつの懸案である帝具ガイアファンデーションについて考えを巡らせていた。

革命軍やナイトレイドにとって最良の策は言うまでもなく適合者である元の所持者チエルシーに返すことである。

しかし、主水はそれを躊躇していた。

今、この場でガイアフアンデーションを返す利点と弊害。

利点とすれば、これほど有用なガイアフアンデーションを使用することにより、多々の情報を得ることが出来る。

その存在を知られていたとしても、動物や虫にさえ化けることが出来るガイアフアンデーションならば不可能と思われるミッションさえ成し遂げることが出来る。

弊害としては、鋭く察しの良いチエルシーであれば、今の状況の中でガイアフアンデーションをチエルシーに返せば今回のラバックの死がガイアフアンデーションに関係したものだど理解し、責任を感じ以前以上に危険な仕事に志願するであろうことは、火を見るより明らかなことであつたからだ。

ナイトレイドの一員としてか、チエルシーの仲間として行動するかという板挟みの状態で主水は悩んでいたのだ。

以前までの主水であれば、仕事優先で、躊躇なくチエルシーに返していたであろう。

しかし、今、現実にラバックの死という現実が目の前にあるという状況が拍車を掛けて主水の決断をあやふやにしていた。

「ん？」

主水が眉間に皺をよせてガイアフアンデーションを前に悩んでいると、僅にガイアフアンデーションが光ったような気がした。

主水はそれを確かめるべくガイアフアンデーションに手を伸ばそうとした際、自重気味に扉がコンコンとノックされた。

こんな状況での予期せぬ訪問者に、主水は首を傾げながらも、手早くガイアフアンデーションを隠し応答し扉を開ける。

「こんなときにゴメンね」

「チエルシー……！」

丁度チエルシーのことを考えていた所にやって来たチエルシー。

主水は、顔には表さないが、僅に戸惑っていた。

ガイアフアンデーションの処遇についての答えがでない所にチエルシーが現れたのだから。

(ここに来たのも仕事人としての定めなのかもな)

決して逃れることができない仕事人（殺し屋）としての運命に主水は諦めの境地にいたり、逃れることができないならと、主水はある決意を固めた。

「どうしたんだ？」

自分の中で決意を固めた後にここに来た理由を問いかける。

このような状況の中でなぜ訪ねてきたのを。

「ちよつと主水の顔を見たく……じゃなくて、なぜか分からないけど主水の部屋から呼ばれたような気がして」

「……………」

主水が黙って動きを止めると、みるみるうちにチエルシーの顔が朱に染まる。

自分で言ってる何を言いたいのか分からず恥ずかしくなったのだろう。

だが、主水はチエルシーの顔をなにを言ってるんだという顔ではなく、納得したような表情で見ている。

（アレスターが俺を呼んだように、こいつもチエルシーを呼んだのか……………」

主水は軽く頷くと物陰においておいたガイアファンデーションを掴むとチエルシーに手渡した。

「主水……………これは!!」

「行き掛けの駄賃といった所か。こいつ自身がまだお前と仕事したいみたいなんだな」

チエルシーは震える手でガイアファンデーションを受け止めると、嬉しそうに抱き締めた。

主水はその姿を、いやその先を見通したように寂しそうに見つめていた。

しばらくその状況が静寂のもと続く中、はつとしたようにチエルシーは顔をあげた。

「この状況から考えると……………まさか……………」

チエルシーは残酷な現実には衝撃を受けたように、声を震わせながらポツリポツリと途切れ途切れに呟いた。

「……ああ……おめえの考えは当たっている。そのガイアフアンデーシオンを使われて貸本屋は殺された……」

主水はその過酷で、チエルシーにとって残酷極まりない真実を告げた。

チエルシーは、崩れるように床に膝をつき涙を流し始めた。

以前のチエルシーならば考えられない姿。

しかし、ナイトレイドに来てからチエルシーは演技ではない、元々持っていた温かい心に良いか悪いかは別にしてもどっていたのだ。

それに加えて、自分の失態がラバックに死をもたせたといい真実が加わったためにチエルシーは崩れ落ちたのだ。

私がドジを踏まなければラバックは……という申し訳ないという思いと、強い後悔の念。

声押し殺すように泣くチエルシーに主水は無言で近づき、膝をつき声をかけた。

「たしかにおめえのガイアフアンデーシオンが大きく関わってはいるが、貸本屋が死んだのはやつの失態だ。それにこの稼業に生きていれば誰もが死を覚悟して仕事をしているんだ。言っても割りきれねえとは思うがおめえが責任を感じる必要はねえよ」

「も、主水……」

止めどなく流れ落ちる涙を拭うことなく顔をあげたチエルシーは、主水の胸にもたれ掛かるように顔を埋め涙を流した。

主水もそれを受け止め優しく囁いた。

「この稼業に足を踏み入れた以上、おめえもこの稼業をそのガイアフアンデーシオンで続けていくことになる。だがな、無理はするなよ。今は悲しむ仲間がいるんだからな」

チエルシーは主水の胸に顔を埋めたまま、頷くような素振りをみせた。

◆◆◆◆◆

昨夜未明までラバックの死を悲しむように降り続いていた雨はやみ、そとは雲ひとつない晴天となっていた。

主水は体を起こすと、泣きはらしたように目蓋を赤くそめ、静かに

寝息をたてるチエルシーを起こさないように身支度を整えると、布団をチエルシーにかけなおし、無言で部屋を後にした。

（あとは帰る前にあれをアカメに伝えておかくか。ついでにあれも尋ねてみるとな）

主水はその足でアカメの部屋に向かい合いしばらく話、アジトを後にした。

第92話

「まだなのかアカメ」

「あと少し」

疲れた表情で茂みをかき分け道無き道をアカメに続き進む主水に、表情を変えずに答えるアカメ。

主水がナイトレイドのアジトを出た際には一人であったが、アカメに尋ねた場所が分かりづらいということ、自分の都合も合わせてアカメが主水の目的地まで堂々してくれることになったのだ。

また、その目的地が人里離れた山の奥地ということ、道無き道を進んでいたのである。

かれこれ一時間以上は進んでいたが。

「ねえ主水」

「なんだ？」

「主水はどこで殺しの技術を学んだの？」

主水は唐突だなと思いつつも、目的地につくまでのいい暇潰しだと話始めた。

「俺の殺しは厳密に言えば教えられたもんじゃねえ。それまでに修得していた剣術で殺しに使えるものを選択して使っただけだ」

主水は染々と過去を思い出すように話す。僅かに影を浮かべながら。

奥山神影流、御嶽新影流、小野派一刀流、一刀無心流、心形刀流等々の剣術を類い稀なる才で免許皆伝まで至らしめ、八州一の居合いの腕と噂され、剣術の究極の一刀も修得した。

それは全て国を良くしようとして若く熱い志を持っていた時のことであり、今ではそれを殺しに使うことになろうとは思ひもしなかったことだろう。

「そうなんだ。だから私が見たことがない戦い方だったんだ……」

アカメがポツリと溢した言葉に、世界が違うからだがな、と主水は思いつつも

それで通しているため、何も言うことはなかった。

「それで、なんで聞きたかったんだ？」

「私は主水の強さを知りたくて」

主水は理解した。

アカメにとつては強さというのは殺しを行いながら成長させる物と考えていたために、殺しの技術と聞いてきたのだと。

遠回りに感じたのもそのためだったのである。

「俺の強さ」

「うん。ナイトレイドの戦いはこれからさらに激しさを増してくる。あのエスデスとも剣を交えることになると思う。当然命をかけた戦いだから無事には済まないと思う。でも私は皆を守りたい。そのためにもっと強くなりたいんだ」

主水の目から見てもアカメの強さはすでに人知を超えており、かなりの高見に至っている。

しかし更に高見を目指す姿は、若き日の自分を見ているような気がしていた。

幾多の剣術の流派を己のものとしながらも、満足せず更に他の流派を修得していったあの頃の自分を。

また、いまならその気持ちもわかる気がした。

主水は、普段は身の保身の為なら仲間をも殺すといった態度ではあるが、実際には何度も仲間を救うために命をかけていたこともあったからだ。

「目的地についたら少し時間がある。アカメの弱点は分かっているから教えてやるよ」

「本当に主水！」

「ああ」

アカメは喜びいさんで主水の手を取ると、走り出した。

主水自身は苦笑いを浮かべていた。

今までこれほど仕事人仲間と深く関わることはあまりなかったからだ。

—————

「主水あれだよ」

アカメにひかれて辿り着いた開けた所で、指差した先に小さな小屋があつた。

「あれか」

「うん。私たちのナイトレイドがよくお世話になつてる鍛冶屋のマサさんが住んでいるんだ」

「鍛冶屋の政だ!!」

「!」

突然大きな声をあげる主水に、なにか不味いことでも言つたかなと疑問符を浮かべるアカメ。

「悪い……なんでもねえ」

(田中様の似たタカナ様に、右京亮本人、さらには政……いくらなんでもまさかな……有り得ねえだろ……)

主水は以前の仕事仲間を思い描きながらも、有り得ねえとかぶりを振つて、考えを打ち消した。

「こんにちはマサさん」

「おう久し振りだなアカメ」

主水をその場において、アカメは声をかけると、小屋の中から答えが返ってくる。

まさに、何度も主水が聞いていたあの声が!

小屋の扉が開かれ現れた人物。

「政!!」

「はっ!八丁堀!!」

顔を会わせた瞬間二人は動きを止めた。

◆◆◆

「はあ……ついでにしましたか……」

上空から滑空し着陸体勢をとるエアマンタの背に乗るタカナは、眼下に広がる大きな建物を見ながら辟易するように呟いた。

ナイトレイドのアジトを出たタカナはエアマンタに乗り革命軍の本部に戻ってきたのだ。

強い決意を持って……のはずだった。

しかし、早くもその決意も揺らぎかけていた。

その弱い精神によって。

なよなよと悩んでいる時であった。

「お待ちしておりましたタカナ様」

エアマンタが降り立つ場所から僅かに離れた所から、駆け寄る男の姿が。

「ああ、ミゾロギさんですか」

ミゾロギとは、タカナが警備隊に潜伏していたときに、部下として働いていた時に何かと役にたったため、地位と金子で率いれた男である。

自分は帰らずに革命軍の本部に行かせていたのだ。

決して自分が本部に帰りたくなかったからではない……だろう。

「憂鬱ですがナイトレイドの皆のために頑張りますか。でミゾロギさん、調べはついていますか」

「はい。……」

ミゾロギは一冊の資料をタカナに手渡す。

タカナがペラペラと中を見ると、詳細に内容がまとめられている。

「さすがミゾロギさん。どこかの誰かとは大違いですね。では参りましょうか」

タカナは資料を流し読みながら革命軍本部と目される建物とは反対の方に歩いていく。

しばらく歩き、ポツリと存在する枯れ井戸の蓋を外すと、掛かっている縄ばしごき手をかけ、慣れた感じで降りていく。

「この感覚も久し振りですね」

地上とは違い暗く冷ややかな空気にどこか感慨深く呟く。

「しかし、革命軍でもかなり高い身分のタカナ様が表玄関ではなく、こんな陰気な裏口を使うなんて誰も想像できませんね」

「しようがないですよ。私は隠された存在で知るものは革命軍でも一握りの者だけなのですから。行きますよ」

タカナは言葉とは裏腹に重たい足取りで歩き始める。

ミゾロギはそんな諦めの悪いタカナにあきれながらも、明るい未来のため、文句も言わず黙って後に続いた。

井戸の底から伸びる真つ暗で一寸の光りさえも存在しない横穴を歩く二人。

ミゾロギは危なげな足取りで歩き、タカナは溜め息を吐きながらも、危なげなく歩いていく。

革命軍の本部に入る際には必ずこの裏口を通っていたため、最近使用していなくとも体はしつかりと覚えているためだ。

しばらく歩くと僅かに光が見えてくる。

「つきましたね……」

横穴の突き当たりタカナは着くと、光が差し込む上部を見上げ掛かっている縄ばしごを登り器用に光が漏れる天井部分の扉を開け、出口となる革命軍の自室にたどりついた。

「はあ。この部屋も久し振りですね」

何度ここに来てから口にしただろうかと頭の片隅で思いながらもつい口に出してしまう「久し振り」という言葉に、タカナはひっそりと苦笑いを浮かべた。

タカナは徐に自室の机に近づくと指を走らせる。

よく嫌味な姑がするような姿である。

「かれこれ二、三年の時が経っているのに埃一つないなんて」

「いつ気まぐれなタカナ様が帰還なされてもいいようにしておきました」

タカナが振り返ると、年の頃は20歳前後の、美しい流れるような金髪を持ち、その美しい髪にも全くひけを取らない凛とした整った容姿の女性が疲れた表情で立っていた。

「これはこれはレチエリイさん。お久し振りですね」

「遅いお帰りですね……」

表情一つ変えずに白々しく答えるタカナに溜め息が止まらないレチエリイに、後から上がってきたミゾロギも同情を禁じ得なかった。「任務を終えたのちどこで何をしていらっしやったのですか」

「まあ色々あったのですよ。レチエリイさんも私がいらないあいだ私の変わりを務めてくれてありがとうございました」

革命軍でのタカナの秘書的な立場のレチエリイはタカナが帝都警

備隊に潜入している時に、その代理として仕事をこなしていた。

そのためタカナは恭しくお辞儀をしたのだった。

「と、挨拶はここまでにして、ミズロギさん報告をしてくれませんか」
タカナの命をかけた革命軍内部の大掃除が幕を開けるのであった。

第93話

タカナ、レチエリイ、ミゾロギの三人が机を囲んで座るタカナの執務室は緊張感に包まれた様相を呈していた。

そんな中で、ミゾロギが勿体ぶった様子であからさまな咳払いをし報告を始めた。

「今回調べた所によると、怪しい者は二名に絞ることができました」「さすがミゾロギさん。ドヤ顔するだけのことはありますね。この短期間でそこまで絞ることができるとは」

革命軍には構成員だけでもかなりの人数が所属している。

たしかにその中でタカナの存在を知る数少ないものに限ることができたとはいえ、どの幹部も手練れ揃いであり、その猛者の中から怪しい者を見つけ出せただけでも大手がらであり、タカナは称賛した。「レチエリイさんにも手助けしつもらったんですね」

ミゾロギは表情を崩しレチエリイに視線を送るとレチエリイはニツコリと微笑みを浮かべる。

(やはりこの二人はたいしたものですね)

自分で見いだし育てた二人の成果にタカナの頬も緩んでいた。

しかし、タカナも革命軍の幹部。

いつまでも表情を緩めている訳にはいかなかった。

「ミゾロギさん。その二人とは誰ですか？」

「最有力は元々名うての殺し屋でボス自らが仲間率いたという〈夜嵐のキンペイ〉という男です。かなりの腕で『なんだかなあ』という呟きを残して仕事を完遂するという恐ろしい男です」

タカナならば知っていることは当然承知でタカナの表情を見ながら詳しく述べるミゾロギ。

「夜嵐のキンペイですか……」

タカナはその名を呟き表情を歪めた。

(何を考えているのか分からない上に、全く場の空気を読まない発言をし場を冷えきった状態に変えるあの独活の大木ですか……)

タカナの表情を見た二人は(やっぱり嫌っていたんだな)と溜め息

をついた。

キンペイという男は、潔癖気味のタカナとは全く逆の性格をしていた。

がさつで大雑把という。

「はあ、まあいいでしょう。あの男が裏切り者であれば容赦なく処断できますしね。で二人目は誰なんですか？」

「あ、二人目はですね」

タカナのおぞましい笑みに竦み上がっていたミゾロギと困ったような複雑な笑みを浮かべたレチエリイだったが、先を促されたことによりミゾロギは冷静さを取り戻し続ける。

「革命軍きつての情報通で、神出鬼没な会計監査役のナリカワです」

「次はナリカワですか……」

再び深く息をはくタカナ。

今にも頭を抱えそうになっている。

(ノツペリした顔でキンペイと違った意味で何を考えているのかわからないあの男ですか。こちらが困っていると絶妙なタイミングで現れこちらが欲している情報を提供する男。便利ではありますが何か裏がありそうな)

なにか物憂げな表情を浮かべ考え込むタカナだったが、それを察したように言葉を止めたミゾロギを一瞥すると、口を開いた。

「その二人に目をつけた理由はなんですか？」

待っていましたとばかりに、ミゾロギは意気込み説明を始める。

「両者ともに必ずなにかが決まる大きな会議の後はどこか人知れず出ていくのです。そして必ずその会議で決まったことが裏目に出ます。つい最近では、タカナ様が一番よくご存じですが、ナイトレイドに探りを入れるように指令がでたのちに、その指令を受けた二人が筒抜けであったように捕まるという結果に相成りました」

「……………黒のようですね」

タカナはミゾロギの報告を聞き軽く頷くと徐に立ち上がる。

静かに報告を聞いていた時とは違い、何かを思い立ったような様からミゾロギとレチエリイは次の行動を見守っているおいと、タカナ

は億劫そうな感じで二人に告げた。

「このまま話を聞いていても埒があきませんので当人に直接あつてきます」

「お待ちー」

踵を返し部屋を後にしようとするタカナにレチエリイが待ったを掛けようとするが、タカナは意にも介さず執務室をあとにした。

「……タカナ様は完全に気配を消せますので大丈夫だと思えますよ」

「そうですが……」

気まぐれなタカナに振り回される二人であった。

◆◆◆

「久し振りですねえ」

タカナは後ろ手に手を組みながら、感慨深げに呟く。

かれこれ数年帝都の警備隊に潜入していたため、なんとも言えない思いで変わらない革命軍のアジトを歩いていた。

すると、

「その後ろ姿タカナ殿ではありませんか」

深く重低音の効いた丁寧な口調で呼び止められた。

(完全に気配は消していたはずなんですけどねえ)

少々困惑気味に振り返ると、黒い羽織袴を着て、静かな雰囲気纏う良い姿勢で立つ一人の男が。

「これは麻右衛門殿ではありませんか」

タカナは親しげな笑みを浮かべ挨拶をする。

山田麻右衛門、以前東方で処刑人兼帝具御試用という役職につき、日々罪人の首をはね、また山田家特有の全帝具を扱えるという家系柄東方の王に仕えていた男である。

しかし、ご多分に漏れず東方も帝都同様腐敗しきっており、そんな原状を憂いながらもなにもできずに主に仕えていた。

しかし、そんな彼の転機となる事件が起こる。

処刑人という役を全うするなかで、罪なき者を切ってしまったのだ。

誠実な麻右衛門は、仕事であり上からの指示であったとはいえ、自

分の犯してしまったことを深く悔い、贖罪から役職を辞し、民の為にその身を役立てることにした。

そのような中で、民を思い、平和な世界を作り上げるために決起し、仲間を集めていた革命軍のボスと出会い、意気投合した上で革命軍に招かれた。

罪人と言えども苦しませることなく旅立たせるという役職柄、常に鍛練を欠かさず戦闘力は折り紙つきで、戦場では傷を負ったことは一度もなく、ブドーやエスデスと戦える唯一の男として革命軍の切り札と目されている人物である。

普段は寡黙であり、質実剛健を体現した様で、対応は丁寧な侍であるが、戦いとなると眼孔鋭く、その眼孔で見据えられた者は恐怖で射竦められ、為すすべなく豪剣で切り捨てられる未来が待つという、全ての敵に恐れられた男である。

「いつ帰っておられたのですか？」

「つい先程です。少し野暮用がありました……」

タカナとしては麻右衛門を信用してはいたが、蟻のいつけつということもあり得るので言葉を濁した。

麻右衛門は洞察力にも優れていたので、タカナの思惑に気づき、

「なにかあったらお呼びください」

と追及することなく、丁寧に挨拶をして去っていった。

—————

「これはこれはおかまのタカナ殿ではありませんか。久し振りにあつてもかわらぬおかまぶり。なんだかなあ」

「私のどこがおかまっぽいというのですか！失礼ですね！」

タカナは青筋を立てながら反論し振り返ると、探していたキンペイがなにくわぬ表情でタカナを見下ろしていた。

タカナは意表をついて出だしをとり、隙をつき言質をとる思惑だったがそれも簡単に覆された。

「大変だったようですね。革命軍の幹部と身バレして逃げ帰ってくるとは」

「うぬぬぬ……」

「死ななくてよかったですなあ」

正論をはかれ、何を言えばと思案している内にキンペイは去っていった。

(してやられた)

タカナが気がついたときにはキンペイの姿はそこにはなかった。

—————

(ナリカワからは上手く聞き出さないと)

「これは珍しい顔が。だれかと思えば帝都に潜入していたタカナ様ではありませんか」

(キンペイに続いてナリカワまで突然に)

「お久しぶりですねナリカワさん」

ペースをつかむべく冷静に、そして表情を変えず振り向き返す。

「そういうば、知っていますか。帝都近郊にアジトを構えているナイトレイドのメンバーの二人がどうやら捕らえられたようですなあ。しかし、幸か不幸か逆に大臣の息子のシユラを捕らえたという。これは上手く使うしかありませんなあ」

「どこでそれを知ったのですか？」

「今日の幹部会でナジエンダからの報告が来たのでそこから。だから噂ではないんですよ」

「そうですか」

「はい。私はまだ会計の仕事がありますのでは」

ナリカワは飄々とした様子で去っていった。

(あまり情報はえられませんでしたが。二人の話からはなにか違和感を感じたのもたしか。すこし帰って考えましようか)

タカナは思案顔でトボトボと執務室に引き返した。

◆◆◆◆◆

「まさか八丁堀まで死んでここに来ているとは思わなかったぜ」
「それはこっちのセリフだ」

政は炉の光に照らされながら、主水はその様子を見ながら笑いあう。

気心が知れた仲間というのが二人の心にも余裕を与えていた。

「だが因果なものだな。政、おめえを殺したやつと同じ名前のアカメの帝具を手入れすることになろうとはな」

「それは言いっこなしだ。赤目とアカメは違う。アカメはいい娘だぜ。自分の過去をすっかり受け止め、過去の贖罪をしているんだからな」

「ああそうだな……」

主水は失言だったなと苦笑いを浮かべる。

政が死を迎えるにあたった敵が地獄組という集団の頭領の「赤目」という男だったのだ。

「政、もう仕事人は辞めたのか？」

「ああ、もう地獄か新しい世界かはしらねえが、因果はきれたと思っっているからな。それに最後の仕事の際に秀に言われたんだ「もう手を血で濡らすな」とな。だから今では山に籠って鍛冶屋をしているんだ。まあ、殺しの道具を手入れしているんだから、まだ因果は断ち切られてはいないのかもしれないけどな」

「そうか……」

主水は複雑な表情で政の言葉を噛み締めるように聞いていた。

長く仕事人仲間をして、共に多くの修羅場を乗り越えてきた政が仕事人を辞めたということに、なにか思わないことはなかったのだろう。

二人の間に沈黙が訪れた時だった。

「マサキーン」

「おっ誰か来たみたいだぞ」

「ああ、いつも野菜を持ってきてきているアニーちゃんだ」

それだけ言うと政は外に出ていった。

相変わらずモテるなど主水も溜め息をはくのだった。

「主水ー」

「アカメが呼んでるし俺も行くか」

主水は政に借りておいた刃引きが施された刀を手にアカメの待つ元に向かった。

第94話

レチエリイが書類を捲る些細な音でさえも大きく聞こえる静寂流れる執務室で、タカナは顎に手を当てて思考の海に身を沈めていた。頭を巡るはキンペイとナリカワの言葉。

僅かな言葉の中に、この状況を好転させるヒントが隠されている。タカナの幾多の難局を乗り切った本能的なものがタカナにそう語りかけていた。

(二人の言葉のどこかに違和感を感じます。見落としが必ずあるはず……)

普段はナヨナヨし頼りないはずのタカナではあるが、こういう時は普段からは考えられないほどの集中力を発揮し、転機を見いだし人を裏から引っ張っていく、それは人の上に立つものの姿を体現していた。

「タカナ様。少し書類を提出するために出てきますね」

「……………」

無言のタカナ、それでもタカナはレチエリイの発言を無視したわけではない。

それが分かっているレチエリイだからこそ軽く微笑んでいる。

長い付き合いからそれを理解しているからこそそのレチエリイの反応。

二人の間にはそれだけの関係が出来上がっていた。

レチエリイは微笑みを浮かべたまま静かに執務室をあとにした。

(まずは一つずつ潰していきましょうか……まずはキンペイが溢した私が帝都を革命軍の幹部として知られ命を狙われたこと。それについては私が帝都で指名手配されたことから、そして帝都に潜入している者からも本部に伝えられることになるので、幹部のキンペイが知っていたとしても問題はないでしょう。皮肉は殺したくなるほど腹立たしいですが)

既にタカナが革命軍の幹部であったことは発表され、懸賞金を懸けられた指名手配犯になったことから、キンペイが言っていたことは

周知の事実であり、問題はないと結論づけた。

(残りはナリカワの発言。ナジエンダは革命軍本部にラバックさんとタツミさんが捕まったことは報告したということは聞いていた通りです………いえ……)

タカナは何か気づいたように急に立ち上がった。

その勢いから撥ね飛ばされた椅子が大きな音をたてたことさえも気づかないままに、皮肉目いた笑みを浮かべた。

(こんな簡単なことに気づかなかつたなんて……人間の思い込みとは怖いものですね)

自らの浅はかさを嘲笑するような苦笑いを浮かべたタカナは、机の横に立て掛けておいた美しい装飾を施された細剣に手をかけ、腰に帯びた。

「さあ、革命軍のお掃除をしましょうか。ミゾロギさん、レチエリイさん行きますよ!………どういふことでしょう?」

反応が返ってこないことにタカナは周りを見回すと、そこに誰もいないことに気づく。

「コホン。お二人が帰ってきたら行きましょうか」

タカナの特性上、一人で行けば赤子の手を捻るより軽く殺されることは周知の事実なので、タカナは二人が帰ることを待つことにした。

恥ずかしさを押し隠すようにかゝる咳払いをすると、倒れた椅子を直して腰をかけた。

――

「私の予想からするとそろそろタカナが気づく頃合いだろう。さあ革命軍の中で二番目に厄介なタカナを狩ることにしましょうか」

口許を醜く歪めた男は立ち上がり、その場を後にした。

タカナを狩り、革命軍を手中におさめるために。

革命軍本部の獅子身中の虫が動き出そうとしていた。

◆◆◆

主水が外に出ると、笑顔で話す政と嬉しそうに顔を赤らめて満面の笑顔でそれに答える少女の姿が。

年の頃は10代後半辺り、髪は肩口で切り揃えられ、軽く日に焼け

た健康的な肌をもち、微笑むと軽く八重歯が見え、活発そうで健康的な姿をしている。

先程政が言っていた毎回ここまで野菜を運んできてくれるというアニーという娘だろうと主水は理解した。

話している姿を見るだけでも、政に気があるのは火を見るより明らかだ。

(この世界でも、こんな人里離れた辺境でもモテやがって。俺はこの世界では衆道の男や、へんなやつに気に入られたつてのによお……)

今は故人となった手を握りまっすぐと瞳を見つめてくるブラートや、意気揚々と種々の拷問器具を持ち妖艶な笑みを浮かべるエステスの姿が頭に浮かび、この差を心の中で僻む主水だが、一転して軽く口許を緩める。

(仕事人を辞めた政ならばこういう生活も許されるのかもな)

かつて修羅の道に身をおき、けて人並みの幸福を得ることが許されず、何度も惚れた惚れられた女の死を見て、その都度涙をこらえて仕事をこなしてきた政の姿を見てきた主水として、そのような思いを胸に抱く。

そのような場合でも、主水は厳しい言葉を政に溢したことも少なくなかったが、この世界では違う。

故に主水は二人の雰囲気邪魔することの無いように、静かにアカメの元に向かった。

—————

小屋を回り込むように行つた先の少し開けた広場に、アカメが準備運動をしながら主水を待つ姿が。

体を伸ばしたり、屈伸するなど入念に準備する姿から、主水との稽古を心待にしていることが伺われた。

「悪いな待たせちまったか？」

「大丈夫だよ」

軽く微笑みを浮かべ頭を横にふるアカメ。

政とのこれまで話していたことを考えると待った時間は決して短くはなかっただろうが、アカメが気を使つてそう答えてくれたことに

主水は感謝を覚えた。

そして、それに答えてやらなくてはとも。

「でもまさか昔政さんも私たちと同じ仕事をしていて、さらに主水と仲間だったなんて驚きだよ」

「ああ、俺はここに政がいること驚いたがな。今の政の姿を見ると裏家業をしたやつとは見えねえかもしれないが、俺たちと仕事をこなしていた時はかなりの腕だったぜ」

昔に思いを馳せ語る主水の姿は、主水としては気づいてはいないだろうが、アカメから見ると少し嬉しそうに感じた。

革命が成功した未来に、生き残った仲間と出会ったら私も今の主水みたいになるのかな、とアカメは想像できない未来に思いを馳せてみた。

「話はここまでにするか。ナイトレイドと帝国の話し合いも進むかもしれないねえからな」

主水の纏う緩く、穏やかな雰囲気が一転して、戦闘や仕事の時のピリピリと張りつめた物に変わる。

アカメも表情を引き締め、政から借り受けた主水同様の刃引きが施された刀を鞘から抜き放つ。

「刀を交わして語ろうぜ」

主水も若き日の剣術に打ち込んだ熱い心が蘇ったように微かに心を弾ませていた。

刀を持ってこのような思いになるのは何年ぶりだろうか、主水も自分自身の感情に些か驚きを覚えていた。

「行くよ主水!!」

刀を下段に下げ、低くした体勢から、地面を蹴り主水に向かって突っ込んだ。

一瞬で間合いに入り込むとノーモーションで切り上げる。

主水はアカメの切り上げを下段で受け止めると、そのままアカメの刀を巻き込み、円を描きかちあげる。

「!!」

剣術における巻き技。

相手の刀を押さえ、手首を返し巻き上げ刀を反らしたり、はね上げる技。

手首が強靱であり、さらにはかなりの技量を伴うものである。

「うっ!？」

アカメのかちあげられた刀は天を仰ぎ、その際一瞬の隙をつかれたアカメの喉元に主水の刀の鋒が宛がわれていた。

「今の立ち合いで見えたんじゃねえか」

主水は刀を引きアカメに尋ねる。

今の僅かコンマ何秒の立ち合いの中で見えたであろうことを。

「長い間で培ってきた戦い方の欠点に気づくことはなかなか難しいか。アカメ、おまえの戦い方は暗殺に特化した戦い方なんだ。つまり初手の一刀で決めるために、その一刀に全力を込めた戦い方。故に一刀を止められると二手目に向かう際に隙ができる。たぶん今までおまえが相手をしてきたやつとは力量の差があつてその隙を狙われなかったのだろうが、敵がエスデスやブドーとなるとその僅かな隙が命取りになる」

「!」

見えなかった自分の欠点に気づかされ、アカメははっとした表情を見せる。

アカメほどの手練れになればなるほど一刀目で勝負が決する。

故に気づくことがなかった欠点。

「ありがとう主水。もう一度いい?」

「ああいいぜ。満足するまでなんどでも受けてやらあ」

このような機会はもう来ないかもしれないという思いから主水も快く了承した。

だが、全てがアカメの為ではなく、自分のたかぶった気持ちを押しさえられないという面もあったのかもしれない。

その後、政に声をかけられるまで主水とアカメは剣を交え続けた。

二人の顔には、疲れの色よりも、充実した時間を過ごせたという満足感のほうの色濃く表れていた。

第95話

ジメジメとした空気、カビ臭い臭いが漂い、地面を打つ水音のみが響く静寂の中、薄暗い空間で地に伏していたタカナは目を覚ました。

「ここは……どこでしょうか？」

タカナは体を起こすと目を擦りながら辺りを見回しながら呟く。いつたいここはどこなのかと。

目につくのは、閉塞感を強いられる無機質な石壁に囲まれ、開けた場には幾つかの鉄の棒が立ち並ぶといった場所。

これだけ見て場所が分からない者もないだろう、ということでもタカナも自分の居場所は理解した。

しかし場所は分かったとしても、ここにいる理由が全く思い出せない。

いくら記憶を遡っても思い出されるのは、先程まで裏切り者を討つべく行動していたのではなかったのかということだけ。

少し前までの記憶がかなり曖昧になり、まるで霧がかかっているような状態になっている。

「タカナ様。目を覚まされたんですね」

突如隣からかけられた声にタカナは振り返ると、そこには憔悴とした顔のミゾロギの姿が。

「ミゾロギさん。あなたまで。どうして私たちはこのような牢屋に」

「忘れてしまったのですか……確かにショックが大きいとは思いますが……」

歯切れ悪く答えるミゾロギ。

ミゾロギは全ての答えを知っているようなので答えるようにタカナは促す。

曖昧になっている記憶を取り戻すために、そしてミゾロギが言うショックとは何かを思い出すために。

「全てお話ししますね」

虚ろな死にかけの目でミゾロギはここに二人が行き着くまでの経緯を話し始めた。



(おつ茶柱が！良いこと……沈みましたか……)

タカナが気を落ち着け一喜一憂し茶を啜っていると、待っていた二人が執務室に帰ってきた。

ミゾロギは情報収集を、レチエリイはタカナの代わりに書類を提出に出かけていたのだった。

「待ってましたよ二人とも」

「裏切り者がわかったのですか？」

入ってくるなり立ち上がり興奮気味に声をあげたタカナに対し、その姿で理解したレチエリイが問いかける。

「そうですよ。分かったんですよー」

大きく頷き、満面のドヤ顔を浮かべるタカナに、レチエリイは困ったように苦笑いを浮かべ、ミゾロギは尊敬の眼差しを向ける。

「で、誰なんですか？」

「ナリカワです！」

「さすがタカナ様!!」

「そうですね！」

称賛するミゾロギに、タカナは大きく胸を反らし自慢げにしている。しかし、レチエリイは冷静に尋ねた。

「ナリカワが裏切り者という証拠はなんなのでしょうか？」

タカナを信用していないわけではない。

しかし、革命軍の幹部を証拠もなしに決めつける訳にはいかない。

もしも、そのようにしてしまえば、タカナの革命軍での立場がなくなる。

いやそれ以上に、革命軍の結束が揺らぎかねない。

故に、その確固たる証拠をタカナにレチエリイは尋ねたのだ。

「よくぞ聞いてくれました。私が実際にナリカワと話してみると、ナリカワはラバックさんとタツミさんが捕まり、シユラを交換のカードとして捕らえたことを知っていたのです。ここで1つレチエリイさん、幹部会ではどのように今回の件が報告されたか話してくれませんか

か」

タカナは口許を上げてレチエリイに問いかける。

レチエリイは気味が悪いと苦笑いを浮かべながらも幹部会の報告を思い出し答える。

「確か、ナイトレイドのメンバーの二人、ラバックさんとタツミさんが捕まり、交換相手を探らえたと……」

「でしょう。分かったと思いますが、ナジエンダは交換相手の名前は明かしていないのですよ。私が革命軍内部にスパイがいるということを含めておいたのです」

「そういうことですか」

「ええ、分かつてみると簡単なことですが、客観的に見ることの難しさを知りましたよ。私はその件に関わっているので全てを知っていて、その上で話を聞くので、相手も同じと考え聞いてしまった。なので最所は気づかなかったのです」

タカナは自嘲ぎみに苦笑すると、気を入れ直し口を開いた。

「では、お二人とも行きますよ」

「どこにナリカワはいるのですか？」

「探せばどこかに居るでしょう。往生際悪くされると不味いので外に出ているといいのですが。まあ上手くは行かないでしょうが……」

タカナとミゾロギが話す横で、レチエリイが軽く手を上げた。

気づいたように。

「はいレチエリイさん」

「ナリカワなら、私が書類を提出しに行つた際に見ました。確か森の方角に向かつて歩いていたはずですよ」

「これは好都合です。お二人とも行きますよ！」

タカナは腰に細剣を挿すと走り出し、タカナに続いてミゾロギとレチエリイも続いて走り出した。



革命軍本部の近郊に存在する森は、木々が鬱蒼と繁っており空気は清々しいが、日をあまり通さず、醸し出す薄暗さが不気味さを際立たせていた。

「裏切り者が好みそうな場所ですね。ひっ!!」

「野うさぎですよ………あれ、なにかありますよ」

レチエリイが指差した先に、薄暗いためしつかりとは見えないがなにか横たわるものと、僅かな光を受けて光るものが。

タカナは警戒しながら近づく。

「これは!!」

タカナはそれを確認し啞然とした。

横たわるものは、胸を一突きされ絶命した夜嵐のキンペイの亡骸であつたのだ。

革命軍の幹部として、そして警備隊長として死体には慣れているはずではあるが、タカナは例外として慣れてはおらず、恐る恐る胸に突き刺さる剣に手を伸ばしかけたその時だった。

「なにがあつた!キンペイ様!!」

どこからかタカナの声を聞き付けた革命軍の兵士たちが茂みの中から現れたのだ。

(これは不味いことになりましたね)

タカナは冷静にこの状況を乗り切るためにレチエリイに視線を送る。

革命軍の一般兵はタカナのことを知らない。

故に、認知されているレチエリイに説明してもらおうと思つたのだ。

「レチエリイ様この者たちは」

「キンペイ様を殺害した狼藉者です」

「え!?!」

希望を絶望に、信じられない言葉が無表情のレチエリイから発せられた。

タカナとミゾロギは何が起こつたのか理解出来ず、啞然と佇んでいた刹那、レチエリイがタカナとミゾロギの懐に一瞬で入り込むと同時に、タカナとミゾロギに激痛が走る。

二人の鳩尾に鞘の半ばまで走ったレチエリイの双剣の束がめり込んでいたのだ。

「捕らえなさい」

「はっ！」

前に崩れ落ちていくなかで、目の前が暗くなっていく二人の視界の中振り向くこともなく、歩き去っていくレチエリーの姿が小さくなっていった。

「よくやってくれましたレチエリーさん」

無表情のレチエリーを迎えたのはニヤニヤした笑みを浮かべ木陰から姿を現したナリカワであった。

「簡単な仕事でしたよ。ナリカワ様が仰っていたように私が執務室に帰るとタカナは気づいていましたから。あとはここに誘導するだけだったので」

「単純なタカナの行動を読むのは簡単ですね。では、このあとはタカナを幹部会の裁判に突きだし、もう一人の我々帝国の障害となるヤツをタカナと共謀していたということで排除すればオネスト大臣も喜んでくださる。クツクツクツク」

笑いを堪えられないといった様子でナリカワは歪んだ笑みを浮かべ、笑い声をもらす。

その下卑た笑い声は、薄暗い不気味な森に怪しく轟いていた。

◆◆◆

「……………思い出しました……………」

タカナは寂し気に呟いた。

今まで妹のように接してきたレチエリーが裏切ったのだ、そのショックは計り知れないものがあつたのは言うまでもない。

そのショック大きき故に、残酷な現実を直視できず、防衛本能から逃避するために自ら記憶を曖昧にしていたのだ。

「タカナ様、これからどうなるんでしょうか？」

「恐らく、殺さなかつたのは私たちを幹部会の裁判に突きだすため……………そして幹部会でも何かをやらかすつもりですよ」

「でも必死に反論して、ナリカワの悪事を暴露すれば」

ミゾロギの答えにタカナは静かに頭をふった。

「私がキンペイを殺した場面を見たナリカワだけでなく、レチエ

リイさんにも証言されたらそれで終わりです。それにナリカワならば、反論すらもさせない策をたてているはずです……」

「そ……そんな……」

ミゾロギはタカナの残酷な予想に崩れ落ちた。

将来は王権を取った革命軍の中で、立身出世をすることを実現させるために、帝国を裏切つてまで加入した革命軍で、命を失うことになるのだ。

絶望から、溢れる涙を押さえることは出来なかった。

二人が無言で項垂れていると、カツカツという足音が段々と近づいてくることに二人は気づいた。

足音は二人の牢屋の前で止まる。

「キンペイ様を殺害した二人前に出ろ!!」

革命軍の騎士服に身を包んだ男が二人、タカナとミゾロギに命令を飛ばす。

もしもタカナが武器を持っていたならば、この逆境も覆せたかもしれないが、素手であり、さらにはこの騒動と無関係な騎士を傷つけるわけにもいかないため、二人は静かに従った。

ただ、タカナもなにもせず死ぬ訳にはいかない。

命を懸けた最後の抵抗を革命軍最高幹部会でする腹積もりで力強く歩み始めた。

第96話

「臭いますね……」

タカナとミゾロギは手枷を詰められた状態で、牢屋が並ぶ長い石造りの廊下を歩いていた。

その中で、タカナは鼻をつくような異臭に愚痴を溢すように呟いた。

二人の前後に挟むように配置された騎士の二人もそう感じたのか、口許をハンカチで押さえてはいるが、二人は手枷を詰められているため、それができず、愚痴を溢すしかできていなかった。

「……………」

しかし、騎士二人はまるで無視するかのごとく、反応することはなく二人をつれて粛々と連行していく。

無言で歩いていると、廊下の先にかかる階段が明るい光と共に目にはいる。

（おかしいですね…）

その光景にタカナは軽く疑問を持つ。

普段であれば、脱獄者が出ることを想定し、上がり階段の前には、兵士が配置されるはずであるが、今回は配置されていないことに疑問を持ったのだ。

しかし、今はそのような些細な事に構っている暇はないので、すぐに頭を切り替えた。

階段を上がり、さらに革命軍本部の階段を何度か昇り、行き着いた先に大きな扉が現れる。

何度もタカナは通ったことのあるその扉と先に存在する部屋に思いを馳せ、タカナは軽く息を吐いた。

気合を入れるため、また、自分を奮い立たせるため。ある意味正念場なのである。

騎士は扉をノックすると、中から重く厳格な声で入れという声がかかる。

騎士はその指示を受け入れ、両扉に手をかけ、押し開く。

重厚な扉が開かれた先には、まるで法廷のように証言台が中心に置かれ、それを囲むように一段高い位置に丸く配置される長机、そして、その机に一定の間隔を空けながら席につく革命軍の幹部たち。

そこには、山田麻右衛門やレチエリイ、ナリカワの姿も。

そして中心にはアゴヒゲをたくわえた屈強な男、革命軍のリーダーの姿が。

ナリカワは笑いを押し殺し、レチエリイは冷めた表情で、他は皆一様に厳しい表情で手枷を詰められ、いまや容疑者となった嘗ての仲間のタカナに視線を送っている。

騎士は言葉を発することなく、深々と頭を下げて退室した。

「容疑者も現れたようなので始めましょうか」

ナリカワが言葉を発する。

その表情に愉悦や余裕が見え隠れするのは、準備万端ということを明確に表していた。

タカナは苦虫を噛み潰したような表情を一端浮かべるが、すぐに切り替える。

「この裁判では、黙秘は罪を認めたこととみなします」

司会をするであろう、革命軍のリーダーの秘書の女性が注意点を述べる。

この裁判の容疑者には弁護士などがつけられることはない。

故に、自ら言葉に出し反論するしかないということを表している。

「では、革命軍幹部のキンペイ様殺害の件に入りたいと思います。第一発見者のナリカワ様お願いします」

女性がナリカワに視線を送り軽く頭を下げると、ナリカワが書類を持ち立ち上がる。

「私は様々な証拠を所持していますので、それを全てこの場で話していきたいと思います。まず、私とレチエリイさんが、容疑者タカナ殿がキンペイ様をこのレイピアで刺し殺したのを見たのです」

ナリカワは一本のレイピアを取り出す。

切っ先に血液が付着したレイピアは、キンペイの胸に刺さっていたものであった。

そして、その場の幹部はタカナがレイピアを得物として使っていたのを知っていたため、タカナは黒であるという認識に傾いていた。

「タカナ殿ではキンペイ殿に勝てぬと思うのだが」

静かに聞いていた麻右衛門が指摘する。

幹部は皆知っていたこと、タカナは一人では戦闘力は皆無であるということ。

「ええ、タカナ殿一人では勝てません。しかし、それは協力者のミゾロギという後方に控えた男を守る対象としたことにより、可能になりま

す」

「容疑者のタカナ様。今の指摘に意見はありますか？」

女性の問い掛けに、タカナは立ち上がって反論すべく口を開いた。

「……………!!」

しかし、声が出なかった。

緊張などではない。

それは、ナリカワが軽く口許を上げたことから判断できた。

そして、タカナは理解した。

ナリカワの策略にすでに懸かっていたことを。

それは、牢屋の廊下で嗅いだ異臭。

牢屋の並ぶあの場であれば、異臭を感じても問題はない。

そこで、タカナの言葉を奪うべくそこに気化させた毒を撒いていたのだ。

ゆえに、騎士も退室の際言葉を発することがなかったのだ。

「意見は無いようなので、認めたとみなします。続きをナリカワ様お願いします」

無言で苦渋の表情を浮かべ立ち尽くすタカナを見て、それが毒のためとは知る由もない女性は、肯定と見なしさらにナリカワに振る。

「殺害に及んだ理由も掴んでいます。キンペイ様はリーダーの指示を受けて、革命軍内部の裏切り者を探していたということですよ」

「ああ、キンペイは俺の指示で革命軍内部の裏切り者を探していた。

そして近々決着をつけるとも言っていたが、誰かとは話さなかった」

「ありがとうございます」

ナリカワが視線をリーダーに向けると頭を縦にふり肯定を示しながら発言し、ナリカワは満足気に感謝を示した。

「皆さんももうお分かりでしょう。裏切り者はタカナ殿だったので。それを指摘されたことにより殺害に至ったのです」

ナリカワはキンペイがリーダーに自分が裏切り者であるということとを、話してはいないということをはば確信していた。

キンペイは見た目には分からないが、冷静に事を進め、荒立てないために、結果が出るまでは言わないということをした。

そして、まんまとそれを利用し、タカナに罪を被せたのだ。

「それは想像に過ぎないのではないか」

「証拠は後程提示します」

麻右衛門の指摘を軽くないナリカワは続ける。

「その証拠から更なる裏切り者を発見することに至りました。先程タカナ殿の部屋から発見したものののですが、タカナ殿から麻右衛門殿に送った手紙です」

場がざわめき、疑惑の視線が麻右衛門に向かう。

意表をつかれた麻右衛門だが、自分には非はないと断言出来るため冷静に、且つ何をするつもりだという厳しい視線をナリカワに向けた。

ナリカワは怖い怖いと嘲るように首を振ると、三日月のように口の両端をあげながら、仕上げにかかる。

「懇意にしていたタカナ殿から麻右衛門殿への帝国への忠誠を誓わせる同意書です。オネスト大臣の印も押されています。レチエリイさん皆さんにお分けください」

偽造し作った証拠。

その真実味を帯びさせるために、自分が受け取っていたオネスト大臣の印を使用してまでのものを作り出していたのだ。

レチエリイは幹部の皆に紙を配布した。

「御覧ください。その証拠を」

大袈裟な身ぶり手振りで指し示すナリカワ。

その紙を見た幹部たちは驚きの表情を浮かべ、何度も紙を見直し

た。

室内は再び喧騒に見舞われ、刹那、視線がナリカワに向かった。

「どういうことだ。ナリカワ!!」

「えっ!?!」

急にリーダーが怒号をあげナリカワに問い質すが、理解できないナリカワは狼狽する。

そこへレチエリイが朗らかな笑顔を浮かべ幹部に配った紙をナリカワに手渡した。

「な、なんだと!!これは処分しろと指示したはず!!」

レチエリイが配布した紙は、ナリカワが偽造したものではなく、ナリカワからオネストやシユラに送っていた報告書であった。

「どういうことだレチエリイ!!」

狂乱したナリカワは、自分が裏切り者と暴露したも同然の中で、怒りをレチエリイに向ける。

「私は元々タカナ様を裏切ることにはないのですよ。タカナ様のサポートをするために、革命軍の裏切り者を探しあなたに行き着きました。そのため、あなたから確固とした証拠をえるために、タカナ様を裏切るふりをしてまで、あなたに従っていたということです。なかなか警戒が厳しかったですが、始めてあなたが見せた隙、部下にその証拠を処分させようとしたことをつかせてもらいました」

レチエリイは小悪魔っぽい笑みをうかべた。

ナリカワは警戒する相手を誤っていたのだ。

タカナではなく、レチエリイを真には警戒しなくてはならなかった所を。

「クツクツクツク。ハハハハハ。してやられたよ。穏便に済ませようかとおもっていたが、用意しといてよかったわ」

ナリカワのいつもの丁寧な口調は崩れ、まるで被っていた仮面を脱ぎ去るように本性を表し、指をならす。

すると、外が騒がしくなり、扉が打ち破られ覆面の男たちが各々得物を持ち室内に乱入した。

「いっつらほっ。」

狼狽える幹部を横目に、ナリカワは席から飛び出し男たちに歩み寄る。

「こいつらは革命軍の邪魔者を秘密裏に消すために俺が結成した部隊だ。金で動きそうな革命軍のメンバーや、お前らが捕らえたと勘違いしていた帝国から送り込まれ牢屋にいた男たちで構成された精鋭たちだ。お前らこいつらを皆殺しにしろ!!」

「……………」

覆面の男たちは、黙って前に進み出る。

ナリカワが精鋭と言っただけでありその気迫は黙っていても相当なものである。

ナリカワは満足気にその様を見届けると、そのまま部屋を後にした。

「ここは私に任せ、タカナ殿はナリカワを追ってください」

麻右衛門は聖柄の太刀を握ると前に進み出る。

直後麻右衛門を中心にとつもない威圧感が吹き荒れる。

敵だけでなく仲間ですえも恐怖に足がすくみ、息をすることさえも困難になるほどの桁違いの威圧感。

場は既に麻右衛門によって支配されていた。

「タカナ殿！」

「！」

威圧感に吞まれかけていたタカナは麻右衛門の言葉を受け、気を持ち直しナリカワを追うため走り出した。

覆面の男たちは、麻右衛門の威圧感からタカナを追う所か、視線を向けることさえも出来なかった。

「この場を血に染めることをお許し頂きたい」

「掃除は皆でやればいい。殺れ麻右衛門」

リーダーの了承を得た麻右衛門は、厳しい表情で聖柄の太刀を抜くことも、ましてや構えることもなく、一步一步覆面の男たちに歩み寄る。

「外道に落ちた者たちを葬る」



ナリカワを追うタカナは革命軍本部を出て森を駆け抜け、ナリカワを崖に追い詰めていた。

「やれやれしつこいヤツだな」

両手を上げバカにしたように首をふり視線を向けるナリカワ。

「……………」

「そろそろ毒の効果も消える頃だ」

無言で睨み付けるタカナに黙っていちや分からねえよといった感じで指摘する。

「そのようですね。あなたには利きたいことが山のようにあります」

「一から答えてやるよ。手向けにな。まずはキンペイ。ヤツを殺したのは察しの通り俺だ。暗殺者として名が通っていたからどれ程のもんかと思っただが大したことはなかった。わざわざお前を疑わせるために使いなれていないレイピアを使ってもな」

「そうですか……。次は……………」

「お前が革命軍とバレたことか」

「!!」

ナリカワは先読みして言葉を吐いた。

タカナの驚くような顔を見て、ナリカワは満足気に歪んだ笑みを浮かべると、言葉を続けた。

「あれも俺だ。帝都内で死んでくれたらと思っただがな。予想外だった。だがな、お前は気づいてはいないようだが、あれより先にお前を殺すようにしたこともあったんだぜ。思い出してみろ首切りザンクのことを。あいつはお前を見て『新警備隊長タカナ』と言っただろ。あのととき内部の者しか知らなかった新警備隊長をお前と言いつた。それは俺がヤツに教えてやったからだ」

ナリカワは嘲笑を浮かべる。

怒りの表情を浮かべるタカナを見て気をよくしたのかナリカワは饒舌になる。

「これも教えてやるか。お前の仲が良かったチョウリを死に追いやつたのは俺だぜ」

「なんですって!?!」

タカナは言葉を失った。

「チョウリの死はワイルドハントやオネストによるものだと思っていた所に、自分が黒幕だと言い切ったのだ。」

驚かないほうが可笑しい。

「チョウリが死んだのは、証人を押さえられたためだが、ワイルドハントの筋肉バカどもがそんなことに気づくはずないだろ。俺が教えてやったからだワイルドハントは証人を押さえ、チョウリを処刑台に送ることができたんだよ」

「……………裏切り者でさえ許しがたいのに、チョウリ様の死にも関わっていたとは……………」

「どうする気だ？」

「ヘラヘラと笑いを浮かべるナリカワを睨み付け、タカナは細剣を抜き言い放った。」

「あなたをここであの世に送ります!!」



「レチエリイ殿、タカナ殿と共に行かなくてよかったですか？」

麻右衛門は、首と胸が分かれた幾多の死体の中でレチエリイに尋ねた。

数十という手練れを片付けたのに麻右衛門は息一つきらしていなかった。

レチエリイはそれに驚きながらも、意図を汲み答える。

「私が行かなくても大丈夫です。ミゾログさんが付いて行ってくれたはずですから」

笑顔で答えるレチエリイに、麻右衛門は複雑な表情を浮かべ、後方に指を向けた。

麻右衛門の指差した場に視線を向けたレチエリイは青ざめ絶句した。

そこには、泣きながら生還できた喜びにうち震えるミゾロギの姿が。

つまりタカナは一人でナリカワの元に行ってしまったのだ。

「タカナ様ああああ!!」

レチエリイは大いに取り乱しながら部屋を飛び出した。

「こうしてはおれん」

麻右衛門も黒い羽織りをはためかせ部屋を走り出た。

◆◆◆

「お前に俺が殺せるかな」

余裕に満ちた落ち着きを見せ、スツと剣を抜くナリカワ。

キンペイを余裕で片付けたという言葉が嘘ではないことを表すほどの闘気を纏う。

普段見せる文官的な姿ではない。

「大言を吐きますね。あなたも私の力を知らないことはないはずですが」

「確かに、その強さは厄介だ。しかし、それも限定的なものだ」

自分の優位を疑わないナリカワに苛立ちを覚えたタカナは言葉をきった。

「話すことさえ不快ですね。行きますよミゾロギさん。私の後ろへ

……ミゾロギさん」

いつまでたってもこないミゾロギに振り返ったタカナは今になって気づく。

ミゾロギがないことに……

「オネスト大臣への手土産にお前の首もらったああああ!」

間近に迫っていたナリカワの剣が閃き、空に黒いものが舞った。

第97話

「ひあああああああ!!」

タカナの叫び声が響き、振り上げられたナリカワの剣が陽光を受け輝いた刹那、大きな黒い影が上空を横切り、甲高い金属音が辺りにこだまする。

その結果、余裕の笑みを浮かべ、愉悦に満ちていたナリカワの表情が一瞬にして不愉快なものに一転する。

「お前は何者だ?」

怒気を孕んだ声で、タカナの命を奪うべく振るった剣を受け止めた乱入者に問う。

邪魔をされたことに怒り、殺気をまきちらしながら。

「お初にお目にかかります。あなた様に殺されたチヨウリの娘スピアと申します」

「す、スピアさん!?!」

「はい」

すつとんきような声を上げる師匠のタカナに、一瞬愛らしい笑顔を向けると、ナリカワに向き直り剣を押さえていたアダダスの刃をナリカワに向け、剣を押さええている柄を引き僅かに傾ける。

鏢迫り合い状態だったナリカワの剣がアダダスの柄を滑り体勢が崩れると同時に、スピアはアダダスの刃をナリカワの首の背後に回し、首を落とすべく引き寄せる。

ナリカワは崩れる体勢を踏みとどめ、即座に身を屈め刃をかわす。頭部スレスレをアダダスの刃が通過する。

しかし、その対応も折り込み済みのため、スピアは左足を一步下げそれを起点として刃を反転させながら身を翻し放つ。

ナリカワは、そのスピアの二撃目の追撃の薙ぎ払いさえも間一髪ながらバックステップを踏み避けきった。

アダダスはナリカワを捕らえることなく振りきられ、その鎌圧は木々を激しくざわつかせた。

「ヤバかったな。あとコンマ何秒遅れてたら首と胴が分断されてた

な」

スピアから大分距離を取ったナリカワは忌々しげに呟いた。

現れたのが女性だったため、無意識に手を抜いたのかいや、たとえば力が劣るものでも殺すまで気を抜くことはないのです。それはない。

このように僅かなやり取りの中で、たとえ僅かでさえも命の危機に陥ったことに、自分は強いと少なからず自負していたナリカワは、この事実を苛立ちをおさえきれなかったのだ。

「スピアさんなぜここに………というか体は大丈夫なのですか？」

命を刈られる危機を目の当たりにしたためか、タカナは腰を抜かした状態でスピアに這いより尋ねる。

その姿は情けなくもあるが、発せられた言葉や向けてくる視線からはまるで親のようでもあり、兄のようでもあり、また姉のような気遣いや優しさを感じ取れたことにより、スピアの心も一時の緊張を解かれ、そこから来る余裕から満面の笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます。しっかりと休みましたので大丈夫です。ここに来た理由ですが、タカナ様が遺言書のような手紙を置いていったからです。あのような手紙を受けとれば誰でも心配しますよ。ナイトレイドも大変な時なのですが、ナジエンダさんは快く私が行くことを了承してくださいました。感謝しています。それに……」

スピアは陽光を受け輝く銀髪を靡かせ向き直ると、表情を一転させナリカワに鋭い視線を飛ばす。

「父の導きだと思えます。まさか本当の仇に会えるとは……」

シユラは討ち取ることは出来なかった、しかし本当の父親の仇がここに現れ、さらに討ち取る機会を得ることが出来たのは父の導きではないかと。

スピアは、スツと息を吐くとアダユスを一振りし、流れのまま刃を背後に回し脇構えをとる。

（女のくせしてとんでもない力だな。それとあの黒い喪服のような着物姿……帝都で流れていた噂の『舞姫』か面白い）

情報通のナリカワだからこそ、思い出した目の前の存在。

先ほどの危機を覚えた事実とその正体から、一段と気を入れ剣を構

える。

「話ぶりから言わせるとナイトレイドの一員のようだな。ナイトレイドのメンバー一名と革命軍幹部一名、オネスト様への土産としては十分だ！」

ナリカワは遠巻きにスピアの周囲を円を描くように歩き始める。

一定の間合いを空ける、それはアダユスの間合いに入らないため。一撃でも受ければそれで勝負が決するだろうということは、先ほどの攻撃で明確だったためだ。

しかしながら、脇構えのため間合いが測れない、故に必要な以上に間合いをとっていた。

「タカナ様私に任せてください。シユラの時のような失敗はしませんので」

「ええ、その冷静さがあれば安心です。それでもピンチになったら介入しますからね」

「はい」

タカナの言葉に勇気付けられながらかつ、仇を討つという強い意志からスピアは、徐々に間合いを詰めるべく、歩を進める。

しかし、ナリカワは詰めると同じだけ後ずさる。

（ナリカワは私が脇構えをすることによりまだ間合いを測りかねている。ならば虚実を交えて攻めるのみ！）

間合いを見極めるまでナリカワは守りに徹するとスピアは読む。

そしてそれまでは攻撃はせずに守勢に留める。

ならば、間合いを見極め攻勢に出るまでにその守りを掻い潜り戦いを決めることを決意し、スピアは後退りで距離を取られることのないように、地面を蹴り加速しナリカワに向かった。

スピアは間合いを若干詰めた所で脇構えのままアダユスを右後方に大きく振りかぶる。

（まさかこれほどの間合いでも届くとは）

ナリカワはさらに距離を取るべくバックステップをしつつ、用心として剣をアダユスが来るであろう右側に縦に構えた。

（予想通り！）

スピアは渾身の力を込めて地を蹴る。

蹴られた地は抉れ、スピアは爆発的な加速を得てナリカワとの間合いを詰め、守りが無い左側を狙うべく、反転しアダユスで薙いだ。

(謀られたー)

右後方に大きく振りかぶれば誰もが右に攻撃が来ると判断し、守りを固める。

その当然の反射をスピアは利用したのだ。

がら空きのナリカワの左半身にアダユスの刃が襲い掛かり腕をはねた。

しかし、ナリカワも幾度も修羅場を乗り越えてきた男のため、アダユスの刃が体を薙ぐ前に倒れこむように身を翻し辛うじて避けきった。

「やってくれる」

失った左腕がそんざ存在していた部分からの流血を一瞥したのち、ナリカワは忌々しげにスピアを睨み付ける。

しかし、左腕を失い怒りに捕らわれていながらも、その実ナリカワは冷静にものを考えていた。

(左腕は失ったが、間合いは見切れた。次に攻めいつてきたときが最後になる)

ナリカワは懐から紐を取り出すと器用に口と右手を使い左腕の切断面から少し上に巻き付け、流血を止めた。

ナリカワは、そのまま立ち上がると先ほどとはうってかわってスピアとの間合いを詰める。

しかし、それもギリギリアダユスが届かない位置。

その意図に気づかないのか、さらにはナリカワは怒りに捕らわれ突っ込んできたと判断したのだろうスピアは、決めにかかる。

「ダメですスピアさん！」

タカナは傷口からの流血を止めたナリカワを見て、冷静さを失っていないことに気づき、スピアの攻めに危機を抱く。

だが、そのタカナの言葉も届かない。

スピアはアダユスを真っ正直にナリカワに降り下ろした。

アダユスはナリカワの鼻先を掠め地に突き刺さる。

「馬鹿め懐に入られた時点でお前は死地に至る！」

リーチが長く、重量級の武器であればあるほど懐に入られたらその時点で勝負は決する。

ナリカワは剣をスピアの心臓を目掛けて突きだした。

「戦いは一手三手先を見据えてするものです。そしてあなたの読み負けです」

スピアは口許に笑みを湛え自分の心臓に向けて放たれた剣の横腹に手を当てて起動をずらした。

「なに!!」

剣はスピアにかすることすらなくスピアの脇を通りすぎ地面に突き刺さる。

ナリカワの背後を取ったスピアは、アダユスの刃をナリカワの首にかけ、たわわに実った稲穂を刈るかの如くナリカワの首と命を刈り取った。

「仇は討ちましたお父さん……」

地に落ちた仇のナリカワの頭部を見ながらスピアは感慨深く呟いた。

その瞳には光ものがあつた。

「見事ですスピアさん。私との修練を覚えていたのですね」

「はい」

戦いを見届けて歩みより問い掛けるタカナに肯定を告げるスピア。

頭に浮かぶはあの修練の日々。

「……」

「スピアさん。あなたに学んで欲しいのは間合い深くにまで入られた時の戦い方です。スピアさんも分かっていると思いますが、アダユスなどの長柄の武器の弱点は懐に間合いを詰められ懐に入られた場合です。それを逆に自分のものに出来れば怖いものはなくなります」

「そうですねが……」

半信半疑のスピア。

たしかに、タカナの言っていることは理解できるし、承知の事実で

あるが、果たしてそれを覆すことが出来るのかと考えた場合、それが出来るとは到底思えなかつたからだ。

「あなたも一度見ているはずですよ」
「えっ?」

「では実践しましょう。アダユスで私に攻撃してきてください」

疑問符を浮かべるスピアを見てタカナはため息をつく、無謀とも思える指示を出す。

「いいのですか」

「構いません。全力できてください。それでなくてはわかりませんか。それと借り物のタツミさん私の後ろに」

「借り物って……」

修練の助っ人として連れてきたタツミを後ろにおく。

つまりタツミを守る対称としておいたのだ。

「それでは」

スピアはすでのタカナのことを信頼していたので、指示に従いアダユスを振りかぶり降り下ろした。

大鎌の帝具アダユスは唸りを上げてタカナに襲いかかる。

後ろに控えているタツミは焦るが、タカナは慌てる素振りも見せず腕を上げなにかをしようと、アダユスの軌道がそれ、アダユスはなにもない地面に突き刺さり、それにつられるようにスピアは前傾姿勢になり、頭を差し出した状況となる。

「なにがあつたんだ!？」

驚愕するタツミと茫然とするスピアに、タカナは微笑みかける。

「スピアさんは帝都で私と逃げるときにまたはずです」

「思い出しました」

帝都を逃げ出した時に追っ手として現れた近衛兵を片付けた戦いだつた。

武器自らが意志を持ったようにタカナを避け、使い手は自ずと首を差し出す。

「これを習得してもらいます。原理は簡単です。今回アダユスは上から下への力の流れがあつた。それをまともに受けると力ない私は勿

論、タツミさんですらもインクルシオを使わなければキツいと思えます。しかし、下への力は強くとも、横からの力には弱い。故に軽く横から力を加え軌道を反らしたのです。さらに言えば、軌道を反らし、さらに自分の意図する位置に誘導することができれば怖いものはありません」

「……………」

以前の修練の一部である。

それを体得しており、さらにはナリカワの動きを読みきっていたからこそその勝利であった。

「タカナ様ああああ！」

「レチエリイさんも来たようなので本部に帰りましょうか」

取り乱したレチエリイの声にタカナは苦笑いを浮かべると、スピアに声をかけた。

「はい」

スピアは地に転がるナリカワの首を取るとタカナに続いて行った。(革命軍の問題は片付けました。後顧の憂いなく存分にしてくれて構いませんよナジエンダ)

晴れ渡った空に語りかけるように心の中で呟いていた。

◆◆◆◆◆

既にアカメはナイトレイドに帰り、日が沈み夜の帳が降りた頃合いであった。

「出来たぞ八丁堀」

「ありがとよ」

政から研ぎ直された刀を受け取り、白刃を眺めた主水は頷き礼を言う。

全く問題ないと。

「これでこの先も仕事を続けられるぞ」

「ああ、そうだな……」

仕事を辞めた政と未だ続けている自分。

どこで道を違えたのか。

なんとなく疑問に思ったが、考えてもしようがないことなので軽く

頭をふり切り換えた。

「またな政」

「ああ、また来いよ」

主水が戸に手を掛けた時だった。

「政……さ……ん……」

弱々しく消え入りそうな声と共に倒れこむような音が。

「今の声はー」

政は主水を押し退け外に出る。

政の脳裏に今までに見てきた悲劇の数々が甦る。

そうはならないでくれと、祈るがこの世界でも叶うことはなかった。

「アニーちゃん!!」

背中から大量の血液を流し、すでに虫の息となっているアニーの姿がそこにあった。

(たしか、政に野菜を運んでくれていたあの娘か……もう長くはねえな……)

傍目から見ても助かることはない、いやここまでこのケガでこれたほうが不思議なほどの容態であり、目も当てられない容態である。

「どうしたんだアニーちゃん」

「政……さ……ん……。実は……」

生きていることが不思議な容態でアニーは語った。

今このような状態に到った経緯を。

◆◆◆

「お父さーん。マサさんに野菜を上げてき……あれ、珍しいお客さんかな」

アニーが政の所から戻ると玄関先でなにやら自分の父と客が揉めている所に出くわす。

客の一人はでっぷりと肥え、脂ぎった顔で金持ってますよと体で表すような生理的に受け付けない人物。

もう一人は隣でヘコヘコしているまるで太鼓持ちのような、弱きをくじき強きを助く。ということをあからさまにしそうな人物である。

「そこをどうにか」

「そう言われても私はこの土地を譲ることはありませんので」

「これだけの金額でもですか」

「ええ、金額ではありませんので。お帰りを」

普段の優しい父からは考えられない剣幕で丁寧な言葉遣いではあるが、客を追い返す父の姿にアニーは何があったのか知りたくなるが、果たして話しかけてもいいのかと思案していると。

「おお、アニー。マサさんの所から帰ったのか」

「うん……お客さん？」

「ああ、この土地を欲しがっているようだな。追いついたが」

アニーを見て機嫌が直ったようだった父の顔が途端な曇ったことから相当腹に据えかねたことが垣間見られたのでその話を続けることはなかった。

—————

揺れる馬車の中で先ほどの男二人が話していた。

「ご主人様はなぜあのような土地に執着するのですか」

平伏するような態勢で裕福そうな男に尋ねる男。

「あの土地はより多くの金と今より更に上のお偉方との橋渡しをしてくれるのですよ。ある計画の概略が書かれた極秘飼料を手に入れてな。どうにかならんものか」

「そう言えば……」

悪い顔をして男は主人に耳打ちした。

「それはいい。行き先をかえろ」

男達を乗せた馬車は帝都のある大柵に向かった。

—————

とある金貸しの前で先ほどの馬車が停車していた。

「その借財書を買収取ろうと言っているのだよ」

「ですが、あの農家の人は一度も滞納をしたことがない人ですので」

困ったように説明する金貸しの主人。

男が思いついたのはあの土地の農家が、去年の不作のために税を納めるために借金をしているということだったのだ。

「そうですか。これほどの店をたった一人の客のために失うことになろうとはねえ」

「!!」

店を見回しながら物騒なことを言う男。

しかし、それは金貸しの主人を震撼させた。

目の前にいる男ヂアーゲは幅広い商いを行っており、表の世界でも、裏の世界でも幅を利かせた人物であり、この金貸しを潰すことなど雑作もないことであることを。

「す、すぐにお持ちいたします」

焦り転がりながら店の奥に下がっていく金貸しの主人を見てヂアーゲは最初からそうすればよかったのをと不機嫌そうに呟いた。

それはヂアーゲを怒らせたことによる避けることの出来ない結末『死の宣告』であったのだ。

一枚の借財書を手にし馬車に乗り込んだヂアーゲは馬車の外で待っていた男に告げた。

「この金貸しを消せ」と。

ヂアーゲは高笑いを残して、一度店に戻り準備を整え、店のがらの悪い男達を連れて再度農家に向かった。

「—————」

「またあんたらか。何度来ても——」

「この借用書の借金を返してもらいにきたんですよ」

「汚いやつだ。いまずぐ返してやるよ」

既に借金を返すための金は出来ていたので、アニーの父は苛立たしげに金を取りに行き、金を叩きつけた。

しかし、ヂアーゲはそれを受けとることもせず唾を吐き捨てた。

「こんなはした金受け取れるか！この借金には十一利息がついて三倍近くになってるんだよ。払えるわけないよな。差し押さえさせてもらうぞ。やれお前たち！」

「へい」

待つてましたとばかりに各々得物を持った男達が家の中になだれ

込み、家を破壊し、家族を外へ追い出した。

「それでも人間か！」

怒りに満ちた表情でアニーの父は横に立て掛けてある斧を掴み、チアーゲに襲い掛かった。

「うおおお！」

「チアーゲ様」

腰を抜かし今にも殺されそうになった所に斧を降り下ろそうとしたアニーの父の後ろから現れた男が、家を破壊していたその金槌を降り下ろした。

「がはっ」

頭を割られ倒れたアニーの父親を踏みつけたチアーゲは疲れたような表情で男達に命令を出す。

「こうなってしまうたらしょうがない。土地の権利書を手に入れたら家族全てを殺して。家に火をかける。必要なのは土地だけだからな」
チアーゲの命令がとんでから間をおかずして家の外からは悲鳴や叫び声が響き、家から上がる業火がうっすらと暗くなつた闇夜を照らし出した。

アニーの家族はほぼ息絶えていたが、アニーは生きており政の所に向かったのだった。

◆◆◆◆◆

「なんて野郎だ」

怒りを瞳に浮かべた政を潤んだ瞳で見つめていたアニーは、震える言葉で最後の言葉を紡いだ。

「マサさん……は……しあわせに……なつ……てね……」

政は血に濡れたアニーの手を握りしめたのち、アニーの瞳を下ろし手を組み合わせそこに寝かせると、鬼の形相で家の中に入り、一本の手槍を持ち出した。

「どこに行くつもりだ政」

「そんなの決まってるだろ!!」

「おめえは忘れたのか。仕事人は私怨で殺しをたらそれはただの殺人にしかならねえ。それにな、秀は言ったんだろもう血で手を汚すな

と。それにアニーは遺言でしあわせになれと言っただろ。おめえはもう裏の世界に戻る必要はねえんだ。全て俺達にナイトレイドに任せるだけでな」

うつむいたまま、ふらふらとした足取りで家の中に戻った政は、再度何かを手に戻つてくると、主水に手渡した。

「俺が以前アニーの父親の農具を直した際に受け取った金だ。これで……」

「ああ」

主水は金を受け取ると袖にしまい、山を降り帝都に帰還した。

—————

「大金を得ることも出来たし、今後オネスト大臣にも謁見出来るようになったし言うことないな」

片手で溢れるほどの金を掴み、片手で酒を煽りながら笑い声を響かせるデアージェ。

すでに、土地の権利書を金にかえ、その際にオネスト大臣との謁見の段取りもつけ御満悦の中、店の中から断末魔がいくつも上がる。

「煩いぞ。何をしている………うわっ!!」

フラフラと扉により開けた所でデアージェは腰を抜かした。

目の前にマフラーで口許を隠した男、主水が立っていたからだ。

「な、何者だ」

「俺がパイプ役になってやるよ………閻魔様とのな」

主水は血に濡れた刀でデアージェの心臓を一突きし、デアージェの命を穿った。

「こりゃあなんだ？」

刀から血を払い、去ろうとした主水の目に一つの書類が目止まり、主水は手に取ると顔色を変えた。

「ナイトレイド殲滅計画概略………タツミとシユラとの人質交換に託つけた殲滅計画か………いいもんが手に入った」

仕事人は仕事に行った先で何かを取得することは許されてはいないが、仲間の命がかかっているこの状況では、そのようなことに構っていることは出来ないの、その書類を懐に納めその場をあとにし

た。

第98話

朝焼けが僅かに山裾を朱に染める中、一人の男がブツブツと愚痴を溢しながら拓けた大地に穴を掘っていた。

「朝からこんなことさせやがって……金貨一枚じゃ割にあわねえな……」

天閉であった。

今から約二時間ほど前、真夜中に突然主水に叩き起こされ、金貨一枚で依頼を出されたのだ。

天閉自体が寝惚けた状態で判断能力が欠けていたことと、主水が有無も言わさぬほどの気迫であったため、その雰囲気に気圧され天閉は依頼を受けてしまい、今になって後悔をしたのだ。

しかし、天閉も受けたからにはと愚痴を溢しながらも行動に起こしていた。



主水は天閉に依頼を出し、久しぶりの自宅で少し体を休めたのち身仕度を整え、主水は宮殿のイエーガーズの詰め所の前に来ていた。

任務という口実があったとはいえ、三日ほど無断欠勤をしてしまったのだ、鬼のようなエスデスが黙っているはずはないと内心ビクビクしながら、詰め所の扉を少し開け、中を覗いてみた。

(いないか……)

中に居たのは、ウェイブとクロメだけのようで、ウェイブは机に積みまれた本を一心不乱に読み耽り、クロメは横でそんなウェイブをニコニコしながら見つめているのだった。

(エスデスがいないのは良かったが、入りづらい……)

なにやら甘い雰囲気の漂う室内に幾ばくの入りづらさを感じる主水。

いくら男女の機微に疎い主水であっても、ウェイブとクロメの間に流れる妙にむず痒く、甘い雰囲気は感じ取れるのだった。

(どうすべきか)

「遅い帰りだな」

(この雰囲気では入りづらい……)

「久しぶりに現れたと思つたら無視か。いい度胸だな中村！」
(しかし、入らないといけないしな)

主水は深く考えているが故に全く気づいていなかった。

一番警戒していたはずのエスデスがすぐ後ろにランを伴い立つていたことを。

エスデスの額に青筋が浮かぶ。

するとエスデスは徐に足が上げ、振り抜いた。

「ぐほあっ!!」

突如鈍い痛みが体を巡り、主水の体は扉をぶち抜き詰め所の壁まで吹き飛び叩きつけられた。

「なにが起こつたんだ!!」

「なに!？」

静寂が訪れていた中、突然扉が砕け、何かが室内に飛び込み壁に大きな音をたててめり込んだのだ、本を読んでいたウェイブとそれを笑顔で見つめていたクロメも呆気に取られていた。

「帰つたぞ」

「あつ、隊長おかえりなさい。それと今の音は?」

扉の破片が舞い散る中、姿を現したエスデスに二人は頭を下げる。

エスデスはウェイブの問いかけに答えることはなく、つかつかと未だに埃が舞う壁の所に向かうと、腕を伸ばし掴むと、ウェイブに向かって放り投げた。

「おつとなんだ!?!つて主水さん!!」

受け止めたウェイブが確認し、驚きの声をあげる。

「主水生きてる?」

クロメは主水をつつき、反応が薄いのを見ると八房を抜こうとする。

「待て待て、主水さんは生きてる」

「ああ、これぐらいで死んでいるならとつくに私の拷問で死んでいるぞ。起きろ中村!!」

「はいー」

エスデスの一喝で主水は飛び起き返事を返す。

エスデスが座った椅子の斜め後ろに立ったランは、クスツと嬉しそうな笑みを浮かべ、主水の隣でウエイブは微妙な表情をし、クロメは残念そうに八房を腰に戻した。

「中村この三日お前が姿を現さなかったことには理由があるだろうから、それは後で聞かせてもらう。それと、セリユーとスタイリツシユは何処にいる？」

エスデスは鋭い視線を巡らせ、室内にいない、二人の団員についてウエイブに問う。

「セリユーは朝現れると同時に見回りに行きました。スタイリツシユは分かりません」

「そうか。ならば今いるメンバーだけで話は進める。後で二人には伝えておけ」

エスデスはランに視線を向けると、ランは頷き資料をめくり、一歩前に進み出て口を開いた。

「先ほどの隊長が出席なさった会議で決まったことを説明します。今日から四日後の昼の十二時にタツミ君とシユラ様の人質交換が帝都郊外の拓けた大地で行われることが決まりました」

「四日後か……」

（資料通りだな）

「一体私がいなかった間に何があったんですか？」

ウエイブが複雑な表情で言葉を溢した横で主水は昨夜手にいれた資料に書かれていた通りと考えながらも、知らなかった体で問いかける。

タツミが捕らえられたことも、シユラが捕らえられたことも主水が帝都に居なかった時に起こったことのため、主水は知らないふりを通さなければならなかったのだ。

「そうか、主水さんはいなかったんですね。実は……」

「そんなことがあったんですか」

ウエイブがこれまでの経緯をかいつまんで説明してくれたのを、驚きの演技をしながら聞き、礼を言った。

「では話を再開します」

ウェイブの説明が終わるのを見届け、ランは再び説明を始める。

「四日後、人質交換にはエスデス隊長とブドー将軍が立ち会われるので、その間皆さんには手薄になった帝都の守備についてもまいります」
「少しいいですか」

「なんだウェイブ？」

気になることがあったのか、少し自重気味に手を上げたウェイブに
対し、エスデスが言ってみろというふう問いかける。

「戻って申し訳ないのですが、帝国はナイトレイドからの要望を受け
入れるのですか？」

人質交換はナイトレイドからの要望であり、それを呑んだのであれば、
どんな条件を課したとしてもそれは帝国がナイトレイドに屈した
ことになる。ウェイブは考えたのだ。

「それは……」

「構わん私が答えよう」

答えづらそうに困った表情をしていたランを制しエスデスが重い
口を開いた。

「やつらの要望を受けたふりをして誘きだし、殲滅するのが今回の目
的だ。故に私とブドーが出ていくことになった」

「タツミはどうするんですか？」

偽りであろうとも一時仲間であり、助けられ、さらには、エスデス
の思い人であることを知っていたからこそ聞きたかったこと。はた
してエスデスはどうか答えるのかと。

しかし、エスデスはその答えづらいであろう問いかけに対しても、
さして気にする素振りを見せず、冷たく言いはなった。

「ナイトレイドと共に私の手で始末する」

「そんな隊長は……」

タツミが始末されるのは分かっていた、しかしそれがエスデスの手
によってということにウェイブは黙って受け入れることができな
かったのだ。

「ウェイブ！」

立ち上がり声を上げかけたウェイブをクロメが止める。

「私は分かる。最愛の人だからこそ自分の手で殺し（救つ）てあげたいってことが」

「そんなことって……」

常識人のウェイブにとつて『愛しているから自分の手で殺す』というのは到底受け入れることが出来ない二人の考えであった。

近頃ランの話を聞き、物事の考え方にも様々なものがあることを知り、それらを受け止められるようになるために知識をつけるべく本を読み漁る日々が続く、実際に多くのことを知り、物事を多角的に見ることができ始めていたが、今回のことには納得できなかった。

「聞きたいことはそれだけか」

「はい……」

「では連絡事項は以上で終了です」

力なく項垂れるウェイブに優しい視線を送ったランは説明を終了した。

「中村少し話がある」

「はっ」

エスデスが部屋を出ていく際に呼び掛けられたため、訝しがりながらも後に続き部屋を出る。

「なんででしょうか？」

「言っただろうこの三日のことを聞かせてもらうとな」

普段と違い真剣なエスデスを見て主水も謀ることなく真実を話すことにした。

「そうか……最近の辺りがきな臭くなってきたからまさかとは思ったが。いい度胸だ私に喧嘩を売ったこと後悔させてやる！」

「いえ、隊長に売ったわけではないと思いますが」

「私の部下に喧嘩を売ったのは私に売ったのと同じことだ」

少し過激ではあるが、部下思いの一面を見て、主水は頬を緩める。「なにが可笑しい。そうか久しぶりに私とスキンシップを取りたいのか」

「いえ、滅相もない！」

ニヤリとどす黒い笑みを浮かべるエスデスを見て、背筋に冷たいものが走った主水はすぐさま冷や汗を流しながら否定する。

「フッフ、まあいい。では今の話をランに伝えて調べるように言っておけ。ランの情報収集力も個飼いの諜報員も侮り難いものがあるからな。それと」

エスデスは大事なことを付け加えるように、またはこれから本題のように新たな話に移す。

「ランに伝えたらすぐにセリユアの元へ行け。最近お前がいなかったためか、はたまたそれ以外の理由かは分からんが元気がなくてな。少し心配していたんだ。私が癒してやっても構わんのだが、中村が帰ってきたのだお前がしたほうがいいだろう」

「分かりました」

主水が頷くのを見て、滅多に見せない優しい笑顔を浮かべると満足そうに颯爽と去っていった。

(部下の様子をよく見てるな)

心暖まる思いと、それとは裏腹に警戒を緩めてはいけないという思いに駆られる主水であった。

少しでも素振りを出せば、そくナイトレイドと見透かされそうな危機感を抱かされた。

「ランに伝えないと」

「主水さんあの依頼でなにか問題でもあったんですか。主水さんのことだから大丈夫だとは思っていたんですが、心配で」

「大丈夫だよエイブ。死体さえあれば八房があるから」

「いえそれでは解決にはなりませんよ」

主水は踵を返し部屋に戻るとウェイブとクロメとランが歩み寄りてくる。

各々対応に違いはあるが、心配はしてきてくれたようになにか温かいものが込み上げてくる。

「いやはや、私はいつものサボリ癖が出たのかと思っていましたよ」

朗らかな笑みを湛え茶化するように話すランであるが、それも主水を信用してのことと思えば笑顔を返す、温かい言葉を付け加えて。

「私はランのように簡単に女をたぶらかし出会い茶屋にしけ混むようなことはできませんよ」

「これはご冗談を」

不敵に笑い会う二人に不味いと思うウェイブは話題を戻す。

「戻りますが何かあったんですか」

主水は軽く思索した。

ランに伝えることは決まっていたが、ウェイブとクロメに伝えてもよいかと。

しかし、ここまで来て二人に話さないのもばつが悪いことと、二人にも警戒するほうが良いだろうという考えから伝えることとした。

「実は……」

「そんなことが」

「気持ち悪い……」

「………分かりました。調べておきます」

ウェイブは大変だったんですねと同情的な、クロメは敵の姿生理的な嫌悪感を持ち、ランはなにか考え込む仕草をする。

「では、私はここで。お二人も中村さんの話からすると何かあるかもしれないので気を付けてくださいね」

「これから大変でしょうからこれをあげますよ」

主水は立ち去り際にランに何かを手渡す。

「これは……危険種レッドスワームドリンク」

精力増強剤であった。

情報収集をしようとすればエスデスの言う個飼いの諜報員メズに頼むこととなる、ならば遅かれ、早かれそそういうことをしてあげることになると読んで主水は、ランに手渡したのだ。

「これはこれはお心遣い痛みいります」

嫌みではないと受け取ったランは軽く頭を下げ、受け取るとその場を後にした。

「ねえウェイブあれにはどんな意味があるの?」

「なんだろうな。分からないな」

二人は主水とランのやり取りの意味が分からず、顔を見合わせるの

だった。

「そうそうウェイブその難しそうな本はなんなんだ？」

日頃のウェイブからするとかけ離れた印象を受ける厚く難しそうな本の数々に主水は疑問を持つ。

「これですか。少し前にランになぜイエーガーズに来たか聞いたんです。その時に、敵討ちと国を内側から良くするためにという目的を聞いたんです。俺もランのように国を良くすることに賛成です。でもランのようにどうすればいいかは分からなくて。それを知るために本を読むことにしたんです」

「そうか、ウェイブも成長したんだな」

「私もそう思う」

クロメも笑顔で主水の意見に同意し、ウェイブの頭を撫で始める。ウェイブは恥ずかしがりながらも、満更ではない様子である。

ランにしるウェイブにしるナイトレイドにしる、国を良くしたいという思いは同じであるが、アプローチの仕方が異なり、ぶつかり合うことになる。

上手くいく方法はないものかと染々思う主水であった。

「じゃあな」

主水はセリユーを探しに詰め所を後にした。

◆◆◆◆◆

主水は宮殿を出るとセリユーを探すために街を歩いていた。

帝都は以前のような暗さは漂ってはいないがいまいち活気が感じられない。

革命軍との戦いが続いたため、大臣のオネストが税を上げ民が窮し、さらには兵役を課しているのが大きく起因していた。

しばらく歩いてみると、泣いている小さな子供と手を繋いだセリユーの姿が。

「どうしたんですかセリユーさん」

「あつ主水君!!」

まるで花開くように満面の笑顔を咲かせるセリユー。

「無事帰ってきたんだ。よかった。この子は迷子みたいなの。お母さ

んとはぐれちやったみたいで」

セリユーは泣かないでと頭を撫で慰めている。

その姿からは正義という名の狂気に駆られていたあの時の面影はない。

「ではお母さんを探しましょうか」

セリユーが子供から聞き出した情報を元に二人は帝都内を隈無く探し、母親を見つけだし親子を対面させることができた。

喜んでいる二人を見つめて、セリユーはどこか羨ましそうにしているように主水には感じられた。

「よかったですね」

「うん……」

セリユーは余韻に浸っているのか僅か影のさした顔をしている。

(エステスの言ってた通りなにか悩みがありそうだな)

そうは思う主水ではあるが、中々聞き出す切っ掛けがつかめない。どうしようかと悩んでいるときだった、

「主水君。最近正義の意味が分からなくなってきた。今まで帝国のために働くことが正義なんだと思っていたの。でもそれで本当にいいのかなと疑問に思うようになってきたの」

おそらく、客観的に見れることになったのか、帝都の闇を垣間見ることになっていたのかもしれない。

もう以前のように盲目的に帝都＝正義と思い込んでいた小さな少女ではなくなっていた。

(劇薬かもしれないがここがセリユーの分岐点かもしれないねえな)

主水は自分を納得させるように頷くと、セリユーに切り出した。

「セリユーさんその悩みを解消することができます」

「本当に」

「ええ、しかし悲しい過去を思い出させることになるかもしれないがそれでも構いませんか？」

真剣な眼差しを向けられたセリユーは、戸惑いを見せるが意を決したように頷いた。

「どんな悲しい過去を思い出すことになってもこの悩みが晴れるな

ら」

「分かりました。ではついてきてください」

主水が歩いていく後に続くセリユー。

しばらく黙って歩いていると、一件の崩れかけた廃墟にたどり着く。

主水が入っていく後に続き、いいのかなという疑問を持ちながらもついていくセリユー。

崩れかけの廃墟は、埃がつもり、所々穴が開いたら天井から光が射し込みうつすらと概要が見えるかというぐらいである。

「少しここで待っていてください」

主水はセリユーにそう告げると奥に入っていく。

辺りを見回していると、主水がボロボロな何者かを引き連れ戻ってきた。

「主水君その人は!？」

「悪徳医師のフヨウという者です。フヨウ以前俺の前で話したことをまた話してもらうぜ」

「は、はい」

フヨウは怯えながら過去のことを語り始めた。

セリユーのトラウマとなり、正義という名の呪いを課すこととなった過去の真実を。

第99話

「セリユーちゃんー！パパに行ってらっしやいのチューをしておくれ」
「うん!!」

セリユーは弾けるような満面の笑顔で頬に唇をつける。

天使のような自分の娘からのキスで感涙を流す。

それもいつもの欠かせない朝の恒例の行事である。

「あなた遅れるわよ」

いつもの恒例のやり取りを微笑を浮かべて見ている妻のセラは軽く忠告する。

これもお決まり、この毎日のやり取りで必ず出勤時刻が後押しされるからである。

帝都警備隊長が遅刻をしては部下に示しがつかないという思いからの忠告である。

「名残惜しいがしようがないか……。じゃあ行ってくる」

心底名残惜しそうな表情を浮かべつつ、妻のセラと唇を交わし二人見送られ家を後にした。

「あらシリユウさん、昨日はありがとうねえ」

「そんなにかしこまらなくてもいいよ。なんかあつたら呼んでくれ雑用でもかまわねえから。皆のおかげで俺たちも食っていけてるんだからよお」

帝都で食料を得られるのも全ては、作ってくれるものがいるから、その民に感謝を示し、働くのは当然と考えていたからだ。

「ばあちゃん元気か」

「おかげさまで。前は警備隊の人に荷物を運んでもらえて本当にありがたかったよ」

「そりゃあよかった。これからもどんな些細なことでもあつたら呼んでくれてかまわないからな」

警備隊の隊舎につくまでに何度もそのような光景が見られる、これも日常の風景。

しかし、このような光景が日常の風景として見られるようになるに

は多くの月日が費やされた。

以前の帝都警備隊は、地位をひけらかし袖の下を要求する、仕事を依頼しても門前払いされる、いちやもんをつけては暴力を振るう等々があり、怠け者の荒くれ集団と民からそっぽを向かれ、憎まれている存在であった。

しかし、この男が帝都警備隊の隊長として就任すると、警備隊内の意識から改革した。

染み付いた悪しき意識は中々払拭されることはなかったが、その男のカリスマ性と、隊長自らが身をただし、行動を起こすことにより帝都警備隊も変わっていった。

次に取りかかったのが、民が持つ警備隊の負の印象を拭うこと。

しかし、それまでの悪行が重なり、それも簡単にはいかない。

話かけようとするだけで避けられたり、無視されたり、うしろ指をさされる始末。

しかし、この男は諦めなかった。

何度無視されても、諦めずコミュニケーションを取る。さらには民が困っていれば頼まれなくても手助けをするといった行動で示していく。

または、危険種が出れば、民を命懸けで守りながら最前線で戦う。

最初はそれでも怪訝な顔をされ、感謝すらされることはない日々が続くが、それでも同じことを繰り返す。

積み重ねればそれは実を結ぶ。

警備隊のそんな姿が民の心に響き、次第に心を開いてくれ、このよくな良好な関係に至ったのだ。

そのように民には真摯に付き合い、偉ぶることもなく誠実に対応することから、尊敬の念と多大な信頼を受けていた。

そしてそれは帝都警備隊においても変わらぬことであった。

家庭では妻子にデレデレであるが、公私は分け、仕事はきっちりとし、部下であつても邪険にすることなく、またきっちり心配りをする。そこから帝都警備隊の部下たちからも慕われていた。

だが全てがそう上手くいくわけではない。

民を第一に考え、正義を希求するため、上役であつても是は是、否は否と物怖じすることなく讒言するため、上役連中には煙たがれる存在であつた。

それが、セリユー・ユビキタスの父シリユウ・ユビキタスその人であつた。

そのようなシリユウに転機となる事件が起こつた。

「隊長今巡回から戻りました。それと……」

「お疲れ様。なにか気になることでもあつたのか？」

帝都の巡回から帰つてきた新入隊員のレヘタの気になる対応に問ひかけるシリユウ。

それは、上司としての威圧感など皆無であり、なんでも言つてみるという懐の広さと優しさが感じられるため、新入隊員も臆することなく気になったことを話始めた。

「実は、巡回先で物々しい雰囲気で民が集会を開いてまして」

民が集会を開くことなどなにも珍しいことではなかった。

しかし、シリユウはその話を聞いた瞬間

表情を変え即座に立ち上がった。

「よく伝えてくれた。少し話をしてくる」

「隊長なにも持たずに行かれるのですか？」

レヘタは徒手で向かおうとするシリユウに問いかける。

物々しい雰囲気を感じたことから危ういと感じたのであろう。

「ただ話を聞きに行くだけだ。そんな中に得物を持っていったらおかしなことになるだろ。信頼を得てはいても人を殺せる得物を持つているだけで警戒心が生まれる。そんな中で話してくれといつても話してくれることはない」

シリユウの言葉をレヘタは噛み締めるように聞いていた。

そんなレヘタを見てシリユウは快活な笑顔を浮かべると、

「それとこの事は誰にも話すなよ。大事になりかねんからな」

とレヘタの肩に手を置き伝えると隊舎を後にした。

(隊長はああ言っていたけどどうしよう)

レヘタはシリユウのことを信頼していたからこそ悩んでいた。

隊長の命に関わる事になったらどうしよう。

そんな最中であつた。

「その雑魚そうな小僧なにかあつたのか？」

「ゴマスーリさま」

ゴマスーリとは、帝都警備隊を統括する文官であつた。

しかし、隊長のシリユウとは真逆の性格をしており、自分より身分が上の者には媚びへつらい、下の者には権力をひけらかし横暴な態度を取ることで有名で嫌われている人物であつた。

故に、部下のシリユウを疎ましく思っている者の一人でもあつた。

しかし、そのようなことをレヘタは知らなかつたことが災いする。

「実は――」

シリユウの上司であれば、何とかしてくれるのではと話してしまつたのだ。

「なんとということだ。よく話してくれた誉めてつかわすぞ小僧」

ゴマスーリはフンツと鼻を鳴らすと小走りで隊舎を出ていった。

◆◆◆

シリユウはレヘタの言つていた集會が開かれている場に赴いてい

た。その場は木々に囲まれた人が足を踏み入れることも少なそうな森の中の寂れた神社であつた。

確かにレヘタの言つていたような集まつていた住民は皆物々しい雰囲気を感じていた。

しかし、それだけでなくシリユウにはどの住民も疲れはて、一樣に暗い雰囲気も纏つているように感じられた。

その様を見て、近頃の世情の動きからどのような集會か当たりをつけていたことが確信に至つていた。

(大体察しはついた。レヘタが気づいてくれなければ大事になつてい

たな)

シリユウは神社に歩み寄る。

「シリユウさま!?!」

足音を聞き付けた見張りの男たちがシリユウを見て困つたような

表情を浮かべる。

恐らくそれがシリユウでなければ各々が持つ得物で襲いかかっていたのは想像に難くない。

「話をしに来た。代表者と話がしたい」

シリユウは簡潔に答えた。

しかし、男たちは躊躇する。

信頼しているとはいえシリユウは帝国側の人間である。

普段の行いから民を思いやってくれていることは分かっていたとしても自分たちの命に関わることであるからこそ完全には信用できず躊躇しているのだ。

「お前達が悩むこともよく分かる。話していることが話していることだからな。では俺を縄で縛れ。そして話が終わったあと信用できなければ俺を殺すがいい」

「!!」

男達は驚きの表情を浮かべつつも、震える手でシリユウに縄を掛けようとした刹那、

「待て、シリユウさまをお通ししろ。もしもこのことを伝える気ならば部下を連れてきててはるはず。それにシリユウさまは信用できる」

白い髭を蓄えた老人が姿を現した。

「村長」

「いつもお世話になってます」

柔和な表情で村長はシリユウを迎え入れた。

神社の中には若い男たち、赤子を抱いた女性などが集まり皆沈痛な色を顔に出していた。

「既に察しはついているがお話頂きたい」

「はい……我々は訴状を出すか、一揆を起こすかを話し合っていたところですよ」

「やはりな……」

シリユウの予想が当たっていた。

住民の疲れはてた表情、そして今年の不作、それにも関わらず引き上げられる税、それらが合わされば当然行き当たるその考え。

しかし、シリユウはその考えに行き当たってから既に対策は考えていたため口を開いた。

「訴状を出せば出した者が死罪、一揆を起こせば一族老等全て死罪になるー」

「それでも、しなくては座して死ぬしかないのです!!同じ死ぬならば……」

村長は、嗚咽をもらし涙を流し始める。

それと同時にそこに集まっていた住民も同様に涙を流し始めた。

「ああ分かつている。だからこの件は一時俺に預けてくれ。悪いようにはしない」

「分かりました。シリユウさまにお任せします……」

シリユウは知らなかった。

この話を裏から聞いているものがいたことを……

◆◆◆

「オネストさま。大変なことが」

「なんですかゴマスーリ」

肉にむしゃぶりつきつつ、怪訝な顔つきで厄介げに答えるオネスト。

オネストはこの時副大臣というチョウリの部下の立場であった。

「実はこのようなことがー」

ゴマスーリはさも自慢げに今回の一件をオネストに伝える。

オネストも肉を注視しつつも僅かに耳を傾ける。

ゴマスーリは中々に有用な情報を持つてくることがあったためだ。

「まったくたつたあれほどの税が払えないとは。それよりもたしかに厄介なことですね」

オネストは肉をくわえたまま眉間にシワを寄せる。

しかし、何かを思いついたのか、軽く歪んだ笑みを口許に浮かべると、一端肉を置くと続ける。

「ならばこの際なにかと邪魔だったヤツを消すとしましょうか。そうすればヤツを重用していたチョウリの氣勢も削ぐことが出来る」

オネストの述べるようにシリユウとチョウリは同じ志を持っている

たため、チョウリはシリユウの力となっていたのだ。

また逆にシリユウの行いも陰ながらチョウリの役にも立っていたのだ。

これが、上役に疎まれながらも、どうにも出来ない理由であった。

オネストは軽く手を叩くとゴマスーリの背後に陰が現れる。

「お呼びでございますかオネスト様」

「ええ、あなたにしてもらいたいことがあります」

「まさか……………羅刹四鬼!!」

ゴマスーリは振り返ると、恐怖に腰を抜かした。

羅刹四鬼というオネスト直属の暗部がおり、四人それぞれがまさに鬼のように強く、その姿を見て生きていた者はいないとその存在は真しやかに噂されていたが、まさかこの目にする必要があるとは思ってもよらなかったのだ。

「してもらいたいことがあります」

「おおせのままに」

四人は深々とオネストに対し頭をたれた。

◆◆◆

「あなたお疲れではないのですか」

セラはお茶を机に置くとなにか書状をしたためているシリユウに問いかけた。

「ああ、あと少しで終わる。これを明日までに書き上げないといけないんでな。セリユーはもう寝たのか」

「パパにお話聞かせて欲しかったのにつて少しむくれていましたよ」

「そうか。悪いことをしたな。明日はゆっくり話してあげないとな」

穏やかな時を打ち破るように突如扉が碎け散る。

「ごくんくばくんくわくくシリユウユビキタスの命をいただきに参りましたくく」

不気味な長身の男が残骸と化した扉を乗り越えながら姿を現した。

第100話

薄い雲に覆われ月も隠れた夜の闇の中で、扉が壊れ家の光が漏れでる一軒の家を見詰める大小二つの影があった。

大きい影は、身の丈二メートルはあるのではないかという巨大を持ち、上半身裸の鎧のような筋肉を持つ男。

小さい影は露出過多な様相の口許にうっすらと妖艶な微笑みを浮かべる美女であった。

「ねえねえシユテン、ノバラ勝てると思う？カモクもいるけど役に立つか分からないしい？」

「簡単にはいくまい。シリユウという男、最近では鳴りを潜めてはいるが、以前は一度戦場に赴けば血の雨が降ると言われ、誰もが背を向けて逃げたというほどの槍の使い手であるからな」

シユテンが述べるように、シリユウは帝都でも一番の槍の使い手であり、右に出る者はいないとまで言われていた男であった。

「そうかあ、ノバラ死んじやうのかあ。まあいいけどねえ、ノバラが死んでも戦闘狂のイバラっていう後継ぎがいるみたいだしねえ」
「だがな」

仲間が死ぬかもしれないという最中でありながら、ケラカラと笑いながら話す女性に、深いため息をひとつはきつつも、逆接の言葉を継ぐシユテン。

「地の利はノバラにある」



「大層に人ん家の扉壊しやがって。弁償してもらおうからな」

シリユウは怯えるセラを庇うように前に立ち、軽口を叩きながら家に土足で入ってきた二人の男を睨み付けた。

一人は長身の男でラリったような汚れた瞳でニヤニヤと嫌悪を抱かせる笑みを浮かべる不気味な男、二人目は、深編み笠を被り錫杖を携えた虚無僧のような男であった。

両極端な見た目ではあるが、共に纏う気配は尋常なものではなく、シリユウは油断なく二人の動作を観察していた。

「ピリピリと肌を刺すような殺気、すげえなあイキそうだあ」

一般人であれば意識を失ってもおかしくないほどのシリユウの殺気の込められた視線を受けるノバラだが、怖れるどころか恍惚の表情を浮かべている。

反して、カモクは無言で佇むのみ、逆に不気味な雰囲気纏っている。

(セラとセリユウは俺の命にかえても守り通す！)

シリユウは覚悟を決めていた。

敵が強大であろうが臆することなど無かったシリユウではあるが、今回は全てに於いて不利な状況であったからだ。

第一にセラの身を一番に考え護りながら戦わなくてはならないこと。

守勢を取ることは然程難しいことではない。しかし今回は自分ではなくセラを護らなくてはならないのだ、手練れの敵を相手にすることによって難易度は遥かに高くなる。

しかし、そのような状況であったとしてもシリユウにとって自分の身は二の次、三の次であり、セラだけはどんなことがあるとも護ると心に決めていた。

第二にシリユウの得物は槍であり、屋内のような狭い中では圧倒的に不利になる。

それらを知っていや、熟知した上で羅刹四鬼は家にいる所を狙ったのだ。

「じゃあ羅刹四鬼ノバラ行きまーす。カモクは手を出すなよ！」

(羅刹四鬼だと。オネストの個飼いの暗殺集団実在したのか)

「……………」

納得いったような表情のシリユウと、無言で何をするともなく佇むカモク。

仲間でありながら何を考えているか分からないことからノバラは苛立たしげに舌打ちをしつつ狭い家屋の中で一踏みでシリユウの間合いに入り込んだ。

「ひゃっはああああ!!」

「くっ……」

「あなたっ!!」

ノバラの拳がシリユウの鳩尾にめり込みシリユウの体がくの字に曲がる。

普段のシリユウならば避けることなど容易かった。

しかし、今は後ろにセラがいる状態でありかわすことは封じられていた。

「無防備なヤツを一方的に弄ぶことほど面白いことはないねえ」

舌舐めずりし、口許からヨダレを滴らし快樂に満たされた表情で殴り続ける。

シリユウは鳩尾の一撃を受けた後に痛みに体を支配されながらも、その強靱な精神力で持ち直し腕を交差して防御の体勢を取っていた。

しかし、ノバラの攻撃力も生半可な物ではなく明らかにシリユウの体にダメージを蓄積させていた。

「うぐっ……」

「ひやはははははは!!」

興奮が頂点に達したのかノバラは笑いを響かせ絶えず攻撃を続ける。

体が左右に大きく振れ今にも倒れそうになるが、シリユウの目は死んではいなかった。

鋭く何かを狙っていた。

「死ねえええええ!!」

「てめえがな!」

ノバラが留めとばかりに振りかぶったその僅かな隙をつき、シリユウはノーモーションで拳を放つ。

「がはっ!」

鈍い音を立ててシリユウの拳が突き破らんほどの勢いで腹部を深く抉り、それと同時にノバラは内蔵を損傷し吐血し、腹部を押さえ一歩二歩後退りをした後地に頭をつけて踞った。

起死回生の一撃、興奮したことにより攻撃一本やりになり出来る限りの隙を伺っていたシリユウが、コンマ何秒という刹那の隙を確実に

捉えたのだ。

「まずは……一匹目だ………なっ!!」

シリユウはほんの僅かの時間ではあるが油断をした。

そのようなコンマ何秒の世界でさえ、この戦いの中では致命的なことであった。

シリユウの背後にいたはずのセラの姿が消え、カモクの腕に捕らえられていたのだ。

「あ、あなた………」

「セラ………ッ」

何よりも大事に思っていたものを奪われたことによる自分への怒りにシリユウは身を震わせた。

しかし、それと同時にカモクの恐ろしさにも気づく。

(気を抜いたとしても、俺がきづかなかつただと………)

確かに気を抜いたのは事実だが、それであってもセラに近づけば気づかないはずがない。

「ゴホッ………ガハッ………良くやったカモク……お前はそれぐらいにしか役にたたないからな……そのまま押さえておけよ」

生半可なダメージではないはずではあるが、ノバラは体に鞭をうち立ち上がると、目を血走らせシリユウを睨み付けた。

その瞳は憎悪と殺気に満ち溢れ、シリユウを殺すこと以外考えられなくなっていた。

「動くなー守るなーそうしなければ分かってるな」

「………」

シリユウは観念したかのように瞳を閉じると腕をだらりと下げ、ノバラの命令通りなすがままにされることを受け入れた。

わずかでもセラが生きていられるならばとシリユウは賭けたからだ。

「あなた私のことは構わずに……うっ……この者たちを」

セラは首もとに突きつけられた刃で首に傷を負いながらも臆することなく立ち尽くすシリユウに声をかけた。

「セラ……!!すまん……俺にはできん……お前を見捨てるなんて……」

「よし、そのままでもいいよ。妻だけは生かしておいてやるからな(バカがなぶり殺したあとこいつは犯し尽くして殺してやる)」

ニタリと口許を三日月のように吊り上げるとゆっくりとシリユウに歩み寄った。

ノバラの影がシリユウを覆い見下すように見下ろしつつ、右拳を振り上げ、振り下ろした。

「ぐはっ!」

「あなた!!」

右拳はシリユウの顔面を打ちシリユウはそのまま吹き飛び壁に叩きつけられた。

「……」

「あれ?なんだろ大きな音が?」

セリユウは目を擦りつつ体を起こすとベッドを出て音の出所に向かった。

普段であれば一人でトイレに行くことさえ躊躇するセリユウであるが、今回はその恐怖さえも押さえ込むほどの嫌な予感がしていたためだ。

「パパ、ママ?」

嫌な予感で高鳴る鼓動を感じながらもセリユウは音の出所に向かう。

すると音だけでなくセラの泣き声交じりの悲痛な声がセリユウの耳に届いた。

「ママの声!」

今まで聞いたことの無いほどの胸を締め付けられるほどのセラの声。

セリユウは居ても立ってもいられず走り出す。

「ママ!えっ!!」

セリユウが勢い良く扉を開くと押さえつけられ首もとに刃を突きつけられ血を流すセラの姿と、見たことのない長身の男が背を向けて拳を振るい続ける姿が。

「セリユウ来ちゃだめ!!逃げなさい!!」

「ママを放せ!!」

セリユーはセラの言葉を聞き入れることなく走り出しカモクに体当りする。

不意をつかれたことと、母を助けたいという強い思いからでた火事場のバカ力が重なることにより、カモクはよろけセラを手放した。

「ちっ、ガキが居やがったか。もういい殺せカモク!」

「……………」

カモクは即座に身を反転させると、刃を捨て手近にいるセリユーに向かつて錫杖を振りおろすべく振りかぶる。

「セリユー!!」

痛みとダメージで朦朧となる意識の端で、視界が最愛の娘に訪れようとしている避けようのない「死」を捕らえる。

(ふざけるな!・ふざけるな!・ふざけるな!!動け体!!今動かなくていつ動くんだ!!)

もう動くことはないと思われたシリユーではあったが、最愛の娘を護るため、アドレナリンが溢れるほど体を巡り、痛みすらも押さえ込み立ち上がった。

セリユーは自分に振り下ろされる死を運んでくる錫杖を茫然と見詰めるしか出来なかった。

小さな子供が大人の、しかも戦いなれた男の攻撃を避ける術はない。

錫杖は無情に振り下ろされグシャツという鈍い音と共に血が吹き上がる。

防衛本能から瞳を閉じていたセリユーだが頬を打つ温かい何かに気づき恐る恐る瞳を開ける。

「セリユー……………だい…じょ…う…ぶ……………」

涙を流しつつも優しい笑顔を浮かべたセラが口許から血を流しながら途切れ途切れに最愛の娘のセリユーに問い掛ける。

それは、セリユーを守れたという安心した気持ちから流れた涙だったのかもしれない。

「マ…………マ……………」

失い倒れこんでいるノバラを首を掴み外に放り投げた。

ノバラとカモクは家の壁を突き破り夜の闇の中へ吹き飛んでいった。

「セリユウ、パパは野盗を凝らしめてくるからここにいろんだよ」

優しく頭をなで、向きを変えると再び怒りの形相で外に向かった。

この際セリユウに、男達が羅刹四鬼と伝えなかったのは、今後セリユウが命を狙われなくするためである。

帝国の羅刹四鬼の飼主であるオネストならば、その存在を知っている者は生かしてはおかないのではとシリユウが考えたためである。

「あれえ!?カモクとノバラが飛んできたよ」

「二人はもうだめだ。逃げるぞー!」

シユテンは女を抱えると走り出した。

「どうして逃げるのよお」

「二人が鬼を呼び覚ましてしまったからだ。それにオネスト様に言われている犠牲は最小限に留めろと」

シユテンは振り返ることなく髭を夜の寒風に靡かせ走り去った。

「……………」

「クソヤロウ!」

カモクとノバラが起き上がるのを怒りの滲んだ瞳で見下ろすと、シリユウは槍を構えた。

「セラに会ってからは決して外に出さなかった俺の残虐な面をてめえらに冥土の土産として見せてやる。恐怖に顔をひきつらせて地獄に墜ちろや!!」

夜の寒空にシリユウの怒号が響き渡った。

第101話

存在するのは民家から漏れ出る光のみの夜の帳が降りきった暗闇の中で対峙する三つの影。

その内の一つが動きを見せた。

「来いよ。さつきまでのやる気はどうしたんだよ」

「……………」

問い掛けられたノバラは答ええない、いや答えられなかった。

シリユウから発せられる目に見えるほどの殺気がノバラを呑み込み、身動き一つ、さらには呼吸することさえ困難にさせていた。

ノバラを支配するのは先程まで存在していたシリユウに対する殺意ではなく、恐怖のみであった。

「答ええないならこちらから殺しに行くか…」

シリユウが一步踏み出す所でまるで陽炎が揺らめくようにカモクの姿が闇に溶け込む。

しかし、それを歯牙にもかけずシリユウはノバラのみに視線を向けたまま歩みを続ける。

「ひっ!!」

腰から砕けノバラが尻餅をつくや否や血飛沫と共に腕が宙を舞う。

「えっ……………うがああああ!!」

突如襲いかかる壮絶な痛みにもノバラは腕の切断面を押さえ踞る。

しかし、それと同時に全身を走るその痛みがノバラを恐怖という名の呪縛を解き放つ。

痛みという明確な感覚が抽象的な恐怖という感覚を越えた時だった。

「くたばれええええ!!」

我に返ったノバラは踞まった姿のまま体全体から鋭い針が突き出てシリユウを襲う。

まるで剣山のような姿と化したノバラ。

それは初見であれば避けきけることは不可避であるノバラの必殺技であった。

危険種レイククラークを摂取し続けたことにより、体が軟体化しており、皮膚や体組織を自由に操ることが出来、それにより体から硬質化させた皮膚を針のように突き出させるノバラにとっての奥の手。今まで貫けなかった者は存在しなかった。

盾も甲冑も兜さえも貫き、命を思うがままに奪ってきた。

故にノバラは痛みに顔を歪ませつつもうつすらと笑みを浮かべた。

目の前の自分を恐怖に縛っていたものを排除出来たと。

しかし、そんなささやかな希望をも打ち砕く声が。

「お粗末な技だな」

声に驚き顔を上げたノバラの前に、無傷のシリユウの姿が。

「な、なんで」

穴だらけになって死んだんじゃというノバラの問いかけに今度はクリユウがため息交じりに苦笑する。

「危険種ラー ज्याマアラシの方がよっぽど上手く攻撃してくるぞ」

冷笑を浮かべるシリユウの足元に切断された針の山が。

一瞬の予備動作からどのような攻撃をノバラが画策しているのかを読み切り対応したのだ。

絶望に青ざめるノバラの顔面をシリユウは蹴り上げる。

血を吹き上げ吹き飛ばすノバラ。

シリユウの体も既に限界に近づきつつあるのだが、それを越える怒りが、ノバラを簡単には殺してはならない、十分にいたぶって殺すという指示を送っていたのだ。

地に墜ちまるで痙攣するようにビクビクと蠢くノバラに向け足を踏み出そうとしたシリユウが足を止める。

刹那シリユウの鼻先を錫杖が掠め地を抉る。

「!!」

シリユウの真横になんの前触れもなく現れたカモクが振るった錫杖であった。

しかし、それを振るったカモクの笠ごしにカモクの表情を伺うことは出来ずとも、その息遣い等から驚愕の色を感じとれた。

なぜ避けることが出来たのか？

避けられるはずがない！

それがカモクの疑問。

カモクは相手に知覚させないように、気配、姿、音を消すことが出来、それを武器として敵を暗殺してきた。

気づかれることなく全ての相手は死んでいった。

中ではなぜ死んだのか分からずに死んでいった者も多かれ少なかれいたであろう。

しかし、シリユウは嘲笑うようにそれを簡単に避けきったのだ。

「お前の錫杖が降り注ぐ際にそよ風が来たから分かったんだよ」

シリユウの槍が鋭く闇夜を切り裂くように二度カモクを穿った。

刹那舞い散る紅きカモクの血潮と両腕。

「ウグツ」

今まで何が起ころうとも一言も発することがなかったカモクが低い唸り声を上げたのだ。

口許を軽く上げたシリユウがカモクの背後に回り込み槍を三日月を描くように振るう。

突如崩れ落ちるカモク。

「セラの苦しみには到底及ばないが……」

シリユウは空いた左手でカモクの首を掴むと天高々と放り投げた。

数秒後闇夜に鳴り響く大きな水音。

近くに存在する川にカモクを投げ込んだのだ、腕と足の腱を切られもがくことすら封じられた状態で。

『溺れる者は藁をも掴む』

しかしその術をも腕を失ったことにより奪われ、立ち泳ぎも足の腱を切られたことにより封じられている。

全ての救いの道を尽く奪われたことによる恐怖はどれ程のものか。

さらには、着物が水を吸い重くなり、カモクの体を暗い深みに引きずり混んでいく。

カモクには、その感覚が今まで殺してきた者が服を掴み地獄の底に引きずり混もうとしているというように感じていた。

カモクは恐怖と苦痛と絶望に苛まれたまま闇に包まれた川の底に

沈んでいった。

「……………」

「あとはお前だけだ」

川から音が消える同時にシリユウは冷えきった表情で歩き出す。

シリユウの携えた槍の穂先からカモクの血潮が滴り落ちる。

その血液の地を打つ音が近づく毎にノバラの絶望が高まり恐怖に顔をひきつらせる。

どのように想像しても自分が何も出来ずに無惨に殺される像しか浮かばない。

その絶望から羅刹四鬼としてのプライドをかなぐり捨て潰れた顔のまま地を這いつくばりまるで虫のような不様な姿で逃げて行く。

少しでもシリユウから離れたい。

これが夢であればどれ程神に感謝することか。

今まで神など信用せず、あまつさえ自分が神だとまで思い上がっていたノバラが、神頼みするほどまで追い詰められていた。

「お前だけが逃げられるとは思ってないよな」

後方から聞こえていたはずの水音が消え、シリユウの声が這っている進行方向の先から聞こえていた。

ノバラは極度の恐怖から股間を濡らしていた。

「た、助けてくれ。俺はオネスト様に命令されただけなんだ」

地に頭を打ち付け土下座して懇願するノバラ、その勢いは地にめり込むのではと思えるほどで、すでに暗殺者として見るかげもない。

そして暗殺者として一番してはならない依頼者をばらすという失態まで犯していた。

暗殺者であればどのような拷問を受けようとも黙して語らず座して死を待つ、それが暗殺者としての鉄則であった。

「それぐらい知っている。しかし行動に起こしたのはお前だ。責任はその命をもって償うのが筋つてもんだろ」

冷笑を浮かべたシリユウは徐に槍を構え、そして突きだした。

まるで五月雨のように突きが降り注ぐ。

そしてその全ての突きが恐ろしく絶妙に急所を避けて穿っている

ので激痛のみが限りなく訪れる。

その痛みから逃れたいという切望から既にノバラは『死』を望むほどにまで至っていた。

しかし、激痛を本能的に押さえるために意識が飛びそうになる度に、新たな激痛が舞い降り意識が飛ぶことさえも許されない無限地獄。

ノバラには永遠にも感じたであろう。

すでに体は肉片と化し、穿つ部分が無くなったことによりノバラは死という救いを得ることが出来たのだ。

「セラ……………仇は取った……………ぐっ」

痛みを抑えていたアドレナリンがきれたのか、シリユウの体に痛みが走りその場に膝をついた。

「シリユウさん大丈夫ですか」

近隣の家の扉が開かれ人々がシリユウに駆け寄ってくる。

外から伝わる音が命の危険を知らせていたため、息を潜めて家に閉じ籠っていたが、音が聞こえなくなったために危険はさつたと判断して外に出てきたのだ。

「おいシリユウさんが大変だ！誰か医者を呼んでこい！」

「ああ、たしか警備隊の主治医はフヨウって医者だった。そう離れてはいないから行って呼んでくる」

男の一人が医者の方を呼びに走り、その場に残った他の者に抱えられて家に運び込まれた。

—————

「パパ……………」

「セリユウ……………パパは大丈夫だ……………」

シリユウは大粒の涙を流すセリユウを安心させるべく体を横たえつつ笑顔で頭を撫でながら諭すように告げる。

満身創痍のため話すことすらキツイのだが、セリユウを第一に考えるシリユウは痛みを堪えて安心させるべく笑顔を作ったのだ。

「シリユウさんフヨウ先生を連れてきたよ」

「これは酷いな」

男の後に続いて入ってきた白衣を羽織った医師フヨウは僅かに表情を曇らせ呟いた。

「これから治療をする。皆は外で待っていてくれ」
「でも」

「セリユーちゃん先生に任せて外で待っていていようね」

シリユウのことが心配で一度は拒みかけたセリユーだが、他の者に諭されて何度も何度もシリユウを振り返りつつ外に出ていった。

—————

「痛むでしょうから麻酔をかけます。これで痛みから解放されますよ」

フヨウは靴から取り出した注射を筋肉質な二の腕に射し、意識が混濁していくシリユウに更に続けた。

「世のしがらみからも解放されますよ」

（何を……くっ……セリユー……）

すでに声さえもでない状態であった。

そして帝都警備隊長シリユウ・ユビキタスは眠るようにその鼓動を止めた。

愛する娘をこの世に残し……

（さすがオネスト様。読みがずば抜けている。酷い怪我であったがシリユウであれば死ぬことはなかっただろうからな）

フヨウは昼下がりに思いを馳せる。

◆◆◆

麗らかな陽気の昼下がりであった。

フヨウが、地下の薄暗い室内で、借金の肩に預かった献体に新薬を試し打ちしている時であった。

「先生に会わせて欲しいと来ている者がいるのですが」

「暇ではないと伝えて帰らせろ」

「しかしオネスト様からの遣いと申しておりますが」

「オネスト様」

フヨウもオネストという名前をたびたび耳にしており、日の出の勢いということから面識を得たいと考えている時だったため、取るもの

も取らず地下室を後にした。

「オネスト様がこの私に何の御用でしょうか」

頭を下げ伏しままオネストの遣いと言っていたゴマスーリに問い掛ける。

畏まった様子に気をよくしたゴマスーリは、勿体ぶりながら書簡を懐から出し告げた。

「オネスト様からお前にあてた書簡だ。即座に目を通せ」

（小役人が偉ぶりおつて）

その態度にフヨウは苛立ちを覚えたが、気にしていないように装い書簡を受け取ると一礼して目を通した。

「今夜そちらに帝都警備隊長シリユウの治療の要請が来るはずだ。その際にシリユウに永遠の眠りを授けるように。その暁には、我が御抱えの医師として遣えることをここに約束するものとする」

一読し終わると再度書簡を天に掲げ深々と一礼をし、ゴマスーリに伝えた。

「慎んでお請け致します」



「これでよろしいでしょうか」

媚びへつらうように主水に問うフヨウ。

主水は能面のような無表情で、セリユウは流れ落ちる涙を拭うこともせず、その場にペタリと腰砕けの状態になっていた。

賊に襲われたと教えられていた裏に存在していた真実。そして防衛本能から無意識に記憶の底に封印していた記憶が甦り、それら全てがセリユウに重たくのし掛かっていた。

嗚咽を漏らしながら「パパ…ママ…」

と慟哭するセリユウだったが、思い立ったようにまるで幽鬼のようにフラフラと立ち上がる。

瞳は深い闇に沈み大粒の涙を湛え、腕に装備している虹色のガントレットからは凍てつくほどの冷気が吹き荒れ辺りを白く染めている。

絶望に沈んだセリユウの心象を明確に表しててた。

「ヒイヒイツツ!!私は全てを話したんだ!それに私は本当はしたく

はなかつたんだ！それでも無理矢理オネストにさせられたんだ！！私は悪くない!!」

目前に迫っていたセリユーに対し狂ったように喚き散らずフヨウ。「主水君……………」

「虫けらのように幾多の命を奪ってきた男です」

端で聞けば意図が全く分からない会話であるが、二人の中では理解しあっており、セリユーは主水の言葉に軽く頷くと、腕を振り上げた。「パパの仇だツツ!!」

「やめてくれええええ」

白い空気を纏い唸りをあげて繰り出された拳はフヨウの顔面にめり込むと同時にフヨウを瞬間的に芯まで凍結させ、見事に人間の醜さを凝縮した彫像を作り上げた。

(一応俺の仕事だからな)

主水は肩で息をするセリユーを横目に、帯から鞘ごと刀を抜くと、一撃で氷の彫像と化したフヨウを打ち砕いた。

しばらくセリユーのすすり泣きが廃屋に響いていた。

主水は無言でセリユーに寄り添うことしかできなかった。

そしてどれ程の時間がたったのだろうか、穴の空いた天井から淡い月光が部屋に注ぎ込む中で、セリユーが救いを求めるように主水に問い掛けた。

「私はどうすればいいの。パパの仇は討てたけど、まだ黒幕も討ててないし、もう帝国の為には働けないよ……………」

今まで帝国の正義を妄信的に信じイエーガーズで働いてきた。

しかし、真実が明らかになった今としては、帝都〓オネストという考えに立てば

帝都はセリユーの仇ということになるのだ。

「私はセリユーさんに正義を教えるといつてここに連れてきました。過去のお父上の在り方を聞きそれが分かるはずですよ」

ここでオネストを討つために革命軍に入れと言えば、今のセリユーならば加入したかもしれない。

しかし、それでは根本的な解決にはならず、セリユーは悩み続ける

ことになる。

故に、主水は別の道を取ったのだ。

「お父上が命をかけてまで護ろうとしたものは何ですか？」

「パパが護ろうとしたもの……」

「はい」

廃屋に静寂が訪れる。

季節柄外から虫の鳴き声が聞こえてくる。

しばらくその状態が続いた後に、セリユーはポツリと呟いた。

「ママや私、そして帝都の人」

「ええそうです。お父上は自分の身を呈して、セリユーさんを、セリユーさんの

母上を、そして帝都の人々を護っていたんです」

主水は答えを言わずにあとは分かれますねと言うように途中で言葉を止め、セリユーに振った。

「パパの正義を、意思を継いで帝都の人を護れば」

「そうです。答えが見つかりましたね。オネストや帝国の為に働くのではなく、帝国の人々のために働けば良いのです」

「うん。パパが護ったものを私も護る！」

再び力強さが戻ったセリユーの瞳を見て主水は軽く微笑む。

まるで自分の娘の成長を喜ぶように。

「でもね主水君。私はパパを殺したオネスト大臣を許せない」

実際にシリユウを殺すことを企てたのはオネストであり、自らの手を下さずとも仇はオネストなのである。

「断言は出来ませんが、いずれ敵討ちに適した時期が必ずやって来ます。それまでは我慢してください」

「うん………」

主水を全面的に信頼しているセリユーは渋々ではあるが了承した。「では帰りますか」

主水が廃屋を出ようとセリユーに背を向けたその際、急にセリユーが主水の背に抱き付いてきた。

「主水君は絶対に私を置いてどこにも行かないでね」

まるで懇願するように背中に顔を埋めてセリユーは呟いた。

「……………」

「お願いだから……………置いて何処にも行かないって約束して」
「……………」

主水は答えられなかった。

単純に「はい」ということは簡単であった。

しかし、それは偽りになりうる答えである。

今後帝国と、エスデスやブドー、左京亮と戦うことになれば、死ぬことの方が可能性は高く、生き残れるとは断言出来ないからだ。

主水はセリユーに対しては嘘偽りはつきたくなかった。

再び心に大きな傷を残すことになるのだから。

「うう……………だめなの……………」

涙声まじりに主水の背中から離れるセリユー。

主水が振り返ると、セリユーは俯いて涙をポツリポツリと落としていた。

父親を、母親を、そして師匠のオーガを想い出しているのだろう。
「すいません。セリユーさんには嘘はつけませんので」

主水はすすり泣くセリユーを抱き締めることしか出来なかった。

第102話

窓を通して朝日の陽光が射し込み新しい一日が始まることを告げる鳥の囀ずりが聞こえてくる。

しかしそんな清々しい朝がやって来たとするものの主水は目の下に隈を作り疲れきった顔をしていた。

（腕が麻痺して眠れなかった……）

一睡も出来ず虚ろな目をした主水の真横には、主水の腕を枕として主水とは対照的に気持ち良さそうに静かに寝息をたてるセリユウの姿が。

昨夜セリユウの

「私を一人にしないで何時までも一緒に居て欲しい」

というセリユウの問いかけに答えられなかった主水に対しセリユウは、

「それなら私が主水君から離れなければいいんだ」

と主水から離れようとせず、家にまでついて来て、風呂やトイレ以外離れようとせず、主水の横に寝ているという現状に至っていた。

「セリユウさん朝ですよ起きてください」

「う〜ん……主水君おはよう」

まるで小動物のような愛らしい笑顔で嬉しそうに抱きついてくるセリユウ。

（これは!!）

セリユウの髪から甘い芳香が漂い主水の鼻腔を攪り、女性特有の体の柔らかさが主水を刺激する。

主水にとってセリユウは娘のような存在ではあるが、さすがにここまでされてしまったら男の性で何か微妙な気分になってくる。

しかも悪いことに朝特有の男の整理現象も起ころうとしていた。

「セ、セリユウさん。早く起きないと遅れてしまいますよ!」

理性を総動員して自分を諫めセリユウから離れ身仕度を始める主水。

セリユウはそれを名残惜しそうに見ていたが、体を起こし主水同様

身仕度を始めた。

——

約一時間ほどで身仕度を整えた二人は家を出る。そしてここでもセリユーは主水の腕にしがみつきながら笑顔で歩いている。

二人にとつては、恐らく親子のような感覚で腕を組んでいるのだろうが、傍目から見ればそれは違う。

朝からバカツプルがイチャイチャしているように見える。

そして、客観的に見てもセリユーはその整った容姿から見た目的にも上位の部類に入る。

故に主水は羨望と嫉妬の目に晒されることになるのだった。

街の男達の思いつきり負の感情を込められた視線を背に受けつつ歩んでいく中で、大きな広場に近づいた際、なにやら怒鳴りあいのような喧騒が耳には入ってきた。

(なにかあったのか)

主水は朝つぱらから次々と起こるゴタゴタにため息を吐いていると男が走り寄ってくる。

初めて見る男は、主水を見た後セリユーを見て明らかに不快そうにギリツと歯噛みした後、表情を戻し主水に告げた。

「お役人様良いところに、今広場で言い争いになっている者がいますのでどうか仲裁してください」

男は主水の手を掴むと走り出す。

男は何故か手が潰れるのではと思えるほどの力で主水の手を掴んでいた。

(何か背筋にヒヤツとするもんが走ったが……まあいい。こいつも他の奴等と同じで俺に苛ついたんだらうな)

再度疲れた顔で主水はため息を吐くのだった。

主水が広場に足を踏み入れると人だかりができ、その中心で怒鳴りあいをしている者が。

当事者らしきものは三名、一人は大柄な男、その傍らにオロオロしているショートカットの若い女性、対しているのが若い男、いや天閉

であった。

そして、大柄の男と若い女性もどこかで見たことがある顔であった。

(天閉とたしか………そういうことか)

合点がいった主水は横にいるセリユーに辺りの人だかりを納めて欲しいと伝え、自分は人だかりを掻き分けて争いの中心に入っていた。

「おい、朝っぱらから騒動起こしやがってお前ら三人ともちよつと来い！」

主水は無言を言わず三人を引き連れそして、呼びに来た男も事情を聞くということに伴い路地裏に消えた。

—————

路地に入り誰の目も、耳も届かなくなったことを確認した瞬間、天閉が瞳を吊り上げ主水に詰め寄った。

「どういうことだよイエーガーズ！俺が汗水流して働いて終わったことを伝えに行くといエーガーズはあんな可愛い娘を家に引き込んでお楽しみでしたって、納得できねえぞ!!」

何故か涙目で堰を切ったように文句を主水に浴びせかける天閉、昨夜仕事の終わりを告げに来た時にセリユーと腕を組んで家の中に入っていくのを見ていたらしい。

「天閉様、そのことは後ほど二人でお話になれば良いことです」

(二人?)

若い女性の発言で出た二人という言葉に天閉と二人で?と疑問が生じるが、時間もあまりないだろうということとで問い掛けることはしなかった。

だが、その間もずっと主水を男が睨み付けていた。わなわなと体を震わせて。

「私とこちらの私の旦那は革命軍に属しています」

「ああ、一度ナイトレイドのアジトで見たことあるからな。俺を一人にして直接話が出来るようにするために、天閉と一悶着起こしたように装っていたことは分かっている。話してくれ」

「分かっておられましたか、さすが主水様。実は今回の人質交換なんです。大きな問題がありました……」

やはりなと主水は例の資料を思い返して納得した。

そして、さらにまだナイトレイドが知らないさらに悪い情報があることも。

「今俺はナイトレイドのアジトに行くことは出来ねえ。そこで、俺の家に行つて机の上の資料と、事情を理解している天閉を連れて行つてくれ」

「ちよつと待ー」

「行きましよう天閉さん!!」

主水から鍵を受け取った若い革命軍の女性とその旦那に引き摺られて天閉はフェードアウトしていった。

その場に残されたのは殺意すら交じった侮蔑交じりの視線をずっと主水に向けている男と主水のみ。

主水は冷や汗が止まらない。

男が何者かうつつすらと気づき始めていたからだ。

「あの時以来だね主水」

立っていた男を煙が包みこみ、その煙が晴れると屈託のない笑顔が浮かべたチエルシーの姿が。

ただし、目は全くの笑つてはいない。

逆に殺意さえ感じさせるほどの鋭さを感じる。

普段なら間違いない、美しく見えるはずのチエルシーの笑顔だが、主水は見も凍るほどの恐ろしさを感じていた。

「……………」

「あ・の・と・き以来だね」

気圧され黙りこくる主水の眼前にまで迫り、『あるとき』を殊更強調しつつ笑顔を向けてくる。

依然として目は笑つてはいない。

勿論あの時とは、落ち込んでいたチエルシーを主水が慰めた時だ。

「お、お、お」

主水は自分でも気づかぬ内に後退りをしていた。

チエルシーは逃がさないといった感じで一步踏み出す。

「あの時私を愛してると言ってくれたのに……これはどういうことかな？」

（愛してると言った覚えはないが……だがここで誤解を解かなくては社会的にも物理的にもマズイ気がする……）

しかし主水には誤解を解く自信がなかった。

チエルシーは主水とセリユートの親子のようなただならぬ関係を知っていれば誤解も解けるかもしれないが知らない。

それだけではない、過去に姑のせんと妻のりつに浮気を疑われた時には、

「私をもてるわけないでしょう」

と強引に言う

「たしかに種無しカボチャの婿どのがもてるはずはありませんねえ。ホホホホ」

と納得は出来ないが深く頷いて説得に成功したが、今回は違う。

実際に主水がセリユートを伴い家に入っていくのを実際に見られたのだから。

そして朝セリユートは満足げな表情で、主水は疲れたような表情で共に出てくるのも……

何かあったと思わないことがあるか、いやない。

「話によっては………ちよんぎつちやうから」

チエルシーは薄ら笑いを浮かべ人差し指と中指をハサミに見立て動かしている。

（マズいな……）

主水の仕事人としての勘が訴える。

少しでも対応を間違えば（男としても人間としても）死ぬと。

主水は気を鎮め冷静を装いつつ考える。

この修羅場を乗り越えるにはと。

（難しくとも誤解だと通すしかねえか……）

主水は一度頭をかくと仕事の時と同様な真剣な表情をし、チエルシーを正面から見つめる。

普段とは一変する主水の雰囲気にチエルシーははからずも鼓動が高鳴り、頬が朱に染まる。

「誤解だ。俺は何もしてねえ。俺は……」

「そんなはずねえだろ！あんなに可愛い女を連れ帰って何もしねえ男なんていない！それがイエーガーズならなおさらだ!!」

「天閉おめえ!？」

連れて行かれたはずの天閉が何故か主水の背後に現れ、主水の言葉を真っ向から否定する。

瞳に悔し涙と怒りを滲ませながら。

「天閉様いつの間に行きますよ話をややこしくしないでください！」

息をきらせてやって来た革命軍の女性に再び引き摺られて天閉はフェードアウトしていった。

「……………」

「だって主水」

半目で主水を見つめるチエルシー。

いい雰囲気で進みかけていたはずが、場の雰囲気は一転していた。(しようがねえ。あまりしたくはねえが力業でいくか)

チエルシーは見た目的には力業でも軽くないなしてくると思われるが、このような状況でならと思いい立つ主水。

チエルシーが主水に向けて一歩踏み出そうとした刹那、主水はチエルシーを強く抱き締めた。

そして耳元で囁いた。

「俺はおめえだけを思ってる。じゃなくてはこんなことはしねえ。この戦いが終わったら……」

「……………う、うん……………」

みるみるうちにチエルシーは真っ赤に頬を染めていく。そして、嬉しそうにまた恥ずかしそうにコクリと頷いた。

「約束だよ。嘘ついたら……」

「ああ。じゃあな」

軽く肩に手を置くと主水は去っていった。

(なんとか修羅場を回避できたか……)

額に流れる冷や汗を拭くと主水は広場で整備を行っているセリユートの元に向かった。

「騒動はもう起こささないようにしっかりと説教しておきました」

「ありがとう主水君。私の方も終わったよ」

セリユートが言うように先ほどまであった人だかりは消え、朝特有の静かな広場に戻っていた。

「じゃあ行こうか主水君」

セリユートは主水の手を取ると笑顔で宮殿に向かって歩き出した。

主水は苦笑いを浮かべるが、知らなかったその様子をジツとチエルシーが見ていたことを。

◆◆◆◆◆

「おはようございます」

詰め所内には朝早いというのに既にエスデスが正面にその脇に控えるようにランが、ウェイブ、クロメ、スタイリッシュは着席した状態で揃い、詰め所内には緊迫した雰囲気漂っていた。

「これで皆揃ったな」

主水とセリユートが席につくのを見届けるとエスデスは口を開いた。

「ついに人質交換が明後日に来た。今日はその日の打ち合わせを行う」

「はい」

エスデスの言葉に呼応するようにメンバーの声が室内に轟いた。

第103話

地平線まではつきりと見える見渡す限り拓けた大地に、帝国最強と
うたわれる二大將軍エスデスとブドーが縄で縛られたタツミを連れ
人質交換の場に現れていた。

その場は隠密、奇襲を得意とするナイトレイドにとっては鬼門と
いつても過言ではない拓けた場所。

ナイトレイドの墓場とすべくオネストが詭えた場所であった。

エスデスは予想される激しい戦いに胸を踊らせ喜色満面な表情で
佇み、ブドーは普段と変わらず険しい表情を浮かべ腕を組んでいる。
「半端ない威圧感だ。いったいいエーガーズの野郎どこで道草を食っ
てるんだ」

二大將軍から距離にして一キロほど離れた所で天閉が主水を待つ
ていた。

本当であればもう少し近場で待機する予定であったが、二大將軍の
威圧感と、その察知能力を恐れこれだけの距離をとり待機していたの
だ。

しかし、二人が豆粒ほどの大きさにしか見えなくとも、その尋常で
ない雰囲気や纏う気配に天閉は気が気でない状態で嫌な汗をかくの
だった。



(ウェイブやスタイリッシュであれば楽に眠らせたところだが。まさ
かこのような組み合わせになるとは……)

主水は思案顔で視線を動かすと、お菓子を嬉しそうに頬張るクロメ
の姿が。

前回の打ち合わせで帝都巡回の組み合わせが言い渡された。

主水としては荒事や誤魔化しがきくウェイブと組めたらとひそか
に願っていたのだが、エスデスはキョロクで主水にいいようにまかれ
て振り回されていたことから、ウェイブと組ませることはせず、お目
付け役としてクロメと組ませたのだ。

言い渡された時はウェイブと組めなくなったことに僅かに不満顔

をしたクロメであつたが、エスデスにこの件が終わつたら菓子を奢つてやるという一言により、やる気に満ちたものとなつていた。

逆にセリユーは未練タラタラであつたのは言うまでもない。

しかし、主水としてもこの日まで時間があつたため、対策は立てており主水は秘策を忍ばせている懐にそつと手をおいた。

(あとはどの機会にこれを盛るかだが…)

ある機会を伺っていると、帝都全土に響き渡るほどの音で鐘が鳴り響く。

調度昼を告げる合図である。

(人質交換の刻限か。行動に移さねえとな)

「そろそろ昼にしませんか。私が美味しい甘い物を買っている所があるので」

クロメが甘い物好きであることと、自らの趣味が合致したことにより行うことが出来るクロメ封じ。

何が何時役に立つかは分からないものである。

「本当！行く！」

主水は横を歩くクロメに提案すると、案の定クロメはその提案に即座に食いついた。

普段通り表情にはあまり出しはしないが、その足取りや態度からかなり喜んでるのが手に取るように分かった。

「主水早く！」

クロメに促されたことを大義名分として主水も先を急いだ。

—————

「店主いつものやつ頼む」

「へい、いつも御贔屓にしてくれてありがとうございます」

店主はよく共にくるセリユーではないのかと僅かに思いながらも営業スマイルを浮かべオーダーを受けとると店の台所に消えていった。

「主水頼んだのは何？」

「すぐに来ますのでお楽しみに」

既にフォークとスプーンを準備万端と装備して目を輝かせるクロ

メを見て、主水は僅かに心を痛めた。

純粋なクロメを好きな物を使って騙すことになることに。

「へい、お待ちしました」

「おう待ってたぜ」

主水は店主が持ってきた大きなホールケーキを受け取ると、わざと遠回りをしクロメの死角をつくように運び、懐に忍ばせていたものを密かにもった。

「……」

この日の二日前、主水は対策に必要なものを手に入れるために、スタイリツシュの元を訪れていた。

「あなたが来るなんて珍しいわね」

顎と頬に手を当てる虫歯のポーズで主水を出迎えるスタイリツシュ。

つくづく気持ちわりいヤツだという思いを飲み込み主水はスタイリツシュに声をかけた。

「睡眠薬ってあるか？」

「睡眠薬……まさか！ 貴方も私と同じようにウェイブにもってあんなことやこんなことをするつもりなの!!」

「……………」

予想の遙か斜めをいくスタイリツシュの反応に一時フリーズする主水だが、即座に再起動して持ち直した。

ただ、ウェイブの貞操の危機を知り、御愁傷さまとの思いを心に秘めて。

「おめえと一緒にするな。この頃寝付きが悪くてよ。おめえならいい薬持ってるんじゃないかと思ってな」

主水は眠たげな様子を演じスタイリツシュに答えた。

普段から昼行灯を演じる主水にとっては朝飯前の演技。

「ウフツいい薬あるわよ」

スタイリツシュはウインクをしつつ不気味な笑みを密かに口許に浮かべると、棚まで歩き一つの瓶を持ってきた。

「私が隙あらばウェイブに盛ろうとしている無味無臭で即効性のク・

ス・リよ」

背筋に冷たく走るものを感じつつも空とぼけてスタイリツシュの言葉に耳を傾ける。

「使用法は？」

「最高でも一滴。それ以上使うと永遠の眠りにつくことになるわ。なんてったって超級の危険種だつて一滴投与すれば眠りにつくんだから」

「そ、そうか……」

今さらになつてスタイリツシュを頼つたことに不味かつたかという思いと、反面事が上手く運ぶだろうことから良かったのかという微妙な思いとが混在する主水。

「ありがとよ。もらつてくぜ」

主水は礼を言つてクスリを懐に入れてスタイリツシュの元を去つた。

「……………」

「いただきます」

クロメは主水の渡した睡眠薬入りのケーキに恐ろしいほどの勢いでかぶりついた。

既にクスリを一滴投与した箇所はクロメの口に運ばれていた。

頬をまるでハムスターのように膨らませ、天にも登るような悦に入つた表情で咀嚼するクロメ。

（すまねえがクロメ眠ってもらうぜ）

すぐに眠るのではと思つていた主水であるが、それを裏切るかの如くケーキを食べ続けるクロメ。

みるみるうちに減つていくホールケーキを何故だという困惑を秘めた表情で見つめる主水。

（なぜ眠らねえ。ガタイのいい危険種にすら効いたのに）

主水はスタイリツシュを完全には信用していなかったために、危険種相手に実験し確証をもって使用したのだ。

しかし、目の前のクロメには一向に効き目が見られない。

いや、眠るところかより目が輝いているほどだ。

それもそのはず、クロメは普段から劇薬を体に投与し続けている。命を失うほどの怪我を負っても戦い続けることを可能にし、戦闘力を大幅に増量することを可能にした悪魔の薬。

しかも、それは日増しに量と強度を増し、薬に適応した肉体を持つクロメであつても寿命を縮ませるほどになっている。

故に、クロメの体はそれがスタイリッシュが作り出した薬であつても効果を示さない状態になっていたのだ。

そんなことを知らない主水は刻一刻と無為に過ぎていく時間に焦りを隠せなくなつていた。



「よく来たな」

僅かに時計の針が予定の時刻を三十分ほど過ぎた辺りであつた。

ナジエンダを先頭にアカメ、レオーネ、マインの並び。

それはナジエンダにとつて苦渋の決断であつた。

不幸中の幸いとも言えば良いのか、ナジエンダにとつても今回のことが名目上の人質交換であることは主水が手に入れ、アジトに持ち帰られた資料により知ることが出来た。

だからといってタツミを見殺しにすることは出来ない。

ならば、なんとしてもタツミを奪還しさらには皆が生還することが至上命題となる。

どうすればいいか？

二人の將軍を即座に逃げるにしろ、二人の將軍を出し抜くことは不可能。

ならば、戦闘で抑えことを済ませるそれしか選択肢は存在しなかった。

ナイトレイドならば奇襲や虚をつきつつ攻めるべき。

それが建物ないであつたり、衆人環視の中であれば項を制す。

しかし、それも承知のオネストがナイトレイドの僅かな勝利の芽をも摘みにかかる。

それが今回の交換の場のだっ広いなにも障害物も無く、衆人すら存在しないこの場となる。

故に、ナジエンダは初っぱなから全てのナイトレイドのメンバーを率いて来たのだ。

「こちらは大臣の息子のシユラだ」

ナジエンダはエスデスの言葉には答えることなく縄で縛り上げられ目隠しと猿轡をされたシユラを示す。

目隠しと猿轡はシユラが廃人となったことを隠すため。

「フツこちらはタツミだ。お前たちの要求通り帝具つきだ」

エスデスはタツミに愛しげな視線を向けた後、微かに妖艶な笑みをナジエンダに向けタツミを示す。

帝国側とナイトレイド側が向かい合って約十メートル。

エスデスは余裕の笑みで、ブドーは依然として厳しい表情で。

対してナジエンダは警戒を最大限にあげ將軍二人を見据え、以下アカメ、レオーネ、マインも帝具を何時でも使用出来るように構えた臨戦態勢に入っている。

「ではこちらの合図で人質交換とする」

ブドーが腕組みをとき重たく響く声で伝え、カウントダウンを始めた。

「3、2、1……0」

「一瞬の別れだタツミ……」

エスデスは名残惜しそうにタツミにだけ聞こえるように呟きタツミを送り出す。

同時にナジエンダもシユラを放り出す。

「マイン弾幕を張れ、アカメはタツミを回収、レオーネはアカメを援護！」

ナジエンダの指示が飛ぶより早く三人は行動に出た。

マインは二人の將軍を牽制するように周囲に撃ち込み砂煙をあげ、アカメは縛られフラフラとした足取りで走ってくるタツミに駆け寄り縄を切った。

「ありがとうアカメ」

「礼はいい。今は逃げるのが先」

「ああそうだな」

「逃がすと思ったか」

アカメとタツミの話の腰を折るように響くエスデスの声。

砂煙の中でエスデスは地面に手をつく。

刹那エスデスを中心に半径五十メートルの円上に氷柱がせりあがりドーム状に辺りを取り囲んだ。

「どんな小細工をしても逃げることは出来んぞ」

「潮時だなナイトレイド」

エスデスは細剣を抜き、ブドーがマントを脱ぎ捨てると同時に突風が舞い起こり砂煙がはらされた。

ナイトレイドと帝都の二大將軍との死闘が始まる。

第104話

「なんだありやあ!？」

自然と溢れたその言葉が離れた場所で見守る天閉の何が起こったのかという疑問と驚愕を明確に示していた。

帝国の二大將軍とナイトレイドの戦いの火蓋が切られたと巻き上がる砂塵から理解した後、突如辺りから巨大な氷柱が地面から突きだしドーム状になり全てを包みこんでしまったのだ。

完全に予想外のことである。

(まさかイエーガーズの野郎これを予想して俺にあんなことを……)

しかし、その光景を見ていて自分が主水に洩々させられたことに納得がいくのだった。



氷の牢獄とも称すことができる決戦の場をとてつもない威圧感が支配する。

その場にいるだけで戦うことの決意が揺らぐかのように脚がおのづと小刻みに震えてくる。

明確な死への恐怖と、まるでし掛かってくるような圧迫感、息をするのさえ難しくなる。

ナイトレイドのメンバーは気圧されかけていた。

このような化け物と正面きって戦おうとしていたのかと。

「恐れるな！我々も強くなつたんだ。そして、やつらは連係することはない。我々は逆に連係して戦えばいいのだ。仲間を信じてな。アカメ、タツミ、エステスを頼む。レオーネ、マイン、私と共にブドーを相手するぞ！」

皆を勇気付けるようにナジエンダが檄と指示をとばす。

皆はナジエンダを振り返るとナジエンダは軽く口許に笑みを浮かべ小さく頷いた。

皆はその笑みに勇気付けられ、同じように頷くと気合いを入れ直しアカメは村雨を構え、タツミはインクルシオの鍵を抜く。

一瞬間をしかめたが、仲間悟られぬよにインクルシオを発動させ

身に纏う。

レオーネもライオネルで獣化しステータスを大幅に強化し、マインはその後方にパンプキンを構え、二人と合流したナジエンダは義手を具合を確かめるように鳴らした。

「たしかに私たちは連係などせん。しなくても十分に強い上にブドーとは最終的に拳を交える予定だからな」

「……………」

猛禽類のような鋭い瞳で視線を横にいるブドーにとばすエスデスだが、ブドーはそれをさらりと受け流す。

「行くぞナイトレイド。我が主に抗うこと地獄において悔いるがよい」

「!!」

ブドーのいた場に砂煙が立ち上り体に雷を纏ったブドーが砲弾のような勢いで走り出すと即座にレオーネに肉薄していた。

鈍重そうに見える見た目とは反しそのスピードは恐ろしいものがある。

「断罪する！」

「早っ！」

ブドーの拳が、纏う雷が唸りをあげてレオーネに襲いかかる。

しかし、レオーネも事前にナジエンダからブドーのスピードに気を付けることを聞いていたことと、獣化しているため並外れた反射神経を得ていたことを生かし体を屈めてかわしきる。

「良くやったレオーネ！」

「ぬっ！」

レオーネの屈んだ所にブドーの拳が空振りすると、ブドーの目の前にナジエンダの鉄の拳が迫り、顔面を捕らえた。

レオーネが屈んでかわすことを読んでナジエンダがロケットパンチを放ったのだ。

「ナジエンダそれが貴様の全力か？」

鉄の拳が顔面を捕らえたはずであるがまるで何もなかったかのよう。ブドーが拳を払いのけつつ問い掛ける。

今までの戦いの中でアカメは必ずといっていいほど全力で一刀にかけていた。

しかし、その弱点を主水に指摘されたことから戦い方を変化させたのだ。

そのことを知らぬエスデスは、それに合わせての対応をしたことが裏目に出た。

「終わりだエスデス!!」

下段からアカメが切り上げる――はずだった。

「うっ?」

絶好の好機、エスデス相手にもう訪れることはないと言えるほどの機会であるのに村雨が動かない。

アカメが村雨に視線を向けると、地面から伸びていた氷の鎖が村雨に巻き付き動きを拘束していた。

「意表をついたつもりだろうが、私のほうがお前より先を見ていたということだ」

エスデスは振り向くことなくアカメに裏拳を打ち込むが空をきる。手応えがなかったことに僅かに視線を送るとそこにアカメの姿はない。

アカメはすでに村雨を地に向け氷の鎖の拘束をほどき離脱していた。

これも以前であれば相手を殺すことに注視することでなんとか攻撃しようとし、まともに反撃を受け、戦闘不能に陥っていてもおかしくないことであった。

「エスデス!!」

「タツミ」

僅かに視線が反れたのを見逃さなかったタツミがインクルシオの副製品の槍でエスデスを穿つ。

エスデスの体が僅かに波打った。

「やったか」

「さすがタツミだ。私の心臓を狙うとは。しかしなタツミ、私の心臓はどつくにお前に射ぬかれているぞ」

穂先を素手で掴みつつエスデスはタツミに語りかける。

まるで恋を囁く乙女のように。

「はっ」

タツミはびくともしない槍を鉄棒のようにしエスデスに蹴りを放つ。

しかし、エスデスはそれさえも読みきり細剣を地面に突き立て、容易くその足を掴んでいた。

「いい蹴りだ。成長したなタツミ」

「くっ」

体を捻りもう片方の足で蹴りを放つがそれもあっさりと首を反らして避けられる。

「物理的に愛を語り合おうか」

「はっ！」

「おっと」

隙をつき村雨で斬りつけるアカメだが、タツミを手放し軽やかなステップで後方に間合いをとる。

「無粋なヤツだ。私とタツミの愛の語らいを妨げるとは」

妖艶な笑みを浮かべるエスデスに二人に絶望が走る。

二人は息を乱しているのに対し、エスデスは息一つ乱していないのだ。

「ぬうっ」

そんなエスデスの横に先ほどパンプキンの直撃を受け吹き飛んだはずのブドーが並ぶ。

黒い甲冑にはたしかにダメージが見えるが、ブドー本人は全く傷ついた様子すら見られない。

「力を抜いているからそういう目にあうんだぞ」

「たしかにナイトレイドを甘く見すぎていた」

「ならばヤツラと同じように力を合わせてみるか」

「戯れ言を」

エスデスは不敵な笑みを浮かべると手のひらを向ける。

「皆避ける!!」

はつとしたナジエンダが大声をあげる。

アカメとタツミ、離れた所にいるナジエンダ、マイン、レオーネが一直線に並んでいたのだ。

皆が飛び退いた刹那、エスデスの掌から噴き出した強烈な白い冷気が走り地面が凍結し、

「~~~~~」

地面に転がっていたシユラが真っ白な氷像と化す。

絶対零度の波が一瞬において熱持つ人間さえも芯まで凍結させたのだ。

「ぬうツツ！」

ブドーが大きく腕を引き、豪快に拳を振り抜く。

その拳は音速を超え、産み出した爆風のような衝撃波が凍結した地面を抉りつつ突き進む。

地面は大きく抉れ、氷像と化したシユラは粉々に砕け散る。

生前していたことは醜かったが、散り際はキラキラと輝き美しかった。

そのまま衝撃波は走り続け前方の氷の柱を破壊した所で爆音のような空を穿つ音が鳴り響いた。

「なんて力だ……」

「パンピングでも壊すことが出来なかった氷柱が一発で……」

ナイトレイドのメンバーが顔をしかめる。

目の前で見せつけられた桁違いの力の片鱗。

力を合わせられたら生存確率は0になるのは火を見るより明らかだ。

「やはりお前とは合わんな。私の檻を破壊しておって。やはりお前とは拳を合わせることしか考えられん」

「くだらん」

エスデスは地面に手をつき、破壊された氷柱を再び生成する。

ブドーはつまらなそうに地を一蹴りしナジエンダ、マイン、レオーネの元に向かう。

「先程の非礼を詫びよう。次は手加減抜きでいくぞ」

「!!」

圧倒的な圧力が空間を軋ませるのか、陽炎が立つように空間に歪みが発生していた。

ナイトレイド対二大將軍の第二ラウンドが始まる。

第105話

「いったいイェーガーズの旦那はなにをしてるんだ。取り返しのない事になっちまうぞ」

戦いが激しくなることを音や辺りに舞う砂塵などから感じ取り、状況把握と自分の使命を果たすために戦いが見える位置まで近寄っていた。

何も起こっていないときならば二大將軍に気づかれかねないが、今戦いに身をおいているかならば、気づくこともないだろうと自分に言い聞かせてのことである。

そして戦いの現状が把握出来たことにより焦りが大きくなっていった。



「消し炭と化せ！ナイトレイドオオオツツ!!」

ブドーの突き出した両腕から雷が轟くようなけたたましいスパーク音が響き、刹那蒼黒く収束された雷弾が放たれる。

雷を撒き散らし辺りのものを融解しつつ三人に迫る雷弾。

「引き付けて私が相殺するー」

マインがパンプキンを構えるが、額からは大粒の冷や汗が。

パンプキンは危機的な状況であれば、あるほど威力が上がる。

しかし、目の前に迫る雷弾は、自分の想像できるものを遥かに超えた圧力、威圧感のため、限りなく自分に近づいた所で撃たないといけない。

そのために、僅かに恐怖に体が震えていた。

自分がミスした瞬間全滅する。

明確な恐怖だった。

「マイン!!」

「えっ!?!」

待ち望んでいた自分を勇気づけてくれる声だった。

声と共に現れた黒い影がマイン含めた三人の前に立ちはだかる。

「皆は俺が護る!!絶対によらせねえええっ!!」

白銀のマントをはためかせたタツミが雷弾を受け止めた。

「ウオオオオオ！」

受け止めている掌が焼けつき、さらには

その勢いに地を抉りつつ押されるタツミ。

(インクルシオ。お前の体はまだ生きてるんだろ？どれだけ苦しくて、痛くても構わない。限界まで力を、皆を護れる力を……帝国という不条理に打ち勝つ力を————俺に寄越せ!!)

インクルシオから溢れるほどの力が溢れタツミに流れ込む。

生き物のような禍々しいほどの力の奔流がタツミの中に吸い込まれるように流れ込んで行く様は、傍目に見ても寒気を催すほどのものである。

力が限界まで引き上げられたインクルシオは、今までの白く騎士然とした姿ではなく、まるで真逆の禍々しさ溢れる生前の竜種たる骨ばった刺々しい姿に変貌していた。

その力を示すかのようにタツミは背筋を使い雷弾を下から持ち上げるように上体を反らし雷弾を上空にはねあげたのだ。

雷弾は氷の天井を突き破り上空に舞い上がりはじけた。

「タツミなんで!!エスデスの相手は！アカメはどうしたのよ！」

本音を言えばマインは自分達を助けてくれたことが嬉しかった。

そのままタツミに抱きつきたかった。

しかし、自分達は今大事な戦いに身を置いている。

私情を挟めばそれだけで全滅の憂き目にあうかもしれない。

そのため、自分の感情を押し込めてタツミに問い掛けた。

「アカメがこちらに行くようにいったんだ。あとマインには頼みがある。アカメを援護してやってくれ」

「分かった——————ありがとう」

「おう!!」

頬を染めて小声で礼を言うマインに勇気付けられるタツミであった。

そして、さらに決意する。

—————どんなことがあるとも俺が皆を護る!!俺のために

皆は命を賭けてくれたのだからと。

「まさかあれを避けるとはな。見事だ」

「いまだ!」

自分の攻撃を上手く逸らしたことに嘆息をもらしたブドーの隙をつきレオーネが背後をつく。

レオーネ得意の接近戦に持ち込むが、ブドーは的確にレオーネの連打を裁き続ける。

(私(獣)の反応速度についてくるのか)

「姐さん合わせてくれ!」

「ああ」

タツミがレオーネを相手するブドーの背面をつき、挟み撃ちを狙う。

「つけあがるなああああ!」

ブドーが吠える、地鳴りとともにブドーの体から円上に雷が迸り、二人の体を走り動きを拘束し激痛を与える。

「うおおおお!」

「なぜ動ける!」

雷にうたれたことにより動けるはずがないと思われた所に、それを物ともせず攻撃を仕掛けてくるタツミに驚きが隠せないブドー。

(あの進化で雷にも耐性がついたというのか)

インクルシオの恐るべき進化。

さらにそれだけには留まらない。

「うっ」

速度も以前のそれとは違っていた。

(進化とはこれほどのものだったということか)

「ならばこれならどうだ」

タツミのストレートを右腕で受け止め流すと、左手で掌呈を打ち込みタツミの猛攻を止める、足場を固め僅かに両手で天を仰ぐ。

「耐性以上のもので消し飛ばす!雷撃に沈め!!」

轟雷が鳴り響き巨体な雷が落ちた。

まるで神が裁きを下さかのような天からの一撃。

雷が落ちた部分は大きく抉れクレーターが出来、黒く焼け焦げ一部は赤く融解していた。

「はあはあ……まさか……」

「僅かな予備動作で気づけたんだ。雷が来るってな！」

「ぬわっ」

背に担いでいたことからも強化された槍によりブドーの背は甲冑ごと大きく斬られ血濺きをあげ巨体が大きな音をたてて倒れこんだ。

――

「はっ！」

「剣筋がやはり変わっているがもう把握したぞ」

アカメの村雨による斬撃を大きめな間合いを取りつつかわすエスデス。

一撃必殺の村雨の能力を警戒してのことである。

「今度はこちらから行くぞ」

アカメの村雨を縦に構え受け止め、そのまま振り切り弾き飛ばす。地面に着地しながらも勢いは殺しきれず後退させられ、体勢の整わないアカメに瞬時に肉薄するエスデス。

エスデスは振り上げた細剣を降り下ろすことなく、バックステップを踏み後ずさる。

刹那通り過ぎるパンプキンの射撃。

(これだけはなれていてもこの威力か。避けるのが良策か)

横目にパンプキンの位置を把握していると、すでにアカメが間合いに入っていた。

「大した連係だな」

「同じ釜の飯を食べ続けている」

「そうか」

嬉しそうに笑みを浮かべると間合いを作るべく強引に細剣を振り切った。

◆◆◆◆

「マジかよ。あの二人を相手に押し始めた。

タツミの急激な成長により形勢が逆転し始めていることに天閉の

中で余裕が生まれ始めた時だった。

「悪い遅れた」

「イエーガーズ！遅れすぎた！」

姿を現した主水に文句をたれる天閉。

だが、それも今の余裕が成せるわざだった。

「どうしたんだよ？」

「まあ少しあってな」

主水は軽く虚空を見つめた。

◆◆◆

(なんで薬が効かねえんだ)

黙々と食べ続けるクロメを頭を抱えかねない様子で見つめる主水。

そんな時だった。

「やっぱり主水君ここにいた」

「すごいなセリユートの言っていた通りじゃないか」

セリユートとウェイブが走りよってきた。

セリユートが今の時間ならこここの店にいるだろうと読んで巡回を終えたのちにウェイブとやって来たのだ。

これが悪化する膠着状態の解消に貢献することになる。

(地獄に仏とはこのことだ。ウェイブ手え貸してもらおうぞ)

「二人ともよく来ましたね。これでも食べたら」

主水は手のつけられていないケーキを取ると、三人の死角において薬をもったものをウェイブに、薬をもっていないものをセリユートに手渡した。

「おっ美味しそうですね」

「うん。とてもおいしい」

「そうか。じゃあいただきますね」

クロメのオススメということでウェイブは一口ケーキを口に入れた。

「……………」

ウェイブの手が止まり、そのまま瞳を閉じ眠りについた。

(しめた)

軽く笑みを浮かべる横で、

「ウェイブどうしたの？」

「急に寝ちゃった。疲れてたのかなあ」

心配するクロメと、ウェイブを不思議そうに見つめるセリユー。

純粋な二人なので主水を疑うことすらしないことに、主水は僅かに良心の呵責を覚えるが、僅かな時間も無駄にできない切迫した状況なのでことを進める。

「クロメさん、セリユーさん。どうやらウェイブは疲れがたまっているみたいなので二人で部屋まで運んでくれませんか」

「うん」

クロメはウェイブの肩を担ぎ歩き出す。

すでに皿は空になっている。

「私は主水君を見張らないと」

笑顔で主水を見上げるセリユー。

主水と一緒にいたいのか、はたまた主水のサボりを監督するという使命感かは分からない。

「セリユーさんも二人について行ってあげてください」

「えっ二人だけでも大丈夫だと思うけど」

「それがダメなんです……セリユーさんがいなくては」

顔をしかめ演技に入る主水。

「どうということ」

と食いつくセリユー。

「ウェイブはスタイリッシュに貞操を狙われているんです」

「えっドクターに。でもウェイブもドクターも男だよ」

混乱したように疑問を呈するセリユー。

純粋なセリユーには男と男といわれてもピンとこないらしい。

腐女子なら大喜びするような話ではあるが。

「そういう特殊な超級危険種のような者もいるんです。その人物を止められるのはセリユーさんしかいないんです」

主水は真剣な眼差しでセリユーの瞳を見つめた。

「ドクターを止められるのは私だけ」

「はい」

主水に見つめられて頬を染めるセリユーは、しばし考えたのち頷いた。

「うん。私がドクターを止めなくちゃダメだよ。行ってくるね」

セリユーはコロを引き摺りながら去っていった。

(なんだこの感覚は)

セリユーの小さくなっていく背をなぜか感慨深く感じられた主水は軽く首を捻るが、ふつきつて天閉のまつ戦場へ向かった。

◆◆◆◆◆

「どうしたんだ？」

「いやなんでもない。で、状況はどうなってる」

「見てみるよ。ナイトレイドが優勢だぜ。俺のあれを使わなくても良いぐらいにな」

天閉の指差す氷の牢獄ないでの戦いを見通す主水。

確かに天閉の言うように優勢に見える――表面上は。

「天閉。直ぐにあれを使えるように用意しろ」

「はっ？なに言ってるんだよ」

表情が苦々しいものに変わり、低い声で伝える主水。

その変わりように問いただす天閉。

「あれは優勢に見えるだけだ。直ぐに情勢は急転する」

鋭い視線の先で怒髪天を指すという形容が正しいであろうブドーがゆらりと立ち上がる様があった。

再び戦いに動きが始めていた。

第106話

ゆらりと立ち上がったブドーは雰囲気が一転していた。

それまでは冷静に立ち回りを行っていたが、今は昔、怒りにうち震えた雷神のような様相に様変わりしていた。

髪が天を指すように立ち上がり、瞳は血走り、帝具アドラメレクから発せられる雷がブドーを取り巻きまるで雷の鎧を纏うかのような出で立ちになっていた。

◆◆◆◆◆

「ヤバイぞイエーガーズ。やつはまだ生きてる。それになんかとんでもない雰囲気が!!」

「ああ分かつてる。天閉あれを使え。あの間合いならば使える」「分かった」

ナイトレイドの命運をも握りうるある仕掛け。

天閉は懐に忍ばせていたりモコンのような物を取りだしボタンを押しした。

カチツという無機質な音が辺りに響く。

天閉と主水は静かに仕掛けが始動するのを待つが全く動くそぶりすら見えない。

「……………おい? なにも起きないようだが!？」

「嘘だろ」

天閉は青ざめ呆然とリモコンを見つめていた。

◆◆◆◆◆

「この私にこれほどのダメージを与える気概称賛に値する」

ブドーの起き上がりぎまの第一声は敵であるナイトレイドへの称賛の言葉であった。

今まで幾度の戦いに身を置いてきたブドーであったが、かつてこれほどまでに苦しめられたことなどなかったため、本音をもってナイトレイドを称えたのだ。

それは古来からの武人としての潔さを感じさせた。

しかし、次の瞬間ブドーの表情は一変した。

「故に解せぬ、許せぬ。なぜその気概を我が主に逆らうために使うのか、反乱軍にいるのかが。私は強い怒りを憤りを感じている。それは我が帝具アドラメレクも同じである!!」

ブドーは大気を揺るがすほどに怒気を放ちながら吠える。

「何をしようとしてるのよ」

ブドーの様相に危険性を感じ取ったマインが、一時アカメの援護を止め、ブドーの妨害をすべくパンプキンを放つ。

「フンツッ!」

「えっ!?!」

パンプキンの砲口から放たれた精神からのエネルギー弾だが、ブドーはそれを右腕の一振りで弾き飛ばした。

そして、高らかに天に向けて両手をあげ、叫んだ。

「雷帝招来!!」

ブドーの叫びに呼応するかのように青かった空に暗雲が立ち込め、稲光が雲間を走る。

無数に走る雷が一点に集約し、刹那轟音を響かせ氷の牢獄に落ちた。

「皆避ける」

轟音にかき消されることのないよう、有らん限りの声で指示を飛ばすナジエンダ。

「ボスもだよ」

レオーネは左手にナジエンダを、右手にマインを抱えて走り出す。

天を覆う氷は一瞬にして蒸発し、無数に雷で生成された光の柱が乱立するような光景が出来上がる。

正に神の裁きと思えるような自然現象をも操る攻撃にもナイトレイドは狼狽える暇さえ与えられない。

なぜなら、雷は一撃必殺の威力なのは明白であるため、皆は雷の降り注ぐ合間を縫うように駆け巡り、紙一重で雷を避けなくてはならないからだ。

「ハハハハ、さすがタツミだ。あのブドーを本気にさせるとは」

降り注ぐ雷をも見えなくなるほどの感動でエスデスはうち震えて

いた。

戦闘力ではエスデスと比肩し、冷静沈着なブドーに本気を出させるほどの戦いを演じたことが、まるで我がことのように嬉しく、降り注ぐ雷さえも些細なこととなっていたのだ。

暗雲が消え、静寂が戻った場には、無数のクレーターと、赤く溶け溶岩と化した大地が無数に広がっていた。

「皆大丈夫か」

「なんとか」

「大丈夫だ」

ナジエンダの問い掛けに口々に答える仲間たち。

あの雷の猛攻をなんとか凌ぎきっており、ナジエンダもわずかに胸を撫で下ろした。

「アカメとマインは引き続きエスデスを頼む。ブドーは俺が倒す」

タツミはブドーに向けて走り出し、その勢いに任せて右腕を振り抜いた。

「ぐぬっ」

「なっ！」

ブドーの巨体が大きく揺らぐ。

まともにタツミの拳がブドーを捉えたのだ。

今までであれば経験則と極限まで研ぎ澄まされた武術で物理攻撃を悉く捌いてきたブドーにまともに攻撃が通ったのだ。

しかし、それはブドーの戦いかたが変わったことを意味していた。

「なめるな！」

左手でタツミの腕を取ると右腕を振り抜く。

「ぐはっ！」

雷を纏った拳がタツミを捉える。

「まだだ！」

タツミの腹部にめり込んだまま、アドラメレクの杭が突き出る。

「ぐはっ!!」

インクルシオの外装を物ともせず打ち抜くアドラメレク。

タツミはそのまま吹き飛び氷柱に叩きつけられた。

ブドーは戦いかたを「肉を切らせて骨を断つ」に変えていた。

自分はどれだけ傷ついてもナイトレイドだけは殲滅するという強い使命感からの変更。

「ブドーー」

「はっ」

「がっ」

迫っていたレオーネの拳もブドーを捉えるが、ブドーは揺るぐこともなくカウンター気味に腹部に強烈な一撃を加える。

レオーネの体はくの字に曲がり、吐血し、既に意識を手放していたが、ブドーは攻撃の手を緩めない。

「くらっえ」

レオーネの危機にナジエンダも鉄の拳を全力で放つ。

しかし、ブドーは軽く受け止める。

「ナジエンダお前には失望したぞ」

鉄の拳とナジエンダがワイヤーで繋がっていることを把握していたためそのまま振り回しナジエンダをも氷柱に叩きつけた。

ナジエンダが氷柱に叩きつけられるのを見届けることなく振り向くと、浮いた状態のレオーネの背に腕を組合せ叩きつける。

「……………」

骨が碎ける嫌な音と共に断末魔をあげることすらなくレオーネは地面にめり込み動かなくなった。

「姐さんにブドーオオオオオツ!!」

「未だに立つか……来いナイトレイドオオオオオツ!!」

もう立つことはないかと判断していたタツミが立ち上がったことに僅かに眉間に皺を寄せるブドーだが、即座に反転しタツミを迎え撃つ。

レオーネを葬ったブドーに対する激しい怒りか、もしくはインクルシオに潜在する戦闘本能かが作用したのか、もう限界を超えているはずのタツミが猛獣のように襲いかかった。

「……………」

「すまんなアカメ。タツミを見ているとどうも猛りがおさめられなく

てな」

「なっ!?!」

瞬き一つの間、エスデスの顔が目の前にあった。

今まではアカメとの戦い自体を楽しんでいたため、アカメの強さに合わせて力を落として戦っていた。

しかし、タツミの強さを見せつけられたエスデスは、タツミとの戦いを欲する思いと戦闘を欲する思いから、少し戦闘力を上げたのだった。

「させないわ」

アカメの構えが整わないという危機を救うべく放たれたパンプキンの攻撃を軽く体を傾けかわすと、細剣が軌跡を描く。

「くっ」

マインの攻撃により出来た僅かな間に体勢を整えたアカメは、村雨で受け止めるが、その威力が範疇を超えたものであり、そのまま体を宙を舞った。

「次にはタツミが控えている。悪いが終わらせてもらおうぞアカメ」

アカメの背後を取ったエスデスは、口許を上げつつ細剣を振りおろす。

絶体絶命と思われた。

しかし細剣がエスデスによって振るわれる一瞬の隙をつき、眼前に氷柱が倒れてくる。

アカメをエスデスから引き離し、まるで攻撃を加えさせないように。

「何がうっ!?!」

地面に倒れ崩れ飛び散る氷片と舞い上がる土煙の中、突如として現れた刃を脊髄反射の域で細剣で防ぎ、後方に飛び間合いを取る。

パラパラと氷片が落ち、砂煙が晴れると地面に倒れこんだアカメの前に立ちはだかるマフラーを目深にかける主水の姿があった。

第107話

上空から吹き込む風が辺りの砂塵を散らしていく。

徐々に晴れていく砂塵の中に佇む影は、風に煽られるようにはためく黒い同心羽織り、銀色に輝く抜き身の刀、口許を隠すように深くまで巻かれた茶色のマフラーといった様相が見て取れるように。

砂塵の中のその姿が露にされると同時に斬りつけられたエスデスと、守られた形となったアカメの両者に驚きに彩られた表情と眩きがもれた。

「中村……………!!」

「主水……………!?!」

◆◆◆◆◆

「すまないイエーガーズ……………接触不良で作動しなかったんだ。俺の失態だ」

あからさまに表情を曇らせ天閉は主水に謝罪した。

ナイトレイドのメンバーを救うために用意しておいた策が失敗したためだ。

鉄拳が飛んできてもおかしくない状況でありながらそれもないため、天閉は恐る恐る顔を上げると、主水は眉間に皺を寄せ軽く呟いた。「そろそろ潮時だと思ってたところだしな……………セリユももう一人でも大丈夫だろう……………」

その眩きがどのような意味を持つのかは天閉にはすぐに察せられ

た。そして、そのように主水に決意をさせることになった自分の失態について。

「ただ心残りはイエーガーズの給料をもらえなくなることか」

冗談めかした発言に天閉は言葉を無くすが、真剣な表情に戻し主水に声をかけた。

「イエーガーズ……………」

「天閉、何分で直すことが出来る?」

「あ、ああ、最低でも五分ほしい」

「五分か……」

天閉の答えの五分という言葉聞き主水は僅かに思案に暮れる表情をしたのちに軽く頷いた。

「分かった五分だな。俺はエスデスを何とかする。ブドーはタツミ達に任せても五分ぐらいなら大丈夫そうだが、アカメはもう長くはもたねえからな」

「大丈夫なのかイエーガーズ」

「戦闘力はやつの方が上だが殺しでは俺の方が上だ」

主水は無表情で語る。

それには言い難い難い迫力があつた。

「すまないイエーガーズ」

「謝る時間があるなら直せ。あと準備が整ったら合図を送れ。頼んだぞ」

主水はマフラーを口許をまで上げると鋭い目付きに変わりアカメの窮地を救うべく氷の牢獄に向かった。

◆◆◆

「フフフフ………ハハハハハハ」

静寂が訪れていた場に高らかなエスデスの笑い声が響く。

突然の事にアカメはたじろぐが、主水は動じることもなくその姿を見守る。

「これほど愉快なことが起こるとは予想もしていなかったぞ」

笑いを堪え主水に視線を向けるエスデス。

その瞳には失望や裏切られたといった憤りや恨みといった感情はさらさらなく、ただただ喜びに満ちたりたものであった。

「どういうことだ……」

普段なら問いかけはせず仕事に移るはずだが、最低でも五分は必要だということを念頭に置いているため主水は静かにエスデスに問い掛けた。

少しでも時間を稼ぐために。

「私がお前に初めて会ったときのことをお前は覚えているか？」

「……………」

主水は返事をしないが、あの時のことは鮮明に記憶に残っている。最初に会ったのは警備隊の隊舎から出た時、目の前に来ただけで息が詰まるほどの圧迫感を受け、戦いの中でも関わらず、今まで戦ってきた相手の中でも屈指の力を感じ取ることになり、背筋に冷や汗が流れるほどのことだったからだ。

「あの時に私の勘が告げたのだ。この男は私と同じ修羅の道を歩いている、私を楽しませることが出来る者だと。ただ、私とは対極に位置する存在ではあるとも。そこで相容れない存在であると理解しつつも私の側に置くことにした。私の逸る心を満たすためにな。それからはお前が知つての通りだ。お前は私を楽しませることは出来たが、満足させることは出来なかった。私の望む姿とはかけ離れたお前を見て一時は私の勘も鈍つたのかと思つたぐらいだ。それが見てみる、今私の前にいるお前は私が感じ取り求め続けてきた存在だ！これが喜ばずにいられるか！」

エスデスの端正な容姿が喜びに染まっていく。

戦闘狂のエスデスはその規格外の力のため満足させる戦いを演じることが出来るのはほぼ皆無と言っても過言ではなかった。

戦つても戦つても相手が弱すぎて満足することはなく渴きを感じる一方だった。

そんな中でエスデスは渴望した『自分を熱くしてくれるだけの力を持った存在』を

それが現実に現れたのだ、その前では裏切られたことなど歯牙にもかけることのない些細なことであった。

「さあ中村。お前がナイトレイドだろうが関係ない！私を楽しませろ！」

エスデスの体から迸る殺気は辺りの空間を歪めるほどのもので、一般人であればそれだけで良くても気が狂い、悪ければ自らその恐怖から逃れるために自害するほどのものである。

主水はエスデスに鋭い視線を向けたままマフラーで隠れた口を開く。

「アカメ、エスデスは俺が相手をする。お前は体を休めたのちに、タツ

「ミが危なくなったら加勢してやってくれ」

「分かった……」

アカメに対する主水の小さな呟きには了承はしたが、僅かに戸惑いがあった。

今のエスデスは先程自分が追い詰められた時とは比べるべくもないほどの力を感じさせ、どんなに主水が強いといっても正直主水でも勝てない、このまま戦えば死ぬことになるかと認識していたからだ。

しかし、アカメは頷くしかなかった。

主水の口調が有無を言わせぬほど強いものであったのだから。

「行くぞエスデス隊長」

「来い中村！」

主水はゆったりと刀を晴眼に構える。

「!!」

その刹那十分な距離があったはずの間合いが零になっていた。

目の前にエスデスが迫っていたのだ。

「遅いぞ中村」

「ちっ（想像以上に速え）」

予想外の事態ではあったが、唸りを上げて振り下ろされた細剣を今までの戦いの経験に合わせて、エスデスの今までの戦いを脳裏に呼び起こしそこから軌道を予想し、即座に無駄のない足捌きと体捌きで紙一重にてかわし、返す刀で切り上げる。

「かすりもしないぞ……なっ」

主水の刀がエスデスの鼻先を掠め空を切る。

その僅かにエスデスの視線がぶれた直後エスデスの視界から主水の姿が消えていた。

エスデスに返した一太刀はエスデスを攻撃するものではなく、そちらに注意を向けるための目眩ましであった。

「……………」

気配を断ち、低い姿勢からエスデスの背後をついた主水は刀を突き出す。

一ミリのズレもなく洗練された一突きがエスデスの心臓を穿

つーははずだった。

「残念だったな」

予期していたのではないかと思える一言。

背後に現れた氷柱により主水の一突きは押しえられていた。

(予想通りだ)

主水は動じることなく左手で脇差しを抜くとさらに突きだした。

「くっ」

エスデスはけた外れの反応速度で対応するが、脇差しは微かにエスデスの服と腕を斬りつけた。

「いいぞ中村！」

振り向き様にエスデスは細剣を豪快に振りきる。

空間さえも断ちきるほどの勢いを持った一撃は、既に主水がエスデスの次の手と細剣の間合いを把握しているため、バックステップを踏みかわし避けており、空を切るが、細剣から放たれた衝撃波が襲い来るので腰を屈めてかわした。

衝撃波は主水の頭上を過ぎ去り50メートルほど先にたつ氷の氷柱を両断した。

主水は気に止めることもなく、腰を屈めた低い姿勢から即座に地を蹴り前進し、刀の間合いに入り、右手に持った刀で袈裟懸けに斬りつけた。

「フッフ」

エスデスもそれを大きく後方に飛び退き避けきると指を打ち鳴らした。

一瞬にして空間が冷え込み、主水を取り囲むように円上に360度四方に鋭い氷柱が無数に精製され、エスデスが腕を主水に向けると一斉に放たれた。

(全くズレはねえか……しかたねえ)

主水は刀と脇差しを鞘にしまうと前進しつつ黄金の輝きを放つアレスターを抜き前方180度から迫る氷柱を薙ぎ払い、前進したためにその時間差で後方180度から迫り来た氷柱を薙ぎ払った。

刀で切るとそのまま破片が体を傷つけることがあるため全てを叩

き落とすことにしたのだ。

主水の周囲を粉々に砕け散った氷柱がキラキラと輝き舞い、全ての氷柱を破壊したことを物語っていた。

それだけの戦いを演じた二人だが共に息をきらしてすらいなかった。

「さすが中村最高の気分だ。私に傷をつけるだけでなく全ての攻撃をかわしきるとは。これだこういう胸が熱くなる戦いを望んでいたんだ！」

エスデスは喜色満面といった表情を顔に出し声を上げた。

今まで傷を負うことすらなく戦いを終わらせてきたエスデスにとっては、僅かな傷であつてもさらに熱くさせるには十分なものであつた。

(まだ精々一分つて所か……とんでもなく長え五分になりそうだな)

主水は軽く溜め息を吐く。

もはや時間稼ぎではなく本気で殺しにいつているが、傷をつけることしか出来ず、ましてエスデスは喜んでいるのだ。

ただ、不安要素だけでもなかった。

エスデスの戦いを何れ敵になることを想定し観察してきたために、その欠点を見抜き優勢に進めることができたのは唯一の収穫であつた。

「さあもつと私を熱くさせろ中村!!」

口許に笑みを浮かべたエスデスが息をつく間もなく、地面を抉れるほどに蹴り主水に肉薄していた。

第108話

嬉々とした笑みを浮かべ疾走してくるエスデスに対し、主水はそのままアレスターを右手一本に持ち構える。

(構えを変えたか。それにあの帝具はたしか………やっかいだな。あれをしておくか)

それまで刀を使っていた主水が帝具のアレスターを使うことにした理由としては二つあった。

一つ目として、先程の戦いの折り主水はエスデスに刀を当てることは出来なかったとはいえ掠めることは出来た。

であれば、アレスターならば掠めただけでも自由を奪うことが出来るので、エスデスの戦闘力を削れ勝負を決することが出来るとの判断であった。

二つ目として、アレスターを操る十手術が関係する。

十手術とは元来相手を無力化するものであり、江戸での捕縛であれば得物として刀が想定されるため、十手術自体が対剣術使用に特化していること、さらには、十手術はこの世界では東方のみに存在するらしく知られてないためエスデスであっても初見ならば対応に苦慮し、優勢になるとの判断である。

「まだまだ楽しませてくれると見えるな中村！」

エスデスが細剣を振りかぶったまま、地の一蹴りで十分にあった間合いを瞬時につめる。

主水もアレスターを斜に構えてエスデスに備えるが。

「フッ」

「ちっー！」

小さな笑い声を残し、先程のお返しとばかりに主水の目の前でエスデスが残像を残して姿を消した。

主水は残像など気にする素振りもなく辺りの気配に神経を研ぎ澄ませる。

刹那、主水は真っ直ぐを見つめたまま空いた左手で脇差しを抜き逆手で持ったまま背後をついた。

主水の背後に姿を現したエスデスの腹を抉る。

しかし、主水はあからさまに顔をしかめた。

手に伝わる感触でしてやられたことを悟ったからだ。

「さすが中村と言いたいところだが、私には一歩及ばなかつたな」

背後の貫かれたエスデスが脇差しが刺さっていた部分から亀裂が走り砕けると同時に、上空からエスデスが強襲する。

背後の氷のエスデスを貫きそれが身代わりだと悟ると直ぐに主水はエスデスの強襲があると考え守りを固めるべく行動に移していたため、上空からの一太刀を間一髪でアレスターと脇差しを交差して押さえる。

「!!」

ただエスデスの力は予想を遥かに超えており、さらには重力をプラスされたため重く、主水の足が地面にめり込むほどであった。

さら悪いことに、その威力に耐えきれなくなった脇差しに亀裂が入り、欠片を散らし役目を終えた。

「よく止めたな。だが」

エスデスは細剣でアレスターを押さえたまま地に足をつけると、右足を軸にして左足で回し蹴りを放った。

「がっ!!」

主水をまるで巨大な金槌で脇腹を打つような激痛が走る。

細剣を抑えることで手一杯であった主水は対応しきれず、体を僅かに傾けて当たり所を変えることが精一杯であり、そのまま脇腹を打たれくの字に体を曲げて吹き飛んだ。

「ぐっ」

瞬時に主水は受け身を取り体勢を建て直すとアレスターを地に突き立て吹き飛ばす勢いを殺す。

(肋骨を一本やられたか……)

その走る痛みから損傷を把握しつつも相手にそれを知らせる訳にはいかない。

故に、主水は痛みから脂汗を流しつつも表情には出さず立ち上がる。

「これで一対一、同点だな中村」

「まるで遊んでいるようだな」

まるでゲームのような口ぶりのエステスに主水は表情を殺して言葉を発する。

「そうかもしれないな。私にとって戦いとは胸踊る遊びのようなものだ。それにこれほどまでに私が力を出しても相手が壊れなかったのは初めてだからより楽しそうに見えるのだろうか」

エステスはさらに猛る肉食獣のように目をぎらつかせ、獰猛な笑みを浮かべる。

今まで得ることが出来なかった満足感というものを納得いくまで得たいという欲望から。

(少し守りに入っていたか……)

エステスとは対照的に主水は冷静に今回の戦いを振り返っていた。そして見つめ直した上で戦い方を改める。

(エステスの弱点をつくためにも攻めねえとな。『振り下ろす太刀の下こそ地獄なれ、ぐんと踏み込め後に極楽』十手の極意だしな)

未だに残る痛みをかなぐり捨て主水はエステスに向かい強く踏み込んだ

初めて主水から攻勢に出る。

「次はお前から来るか。まだまだ楽しめそうだ」

エステスは迎え撃つべく周囲に氷柱を精製し細剣を主水に向けると幾多の氷柱が堰を切ったように放たれた。

(軌道是一直線)

主水は瞬時に自分に当たる恐れのあるものだけを見抜き叩き落とすしていく。

だが、その中で異常な早さの突きが。

主水はアレスターでその突きの軌道を変え反らす。

「見抜いていたか」

氷柱に交え放った細剣による突きを反らされエステスは感嘆する。

(弱点通りだ)

主水は心中でほくそ笑む。

主水が見出したエスデスの唯一の弱点。

エスデスは狩猟民族の生まれのため、幼少時代から自分より遙かに大きい危険種を相手にしてきた。

危険種の中には鎧のように強固な外甲を持つものや、巨大な体軀を持つものが大半である。

故に、その相手を一撃で葬り去るためにエスデスは自分の最大の攻撃を当てるべく一撃を大きく振りかぶる戦い方をしていた。

幼少の癖は抜けることはなく、その危険種用の戦い方がエスデスに染み付いていた。

そして、その後戦場を変えエスデスが將軍に登り詰めるために対人間も多くこなしてきたが、その戦い方であっても負けることはなかった。

それは全てエスデスの生来から備える桁外れの戦闘力に由来する。斬撃の速度、並外れた動体視力、脊髄反射と見紛うほどの反射神経、動物的な勘、それらがエスデスの唯一の弱点を補ってさらには弱点となることなどなかったのだ。

故にエスデスは対人間など考える必要もなく、幼少に身に付けた対危険種用の戦い方を変える必要もなく、また気づくこともなく使ってきたのだ。

それが何度もエスデスの戦いを見てきて主水が見抜いた唯一の弱点であった。

その弱点を知ったからこそエスデスの拳手を具に捉え読みきり対策していた。

先程の蹴りを受けることになったようなトリツキーな戦い方以外ならば。

「十手術の怖さを見せてやるよ」

主水はアレスターに接している細剣を螺旋を描くように巻き込みはねあげる。

はねあげられた細剣の鋒は中天を射す。

大きく脇腹を曝すような姿になったことにエスデスの表情に驚きが一瞬浮かぶが、それが不適な笑みに変わる。

「面白いしかし、これでは私に攻撃しろと言っているようなものだぞ」
エスデス以外であれば、得物をはねあげられたことにより体勢が崩れ大きな隙を作り出すことになるが、エスデスはその強靱な体幹により体勢が崩れることはなく、上段に構えた形となりそのまま細剣を振り下ろした。

エスデスの細剣が主水の頭上から迫り来る。

主水はその細剣をアレスターを掲げ鉤で受けると手首を返し十手を回転させると同時に、エスデスの手から細剣が落ちた。

エスデスの握力が強くとも梃子の原理により強められた力には叶わない。

「うっ!!」

細剣を、得物を落とすなど経験が無かったことからエスデスに驚愕が浮かびそれが隙となる。

エスデスは危機を回避すべく後退しようと身を翻すが、一手遅く主水が逃がすはずもない。

エスデスの危険種並みの反射神経により浅くはなつたが間髪入れずエスデスの両腕を打つ。

一踏みで大きく後退し間合いを作ったエスデスは力なく両腕を垂らすような姿となっていた。

第109話

俯き力なく両腕を垂らすエスデス。

両腕をアレスターの能力により封印出来たことにより優位に立てる状況になったと思われるはずが、主水は依然として厳しい表情のままエスデスに鋭い視線を投げ掛け続ける。

そして、沈黙を破るように言葉を発した。

「いいかげんに演技を辞めたらどうだエスデス」

「フッフ、そうだな」

エスデスは主水の言葉に呼応するように顔をあげると垂らしていた両腕を上げ具合を確かめるように振り始めた。

両腕が振られる度に袖口からキラキラと輝く欠片が。

「お前の帝具を前に調べておいたのが功を奏した。打った部分の自由を奪うというなー」

「だから服に隠れる部分に氷を纏い甲冑とした………か」

エスデスの言葉を継いで苦々しげに主水は呟く。

エスデスは、主水がアレスターを使用し始めるのを目にし、アレスターの能力を以前調べておいた帝具凶鑑のページを思いだし、考えた。

自分と互角以上の戦いを演じる主水相手にどこか一つでも自由を奪われることになる、それだけで命取りーいや、この楽しい時間が終わることになると。

そして、危機感を抱いたことにより、直接アレスターが触れなくなる為の対策として体に氷を纏い鎧のようにしていたのだ。

主水としては両腕を打ち据えた時にその感触から悟ったのだー生身ではないと。

「なにからなにまで厄介なヤツだ」

戦闘民族故の卓越した戦闘スタイルのエスデスに呆れるように溜め息交じりに溢した主水だが、その瞳には諦めはなかった。

（実戦で、しかもエスデス相手にこれを使用することになろうとはな……）

主水は軽く深呼吸するように息を吐き、気合いを入れ直すとアレスタも使い手の主水に呼応するように太陽も霞むほどの黄金の光を放ち始める。

（なにかするつもりか。一回の戦いでこう何度も私を楽しませてくれるとはな）

自然と口角が上がるエスデス。

幸せを噛み締めるまもなくエスデスは、ヒビが入り崩れ始める両腕に纏った氷を振り払うと、強度の増した氷を精製し鎧として纏う。

「この時間が永遠に続いたらよいのだがな……」

ポツリと小さくもらした一言にエスデスの心境がありありと表れていた。

エスデスは先程の落とされた細剣に向けて指を指す。

すると指の先から氷でできた鎖が放たれ細剣に巻きつくくとエスデスは引き寄せる。

再びエスデスの手元に細剣が戻り握られた。

（ちっ、抜かったな）

再び得物を握るエスデスを見て眉間に皺を寄せるが後悔してはいられない。

エスデスは低い姿勢から弾丸が放たれるように飛び出すとその勢いを加速させつつ主水に向かう。

主水は右斜めよりの下段に構え待ち受ける。

（左肩に担ぐように振りかぶるかー左斜め切り下ろし）

主水はエスデスの挙動から先読みし体を後ろに反らし回避にかか

る。

「!!」

読みきったはずだった。

しかし、ニヤリと笑ったエスデスは切り下ろしに入った無理な姿勢からさらに踏み込み切り下ろす。

一般的な人間ではあり得ない姿勢からの踏み込みと一刀。

（アレスタが間に合わねえっつ）

主水としては一刀を体を反らし避けきり、返す形として下段から切

り上げ、エスデスがそれを回避すると同時に十手独自の追撃を目論んでいたが、大きく崩されることになる。

想定外の踏み込みからの切り下ろしはアレスターで回避は間に合わない判断した後の行動は早かった。

左手で太刀を抜き受け止める。

エスデスの斬撃の異常な速さから鞘から抜き放たれることはなく、抜き身が半分辺りで防ぐ。

「くっ！」

秀に鍛え直して貫き強度が増しているはずの太刀が軋むほどの圧力。

しかし、エスデスは受け止められたにも係わらず、太刀に接している細剣を力任せに振りきった。

(なんて力だ)

太刀と細剣の触れあっていた刃が火花を放ち、主水はそのまま後退させられる。

しかし、エスデスは止まらない。

即座に主水が後退した分間合いを詰める。

(力じゃ敵わねえ。ならば)

半ばまで抜かれた太刀を抜き放つ。

右手にアレスター、左手に太刀という変則的な双角をとる。

双角とは右手と左手に十手を持つ二刀流である。

(柔よく剛を制す)

間合いを詰めていたエスデスが突きを放つ。

目視も難しいほどの突きを主水は経験則から左手の太刀を合わせ軌道をずらす。

僅かにエスデスの表情に驚きの色が。

力勝負になる受けることはせず、剣術の技術により受け流しによる対応。

主水の極致に達する剣術の技術によりエスデスは太刀で合わせられたという感覚すらなく、元からずらされた軌道をついていたようにさえ感じていた。

故になぜ穿てていないという違和感を受ける。

突きが空をきりエスデスの体勢が前のめりになった所で主水は、右手のアレスターで頭部を狙い突く。

「させんー!」

即座に左手に精製された氷の刃がアレスターの行く手に立ち塞がる。

しかし、アレスターは何も存在しないかのように氷を素通りする。

「そういうことか!!」

エスデスは脊髄反射と見紛うほどの速さで首を傾けかわしにかかる。

だが、かわしきるには至らず左耳を掠めた。

主水は掠めたアレスターを横風ぎに振るう。

側頭部に直撃と思われたが、エスデスは上体を大きく反らし横風ぎをかわし、その反動を用いて左足により頭部を狙ったハイキックを放つ。

横風ぎから逆時計回りに180度回転した主水は左手の太刀でハイキックを止めるべく瞬時に逆手に持ち変え防ぎにはいる。

このまま左足を振り切れば氷を纏っていようとただで済まない。

しかし、エスデスの表情にイタズラじみた笑みが浮かぶ。

刹那エスデスの左足がブレ軌道が上段から下段に。

バキツという何かが折れる音と共に主水が傾く。

主水は顔を歪めつつも背後のエスデスを穿つためにアレスターを逆手に持ち穿つ。

しかし、そこにエスデスの姿はなく、大きく間合いを取った位置に立っていた。

「腰を砕くつもりで放った蹴りが鞘によって防がれることになるとはな」

エスデスの視線の先には、蹴りにより砕かれた漆塗りの鞘の欠片が。

二本挿しの鞘に守られる形となったのだ。

「それにしても……その帝具の真の能力は大したものだな」

「！」

エスデスの確信めいた発言に一瞬呆気に取られる主水。

たった一度の能力の発動で見切られたのかという驚きが脳裏を過るが、顔には一切出さず、また反応も返事もしない。

その一言に反応することは否定することも含めて即ち肯定となるからである。

相手に情報を与えることほど愚かで命知らずのことなどないからである。

たとえばそれが相手をあと一步に追い込んでいてもだ。

「返事はなしか。ではここからは私の推測だ。お前の帝具の能力を辞典で見たときに違和感があった。帝具というものは相手の命を奪う武器であるはずだ。そうでなければ帝具持ち同士が戦えば必ずどちらか一方が死に至るという前提条件さえも覆されることになる。そしてさらに言えば、相手の自由を奪うというのはあまりにも帝具の能力として弱すぎる。使い方によってもな。そこから考えるとその帝具には隠された本当の力があると考えるのが通常だ。そしてここからは私見だが、相手を捕縛する際気にかけることは何かと違ってな。私自身はそんなこと気にかけたこともなかったので、ウェイブやランに聞いてみると二人とも同じ答えをした。なんだと思う」

エスデスは怪しい色をした瞳で主水に流し目を送り、問いかける。突然問い掛けることにより主水の表情の変化を見届けるためか、もしくは自分の推測に間違いはないだろうという自信を秘めているからかは分からないが。

主水は依然として無表情である。

「反応なしか。では再開する。二人は答えた『相手の武器を警戒する』とな。つまり相手の武器とは帝具持ち同士の戦いにすれば相手の帝具ということになる。そうお前の帝具の真の能力は相手の帝具の能力の無効化違うか？」

「……………」

主水は今回も無反応しかし、それは相手に情報を与えないためではなく、エスデスの言っていることが全てであったからだ。

「論より証拠とも言う。これが証拠だ」

エスデスは先程のアレスターの突きを防ぐために精製した氷の刃を示す。

そこにあつた氷の刃は、刃の側面に穴が空いており、そこから左方向の氷も消えていた。

「帝具^②デモンズエクスにより精製された氷の刃が溶かされることはない。そして先程の一撃には何も存在していないように滑らかな動作だった。そこから推測は確信に変わったのだ」

どうだとばかりのエスデスは不適な笑みを浮かべる。

エスデスの戦闘面における卓越した洞察力には主水も苦虫を噛み潰す思いをするしかなかった。

(見抜かれるとは思っていたが、まさか一度で見抜きやがるとは)

エスデスを甘く見ていた訳ではない。エスデスが規格外過ぎたのだ。

(こいつは危険すぎる。ここでヤツを確実に仕留めるしかねえ。これは因縁のあいっぴりに取つとくつもりだったが背に腹は変えられねえ)

最初は時間稼ぎのみのはずだったが、戦ってみて理解した。

ほんの僅かなことから見通す洞察力、誰もが霞むほどの戦闘力、その全てが危険だということを知る。

主水は覚悟を決める。

主水にとって革命などは二の次いや、三の次ともみたくない大した問題ではない。

しかし、ナイトレイドの仲間命はちがう。

ここでエスデスを倒さなくては今後仲間が危機に陥る。

ならば今の内に危険の芽は摘んでおかなくてはという考えに変わっていた。

ここでエスデスを仕留めると。

今までのような戦いではじり貧になるのは明らかであるために、主水は決意する、帝具ではなく自らの奥の手を出すことを。

主水は徐にアレスターを帯に納め、両手で太刀を握った。

第110話

主水は決意を固め両手を刀の柄にかけ、下段に構え、静かに呼吸を整える。

肋骨は何本か折れ、鞘が身を呈して守ったとはいえ限度を超えた威力の蹴りを受けた腰は悲鳴を上げているが、それさえも次の一刀に掛けるために意識を傾けることはしない。

(帝具をしまうか。次は何を見せてくれる中村！)

エスデスは期待に満ちた視線を主水に送る。

これまでの僅か五分にも充たない時間の中で主水は、エスデスが今までの人生の中でも味わったことがないほどの高揚感に満ちた戦いを、戦いの技術を演じて見せてくれた。

それだけでも満足であるのに次には主水が纏う雰囲気を一変させ、さらには帝具をしまいわざわざ刀に手を掛けたのだ。

次の一手に期待で胸を踊らせないはずがない。

故にエスデスはその一手を全霊をもって受けるために待ちに入っただのだ。

二人の間には静寂が流れる。

僅かに荒野に鳴り響くのは、遠方で行われているブドーとタツミの壮絶な殴りあいによる打撃音のみ。

真上から吹き込む風がエスデスの美しく流れるような青い髪を揺らし、はたまた主水のマフラーも靡かせるが、両者ともに微動だにしない。

そのような時間が止めどなく流れるように思われた次の瞬間、主水はゆっくりと摺り足で歩み始める。

地を擦る音もなく、威圧感も殺気も垣間見せず。

その動きは今までエスデスが主水に襲い掛かった時のような驚異的な速さや、桁違いの威圧感を含んだものとは正反対とも言えるものであり、よく言えば落ち着いた、悪く言えば緩慢ともとれるものであった。

「!!」

しかし、そのような動作の中でありながら、エスデスの表情が曇り始める。

どこにも曇らせる要因などなさそうであるのだ。

(どういうことだ……)

エスデスの感覚に違和感が走る。

五感の一つ視覚は目の前の主水を捕らえている。

緩慢であるが、一步一步確実に自分との間合いを詰めてくる刀を携えた主水を。

しかし、視覚以外の戦闘面での感覚の触覚、嗅覚、そして聴覚がそれを否定する。そこに主水は存在しないと……

人間が歩むことにより起こる空気の揺れを感じ取る触覚、人間が必ず纏い体から放たれる雰囲気を感じ取る嗅覚、摺り足による服の衣擦れや足音を感じ取る聴覚、その三つの感覚が全く主水を捕らえていないのだ。

まるでそこに何も存在しないかのように。

一番信頼出来る『視覚』さえも三つの感覚に追随し従うかのように揺らいでくる。

三つの感覚から生じる思い込みが為せる業か、その主水は虚像だ、もしくは自分を惑わす残像だ、とでも言うかのように。

一步一步確実に近づいてくるのにすでに認識が出来なくなる。

それは初めての感覚、エスデスが今まで命を奪ってきた危険種であろうと人間であろうと戦闘時に感じたことなどないものであった。

(何が起こっているッ)

冷静に考えられなくなり混乱するエスデスの背筋に冷たいものが走る。

(!!)

刹那エスデスの視界を目映い鮮血が赤く染めた。

「奥の手へつばめ返し」

突如現れた――いやその存在を感じ取れるようになった主水が目の前で血の滴る刀を振り上げていた。

その後主水はエスデスに背を向けると、刀を一振りし地に赤い軌跡を刻むと同時にエスデスは地に沈んだ。

主水がエスデス相手に放った奥の手とその前段階の歩方は、共に主水がこれまでに極めてきたものがあつてこそのものであつた。

一つ目の歩方は、仕事人という暗殺業の折り、相手に近づく場合や、仕事の際潜入や人目に晒されなくするため磨いてきた気配を断つという技術の集大成に位置する。

二つ目の奥の手は、元来佐々木小次郎が編み出した秘剣であるが、主水も独自に幾多の流派を極めた後に自らの力で修得したのが、この奥の手へつばめ返しであつた。

共に長い年月身を置いて極めてきたものの集大成となる技であつた。

「閻魔様に会つたらよろしく言つといてくれ……」

主水は振り返ることなく呟いた。



「!!」

「何が起つたのだ!!」

タツミとブドーとの戦いの合間にその光景を遠目に見つめていたアカメやナジエンダは、一瞬何が起つたのかという啞然とした後に、驚愕にかられた。

アカメは先程の戦いで、ナジエンダは帝国に属していた頃から身近でエスデスの戦いぶりをまざまざと見せられその強さ、恐ろしさを身をもって知っていた。

エスデスはどれ程過酷な戦場においても苦戦することも、傷を追うことすらなかつた。

革命軍に身を置くようになったのちに、仮にエスデスを倒すことを

想定するならば、少なく見積もっても、五万の精兵とアカメを含め帝具遣いを10人は必要とすると考えていたほどだ。

そのエスデスが主水一人におそらく一刀の元に斬り伏せられ、血飛沫をあげ地に伏したのだ、驚愕しないほうが可笑しい。

エスデスを倒したという喜びだけではなく、つくづく主水が仲間で良かったという思いに駆られていた。

「後はこの場から退却するのみか」

ナジエンダは皆の命を預かる指揮官として即座に頭を切り替え次の一手に頭を巡らせた。



「いまさらか遅えぞ……」

主水の視界の端に、修理が終り作動可能を意味する狼煙が映る。

普段なら有り得ないがエスデスを倒せたという戦果、そしてこれでこの場は退避出来るという戦場における主水らしくない僅かな安堵が油断を生んだ。

「再び巡り会えたな中村!!」

「なんだと……うぐっ!」

主水が身をよじる間もなく、鮮血が舞い銀色の刀身に血を纏う鋒が腹部から突き出ていた。

「てめえ、なんで生きていやがる……」

奥の手を食らって生きているはずがない、確かに手応えがあったという確信から出た言葉を、白い軍服に大きな切れ目が入り真っ赤な血で染まり、口許に吐血の後がくつきりと残り、ふらつきながらも細剣を主水に突き刺す背後のエスデスにぶつけた。

「確かになあれで死なないヤツなどこの世にはいないだろう。だがな、あの奥の手はまだ完成していないぞ」

エスデスを見なくても分かる……今口許に笑みを浮かべていることが……主水はどういうことだと歯噛みした。

「元お前の上司として教えてやろう。あの奥の手に入る直前にそれまで完全に隠していたはずの殺気が僅かにもれていたのだ。まあ私以外では気づくことが出来ないほどの些細なものであったのだがな。」

だから、私は両断されることはなかった。お前がもし普通にあの奥の手を出していたら私は死んでいただろうな」

「くっ」

痛みと、それ以上に大きな後悔で顔を歪める。

エスデスをこの場で殺すという強い決心があだとなったことへの強い後悔と憤り。

しかし、もう一つ主水には解せないことがあった。

「なぜその出血で生きていられる」

両断することは叶わずとも、確実に心臓を捉えたのは確かだった。ならばだ、心臓を切ったことにより出血は酷かったはず、どんな人間であっても基本20%の血液を失えば死に至る。

つばめ返しによる一撃ではそれに満たずとも、それからの時間と心臓を切ったことを考えればとうに20%は超えているはずだという考えからだ。

「フッフッフ、私の帝具デモンズエキスの力により血液を凍らせて出血を止めている。またその出血を凍らせたことにより患部も塞がっている。まさに一石二鳥というところか」

エスデスは細剣を勢いよく引き抜くと、その際にさらに主水の血液が溢れ出す。

「安心しろ主水。お前ほどの玩具はこれからも手に入ることはないだろうからここで捕らえて、クロメの八房で永遠に存在できるモノへと変えてやろう」

エスデスも斬られた時の出血と皮一枚という程に斬られたことにより既に満身創痍であるはずが、その瞳には狂気が満ち、いまだに癡猛な肉食獣のように鈍く輝いていた。それは全てどのような状況に置かれようとも戦いを渴望する戦闘民族の為せる業か。

「……てめえをここで殺せねえのは心残りだが、ここは撤退させてもらう」

「中村、私がお前たちを逃がすと思うか！」

溢れる出血を押さえるように置く右腕とは逆の左手で裾から小柄を取り出すと、天高く放り投げた。

天高く舞う小柄は太陽の陽光を受けキラリと輝いた。

「何のつもりだ中村」

訝しげな視線を主水に送る。

すると、主水は軽くほくそ笑みあらんかぎりの声をあげた。

「あれを作動させた。お前らその場から離れて伏せろ!!」

「主水」

膝をついた主水に駆け寄ったアカメが主水に肩をかし後方に駆ける。

「おのれ逃がすか」

エスデスも追撃に転じようとするが、やはりそのダメージが大きすぎて追うこともままならない。

視点を移すと、タツミは最後の一撃とばかりに渾身の一撃をブドーに放ち、ガードをしていながらもその威力で後退させ、その隙に意識の無いレオーネとマインを抱えて下がり、身を伏せた。

刹那、地面から光が溢れ、大きく盛り上がり、破砕した。

辺りには爆風が衝撃波となり吹き荒れ、周囲の氷を破壊し、砂煙が巻き起こる。

ある意味天閉の奥の手へ正四尺玉を地中に埋めておいたものが、遠隔からの起動により爆発したものである。

戦闘の場になるだろうと予想された場所に片っ端から埋めておいた物の一つとなる。

爆発によって閉じ込めるための障害を排除し、さらには砂煙による目眩まし、音により逃走経路を悟らせないなどが目的となる。

威力だけで言えば特級危険種でも倒せる威力ではあるが、エスデスとブドーにはあまりその面では効果は期待出来ないということ。攻撃面は排除されている。

「皆飛び乗れ!!」

上空高くに待機していたエアマンタが音もなく滑空してくる。

作戦段階では超級危険種のドラゴンを使うことを考えていたが、その羽ばたきによる音と砂煙が晴れてしまうことを不安視し、エアマンタが採用された。

その薄い体から砂煙を散らすのを最小限に治めエアマンタは突っ込み皆はそれに飛び乗る。

エアマンタはスピードを落とすことなく飛び去ろうとした刹那、

「逃がさんぞナイトレイド!!」

鬼の形相で怒号を飛ばす宙に浮かぶブドーの姿がそこにあった。

に帰す最悪の結末。

避けようがない運命がナイトレイドに覆い被さるように迫る――そのような最中、帝具パンプキンの銃口をメインが足場を固め合わせた。

「私が相殺する！」

決意の籠った目差しをしたメイン。

しかし、仲間の脳裏に過る最悪の結末は変わりようがない。

確かに、パンプキンは使い手が危機的な状況であればあるほどその威力は上がる起死回生が見込める帝具である。

しかし、今回はその範疇（パンプキンの出しうる最大火力）を遥かに超えうるほどのものであり、またパンプキンの糧となる使い手（メイン）の精神力もこれまでの戦いで限界とまではいかなくともすり減らされていることは明白だったためだ。

「どけメイン」

「なっ……ちよ、ちよっど!?!」

メインを押し退け前に立つ主水。

体はふらつき、アレスターを杖に、歩いてきた軌跡が赤い鮮血で分かるほどの状態でメインの前に立つ。

「私の邪魔はしないでよ！」

「うるせえ黙って見てろ！」

「!!」

その満身創痍の体から放たれているとは思えないほど腹に響く声と威圧感にメインは気圧され声を無くした。

ただ、主水の瞳は悲しみと後悔を色濃く映していたことには誰も気づくことはなかった。

主水の脳裏に刻み込まれた拭いきれない悲しき記憶。

過去に仕置人として裏家業に身を置くなかで、一人の銃使いの仲間がいた。

その男は敵に捕らえられ、凄惨な拷問を受け廃人と化する。

後れ馳せながらその場にたどり着き、変わり果てたその姿を見た主水の悲しみそして、怒りは計り知れないものであり、後に怒りの形相

で敵は討った。

しかし、晴れることなどあるはずもなく、心に深い傷を刻みつけられたのである。

さらに悪いことに、治ることのないその男には恋仲の女がいた。

その女はその男を治すと気丈にも消え入りそうな儂い笑みを浮かべ、江戸を廃人と化しもう受け答えも反応も示すことのない男と共に去っていった。

しかし、その気丈さの影に必死に隠された断腸にも近い悲しみは、主水の心の傷を更に確固たるものとしたのであった。

そして今、形は違えどこのままメインに任せれば、あの攻撃を自分の精神を弾として放ち迎え撃つことになり、辛うじて相殺出来たとしても、その代償として間違いなくメインは精神力を使いきり、廃人と化す。以前の仲間のように……

そして、メインが廃人と化すことにより……主水は疲れか、はたまたそれ以外が関係するかは分からないが倒れ付しているタツミに僅かに視線を送る……タツミに大きな悲しみを与えることになるだろう。

あの時はたどり着いた時には既に……。

だが、今ならばそれを防ぐことが出来る。あの二人と同じ悲しみに暮れる姿を見るのを避けることが出来るのだ。

その強い思いが主水に力を与え今に至る。

(あと一回だ)

主水が携えたアレスターが神々しい光を放つ。

エスデスの氷の刃を打ち消した時と同様の。

(帝具の……あの一撃を)

主水はアレスターを振り上げる。

(打ち消す)

目の前に迫る裁きの一撃に合わせ、振り下ろした。

アレスターに触れた雷(ソリッドシューター)は触れた端から霧散していく。

しかし、ソリッドシューターは衰えることなく、そして、消されて

も消されても止めどなく押し寄せる。
まるで終わりのない津波のように。

「ぐっ……」

見た目には拮抗しているように見えながらも、実際は違った。

主水がズルズルと押し始められたのだ。

ソリッドシューター自体は消せても、その勢いまでは消しきれない。

主水の体は既に限界に至っていた。

強い思いで補えるレベルを超えるほどにまで。

(クソッ、ここまでなのか。こいつらだけは)

刹那、主水の体勢が崩れる。

(しまっ……なっ!!)

しかし、主水は体勢を保った。火事場の馬鹿力で踏みとどまった訳ではない。

気づけば傾き倒れかける主水の背に添えられる幾つかの手が……

「私の出番取ったんだからやりきってよね」

「マイン……」

「すまないなボスでありながらいつもお前に任せてしまっ」

「ナジエンダ……」

「エスデスに続いて今回もこれぐらいしか出来なくてゴメン主水」

「アカメ……」

主水の背に当てられた六つの手は、温かさと心強さだけでなく、主水に力を与える。

(まだ死ぬわけにはいかねえな)

主水は皆の思いをアレスターに乗せて……振りきった。

空に線引く禍々しいほどの蒼白い雷(ソリッドシューター)は、神々しい黄金の光に飲まれなかったかのように消え去った。

(やった……か……)

主水はそれを見届けるとその精神力で保っていた意識を手放した。

「すまなかった主水。そしてありがとう。主水とタツミを早く医者に見せたい急ぐぞ！」

ナジエンダは聞こえてはいないだろうが、優しく主水に声を掛ける
とエアマンタに指示をとばすかのようにはげをばした。

エアマンタはナジエンダの言葉を理解するかのように体を波立たせてスピードを上げ始めた。

「ソリッドシューターを……………」

奥の手を消されたことに茫然とするブドー。

絶対の自信があったからこそそのショックは計り知れないものであった。

しかし、今のブドーにとってはそれは些細なことではしかなかった。

「陛下の為にこの命を捧げる!!」

再びスパークを散らす帝具アドラメレク。

命を燃えしてまでも再びアドラメレクに力を注ぎ、ナイトレイドを打倒するのも全ては陛下のために。

「命をとって!!」

ブドーが再び発射体勢に入った、その時だった、思いがけず一人の兵士が早馬に乗りブドーの直下にあたるその場に現れたのだ。

「ブドー將軍。陛下から即帰還してほしいとの御下命がございました」

「なに陛下が!」

それまでの勢いが失せるかのように帝具アドラメレクのスパークが納まる。

「使命を果たせなかった私がどの面を下げて陛下の御前に姿を現せようか。しかし、陛下の命に逆らうのはそれ以上の大罪」

ブドーは自分に言い聞かせるように呟くと、小さくなっていくエアマンタの背を苦々しげに睨み付けつつそのまま宙をかけ宮殿に向かった。

「ブドーは帰ったか」

エスデスは膝をついたままブドーが去っていく様を見送ると、片手を地につけつつ立ち上がる。

「最後までやってくれる。これからは雑魚ばかりで辟易するとおもっていたが退屈しなくてすみそうだ」

フラフラと揺らめきつつも口許に楽しそうに笑みを浮かべるとブドー同様宮殿に戻っていった。

第112話

大理石の床に豪華な赤い絨毯がしかれる玉座の間に方膝をつき深々とブドーが頭を垂れていた。

「ブドーよ面をあげよ」

「はっ」

年若き皇帝の声にやや間を置いてブドーは顔を上げた。

だが、その表情は硬く、質実剛健をそのまま絵にしたようなブドーの剛毅さの欠片もなかった。

「どうしたブドーよ。そなたらしくもない」

「ナイトレイドを逃がすといった失態を演じておきながらこの場において陛下の御尊顔を拝すことが大きな罪のように感じ奉りまして……」

前回のナイトレイドとの戦いにおいて、ナイトレイドを殲滅することとは言わずもがな、一人さえも倒すことが出来ないだけでなく、人質を逃してしまったという失態の責を感じ、ブドーは命をもって謝罪をしようとも覚悟していたのである。

ブドーの言葉を聞き年若き皇帝は少し困った表情を浮かべ、一度隣に控える大臣のオネストに視線を投げ掛けるどうすればいいのかと。

その様からも皇帝の大臣オネストに対する絶対的な信頼が垣間見られるばめんであった。

皇帝のどうすればという視線を受けたオネストは笑顔を浮かべ領くと、軽く耳元で助言をする。

すると皇帝は勇気付けられたのかオネスト大臣とは対照的な無垢な笑顔を咲かせ振り向きブドーに対し口を開いた。

「そなたは親子代々この国に尽くしてくれた忠臣。このようなことで責めはしない。もしもそれでも罪を感じているというならば、我が悩みを解決してくれ」

「ありがたき御言葉……ブドー命に換えても陛下のお悩みを解決いたしましょう」

「うむ」

ブドーの頼もしい言葉に皇帝は答えると、大臣のオネストに軽く目配せをする。

分かりましたとオネストは一步前に出ると経緯の説明を開始した。「ブドー將軍とエスデス將軍がナイトレイドとの一戦に出てからすぐに革命軍が動き出したのです。まだ先行隊で本隊ではありませんが、シスイカンを落とし勢いがつき始めています。將軍にはコロウカンまで出向いてもらい、目障りな先行隊を殲滅してもらいます。本隊が辿り着いたらそちらも排除するようにとの陛下の勅命であります」

「ははっ、承知いたしました」

ブドーは深々と頭を垂れ、力強く勅命を承りましたという意を示し、玉座の間を退出した。

ブドーの体からは今回の汚名をなんとしても晴らすといった強い覚悟がオーラとなり溢れ陽炎のように揺らめいていた。



戦時体勢に入っているためか、普段の静まり返った雰囲気はなく、バタバタと慌ただしい雰囲気が宮殿内に流れる中、ブドーは目に見えるほどの覇気を放ちながら廊下を歩いていた。

あまりの恐ろしさに遠目でブドーを見たものは道を変え、不運にも擦れ違ったものは覇気に当てられ金縛り状態になったり、泡を吹いて白目を剥いてその場に倒れ混む者がいるほどであった。

そんな最中であつた。

「ブドー將軍」

先程までの慌ただしさが嘘のようになくなり、人通りもパタリと止まった中でその渦中のブドーに声がかけられたのだ。

「貴公は確かワイルドハントの」

ブドーは訝しげに声を掛けてきた者に視線を向ける。

それはまるで射抜くような鋭い視線。

武官であっても心臓を貫かれるほどの恐怖を味わうことになるのは言うまでもない。

ブドーのワイルドハントに対する認識は最低であり、革命軍との戦いが終わったのちの肅正対象とも考えていたことに加え、一言も言葉

を交わしたことがない相手であったとその人物を認識したためその視線や表情が厳しくなったのだ。

「私に何のようだ」

「ブドー將軍が戦地に旅立つために帝都を留守にすると聞きまして、將軍の御懸念を解消するあるものを差し上げようと思ひまして」

ブドーの敵対心が籠められた視線を難なく受け流し、あまつさえ笑顔を増かべると、音もなく優雅な所作で近づくと何かをブドーに差し出した。

「なんだこれは。私には必要とも思えないが」

警戒してか注意深く渡された物を観察したのちに、用途が分からなく、また渡してきた者が者なため、不要と断じて握り潰そうとした。

その刹那、やはりなといった笑みを浮かべると、小声で用途を呟いた。ブドーのみに聞こえるように。

耳にその言葉が届くと、ブドーはハツとした感じで驚きの表情をしたのちにフツと笑みを浮かべ、握り潰すのをやめ渡された物を懐にしまった。

「貴公は信用ならんが、その忠義は認めよう。ありがたく受け取っておこう」

ブドーがマントをはためかせ去っていく姿を見送ると、意味ありげに口元を緩めていた。



「どうじゃったアレは渡せたのか？」

「ああ、案の定喜んで受け取ったさ」

工房に現れた左京亮に試すような笑みを浮かべ聞いたドロテアはその答えにそうかと言ったように軽く息を吐いた。

呆れが交じったような表情を浮かべたドロテアだが、次の瞬間には別の小悪魔の如き何か含みのある笑顔を咲かせる。

「妾は明日にでもピクニックに行くつもりじゃがお主も行くか？」

「あの性欲いや今は……食欲女に食わせに行くのか？」

左京亮は流し目を奥の厳重にあつらえられた部屋に送る。

何やら汚いものをみるかのような冷たい視線で。

「ああ、コスミナは食べれば食うほど強くなるからな。すでに囚人も捕虜も食いつくしてしまつてのお、帝都近くにまで入り込んでいる奴等を食わせようと思つてな」

「そうか……」

左京亮は僅かに何かを思案するような所作をしたのち、歪んだ笑みを浮かべる。

「ああ、ついていくかな。ただ、行き先は俺に決めさせてくれないか」
「ああ、かまわんぞ」

ドロテアは左京亮の考えを察して了承した。楽しそうに。

「ああ、そうだ。言うのを忘れていたがシユラの奴が死んだつてよ」
「そうか」

事の次いでのように簡単に話す左京亮となんの感慨もなさそうにたつた一言で面倒くさそうに答えるドロテア。

シユラへの思いが見えてくる一場面であつた。

◆◆◆◆◆

イエーガーズの詰所に急遽召集されたセリユー、ウェイブ、クロメの三人が集まつていた。

セリユーは

「主水君はどうしたのかな？昨日あのあと会えなかつたし」

といった感じで視線を室内に巡らせ。

ウェイブは昨日の主水に盛られた葉が抜けきらないのか何度も眠そうにあくびをし。

クロメはそんなウェイブを心配そうに見つめていた。

三人が三者三様の姿を見せ詰所で待っていると、三回ほど自重気味なノックが鳴つたのち、神妙な顔をしたランが入ってきた。

その神妙な表情は困惑、戸惑い、悲しみ、疑問など様々な負の感情がない交ぜになつたもので、それを見た三人にも嫌な予感がヒシヒシと感じさせられ緊張が走る。

中でも、主水が居ないことが起因するのかセリユーには胸が締め付けられるような嫌な予感に苛まれていた。

何か今までのものが全て崩れさつてしまふのではないかという何

処からか沸き上がる底知れない恐怖が重たくのし掛かっていた。

「皆さん急な呼び出し申し訳ありません」

「あの、隊長は？」

セリユーが問い掛ける。

本当は主水について一番最初に問い掛けたかったが、嫌な予感から聞く勇気が出なかったことと、普段ならば、ランを後ろに引き連れられたエスデスが来るはずという考え、そしてイエーガーズのメンバーならばエスデスについて聞くのが当然と解したからだ。

「エスデス隊長は昨日の戦いで一命はとりとめたものの重傷を負ったためドクタースタイリツシュに長時間の手術を受け、それから眠り続けています。ドクタースタイリツシュは、その長時間の手術の疲れから今日は休暇を取られています……」

「エスデス隊長が……!!」

「ウソだろ!？」

「そんな……」

三人とも信じられないといった驚愕の表情を表す。

ランの真剣な顔を見てもそれでも信じられることではなかった。

今まで嫌というほどその強さを眼前で見せつけられていた三人にとつて、エスデスは傷つくことさええない、無敵の存在だと認識させられていたからだ。

それが戦闘によって傷つく所か、生死をさ迷うほどの大ケガをするとは夢にも思わなかったからだ。

驚きに支配される中で、セリユーがその違和感にいち早く気づく。

ランが何か躊躇するように言葉を止めたことを……そして、悲しそうな瞳でセリユーを一瞥したことに。

セリユーは意を決す。

このまま戸惑っていても埒があかない、それに自分の頭に浮かぶようなことはあり得ないと自分に言い聞かせて。

「もん……」

「いったい誰が隊長をそんな目に!」

セリユーのか細い問い掛けにウェイブは気づくことなくランに

食って掛かるように問い掛ける。

ウェイブの瞳には強い怒りが灯っていた。

「……………」

「ラン!!」

苦悶の表情を浮かべ無言で佇むランにウェイブは強く先を促す。

「分かっているんだろ誰がエスデス隊長をこのようにしたのか」と。

(いづれ厳しい現実には直面するのならば…………)

一度俯いたランは意を決し苦しそうに震える口調で答えた。

「中村主水です」

「……………」

まるで全ての時間が止まったかのような静寂が訪れる。

無音。

セリユ一の恐怖により高鳴る鼓動が聞こえそうになるほどの。

僅か数秒間が何時間にも感じるほどの中、ウェイブが混乱を押しさえながら立ち上がる。

「ランなんて言っただんだ?」

「中村主水がやったと……………」

「こんなときに冗談はよせよ!!」

ウェイブは青ざめながらも怒気を孕ませランの胸ぐらを掴んだ。

そこには嘘だと言ってくれという微かな願望も含まれていた。

「冗談ではありません!」

「ウソ……………だろ……………」

見せたことがないほどの強い口調で辛そうに答えるランと、それを聞いてズルズルと崩れ膝をつくウェイブ。

ウェイブの意を継ぐようにクロメが声を上げる。

「主水がそんなに強いはずはない」

「私も信じられませんでした。しかし、それを話すエスデス隊長は本当に嬉しそうに話しており、決して嘘をついているようには思えませんでした」

クロメの間にウェイブはありのままに答える。

見た限りそれが真実であると…………

「私だって信じたたくありませんよ……………」

弱々しく呟かれた言葉はランの本音であったのだろう。

「……………」

まるで意識を失ったかのように虚ろな目をして呆然自失となるセリユ。

楽しかった記憶にヒビが、亀裂が入っていく。

全てが偽りだったのではないかと。

「ふふふ」

「えっ!？」

突如響く笑い声。

「ふふふふ。あははははは……………」

止めどなく涙を溢しつつ笑い声を轟かすセリユ。

あまりの痛々しさにラン、ウェイブ、クロメは呆気にとられたのち、ラン、ウェイブは顔を歪めて背け、クロメは優しくセリユを抱き締めることしか出来なかった。

歯車は確実に終末に向かって動き出した。

第113話

「うっ………」

ボヤける視界が次第に鮮明になり、白い天井が映り、触覚が自分が今布団の上で寝ているということを伝えてくる。

以前もこのようなことがあったなど、主水は苦笑いを浮かべた。

そしてあの時と同じならばと確認のために周囲を見回すと、自分がヘソクリを隠すためのみに購入した掛け軸が壁に掲げられ、メザシに似た魚を炙るために使った火鉢、帝都の古道具屋で見つけた将棋版のようなものが目にはいる。

（今度は自分の部屋か）

今自分が寝ている部屋は、見慣れた小物や、愛用の物があることからナイトレイドのアジトに存在する自分の部屋だと認識した。

（あの時は警備隊の医務室だったか）

以前の記憶を呼び起こしていると、視覚の次は嗅覚が反応した。

自分の男臭い部屋に存在するとは到底思えない甘い良い匂いを感じ取ったのだ。

（体が痛えな）

重い感じがして軽く痛みが伴う体を反転させるのはやめ、首のみを動かし逆方向に視線を送る。

そこにもデジャブのような光景が。

腕を枕にし突っ伏して眠るチエルシーの横顔が。

どこか疲れたような、辛そうな寝顔であり、また頬にはうつすらと涙の跡が残っている。

（心配をかけちゃったか……）

何かを掛けてやらなくてはと主水が痛みを押し体を起こそうとした時だった。

「う、うくん」

どこか悩ましげに艶のある声を上げ目を擦りつつチエルシーが目を覚まし、体を起こした。

そして、徐に視線が合い見つめ会う形になる二人。

「も……主水……!!」

「そそられる寝顔だったぞ」

未だに寝ぼけ眼のチエルシーに何か企んだような笑顔を浮かべからかうように話す主水。

一瞬の間を置いた後、眠気が吹き飛んだように瞳を大きく開くチエルシー。

瞳は潤いを増し、

「し、心配したんだからっ!」

「あだだだっ」

主水の言葉も無視するかのようには涙を溢しながら主水の胸に飛び込むチエルシー。

主水はエスデス戦の傷が完治していないため、その痛みに悶えつつも、何とも言えない温かいものを感じていた。

◆◆◆◆◆

「そうかそんなことが」

落ち着いたチエルシーから主水は意識を失った後の事を聞いていた。

事は主に二点。

ブドーとの死闘を生き抜いたタツミは、ブドーと同等の力を手に入るために帝具インクルシオとある意味契約的なものを結び力を得たために、インクルシオに体を食われかけているということ。

既に帝具専門の医師にはインクルシオを纏うのはあと四回が限界だと伝えられているらしい。

二点目は事が動き出しているということだった。

エスデスが生き残ったとはいえ、その傷は軽いものではなく、未だに眠り続けていることと、ブドーがシスイカンから離れていたことを合わせて革命軍の先行隊が進行を開始しているということだった。

「俺達は動かなくていいのか?」

「革命軍が帝都にたどり着くまでに帝国の幹部を暗殺することを望まれているわ」

主水は表情を引き締めて軽く頷くと、布団から体を起こそうと試み

る。

しかし、体を走る痛みと、しばらく眠っていたために、筋力が落ち、また平衡感覚を失っているために立つことにさえ窮する事態となっていた。

「大丈夫？」

すかさず主水に手を貸しつつ声を掛けるチエルシー。

「すまねえな。情けねえ姿を見せちまったもんだ」

苦笑いを浮かべる主水にチエルシーは笑顔で答える。

その笑顔は何かを企んでいるような笑顔ではなく、心の底から浮かべているものであった。

「あれから三日間も眠り続けていたのだから仕方ないわよ。それにそういう主水の姿を見るのも新鮮で何か嬉しいし」

頬を染めて笑顔で主水を見詰めるチエルシーに、何かしら耐え難い衝動に突き動かされる主水。

(一回ぐらいならもつか……いやもたせる)

自らの体に問い掛けるというよりも、言い聞かせる主水。

体の痛みなど心を掻き立てる男の性には敵わない。

「チエルシー!!」

「えっ!も、主水!?!」

先程までふらついていたとは思えない力強さで両肩に手を置く主水。

「い、いいよ……」

チエルシーも主水の意味を汲んだのか顔を更にトマトのように赤らめて、肯定の頷きを小さく返す。

チエルシーの体から強張りや力が抜けそのまま体が布団に……

覆い被さるように主水も……

「主水目を覚ましたようだなー!」

急に扉が開かれ現れたナジェンダ。

二人と一人が見つめ会う形で動きが止まる。

「あ………その………なんだ………一時間後でいいか?」

「い、いや、今からで構わないです」

体勢を治しハモらせつつ丁寧語で答える二人であった。



「先程のことで明らかになったが、主水も元気になったようで良かった」

「忘れてくれ（ください）」

必死な二人に笑いが込み上げてくるナジエンダ。

だが、次の瞬間真面目な表情に変わり頭を下げた。

「主水すまなかった。感謝してもしきれないが」

わざわざイエーガーズを表立って抜け、エスデスを命を賭けて退け、更にはブドーの奥の手をかき消したことをナジエンダは言っていた。

「大臣を殺すために、金は貰ってたからな。そのついでだ」

さも当然のように話す主水に、ナジエンダは主水らしいと表情を緩め、チエルシーはクスリと微笑んだ。

「でだ。それを伝えに来たのか」

「いや、礼を言うのが一番の理由だが、他にも伝えたいことがある」

ナジエンダは軽く首を振ると、主水に了承を取ると煙草を吹かした。

そんなナジエンダを見て主水は何かを感じ取り先に口を開いた。

「タツミのことか」

「よく分かったな!？」

どのように切り出そうと悩んでいた所に先に主水に切り出され目を見開くナジエンダ。

「こういう稼業であれば自然とな」

「血も涙もない言い方になるが、ここからの戦いが一番苛烈になっていき、宮殿に乗り込むときに主力のタツミがいなくなってしまうのは革命軍にとつてとてつもない損失になる。そうならないように皆でも話合って決めたことだが、負担を減らしてやりたいと思っている。さきの戦いで一番の戦功者で、怪我が完治していない主水に言うのは躊躇われるんだがな」

「金さえ払ってくれりゃあタツミの仕事ぐらい請け負ってやるよ。」

イエーガーズの給料もなくなった所だからな」

「フッフ」

主水らしく素直じゃないとナジエンダは再び笑みをもらす。

しかし、次の瞬間、その表情は強張ることとなる。

「だがな、もしも、インクルシオに食われてこつちの身が危うくなった場合は構わず叩つ斬るぞ」

「……………ああ」

形容しがたい凄味の効いた威圧感に戸惑いはしたが、想定していた主水の答えでもあったので、瞳を閉じて肯定した。

「で、今は皆は何をしているんだ？」

「ああ、革命軍の先行部隊と共に北方から帝都に進行を開始していた他部族が、二日前から連絡を取れなくなってな。さらにはこの近くにまで迫っていた部隊とも昨日から連絡が取れなくなった。そのためアカメ、レオーネ、マイン、タツミで見に行ってもらっている」「そうか……………!?ちよつと待て。レオーネは大丈夫なのか？」

主水の記憶では、レオーネはブドーの打撃を背中にもろに受け、生死の境に立たされていたはずだった。

「確かにレオーネは脊髄を含み背骨も全て粉碎され、臓器も幾つか破損していたが、今ではピンピンしているぞ」

「……………」

主水は言葉を失い、チエルシーは苦笑いを浮かべるだけだった。

◆◆◆

「とんでもない食欲だな」

「フッフ、三大欲求の内の二つ、性欲と睡眠欲が食欲に変わっておるからのお」

破壊された陣屋や、武器、死骸が転がり、火が所々上がる中、左京亮とドロテア、全身を改造されきつたシユザン、死骸を貪り食う危険種のような姿をしたコスミナの姿が。

コスミナは原型も残しておらず、身の丈三メートルを越し、下半身は蜘蛛、上半身は人間でありながら両腕共に螭螂の鎌を繋がれた姿をしている。

「中々にデカイ部隊で大満足じゃ。すでに軽く2000人ほど食っておるからのお。そして、食事をする度に戦闘力が段違いに上がっておる」

「にしても見る影もないな。ただ、あんなになっちまいながらも、俺達に襲い掛からないのはまだ仲間意識があるのか、本能的に避けているのかだろうな………つと、目的地に着く前に奴等に会うことになるうとはな」

左京亮が鋭い流し目を送った先には、アカメ、レオーネ、タツミ、マインの姿があった。

「先日から部隊の消息が潰え始めていたのはお前達のせいのような」

「ああ、妻たちがやった。まあ全てコスミナの腹に消えたがのお」

小悪魔じみた笑みを浮かべいけしやあしやあと述べるドロテアに、四人の怒りが燃え上がる。

「ヤル気みたいだな」

左京亮が立て掛けておいた巨大な薙刀に手を延ばした際だった。

「こやつらは、妾達でやる。左京亮は見ておるがよい」

「つまんねえがまあいいか」

左京亮はその場に腰を下ろし静観を決め込む。

「葬る!!」

ナイトレイドとドロテア一行との戦いの火蓋が切っておとされた。

第114話

「コスミナ、小僧（タツミ）と小娘（マイン）を、シュザンは——」
「アカメええええええ!!」

ドロテアの指示が飛ぶ前に、シュザンは一陣の風となって、袴をはためかせながらアカメに突っ込んで行った。

ドロテアは一瞬茫然とシュザンの背中を見ていたが、即座に我に返り八重歯を覗かせつつ口許を緩めた。

（スタイリツシュの洗脳はかなりの効果じゃのお）



「ちよつとドロテア。この子主水に対する怨みや怒りだけしかないじゃない。確かに個体としてはかなりのモノを持っているけれど、100%の力は主水にしか出せないわよ」

機械に繋がれベッドに横たわるシュザンを一瞥した後に視線をモニターに移す。

モニターに映し出される数字に視線を一巡させつつ頬に手を当てて首を傾げた。

まるで困ったように。

「そうなんじゃよ。そのシュザンは友であったザンクを機械化されることに至った原因である、主水にしか目を向けてなくての」
「あゝゝゝらそうだったの」

半目でジトツとした視線をスタイリツシュに送るドロテアと、その冷ややかな視線を冷や汗を流しながらなんとかかわすスタイリツシュ。

ドロテアが要因の一つはお前にあるという意味での視線を重々承知の上での行動である。

「はあ、分かったわよ。この怨みが主水だけじゃなく、ナイトレイドロー主にアカメにもいくようにするわよ」

「出来るのか?」

ため息を吐きながら妥協点を提案するスタイリツシュに、これ幸いとドロテアは笑顔で答えるただし、疑問つきで。

その様子を見てスタイリツシュは歪な笑みを湛えると、シュザンが繋がれている

機械を操作し、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「こちらにも役にたつなんてねえ。一石二鳥か・し・ら」

「どれどれ……………またもやこれを使うのか」

モニターを背伸びして覗きこんだドロテアもスタイリツシュ同様不敵な笑みを浮かべる。

映し出されるはザンク対アカメの雪原での一戦。

アカメがザンクを斬り葬った一戦だ。

「これをどうするんじや?」

「シュザンの脳に送って現実にこの光景を見ているようにするのよ。そうすれば……………」

言わなくても分かるでしょといった風に言葉を止め口角を上げて微笑を浮かべたスタイリツシュであった。

◆◆◆◆◆

「好きにするが良い」

ドロテアの視線の先で既に戦いは始まっていた。

砂煙や瓦礫を蹴散らし粉塵を巻き上げつつタツミとマインに猛進するコスミナ。

「こうなりや俺が」

「コスミナを殺しきれなかったのは私の失態。だから私が片付けるタツミは見てて」

背中に背負ったインクルシオの鍵に手を掛けるタツミを制し、コスミナにパンプキンの銃口を向ける。

(引き付けて)

パンプキンの威力を最大限生かすためコスミナを引き付ける。

リスクとリターンが表裏一体の帝具。パンプキンを最大に生かすための戦法。

「グオオオオオ」

もはや獣と化したコスミナが、よだれを撒き散らしながら大口を開けてマインを一飲みにしようにする。

(間合いに入った、ここよ！)

パンプキンの銃口が火を吹いた。

苛烈な閃光を放った銃弾は迫るコスミナの眉間を撃ち抜いた。

眉間には大きな風穴があき、撃ち抜かれた先から血液と脳髓が吹き出す。

以前の戦いでは心臓を撃ち抜いたがそれでも生存していたために、一撃で仕留めるために、今回は頭を撃ち抜いたのだ。

「やった」

「グアアアアツツ！」

「うそ!？」

止まらない勢い。

コスミナの爆進は止まらない。

(なんで頭を撃ち抜いのに)

目前に迫る鋭い牙を並べたコスミナの巨大な口。

マインも即座に横に跳びかわしにかかるがマインを獲物として捕捉しているコスミナは逃さない。

加えて、パンプキンの威力を高めるためにギリギリまで引き付けたのが仇となっていた。

「残念じゃったのお。コスミナにはお主たちには分からないじやろうが、賢者の石というものが組み込まれてのお。大抵のことでは死なんのじゃ」

「いいのかネタバレしちまってよ」

無い胸を張り話すドロテアに苦言を挟む左京亮。

相手に情報をばらすことの愚かさを知っているための苦言である。

左京亮は相手が確実に罠にかかり死にかけるまではばらさず演じきるタイプである。

「どうせ死ぬんじやしかまわんじやろ」

ドロテアの話が終わる前にコスミナの大口が閉じられた。

マインを含めマインの立っていた場も地面も抉れ消えていた。

「ほらな死におったじやろ」

「どこがだ」

疲れたように頬杖をつく左京亮は、ドロテアに促すように視線を滑らす。

「なんじゃと!?!」

左京亮の視線を追い向けた視線の先には以前のような純白ではなく、禍々しい生前の超級危険種を彷彿とさせるインクルシオを纏ったタツミがマインを抱き立っている姿が。

「ありがとタツミ。それとゴメンね」

「かまわねえヨ」

タツミはマインを優しく降ろすと、身を翻しコスミナに突っ込んだ。

「俺のマインに触ルンじゃねエ!!」

所々獣染みた唸り声を含ませ具現化した副製品の槍へノインターターを振り上げ、轟音を轟かせ振りきった。

「グギャアアア……」

タツミが過ぎ去ると同時に突風が巻き起こり、血液を吹き上げコスミナの頭部の上半分が吹き飛んだ。

「ニシシシシ」

「気味悪い笑い方だな……」

遠方で見つめているドロテアはコスミナが体勢を崩しても、なお余裕の表情を崩さない。

それを呆れた目で見る左京亮。

「その余裕の表情を今すぐ叩き潰してやるよ」

「なんじゃ?」

指を鳴らすレオーネが猛獣のような鋭い視線をドロテアに向け臨戦態勢を整え立っていた。

「妾と遊びたいのかえ?」

子供なりの無邪気な笑みを浮かべるドロテア。

年相応に見える笑みだが、そこに含まれる邪悪さは隠せない。

「血が獣臭そうじゃが、妾もちょうど退屈していた所じゃ。来るが良
い」

「子供でも私は容赦しないよ」

レオーネはドロテアに向けて言いつつも、ヤル気なくだらけきった体勢でキセルをふかしている左京亮を気付かれないように軽く視野に入れる。

「姉ちゃん安心していいぞ。俺に利益が無い限り手は出さないからよ。それがドロテアが殺される瞬間であつてもな」

「くっ」

まるで、その心境を思惑を見透かしたようにレオーネに言葉を投げ掛ける左京亮。

以前の戦いで、赤子の手を捻るがごとく倒されたことで、左京亮を最大級に警戒するようになっていた中での行動を、感づかれないように行つたのに容易く見抜く感知力。

レオーネはまるで心臓を鷲掴みにされ命運を握られているかのような嫌な感覚を再度刻み付けられる結果となつた。

冷や汗を流しながらも、左京亮参戦が無いことを幸いにも確認出来たため、ドロテアに集中し、地を蹴りあげドロテアに一直線に突っ込む。

帝具ライオネルにより獣化したレオーネが両手を振り下ろす。

しかし、ニヤリと不敵な笑みを浮かべたドロテアは避けることもせず、軽く両手を上げると、その両腕を受け止め組み合った。

「なに!!」

力には自信があり、更には帝具ライオネルで強化された腕力を真つ向から受け止めるドロテアに驚愕が隠せないレオーネ。

「ヌッフッフッフッフ。妾はこのようなキュートでいたいけな見た目でもワイルドハントの中で一、二を争う腕力を持っているのじゃ」

腕を組み合ったまま拮抗した二人を中心に地面に亀裂が走る。

「若いのお」

ドロテアは押し合いの拮抗した中、力を抜き半歩下がる。

「なっー」

力比べに熱くなつていたレオーネの体勢が崩れ、力が抜ける。

「これじゃから脳筋は」

ドロテアはレオーネを振り上げ地面に叩きつけた。
「そのまま地べたに這いずって仲間の最後を見るがいい」

「アカメエエエエー！」

「はっ！」

アカメとシュザンは何度も帝具村雨と刀を翻し切り結んでいた。
首斬り役人として一撃で首を落とすために磨かれた剣の乱れなき軌道は、機械化された中でも衰えることはないが、アカメはその剣捌きさえも難なく捌ききる。

(この剣の軌道は主水に似ている)

冷静に見定めるアカメ。

シュザン以上の力の剣術での戦いを稽古とはいえ体験しているアカメにとってシュザンはもはや敵ではなかった。

二人の刀が同時に振り下ろされ鏢迫り合いとなる。

火花を散らし重なる刃をシュザンは振りきった。

力ではやはりシュザンの方が上でありアカメは間合いを開けられる。

シュザンは刀を大上段に構え肩に担ぐように構えを取る。

首斬り役人特有の必殺の一撃。

苦しむことなく一撃で首を落とすことのみの特化した一刀。

シュザンは一歩踏み出すと同時に刀を振り下ろした。

(早い！でも主水の振りに比べれば)

振り下ろされる刀を紙一重で横っ飛びにかわす。

黒髪が舞い、頬に一直線に刀傷と血液が滴る。

「ぬっ！」

一刀を避けられ僅かに表情を歪めるが、刀を返し切り上げる。

アカメは体勢を整えその切り上げに合わせるように村雨を振り下ろす。

再び合わさる刃をアカメは村雨で螺旋を描き巻き込みはね上げた。

以前主水との稽古で扱われ村雨をはね上げられた巻き技。

アカメは何度も練習を積み習得していた。

シュザンの刀は宙を舞い、大きく開かれた胴を間髪入れずアカメは切り裂いた。

(やはりか)

手に伝わる痺れるような感触と甲高く響く金属音。

予想通りに金属化されたシュザンの肉体。

しかし、アカメの剣術も数段レベルが上がっているために一撃でシュザンの装甲に大きな傷をつけていた。

(あと一度で)

村雨を返すが既にシュザンは刀を手に取り後方に下がっていた。

「アカメハカナラズコロス！」

シュザンは体に入力されると、体に纏っていた装甲が音を立てて落ちていく。

自らの剣がアカメにかすることしかなかったことにより、装甲をなくし、防御を棄ててもスピード特化にチェンジした。

「コロオオオオオオスツ!!」

大上段に構えながらのなりふり構わずの特攻。

アカメもそれを受けて立つと低い姿勢から滑らかな動きで走り出す。

「葬る！」

村雨が紫電の剣閃を、シュザンの刀が銀色の軌跡を刻み交錯し、すれ違った。

「うがあああああ」

シュザンは肩口から血液を散らして方膝をつく。

次の瞬間、胸が赤く発光し、肩口から入れられた袈裟懸けに刻まれた刀傷は泡立ち再生されていく。

しかし、斬りつけたのは村雨であり、そこから走る呪毒は体全体に走りシュザンの息の根を止めた。

「機械化され怒りのままに來たのが運のつきだ」

アカメの言葉が端的にこの戦いの分岐点を示していた。

植え付けられたアカメへの怒りに我を忘れ、その剣術を生かすことなく力押しになったことにより生じた隙が、アカメとの間にさらに大

きな力の差を生み、勝負を決めることとなったのだ。

それは戦闘力にしか目を向けなかった学者的な視線を持つスタイリッシュやドロテアの失策であったと言える。

「なんとシユザンをいとも簡単に倒すとはのお」

ドロテアは一瞬驚いた表情を見せるが、すぐに平静に戻り指をならした。

辺りにパチンという音が響くと土が盛り上がり、わらわらと昆虫のような見た目の改造された男達が現れた。

「アカメ対策を施したもたちじゃ。行くがよい」

ドロテアの指示を受けた男たちは群がってアカメに襲いかかった。(コイツらが主水が前に言っていた刀遣いには厄介な敵か……肉片を纏わりつかせて斬れなくするという。だが対処法は分かっている) アカメは姿勢を正し、珍しく正眼の構えを取り男たちを迎え撃った。

「乱れなき剣線を描けば村雨が封じられることもない」

左右から同時に襲いかかってくる男たちを寸分も乱れなき剣線を描き男たちを一瞬にして葬りさった。

「主水の言っていた通りに全くつかないな。後は残りの隙を土中で伺っているやつらも残らず葬る」

アカメは鋭く殺気の籠った視線を投げ掛けた。

「やるようになってんじやんかあの嬢ちゃん」

「ぬうつ」

ドロテアが憎々しげに顔をしかめた刹那、

「回復する時間をありがとよ」

声と同時にレオーネは、地に伏した状態から地を蹴り、ドロテアに殴りかかる。

しかし、ドロテアは小柄な体を生かし、僅かな動きで回避した。

「しぶといのお。じゃが、妾の実験の献体としてはうってつけじやお」

ドロテアも指を鳴らして八重歯を覗かせた。

第115話

「さあーて、気を取り直してえ行つくぜえっ！」

レオーネは腕を回した後、放たれた弾丸のようにドロテアに突き進む。

風をきるほどの凄まじい勢いを目にしつつもドロテアは余裕の表情を崩さない。

「力負けしたばかりじゃというのに、またもや真正面から突っ込んて来るとは。はあ、それしかないのか……全く脳筋は……」

呆れたように一息ため息をつき、半目でレオーネを見て億劫そうに迎え撃つ。

「お主を掴みさえすれば妾の勝ちじゃ」

既に眼前に迫り真正面から向かってくるレオーネにドロテアは手を伸ばす。

ドロテアの握力からいけば掴みさえすればレオーネの頭部を砕くことも容易いこと。

それは既にレオーネも知っていた。

故に、

「触れられなければ怖くもない」

「くうっ」

レオーネは冷静にドロテアの伸ばされた手を横合いから肘で打ち払いのけ不敵な笑みを浮かべる。

対照的にドロテアはもくろみが外れたことと、走る苦痛に顔を歪めた。

「腕力はあつてもさすがに瞬発力……スピードでは獣には勝てないみたいだな」

肉体を強化しているため、単純な筋力のみでは帝具〈ライオネル〉を使用しているレオーネにさえ勝れたが、大幅に獣化したことにより強化された瞬発力には勝つことが出来なかった。

「おのれえ、掴みさえすれば」

ドロテアに焦りが生まれそれは、冷静ささえ奪うことになる。

ドロテアは力任せにレオーネを掴もうとするが、ドロテアとは逆に冷静さを取り戻したレオーネは、その動体視力と瞬発力で全てをかわし、または捌ききる。

幾度も近接戦闘をこなしてきたレオーネにとっては、ドロテアの素人染み、尚且つ単調となった行動をさばくのは容易いことであった。

「ぬうっ！」

全てを払いのけ生まれた隙に、レオーネはすうっと息を吸うと、腰を入れて拳を放った。

「はうっ！」

掴むことのみ執着していたドロテアの手薄になった防御により、がら空きとなった腹部に突き刺さるように拳がめり込みドロテアは吐血しながら後退させられた。

「……なぜじゃ」

ドロテアは方膝をつき、腹部を押さえながら理解出来ないと言葉を漏らす。

今までどんなことでも自分の優秀な頭脳が理解出来ないことなどなかった。

だからこそその言葉。

筋力さえ強化しておけば負けるはずがないという強い認識をドロテアは持っていたからだ。

「分からないか。強化したところで学者は学者だろ。戦いなれしていないサポート向きのヤツが前線で近接戦闘をしようなんて考えが馬鹿げているんだ」

戦闘を積み重ねることによる経験値の差、決して戦闘力だけでは勝敗は決することはないという道理をレオーネは淡々と述べた。

自分の認識を根底から否定された悔しさか、はたまた腹部に走る痛みからか未だに表情を歪めているドロテア。

「うぬう…アカメ以外は雑魚と甘く見すぎていたようじゃ…：…ならば……」

ドロテアは腹部を押さええている手と逆の手でスカートの中から一本のカプセルを取りだす。

カプセルの中には何らかの液体が込められており、レオーネは警戒の色を深めた刹那。

「錬金術師らしく戦ってやるのじゃー!」

「おいおいマジかよ」

ドロテアは叫ぶと同時にカプセルを地面に叩きつける。

すると割れたカプセルから溢れた液体が瞬時に気化し辺り一面に煙が吹き荒れる。

その様子を見ていた左京亮は徐に立ち上がると袖を口許にあてがいつつその場を離れた。

(毒か……吸わなければいい。そして仕留める!)

レオーネは吸わなければ害は無いと判断し、煙を警戒することなくその中を突き進み、ドロテアを仕留めるべく邁進する。

(これで終わりだ!)

「浅はかじゃのお。妾はスタイリツシユのような化学者ではなく錬金術師じゃぞ。ただの毒などは使わない。この煙はのお」

ニタリと不気味な笑顔を浮かべるその眼前に迫っていたレオーネの体が硬直し、肌が変色する。

「石!!」

「そうじゃ一瞬じゃが石化する煙じゃ。そしてその一瞬で勝負が決するのじゃ」

レオーネは八重歯を覗かせレオーネに抱きついた。

「その血液いただくのじゃ」

ドロテアはレオーネの首筋に帝具の八重歯を沈める。

牙の帝具へ血液徴収アブゾデック

相手に帝具の牙を刺すことによりその血液を徴収するように吸い出す帝具。

帝具アブゾデックを突き刺されたレオーネははつらつとした肉体が、まるで干物のように干からび、瞳に灯る獣のような生氣も失われしていく。

「ほいっや」

もう用なしだとも言うように、ドロテアは首から帝具を抜くと、

フラフラと揺らめくレオーネを蹴りつけ、宙返りし地面に降り立つ。

そして、その背後でレオーネは倒れ伏した。

「なかなか野性味溢れる味わいじゃが嫌いではないぞ。ほほう、力が溢れてくるのお」

口許についたレオーネの血を拭い指を鳴らす。

血液だけでなく、その力さえも同時に奪い使用者のドロテアに与えていた。

「さてと、コスミナはすでにタツミを葬ったであろう。合流してアカメをたたくかのお」

コスミナが振り返ると鼻先を掠めるほど間近に、鎌と化した両腕を失い、頭部が粉碎されたコスミナが降ってきた。

「なっ!？」

驚愕に動きが止まるドロテア。

コスミナの胸部が濁り赤黒い色に輝くと両腕の切断面と砕かれた頭部の残存部分が泡立ち復活する。

コスミナは体勢を立て直すと既に目前に迫るタツミに口を張り裂けんばかりに開き、超音波を放つ。

岩をも軽々と粉碎する空気の震動をも、今や超級危険種の鎧を纏うタツミには効果を成さない。

超音波を真っ向から打ち破り間合いに入ったタツミはノインテーターを振り切り頭部から唐竹割に両断する。

「まだじゃ」

「そうね。でもこれで終わりよ」

静かに凜としてはつきりした声と共に放たれた弾丸がコスミナの胸部の内部で禍々しく赤黒く光る賢者の石を撃ち抜いた。

「グギャアアアアアアア」

それまでどのような手傷を受けても次の瞬間には無かったように再生し襲い掛かっていたコスミナが、断末魔を上げ風化した像のようになり、直後崩れ去った。

「妾の……妾のコスミナが。もう少し餌を食らうておればタツミより強くなっていたはずなのに」

「よそ見してんじゃねえっ！」

隠すことなく悔しさと怒りに表情を歪ませているドロテアの背に先程倒されたはずのレオーネがドロップキックを放つ。

ドロテアはくの字に曲がり吹き飛ぶが宙で体勢を立て直し地に足をつきずり下がりがりつつも踏みとどまり両膝をつく。

「ぬうつ、くうつ」

「なんて頑丈さだ。殺す気で攻撃したのに……私の血で強化されたのか」

両膝は着けど倒れることなく踏みとどまっているドロテアに、耐久力では飛び抜けているレオーネさえも呆れるほどである。

「こっちのセリフじゃあっつ！なぜ貴様は生きておる」

うつむき、怒りからか地面をかきむしるように引つ掻きつつ怒声を飛ばすドロテア。

「私の死んだフリは上手いだろ。仲間の達人に教わったんだからよ」

レオーネの脳裏に今は亡きラバツクの敵前で死んだフリをしている勇姿が浮かぶ。

「致死量の血液は奪ったはずじゃ」

「私自信に帝具の力が加わることによりしぶとさも限界を突破するんだよ。足りなくなつた血液は近くにいたネズミやモグラを食って補った。今の私は獅子だからな」

「どこまでも原始的な……」

ドロテアが言いかけた所でドロテア自身に変化が起こる。

それは予期することもまた、ドロテア自身が一番嫌っていることでもある。

「おい、顔にシワが見えてるぞ」

幼かった容姿がまるで、年老いた老人のようなものになつていたので。

「ついに厚化粧が崩れたか……」

少し離れた所でニヤニヤと薄ら笑いを浮かべる左京亮。

そしてレオーネも突っ込まずには居られない。

「ダメージを受けて本性が出るか。お前本当はかなりの年だろ」

「黙れ!!この獣風情が!!」

一番自身が気にしていることが露見し、攻められたことに怒りが頂点に達する。

「目にももの見せてやるのじゃ」

ドロテアは魔方陣のようなものに自らの血をたらし、触媒を捧げる。

それはドロテアの奥の手であり、地面を悔しさから引つ掻いているように見せつつ、描いていたものであった。

「来るのじゃ」

ドロテアの声に反応するように魔方陣から禍々しい闇のオーラが立ち上がり、収縮し、異形の怪物が姿を表した。

肉の塊から幾重にも浮き出す顔、至る所に亀裂が入り開かれ覗かせる瞳、肉が裂け露になる巨大な口角、肉塊から伸びる幾つもの四肢、生理的な嫌悪や、恐怖を与えてくる見た目はこの世に存在するものではなかった。

ドロテアが指示するようにレオーネに指を向けると、その指示に従うようにレオーネに襲い掛かる。

巨大な腕がレオーネを薙ぐが、レオーネも前転しかわしきる。

しかし、それで終わることはない。

伸びた腕から黒い触手が伸びレオーネに背後から迫る。

「何なだよ」

振り返り様に連打を繰り返し迎撃するが、全く揺らがない。

(手応えが無い!)

殴った感触も、振り払うことも出来ない。

「ぐああああっ」

なすがままにレオーネに巻き付く触手。

触手が絡み付いた部分がまるで腐食するかのように音を立てて溶け出す。

「そのまま闇に呑まれるがよい」

ドロテアの笑い声を交じりの声がレオーネに届き、レオーネの野生の勘が囁く――

「食われる前に術者を消せ」

触手が絡み付き体は腐食していくが、力のかぎり実体化している触手をちぎり、蹴りつけ真下に立つドロテアの真上に降り立ち、頭部を掴み、首をへし折った。

「はあはあ間に合ったか」

ドロテアが崩れるのに呼応して顕現していた異形の怪物は溶けて姿を消した。

（しめしめ、死んだと思っておろう。しかし、妾もしぶとさだけなら自身があるのじゃ。ここは死んだフリをしてやり過ぎすのじゃ。これくらいなら治癒もできるしのお。次回に復讐すれば良いしな）

「……………」

ドロテアは死んだフリをしてやり過ぎそうと考えていた。

しかし、その姿を無言で見詰める達人に死んだフリを学んだレオーネ。

そして、そのまま無言でレオーネは動き出した。

「よいしょつと」

パラパラと砂がドロテアをうつ。

（一体なんなんじゃ）

違和感を覚えるが死んだフリを通すために身動き一つせず倒れたままにいる。

「念のためにしつかり潰しておこつと。墓石にもなるし」

「!!」

ドロテアは理解した。

死んだフリの達人に教わったレオーネは死んだフリを看破しており、止めをさしに来たと。

そしてこのまま黙っていれば確実に死ぬということを。

「左京亮妾を助けるのじゃ」

形振りかまっていられないドロテアは顔を上げて叫んだ。

その場にいる唯一の仲間に。

この危機から救って欲しいと。

しかし、

「助けてやりたいのは山々だが、姉ちゃんにも言ったが俺は自分に利がなければ参戦しない上に、死ぬのも静観するって言ったからな」
やんわりと断られた。

笑い混じりの声で。

「だってよ行くぞー」

レオーネは体を少し反り岩を投げ下ろす準備にはいる。

「うぬぬぬ。そうか」

ドロテアは土壇場で左京亮の意図を読み取り即座に叫んだ。

「大臣に渡すことになってるあれを一つお主に回す」

「ふはははは、理解したか」

袴の袖を羽ばたかせドロテアの元に舞い降りる。

刹那、巨大な薙刀が銀色の花卉を舞わせるが如く数度舞を舞う。

レオーネの手から離れ宙に投げ出された岩はドロテアに降り注ぐ時には小さな小石となっていた。

「すまないな姉ちゃん」

レオーネの背後から投げ掛けられる澄んだ声。

そして、レオーネの首もとに手刀が落とされレオーネの視界は暗転した。

「なぜ殺さんのじゃ」

「まあ考えがあつてな」

ドロテアの愚痴を軽く流し、左手でドロテアを抱え上げた。

「じゃあ行くか」

「逃がさネえ」

「ああつー」

左京亮の前には道を塞ぐようにタツミが、背後にはパンプキンを構えたマインと村雨を構えたアカメが立ち塞がった。

第116話

「どうやら勘違いしてるらしいな……」

静かに澄んだ声色が辺りに響く。

一般的な場でその声を聞けば聞き惚れるほどの美しい声色である。しかし、その声色には、感覚的なことではあるが、端々に底知れぬ恐ろしさを含んでいた。

また、その声色に含まれているものと同様に左京亮の纏う雰囲気は、僅か前とは一変し、まるで空間が軋み、やけつくほどの殺気を放つものとなっていた。

辺りに林立する木々はまるで左京亮の殺気におののかかのように枝葉をゆらし、叫び声を上げるようにざわめいた。

それは、アカメたちも程度に差はあれど例外なく同じ状況である。シュザンを、コスミナを、改造を施された男たちを葬り、さらにはドロテアを死地に追い込み、残るはお荷物のドロテアを小脇に抱えた左京亮のみという完全に優勢な状況。

しかし、その優勢さも辺りが軋みやけつくほどの殺気を放つ左京亮の前では感じられなくなっていた。

攻勢に撃って出ようと回りを囲んでいたアカメたちにも緊張が走り、帝具を持つ手にも汗を握る状態となっている。

(なんて圧力だ……)

ジリジリと地を踏み締めつつ間合いを詰めていたアカメの足も、まるで楔を打ち込まれたかのように動きを止めていた。

「少しばかり立場ってものを教えてやるよ」

右手に持つ巨大な薙刀がゆらめき束が地を穿つ。

突き刺さった部分を起点に辺りに亀裂が入り、粉塵が舞い上がり、それが戦闘開始の合図となる。

「私が……!!」

左京亮に向けパンピングを放とうと試みたマインの動きが止まる。

「ひっ!」

体が震え、硬直したかのように体が言うことを聞かなくなる。

マインの先には射抜くような鋭く冷たい視線を放つ左京亮の姿が。マインの脳裏に以前左京亮に詰め寄られ長刀の一刀のもとに切り伏せられかけたあの恐怖が甦ったのだ。

一度刻みつけられた恐怖は拭いさることはできない。

それを左京亮は上手く利用したのだ。

「マイン!!」

アカメの声が届くまもなく、左京亮は薙刀を振りかぶり音もなく一踏みで薙刀がマインに届く間合いに入る。

「マインには絶対二触れさせねえ!」

マインに攻撃はさせないと、タツミが背後から左京亮に迫り、少し遅れてアカメも前方から斬りかかる。

二人から挟まれ攻撃をされる側に立たされる左京亮だが、余裕の笑みを浮かべている。

「上から物を言ってくれるじゃないか」

左京亮は袖をはためかせ振り返り様に巨大な薙刀で後方を薙ぎ払う。

轟音と突風を轟かせタツミを薙ぐ。

金属と金属がぶつかり合う轟音が響きタツミが後方にずり下がる。

長刀が振るわれたことすら認識出来ないほどの次元を超えた速さのため、ノインテーターで防ぐ間もなく斬りつけられたが、その体に大きな傷はない。

あるのは薙刀とのぶつかり合いにより生じた僅かな傷のみである。

「固くなったもんだ」

ボソツと呟いた左京亮は見惚れるほどの足さばきで前方に進みつつ体を反転させる。

反転した左京亮の眼前をアカメの村雨が紫電の軌跡を刻み通り過ぎる。

「まだだ」

アカメは村雨を返し切り上げる。

「おっと」

「ぐっ」

体を後ろに反らしかわすと前傾姿勢になるアカメを蹴り上げる。

左京亮の足が弧を描き、そのまま蹴り上げムーンサルトを決める。アカメは咄嗟に村雨を下げその柄で蹴りを受け止めるが上空に吹き飛んだ。

「世界が回る」

脇に抱えられたドロテアが目を回すが気にする素振りもない左京亮。

全く思い遣りは見られず戦いに興じている。

「よっ」

ムーンサルトを決め着地した地点はタツミの前であった。

「このヤロウ」

タツミは挑発されたこととマインに斬りかかろうとしたこといきり立ち、左京亮に襲い掛かる。

ノインテーターは間を取って戦えるがその速度では左京亮には当たらない。

当然のごとく左京亮に攻撃を当てるためには速度が要求される。

故にタツミはノインテーターをしまい速度で勝る拳で戦うことにした。

荒々しく振るわれる左右の連打を左京亮は流れるような足さばきと体さばきでかわしきり左京亮にはノーダメージ。

同様に、タツミもその都度、合間合間に薙刀で斬撃を放たれるが、その生前の超級危険種の外甲と化しているインクルシオは傷つけられることもなくノーダメージであった。

「やはり固いな。ならば……」

大きめにバックステップを踏み間を取った左京亮は薙刀を地面に突き立て手放す。

既に眼前に迫っていたタツミは大きく振りかぶり、溜めていた力を開放し爆音を轟かせつつ拳を放った。

打撃を当てた左京亮が揺らぎ靄のように消える。

「残念だったな」

タツミの動きが止まる。

なぜ自分の横から左京亮の声が聞こえるのか理解出来なかったからだ。

タツミの側面に現れた左京亮は足場をかため、タツミの脇腹に宛がうように軽く手を当てた。

「落ちな！」

左京亮を中心に空気が振動し、何かがタツミの体を吹き抜け、タツミの背後の木々を揺らし、葉を散らした。

「グハッ」

タツミは理解出来なかった。

なぜ自分は崩れていくのか。

左京亮に攻撃を加えたはずなのになぜ手応えもなく、且つ左京亮は倒れないのか。

疑問を頭に浮かべつつタツミをそのままその場に倒れ付した。

「俺は逃げるんじゃない。俺がお前らを見逃してやるんだよ」

左京亮は倒れ付したタツミの足を持つと動きを止めたマインと、地に足をつけ息をついているアカメに投げつつ言葉を放った。

「生かしてやったんだ。精々俺の思惑通りに動いてくれよ。ああそれと、オツサンによろしく言っといてくれよ。じゃあな」

左京亮は巨大な薙刀を引き抜き担ぐと、踵を返し笑い声を轟かせその場を後にした。

「なあ左京亮」

「なんだ」

「あのタツミを倒した技は……」

おずおずと聞くドロテアの言葉の先を読み、口許に笑みを称えると軽く頷き言葉を継いだ。

「ああ、シユラが使ってた発勁とか言う技だ。ヤツが練習しているのを目にしてな軽く見よう見まねでしてみたら出来たんだ。内部に直接ダメージを加えられるっていうんでな使ってみた」

「見よう見まねか。シユラは自慢げに『俺は天才だから一年で会得したぜ』って言っておったぞ」

「ヤツは凡人だったからなあ。まあこれを俺に教えたって功績だけは誇っていいと思うがな」

ドロテアは茶化して話す左京亮を半目でジトツとした目で呆れたように見ていると、一転真面目な表情で左京亮は繋げた。

「しかし、あれだけ固くなつたあの小僧に物理的に殴つてダメージを与えたって言う雷オヤジは化け物だな」

前の決戦でブドーが近接戦闘に於いてタツミを拳で追い詰めていたという話を宮殿の所々で耳にしていたからこそ溢した感想であった。

「確かにのお。お主が薙刀で倒すことを諦めたほどの装甲になつておつたほどじゃからなあ。お主の障害になりえんか？」

「ハハハ、まあな。だが、やつのお忠信を利用した俺の策に嵌まれば五体満足では居られないだろうからその時に寝首をかくさ」

不適な笑みを浮かべると左京亮は足を早めた。

「ああ、それとな」

「なんじゃ？」

何か言いにくそうにドロテアに声をかける左京亮と、無垢な？表情で問い返すドロテア。

「厚化粧の若作りが一度解けたからか線香臭いぞ」

「なつ、なんじゃとおおつ。妾が線香臭いじゃとおつ。なんたる侮辱じゃ。妾は高価な香水も使つておるし、妾自身も良い香りに決まつておろうが」

本来はかなりの高齢であるが、年を取ることを恐れ錬金術と帝具の力により若さを維持していたドロテアは、その筋の話に過剰に反応する帰来があつた。

それが原因となつてコスミナを作つたのだつた。

コスミナを最強にすることにより誰にも反抗させずに錬金術と帝具により生気を徴収し永遠に若さを持続させることを夢としていたのだ。

全てを知つた上である意味面白がつて左京亮は話を振つたのだ。

「そうは言つてもな……………」

「うぬぬぬぬ。あの話は無かったことにするぞっ」

「このロリババア」

「ロ、ロ、ロリババアじゃと……お主は言っではならんことを口にしたのじゃぞ」

「知らねえな。本当のことだよ」

ドロテアが一方的に憤り左京亮は軽く流しつつ、帝都に向かって走っていた。

第117話

「じゃあな。俺は少し皇帝に媚び売ってくるわ」

左京亮はドロテアを宮殿の玄関に下ろすと不適な笑みを浮かべて宮殿の奥に消えていった。

宮殿内は、戦時中及び旗色が悪いという状況が重なっているために、張り詰めた緊迫感に覆われており、そこら中を官僚が忙しそうに走り回っている。

そんな緊迫感もどこ吹く風と言った風にドロテアは歩き出す。

ただその歩みはフラフラと危うげである。

全てはレオーネとの戦いでを負傷と左京亮に宮殿まで抱えられかたりのスピードで走られ三半規管が揺さぶられ続けていたためである。

(おのれあの獣め……ただ今は損傷を癒すために使った血液を補給せねば)

血液補給のため、また癒すために工房を目指す。

壁に手をつきやつの思いで工房の前にたどり着き、工房の扉に手をかけたその時だった。

(ここまでつけば……ん?)

僅かに開かれた扉に違和感が走る。

出ていった時にはしつかりと施錠したはず。

(ここに来るのは大臣が左京亮といった所か。しかし大臣はこの危急時には……そして左京亮はない……ならばヤツか)

僅かに表情を固くしたドロテアであるが、即考えを読めない勝ち気な笑みを浮かべると扉に手をかけ口を開いた。中にいる人物に。

「どういうことじゃスタイリッシュ。主のいない部屋に勝手に入るとは。火事場ドロボウと言えばよいのかのお」

「あーら。帰ってきちゃった」

中にいる人物ースタイリッシュは全く悪びれる素振りもなく、飄々とした感じでこの工房の主を迎えた。

狸と狐の化かし合い。

両者共に知恵者であり、屈指の策謀家であり、にらみ合いなどはなく、読みあいといった風に向かい合う。

先手を開いたのはスタイリッシュであった。

「ナイトレイドと一戦を交えるって言っていたから、もう帰ってこないかと思っていたのに。あくらそう言えば亮ちやんがいたから大丈夫だったよね。ボロボロだけど」

小顔に見えるポーズを決め、したり顔で見下ろすスタイリッシュ。あからさまに嘲笑う感じではあり、ドロテアも腹に据えかねない気持ちで沸き上がる。

「どういうことかのお」

「分かっているんじゃないのドロテア。貴方がいなくなった工房……有効利用出来るのは私だけなのよ。主無き工房を貰い受けにきてあげたのよ」

背筋に冷や汗が流れるほどの猛獣のような笑み。

しかし、その笑みもドロテアにとっては畏怖すべきものではなく、怒りを煽るものでしかない。

「お主の腹のうちは理解したのじゃ。妾の全てを奪おうとしたとな。では妾も同じようにさせて貰うのじゃ」

ドロテアは床に手をつくすと、今出せる全ての力を振り絞りスタイリッシュに飛びかかった。

「まあまあそんな体で。皆殺っちゃってえ」

「ウゴアアアアッ！」

のけ反りつつドロテア目掛けて指をさす大袈裟な身振りでスタイリッシュは声を上げる。

それに呼応し物陰から機械化された男たちが溢れかえる。

「私が何も用意しないでこんなところに来ると思って。もう年なんだからゆっくり眠らせてあげ・る・わ♥」

「妾をなめるでない」

ドロテアの体を黒いオーラが包み込む。

黒いオーラをたなびかせ男の群れに突っ込む。

ドロテアの拳は触れるものを腐食させる。機械化されていたとし

でも構わず。

「邪魔じゃあー！」

ドロテアの手から黒く収束されたオーラが鞭のように辺りを薙ぎ払う。

薙ぎ払われた先から男たちは腐り塵芥と化した。

「まさか!!」

「終わりじゃ」

ドロテアはスタイリッシュに飛び付く。

力を強化されたドロテアを非戦闘系のスタイリッシュが払えるはずもない。

「味は不味そうじゃが。優秀なDNAは含まれておるじゃろうな。妾が有効利用してやろう。感謝するがよい」

ドロテアは勝ち誇った表情で帝具へ血液徴収へアブゾデックをスタイリッシュの首筋にあてがい突き立てた。

「ヌッフッフッフ。御馳走様なのじゃ」

ドロテアはスタイリッシュから離れると満足そうにスタイリッシュの血で汚れた口許を拭った。

知恵者同士の戦いが遂には近接戦闘になりドロテアが勝ちを拾った。

と思われた。しかしその刹那。

「なんじゃと!?!」

ドロテアの顔が青ざめ、震えがくる。

ドロテアは苦しげに胸元を押さえるとその場に蹲った。

「おのれえええええ！謀ったなスタイリツシユウウウ！」

「こんなこともあるだろうと踏んで、ここに来る前に毒を注射しておいたのよ。まあ私には免疫があるけれど人間であればかならず死に至る劇毒をね」

今度はスタイリツシユが勝ち誇った表情で倒れ伏したまま理由を述べる。ドロテアの負けた理由を。

「グフツ」

ドロテアは盛大に吐血をし絶命した。

今まで血液を吸ってきたドロテアが血液を吹き出し死に至る。皮肉的な死に様であった。

「一発逆転………と言いたかったけどまさかここまで血を吸われるなんて予想外ね」

全てを読みきっていたスタイリツシユだったが、読みきれなかったのが、ドロテアが今回のレオーネとの戦いで多量の血液を使用し、普段以上に血液を徴収したという一点のみ。

しかし、そのただの一点が命取りとなった。

「辺りが暗くなってきたわあ。なんか気持ちいいわね」

視界を失いつつもスタイリツシユは天井に向けてからからに干からびた腕を上げる。

そのさまは神に感謝するようにも見える。

勿論科学者らしくスタイリツシユは無神論者ではあるが。

「あの子は大丈夫かしら………この私が最後に思うのがこんなこととお笑い………ね………」

柄にもないと苦笑いを浮かべた後に、力なく腕が崩れ落ちスタイリツシユも絶命した。

イエーガーズ 残り五人

ワイルドハント 残り一人

「あーらら。二人ともおっ死んじまったか」

工房に現れた左京亮は二人の死骸を見て呆れたように呟いた。

しかし、そこには悲しみなどの悲哀の感情は全く表れていない。

むしろ、何か楽しいものを見ているかのように二人の死骸を一瞥すると近場のドロテアを蹴り、歩む先のスタイリツシユの死骸を薙刀の峰で吹き飛ばし、工房の中心に備え付けられたカプセルに近づくと、薙刀の一振りでカプセルを破壊した。

中からは液体が溢れ、内容物がこぼれ落ちた。

「約束通り頂いておどうぞ」

口許に冷笑を浮かべソレを掴むと用済みとでも言うようにその場を後にした。

◆◆◆◆◆

「仕事受けてくれてありがとよ。それと生きて帰ってこれたんだな八丁堀」

素直に礼を述べた後に政は主水に皮肉めいたことを笑顔で述べた。

ただ、そこには嫌味などないために、主水も嫌な顔せずを受け入れた。

「大変だったみたいだな。あの帝国のエスデスとやりあったようじゃないか」

「まあな。初めての仕損じだ……噂通りとんでもないやつだった」

主水は頭を掻きつつ苦渋に満ちた表情を浮かべる。

未だにエスデスを仕損じたことを後悔しているようにも見えた。

「八丁堀が仕損じるとはな。帝国が誇るDSだてじゃないな。だから疲れた顔してるのか」

「いや、なんだ……昨夜へ禁則事項で少し頑張り過ぎてな。アイツはカカアより体力あつて少々盛り上がり過ぎちまった。だが、若いつていいな」

「……………」

重い話と指っていた所に、想像とは違い斜め上をいく理由に、政は呆気にとられた後に軽くため息をはいた。

「八丁堀はかわらないな。それで本題はそれか」

政は主水の腰を指差した。

そこには、いつも指していた二本挿しがなく布にくるんだ太刀のみがあるという寂しい状態である。

「ああ、エスデスとやり合った時に脇差しを失ってな。おめえに新しく作ってもらいてえ」

「そうか……………」

政は難しそうな表情に一転する。

主水としては政ならば一つ返事で了承してくれると考えていたため、政の表情に唾然とする。

「前までなら受けたが今は難しい。戦時中ということでも元となる金属がおりて来ないんだ。少し前ならそれでも闇市で割高で手に入れることが出来たが。今ではそれさえも手に入らない。規制が厳しくなってるな」

「そうか……………待てよ、戦場狩りでは手に入らないのか」

戦場狩りとは、戦場で死んだ者の鎧や刀を集め売り捌くことである。

戦時中ということから主水は導き出した考えを出す。

古来日本でも戦国時代ではよくあったことであることは知られていたからだ。

「そちらも規制の対称だ。それに最近は帝国側には死傷者はなく、革命軍側の死者は跡形もなく消されているらしいからな」

「そうか……………」

政の言葉に一抹の不安を感じはするが今はそれは二の次のため、また二人で思案に暮れる。

五里霧中、答えはおそらく見つからないだろうが。

「悪かったな政。無理言っちゃまってよ」

「八丁堀！」

重い腰を主水が上げた直後、政は主水を呼び止めた。

決意が籠った強い眼差しに主水は一瞬釘付けとなる。

「俺が一斉一代のものをコレで作ってやる」

「それはおめえ……………頼んだ」

ソレを見た主水は僅かに躊躇するが、政の思いを受け取り一言で答えを返した。

〈ボツになった鬱ルート〉

「少し前ならそれでも闇市で割高で手に入れることが出来たが。今ではそれさえも手に入らない。規制が厳しくなってるな。なんでもイエーガーズの規律の鬼と呼ばれてる女が全ての闇商人を片っ端からあの世に送ってるかと来てる。それで殆どの闇商人はあの世に引越したからな」

「まさか……………セリユーか!？」

「よく知ってるな八丁堀。たしかそんな名前だ」

「!!」

主水の想像を、遥かに超える最悪の事態を耳にしたことにより主水は頭の中が真っ白になり、逆に視界は闇に包まれたように黒く染まっていた。

セリユーの闇に沈んだ瞳を見ているかのように。

バッドエンドまっしぐらのためにボツになりました。

第118話

「うぐぐぐぐ……ぐああああっつー！」

「タツミ、タツミ」

薄暗く、湿り、濁った空気が充満する洞窟内に、蹲り身を焼くような激しい痛みには耐えかね、断末魔を漏らすタツミと、悲痛な表情でタツミにすがり付くマインの姿があった。

痛みへのたうつタツミは、所々インクルシオの強硬な鱗のような外装に覆われ、瞳にもありありとその模様が現れていた。

『精々あと四回が限界だ。それを超えるとインクルシオに身を食われるだろう』

帝具専門の医者の見立てがありながらも、ドロテアと左京亮との戦いでインクルシオを使用したために余りにも大きな代償にタツミは苦しめられていた。

誰にも心配はかけたくないという仲間思いのタツミのため、人知れず洞窟内で苦しんでいたところに、そのタツミを心配したマインが現れ、少しでもタツミの痛みを押さえてあげられたらという思いにかられ、寄り添っているのだ。

しかし、今やマインも何もできない無力感と、前回の戦いにおいて、自分が不甲斐ないばかりにタツミにインクルシオを使わせる結果になり、これだけの苦しみを与えてしまったという後悔に苛まれていた。

「タツミ……ごめん……ごめんね」

「マ……イン……」

「……………」

洞穴の外から二人の姿を静かに垣間見る一つの影が。

同情するでも憐れむでもなくただただ見つめる姿は真意が読み取れない。

「主水……ボスが呼んでる」

「ああ……」

切な気な表情のアカメに呼ばれた主水は洞穴の二人を一瞥した後、

その場を後にした。

「主水……」

「なんだ」

アジトへの帰り道アカメは足を止め主水の方へ振り返り、意を決したように口を開いた。

その瞳には迷いはなかった。

「最終決戦では私も村雨の奥の手を使わなくてはならなくなると思う。そしてどうやら村雨の奥の手を使うと人間を辞めることになる。もし私が人間でなくなり化け物になり、皆に手をー」

「容赦なく叩き斬ってやるよ」

言葉を最後まで聞くことなく主水は言い切った。

アカメを正面から見据えて。

主水は仕事人として、仲間の正体が明るみに出た場合、家族にその正体がバレた場合も、共に情を捨て斬ることを決意していた。

恐らくその延長線上にあったものと思われる。

ただし、今の主水にはそれ以外の思いも芽生えていたことは本人自身も気づいてはいないことであった。

「ありがとう主水」

アカメは不安が晴れたように笑った。

アカメも恐らく変わり行くタツミの姿を見て、自分の行く末を写し見たのかもしれない。

そして、

「タツミにはマインがいる、しかし私には」

と考えた為に、その思いを、願いを主水に告げたのだろう。

「それともう一つしてほしいことが……」

「もうなんでも聞いてやるよ」

「ありがとう。じゃあー」

少し自重気味に話す内容に、少し表情を歪めた主水だが、やはりこれにも首を降ることなく、軽く頷き肯定の意を表した。

それに満足したのか、アカメは主水に背を向けるとまた黙って歩き始めた。

その後ろでは、主水が無表情で腰に挿したアレスターの柄を軽く握り締めている姿があった。



「二人とも来てくれたか」

椅子に座り手紙のような書簡に目を通していたナジエンダは、室内に入ってきた二人を見て軽く微笑み迎え入れた。

「話とは」

「ああ、今革命軍本隊からこの書簡が届いてな」

ナジエンダは手に持っていた書簡を軽く二人に見えるように上げると続けた。

「本体は既に動き出しているようだ。ただ、ブドーの猛攻により足止めを食っているという状況らしい」

「ブドー……」

アカメはその名をポツリと呟く。

タツミ、レオーネ、マイン、ナジエンダを相手にしながらも、対等以上の戦いを繰り広げた漢。

恐らく以前の壮絶な戦いを思い返していたのだろう、表情が曇っていた。

「俺たちにブドーを何とかしろと言うのか」

「！」

アカメの体がピクリと反応した。

そうではないかと予想はしてはいたが、無意識にせよ体は反応してしまった。

「いいや違う」

二人の固い表情にクスリと笑みを漏らすと、首を振りその間を否定した。

ナジエンダも「ブドーに苦しめられている」という話を聞けば、二人はそのような反応をするだろうなど想定し、その想定通りになったために、笑顔になったのだろう。

表情は変わらないが僅かに力が抜けたようになる二人を相手にナジエンダは話を再開する。

「本隊にはあの男がいる。革命軍のボスの右腕とまで称されたな。……まあ、タカナもいるが……ヤツは関係ないか。すまん話が脱線した。つまりは革命軍本隊が帝都につくまでに要人を暗殺してほしいという話だ。どいつもこいつも悪行の限りをつくしてきた者共だ」

ナジエンダは、暗殺対象の名前が連ねられた紙と中身で膨れ上がった袋をドスツという音をたてて机の上に置いた。

主水への依頼には必ずその理由と金が必要になるために、態々暗殺対象が悪行を働いていたということを加え、金を払ったのだ。

「分かった。タツミの変わりということだな」
「そうだ」

主水は袋の中身を出し「ひいふうみいよ」と数えていき二分し、自分の取り分を袖に収めると残りを袋に入れアカメに手渡した。

「左京亮を殺しきれなかった責任も俺にはあるからな」

ボソツと主水は呟くと踵を返してナジエンダの部屋を後にした。



とある高級料亭の一室。

戦時中であるはずであるのに、この部屋には大量の料理が並べられ、全く戦争中とは感じられない様相である。

金さえ払えば戦争中であっても贅沢なことが出来ると言ったところか。

「うちの口入れ屋から大量の傭兵を雇い入れてくださりありがとうございます。それも大幅に代金を水増しして下さり、かなりの儲けになっております。これは細やかながら將軍への贈り物でございます」

口入れ屋（仕事の斡旋業）の主人が深々と頭をたれ、武官然とした男に大層な桐箱を渡した。

「くくく。笑いが止まらない。お前がどこから集めてきた男たちを俺が帝国の予算で高値で兵士として雇い、戦地に送り出し、戦闘経験がないために全て戦死。再びお前が集めた男を雇い……これを繰り返すだけで大儲け。敗戦の責任は現地の指揮官へ。はあ辞められんなあ。しかし、16と偽り送ってきた子供が10才だったのは驚き

だったぞ」

「あれは戦争孤児です。私が面倒を見るとすることで私の世間での評判を高めたうえ、その後戦争へ送り出し金になるのですからまさに一石二鳥です」

二人の男は歪んだ笑みを浮かべると高らかに笑いあった。

最後の行動になるとも知らずに。

「今宵はここまでにするか。また明日死地にお前から雇った者達を送らねばならんからな」

「今夜死地に飛び込むのはてめえのほうだ」

「なっ!!」

低く渋い声が武官風の男の耳の鼓膜を揺さぶると同時に黒い刃が男の胸から突き出て血飛沫を上げる。

その光景を見上げる口入れ屋の男は口をパクパクさせ武官風の男の血を大量に浴び呆然としている。

主水は突き立てた脇差しを抜いた刹那手首を翻す。

すると口入れ屋の男の首が落ちまるで噴水のように血を巻き上げた。

(さすが政の仕上げたもんだ)

まとわりつくことなく血液が滑り落ちていく黒い刀身を見て主水は思う。

その脇差しこそ主水が政に依頼し仕上げてもらったものだった。

材料はもともと政が裏の仕事に使用していた手槍であった。

もう政はこの世界では仕事人をするのではなく、使うことがなくなったために主水の脇差しの材料にし、新に仕事の得物に叩き直した一品であった。

主水はマフラーで隠された口角を軽く上げると人知れず部屋を後にした。

◆◆◆◆◆

その後も主水は静まり寂れた以前とはうって換わった帝都の中を歩いていた。

辺りは閑散とし、以前のような夜でも賑わっていた活気などはまっ

たたくなく、御通夜のような静けさとなつまっている。

そして今主水が歩いているのは、以前主水が何度もイエーガーズの身分で巡回という名のサボりを働いていた巡回の道順であった。

月が雲間に隠れ辺りが暗闇に黒く染められた時だった。

「ま、まさか！主水さんなのか!!」

暗闇から一人の青年が驚きの声をあげた。

「……」

主水はその姿を鋭い視線で視認するとゆつくりと背中を向けて街中を郊外に向けて疾走した。

「待ってくれ主水さん。くそっ!」

青年は体に暗闇よりも黒く艶やかな光沢を放つ帝具へグランシヤリオを身に纏い、以前の同僚主水を追って爆走した。

「くっ、なんで生身でここまで速いんだよ!」

まるでウェイブがしつかりとついて来ているのを確認するかのようにならぬように姿を消しては一定間隔を開けて姿を現す主水に、ある種の恐怖をウェイブは感じ始めていた。

自分は罠にかけられているのか。分かってはいる。

しかし、確かめずにはいられない。

本当に主水は革命軍なのか？

本当に主水がエスデスにあれほどの手傷を与えたのか？

今まで共に歩んできたのは全て偽りだったのか？

あの共に笑い、酒を酌み交わし、語り合ったのは全て偽りだったのか？

限りなく沸きだす疑問。

罠と分かっているにも直接主水の口からその真実を聞く。

自分が信じているもののためにも、またどんな悲しいことがあっても、誰も心配させないように笑顔を絶やさなかった同僚が、今や悲しみを隠せず窺われてしまったそのセリユーのためにも。

「いたっ!」

次にウェイブが主水を見つけたのは帝都から少し離れた森の中であつた。

そこにはまるでウェイブを待つように主水はその場に静かに立っていた。

「主水さん！」

「……アカメ連れてきてやったぞ」

主水はウェイブに背を向けたまま虚空に向かって声をかけた。

「ありがとう主水」

闇の中からアカメが姿を現す。

その事実はウェイブの思いを瓦解させるには十分なことであった。つまり、主水は革命軍の仲間であるということ。

「ウェイブおめえにはアカメの話聞き、その質問に答えてもらう」

主水の変わりきった姿とその態度にウェイブは怒りという感情しか持つことができなかった。

「主水さん。いや主水！俺の質問に答えさせてやる！力づくでも!!」

ウェイブは体を屈め飛び出そうとした直後。

「おめえに拒否権はねえ」

力が抜けたようにその場に座り込むウェイブ。

「何が起こったんだ!？」

自分の体に起こったことが分からない。

主水の声が間近で聞こえたことから主水が何かをしたことは疑いようがない。

しかし、何をしたのか。いやそれどころか主水が動いたことも、目を離していないのに分からなかったのだ。

怒りはさめ、後ろに立っている主水に対しての恐怖のみがウェイブを支配していた。

「ウェイブの体の自由は奪った。俺は場を外した方がいいだろうな」

「いや、主水も知っていることだから聞いてほしい」

「分かった……」

アカメはウェイブと主水に静かに語りだした。

第119話

「俺は中村主水と話に来たんだ！革命軍のアカメと話すことなんかない!!」

力無く座り込みながらも怒りに震えるウェイブの怒声が、人気のない森に響き渡り、その怒声に気圧されるように木々がざわめいた。

静寂に包まれた森の中だからこそそのウェイブの心の叫びにあたる怒声は広く辺りに響き渡り、その場の雰囲気をも変えるものでもあった。

そのあまりの気迫に圧されるかのように、アカメのウェイブへの語りかけが遮られた直後。

「ぐはっ!？」

ドスツという鈍い音と共にウェイブが苦悶の表情で胃液と血を吐きだした。

「お前えに発言権はねえと言ったはずだがな……」

無表情の主水の携える鞆がウェイブの鳩尾にめり込んでいた。

その衝撃にウェイブは意識が飛びかけ、身体を折り曲げ、額を地につけるように蹲った。

ウェイブが蹲る直前に視界の端に止まった主水の顔は、ウェイブの記憶に僅かに残るあの主水と同一人物とは到底思えない冷淡で能面と形容できるほどの無表情で背筋が凍りつくほどのものであった。もう以前の、ウェイブの記憶に残るあの頃の主水はそこには存在しないということを確認に表す結果となった。

「…それでも…お…れ…は……………」

消え入りかけた意識をウェイブのもつ強靱な意思が持ち直させる。

あまりにも強く噛み締めたために歯茎からも血が滴り、依然として血と胃液も止まることなく口端から流しつつも主水言葉に拒絶の意を示した。

ウェイブが元来から持ち合わせる折れることのない信念が、強い覚悟がそう為さしめたのだろう。

「仕方ねえなあ……死ぬか？」

「ぐっ……！」

ウェイブは鞘を首に宛がわれ強制的に引き起こされ、そして投げ掛けられた人間味の欠片もない死神からの死の宣告。

その意思さえもまるで野に咲く雑草を踏みつけるかのごとくとき無慈悲な一言。

その主水の声は身体の奥底から震えが来るほどの冷えきった冷淡なものであった。

ついで刃りに響き渡る鞘から太刀が抜き放たれる無機質な音と、雲間から顔を覗かせた月明かりが照らし出す太刀の銀色の鈍い輝きがウェイブの顔を撫でた。

主水は首に宛がうのを鞘から太刀へと入れ替えた。死を運ぶ刃の冷たい鋭利な感覚が恐怖を心に体に刻み付ける。

しかし、逆に、首をなぞる太刀がウェイブの首に僅かに切れ目を入れ、流れ落ちる鮮血が対照的に温かさを感じさせた。

自らの体内を流れる血液の温かさが、自分が生きていることを実感させ、さらには自らを勇気づけた。

生きている限り諦めることはない！と。

「俺は脅しに屈することはない!!例えこの命がなくなることになってもだ!!」

「!」

ウェイブの瞳には恐怖を乗り越え熱い魂が宿っていた。

「はあ………だとよアカメ。教えてやれこのバカに」

いつもそばで聞いていたあのため息が響き、あわせて太刀が離され納刀されたことを思わせる、鏗と鯉口が奏でる金属音が響き渡り、主水が背を向けてウェイブから離れた。

「俺はもんー」

「頼む聞いてくれ私の妹ークロメのことなんだ!」

「えっ!!」

ウェイブはアカメの言葉にークロメという言葉が耳に届くと同時に動きを止め、驚きに身を震わせた。

主水の事と並ぶほどに頭を悩ませているクロメのことが、予想外の

アカメークロメの姉の口から出たからだ。

「主水に聞いた。クロメと一番気心が通じているのはお前だと。頼む聞いてくれ」

「分かった……………」

ウェイブは今までの拒絶が嘘のように静かになり、あっさりと肯定を示す頷きを返した。

◆◆◆

（俺はこの話をどう伝えればいいんだ。いやクロメに伝えてもいいのか）

アカメの話を黙って聞いたウェイブは、その後すんなりと解放され、今はアカメの話を反芻しつつ、イエーガーズの隊舎で頭を悩ませていた。

（俺はどうすればいいんだ）

「ウェイブ、ねえウェイブ」

（伝えてたら確実に……………くそっ）

「むうっ」

呼び掛けて反応しない所か、頭をかきむしるウェイブに心配かつ腹立ちを覚えたクロメは頬を膨らませた。

「だーれだ」

「うわっ!!」

いきなり塞がれ、暗くなった視界に驚きの声をあげるウェイブ。

してやったりといった朗らかな笑顔を浮かべたクロメ。

しかし……………

「なんだクロメか。驚かすなよ」

ぎこちなく答えたウェイブの視線の先のクロメは、表情を消しどころよりと濁った瞳をしていた。

先ほどまでの笑顔など無かったように。

「ウェイブ……………お姉ちゃんに会ったの」

「え!!!」

予想だにしないクロメの問いかけ。

何も言っていないはずだ。

なんで分かったんだ。

ウェイブは渦巻く驚きと、知られたことによる恐怖に言葉を無くした。

「なんで分かったんだ」

否定すべく絞り出したクロメへの問い掛けが答えを明確に表していた。

焦りから出た失策であった。

「やつぱり会ったんだ……だってウェイブからお姉ちゃんの匂いがしたから。教えて欲しいなお姉ちゃんがいる場所を」

ウェイブは自分の発言を悔いながらも頭を巡らせた。

確かにアカメはクロメを呼び出して欲しいとウェイブに頼んだ。

故にこのままアカメに指定された場所を伝えればいい。

だが、それが出来れば苦労しない。

確かめなくてはならない。

自分がどのような結論を出すかを決意するためにも。

「話す前に聞かせてくれ。まだアカメを殺したいのか？」

それがウェイブがアカメの話をクロメに言い出せなかった理由。

さらには、今までクロメが話したたびにアカメを殺したいといっていたことと、今回のアカメの話した内容では相容れないことであることからの確認も含めていた。

「当たり前だよ」

(やはりな……………)

満面の笑顔でさも当然とばかりに澀みなく答えるクロメにたいし、ウェイブは言葉を発することなく、心の中で寂しげに嘆息を漏らした。

クロメと長く共にしたなかで何度もその片鱗は見てきたために、当然予想していたことではあったが、やはりその救いような無いクロメの考えを目の当たりにすると、そのショックは計り知れないものがあった。

ウェイブはそのショックが冷めやらぬ中切り札となる言葉を用い

ることにした。

「クロメ。アカメを殺さずに俺と共に生きていかないか」

「えっ……!!」

自分の濁りなき真実と思い。

アカメを殺すことなど考えずに自分と生きて欲しい。

ウェイブが伝えられる最後の切り札。

「ウェイブにそういつてもらえて本当に嬉しい……」

「じゃあ」

悪夢から覚めたように頬を朱に染め、うつむきつつ手をモジモジさせながら嬉しそうに小さく呟いた。

その様子になんか希望を見出だしたウェイブは喜びの声と共に先を促した。

「でもねそれは出来ない」

「……………」

クロメの様子から予期できなかった言葉が発せられ、ウェイブは言葉を失った。

まさに茫然自失。

自分の最後の掛けさえもクロメには届かなかったのだ。

もう自分には手札がない。

このままではクロメが手に届かない場所に行ってしまうという喪失感にウェイブはうちひしがれていた。

「ウェイブの提案は本当に嬉しかった。でもね私はそれを受けてはいけないの。お姉ちゃんを助けるためにも。昔の仲間のためにも」

口を濁すクロメに自分では想像に難い過去が、因縁が存在するであろうこと、そしてそこに自分は立ち入れないであろうことは、ウェイブには薄々と感じる事ができた。

故に言葉を発することができなかった。

「ごめんね。ウェイブ。だから教えてほしいの」

（くそっ。アカメはクロメを助けられると言った。しかしこれではその意義事態が失われてしまう）

苦悶、悲哀の表情を浮かべたウェイブは歯噛みをした。

口の端からは強く噛み締めたために血液が一筋伝っていた。

「教えられない。クロメにどんなことがあったかは分からないが俺はクロメに死んで欲しくはないかー」

「ありがとウェイブ。そしてさよなら」

ウェイブの間近にクロメの顔が迫り、ウェイブの口はクロメの唇によって塞がれた。

唇を離し、儂い微笑みをウェイブに向けたクロメは膝から崩れ落ちたウェイブをその場に残し、キラキラと光る雫を溢しつつ、静かにその部屋を後にした。

◆◆◆◆◆

「こんなにウェイブのことを思っていたなんて」

絶えず流れ出る涙を何度も何度も拭いっつ、クロメは自分の思いを再確認した。

しかし、その思いをかきけそうと決意を新たに込めようとしたその際だった。

「どうしようお姉ちゃんの居場所が分からない」

大切な事実にはシヨボンと気落ちしたクロメだったが、

「イーガーズのクロメ様ですね。私がアカメの居場所を教えて差し上げましょう」

廊下に凜とした澄んだ声がまるで助け船を出すかのように響いていた。

◆◆◆◆◆

「私はクロメを助けるなんて認められない。シエーレの仇なんだから」

ナイトレイドのアジトに机を叩く音と共に怒声が響き渡った。

それはアカメが自分の思いを、出きるならばクロメを救いたいと仲間打ち明けた時だった。

「アカメの気持ちも分からなくはない。だけど、クロメはシエーレを殺したのよ。シエーレは死んで、クロメだけが生き残るなんて私が許さない。アカメがもしもやらないのなら私がクロメを殺す」

明確な殺意と決意を込めた瞳をしたマインは素晴らしい放つと扉が

壊れるほど強くしめ部屋を飛び出した。

「マイン」

タツミはマインは俺がという思いを込めた視線をアカメに向けるとマインを追って外に出ていった。

「まあ、マインの気持ちも分からなくはない。だけどな、私はアカメの思いを尊重するよ」

アカメの首に腕をまわしたレオーネはニカツと快活にアカメに笑いかけた。

アカメの緊張を説くかのように。

「ありがとうレオーネ」

「なんだなんだしおらしくなっちゃって。うりうり」

「ひゃう」

嬉々としてアカメの胸を揉みしだくレオーネ。

場に漂うピリピリとした雰囲気は霧散していった。

そんな折、先ほどまで静かに成り行きを見守っていた主水が扉に手を掛け外に出ようとした。

「主水？」

先ほどのマインとの一件から再び緊張が走ったアカメであったが、それを察したのか主水は振り向くことなく口を開いた。

「俺はお前を手伝うといったからな。邪魔者の露払いと、少し見届けたいことがあってな」

それだけ言うと主水はその場をあとにした。

第120話

「御武運を」

「うん」

明るく返事をし走り去るクロメを見送る左京亮に浮かぶうつすらとした笑み。

全て自分の思い通りに事が進むことへの達成感がその笑みに含まれていた。

(ナイトレイドもおっさんも今なら一人でも難なく消せる。しかし今は国取りの大事な時。精々掌の上で転がってもらおうぞ)

左京亮は前方の物陰に潜ませていた一団に目配せをすると、一団は即座にクロメの後を追うように動き始めた。

全てが順調に進んでいた。

「くく」

「何が楽しい……」

静まりかえり物音一つ無い宮殿の廊下に、堪えきれない笑い声が漏れる。

しかし、それをかき消すように、冷えきった声が追従し被せられる。

ただしその声には冷えきったものとは対極にあたる、隠しきれない怒りと思えるものが隠っている。

時を遅れず、凍てつく冷気を纏った細剣が左京亮の首もとに突き付けられた。

「フッフ、これはこれは、この国の要の二大將軍の一人エスデス様ではありませんか。たしか、ナイトレイドに属していたことに気づくことなく小飼にしていた、中村主水という男に瀕死の重傷を負わされたとお聞きし、心を痛めていたのですが、その御様子では御無事だったようですね」

左京亮の襟髪が細剣の放つ冷気に白みピキピキと音をたて氷つく中、然程驚く素振りもなく、淡々とした声で声を発した。

丁寧な物言いではある。

しかし、その慇懃無礼な態度と皮肉じみた言葉選びは挑発とも嘲笑

とも感じられるもので、他人を煽りたてるものだと分かっている、尚怒りを誘うものだと感じられる。

「心にも無いことを……」

吐き捨てるように呟くエスデス。

ただし、その魂胆を見通しているためか、細められた瞳に怒りの炎が燃え盛りつつも、声は至って冷静である。

「所でこのような可及な時にこの私のような者に何か御用でも」

「御用でもだと！よくそのような事が言えたものだ。我が目の前で私の部下に対し良からぬ策謀を企てておきながら。以前から私の部下の周囲でなにやら策を巡らせていたのもお前のようだしな」

「ほう。では將軍はその怒りをどのようにする所存で？」

不適な笑みを口許に浮かべる左京亮。

どうみても、背後から首もとに細剣を突き付けられている様は、絶体絶命の状態であるのにその余裕は崩れることがない。

ただし、それは相手が悪かった。

「こうするだけだ！」

「!？」

細剣が空間に軌跡を刻む。

躊躇なく、そして、明確な殺意の込められた細剣の一振り、左京亮の首を落とした。

はずだった。

「はあつ危なかったあ。首と胴がお別れするところだったな」

首筋につく一筋の剣線の跡から溢れる血を拭くと、今までの物言い

など無かったような軽口が漏れる。

これが装うことのない本来の口調なのであろう。

「フン、文官とは思えん身のこなしだな」

「お褒めの言葉ありがたく。昔知識だけではなく力も必要だと知りましたので」

左京亮の口許に再びうつすらとした笑みが。

「実際私は貴方様とは事を構えるつもりはないのですが。国取りも重要な局面に差し掛かりますし」

「そちらにその気がなくとも私は貴様を殺さんと気がすまん」

エスデスは再び細剣を地面と並行に構えると、エスデスを中心に冷気が迸り廊下を白く染め上げる。

「いまだに万全ではない貴方では私にとって『役』不足なのですが」

左京亮は怠そうに軽くため息をはくが、それとは真逆な剣呑な光が瞳に表れていた。

『役』不足か『力』不足かは自らの身を持って知ることだな。生きていたらの話ではあるが」

言葉が終わるか終わらないかの刹那エスデスの姿が消えた。

エスデスの立っていた部分の床が砕け舞い散る残骸が地を打つその時には、左京亮の目の前に肉迫していた。

「一瞬でかたをつけてやろう」

目視可能な域を遥かに超えた速度で放たれた細剣が左京亮を捕らえる一瞬が寸での所で、細剣が動きを止めた。

見ると、突如左京亮の右手に携えられていた巨大な薙刀の柄が細剣の刃と接し火花を発していた。

エスデスは驚くこともなく、獰猛な笑みを浮かべる。

まるで、中々の獲物を発見した肉食獣のような。

「まさかブドーや中村以外に私の攻撃を止めることが出来るやつがいるとはな。普段であれば喜ぶ所だが、貴様相手にはただの怒りしか湧かん！」

「それは、それは」

二人の会話が終ると、二人は各々の得物を振り切った。

刹那、まるで爆音のような音と、爆風のような激しい衝撃波が辺りに吹き荒れ、エスデスと左京亮は間合いを取らされることとなった。その衝撃波は、装飾が各所に施された豪華な廊下の床や壁を塵へと変えた。残骸が散らばり、見るも無惨な姿に変わり果てていた宮殿の元廊下は二人の領域外の力の顕現の証明となる。

「この世界に雷オヤジやおっさん以外に俺とタメを張れるヤツがいたとはなあ。いいぜ殺ってやろうや!!」

左京亮は乱れた長い髪をかきあげると、エスデスと同様の獰猛な笑み隠すことなく浮かべ薙刀を肩に担いだ。

その重さに左京亮の立つ床の残骸は耐えられず、砕けた。

その音が合図となり、二人は再びぶつかり合った。

◆◆◆◆◆

「あの目は……どうやら交渉決裂のようだな」

ある荒野の物陰で走っていく元同僚の瞳を見た主水は、分かっていたこととはいえ、ポツリと溢さずにはいられなかった。

走り去っていく元同僚の黒く真っ直ぐを見つめた瞳には、姉と殺し会うという明確な殺意と覚悟のようなものが感じ取れた。

人を殺すという仕事に取りつかれたものは、その先、自らの周囲の者も巻き込むことになる。

例えば、兄と弟、親と子、肉親が血で血を洗う殺し合いを行う。

今まで、江戸でも何度も目の当たりにし、経験してきたことが、この世界でも起ころうとしていた。

「やるせねえな……」

主水は使いふるされた愛用のマフラーを目深にあげると、スツと眼光を仕事人の鋭いものとし、物陰から歩みでた。

「やはり来たな。姉と妹の語らいを邪魔するやつらが。どうせヤツの差し金だろうがな」

クロメがやって来た方角からその筋と分かる一団が足音なく迫っていた。

(中々の手練れ揃いのようだな)

主水は太刀を抜き、下段に構えると、暗殺者の集団に向かい歩を進

めた。



「まさかあの男と隊長が剣を交えることになるとは」

同じ宮殿内とはいえ、少し離れた区画から響く壮絶な爆音と、建物の揺れから、普段の落ち着きが嘘のように感じられるほどの焦りの表情を表したランが言葉を漏らした。

「ただ今は隊長を信じて、私はウェイブと共にクロメさんを止めなくては」

エスデスの指示も確かにあったが、ランは自らの意思で仲間を思い行動に移していた。

もう大事な者を失わないために。

主水、覚悟を問う

「クロメ…クロメええええ!!」

辺り一面に広がる荒れ果てた大地にウェイブの咆哮が轟いた。ウェイブの瞳にはクロメの影すら映ってはいない。

しかし、叫ばずにはいられなかった。

それが徒労に終わろうとも……

何もしなくては何も起こらない。

「ウェイブ…」

隣で走るランにはウェイブがあまりにも痛々しく感じ、胸を痛めていた。

宮殿でウェイブと落ち合いそれから走り続けていた。

クロメは一足先に姉のアカメと死合うためにアカメの元に向かっていた。

目的地は左京亮により口伝えされていた。

「あれは?」

「えっ」

思案の海に潜っていたランがウェイブの声に視線を先に送る。

夕日が地に沈み、夜の戸張が辺りを覆い、詳細に全貌が見えぬなか、多くの何かが地に伏す中に佇む人影が。

「クロ……違うあれは!!」

「中村さん…」

驚きと悲しみ、怒りという矛盾した感情を瞳に湛えたウェイブの先にランが件の人物の名を上げた。

近づくにつれ、見えてくる像。

幾多の死骸。おそらく、暗殺部隊と思われる様相の死骸の山の中に、着古し年季のいった愛用のマフラーを目深に巻き、同心羽織をそよ風にはためかせる中村主水がそこにいた。

「来ると思っていて待っていた」

「中村さ……」

「時間がないんだ!そこをどけ!!」

ウェイブがランの言葉を遮り叫び、瞬時にグランシヤリオを纏い、地面を踏み込み突っ込んだ。

踏み砕かれた砂塵は舞い、弾丸のごとき速さで主水に肉薄する。以前の容赦ないやり取りゆえに、元来甘さの抜けきらぬウェイブですら主水を敵と認識を改めていた。

「簡単に退くなら、こんなところにはいねえよ」

暗闇を裂き間近に迫るウェイブに、呆れるように目を細めた主水は、ため息をつくかのように、マフラーごしにふっと息をつくど、体を回転しつつウェイブの拳を紙一重にかわし、腰から刀を鞘ごと抜くと、ウェイブの首にあてがい、回転の勢いを合わせて巻き込むように振り切りウェイブを弾き飛ばした。

「くそっ！」

ウェイブは空中で身を翻し、着地し、再び地面を蹴ろうとした刹那、「がはっ!!」

ウェイブの視線は宙を巡っていた。

そして、次に気づいた時には地面に仰向けで伏し、主水によって鎧(鞘の先端)で鳩尾かたりを押さええられつけられている状態だった。

「覚悟がたりねえな。俺が金をもらってりゃあ、お前は既に四回死んでるぞで」

「覚悟…だと!!」

「ああ、人の死合いを妨害する覚悟がな」

「……………」

主水の『死合』という言葉にウェイブは言葉を無くす。

分かっていた。ただ頭で考えようといや、意識しようとしていなかっただけ。

いつも、笑顔で迎えてくれていたクロメが死ぬという現実を目を背けていただけだった。

それを主水に目前につきつけられたのだ。

ウェイブの脳裏にクロメとの思い出が走馬灯のように駆け巡る。

仕事を共にこなしたあの日々。

幾多の辛い経験を共有したからこそ乗り越えられたこと。

いつもクロメのその笑顔に癒やされていたこと。
自分が苦しい時には必ず言葉を発せずとも、寄り添っていてくれたこと。

頬を一筋の涙が流れ落ちた。

それと共に沸き上がる熱き思い。

「絶対に……絶対に止めて見せる！ 邪魔をするなああああ!!」

ウェイブの体から熱気が溢れ出す。

完全に動きを止められていたはずのウェイブが主水の鞘を弾き天高く舞い上がる。

漆黒の暗闇に覆われた闇夜と同化するかの如くウェイブの姿が消える。

「……………」

主水はウェイブの姿を見失ったのか、静かに鋭い視線を辺りに巡らせつつ、周辺の気配に五感を研ぎ澄ませる。

身動き一つせずにあること数秒……静寂を破るが如く主水は身を翻し、黄金の十手を構えガードの体勢に入る。

刹那、闇より黒い影が主水に降り注いだ。

「くっ」

主水はその衝撃を受け流すこと止めきることも出来ずに遙か後方に弾き飛ばされ粉塵を巻き上げ地に伏した。

「これが俺の覚悟だ!!」

息をきらせつつウェイブは噛み殺すように呟く。

まるで、自分に言い聞かせるように。そして、主水に回答を告げるかのごとく。

「ラン行こう」

「いえ、私はここで成り行きを見守りたいと思います。後はウェイブあなたにすべてを任せます」

ランは優しく微笑んでウェイブに行くように促した。

クロメは大事な仲間には違いない。しかし、この件に絡むには何か足りないと感じていた。

姉妹、仇、恋愛関係？など入り乱れつつも、強いしがらみのごとき

関係の中ではあまりにも薄弱な『仲間』という関係。

ランは場違いに感じ始めていた。

自分が果たしてその中に割って入っても良いものなのかと。

ただ、それだけではないここに留まらなければならぬ理由も存在してはいたのだが……………。

「分かった必ず止めて二人で戻ってくる」

「ええ待ってます」

ウエイブはランの意思をも背負い強い思いで走り出した。

ここに至るよりも数段強い覚悟を瞳に灯していた。それははからずも主水との戦いが灯したものかもしれない。

「悪役も大変ですね中村さん」

ウエイブが走り去り、姿が見えなくなり、わずかに時間をおいた後に、ランは仲間に語りかけるように数間はなれた先の暗闇に声をかけた。

その声には敵意も、警戒するかののような色も含まれてはいない。以前と全く変わらないものだ。

「人を殺すやつが悪くないはずはねえだろ」

身体に付着した埃を払いつつ暗闇にからスツと姿を表した主水は、ランの声かけに答えるように呟く。

以前の仲間であつた時と変わらぬような、掛け合いではあるが、主水の発することばにはどこかトゲトゲしさを感じさせられる言葉遣いである。

「で、何故残った？」

「少しお話したいことがあります。以前の主水と」

ランの声色は先程の優しく艶のこもつたものではなく、どこか真剣みを帯び、悲しげなものとなっていた。

暗さゆえに共に表情は分からなくとも、声色と仕事を共にしていた時間、経験則からお互いに真意は計れているのだろう、見えぬ中で微笑かに笑みを湛えていた。

駆け引き無用

闇の中で交錯し合う無数の影、交錯し合う度に響き渡る金属と金属の奏でる甲高い音、音が響くと同時に辺りを一瞬照らす火花。

交渉が決裂した結果がもたらした姉妹と、その妹を親友の仇と狙う復讐者、屍と化すことにより隷属させられし者達により凄絶な命のやり取りが繰り広げられていた。

「どうしてこんなことになっちまったんだよ……」

予想はしていた。

しかし、最悪の状況に進展してしまったことにより、底無し沼に沈むようなもうどうにもならないような感覚に襲われる。

眼前のどのように進んでも血みどろの道しかない現実をまざまざと見せつけられ、呆然とするウェイブであった。

しかし、先程の主水とのやり取りから、覚悟を新たにしていたために、即座に立て直し、その運命の糸が複雑に絡み合う戦いの中に踏み込む決意を固め、再度グランシヤリオを身に纏った。

「待ってろよクロメー！絶対にお前は殺させはしない。お前に俺はどんなに怨まれようとも、必ず止める!!」

ウェイブは血みどろの戦場の真っ只中に突っ込んで行った。



帝都の中心部にある皇帝が住む宮殿は東院、西院、そして中央の皇帝の居と三つに別れているが、今東院が8割方崩壊した状態に陥っていた。

豪華なだけでなく、幾多の戦禍をも測定し、真っ只中であろうとも主を守りきるほどの強固さも秘めていたはずであるのに、人外の力をもった二人が戦いを行うと、まるで赤子の手を捻るが如く容易く崩れていった。

その様相は、まるでその場で超級危険種が集団で死闘を繰り広げるが如く凄惨な状態になっている。

建物はほぼ塵芥と化し、運良く所々残っている宮殿の壁や床だったものなどには、未だに美しい装飾が残っているのは皮肉にさえ思えて

くる。

「まさか手負いの身でここまでやるたあ思わなかったな。役不足ってのは訂正しないとなあ」

髪を振り乱し、眼を血走らす左京亮は、袴をボロボロにしまるで荒れ狂う獣のような様相で、普段の優雅でたおやかな姿は微塵も感じさせないものとなっていた。

(こいつ、私とここまで戦って息もきらせず、傷がすでにふさがりかけているとは。いかな面白くなってきたな)

一方のエスデスも、左京亮同様に戦鬪により服は汚れ、ボロボロになってはいるが、傷は二、三ヶ所と全く戦いには支障をきたさない状態である。

序盤の戦鬪中は、怒りのみで戦いを練り広げていたが、生粋の戦鬪狂の血が騒ぎ始めたのだろう、うつすらと愉しげに口許に笑みを湛え始め、体からは冷気が吹き出し、辺りを凍結させ始めた。

「楽しくなってきたな。エスデス將軍よお！」

「ふんっ。不覚にも楽しく感じ始めている私が憎らしいがな」

冷気で青白く変わり果てた世界で二人は同時に口角を上げた。

共に戦いにおいては比肩するものがなく、主水とブドーという例外はいるが、退屈を感じていた中で、実力白仲する者に会えたのだ、謀略や怒りを超越して楽しさを感じてもおかしくはない状態であった。

「第二ラウンド行くか？」

「ああ、次こそその首もらい受けるぞ」

「やってみな！」

同時に前傾姿勢で体勢を低くし、左京亮は巨大な薙刀を肩に担ぎ、エスデスは細剣を引き臨戦体勢を整えた。

瓦礫がパラパラと落ちると共に二人の蹴り足を中心に地に亀裂が走ったその刹那。

「やめなさい!!何をしているんですか!？」

血相を変えてはいるが、両手に肉を抱えたオネスト大臣が大声で二人を止めに入った。

「なんだ大臣。貴様も踊りに来たか」

「エスデス將軍ここは皇帝陛下の宮殿なんですぞ。また戦時下であり、その力は迫り来るその時に備えておいてもらわなくては。左京亮あなたもですぞ」

口調は穏やかであっても、眉間にしわがよりその怒りは隠しきれてはいなかった。

肉を頬張ることなどでなんとか抑えている状態なのだろう。

「ちっ、興が冷めた。次まで命は取っというてやる」

エスデスは細剣を腰の鞘に納めると、つまらなそうに吐き捨て、踵を返す。

氷のような青い髪を靡かせ、カツカツと足音をたてて冷風を纏い去っていった。

エスデスの去った後には氷柱が無数に突き出していた。

「普段冷静なあなたらしくありませんね左京亮」

エスデスの去った後、オネストは肉を食い契りつつ左京亮に振り返り、苦言を呈す。

窘めるような口調で。

「あれほどもでに私を熱くさせてくれる女性とは思いませんでしたよ」

動じることもなく、オネストに答える左京亮。戦闘中に振り乱していた髪は整えられ、血走っていた瞳も妖艶なものに戻り、口調も丁寧なものに様変わりしていた。

「帝国最強の二大將軍ですからな。私の大事な手駒の一つですので。あまりお痛が過ぎるのも考えものですぞ」

「悪い笑顔ですね。お怒りの様子だったのはその理由ではなく、将来的に自分の居城になる宮殿を壊されたからではないのですか」

狸と狐の化かしあい。

意味ありげな含み笑いを浮かべる二人は不気味な印象を誰しもが受けるものだった。

「オネスト様かような所に来られたために埃が」

「！」

「どうかいたしましたか？」

「なんでもないですよ。感謝します。では、私もこの後の大事な局面が待っていますので」

オネストは悪い笑みを浮かべるとそそくさと場を後にした。

「フフフ」

去っていくオネストの背が見えなくなると、左京亮は堪えきれなくなったように笑い声を漏らした。

なんとも愉快だといったように。

「たった1日でこれほど上手く事が運ぶとは重畳、重畳。フフフフ」
口角があがり三日月のようになるほど満足気な表情を浮かべ呟く。
戦い中とは違った快感に酔いしれるかのように手で顔を覆いつつ。

「全てが俺の掌中で踊っている。では、このまま国取りと行きますか」

左京亮は薙刀を肩に担ぐと宮殿の中に消えていった。

姉妹の結末

姉を狙うクロメと傀儡とされて操られるシエーレ、アカメとクロメを親友シエーレの仇と狙うマインが闇の中で熾烈に対峙していた。共に姉を、妹を思つての戦いではあるが、思想の違いから戦いの幕が切つて落とされた。

姉のアカメは、本当の意味で妹のクロメを救おうと願うが、妹のクロメは死んでいった仲間のことを思い、又、姉のアカメとどんな形になろうとも、永遠に寄り添いたいと願い、姉妹の思いは重なることなく決裂したことが、またマインのクロメに対する因縁が複雑に絡み合つた結果が戦いによる決着に至るのであつた。

序盤は一進一退を繰り返し、どちらも一歩もひけをとらなかつたが、次第に戦況が変わつてきた。

数としては二対二であり、戦力的にもほぼ互角となる。

しかし、傀儡となるシエーレは、クロメが操ることで戦闘をこなすため、実質クロメ一人対アカメ、マインの二人という構図になる。

故に、集中力がもつていた序盤は見た目的には拮抗した戦いを行っていたが、時間の経過と共にその差が如実に表れ始めたのである。

「シエーレ！」

一直線にクロメに放たれた弾丸の前にシエーレは立ち塞がり、エクスタスで弾く。

「私の親友を絶対に赦さない!!」

マインはエクスタスの射程にも構わず踏み込む。

シエーレを使い攻撃を防いだことが、マインの怒りに火を付けた格好となった。

さらには、マイン独自の戦法故に。

「シエーレ殺つて」

シエーレはどす黒く闇に染まった眼でかつての親友をとらえ、容赦なくエクスタスの刃を重ね合わせた。

「シエーレ、私が何年あなたとパートナーを組んでたと思つてるのよ」

マインは、屈みエクスタスの切断を避ける。

マインの言葉通りその戦いを見続けていたからこそ、目を瞑ってもシエーレの攻撃なら避けきる自信があったのだ。

「私があなただをその呪いから解き放つてみせる」

マインは、一筋の涙で頬を濡らしつつ、パンプキンの引き金を引き、シエーレに向けた銃口から眩い、呪いを穿つ一撃を放った。

「あ……り……が……とう……マイ……ン」

眩い光の中で在りし日の笑顔を浮かべたシエーレが眩いた。

巨大な光が闇夜を切り裂き再び辺りに闇が戻った時には、シエーレだった者はその場に存在しなくなっていた。

「シエーレエエエエツツ!!」

闇夜にマインの慟哭が響き渡った。

悔しき、怒りではなく、純粹に哀しみ一色の響きであった。

「クロメええええつつ!!」

マインの泣き崩れる側を駆け抜け抜けアカメがクロメに切りかかる。

シエーレが巨大なパンプキンの咆哮によりかきけされたことと、その威力、眩さに一瞬の隙が出来、避けることの出来ない一閃が目の前に迫っていた。

「クロメは殺させない!!」

「えっ!」

アカメの村雨が突如として割つてはいつた黒い影によって阻まれていた。

「させない!!」

「ぐっ!」

黒い影が村雨を掴み、アカメの腹に一撃を入れ、アカメは体をくの字に曲げ吹き飛んだ。

「ウェイブ!」

「大丈夫かクロメ!」

不思議そうに問いかけるクロメと、それに答えるウェイブ。

クロメの問いかけには驚きだけではなく、喜びの色もわずかに垣間見えたため、ウェイブは良い方向に進めるのではと望みを抱いた直後だった。

「なんで来たのウェイブ！」

「……………」

望みは儚く散った。

しかし、それも予想の範疇でしかない。

「決まってるだろ。クロメを連れ戻すためだ！姉妹での殺しあいなんてさせない」

クロメの両肩を掴み、自分の思いの丈を、本音をクロメにぶつけた。めったに見せない力強いウェイブに一瞬の呆然としたが、クロメも強い覚悟をもつての行動ゆえ折れることはない。

「ウェイブがそう言ってくれるのは本当に嬉しい。でもね——」

クロメはウェイブをグランシヤリオ越しに見つめ言の葉を紡ぐ。

「この戦いだけは辞められない。死んでいった仲間に対しても顔向けできない」

普段のクロメと違い力強い眼差しと答えに、ウェイブも言葉をなくし、たじろぐ。

「必ず戻ってくるからここで私の覚悟を見届けて。絶対に帰ってくるから」

クロメは闇を照らすような晴れ渡る笑顔をウェイブに送り、アカメに振り向いた。

「お姉ちゃん。一対一で勝負をつけよう」

一拍の間をおいて闇の中の赤い瞳がマインに向かった。

「あとは私一人でもいい？」

クロメをひたすらシエーレの仇と追っていたマインに懇願するよううに了解を求める。

自分一人で決めて良いものではない、しがらみにかからめとられたマインの了承なければ、マインは呪縛から解き放たれることはないのだから。

「いいわよ……私の願いはシエーレを解放してあげること、目的は果たせたから」

涙声ではあるが、憑き物がとれたような表情をアカメは闇の中でとらえた。

「…ありがとう…」

アカメはマインに頭を下げた後クロメに向き直る。

「決着をつけよう。お姉ちゃん…」

「そうだねクロメ…」

二人の間に夜風が吹き抜ける。

二人の黒髪がゆつくりと風に靡き、ゆつくりと動きを止める一一一

刹那

二人の黒い影が闇の中で交錯し、駆け抜けた。

「うっ」

闇の中に鮮やかな血飛沫が枚散る。

まるで、桜の花弁が舞い散るように……………

視界が黒く、宵闇よりも黒く染まっていく。

「お姉ちゃんに勝ったんだ！もう永遠に離さない。いつも私の側にいて」

フラフラと立ち上がったクロメはアカメを見下ろすような位地に陣取りそして、

「永久に一緒だよ」

「ぐっ!!」

八房がアカメの背に突き立てられた。

血溜まりが広がると同時に、アカメの瞳から光が失われ、闇が湧き出すように広がった。

ユリリと立ち上がったアカメは既に誰も知っていたアカメではなくなっていた。

「それがクロメが望んだことなのか…」

「うんそうだよ。お姉ちゃんが私の元に戻ってきたお祝いにカツコいいところ見せてよ」

アカメは静かに滑るように進み呆然と両ひざをつくマインの首をはねた。

「お帰りお姉ちゃん」

「……………」

◆◆◆◆◆

「やったねお姉ちゃんを騙していたナジエンダを殺したよ」

「……………」

◆◆◆◆◆

「やっぱり最高の姉妹だね私たち。二人でちようど一万人殺したよ」

「……………」

◆◆◆◆◆

「何で答えてくれないの……………」

分かっていた。

八房で自分の物にしても、それは生前のそれとは違う。

ただの、入れ物、器に過ぎないことを。

私は、入れ物や器が欲しかったんじゃない。

意思ある、答えてくれるものが、愛してくれるものが欲しかったんだ。

気づいくのが遅すぎた……………」



「……………口…メ……………ク…ロメ……………クロメ」

「う……………ん…」

目の前にアカメと今にも涙を流さんとした悲痛な表情を浮かべたウエイブがクロメを覗き込んでいた。

「良かった…」

視界にはゆつくりと傷口から広がる梵字のような呪毒が回る証が浮かんでいるが、出た言葉は喜びの言葉であった。

「お姉ちゃんが生きてて良かった」

ボロボロと涙を溢しながら喜びの声をもらし続ける。

「クロメ……………クロメ…」

アカメも堪えてきたものが決壊するかのように涙を絶え間なく溢す。

辛い運命を受け入れ、乗り越える。

強い思いも感情を、肉親の情を乗り越えることはできなかった。

たった二人の家族であり、辛い運命も共に乗り越えてきたのだから。

「私やつと分かったの。私がしてきたことが酷かったことを……………だからごめんなさい」

誰にともなく謝罪の言葉が涙と共に漏れた。

呪毒がゆつくりと広がっていく。

あらゆる毒に対する耐性がついているため、回るスピードはゆつくりだが、確実に死へのカウントダウンは進んでいく。

「……………俺のわがままだが、二人にさせてくれ……………」

ウエイブは悲痛に顔を歪め、影を落としつつアカメに懇願する。

最後の一時を過ぎさせてほしい。

家族を差し置いて言っただけの良いことではないと知りつつも、願わざるには居られなかった。

「……………」

アカメは黙って頷くとマインを伴い闇に姿を消した。

「ありがとう……」

ウェイブはクロメを抱き上げると、絶望に向かうように闇の中に消えていった。

相見える切り札と切り札

「いい腕してるな……」

主水は表情を緩め唸った。心底気持ち良さそうに。帰って来たときには疲れはて、ボロボロになっていたのが嘘のように。

「天にも昇っちゃうほどでしょ」

主水の言葉に喜びを表すように表情を綻ばせるチエルシー。

しかし、手を止めることなく上半身裸で布団に横たわる主水に針を射っていく。

「ここは疲労回復のツボ」

「おっ……」

「ここはケガの回復を早めるツボ」

「おっ」

的確にツボをつき、快感に溺れる主水に淡々と針を射っていくチエルシー。

「そしてここは……」

「そこは？」

素早くうちこんでいくチエルシーがここぞとばかりに間をおく。

それほど勿体ぶるのはどれほどのツボかと主水は聞き返す。

少女の笑顔が、女性の笑顔へと変わった。

「勢力増進のツボ!!」

「そうきたか……」

軽くため息をはく主水。

普段の主水であれば、喜ぶ所だが。

「ここ数日危険種の百目ウナギを食べ続けて毎晩がんばってそろそろ限界なんだが」

「明日になったらもう会えないようなことになるかもしれないし生存本能が求めているの主水との愛の結晶が欲しいって」

針を抜いた後にしなだれかかるように主水にすり寄るチエルシー。

その頬は朱に染まり、艶を帯びていた。

「俺は種無しカボチャだぞ」

「さんざん主水が生前に言われ続けていた愚痴。

江戸時代において御家を残すために必ず子孫を作らなくてはならない風潮の中で神頼みまでも為せなかつたために、耳にタコができるほど姑に言われ続けたあの愚痴を主水が述べた。

今夜は疲れがピークに達しているためにチエルシーの論を論破するため。

「ウーンそれなら、ぬくもりがほしいなあ

」

妖艶な表情で甘えるように耳元で囁くチエルシーは主水を陥落させた。

◆◆◆

帝都からおよそ二十五里（100 km）の位置の荒野の広がる大地を馬のような危険種に乗った一団が土煙を上げて走っていた。

その数数千、挙兵した革命軍の兵士達である。

先頭には自らが指揮に立つと革命軍のリーダー、そして右腕となり、革命軍屈指の戦闘力を持ち、帝国の二大將軍との戦いにおける切り札となる山田朝右衛門が、殿には護りに特化したタカナとその右腕レチエリーとスピアといった陣形をとっている。

これまでいくつもの関を破りその勢いは天をも突く勢いであり、すでにコロウカンまで残り一里といった所である。

「すでに帝都の中心部に西から攻めこんだ友軍が入り込んでいるらしいな」

「左様のようで。手勢は万全で無い故私たちも急いでコロウカンを抜け助力せねば」

「ああ、そうだな。だが、こちら辺が報告にあつた数千の軍勢が消失した辺りだと思ふのだが……」

革命軍のリーダーは、一団に警戒と速度を落とすように指示を飛ばしたうえで、辺りに鋭い眼光で視線を巡らす。

前方には街一つが入るほどの大きなコロウカンの関。そして、今走っている周辺には大きく抉れた大地と黒く焼け焦げた跡が。

所々には溶解した岩なども存在しており、かなりの威力で広範囲の

攻撃が行われていたことが察せられた。

「超級危険種あたりを使役してのことだろうか……」

リーダーが表情を曇らせたその刹那、コロウカンの見張り矢倉から青白い光が灯り、そして――

「皆はその場から動くな!!」

朝右衛門は走っている危険種から飛び、一団の十数m先に足をおろし、片手をあげ止まるように制した。

勢いについていた一団であるが、警戒を深め少し速度を抑えて走っていたため、朝右衛門から後方数mの位置で停止した。

直後一団の目の前に巨大な網膜を焼くほど眩く、そして禍々しい青白い光の塊が目の前に迫っていた。

「あっ!!」

革命軍のほとんどの兵士が自分の運命がここに窮まったと諦めの境地に達していた。

ここに存在する四人を除いては。

山田朝右衛門の黒い羽織が皆の眼前ではためいた。

それと同時に暴風が吹き荒れ誰もが目をおおう。

カチツという鯉口をならす音がなり、しばらく暴風が吹き荒れた後に、未だに命があることに懐疑的になった、皆がそろりと目を開ける。

「……………!?!」

目の前に迫っていた死への誘いをもたらした青白い雷の塊が消失していた。

誰もが、言葉を失っていた。

人間業ではどうにもできないことは誰にでも明白な力の暴力を、たった一振りで目の前の男が消し去ってしまったのだから。

「えっ!!」

さらに、皆を閉口させる現実が。

朝右衛門の直前まで、半円形に抉れ、まるで赤い絨毯がひかかれているのかと錯覚するほど真っ赤に溶解した大地が。

先ほど眼前に迫っていた雷の塊が過ぎ去っただけでなしてきた所業であった。

そんな真つ赤に染まり、熱気で白い蒸気がたちのぼり陽炎が揺らめく中を、青い雷を纏うように発する青い甲冑を身につけた二mほどの背丈の男がこちらにゆつくりと歩を進める姿が。

「ブ、ブ、ブ、ブ、ブドーが来たあああつ!!」

視力が一番優れている斥候に向いたものが声を上げる。

一度目の死を乗り越えた者たちを絶望に叩き落とす現実に誰もが震撼していた。

しかし、ここでも

「私が参ろう」

朝右衛門は赤く溶解している大地にブドーのように足を下ろし、熱気などどこ吹く風というように、無表情でブドーに向けて歩を進めた。

剛剣対剛拳

熱気で風景が揺らめく中、両雄が雌雄を決するべく一歩一緒に確実に歩みを進めていく。

コロウカンに配属された帝都の兵士と革命軍のメンバーは固唾を飲んで見守るしかできない。

帝国のブドー、革命軍の朝右衛門共に両軍の切り札であり、人間業という領域を遥かに超越した存在であり、成り行きを見守るしかできないのである。

確かに、両軍に帝具持ちの猛者も存在はしているが、この二人の前では束になったとて歩みを阻むことすら出来はしないだろう。

緊張感を帯びた静寂に包まれる中、二人の足音のみが周辺にこだまする。

両者が対峙するまでに、どれ程の時間が経過したのだろうか、あまりにも長く感じはするが、それが実際はどれ程のことなのかを調べる余裕すら持つことができない緊迫感は凄まじいものであり、金縛りにあっているとも形容できるだろう。

そのような中、二人は歩みを止めた。

お互い目視で全ての挙動を見通せる位置に対峙するだけで、両軍が息をのんだ。

「貴様が革命軍最強の山田朝右衛門か」

「左様。私が山田朝右衛門だ。お前が帝国が二大將軍の1人ブドー將軍か」

「そうだ、俺がブドーだ」

共にこの距離で無くとも既にその一連のやり取りからおおよその検討がついていた上でのやり取り。

しかし、共に武人氣質の二人であるがゆえの死合いを行う前段階としての確認である。

「噂に聞いてはいたが、我が帝具アドラメレクの一撃を僅か一太刀で消し去るその剛剣ぶりには驚かされたぞ……だからこそ許せん！何故その力を我が帝国の陛下のために使おうとしないのか！悪鬼外道

の元で振るおうとするのがだ!!」

ブドーの天にも届く程の怒号に呼応するかのごとく、黒い雷雲が天を覆い、周辺に雷が降り注ぐ。

ブドーの怒りの具合を表すかのように。

「お前に確固たる信念があるように、私にも確固たる信念がある。故に、その信念は交わることはない」

朝右衛門は、ブドーと対称的に静かにそう答えると肥後拵えの太刀の束に手を掛け僅かに腰を下ろし前傾姿勢を取る。

「初めて見た……」

革命軍のリーダーは無意識のうちに呟いていた。

驚きは二点から。

一点目は、朝右衛門は普段は白鞘の太刀を用いていた。しかし、今回は白鞘ではなく、基本的な拵えの太刀を用いていたこと。

おそらく、今回の戦いは熾烈なものとなり、耐久力には秀でない白鞘では耐えられないものとなると考えてのことであろう。

二点目として、今まで朝右衛門は、戦いの際には、構えを取ることなく自然体で帯から抜いた白鞘の太刀を左手に持つという姿勢から戦闘に入っていた。

基本的に太刀を鞘から抜くことなく、相手の攻撃をいなし、相手の隙を生み出し、そこで鞘から抜刀し、一刀の元に切り伏せるといった、首切りの仕事の一貫から生み出された朝右衛門特有の構えである。

しかし、今回は、太刀を帯びに挿した状態で左手は鞘に、右手は束にという隙のない構えを取っているのだ。

その初めて朝右衛門が見せる構えが、相手のブドーが予断を赦さない相手であることを雄弁に物語っていた。

「死して己の愚かさを悔いるがよい!!」

天にむかい咆哮を轟かすブドーに一本の雷が舞い降りた。

耳を裂くほどの轟音と、地を砕く衝撃、大地を揺るかす地響き、網膜を焼くほどの閃光に、そして、吹き荒れる殺気に、帝国、革命軍関係なくバタバタと倒れ失神するもの、意識はなんとか保ちつつも失禁するものが多数現れる。

「長い人類の戦いの中でも屈指の戦いになるでしょう。貴女たちも武に生きるのならば見ておきなさい」

「はい……」

最後尾に陣取っていたタカナや、レチエリー、スピアも最前列にやって来ていた。

ただ、タカナ以外の二人は青ざめ、恐怖に体の震えが止まらない状態にあり、タカナの答えに一言返事を返すだけでも儘ならない状態である。

ブドーも腕をひき力を貯める。

身体中から雷が迸り、引いた右こぶしに収束していく。依然として耳をつんざくような破裂音と、目映い閃光が溢れている。

その姿は鬼神のごとき荒々しくも、神々しい姿であり、誰もが畏怖するものである。

そのように荒々しい構えのブドーに対し、自然と同化するように静かに構えを取る朝右衛門。

剛拳と、剛剣同じ域に立ちながらも、真逆の構えとなっていた。力をためた状態から朝右衛門とブドーは共に鋭く見据えつつゆつくりとアシーネ運び間合いを厳正し合う。

アドラメレクという帝具の構造から、ブドーは接近戦の場合は朝右衛門よりも間合いを詰めなくてはならないが、遠距離に持ち込めば遠距離攻撃がない朝右衛門に対し圧倒的に優位に立てる。

しかし、距離を取ることはしなかった。

武人として接近戦を望んだこと、遠距離攻撃は朝右衛門相手に通じることもなく、無駄に電気を失うことになること。そしてなにより朝右衛門の闘気がそれをさせなかったのもある。

構えを崩すことなく間合いをジリジリと探り会う両者の足が止まる。

辺りを荒野独特の突風が吹き抜ける、刹那両者が地を蹴った。

朝右衛門は鯉口を切り神速の一刀、ブドーは引き絞ったアドラメレクの雷を纏った一撃を。

共に目視はかなわない。

ともに交わったのを知るのは音と衝撃でのみ。

触れ合った瞬間轟音と衝撃波が発生し、辺りに点在する岩石を粉碎し、盾を構え、戦いに際し万全の準備をしていた革命軍の兵士達も吹き飛んだ。

対峙する両者は、緩めることなく、打ち合う。

初めは熾烈に打ち合っていたが、次第にブドーの拳が宙をきるようになり、朝右衛門の太刀がブドーの鎧を掠め始める。

「ぬうっ……おのれえええっ!!」

怒りにより振りが大きくなる。

これが、相手が自分より格下であれば、冷静に対応できたであろう、しかし、相手が同等の朝右衛門であるがゆえ、冷静さを維持することが難しくなっていた。

逆に朝右衛門は常に冷静に、摺り足により最小限の動きで拳を避け続け、的確に攻撃を加え続ける。

「裁きだっっ!!」

ブドーは仰け反る程に腕を引き、朝右衛門に拳を振り下ろした。

朝右衛門は、僅かに眉を潜めると、即座に間合いを取る。

ブドーの振り下ろした拳は朝右衛門が先程までいた場に突き刺さり、拳を起点に円形に地面が吹き飛び、雷が迸った。

「外したか」

ブドーは、砂塵が落ちる拳を見て呟いた。

青い鎧には無数に刀傷が残ってはいるが、朝右衛門が踏み込んでいなかったために、深手にはなっていない。

一方の朝右衛門は、頬に僅かに切れ目がついた以外は傷を負ってはいなかった。

戦いの序盤ということで無理をせずに距離を取りつつ戦いを行っていたためでもある。

再びブドーは構えを取り、朝右衛門はゆっくりと、流れるような動きで太刀を肩に担ぎ大上段の構えを取る。

首切り役人の首を落とす際の特有な構えである。

「ふっ、そういうことか」

ブドーは僅かに笑みを浮かべる。

朝右衛門の意図を読み取ったためである。

ブドーは腕を引く構えから、片腕を顔の前に、片腕を下段に構える。一種異様な構えではあるが、その意図は見えない。

朝右衛門は表情を変えず、踏み込んだ。

とても摺り足とは思えない速さで瞬時にブドーとの間合いを詰め、太刀を振り下ろした。

その一刀は先程までの攻撃が霞むほどのもので、まさしく剛剣。なにもかもを切り裂く鬼神のごとき一刀。

「くっ!!」

しかし、その剣閃は大きくブドーの身体からそれる。あらゆる力に介在されたように。

「俺のアドラメレクは金属を引き寄せることもできてな。まあ、一瞬ではあるが」

ブドーの拳が初めて朝右衛門を捕らえる。

朝右衛門は左手を捨てて、守りに入る。

「ぐっ……」

バキツという何かが折れる音がこだまし、朝右衛門の左腕が力なく垂れ下がり、さらに朝右衛門の身体を電気が走る。

「うおおおおっ! ブドー將軍の勝ちだっ!!」

後方のコロウカンか、大歓声が沸き上がる。片腕を失った時点で勝負が決まったと帝国軍の兵士は沸き立ったのだ。

「これで終わりだ!」

ブドーも勝機を得たと、今まで以上に雷を拳に纏わせ、轟音を轟かせ振り下ろす。

「なっ!!」

動きを止めたと思われた朝右衛門は下段に位置した刀を返し、束を掴んでいた右手を逆手にし、切り抜けた。

「がはっ!!」

ブドーの腹部に一閃が走り、血液が吹き出した。

辺りは静まり返っていた。それは帝国軍も、革命軍も同じだった。

まったく現状を把握、いや理解できないためだ。

「おのれどういふことだ」

地面に片膝をつき、ブドーは呻いた。

こんなはずではなかった。

雷が身体を走り、拘束したはずだったと。

「ああ、瞬時に太刀を地面に刺し、雷をにがすことができた」

疑問に答えるように、朝右衛門はブドーの疑問に答える。

「左手を失つてのこの威力の攻撃は……」

「逆手逆袈裟切り」

朝右衛門は、遠く虚空を見上げ呟いた。

朝右衛門が東方で、知己の剣術師範の秘技として一度見せてもらったものを体得したある意味奥の手の一つだった。

「油断した」

悔しそうに歯噛みすると、足を震えさせながらもブドーは立ち上がった。

朝右衛門も分かっただけはいた、本来逆手逆袈裟切りは両手で行う技であり、片手では、威力はあろうとも、ブドークラスの敵では一撃で倒すことはできないと。

大きな一撃を受けたブドーと、左手を失った朝右衛門は再び向かい合った。

渦巻く陰謀

鋭い視線が再び交錯した際だった。

ブドーの眉間に深い皺が刻まれ、唇の端を噛み締めた。

切れた唇から流れた血液が地面を濡らすと同時に、ブドーは忌々しげ、いや自分の手抜きを恥じるかのようにポツリと呟いた。

「おのれ、大臣め……この時を……俺が不在を狙ったか!!」

怒りに瞳をそめ、髪が逆立った。

今のブドーの瞳には、直近の相手である浅衛門はすでに映ってはいない。

ここから遠く離れた宮殿に座し、策謀を企てた男に向けられていた。

力強く握りしめられている拳からは血が滲み、地を赤く染めた。

動から静へ、先程まで苛烈に攻め立ててきていたブドーが一転して動きを止めたことに、浅衛門は違和感を覚える。

ブドーはその戦闘スタイルから待ちの姿勢になることはまずない。さらには浅衛門は手傷を負っている。その状況で自らも大きな傷を負ってはいても、せめたてないことはありえないとの考えから疑問と違和感を強く受けていた。

とはいえ、ここで自ら打つて出るというのも相手の思惑に乗ってしまうのではとも思い自らも動きを止め、ブドーの動きを具に捕らえ、どのような、僅かな動きさえも見逃さないように見据えた。

晴天に浮かぶ雲が風に吹かれて足早に戦場をかけて行く。先程までジュウジュウと音をたてて融解していた岩盤もその熱を冷ましていた。

静寂につつまれた戦場であっても、両者の軍勢は緊張が解けることはない。たった一太刀で勝負が決することもある、猛者の戦いであるからだ。

その永遠に続くかと思われた静寂も、一人の男の動きで破られた。

ブドーが浅衛門を見据え、頭を下げたのだ。

「すまない浅衛門。俺はここで屍を晒す決意でいた。陛下の意にも添

え、さらには武人として、そなたのような男と戦え、生きようとも死そうともそれは誉れになると信じて。しかし、最も重要である陛下の身に危険が及ぼうとしている。むしがいいと言われれば返す言葉はないが、背を向けて立ち去ることを許してもらいたい」

想像だにしない言葉がブドーから紡ぎ出される。

今の戦いは共に拮抗したものであり、その申し出は損得では計れないものである。

しかし、浅衛門は、ブドーな真剣な表情を見て、何かを感じ取ったのであろう、軽く頷いた。

「すまない。我が軍勢に告ぐ。無駄に死ぬことは陛下の意にも沿わぬもの。全ての責は私が負う。ここは革命軍に明け渡すのだ」

「えっ!!」

「どういうことだ!」

静寂一転動揺が走る。

それは両軍ともにである。

帝国軍としては大将であるブドーがある意味敗けを認め、戦いを放棄することを促し、革命軍からすれば、一進一退どちらに転ぶとも知れぬ戦いが、相手が放棄をしたことにより勝ちが転がりこんできたのだ。

ただ、中には慎重なものも。

(何か思惑があるのかしら。ただ、脳筋ブドーにそんな賢さがあるはずはないか)

タカナはブドーの思惑を図れず困惑を深めていた。

混沌治まらぬ中、ブドーは再度浅衛門に頭を下げると、

「陛下の愛する臣民たちよ、命を無駄にするな」

とだけ言い残し、宙をまい、空を一陣の風となり駆け抜けた。

拳を交え、信じるに足りると判断した浅衛門だからこそ背を向け、さらには無駄に抵抗しなければ帝国の兵士といえども殺さないと確固たる考えのもと走りさったのである。



「陛下、城内の第三防衛陣が破られました」

「なんですと!!」

玉座の間に飛び込んできた兵士が窮状を告げる。

帝都に侵入を許すだけでなく、帝都の心臓部たる城内にまで敵の侵入を許したのだ。

帝国建立してこれまでなかった事態に緊張が走る。

(我が祖先が守り抜いてきた帝都を私が台無しにしてしまうのか…)

暗く表情に影がさした皇帝は、やはり大臣にすぎるしかなかった。

まだ若き皇帝にはこの窮状を乗り切る力は無かった。いや、あつたとしてもこれまでの流れから大臣に頼ることになることは決まっていたであろう。

そして、それは大臣にとっても火を見るより明らかなことであつた。

「陛下ここは、始皇帝が作りし、至高の帝具の封印を解き使われるべきです」

「至高の帝具……」

皇帝の表情が明らかに曇った。

皇帝は前皇帝にその存在について教えられ、さらには、どんなことがあつても封印は解くべきでない、度々言い含められてきた。

ゆえに完全に信用を置いている大臣の進言であつても二の足を踏んだのだ。

「陛下、第四陣が破られもう敵そこまで来ています!!」

「親衛隊は何をしている!!」

「敵の勢いが苛烈なため、防戦に」

次々に飛ばされる伝令、そして凶報に皇帝の表情は絶望に染まる。

そして、ついにパンドラの箱に手をかけることを決意しないといけないとまで考え始めていた。

「陛下、この窮状の中ですが、陛下の決断を促すために昔語りをさせてもらいます。平穏な暮らしを、幸せな生活を与えたもうていた始皇帝の御世であつても、不穏な反乱分子は存在しました。人間というものは満たされることはなく、何かを与えられてもさらにそれ以上のもの

を求めるといふ汚さを持つていたのです。そこで、力でそれを制すべく『シコウテイザー』という動の至高の帝具を作り、力と恐怖で不穏分子を潰したのです。それにより反乱分子はしばらくは生まれることはなくなりました。しかし、その平穏も長くは続かなかった。人間の穢れた欲望が恐怖を超えたのです。新たに生まれた反乱分子が超級危険種を使い、シコウテイザーを打倒したのです。そこで始皇帝は考えたのです。力や恐怖で制することができないのはなぜか？それは人間に意志があるからだ。であるならば、その意思を廃棄し、自分の意にも逆らわせないようにすれば良いと……」

「……………」

皇帝は息を飲む。

普段その話を聞けば、前皇帝の言いつけと、冷静な判断力から人理に判するものと断を下したであろう。

しかし、状況が状況である。

冷静に考えることが許されない状況であるからこそ大臣の言にめり込んだのだ。

一筋の希望を求めて……

「静の至高の帝具『絶対王政マグナカルタ』の封印を解くのです!!」

大臣は、大きく手を振り上げ、天をさす。

その姿は追い詰められた皇帝にとつては自分に救いを授けてくれる神のごとく思われた。

もうその救いに乗るしかないのかと。

「……それを使えば帝都を、民を蛮族から救うことができるのか……」

「はい、御決断を」

震える手が止まらない。

自分の決断一つで今まで続いてきた歴史が崩れ去ってしまうかもしれない。

使うしかないという思いと、幼少から言われ続けてきた前皇帝Ⅱ父の教えが拮抗する。

深い葛藤の渦に絡めとられる皇帝。

しかし、無情にも思案の暇を与えられることはなかった。

「陛下！最終防衛陣が破られました!!」

傷だらけの兵士が駆け込んできたのだ。

皇帝は決意の眼差しで顔をあげ、大臣はわずかに口許をあげた。

「くっ！大臣その至高の帝具はどこに」

「陛下こちらに」

大臣は皇帝に背を向けると口が裂けんばかりに満面の笑みを浮かべた。

自分の大願成就したりといったように……

「えげつないな。だが嫌いじゃない。それにそろそろ俺の蒔いた種が芽吹くしな」

その光景を物陰から抑えきれないほどの喜びを持って見つめている者もいた。

戦乱と陰謀が渦巻く物語も佳境に突き進んでいる。